DS
851
A2R5
1940
V. 1

CHENG YU T
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

Digitized by the Internet Archive
in 2011 with funding from
University of Toronto

http://www.archive.org/details/zhorikkokushi018800

佐伯有義校訂標注

增補 大國史

卷壹

朝日新聞社藏版

8357

LIBRARY
DEC 9 1970
UNIVERSITY OF TORONTO

DS
851
A2R5
1940
v.1

裝畫：田中咄哉州

日本書紀

卷上

8357

校訂標注六國史の再版に際して

本年は紀元二千六百年で誠に意義深い年である。我が國は神代の昔に皇祖　天照大神が、天壤無窮の實祚を定め給ひ、皇孫　彥火瓊々杵尊を葦原の瑞穗國の王として、天よりお降しあそばされたが、御三代の間は西偏にありて專ら根本を培養せられ　神武天皇に至りて中央に進み都を大和國に奠めて天下をしろしめし、大に天業を御恢弘あそばされた。爾來年を累ぬること正に二千六百年、今や　神武天皇の御恢弘あそばされた天業を、更に大いに御恢弘あそばさるべき機運に到達し、一億の國民が同心一體となつて、此の聖業に邁進しつゝあるのである。此の時に當つて最も必要なのは國體を明確にすることである。國體を明確にするには國史に據るの外なく、國史中最も正確なるものは日本書紀以下の六國史である。此の六國史は、曩に大阪朝日新聞社創業五十年の記念事業の一として、之を出版せられたが、今回紀元二千六百年の記念として、更に之を再版せらるゝことゝなつたのは誠に適當な計畫である。

日本書紀より三代實錄に至るまで六部の國史は、何れも勅命を奉じて編修したもので　日本書紀は　元正天皇養老四年（一三八〇年）に編修され、最後に出來た三代實錄は　醍醐天皇延喜元年（一五六一年）に完成し並に千年以上の昔に出來たものである。六國史に限らず古書は、多くは卷子本卽ち卷物になつてゐたのである。而して長く寫本で傳はつた爲に、轉寫する間に自然と誤字が生じ或は落字が出來、甚しきに至つては錯簡も生じた。それは卷物であつた爲に糊がきかぬやうになり、離れ〳〵になり之を續ぎ合せる時に、甲乙を誤まり順序が違つて錯簡を生ずるやうになつた。日本書紀・續日本後紀の板本には、誤脫のみではなく錯簡もある。是はさうした理由で錯簡が生じたので、應仁の大亂のやうな非常時に際して起つたことであらう。それのみではなく、日本後紀の如きは、四十卷の中十卷のみが現存し、三十卷は散逸して缺卷となつてゐるのである。板本の十卷も、塙保己一の力で初めて發見せられ出版せられたので、塙檢校の校正本が世に出ない間は、久しく之を見ることが出來なかつたのである。其の間に僞書の日本後紀が編纂せられ、之が相當に世に弘まつてゐて、其の僞書たることを知らずして、用ひてゐるものもある次第である。斯くの如く六國史は、版

本があつても誤脱があり錯簡もあるので、古來の學者が其の校合に力を盡したが何分大部の書で容易の事業ではなく、善良な寫本は多くないのみならず、昔は諸家に於て祕して見せなかつたので、善本を借覽することが容易でなく、一個人の力で之を成功することが出來なかつたのである。單に甲乙の本を見合せて書入れるだけでも容易でないが、正否を決定し之を取捨することは、學力と見識がなくては出來ぬことである。故に或は武斷に過ぎ或は足らざるものもあり、それ〴〵長短なきを得ぬのである。日本書紀のみは集解本・小寺本・黑羽本等數種の校訂本があるが、續日本紀以下は校訂本がない。水戸家では大日本史の編修に就いて六國史を校訂せられ、校訂本が出來てゐるが、之は寫本で版本にはなつてをらぬ。故に世に流布してゐるものは極めて少い。明治以後之が校訂を企てたものが往々あつたが成功せず、經濟雜誌社で國史大系を出版し、同書中に六國史を收め、國史大系として初めて校訂本が刊行せられ、何人も容易に六國史を求め、之を閲讀する事が出來るやうになつた。是は全く經濟雜誌社の賜物である。校訂本が漸く出來たが之を解釋したものは、書紀と續日本紀とに關するもののみで、その他には殆ど無い。矢野玄道大人の私記があれど、之も未定稿で且つ

寫本である。故に之を見てゐる人も極めて少く、六國史は難解のものとせられてゐた。斯くの如き實狀で、國家の至寶たる國史の研究が十分に予が届いてゐなかつたのである。

然るに昭和三年に、朝日新聞社の五十年記念として校訂標注六國史出版の事業が計畫せられ、予が之を引受けることゝなつた。古人の未だ成功してゐない事業を、淺學なる老生が企畫することは僭越なことであるが、予は壯年の頃より六國史の校訂を希望し、吾が師井上頼圀翁と早くより之を謀つてゐたが、明治四十五年に至り、宮内省に於て六國史校合掛を設け、井上翁を主任とし予と村岡良弼氏とが校合掛となり、三年間之に從事し、井上翁村岡氏逝去の後は、田邊勝哉氏と數年の間之に從事し、校合の事業が完了したならば、校訂委員を設けて校訂に著手する計畫であつたが、頓挫して其のまゝになつてゐたので、甚だ遺憾に思つてゐた。然るに朝日新聞社に於て俄に出版の事が計畫せられたので、考慮の末に決心して之を引受けたが、新聞社としては成るべく短期間に完了せんことを希望せられた。然るに校訂のみならず註釋をも加へるには少くとも五年を要すべきを、死力を盡し二年餘にて完成し、索引の編纂に五箇

月を費し、二箇年半で校訂標注及索引年表等を完成したのである。十分に考究する時間がなかつたので不備の點も少くないが、幸に短日月に之を完成することを得たのは、全く神明の加護であると喜んでゐる。顧みれば本書の出版以來既に十年を經過し、短命であつたならば此の再版を見ることが出來なかつたのを、生き長らへて紀元二千六百年に遭遇し、再び之を校正することの出來るのはたゞ感激の外はない。依りて其の記念として、日本後紀の逸文三十卷を補足し、よしや足らぬ所があつても、年代順に缺けた所なく、御歷代の跡を窺ふことが出來るやうにしたならば、史學上に裨益あり、聖恩の萬一に報い奉る道であると考へて、之を增補した次第である。尙ほ最後に一言して置きたいことがある。それは未熟な某が此の尊い國史を校訂するといふことは、甚だ勿體ないことであるが、是は他日立派な校訂本の世に出づることを希望する爲に、先づ之を世に公にしたのである。立派な校訂本とは如何なるものかといふに、予が多年希望してゐる、官命を以て任命せられた委員が出來、委員會を組織し、衆智を集めて校訂した、最も信用ある校訂本のことである。是は國家として當然に爲すべきことである。而して之は一日も早く著手せらるゝのが、國家の義務であると信ずるので、

茲に之を一言して、特に識者の注意を喚起したいと思ふのである。

回顧すれば、予が此の校訂標注の編纂に著手した昭和三年に比較すれば、國民思想上の變化は實に著しいものがある。古今の歴史中にも恐らくは、是れ程著しく變化したことは珍しいことであらう。明治以來七十餘年を經て、國民が初めて我が國の歴史に眼覺め、東亞永遠の建設に從事し、大日本帝國の國民が、更に大に發展すべき日が來たのである。故に能く心を潛めて之を國史に考へ、將來を誤ることのないやうにせねばならぬ。此の書の再版は之に對する羅針盤を普く世に提供するもので、朝日新聞社が利益を度外し、此の機會に之を出版せられたのは、蓋し深き意義のあることゝ信ずる。茲に所感の一端を述べて微旨の存する所を公にした次第である。幸に一覽を賜はらば光榮の至りである。

昭和十五年二月十一日

佐伯有義

日本書紀

解說

一、書名

我が國第一の正史たる日本書紀の勅撰せられたるは、元正天皇養老四年なり、此の書は遠く神代に遡りて開闢以來の事を叙述せむとせしが故に、續日本紀以下の五國史に比し、史料の蒐集其の他に就きて、大に趣を異にするものあり、其の史料はいかにして蒐集せられしか、其の編修はいかにして完成せられしか、詳なることは知るに由なきものあれど、他の五國史に比して、困難なりしことは、想像の及ばざるものありしなるべし、今其の解說を試みむとするに當りて、先づ書名に就きて述ぶべし、

此の書を日本書紀と稱するは普通のことにて、現在世に行はるゝ書は、いづれも斯くあれど、或は書の字を省きて日本紀といひ、また古書には日本記と書けるもあり、此はいかなる理由に因れるかと考ふるに、今世に存する古寫本は、いづれも平安朝

古書に見えたる例

以後のものにて、撰上當時のものなく、之を以て證すること難ければ、古書に見えたる例を尋ぬるに、續日本紀卷八に本書奏上のことを載せて、養老四年五月癸酉、先是一品舍人親王奉勅修日本紀、至是功成奏上、紀三十卷、系圖一卷とありて、此には正しく日本紀と見えたり、又本朝月令六月月次祭の條に所引の高橋氏文に、延曆十一年三月十九日の太政官符を載せたるが、其の文中に謹案日本紀云々とあり、日本後紀卷五延曆十六年二月十三日の條にも、日本紀と見え、同卷二十二弘仁三年六月二日の條にも、是月、始令參議紀朝臣廣濱等十餘人讀日本紀略○節と見え、弘仁六年七月に成れる新撰姓氏錄にも日本紀合、日本紀漏、依日本紀附など見えたり、斯くいづれも書紀といはずして紀とのみ見えたるが、之に就きて古史徵開題記卷一に、

日本紀と日本書紀との區別

日本書紀と云名は、舍人親王の號給へる題號なるべきを、御紀に書字を省きて云るは、前に上奏(タテマツ)れる日本記に言傚(コトナレ)たる故にや有けむ、次々の御紀にも、此紀の事の見えたるに、多くは書字を省きて記されたり、

と云へり、然るに比古婆衣卷一には、

日本書紀もとは日本紀と題(シル)されたるを、おほよそ弘仁の年中より、文人たちの書字を加へて、日本書紀とも稱へるより起りて、遂に題名となりしと見えたり、然る

は續日本紀に、養老四年云々、舍人親王奉勅修日本紀とあるを始め、六國史は更なり、古書どもには悉く書字なきを、釋日本紀に引たるこの紀の弘仁私記序に始めて日本書紀と見えたり、また此紀の竟宴歌の本に、延喜六年天慶六年の度、ともに日本紀竟宴各分史得云々并序と書き出して、其の序文にはともに日本書紀と書けり、これら決く文人の潤色作爲なるを、始に日本紀竟宴と書出たるは、舊名に依れるなるべし、又朝野群載に載たる承和三年に記せる廣隆寺縁起、釋日本紀に引たる延喜講記にも日本書紀と見えたり、さて上に擧たる弘仁より前の書どもには、續日本紀なるはさらにて、本朝月令に引たる高橋氏文に載たる、延曆十一年三月十八日の太政官符に日本紀と見え、日本後紀に延曆十六年二月の下、また弘仁三年六月の下にも日本紀とあり、此後の古き書どもにも、日本紀と書るは甚多く、日本書紀と書るはをさ〳〵有ことなきをもて、日本紀といへるが原よりの名なる事を知べくぞおぼゆる、然るに此紀延喜四年本、また其後の古寫本、今世にある慶長四年の國賢の跋ある印本など、おのれが見聞たる限の本ども、皆書字あるは、上にいはゆる弘仁の頃より始りて、後に題名とも爲たるものなり、承和元年に藤原長良朝臣の奥書し給へる本に、日本紀とあるぞ原の御典の名なるべき、なほい

はば此紀原より書紀と題せる物ならば、繼々に令撰られし史どもに、續日本書紀、日本後書紀など稱ふべきを、然有ぬを以ても證とすべきなり、

といひて、日本書紀といへるは、弘仁以後に書の字を書き加へられしものにて、上奏當時には日本紀と稱したりと云へり、開題記にも先づ自說を擧げ、次に此の說を擧げて、此は予が說よりは委しく勝りて所思ゆれば、題號のことはこれに從ふべしと云はれ、實に此の說の如くなるべし、されどたゞ文人の潤色にのみ出でたりと云へるはいかゞあるべき、通釋にも之を難じて、徵なければ信がたしと云ひ、此は後に稱呼の爲に、書字を加へたるものなるべし、其は和銅上奏の日本紀も、もとは唯日本紀なれど、後の日本紀と唱へを別たむ爲に假名日本紀と呼び、此日本紀はひたふるに漢文なれば、彼漢書紀などの事を思ひて、書字を加へて呼わけたりしものとおぼゆと云へり、此の方前說に勝りて聞ゆ、

書名の理由

次に書名を日本書紀と稱する理由及文字の出典に就き、釋日本紀開題に、

問、此書名名日本書紀其意如何、答、師說依注日本國帝王事謂之日本書紀、又問、不謂日本紀只謂日本書紀如何、答、師說傳習大唐文字考九流書撰出此書其中殊者神代之事、倭歌古語等是也、又大唐稱紀者、秦漢魏晉宋齊梁陳等之中、漢紀魏紀晉紀宋紀

等是也、又謂之魏書晉書宋書等也、然則非依習此書而作、但宋太子詹事范蔚宗撰後漢書之時、叙帝王事謂之書紀、叙臣下事謂之書列傳、然則書紀之文依此歟、又問、後漢書者、帝紀列傳有異、仍叙帝王事謂之書紀、叙臣下事謂之書列傳、而此書者不別帝紀列傳、只稱書紀如何、答、師說此書雖無列傳、兼註帝王君臣事、仍謂之書紀、但其體者習於梁典齊春秋唐曆等紀咸入、猶可謂依後漢書所稱也、

と云へるが如く、書の字は漢書後漢書晉書魏書など云へる例に據り、紀は帝王の事を主として記せるに由れるなるべし、次に書紀の上に日本の二字を加へたるはさまで必要なく、書紀にて事足りぬべく思はるれど、此の書の撰修せられし當時は、唐土崇拜の風極めて盛にして、文物制度總べて彼に摸倣せむとする傾向ありしかば、書名を選ぶに就きても、彼の國の歷史は、史記のみは國名を冠らせざれど、漢書以下は各時代の名を上に冠らしめしかば、是等の書名を參照して國名を冠らしめられしものなるべし、然るに書紀集解に、僧雲蝶が石上神宮に謁し、農家に宿りて獲たる本は、一篋十四軸あり書紀と題す、卷一卷十二卷十三卷十四卷十八卷二十より三十までは闕けたり、書寫の人を記さざれど、蓋平城朝の本なりと云ひ、河村氏は之に據りて、日本の二字を除きて、其の著書をば書紀集解と題せり、此の雲蝶が所藏せる本

は、今何所に存するか知るに由なく、よし其の書存すとも、正史たる續日本紀に正しく日本紀と書され、其の他の古書にもいづれも日本紀又は日本書紀とあれば、たゞ雲蝶の本のみを以て、書紀を正しき書名とは爲し難し、

尙ほ日本紀といふ名稱に就きて考ふるに、扶桑略記卷二飯豐天皇の條に、

此天皇不レ載二諸皇之系圖一、但和銅七年（原本に五とあり一本に據て改む）上奏日本紀載之、

と見え、釋日本紀には假名日本紀と云ふ名稱見えたるが、此の假名日本紀卽ち和銅上奏の日本紀なり、されば日本紀と云へる名稱は、養老四年上奏の時に定まれるにはあらずして、和銅年中に旣に其の名ありしなるべし、尙ほ遡りて考ふるに、推古天皇二十八年、國史撰修の當時には、天皇記及國記、臣連伴造國造百八十部、幷公民等本記を錄すと見えたるのみにて、之を總括したる名稱なかりしが、天武天皇帝皇の日繼先代の舊辭を輯めて撰錄せしめ給ひし書をば、古事記と名づけられたり、是實に我が國に於ける最初の勅撰にして、廣く古事を蒐めて之を記されしが故に、其の意を取りて古事記と名づけられしなり、此の書は和銅上奏の日本紀に先つこと二年同五年に成りしが、勅撰の命ありて撰修せしめ給ひし國史は、此の古事記に比較して卷數多く、記事の範圍も廣汎なれば、漢土の漢書後漢書晉書魏書などいへる例を

も參照し、國名を冠らしめて日本記と名づけ給ひしにて、古事記を對象として日本記の名は定められしなるべし、されば万葉集を始め其の他の古書に日本記云といひて引用せるもの往々見ゆるは之に據れるにて、必ず誤なりと云ふべからず、斯く考ふれば此の書は最初には日本記と名づけられしが、後に其の字義を考ふるに、記よりは紀の文字當れりとて養老四年上奏の時に日本紀とせられ、後更に書の字を加へて日本書紀と稱するに至りしものなるべし、(日本紀と日本記との區別に就きては、尙考究を要すれど、姑く平田翁の說に據りて述ぶ)

二、編　修

推古天皇の朝の修史

本書編修の沿革を考ふるに、勅撰の命ありしは天武天皇十年なるが、是より先推古天皇の御代に國史編修の事あり、書紀推古天皇紀に、

二十八年、是歲、皇太子島大臣共議之、錄天皇記及國記、臣連伴造國造百八十部、幷公民等本記、

と見えたり、是歲とあるは、月日詳ならざる故にかく記されしなり、島大臣とは馬子をいふ、廐戸皇太子馬子と共に議りて、國史を編纂せしめ給ひしが、翌年二月皇太子

薨去まし〳〵しかば、此の事業も其の影響を蒙りしなるべし、此の編纂は全部完成せしや否は、國史にも其の他の書にも見えざれど、天皇記及國記は蘇我家に預り持ちたりと見えて、皇極天皇紀に、

四年六月己酉、蘇我臣蝦夷等臨誅、悉燒天皇記及國記珍寶、船史惠尺卽疾取所燒國記而奉中大兄、

と見えたり、されば是等の書はいづれも蘇我家に預りしこと明かにて、其の悉く燒けむと爲たるを、船史惠尺が珍寶をば捨置て、國記をのみ取出して、中大兄皇子に奉りしなり、此に天皇記及國記とあれば、此の二記のみ完成し、其の他は恐らくは編修せられざりしなるべし、燒くる所の國記を取りて奉るとあれば、天皇記は取出すことを得ずして、國記をのみ取出でしなるべし、國家の至寶たる國史の燒失せるは甚だ惜しむべきことなれば、何人も痛歎したることならむと思はるゝが、孝德齊明天智天皇の御三代二十七年の間は、修史の事聞えざりき、然るに天武天皇國史撰修の事をおぼし立たせ給ひ、十年三月に至りて、之を御發表あらせられたり、其の事天武天皇紀に、

天武天皇修史の詔

十年三月丙戌、天皇御于大極殿、以詔川島皇子、忍壁皇子、廣瀨王、竹田王、桑田王、三野

王、上野君三千、忌部連首、阿曇連稲敷、難波連大形、中臣連大島、平群臣子首、令記定帝紀及上古諸事、大島子首親執筆而錄焉、

と見え、曩に推古天皇の御代の修史は、皇太子島大臣と相議して定めらるとあり、勅撰にはあらざりしが、今回は天皇大極殿に御し、二親王四王及諸臣に勅して、之に從事せしめ給ひ、規摸甚だ大なりしが、此の書の未だ成らざるに先だち、十五年九月に崩御し給ひぬ、持統天皇紀五年八月の條に、詔十八氏、上進其祖等纂記と見えたるは蓋前朝の御志を紹ぎて、編修せしめ給はむとの御心なりけむを、此の御世にも成らず、文武天皇紀には此の事に關する記事見えず、かくて元明天皇紀に、

和銅上奏の日本紀

和銅七年二月戊戌、詔從六位上紀朝臣清人、正八位下三宅臣藤麻呂、令撰國史、

と見えたるは、天武天皇十年に勅命ありしより已に三十餘年を經たるも、未だ成らざる故に、早く完成せしめ給はむとの御心にて、此の人々を加へ給ひしなるべし、此の結果にやありけむ、國史には漏れたれど、扶桑略記に和銅七年上奏日本紀云々と云ふこと見えたり、ただ和銅七年上奏とあるのみにて、其の月をば記さねど、十二月の事と推定するも、清人藤麻呂に下命ありしは二月のことなれば、斯く速に成功すべき謂なければ、此の二人に仰せ給へるは、天武天皇の御世より此の事に與れる人

人に助力せしめ給はむとの大御心にて、更に加へ給ひしなるべし、或は天武十年以後の記事を追加せしめ給ひしなりともいへり、そはいづれにもあれ此の年日本紀上奏の事の續日本紀に載せられざるは、大略古事記と同じ文體にて、當局者の意に滿たざる所あり、更に繼續して編修することゝなりしより、之を記載せられざりしにて、古事記上奏の事を載せざると同一の趣旨に出でしものなるべし、斯くて之より六年を經、元正天皇養老四年に至りて、此の書の始めて成りしこと、續日本紀卷八に、

日本紀の奏上

養老四年五月癸酉、先是一品舍人親王奉勅修日本紀、至是功成奏上、紀三十卷、系圖一卷、

と見え、弘仁私記の序にも、

夫日本書紀者、一品舍人親王、從四位下勳五等太朝臣安麻呂等、奉勅所撰也、淸足姬天皇負扆之時、親王及安麻呂等更撰此日本書紀三十卷并帝王系圖一卷、養老四年五月二十一日、功夫甫就、獻於有司、

と見えたり、續日本紀には、太安麻呂等の撰修に關係せし事見えざれど、此の私記の序文にて明かに之を知られたり、和銅上奏の日本紀は今世に存せざれど、假名日本

紀と同じものにて、今の書紀と其の内容も多少異同あること、上に引ける扶桑略記の文にて明かなるが、此の書の事は釋日本紀に、

問、假名日本紀何人所作哉、又與此書（日本書紀をいふ）先後如何、答、師說元慶說云、爲讀此書私所注出也、作者未詳、又問、假名本元來可在、爲嫌其假名養老年中更撰此書、然則爲讀此書、不可謂私記、答、所疑有理、但未見其作者云々、今案假名本世有二部、其一部者、和漢之字相雜用之、其一部者、專用假名倭言之類、上宮記之假名已在舊事本紀之前、古事記之假名亦在此書之前、可謂假名之本在此書之前、或書云、養老四年、令安麻呂等撰錄日本紀之時、古語假名之書雖有數十家、皆以勅語爲先、然則假名之本尤在此前耳、

と見えたり、此を合せ考ふるに、和銅七年に奏上せる日本紀は卽ち假名日本紀なること疑なきが、續日本紀に先是奉勅とあるは、何時の事なりけむ、國史に其の事見えねば、知るに由なけれど、恐らくは和銅七年に日本紀を奏上せるより以後の事なるべし、其は和銅上奏の日本紀は、假字日本紀とも稱し古事記と大略同じ體裁に書けるものにて、文武天皇以後一層唐風摸倣の傾向甚しく、國史の如きも假名書のものにては、當時の學者はふさはしからず思ひし人多く、朝廷の重要の位置にある人々

も、同じ意見なりしかば、飽き足らず思ふ人多く、更に之を編修せしめ給ふことに決し、天武天皇の御代に川島皇子草壁皇子を任命し給ひし先蹤を繼ぎ、新に舍人親王を總裁に任じ、太朝臣安麻呂を始め、其の他の學者を任命し、假名日本紀を基礎とし、他の材料をも加へて、之を漢文に編修せしめ給ひしものなるべし、初め天武天皇の勅命を下し給ひしより、こゝに至るまで三十九年を費したるは、長きに失するやに思はるれど、總べて編修事業は、各自其の人によりて編纂上の意見を異にし、意見異れば前者の方針を改廢し、隨ひて更に編修するを常とし、爲に多くの歲月を費すこと、古今同一なりとす、殊に我が國最初の國史編修なりしかば、史料の蒐集にも多くの歲月を費し、前者の編修未だ稿を脫せざるに、或は轉任し或は逝去して、後人之に代り自己の方針を以て編修し、其の事業未だ完了せざるに、更に別人代りて之に關係し、斯くの如きことを繰返しつゝある間に、多くの歲月を經たるものなるべし、和銅上奏の日本紀と養老上奏の日本紀とは、正しく其の關係を物語れるものにて、國史編修に多くの歲月を費したりとて、決して怪しむべきにあらず、

三、史料

本書編修の史料は何に據られしかと考ふるに、釋日本紀に、

問、撰修此書之時、以何書爲本哉、答、師說或云、以古事記爲本、或云以先代舊事本紀爲本、但以古事記爲本者、多有相違之文、古事記者只以立意爲宗、不勞文句之躰、仍撰修之間、頗有改易云々、見此書所載龜文者、全是舊事本紀之文也、注文一書云之處、多引古事記之文、況舊事本紀者、上宮太子全依經史之例、能勞文筆之體、或神名用訓之處、更不交音、或嶋名用音之處、亦不交訓、國常立尊殷馭盧嶋是其一端也、此書體已同彼書、其所載多引彼文、然則以舊事本紀爲本所撰也、

といへるが、此は舊事本紀の僞書なることを知らずして、上宮太子の撰錄なりと信じ、日本書紀は之に據りて書けりといへるは、全く本末を顚倒せる說なり、舊事本紀は書紀と古事記とを剽剝して書けるものなることは、古人已に辨じたれば、こゝに更に辨明する必要なけれど、こは中古以後舊事本紀の僞書なることを知らずしていへる、最も淺薄なる說なれば採るに足らず、但し古事記をも採れりといふはよく當れり、されど古事記は僅に三卷にして、日本書紀は三十卷なり、古事記に載せざる事實は、何によりて記せるか、其の本づく所の原書なかるべからず、然るに釋日本紀には之に對して說く所なく、書紀を讀む參考書として、舊事本紀古事記以外に、上宮

古事記と書紀

假名日本紀と書紀

記大倭本紀假名日本紀を擧げたるが、此の三書の中の假名日本紀は、卽ち和銅上奏の日本紀にて、上に述べたるが如く、今の日本書紀は主として此の書を原本として之を修飾したるものなり、然るに元慶の說には、書紀を讀まむが爲に之を作れりといへるは、本末を謬れる說にて、假名本元來可レ在、爲レ嫌二其假名一養老年中更撰二此書一と云へるは實を得たりと云ふべし、されど其の書今世に傳はらざれば、詳細なることは知るに由なし、

三韓に關する史料

次に書紀には三韓に關する記事最も多きが、其の史料は何に據られしか、朝廷の記錄を掌る東西の史部等が錄したる記錄の、其の主要なる部分たりしことは勿論なれど、三韓に關する政務戰役等の事は、日本府設置時代には、任那に派遣せられし日本府の記錄、大宰府時代には大宰府の記錄も亦有力なる史料たりしことは言ふまでも無けれど、實際筆を執りて編修せむとするには、それのみにては未だ十分ならざれば、百濟新羅高麗等の史籍をも參照せられしことは、百濟記百濟本紀百濟新撰等の書名、書中隨所に散見し、其の文章を原本のまゝに引用したる所も亦少からざるにて、材料蒐集の範圍の廣かりしを知るに足れり、然るに從來の學者中には、是等の記事をば悉く私記の攙入として、之を削除せむとするものもあれど、廣く異聞を

求めて正確を期せられしものなれば、多少攙入の文なしとも言ひ難けれど、悉く攙入として之を削除せむとするは當を得たりといふべからず、

四、文體

我が國の歴史は、我が國の言語文章を以てせざれば、完全に之を言ひ露すこと困難なり、殊に未だ熟達せざる時代にありて、漢文にて之を書かむとするは、一層困難なることなれど、漢字を借りて之を筆錄するに當り、悉く之を假名書にすれば、冗長にして煩に堪へざるが故に、音訓を混用ひて其の不便を減じたり、されど是亦頗る困難なる事業にて、當時の學者がいかに苦心せしかを、想像するに餘あり、こゝに於て寧ろ漢文にて書くを便利なりとし、且莊重なりとして、之を主張する學者多く、日本書紀が漢文にて書かるゝこととなりしは、正しく此の主張に因れり、されど書紀は續日本紀以下の國史に比較して、其の文辭を修飾せるもの頗る多し、毛詩尚書周易禮記論語文選等を始め、左傳史記漢書後漢書以下隋書に至るまで、洽く之を渉獵して、我が史實を潤飾せるもの少からず、世の學者或は是等の文を見て、外籍を借りて文を成せりと疑ふ人もなきにあらざるべし、是も一應無理からぬことなれど、深く

漢文としたる理由

文辭の修飾

事情を究めざる皮想の見なりといふべし、從來の記錄に存する事實のまゝ、修飾を加へずして編纂したるのみにては、飽かず物足らず思ひ、之を完全なる漢文に譯し、彼の國の文士をして驚嘆せしめ、自らも甘んぜむとする心より、更に彼の國の史籍を深く涉獵して、彼我の事實を對照し、相似たるものあれば、其の文辭を採りて之を改竄し、我が史實を之に當箝めたるが爲に、一見して彼の文を採れるが如く見ゆるもの少からざるなり、是れ當時の學者が漢史の摸倣に心を傾けたる結果なるが、之に加ふるに其の修辭は六朝の餘弊を受け、勉めて之を四六文に綴らむとせしことも亦一の原因なるべし、

詔勅の漢譯

其の最も甚しきものは御歷代の詔勅を悉く漢譯したること是なり、續日本紀に載する文武天皇以下卽位讓位等の詔勅は、悉く世に所謂宣命文にて、醇雅なること仰ぎ尊むべきものなるが、書紀には悉く之を漢譯して、一も其の眞を傳へず、僅に一二篇なりとも、原文のまゝの詔勅の傳はりたらむには、いかに嚴めしく美はしからむと思はるゝを、是のみは實に千秋の恨事なりとす、其の他神武天皇紀に設牛酒以勞饗皇師といひ、崇神天皇紀に授印綬爲將軍といひ、景行天皇紀に天皇執斧鉞以授日本武尊といへるが如きは、全く我が國に無き事實をありしが如くに書き改め、總べ

本居翁の說

一、此の筆法を以て書けるが故に、一見彼を採れるが如く見ゆるもの少からず、されど幸に古事記の存して、同じ事實の兩書に記載せられたるものは、比較して其の眞相を知ることを得れど、後人をして誤らしむるものなきにあらず、神代紀髻華山陰に之を論じて、

書紀は古へぶみのあるが中に、最も貴くめでたき止む事なき御典になむあるをさるにとりては古學の爲にはしも、飽かぬ事はたおぼろけならずなむ有ける、しかいふ故は、先づ古事しるす史は、おほ方古の傳へごとを失はず誤たずして、後の世に傳へむ爲なり、されば、その史ども古きは上つ代の事をしるせるやう、唯そのありかたのままにして、飾り添へたることなく、文のあやはた自に具はりて、いとめでたくなむあめりしを、此書紀の作りやうは、さる古傳書にはよりながら、當時の世の中の好みにかなへて、悉く漢ぶみぶりに改めて、詞にその方の飾の多かるのみならず、事にさへ意にさへその飾を加へなど、總て萬をいかでからめきたらむと勉められたる程に、なべての詞の古にあらざることは更にもいはず、文の改めざまによりては、その事も意も自ら古への傳へのおもむきとは違へることもあり、或はいかなるよしとも聞えがたくなりぬるふしさへをり〳〵交りなどし

て、大かた上つ世の心は埋もれはてゝ、世に知る人なくなむなれりける、といへるは實にさることなり、伴信友氏は之に就きて、日本紀の斯くの如く文飾多きは、甚だいぶかしく、或は編修の後漸次に加へたるものにあらずやと思ひしに、若槻幾齋が見たりし日本紀の押紙に、裏書に云とて、藤原長良の識語あり、之に依りて其の疑ひ晴れたりとて、

日本紀は古の實を文飾り失へりと見ゆる事の多かるは、次々に文飾を加へたる物にはあらじかと思ひしも灼(しる)く、これかれ其證を得たり、其はまづ若槻幾齋と云人の見たりし古寫本の日本紀の押紙に、裏書云、日本紀三十卷、崇道盡敬皇帝所撰也、近者文臣請詔數增補之、合叡旨永歛祕府、嗟呼欲取一時之寵、輙紊千古之實、可不痛哉、愚竊寫原書、藏之函底、若是證乎來世、幸矣、承和甲寅左衞門佐藤原長良記と有しといへり、そも〳〵長良公の行狀は、文德實錄に載(シル)されて、いと〳〵實やかなる仁におはしければ、彼裏書に記されたる事をも、痛歎せられける事宜なり、近者文臣請詔と云より、紊千古之實可不痛哉と云ふまでの文に眼を著て辨ふべし、

と云へり、承和甲寅は承和元年にて、長良公は時に年三十五歲なりき、こゝに近者文臣請詔とあるは、仁明天皇の詔を請ひ奉れるにや、此の天皇は天長十年二月廿八日、

淳和天皇の讓を受けて卽位あらせられ、御年二十四歳にましく〳〵き、承和元年は其の翌年なり、續日本後紀に、天皇叡哲聰明、包綜衆藝、最耽經史、講誦不倦、諸子百家之書、莫不通覽、兼愛文藻、精辨漢音清濁と見え、深く漢籍に耽り給ひしかば、文臣一時の寵を取らむと欲し、詔を請ひ奉りしにや、僅に一片の識語を以て、國史潤飾の有無を決せむとするは穩當ならねど、書紀の文體の續日本紀以下に比較して、殊更に漢めきて見ゆるは、何人も心づけることなれば、比古婆衣の說も亦參考と爲すに足るべし、故に此に之を引用す、

五、讀法

甲乙の兩說

本書の訓みはいかにすべきかと云ふに、甲乙の兩說あり、甲は漢文にて書けるものなれば、漢文訓みにすべしと云ひ、乙は漢文にても讀まるゝだけは古語に訓むべしといへり、此の兩說いづれも理あり、漢文にて書き彼の國の經史及諸子の語を其のまゝに引用せるものを、殊更に古訓に讀まむとするは困難なることにて、之を强ひて古訓に讀みたればとて、何の益もなきことなれば、音讀して其の意味を解すれば足れりと云へり、これ誠にさることなれど、書紀の文は經史及諸子の語のみにて成

古訓に訓むべき理由

れるにはあらず、元來我が國の上古の事實を漢文にて書けるものにて、漢譯し得るものと得ざるものとあり、隨ひて其の文も、彼の國の古文を採れるものと、我が古語のまゝにて書けるものとあり、歌謠の如きは語數に制限ありて、到底之を飜譯すること能はざれば、是等は總べて假名書にしたるが、普通の文にても之に類したるもの少からず、例へば以八坂瓊之五百箇御統纏其髮鬘及腕、又背負千箭之靫與五百箭之靫、著稜威之高鞆、振起弓弭、急握劍柄、踏堅庭而陷股、若沫雪以蹴散といひ、於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原、而始馭天下之天皇といへるが如きは、到底漢文訓みには讀み下すべからず、故に御統此云美須磨瓔、千箭此云知能梨稜威此云伊都、蹴散此云倶穢鍛邏々箇須といへるが如く、編修の當時より訓注を施して、古訓に讀むべきことを明かに示されたり、其の他可美此云于麻時、淡見此云比古尼、柱此云美簸旨羅、少男此云烏等孤、背揮此云志理幣提爾布倶、顧眄之間此云美屢摩沙可利爾と云へるが如く、一々訓注を加へたり、されどこの訓注のみにては盡さざるを以て、此の書の編修せられし養老四年、既に私記を作りて、其の足らざるを補へり、降りて嵯峨天皇の弘仁十年に矢田部公望の私記あり、養老の私記に比するに頗る精密なり、是等の書を一讀すれば、古人が書紀の讀み方に就きて、いかに苦心せ

しかは明かに察せられ、之に據りて名詞も動詞も形容詞も、古訓に訓み得べきものは悉く古訓に從ふは、當然の事にて、是獨り國史のみならず、一般の漢籍も此の例に據るべきものなり、今試みに古き漢籍の一二に就きて考ふるに、尚書堯典に、

漢籍訓み方の例

曰若稽古帝堯曰、放勳欽明、文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上下、

また毛詩國風に

關關雎鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑、參差荇菜、左右流之、窈窕淑女寤寐求之、求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾轉反側、

遊仙窟に

古老相傳云、此是神仙窟也、人跡罕及、鳥路纔通、每有香菓瓊枝天衣錦鉢白浮出、不知從何而至、余乃端仰、一心潔齋三日、綠細葛汗輕舟身體若飛、精靈似夢、

また

須臾之間、忽聞內裏調箏之聲、僕因詠曰、自隱多姿則、欺他獨自眠、

故々(コヽニネタマシガホニシテ)將織(ホソヤクナルテヨリ)手(く)、時々弄(ニカキナラスホソキナチモテ)小絃(ホソキナチ)、耳聞(ニダモ)猶氣絕(イキノタヘヌベキモノナ)、眼見(ノミムトキ)若爲怜(イカバカリヨシヤキシハナハダスガテモシロカウン)、從渠痛(ハナハダスガ)不肯(イナヒワレサラニ)、人更(アカラサマニ)別求(コトニモトメンヤ)天(アヤシキトコロテ)、

など見えたり、是等の純然たる漢文だに、斯くの如く國語に讀み得べきものは、國語に譯して讀めるに、上代の國史をば、古人が特別に注意し苦心して讀みたりし蹤を尋ねず、漠然として漢文は漢文讀みにすべしと云へるは、思はざること甚しきものと云ふべし、元來歷史を讀むは、其の時代の事實を知らむとするが目的にて、歷史を知るには、漢語よりも國語あるものは、之を用ふれば了解し易し、故に古人も特に力をこゝに用ひたりしなり、然るにさる理由あることを知らずして、國學者がたゞ古を好むに癖して、古訓に讀めりと思ふは非なり、國語にて讀み得べきものは國語にて讀み、讀み得ざるものは字音のまゝに讀むべし、強ひて拘泥すべからず、

六、撰者

本書の撰者は、舍人親王其の編修總裁とましましゝことは、續日本紀にて明かなるが、其の他の撰者は、太朝臣安麻呂の之に關係せしことは、上に引ける弘仁私記の序にて明かなれど、其の以外に何人が之に關係せしか、史に徵すべきものなし、和銅七

年二月戊戌、詔從六位上紀朝臣清人、正八位下三宅臣藤麻呂、令撰國史」とある此の兩人は、和銅七年より養老四年本史上奏當時まで生存して、引續き此の事に關係したりと思へど、是も亦微すべきものなし、

七、異本

書寫の年代に依れる區別

本書は他の五國史に比して異本の種類頗る多し、今其の書寫の年代に依りて之を區別すれば、平安朝のものなりと思はるゝは、田中敎忠氏藏本、岩崎家藏本、前田家藏本、延喜本(延喜本の年代に就きては疑問あれど暫く此に收む)及北野本の一部分なるが、北野本を除くの外は、一卷或は二卷にて前田本のみは四卷存せり、次に鎌倉時代のものなりと思はるゝは、北野本の一部分及鴨脚本、兼夏本、丹鶴本、水戸彰考館本、卽ち鎌倉本等なるが、兼夏本丹鶴本鎌倉本はいづれも神代紀上下兩卷存し、鴨脚本は神代の下一卷のみ存す、其の以外の寫本にては宮內省圖書寮所藏の與國本古く、其の他は足利時代以後のものなり、

卷數の多少

又卷數の多少に就きていはば、全部完備せるものは、

楓山本(內閣文庫所藏)

吉田本（吉田子爵所藏）
中臣本（鈴鹿義鯨氏所藏）

以上の三部にて、北野本は卷二卷十四の二卷缺けたれど、殆ど完本に近く、應永本は卷一卷二卷九卷十七卷十九卷二十卷三十以上七卷缺け、熱田本は卷一より卷十五まで（內十一は缺く）十四卷存し、圖書寮本は卷一卷二卷十卷十二より卷十七まで六卷卷二十一より卷二十四まで四卷以上十三卷存す、されば三十卷の內十三卷以上現存するものは

北野本（北野神社所藏）　二十八卷
應永本（無窮會神習文庫所藏）　二十三卷
熱田本（熱田神宮所藏）　十四卷
圖書寮本（宮內省圖書寮所藏）　十三卷

系統上の分類

以上の四部にて、其の他はいづれも十卷以下のものゝみなり、又其の系統より云はば、北野本は神祇伯家に傳れるものにて、後に一時卜部兼永の手に歸し、世に兼永本と稱すれど、伯家所傳の本にて、楓山本吉田本等と系統を異にせり、其の他田中本岩崎本前田本等は、平安朝時代のものにて別派に屬すれど、是等の數本を除くの外は、

いづれも吉田本を本として書寫したるものにて、悉く其の系統に屬せり、たゞ丹鶴本神代紀のみは北野本と系統を同じくし、南都一乘院本日本紀略は全く丹鶴本と同一のものなり、

結　語

本書の書名、編修の沿革、史料、文體、讀法等に關する大要は、粗々上に述べたるが如し、其の文體漢文を採り修辭に力を大に用ひられし爲に、多少事實を誤認せしめたれど、史料を廣く蒐集し、異說をも一曰或は一云と書して、悉く之を收められしが故に、材料豐富にして、

(一)我が國の上古史として之に匹敵するものなし

加ふるに三韓に關する記事は、細大漏さず之を收載せられ、欽明天皇紀の如きは最も詳細なり、之を三國史記東國通鑑と對照するに、其の精粗同日の論にあらず、故に我が國の上古史として尊重すべきのみならず、

(二)朝鮮の上古史料としても亦最も價値あり

と云ふべし、本書の漢文にて編修せられしが爲に、古言を失へりと歎く人多く、之も

さることなれど、漢文にて書きし爲に、古言に訓むべき所は編修の當時既に其の訓注を加へ、同時に之が私記を作り、尋いで弘仁私記あり、其の以後の私記も亦少からず、斯くの如く世の學者本書の訓み方に就きて大に注意せし爲に、よく其の古訓を存したり、其の年代より考ふるに空穗物語源氏物語等に比して、私記の方遙に古く、古語の例證とすべきもの亦少からず、故に古史として之を尊重すべきのみならず、

(三)古言古語の研究に大なる効力あり

殊に其の特徵とすべきは、漢字の傍に訓みを施したるが爲に、古言の意義を知るに最も効果ありと云ふべし、斯くの如く三大特質を有し、殊に天壤無窮の神勅、神鏡磐境の寶訓等、悉く本史に載せられたれば、實に國家の至寶にして、萬世に亘りて最も仰ぎ尊むべき書なり、

佐伯有義述

校訂標注

日本書紀

凡例

一、日本書紀は版本あり寫本あり、其の類本極めて多し、然るに寛文九年の刊行本最も弘く世に行はれしを以て之を底本と爲し、其の他の諸本を以て校訂せり、寫本は種類頗る多けれど、就中神代卷のみのもの最も多く、全部完備せるものは極めて少し、神武天皇以後の寫本も亦數種あり、いづれも善本なれど、卷數の多からざるは甚だ遺憾なりとす、今本書の校訂に方りて校合せる諸本は、凡そ左の如し、

一、古寫本　神代及人皇以後併存するもの

			符號
一 北野本	北野神社所藏國寶 卷二及十四缺	二十八卷	(北本)
一 圖書寮本	宮內省圖書寮所藏 卷一、二、十、十二より十七、廿一より廿四	十三卷	(寮本)
一 熱田本	熱田神宮所藏 卷一より十五(十一缺)	十四卷	(熱本)

一　應永本　無窮會神習文庫所藏　卷一、二、九、十七、十九、二十、三十缺　二十三卷（應本）

一　玉屋本　帝室博物館所藏　九卷（玉本）

一　三島本　三島神社所藏　神代、神武天皇　三卷（島本）

一　楓山本　內閣文庫所藏　三十卷（楓本）

一　吉田本　吉田子爵所藏　三十卷（吉本）

一　北野一峯本　北野神社所藏　神代、神武天皇　三卷（峯本）

一　鈴鹿本　鈴鹿義鯨氏所藏　三十卷（中本）

一　假名日本紀　內閣文庫所藏　三十卷（假名本）

二、古寫本　神代卷のみ存するもの

一　延喜本　京都向神社所藏　神代下　一卷（向本）

一　鴨脚本　無窮會神習文庫所藏　神代下　一卷（鴨本）

一　兼夏本　吉田子爵所藏　二卷（夏本）

一　鎌倉本　彰考館所藏　四帖　二卷（鎌本）

一　桃木本　桃木書院所藏　神代下　一卷（桃本）

一 蘭田本 蘭田守理氏所蔵 二卷（蘭本）

一 御巫本 御巫清白氏所蔵 二卷（巫本）

一 御巫一本 同上 神代上 一卷（巫一本）

一 雨足院本 建仁寺雨足院所蔵 二卷（足本）

一 三寶院本 醍醐三寶院所蔵 神代上 一卷（寶本）

一 仁和寺本 仁和寺所蔵 二卷（仁本）

三、古寫本 神武天皇紀以後のもの

一 田中本 田中勘兵衛氏所蔵 應神紀 一卷（田本）

一 岩崎本 岩崎男爵所蔵 推古紀、皇極紀 二卷（岩本）

一 前田本 前田侯爵所蔵 仁德、雄略、繼體、敏達紀 四卷（前本）

一 藤波本 無窮會神習文庫所蔵 皇極紀 一卷（藤本）

四、校合本

一 水戸考訂本 圖書寮所蔵 （水本）

一伊勢貞丈校合本　無窮會神習文庫所藏　（貞本）
一山田以文校合本　同　（山本）
一狩谷棭齋校合本　同　（棭本）
一伴信友校合本　（伴本）
一鈴鹿連胤校合本　鈴鹿義鯨氏所藏　（鈴本）
一井上頼圀校合本　無窮會神習文庫所藏　（井本）

五、版本

一慶長宸刻本　（宸本）
一慶長活字本　（活本）
一慶長板本　（慶本）
一寛永本　（寛本）
一小寺本　小寺清先校　（寺本）
一黑羽本　黑羽領主大關增業校　（黑本）
一丹鶴本　水野忠央輯刻　神代上下　（丹本）

一田中校訂本 田中朝庸校 神代上下 (賴本)

六、注釋書

一日本書紀私記 (私記)
一釋日本紀 (釋紀)
一神代紀口訣 (口訣)
一日本書紀纂疏 (纂疏)
一神代紀抄 (紀抄)
一神代講述鈔 度會延佳 (講述鈔)
一神代藻鹽草 (藻鹽草)
一神代鹽土傳 (鹽土傳)
一日本書紀講述鈔 度會清在 (清在講述鈔)
一日本書紀考 (一考)
一日本書紀事跡抄 (事跡抄)
一日本書紀通證 (通證)

一書紀集解（集解）
一神代紀髻華山蔭（山蔭）
一稜威道別（道別）
一稜威言別（言別）
一日本書紀傳（書紀傳）
一日本書紀通釋（通釋）
一日本紀標注（標注）

二、本書の校訂に方りて底本と校合し、或は參照せる諸書凡そ左の如し。

一類聚國史（類史）
一日本紀略（紀略）
一古事記（記）
一舊事本紀（舊紀）
一古語拾遺（拾遺）
一續日本紀（續紀）
一日本後紀（後紀）

一續日本後紀（續後紀）
一文德實錄（文實）
一三代實錄（三實）
一扶桑略記（略記）
一帝王編年記（編年記）
一新撰姓氏錄（錄）
一公卿補任（補任）
一延喜式（式）
一萬葉和歌集（萬葉）
一萬葉集仙覺抄（仙覺抄）
一古今和歌集顯昭注（顯昭注）
一古事記傳（記傳）
一古史傳（史傳）
一新撰字鏡（字鏡）
一類聚倭名抄（抄）

一箋注類聚倭名抄　（箋注）
一類聚名義抄　（名義抄）
一伊呂波字類抄　（字類抄）

三、校訂は類本多く、其の書名は悉く列擧し難きを以て三本に止め、諸本同一なるものは單に諸本と書して、一々類本をば列擧せず、

四、原本の誤謬あるものは、原本某を某に作る某本に據りて改むと書し、兩是に渉り或は是非を決め難きものは某本某に作ると書せり、

五、傍訓は主として底本に據れり、されど其の誤謬の著しきものは、諸本に據りて之を訂正し、或は補足し亦削除したるものあり、蓋寛文本の傍訓は寛永の版本を踏襲したるものにて、寛永本は慶長版本に據れり、慶長本の傍訓は大體に於て楓山本に同じ、楓山本の傍訓は私記及釋日本紀を基礎とし、江家の傳本を參照して作成したるものなり、然るに當時言語の學未だ幼稚なりしを以て、古書を讀むに正音を以てせずして、音便のまゝに讀みて怪しむ所なかりき、例へば神代上はカミヨノカミノマキと訓むべきを、カンヨノカンノマキ、又カムヨノカムノマキと訓み、天照大神はアマテラスオホカミと訓むべきを、アマテラスヲホンカミと訓め

るが如し、斯くの如きの類は語學上の參考としては之を列擧すべきも、讀者をして正しき訓を知らしめむとするには益なし、本書の刊行は本文はもとより傍訓も亦一般の讀者をして據る所を知らしめむとするにあり、故に誤れりと思へるものは之を訂正し、其の重なるものは標注に之を辨じたるも、紙幅限あれば必しも一々之を擧げず、但し私記及釋日本紀等の訓みにて參考となるべきものは悉く本文の傍に記入して、私記は(私)釋日本紀は(釋)と書せる類是なり、

六、文字には正俗の別あり、俗字を捨てゝ正字を用ふるは至當の事なれど、洽く世に行はるゝものは、俗字と雖も、必しも斥くるを得ず、故に諸本を校合して、正字を用ひたるものあれば之に據り、諸本悉く俗字を用ひたるものは之に據りて改めず、

七、標注は紙幅限あるを以て要を摘みて簡明を主とし、送り假名の如きも、省略し得るものは勉めて之を略せり、されど出典其の他に就きて必要なるものは必ず書名又は人名を擧げて所據を明にす、亦文體も勉めて原文のまゝにして改めず、

八、人名及歌謠の注釋にて簡單なるものは本文の傍に記入せるものあり、見るに便利にして亦紙幅を省くに因れり、

九、標注は勉めて本文の上欄に記載したれど、注釋の多少によりて必しも然るを得

ず、依りて閲覧に便ならむが爲に、神代卷は章名を人皇以後は年月を標注に記入して閲讀に便ならしむ、

昭和三年十一月

佐伯有義

校訂
標注

六國史第一卷目次

解說……一
凡例……二
日本書紀上卷（自卷一至卷十五）
卷第一（神代上）
神世七代章……三
同第一一書……四
同第二、第三、第四、第五、第六一書……五
神世七代章續……六
同一書……七
八洲起元章……八
同第一一書……九
同第二、第三一書……十
同第四、第五、第六、第七、第八、第九一書……十一
同第十一書……十二

四神出生章……九
同第一、第二一書……一〇
同第三、第四一書……一一
同第五、第六一書……一二
同第七、第八、第九一書……一七
同第十一書……一八
同第十一一書……一九
瑞珠盟約章……二一
同第一一書……二四
同第二一書……二五
同第三一書……二六
寶鏡開始章……二七
同第一一書……二九
同第二一書……三〇
同第三一書……三一
寶劍出現章……三五
同第一一書……三六

同第二一書……三七
同第三、第四一書……三八
同第五一書……三九
同第六一書……四〇

卷第二（神代下）

天孫降臨章……四二
同第一一書……四九
同第二一書……五四
同第三、第四一書……五九
同第五一書……六〇
同第六一書……六一
同第七一書……六三
同第八一書……六四
海宮遊幸章……六四
同第一一書……六七
同第二一書……七〇

同第三一書……七二
同第四一書……七五
神皇承運章……七八
同第一、第二、第三、第四一書……七八

卷第三（神武紀）

神日本磐余彦天皇（神武天皇）
即位前紀甲寅年……八〇
同乙卯年——戊午年……八二
同己未年……九四
同庚申年——辛酉年（元年）……九六
二年——四年……九七
卅一年——七十六年……九八

卷第四（自綏靖紀至開化紀）

神渟名川耳天皇（綏靖天皇）
即位前紀……一〇〇

元年——四年……一〇二
廿五年——卅三年……一〇三
磯城津彥玉手看天皇（安寧天皇）
卽位前紀——三年……一〇三
十一年——卅八年……一〇四
大日本彥耜友天皇（懿德天皇）
卽位前紀——二年……一〇四
廿二年——卅四年……一〇五
觀松彥香殖稻天皇（孝昭天皇）
卽位前紀——六十八年……一〇五
八十三年……一〇六
日本足彥國押人天皇（孝安天皇）
卽位前紀——七十六年……一〇六
百二年……一〇七
大日本根子彥太瓊天皇（孝靈天皇）
卽位前紀——二年……一〇七

卅六年——七十六年……一〇八
大日本根子彥國牽天皇（孝元天皇）
卽位前紀——七年……一〇八
廿二年——五十七年……一〇九
稚日本根子彥大日日天皇（開化天皇）
卽位前紀——五年……一〇九
六年——六十年……一一〇
卷第五（崇神紀）
御間城入彥五十瓊殖天皇（崇神天皇）
卽位前紀——元年……一一一
三年——六年……一一二
七年……一一三
八年——九年……一一五
十年……一一六
十一年——十二年……一一九
十七年——四十八年……一二〇

六十年……一二一
六十二年——六十五年……一二二
六十八年……一二三

卷第六（垂仁紀）

活目入彥五十狹茅天皇（垂仁天皇）

即位前紀——二年……一二四
三　年……一二六
四　年……一二七
五　年……一二八
七　年……一二〇
十五年——廿二年……一三一
廿五年……一三二
廿六年——廿八年……一三四
卅年——卅二年……一三五
卅四年——卅九年……一三六
八十七年……一三七

八十八年……一三八
九十年——九十九年……一三九

卷第七（景行紀・成務紀）

大足彥忍代別天皇（景行天皇）

卽位前紀——二年……一四一
三年——四年……一四二
十二年……一四四
十三年——十七年……一四八
十八年……一四九
十九年——廿七年……一五一
廿八年——四十年……一五二
五十一年……一六〇
五十二年——五十三年……一六二
五十四年——五十七年……一六三
五十八年——六十年……一六四

稚足彥天皇（成務天皇）

即位前紀——三年……一六四
四年——五年……一六五
六十年……一六六

卷第八（仲哀紀）

足仲彦天皇（仲哀天皇）

即位前紀——元年……一六七
二　年……一六八
八　年……一六九
九　年……一七一
五十二年……一七二

卷第九（神功紀）

氣長足姫尊（神功皇后）

攝政前紀……一七三
攝政元年……一八一
同二年……一八五
同三年——五年……一八六

同十三年……一八七
同卅九年—四十六年……一八八
同四十七年……一八九
同四十九年……一九〇
同五十年—五十一年……一九一
同五十二年—五十六年……一九二
同六十二年—六十九年……一九三

卷第十（應神紀）

譽田天皇（應神天皇）

卽位前紀—二年……一九五
三　年……一九六
五年—六年……一九七
七年—九年……一九八
十一年—十三年……一九九
十四年……二〇一
十五年—十六年……二〇二

十九年……二〇三
廿年—廿二年……二〇四
廿五年—廿八年……二〇六
卅一年……二〇七
卅七年—四十年……二〇八
四十一年……二〇九

卷第十一（仁德紀）

大鷦鷯天皇（仁德天皇）

即位前紀……二一〇
元　年……二一四
二年—四年……二一五
七　年……二一六
十年—十一年……二一七
十二年……二一八
十三年—十四年……二一九
十六年—廿二年……二二〇

卅　年……二二一
卅一年—卅八年……二二四
四十年……二二六
四十一年—四十三年……二二八
五十年—五十三年……二二九
五十五年—六十年……二三〇
六十二年……二三一
六十五年—六十七年……二三二
八十七年……二三三

卷第十一（履中紀・反正紀）

去來穗別天皇（履中天皇）

即位前紀……二三四
元年—三年……二三八
四年—五年……二三九
六　年……二四〇

瑞齒別天皇（反正天皇）

卽位前紀……二四一
元年—五年……二四二

卷第十三（允恭紀・安康紀）

雄朝津間稚子宿禰天皇（允恭天皇）

卽位前紀……二四三
元　年……二四四
二　年……二四五
三年—四年……二四六
五　年……二四七
七　年……二四八
八　年……二五〇
九年—十一年……二五一
十四年—廿三年……二五二
廿四年—四十二年……二五三

穴穗天皇（安康天皇）

即位前紀……二五四
元　年……二五六
二年——三年……二五七

卷第十四（雄略紀）

大泊瀬幼武天皇（雄略天皇）

即位前紀……二五八
元　年……二六一
二　年……二六二
三年——四年……二六四
五　年……二六六
六　年……二六七
七　年……二六八
八　年……二七一
九　年……二七三
十　年……二七六
十一年——十二年……二七七

十三年……二七八
十四年……二八〇
十五年——十七年……二八二
十八年——十九年……二八三
廿年——廿一年……二八四
廿二年——廿三年……二八五

卷第十五（自清寧紀至仁賢紀）

白髮武廣國押稚日本根子天皇（清寧天皇）

即位前紀……二八八
元年——二年……二九〇
三年——四年……二九一
五年……二九二

弘計天皇（顯宗天皇）

即位前紀……二九二
元年……二九八

二　年……三〇〇
三　年……三〇二
億計天皇（仁賢天皇）
卽位前紀……三〇三
元年——二年……三〇四
三年——六年……三〇五
七年——十一年……三〇七
扉題字……三上參次筆

【神世七代章】日本書紀卷第一、此傍訓右側に施せるは釋紀に私記の說とあり概本之に同じく江家の點亦同じ本文の下にあるは一は丹本の訓、二は昌本に同じ

○神代上、神代とは人代に對して云神代はカミヨと訓むが正しくカミノヨと訓もよしカムヨと云カンノヨと云るは音便に訛れるなり神代なば上下二卷に分ち神世七代、八洲起元、四神出生、瑞珠盟約、寶鏡開迹、靈氣出現以上の六章なに上卷とす

○古天地未剖以下神聖生其中焉まで六十五字は漢籍三五曆記淮南子等の文を引用したるなり古事記の如く天地初發云々と筆を起しては壯麗ならぬが如く感じたるより殊更に漢籍を引用して共づ支那の開闢說を擧げ故曰云々と次に我古傳說を擧げたるものにて此六十五字は勿論我國の古傳說にはあらず

○天地未剖云々、淮南子に天地未剖陰陽未判とあるを採れり天地は說文に顚也至高無上とあり荀子に天に實形なし地上の至虛なる者皆天也とありて虛空を云ひ地は說文に元氣初て分れ重く濁るは物にして地となるとありて天地を云剖に判也中分するを剖と爲すとあり陰は闇也陽は高明也又日也とあり陰を闇に陽を明に作るは蓋日月を章りて作れるなり支那にては總べての事物に陰陽の兩性ありと云ひ男は陽にして女は陰なりと云るより陰陽の文字を此にメヲと訓るなるべし北本丹本島本及類聚紀略剖を割に作る

○淳沌、三五曆記に天地渾沌如雞子とあるを採れり文選注に渾沌不分之貌とあり雞子は鷄卵なり天地未分の狀態を鷄卵に譬へたるなり中本慕漢譯を訓に作る

○汎淫、曆記に汎幸始字と見え注に汎淫自然之氣とあり私記にホノカと訓り天地を分るべき芽のほのかに見えたるを云、芽は芽に同じ

○淹滯、篆疏に當作滯曆注曰淹歷風揚塵之貌也とあり

○淹滯、淮南子には凝滯とあり

○精妙之合搏易、搏は字書に扇

日本書紀卷第一

（江家古本點圖之（釋、瀧）ヤマトブミノマキノフイヅヒトツニアタルマキ（丹）ヤマトブミノマキノフイヅヒトツニアタルマキ（昌））

神代上

（カミヨノカミノマキ　カミノヨノカミノマキ　カムノヨノカムノマキ　カンノヨノマキノカミ（丹））

古天地未剖、陰陽不分、渾沌如雞子、溟涬而含牙、及其清陽者薄靡而爲天、重濁者淹滯而爲地、精妙之合搏易、重濁之凝竭難、故天先成而地後定、然後神聖生其中焉、故曰、開闢之初、洲壤浮漂、譬猶游魚之浮水上也、于時天地之中生一物、狀如葦牙、便化爲神、號國常立尊、主貴曰尊、自餘曰命、並訓美舉等也、下皆倣此、次國狹槌尊、次豐斟渟尊、凡三神矣、乾道獨化、所以成此純男、

也とあり、釋紀に私案是陽氣清而薄靡之故風扇易而天先成者也蓋與上清陽文同義也とあり　○重濁之凝堅難、堅は原本に場とあり楓本島本峰本等に據りて改む淮南子には竭とあり堅は正字通に以土障水也とあり重く濁れる者の凝りたるは固まり難き故に地は天より後に成れりとなり　○神聖、二字にてカミと訓む、次には神人をもカミと訓り、纂疏に神聖猶言神人之聖也神者不測之名聖者通明也通達此理而應變無窮故曰神聖也とあり　○故曰、以上は支那の古傳說を擧げたるにて以下本文なり故に此に特に故曰の二字を加へたり纂疏には一曰に作る　○開闢之初、開闢は天地の開闢なり故にアメツチノヒラクルハジメと訓り但江家にては國土の開くる初と說けり本居翁の髣髴山陰（以下單に山陰と書す）に天地に開闢といふは漢文にこそあれ古くは天地のはじめ或は天地の分れし時抔有て開と云ることはなしとあるは合理なる說なり　○洲壇、クニツチとあれど此時には天地未だ分れざりしなり　○葦牙、牙は芽と通ひ葦の初て生じたる芽なり　○神、カミの意義及語釋に就て種々の說あれど我國にて神と云るは世に優れたる德ありて靈妙なる力を有するものを總て廣くカミと云ひ（記傳の說）其語釋はカは香霧隱幽などのカにて目に見えず隱れたる意ミは靈とと同じく靈妙なる活きあるものを云（天御中主神考及神名考の說）と云る說穩當なるが如し　○國常立尊、記には天御中主神高皇產靈神神皇產靈神の三神を最初に擧げたるが此に國常立尊以下三神を擧げたるは書紀は國土の成立を主とし其最初の神を擧げたるなり國常立尊と申奉る意義は記傳に常立は一書に底立とあれば國之底都知にて國の底ひの限りを知看す意の御名なりとあり尊は命と書けるも言義は同じ記には尊命の別なく總て命と書けり神の名の下に命と添へて申すは直に其名を某と呼ぶときは無禮なる故に添へて申すにて今の世に某殿某樣といふに同じ　○國狹槌尊、此神名は古事記に見えず神代系紀には國常立尊の一名とす　○豐斟渟尊、記傳に豐は稱辭にて物の足り饒なる意クムは物の集り凝る意ヒは初めて芽す意を兼たる言にて彼一物の沌凝生りて國土と成るべき芽を云ひ渟は主の意なりとあり此次の第一の一書に此神の一名を多く擧げたり（一）豐國主尊のクニヌシ（二）豐組野尊のクミヌ（五）豐國野尊のクニヌ（六）豐囓野尊のクヒヌ（七）葉木國野尊のクニヌ（八）國見野尊のクニミはいづれもクムヌの訛れるにて（三）豐香節野尊のカフヌ（四）浮經野豐野買尊のカヒもクヒクミの轉語なり　○乾道獨化云々、講述鈔に長寬元年大外記中原師光の勘文には此十字なく或抄にもなければ後人の加筆なるべしと云乾道の文字は易に出づ天道と云に同じ純男をチトコノカギリと訓るは直譯なり又ヒタヲトコと訓みモハラナルヲトコと訓るも何れも直譯なり純男とは一柱づゝにて竝び坐す神なきを云

【第一一書】天地初判、天と地との初めて判るゝ時なり闢之初と云に同じ　○豐國主尊、以下八名は總て豐斟渟尊の一名、其意義同じきこと既に述たるが如し　○浮經野豐買尊、浮は一物の空中に浮漂へるを云經は含むなり地と成べき物の其中に含まるゝを云　○葉木國野尊、ハコはハゴクムのハコにて是も含む義

第一

一書曰、天地初判、一物在於虛中、狀貌難言、其中自有化生之神、號國常立尊、亦曰國底立尊、次國狹槌尊、亦曰國狹立尊、次豐國主尊、亦曰豐組野尊、亦曰豐香節野尊、亦曰浮經野豐買尊、亦曰豐國野尊、亦曰豐囓野尊、亦曰葉木國野尊、亦曰國見野尊、葉木國、此云播擧矩爾、

○國見野尊、原本に國の字なし、玉本に據て補ふ
○葉木國以下九字諸本可美の上にあり釋紀に據て此に移す
【第二一書】國稚地稚、日訣に國字伊志地字伊志也とあれど初の意ならばウヒシとあるべし通釋に國ワカク地ワカクと訓りワカシは幼稚の意
○產男以下七字原本第三一書國底立尊の次にあり集解に據て此に移す
○泥、原本尼に作る北本丹本に據て改む
【第三一書】混成、混沌と云に同じ
【第四一書】又曰、天御中主尊以下三神を一書の又の一説として擧げたるは國常立尊を最初の神とする主張に因れり
○天御中主尊、天の中央に主たる神の意
○高皇產靈尊、ムスビのムスは物の生ずるを云產出の義ヒは靈なり高皇產靈尊と神皇產靈尊との靈德によりて天地萬物は產出す此二神に御中主尊を合せて造化三神と稱し奉る
【第五一書】雲、諸本雪

第二

一書曰、古國稚地稚之時、譬猶浮膏而漂蕩、于時國中生物、狀如葦牙之抽出也、因此有化生之神、號可美葦牙彥舅尊、次國常立尊、次國狹槌尊、可美、此云于麻時、彥舅、此云比古泥、

第三

一書曰、天地混成之時、始有神人焉、號可美葦牙彥舅尊、次國底立尊、

第四

一書曰、天地初判、始有俱生之神、號國常立尊、次國狹槌尊、又曰、高天原所生神名、曰天御中主尊、次高皇產靈尊、次神皇產靈尊、皇產靈、此云美武須毗、

第五

一書曰、天地未生之時、譬猶海上浮雲無所根係、其中生一物、如葦牙之初生泥中也、便化爲人、號國常立尊、

第六

一書曰、天地初判、有物若葦牙、生於空中、因此化神、號天常立尊、次可美葦牙彥舅尊、又有物若浮膏生於空中、因此化神、號國常立尊、

次有神、埿土煑尊、埿土、此云二須毗尼一、亦曰二于毗尼一、沙土煑尊、沙土、此云二須毗尼一、亦曰二沙土根尊一、沙土根尊、亦曰二沙土煑尊一、次有神、大戸之道尊、大苫邊尊、一云大戸之邊、亦曰大戸摩彦尊、大戸摩姫尊、亦曰大富道尊、大富邊尊、次有神、面足尊、惶根尊、亦曰吾屋惶根尊、亦曰忌橿城尊、亦曰青橿城根尊、亦曰吾屋橿城尊、次有神、伊弉諾尊、伊弉冉尊、一書曰、此二神、青橿城根尊之子也、一書曰、國常立尊、生二天鏡尊一、天鏡尊生二天萬尊一、天萬尊生二沫蕩尊一、沫蕩尊生二伊弉諾尊一、沫蕩、此云二阿和那伎一、凡八神矣、乾坤之道相參而化、所以成二此男女一、自二國常立尊一、迄二伊弉諾尊伊弉冉尊一、是謂二神世七代一者矣、

一書曰、男女耦生之神、先有埿土煑尊、沙土煑尊、次有角櫲尊、活櫲尊、次有面足尊、惶根尊、次有伊弉諾尊、伊弉冉尊、櫲橛也、伊弉諾尊、伊弉冉尊、立二於天浮橋之上一、共計曰、底下豈無國歟、廼

に作る類史に據て改む　【第六一書】生於空中、北本丹本楓本及類史生を在に作る　○泥土煑尊沙土煑尊、ウはウキなり泥を云スは沙なりヒヂは土を云此時大地となるべきものかゝる狀態なりしを神名に負せ奉れりニはネにて親しみ尊みて云詞亦の名の埿土根沙土根の根に同じ　○大戸之道尊、オホは大トは處にて大地の義なりと云ひ(記傳)又大殿にて此時始て神の住給ふべき家居の出來しにて其初を成給へる御名なりとも云(通釋)チは男にて尊稱　○大苦邊尊、トマは富の通音にて家の事なりと云ひ(通釋)又苦は家造に用るものなれば御名に負せたりとも云(敷田氏標注)邊は女なり　○(注)大戸之邊、原本大戸之道尊の下にあり釋紀及舊紀に據て此に移す　○面足尊、面足は神體の足り整へるなりとも云ひ(神名考)亦一說には禮足にて天上にて禮拜の道の調るを御名に負せ奉れりとも云り(標注)　○惶根尊、神の面の惶むべきまでに成整へるなりと云ひ(記傳)或は陸地の堅く締る意なりと云ひ(神名考)是等の神の御名の義に就ては諸說ありて此には盡し難し大要をのみ擧ぐ　○伊弉諾尊伊弉冉尊、此二柱の神相誘ひて夫婦となり給ひしに依て負せ奉れる御名なり諸は山蔭に云諸をナギと訓るは諸は奴各反にて吳音那久なるを久を岐に轉用したるなり冉は北本昌本は冉に楓本は鳥又舟に類史舟に作る舟は冉なり山蔭に冉字は音奴甘反吳音那牟なるを那美に轉じ用ひられたる也然るを今の本に或は丹或は耳再などに作るは皆叶はずと云ひ木村正辭博士の攤齋雜考に耳册冉再みな冉字の異體にして異義あるに非ずと精しく辨ぜられたり　○一書曰云々、通釋は山蔭の說に從ひて細注とし北本丹本等何れも細注とす故に今諸本に據りて細注とす　○國常立尊生天鏡尊云々、是は甚しく異なる傳なり　○伎、北本丹本及紀略岐に作る　○乾坤之道云々、北本丹本楓本坤を凡に作る坤の古字なり此句は易繫辭に乾道成男坤道成女とある によれり　○神世七代、神世にも幾時代もあり此は諸冉二神以前を區別してかく云なり但し之を天神七代地神五代などゝ稱するは中世以後の俗說なり　○矣、楓本也に作る

【一書】角櫲尊、クヒは豐斟渟尊のクムに同じ　○櫲橛也、後人の攙入なり通釋此下に一本に據て此云久比の四字を補ふ　【八洲起元章】天浮橋、釋紀に兼方案之天浮橋者天橋立是也と云ひ記傳に

空中に懸れる故に浮橋とは云ならむとあり又史傳には天磐船と云るも同じ物にて虛空に浮べて乘るものなりとあり是亦一說なり

○天之瓊矛、瓊矛は玉を以て飾れる矛なり纂疏に之の字なし瓊を玉と訓るは誤れりヌと訓べし

○磤馭盧嶋、氣相記云在紀伊國海部郡此以西加太浦繼加太驛通淡路國津名郡其加太驛乾在伴島此島西南在淡能碁呂島一帶圓六十町無有人居高二十丈云々

○國中之柱、おのころ嶋を以て國の中央の御柱と爲給へりとなり史傳に國中とは大地の中を云卽彼矛を大地の鎭固の柱と爲給へるなりとあり

○陽神陰神、陽神は男神陰神は女神なり養老私記にも雄神雌神と注ぜり卷頭に陰陽不分云々といひ次に乾道獨化して純男を成すといひ次に乾坤の道相參りて男女を成すといひ其男は陽にして女は陰なりとて男神を陽神女神を陰神と書きたるなり當時の學者支那崇拜の

以天之瓊矛此曰瓊玉也指下而探之、是獲滄溟、其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰磤馭盧嶋、二神於是降居彼嶋、因欲共爲夫婦產生洲國、便以磤馭盧嶋爲國中之柱、柱此云美而陽神左旋、陰神右旋、分巡國柱、同會一面、時陰神先唱曰、憙哉遇可美少男焉、少男此云烏等孤陽神不悅曰、吾是男子、理當先唱、如何婦人反先言乎、事既不祥、宜以改旋、於是二神却更相遇、是行也陽神先唱曰、憙哉遇可美少女焉、少女此云烏等咩、因問陰神曰、汝身有何成耶、對曰、吾身有一雌元之處、陽神曰、吾身亦有雄元之處、思欲以吾身元處合汝身之元處、於是陰陽始遘合爲夫婦、及至產時、先以淡路洲爲胞、意所不快、故名之曰淡路洲、廼生大日本日本此云耶麻騰下皆效此、豐秋津洲、次生伊豫二名洲、次生筑紫洲、次雙生億岐洲與佐度洲、世人或有雙生者象此也、次生越洲、次生大洲、次生吉備子洲、由是始起大八洲國之號焉、卽對馬嶋、壹岐嶋、及處々小嶋、皆是潮沫凝成者矣、亦曰水沫凝而成也、

餘弊に出でたること言ふまでもなけれど斯くの如き理想の下に構成せられたるものなり　○左旋右旋、男は左につき女は右につくこと神代以來の風なり共理由は先哲の說に委しければ〻に言はず　○憙哉、第一の一書には妍哉、第三の一書には美哉とあり何れもアナニエヤと訓べきなり字書に憙は悅也妍麗也又美好也とも注せりアナニエヤのアナは事物に感じて發する聲にて今もアさいふニは悅ばしき意エヤは記にヤシとあると同じく歎きの聲なり故に哉の字を充てたり　○不祥、サカナシは良からぬを云記には不良とありフサハズと訓めり　○汝身之元處、丹本玉本之字なし衍なるべし　○大日本豐秋津洲、記に亦名天御虛豐秋津根別と云とあり長門より奧羽に亘れる所謂日本本島を云ふ　○伊豫二名洲、四國なり　○億岐、原本億を隱に作る北本類史に據て改む下同じ　○越洲、數說あり三越加賀能登の五國なりと云ひ又佐渡なりとも能登なりとも或は今の北海道なりとも云り　○大洲、記傳云周防國大島郡か又筑前肥前にも大島あり此の三の內なるべし　○吉備子洲、備前國兒島郡なり　○大八洲國、國號考(本居宣長)に皇國の號神代に二つあり一には大八島國二には葦原中國なり大八島國と云は古事記伊邪那岐命伊邪那美命御合云々故因此八島先所生謂大八島國と見えたり書紀にも生坐る次第は傳によりて異なれども八つの數は同くて由是始起大八洲國之號焉とあり八はたゞ島數の多き意の號かとも疑はるれど八つにて餘れるも足らざるもなければ本より八の數は動かざるにこそさて此號は外國に對はず獨立ちて天下を統べ言ふ名なりとあり　○壹岐、原本にユキと訓み和名抄にも壹岐島由伎とあれど壹はユの假名にあらざればイキと訓べし

【第一一書】千五百秋瑞穗、北本丹本及紀略に秋の下津字あり　○脩、原本循に作る北本楓本島本等に據て改む傍訓シラスとあるは非なり修理固成の意なり　○八尋之殿、集解云之は傍訓攙入、島本殿の上に大字あり　○妹自左巡吾當右巡、丹本左を右に右を左に作る　○蛭兒、蛭に似たる兒を云　○淡洲、龜相記云今在阿波國以東海中無有人居不入子列通釋に今友島の離島にて神島と云紀伊國に屬けりとあり　○太占、卜事の名なりフトは稱辭マニはマ〻にて神の御心のまゝの卜形に

第一

一書曰、天神謂伊弉諾尊伊弉冉尊曰、有豐葦原千五百秋瑞穗之地、宜汝往脩之、廼賜天瓊戈、於是二神立於天上浮橋、投戈求地、因畫滄海而引擧之、卽戈鋒垂落之潮結而爲嶋、名曰磤馭盧嶋、二神降居彼嶋、化作八尋之殿、又化豎天柱、陽神問陰神曰、汝身有何成耶、對曰、吾身具成而有稱陰元者一處、陽神曰、吾身亦具成而有稱陽元者一處、思欲以吾身陽元合汝身之陰元、云爾卽將巡天柱、約束曰、妹自左巡、吾當右巡、旣而分巡相遇、陰神乃先唱曰、妍哉可愛少男歟、陽神後和之曰、妍哉可愛少

現はるゝを以て名させり
○卜合、ウラへはウラをするを云ウラは心なり太占によりて神の御心を知るが故に其事をするをウラへといふ卜合は神の御心に合するよしなり
○伊弉、丹本及紀略像を與に作る下同じ
○億岐三子洲、億岐は島前島後と分れ島前は天之島同之島知夫島と三つの島より成り島後に對し三子の如くに見ゆるより起れる名なりと云
○廩、原本廩に作る丹本楓本及紀略に據て改む、北本島本麻に作る

【第二一書】

【第三一書】高天原、北本丹本高の字なし

女歟、遂爲夫婦、先生蛭兒、便載葦船而流之、次生淡洲、此亦不以充兒數、故還復上詣於天、具奏其狀、時天神以太占而卜合之、乃教曰、婦人之辭其已先揚乎、宜更還去、乃卜定時日而降之、故二神改復巡柱、陽神自左、陰神自右、既遇之時、陽神先唱曰、妍哉可愛少女歟、陰神後和之曰、妍哉可愛少男歟、然後同宮共住而生兒、號大日本豐秋津洲、次淡路洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次億岐三子洲、次佐渡洲、次越洲、次吉備子洲、由此謂之大八洲國矣、瑞此云彌圖、妍哉此云阿那而惠夜、可愛此云哀、太占此云布刀摩爾、

第二

一書曰、伊弉諾尊伊弉冉尊二神、立于天霧之中曰、吾欲得國、乃以天瓊矛指垂而探之、得磤馭盧嶋、則拔矛而喜之曰、善乎國之在矣、

第三

一書曰、伊弉諾伊弉冉二神、坐于高天原曰、當有國耶、乃以天瓊矛畫成磤馭盧嶋、

【第四一書】謂、島本語に作る

【第五一書】鶺鴒、抄に鶺鴒（積靈二音、字或作鶺鴒）邇波久奈布利日本私記云止都岐乎之倍止利、貌似鶯而高飛作聲、箋注にニハは庭クナは數々搖す也古へ交接をクナクと云是鳥數々尾を搖かして庭中に觸る故に是名を得とあり

【第六一書】淡路洲爲胞、原本淡路洲の下に淡洲の二字あり丹本島本に據て削る

【第七一書】

【第八一書】

【第九一書】

第四

一書曰、伊弉諾伊弉冉二神相謂曰、有物若浮膏、其中蓋有國乎、乃以天瓊矛探成一嶋、名曰磤馭盧嶋、

第五

一書曰、陰神先唱曰、美哉善少男、時以陰神先言故爲不祥、更復改巡、則陽神先唱曰、美哉善少女、遂將合交而不知其術、時有鶺鴒、飛來搖其首尾、二神見而學之、卽得交道、

第六

一書曰、二神合爲夫婦、先以淡路洲爲胞、生大日本豐秋津洲、次伊豫洲、次筑紫洲、次雙生億岐洲與佐度洲、次越洲、次大洲、次子洲、

第七

一書曰、先生淡路洲、次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次億岐洲、次佐度洲、次筑紫洲、次壹岐洲、次對馬洲、

第八

一書曰、以磤馭盧嶋爲胞、生淡路洲、次大日本豐秋津洲、次伊豫二名洲、次筑紫洲、次吉備子洲、次雙生億岐洲與佐度洲、次越洲、

第九

一書曰、以淡路洲爲胞、生大日本豐秋津洲、次淡洲、次伊豫二名洲、次

億岐三子洲、次佐度洲、次筑紫洲、次吉備子洲、次大洲、

第十

一書曰、陰神先唱曰、妍哉可愛少男乎、便握陽神之手、遂爲夫婦、生

淡路洲、次生蛭兒、

次生海、次生川、次生山、次生木祖句句迺馳、次生草祖草野姫、亦名野槌、既而伊弉諾尊伊弉冉尊共議曰、吾已生大八洲國及山川草木、何不生天下之主者歟、於是共生日神、號大日孁貴、大日孁貴、此云於保比屢咩能武智、音力丁反、一書云、天照大神、一書云、天照大日孁尊、此子光華明彩、照徹於六合之内、故二神喜曰、吾息雖多、未有若此靈異之兒、不宜久留此國、自當早送于天而授以天上之事、是時天地相去未遠、故以天柱擎於天上也、次生月神、一書云、月弓尊、月夜見尊、月讀尊、其光彩亞日、可以配日而治、故亦送之于天、次生蛭兒、雖已三歲、脚猶不立、故載之於天磐櫲樟船而順風放棄、次生素戔嗚尊、一書云、神素戔嗚尊、速素戔嗚尊、此神有勇悍以安忍、且常以哭泣爲行、故令國内人民多以夭折、復使青山變枯、故其父母二神勅素戔

【第十一書】生、原本なし北本丹本に據て補ふ

【四神出生章】生海、海は海神を生み給ひ川は川神を山は山神を生み給ふなり

○天下、蒼蔚天地に作る

○大日孁貴、孁は說文に書女也とあり依てメに充てたり貴はムチと讀み親しみ尊ぶ意なり

○六合、字書に天地四方を六合と云とあり

○天地相去云々、三五曆記に天日高一丈地日厚一丈盤古日長一丈如此萬八千歲云々故天去地九萬里とあり

○天柱、記傳に賀茂翁の說なりとて天柱は伊邪奈岐命の御息にて風なりとあり

○月神、式に山城國葛野郡月讀神社同綴喜郡月讀神社月讀神社丹波國桑田郡小川月讀神社等あり

○月弓尊、ユミはヨミの轉なりヨミは夜見にて月は夜見ゆるより云り又讀は數ふる意にて月の形にて夜を數ふるより御名に負せ奉れりとも云ふ

○蛭兒、記には淡島を生

給ふ前に生子水蛭子此子者入葦船而流去と見えたり

○素戔嗚尊、スサは進む意ヲは男なり本文に勇悍とあるが如く勇氣の殊に勝れ給へるより負せ奉れる御名なり　○安忍、イブリは通釋に氣吹イブキと云に同じく正しく言に出て云ずして氣吹が如き狀を爲て憤るを云とあり、安忍の文字は左傳隱四年に見え安忍無親とあり　○哭泣、通證に古事記作啼伊佐知流今按去來訓伊佐猶言足摩而泣也小兒忿怒時有此狀とあり　○夭折、字書に不盡天年也とありアカラサマとは不意に卒急にの意なり神武紀に儵忽を皇極紀に急をアカラサマと訓めりアカラサマニシナシムと訓べきを憚りてかく訓るか天命を全うせずして俄に死する由なり　○使、類史なし　○青山變枯、青山は草木茂り青々と見ゆる山を云ひ枯山は草木枯れたるを云青山なれば枯山に泣き枯らし給ふなり島本及紀略枯下に山字あり　○父母、カソイロと訓たれど古言に非ずチ、ハ、と訓べし　○無道、アヂキナシは味氣無しなり味氣なくして俗に所謂箸にもかゝらぬを云無狀また無賴をも訓り　○宇宙、アメノシタは天下なり字書に宇は四方上下也とあり又宇內猶言天下とありされば此は宇內と同じ意に用ひたり　○根國、記に根之堅洲國とあり祝詞には根國底之國とも見ゆ釋紀に私記曰謂黃泉也とあり地の底にある國なり一說に西北幽暗の地出雲國を指す也と云ひ（延佳の講述鈔）又出雲國大根島なりとも（標注）遠方外夷の地なりとも云（玉木葦齋の說）

嗚尊、汝甚無道、不可以君臨宇宙、固當遠適之於根國矣、遂逐之、

【第一一書】御寓、寓は宇に同じ御は統治なり天下を知食すを云原本宙に作る諸本及類史紀略に據て改む

○珍子、記には貴子と書けり淨く貴き意の古言なり

○白銅鏡、マスミノカガミは眞澄鏡なり白銅は金質より云り但し神代には白銅鏡はあるまじく眞澄鏡に此文字を充てたるものなるべし

○顧眄之間、ミルマサカリは通證に見間疎也とあり首を廻して顧る僅の間なり

○化出之神、出之原本なし上文及舊紀に據て補ふ

【第二一書】哭恚、フヅ

第一

一書曰、伊弉諾尊曰、吾欲生御寓之珍子、乃以左手持白銅鏡、則有化出之神、是謂大日孁尊、右手持白銅鏡、則有化出之神、是謂月弓尊、又廻首顧眄之間、則有化出之神、是謂素戔嗚尊、即大日孁尊及月弓尊、並是質性明麗、故使照臨天地、素戔嗚尊是性好殘害、故令下治根國珍此云于圖、顧眄之間此云美屢摩沙可利爾、

第二

一書曰、日月既生、次生蛭兒、此兒年滿三歲脚尙不立、初伊弉

クは守部の説に裏に心悲を含みて頬をふくらすなり含頬噤（ホホクム）の約れるにやあらむと云り

○次生火神、以下七十五字通釋應永本永享本に據て本文としたれど應永本神代卷上は存せず玉屋本は著しき異本なれば同書のみに據て改むること穩ならねば舊に依て改めず

○軻遇突智、火神をカグツチノ神と申すはカグは火の光り耀くより云ひチは尊稱なり

○罔象、水神をミヅハノメノ神と申すはミツハは水の清く流るゝ意メは女神なり罔象の文字を充てたるは淮南子の注に罔象水之精也とあるに據れり

○臍、北本丹本及紀略に齊に作る臍の省文なり

○五穀、通證に稲麥豆粟稗也とありタナツモノは種津物の義なるべし

【第三一書】火產靈、火神軻遇突智神の亦の名なり

○吉葛、通釋云匍匐なり匍の一名ヨサとも云り

○靡、丹本紀略に麻に作る

【第四一書】吐、記に多

諸伊弉冉尊巡柱之時、陰神先發喜言、既違陰陽之理、所以今生蛭兒、次生素戔嗚尊、此神性惡常好哭泣、國民多死、青山爲枯、故其父母勑曰、假使汝治此國、必多所殘傷、故汝可以馭極遠之根國、次生鳥磐樠樟船、輙以此船載蛭兒、順流放棄、次生火神軻遇突智、時伊弉冉尊爲軻遇突智所焦而終矣、其且終之間、臥生土神埴山姫及水神罔象女、卽軻遇突智娶埴山姫生稚產靈、此神頭上生蠶與桑、臍中生五穀、罔象此云美都波、

第三

一書曰、伊弉冉尊生火產靈時、爲子所焦而神退矣、亦云神避矣、其且神退之時、則生水神罔象女及土神埴山姫、又生天吉葛、天吉葛、此云阿摩與能佐岡羅、一云與曾豆羅、

第四

一書曰、伊弉冉尊且生火神軻遇突智之時、悶熱懊惱因爲吐、此化爲神、名曰金山彦、次小便、化爲神、名曰罔象女、次大便、化爲神、名

具理とあり嘔吐を古言にタグリと云り
○金山彦、記には金山毘古神金山毘賣神とあり二神竝び坐せり
○姫、原本媛に作る丹本島本及紀略に據て改む
【第五一書】有馬村、牟婁郡にあり花窟と稱す記には葬出雲國與伯耆國之堺比婆山とあり
○土俗、私記にクニヒトと訓り然るに後に之をヒトと訓るは後嵯峨天皇の御諱邦仁を避けたるなり
○亦以花祭、葦牙に花窟には今も二月二日十二月二日時の花を以て祭るなりと國人云りとあり是墓祭の始なり
【第六一書】薫滿、カヲリは鼻にかぐのみならず目に見るをも云ひこゝは雲霧のあらはに立るを云
○級長戸邊、風神を級長戸邊命又級長津彦命と申すシナは息長なり神の息を長く吹き給へる卽ち風なればやがて御名に負せ奉れり、トは處なり
○風神、式に大和國平群郡龍田坐天御柱國御柱神社二座とある卽是神なり
○飢、ヤハシカリシと訓

日埴山姫、

第五

一書曰、伊弉冉尊生火神時、被灼而神退去矣、故葬於紀伊國熊野之有馬村焉、土俗祭此神之魂者、花時亦以花祭、又用鼓吹幡旗歌舞而祭矣、

第六

一書曰、伊弉諾尊與伊弉冉尊共生大八洲國、然後伊弉諾尊曰、我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉、乃吹撥之氣化爲神、號曰級長戸邊命、亦曰級長津彦命、是風神也、又飢時生兒、號倉稻魂命、又生海神等、號少童命、山神等、號山祇、水門神等、號速秋津日命、木神等、號句句廼馳、土神、號埴安神、然後悉生萬物焉、至於火輌遇突智之生也、其母伊弉冉尊見焦而化去、于時伊弉諾尊恨之曰、唯以一兒替我愛之妹者乎、則匍匐頭邊匍匐脚邊而哭泣流涕焉、其涙墮而爲神、是卽畝丘樹下所居之神也、號啼

るを通説に誤さし元々集にウヤシカリシさあるを正しとすべしと云り丹本にヤワシカシ玉本にウヘシさあり北本島本には傍訓なし

○倉稻魂命、ウカは食なり食物の御魂の神と云意稻は倉に收めおきて食料とす故に食稻の字を用ひたり

○少童命、文選海賦の注に海童即海神也さあり

○水門神、水門は川の海に注ぎ入る口を云記には速秋津日子神速秋津比賣神さあり

○歐丘樹下所居之神、記に坐香山之畝尾木本名泣澤女神さあり式に大和國十市郡畝尾都多本神社さ見ゆ萬葉二に哭澤之神社(モリ)と詠るも此神なるべし神也の也源本なし北本丹本及紀略に據て補ふ

○經津主神、及武甕槌神の寫神代下に詳なり祖の下奏の字丹本紀略也に作る

○一云、原本云を曰に作る北本丹本に據て改む

○闇龗、字書に龗は龍也さあり記傳に此神は龍にて雨を物する神なり高龗

澤女命矣、遂拔所帶十握劍、斬軻遇突智爲三段、此各化成神也、復劍、及垂血、是爲天安河邊所在五百筒磐石也、卽此經津主神之祖矣、復劍鐔垂血激越爲神、號曰甕速日神、次熯速日神、其甕速日神是武甕槌神之祖也、亦曰、甕速日命、次熯速日命、次武甕槌神、復劍、鋒垂血激越爲神、號曰磐裂神、次根裂神、次磐筒男命、一云磐筒男命及磐筒女命、復劍頭垂血激越爲神、號曰闇龗、次闇山祇、次闇岡象、然後伊弉諾尊追伊弉冉尊、入於黃泉、而及之共語時、伊弉冉尊曰、吾夫君尊何來之晚也、吾已飡泉之竈矣、雖然吾當寢息、請勿視之、伊弉諾尊不聽、陰取湯津爪櫛、牽折其雄柱、以爲秉炬、而見之者、則膿沸虫流、今世人夜忌一片之火、又夜忌擲櫛、此其緣也、時伊弉諾尊大驚之曰、吾不意到於不須也凶目汚穢之國矣、乃急走廻歸、于時伊弉冉尊恨曰、何不用要言、令吾耻辱、乃遣泉津醜女八人、一云泉津醜女八人、追留之、故伊弉諾尊拔劍背揮以

は山上の龍神闇龗は谷なる龍神なりと云り闇山祇闇罔象の闇はいづれも谷なり

○飡泉之竈、黄泉國の竈にて煑たる食物を食ひたるを云

○湯津爪櫛、爪は楓本丹本島本抓に作るユツは五百津にて齒の數の多きことツマクシは齒のつまりたる櫛と云義なり

○雄柱、記に男柱とあり左右の端の大きなる齒を云

○秉炬、タビは手火にて手に持つ火を云

○膿沸、膿をウナヒと訓るは私記一本に宇奈とあるに據れるなるべし然るに藤波本私記には宇介とあり介は美の誤なるべければウミと訓むを正しとす

○虫流、記に宇士多加禮とあり虫は蛆、流は多く集りて流るゝ如き狀なるを云

○不須也凶目汚穢之國、イナは否定の意にて惡み嫌ふなり凶目は醜目にて黄泉の汚穢の狀を見惡みて詔ふなり汚穢の汚は原本汙に作る丹本楓本に據

逃矣、因投黑鬘、此卽化成蒲陶、醜女見而採噉之、噉了則更追、伊弉諾尊又投湯津爪櫛、此則化成筍、醜女亦以拔噉之、噉了則更追、後則伊弉冉尊亦自來追、是時伊弉諾尊已到泉津平坂、一云、伊弉諾尊乃向大樹放屎、此卽化成巨川、泉津日狹女將渡其水之間、伊弉諾尊已至泉津平坂、故便以千人所引磐石塞其坂路、與伊弉冉尊相向而立、遂建絶妻之誓、時伊弉冉尊曰、愛也吾夫君、言如此者、吾則當縊殺汝所治國民日將千頭、伊弉諾尊乃報之曰、愛也吾妹、言如此者吾則當產日將千五百頭、因曰、自此莫過、卽投其杖、是謂岐神也、又投其帶、是謂長道磐神、又投其衣、是謂煩神、又投其褌、是謂開齧神、又投其履、是謂道敷神、其於泉津平坂、或所謂泉津平坂者、不復別有處所、但臨死氣絶之際、是之謂歟、所塞磐石是謂泉門塞之大神也、亦名道返大神矣、伊弉諾尊既還、乃追悔之曰、吾前到於不須也凶目汚穢之處、故當滌

て改む
○要言、字書に要約也とあり先に吾を見給ふなと約し給ひしを云
○令吾耻辱、令原本令に作る諸本に據て改む
○泉津醜女、黄泉國の惡鬼
○注）一云以下七字、丹本紀略なし
○（注）泉津日狹女、通證に日狹女槃目也とあり
○追留、類史此上に迺字あり
○黑鬘、頭の飾なり上古は男女共にカツラを懸て飾となせり是は黑玉などをつけられしなるべし
○沛陽、抄にエビカツラノミとありエビは今の山葡萄なり
○了、丹本島木畢に作る下同じ
○筍、抄に筍亦作笋太加無奈とあり竹芽榮の義
○泉津平坂、記に今謂出雲國之伊賦夜坂也とあり
○一云以下三十九字、島本端注とす
○屎、丹本島本尿に作る抄に祝文云尿（由波利）小便也とあり
○千人所引磐石、千人にて引く程の大なる磐石

去吾身之濁穢則往至筑紫日向小戸橘之檍原而祓除焉、遂將盪滌身之所汚乃興言曰上瀨是太疾下瀨是太弱、便濯之於中瀨也、因以生神號曰八十枉津日神、次將矯其枉而生神號曰神直日神、次大直日神、又沈濯於海底、因以生神號曰底津少童命、次底筒男命、又潛濯於潮中、因以生神號曰中津少童命、次中筒男命、又浮濯於潮上、因以生神號曰表津少童命、次表筒男命、凡有九神矣、其底筒男命、中筒男命、表筒男命、是卽住吉大神矣、底津少童命、中津少童命、表津少童命、是阿曇連等所祭神矣、然後洗左眼、因以生神號曰天照大神、復洗右眼、因以生神號曰月讀尊、復洗鼻、因以生神號曰素戔嗚尊、凡三神矣、已而伊弉諾尊勅任三子曰、天照大神者可以治高天原也、月讀尊者可以治滄海原潮之八百重也、素戔嗚尊者可以治天下也、是時素戔嗚尊年已長矣、復生八握鬚髯、雖然不治天下、常以啼泣恚恨、故伊弉諾尊問

之曰、汝何故恒啼如此耶、對曰、吾欲從母於根國只爲泣耳、伊弉諾尊惡之曰、可以任情行矣、乃逐之、倉稻魂此云宇介能美拖磨、少童此云和多都美、頭邊此云摩苦羅陛、脚邊此云阿度陛、煩火也、音而善反、霤此云於箇美、音力丁反、吾夫君此云阿我儺勢、飡泉之竈此云譽母都俳遇比、秉炬此云多妣、不須也凶日汚穢此云伊儺之居梅枳枳多儺枳、醜女此云志許賣、背揮此云志理幣、提爾布俱、泉津平坂此云余母都比羅佐可、屍此云愈磨理、音乃弔反、絕妻之誓此云許等度、岐神此云布那斗能加微、檍此云阿波岐、

○建絕妻之誓、丹本妻を要に作る通釋之に據るコトは異處にて閨房を異にするを云ワタスは言渡す義なるべし　○吾則當縊、原本則なし島本玉本に據て補ふ　○岐神、フナドは勿經處なり此より勿過ぎそと詔ひて投給ひし御杖によりて成坐るによれり岐神と書けるは衢にて祭るに因る　○長道磐神、帶の形の長きより長道と云磐は延(ハ)えなるへし　○煩神、記に和豆良比能宇斯神とあり　○禪、字鏡にシタノハカマとあり　○開曙神、記に飽咋之宇斯神とあり　○道敷神、原本千敷に作る諸本に據て改む記に此神なし　○或所謂泉津平坂者云々、通釋に此二十五字後人の加筆なりとて除けり　○泉門塞之神、原本之字なし丹本楓本等に據て補ふ　○筑紫日向小戸橘之檍原、其所在に就て數說あり貝原氏の筑前續風土記には那珂郡住吉村住吉神社(式に所謂筑前國那珂郡住吉神社三座並名神大)所在の地なりと云ひ青柳種麿の續風土記拾遺には同郡仲村現人神社所在の地なりと云ひ宮崎大門の筑紫小門靈蹟考には日向國宮崎郡江田神社なれば巡拜帳と云ものに式內檍原江田神社とあれば江田郷の邊なるべしと云り何れとも確定し難けれども大神祓禊の時に生れまし〻神の悉く鎭座し給ふより考ふるに那珂郡仲村なるべし檍に就きても二說あり紀傳には櫂の一名なりと云ひ古史傳には七月の靈祭の時に水むけに用ふるミソハギなりと云　○祓除、ミソギは身の汚穢を滌ぐなりハラヒは拂にて身につける穢れたる物を取棄るを云禊と祓とは各別なり　○興言、揚言するを云、心に感じたる所あり之を取立て宣言するを云　○濯之於中瀨、原本於の字なし楓本島本峯本に據て補ふ丹本には之字なし　○八十枉津日神、記に八十禍津日神大禍津日神の二柱とす第十の一書には大綾津日神とあり記傳にマカとは總ての惡しき事を云ひ世間にあらゆる凶惡邪曲の事は皆此神の御靈より起れりと云　○神直日神大直日神、記傳に直毘とは禍を直し給ふ御靈の謂なりとあり　○中津少童命、原本中の上表字あり丹本楓本島本に據て削る　○住吉大神、式に攝津國住吉郡住吉坐神社四座(一座は神功皇后を後に祭り加へたり)とあり又荒魂を祀れるは長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座あり、筑前國那珂郡住吉神社は神代よりの鎭座なり　○阿曇連等所祭神、阿曇連は海神の子孫なり子孫たる阿曇氏が其祖神を祀れるにて我國神社の大部分は皆是なり少童命の本社は筑前國糟屋郡志加海神社なり　○月讀命云々、滄海原は海なり潮之八百重とは潮路の遠く隔れる極みを云今も潮の滿干の月に關係あること大なり其の潮の八百重の事を掌り給へとの意なり、楓本島本等潮の上に表津の二字あり丹本原本に同じ　○倉稻魂、以下百六十三字第七一書の末にあり熱本及釋紀に據て此に移す

○俱、丹本島本理に作り峯本里に作る
○屍、丹本島本尿に作る
○婁、丹本要に作る
【第七一書】大山祇神、紹史山神に作り通釋之に據て改む
○磐石、原本磐ゐ槃に作る諸本に據て改む
【第八一書】身中、ムクロは身軀の義ムは身クロはカラの轉なり
○詭山、端山なり
○正勝、記傳には眞坂の義とす
○雛山、繁山なり
○是曰蘆、島本此三字なし
○脛沙柯、原本柯下蒐字あり江本昌本及類史に據て削る一云以下六字丹本島本なし
【第九一書】殯殮之處、口訣に假殮死體所とあり新に死たるまゝにて葬るまでの間假に收置く處を云モカリのモは喪カリは上のアの省かりたるにて喪上りなりソノヲは通證に今接者乃乎取二諸陵之義一且訓之とあれどソノは其ヲはヲサムのヲならむか殮は鈹の俗字なれど諸本同じければ之に據

第七

一書曰、伊弉諾尊拔劍斬軻遇突智爲三段、其一段是爲雷神、一段是爲大山祇神、一段是爲高龗、又曰斬軻遇突智時、其血激越染於天八十河中所在五百箇磐石、而因化成神、號曰磐裂神、次根裂神、兒磐筒男神、次磐筒女神、兒經津主神、

第八

一書曰、伊弉諾尊斬軻遇突智命爲五段、此各化成五山祇、一則首化爲大山祇、二則身中化爲中山祇、三則手化爲麓山祇、四則腰化爲正勝山祇、五則足化爲雛山祇、是時斬血激灑染於石礫樹草、此草木沙石自含火之緣也、麓山足曰麓、此云蔑耶麼、正勝此云麻沙柯、一云麻左柯豆、雛此云之伎、音烏含反、

第九

一書曰、伊弉諾尊欲見其妹、乃到殯殮之處、是時伊弉冉尊猶如生平出迎共語、已而謂伊弉諾尊曰、吾夫君尊請勿視吾矣、言訖忽然不見、于時闇也、伊弉諾尊乃擧一片之火而視之、時伊弉

冉尊脹滿太高、上有八色雷公、伊弉諾尊驚而走還、是時雷等皆起追來、時道邊有大桃樹、故伊弉諾尊隱其樹下、因採其實以擲雷者、雷等皆退走矣、此用桃避鬼之緣也、時伊弉諾尊乃投其杖曰、自此以還雷不敢來、是謂岐神、此本號曰來名戸之祖神焉、所謂八雷者、在首曰大雷、在胸曰火雷、在腹曰土雷、在背曰稚雷、在尻曰黑雷、在手曰山雷、在足上曰野雷、在陰上曰裂雷、

第十

一書曰、伊弉諾尊追至伊弉冉尊所在處、便語之曰、悲汝故來、答曰、族也勿看吾矣、伊弉諾尊不從、猶看之、故伊弉冉尊恥恨之曰、汝已見我情、我復見汝情、時伊弉諾尊亦慙焉、因將出返、于時不直默歸、而盟之曰、族離、又曰、不負於族、乃所唾之神號曰速玉之男、次掃之神號泉津事解之男、凡二神矣、及其與妹相鬪於泉平坂也、伊弉諾尊曰、始爲族悲及思哀者是吾之怯矣、時泉守

る
○脹滿太高、ハレは張りタタへは湛へなり
○用桃避鬼、鬼は抄に周易云人神曰鬼（和名於邇或說云於邇者隱音之訛也鬼物隱而不欲顯形故以稱也）四聲字苑云鬼人死神魂也とあれど是は俗に所謂幽靈に當れりこゝに鬼とあるは八色雷公泉津醜女などを指せり鬼を避くる爲に桃を用ふることは延喜中務省式に追儺の時桃弓桃杖を儺人に頒充つと見え支那の書には荊楚歲時記に桃樹東南枝三尺八寸向日鬼憎去之避疫術也左傳昭四年に桃弧棘矢以除其災と見えたり
○來名戸之祖神、クナドは勿來處にて其處を經て來ることなかれとの意なり祖神は抄に道祖、風俗通云共工氏之子好遠遊故其死後祀以爲祖神（漢語抄云道祖佐部乃加美）とありて支那の道祖神と岐神と相似たる所あるによりて擬へ用ひたるなり、原本にオホチカミと訓たるは非なりサヘノカミと訓べし、サヘは塞な

り惡神をさへぎる意なり
○屍、カクレと訓るは言葉を忌みて遁けたるなり
【第十一書】族、ウカラは通證に玉木翁曰族生屬也とあれど內族なるべし紀中に親屬親族同族を何れもウカラと訓り
○見我情、鹽土傳云言汝已探我之私令我耻辱我亦知汝猶人之貳心是冉尊怨詰諸尊之言也
○所唾之神、玉本之の下時化出の三字あれど諸本になし故に採らず搖之の下亦同じ
○速玉之男、式に出雲國意宇郡速玉神社、紀伊國牟婁郡熊野速玉神社あり
○泉津事解之男、峯本男を神に作る
○泉平坂、泉の下津の字を略したるなり泉守道も亦同じ脫ちたるにはあらず、泉守道は黃泉の道を守る者なり
○菊理媛神、史傳に夜見國にありて伊邪那美命に副侍ツカヘ神と聞えたり二柱の神の御中執持て女神の御言を男神に申看さしめ男神の御言を女神に聞入しめ率らしい功に依て負たるにて聞入の意

道者白曰、有言矣、曰吾與汝已生國矣、奈何更求生乎、吾則當留此國不可共去、是時菊理媛神亦有白事、伊弉諾尊聞而善之、乃散去矣、但親見泉國、此既不祥、故欲濯除其穢惡、乃往見粟門及速吸名門、然此二門潮既太急、故還向於橘之小門而拂濯也、于時入水吹生磐土命、出水吹生大直日神、又入吹生底土命、出吹生大綾津日神、又入吹生赤土命、出吹生大地海原之諸神矣、不負於族、此云宇我邏磨概茸、

第十一

一書曰、伊弉諾尊勅任三子曰、天照大神者可以御高天之原也、月夜見尊者可以配日而知天事也、素戔嗚尊者可以御滄海之原也、既而天照大神在於天上曰聞葦原中國有保食神、宜爾月夜見尊就候之、月夜見尊受勅而降、已到于保食神許、保食神乃廻首嚮國、則口出飯、又嚮海、則鰭廣鰭狹亦自口出、又嚮山、則毛麁毛柔亦自口出、夫品物悉備、貯之百机而饗之、是時

月夜見尊忿然作色曰、穢　矣、鄙　矣、寧可以口吐之物敢養我乎、廼抜劍擊殺、然後復命、具言其事、時天照大神怒甚之曰、汝是惡神、不須相見、乃與月夜見尊一日一夜隔離而住、是後天照大神復遣天熊人往看之、是時保食神實已死矣、唯有其神之頂化爲牛馬顱上生粟、眉上生蠶、眼中生稗、腹中生稻、陰中生麥及大豆小豆、天熊人悉取持去而奉進之、于時天照大神喜之曰、是物者則顯見蒼生可食而活之也、乃以粟稗麥豆爲陸田種子、以稻爲水田種子、又因定天邑君、卽以其稻種始殖于天狹田及長田、其秋垂穎八握莫莫然甚快也、又口裏含蠶、便得抽絲、自此始有養蠶之道焉、保食神、此云宇氣母知能加微、顯見蒼生、此云宇都志根阿烏比等久佐、

かとあり加賀國石川郡白山比咩神社は此神を祀れりと云こと一宮記其他に見えたり　○粟門、阿波の鳴戸なり　○速吸名門、豐後國海部郡にあり、式に同國海部郡早吸日女神社見ゆ　○磐土命、土はツチと訓べし底土赤土亦同じこゝに見えたる磐土命は上に見えたる表筒男命底土命は底筒男命赤土命は中筒男命と同神にまします　○概、原本概に作る楓本島本及類史に據て改む　【第十一書】勅任、コトヨサシは事寄さしなり其事を寄せ給ふなり　○大神、原本大を太に作る丹本楓本昌本等に據て改む　○葦原中國、國號考に葦原中國は本神代に高天原より云る號にして此國ながら云る號にはあらず其意はいと〳〵上代には四方の海濱は悉く葦原にて其中に國處有て上方より見下せば葦原の巡れる中に見えける故にかくは號けたるなりと云り　○保食神、抄に日本紀云保食神（和名宇介毛知乃加美）保猶保持也宇氣者食之義也言是保持食物之神也とあり食物をウケと云るは人の命を受け保つ意か記に大氣津比賣神とある亦同神なるべし　○到保食神許、山城風土記に月讀尊天照大神の勅を受けて保食神の許に至りましゝ時葛野郡桂里に立寄り給ひし事見えたれば攝津風土記に見えたる豐宇可乃賣神と保食神とは同神にして爰に保食神の許に到るとあるは同國稻掠山ならむか　○鰭廣鰭狹、ハタはヒレなり大小の魚を云　○毛麁毛柔、獸と鳥となるべしと云或は猪熊の如き大獸を毛麁物と云ひ兎などの如き小獸を毛柔物と云るか　○貯、アザヘは雜へと云に同じ種々の物を雜へ備ふるなり　○百机、記に百取机代之物とあり机は杯居にて食器を居る由の名なり百人にて取持つ程の机代の物を云　○聲、ミアヘタテマツルは饗膳し奉

るを云アヘは人を靈魂する事を云る古言なり　○蔵矣、丹本峰本島本矣を哉に作る　○是時、類史時の下則の字あり　○擊殺、通釋は玉本に據て此下に保食神の三字を補ひたれど採らず　○大熊人、通釋山陰の說に據て人の上に大字を補へり　○蠶、島本峯本類に作る　○蠶、蓑牙にマユと訓み通釋亦同じ抱に蠶和名万由蠶衣也とあり　○陰中、原本中の字なし丹本に據て補ふ　○大豆小豆、丹本島本峯本及類史大小豆に作る　○是物者云々、是物とは稻を始め粟稗麥豆等を云顯見蒼生とは顯見は釋紀に現在之義とあり、蒼生は青人草なり人民を云食は人生に最も必要なるものなるが故に人民の食ひて活くべきものなりとて特に陸田種子と水田種子とを定め地の宜しきを見其人を選びて農事を勤め勵まし給ひしなり神意仰ぐべし　○陸田種子、通證にハタは乾田也とありハタツモノは畠の物なり丹本にはハタケノタナツモノとあり田ナツモノは種子の物なり　○水田種子、タナツモノは是も同じく種子つ物なり稻は五穀の中の最も主なるもの故に種と云へば稻種の事になれるなり　○天邑君、纂疏に謂農人之長とあり口訣に農長也とありムラキミは群君の意　○狹田、眞田なり狹き意にあらず　○長田、長大なる意　○莫々然、毛詩周南に維葉莫々注に成就之貌とありシナヒは茂りて靡くを云　○養蠶之道、衣服も亦食物に次ぎて人生に必要なるものなるが故に蠶を養ひ絲を抽きて織紝を勵まし國を治め民を安んずるの道を立て給ひしなり

【瑞珠盟約章】根國、纂疏の上に底字あり　○勅許之、通釋此上に伊弉諾尊の四字を補ひたれど上文よりの續にてなくても聞えまた次の行に伊弉諾尊云々とあれば無きを可とす　○神功已畢、功は事なり詩の事業を云ふ意已畢は事業の成れるを云　○靈運當遷、丹本にはアツシレマシテカムアガリマシナムトスと訓りアツシレは熱痢にて病の篤く重きを云カムアガリは神上にて崩御の意なり　○幽宮、式に淡路國津名郡伊佐奈伎神社あり、此地なり　○日之宮、諸尊の坐す殿なり天照大神の大宮に對して少宮と云

於是素戔嗚尊請曰、吾今奉教將就根國、故欲暫向高天原與姉相見而後永退矣、勅許之、乃昇詣之於天也、是後伊弉諾尊神功既畢、靈運當遷、是以構幽宮於淡路之洲、寂然長隱者矣、亦曰、伊弉諾尊功既至矣、德亦大矣、於是登天報命、仍留宅於日之少宮矣、少宮、倭柯美野、始素戔嗚尊昇天之時、溟渤以之鼓盪、山岳爲之鳴响、此則神性雄健使之然也、天照大神素知其神暴惡、至聞來詣之狀、乃勃然而驚曰、吾弟之來豈以善意乎、謂當有奪國之志歟、夫父母既任諸子各有其境、如何棄置當就之國、而敢窺窬此處乎、乃結髮爲髻、縛裳爲袴、便以八坂瓊之五百箇御

○溟渤云々、オホウミは大海なりトゞロは轟にて浪音高く海水の漂ひ搖くを云
○山岳云々、山岳の鳴動するを云
○奪國、國とは高天原を云
○結髮爲髻云々、女裝を變じて男裝を爲し給ふを云結髮は女子は垂髮なるを男子の如くに髮を引上けて結ふを云爲髻は左右の髮にて結ひわかぬるを云縛裳は裳は女子の用ふるものなれば之を引纏ひて男子の用ふる袴の如くに取成し給ふを云
○八坂瓊之五百箇御統、八坂は借字にて八尺なり玉緒の長さを云五百箇は玉の數の多きをいひ御統は多くの玉を緒に貫きて統一したるを云、原本箇を筒に作る、昌本及類史に據て改む
○纏其髻鬘及腕　髻鬘をミイナタキと訓るは御頂なり頂の飾を爲給ふを云丹本に髻をミツラと訓りミツラは耳頰にて髮のところを云鬘はカツラにて御髮の飾なり腕はウデなり玉を髻にも鬘にも亦腕

統御統、此云美須磨慮、纏其髻鬘及腕、又背負千箭之靫千箭此云知能梨、與五百箭之靫、臂著稜威之高鞆、稜威、此云伊都、振起弓弦、急握劍柄、蹈堅庭而陷股、若沫雪以蹴散、蹴散、此云倶穢鞭、鞭箇須、奮稜威之雄詰、雄詰、此云烏多稽眉、發稜威之嘖讓、嘖讓、此云擧廬吠、而徑詰問焉、素戔嗚尊對曰、吾元無黑心、但父母已有嚴勅、將永就乎根國、如不與姉相見、吾何能敢去、是以跋涉雲霧、遠自來參、不意阿姉翻起嚴顏、于時天照大神復問曰、若然者將何以明爾之赤心也、對曰、請與姉共誓、夫誓約之中、誓約之中、此云宇氣賢能美雖箇、必當生子、如吾所生是女者、則可以爲有濁心、若是男者、則可以爲有清心、於是天照大神乃索取素戔嗚尊十握劍、打折爲三段、濯於天眞名井、皓然咀嚼、皓然咀嚼、此云佐我彌爾加武、而吹棄氣噴之狹霧、吹棄氣噴之狹霧、于都麼伊浮岐能佐擬理、所生神號、曰田心姫、次湍津姫、次市杵嶋姫、凡三女矣、既而素戔嗚尊、乞取天照大神髻鬘及腕所纏八坂瓊之五百箇御統、濯於天眞名井、皓然咀嚼而吹棄氣噴之狹霧所生神號、曰正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、次

にもつけ給ひしを云
○千箭之靫、チノリは千箭入なりチは箭の數の多きを云ひノは篤にて矢竹なりリは入りのイの省けたるなり靫は抄に和名由岐以箭又其中也とあり矢箭なるべし千箭之靫は多くの箭を入れたるを云
○稜威之高鞆、鞆は抄に鞆（音旱和名止毛楊氏漢語抄日本紀等用鞆字俗亦用之本文未詳）在臂避弦具也とあり箋注に按鞆字西土諸書無見蓋皇國所造非漢字と見ゆ鞆は左の臂につけて弓を射る時に弦の之に觸れて音を發する故に高鞆と云ひ其音卽ち武威を示すを以て稜威と上に副へたるなり　○弓弦、ユハズは弓端なり弓の端を云振起は弦を地に突き立てゝ弓を振起すなり　○劍柄、タカミは手上にて劍の柄を云急握は強く握るを云　○踏堅庭云々、全身に力をこめて堅き庭の地を殷までも踏み込み給ふ由なり　○若沫雪云々、其堅き庭の土を輕き沫雪の如くに蹴散し給ふにて御力の強くまします事を形容したる詞なり　○雄詰、原本詰を誥に作る丹本及類史紀略に據て改む下同じ、雄詰は身を奮はして雄々しく健び給ふ狀を云　○嘖讓、嘖は大呼聲、讓は詰責以辭謂之讓とあり大に聲を發して詰問するを云コロは殺す懲すなどのコロコラと同じくビはヲタケビのビと同じく其狀を云　○詰問、詰は字書に責也譴也問罪也とあり、原本之を誥に作る丹本及類史紀略に據て改む、下同じ　○父母、丹本纂疏母の字なし　○翻起嚴顏、諸本翻を飜に作る翻飜同じ却てなり嚴顏は怒れば顏の嚴めしくなるが故に嚴顏を起すといふ笑顏の反對なり　○誓約、通釋に事ある時に其禱る所の神に誓ひて其信驗を得む事を乞禱申して言を立て其信驗に因て吉凶を定め是非を判ち成否を試めし勝負を占ひ當否を徵しなどする其事をウケヒとは云なりとあり　○天眞名井、第三の一書及記に天安河を隔て、相對ひ立たして誓約し給ふとあり天眞名井は安河の中にあるなり眞名井は眞沼の井にて安河の中にて自らに水の淀みて止まれる所を云必しも深く堀れる井のみにあらず　○皓然咀嚼、サガミとは力を強く入れてかむを云　○吹棄氣噴之狹霧、イブキは息吹なり息を吹出すを息吹と云狹霧は眞霧なり強く吹き出し給ふ息の眞霧の如くなるを云　○田心姫、三女神は天の安河によりて名づけられしなりタゴリと云ひタギツと云ひタギリと云ひ何れも河流に緣ある語なり　○市杵嶋姫、市杵島は地名なり之は地名によりて負せ奉れる御名なり　○正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、正哉吾勝勝速日は私記にマサヤアカツカツハヤヒと訓み諸本之に據りたれど正哉は正しき哉の意又勝速日の勝は速日に續くにはカチといふべき規定なれば記傳の說の如くマサカアカツカチハヤヒと訓べきなり此御名も誓約に因りて負せ奉れるなり忍穗耳は稻穗によれる御名なり　○出雲臣、記には出雲國造、姓氏錄には出雲宿禰と見ゆ今の千家北島兩男爵家及其同族なり　○士師連、士師はハシと訓めど埴土もて物を造る職なればハニシと云ふべきなり此氏を賜りしは垂仁天皇三十二年野見宿禰土部職に任ぜられたるに因れり此氏は出雲臣より出て後に菅原秋篠大江等の諸氏となれり　○凡川內直、記に凡河內國造姓氏錄には河內忌寸と見ゆ凡河內は今の河內國なり　○山代直、記には山代國造、姓氏錄には山背忌寸と見ゆ山代は今の山城國なり舊くは山代とも山背とも書きしを延曆十三年に文字を山城と改めたり　○子養、ヒタスは目足にてタシは足らしむるなり養育するを云　○胸肩君、胸肩は筑前國宗像郡是なり姓氏錄河內神別に宗形君大國主命六世孫吉田片隅命之後也と見え胸肩氏は大國主命の後裔なり

天穗日命、是出雲臣、士師連等祖也、次天津彥根命、是凡川內直、山代直等祖也、次活津彥根命、次熊野櫲樟日命、凡五男矣、是時天照大神勅曰、原其物根、則八坂瓊之五百箇御統者是吾物也、故彼五男神悉是吾兒、乃取而子養焉、又勅曰、其十握劍者是素戔嗚尊物也、故此三女神悉是爾兒、便授之素戔嗚尊、此則筑紫胸肩君等所祭神是也、

【第一一書】陵物、陵は字書に犯也侮也侵也とあり、丹本島本昌本等諸本及類史陵を凌に作る陵凌通ず

○丈夫、丈は長老之稱也とあり小子に對して云原本丈を大に作る峯本纂疏及類史紀略に據て改む

○握、峯本紀略提に作り楓本纂疏捉に作る亦通ず

○瀛津嶋姫、卽ち田心姫なり田心姫と別神とせるは誤れり

○天忍骨尊、忍穗耳と云るに同じ、式に豐前國田川郡忍骨命神社あり此神を祀る

○道中、宗像を指せり本居翁は道は國と云に同じく道中は筑紫國の中也と云れたり

○天孫、舊訓にはアメミマコとあれど古史傳に文武天皇元年詔に天津神御子とあるに從て訓べしと云り

第一

一書曰、日神本知素戔嗚尊有武健陵物之意、及其上至便謂、弟所以來者非是善意、必當奪我天原、乃設丈夫武備、躬帶十握劍九握劍八握劍、又背上負靫、又臂著稜威高鞆、手握弓箭、親迎防禦、是時素戔嗚尊告曰、吾元無惡心、唯欲與姉相見、只爲暫來耳、於是日神共素戔嗚尊相對而立、誓曰、若汝心明淨不有陵奪之意者、汝所生兒必當男矣、言訖先食所帶十握劍生兒、號瀛津嶋姫、又食九握劍生兒、號湍津姫、又食八握劍生兒、號田心姫、凡三女神矣、已而素戔嗚尊以其頸所嬰五百箇御統之瓊、濯于天渟名井亦名去來之眞名井而食之、乃生兒、號正哉吾勝勝速日天忍骨尊、次天津彦根命、次活津彦根命、次天穗日命、次熊野忍蹈命、凡五男神矣、故素戔嗚尊既得勝驗、於是日神方知素戔嗚尊固無惡意、乃以日神所生三女神令降於筑紫洲、因敎之曰、汝三神宜降居道中、奉助天孫、而爲天孫所祭也、

【第二一書】珍寶、類史珍玉に作る

○掘、原本堀に作る類史に據て改む、丹本楓本等握に作るは掘の訛なり
○汝以所持、原本所の上汝字あり丹本及類史紀略に據て削る
○遠瀛、記に奥津宮とあり、此宮は奥島にあり、奥島は大島の西北四十八里にありと云
○中瀛、記に中津宮とあり此宮は神湊を去る三里北の海中にあり大島と云
○海濱、類史近瀛に作る記に澳津宮とあり海濱は田島村にあり此社昔は神湊の東六町に在しを建長年中今の地に移奉ると云

第二

一書曰、素戔嗚尊將昇天時、有一神、號羽明玉、此神奉迎而進以瑞八坂瓊之曲玉、故素戔嗚尊持其瓊玉而到之於天上也、是時天照大神疑弟有惡心、起兵詰問、素戔嗚尊對曰、吾所以來者、實欲與姉相見、亦欲獻珍寶瑞八坂瓊之曲玉耳、不敢別有意也、時天照大神復問曰、汝言虛實將何以爲驗、對曰、請吾與姉共立誓約、誓約之間、生女爲黑心、生男爲赤心、乃掘天眞名井三處相與對立、是時天照大神謂素戔嗚尊曰、以吾所帶之劍今當奉汝、汝以所持八坂瓊之曲玉可以授予矣、如此約束共相換取、已而天照大神則以八坂瓊之曲玉浮寄於天眞名井、嚙斷瓊端而吹出氣噴之中化生神、號市杵嶋姫命、是居于遠瀛者也、又嚙斷瓊中而吹出氣噴之中化生神、號田心姫命、是居于中瀛者也、又嚙斷瓊尾而吹出氣噴之中化生神、號湍津姫命、是居于海濱者也、凡三女神、於是素戔嗚尊以所持劍浮寄於天眞名井、嚙斷劍

末而吹出氣噴之中化生神、號天穗日命、次正哉吾勝勝速日天忍骨尊、次天津彦根命、次活津彦根命、次熊野櫲樟日命、凡五男神云爾、

【第三一書】必男、峯本必女に作る
○御、原本なし、丹本峯本及紀略に據て補ふ
○勝速日、玉本此上に正哉吾勝の四字あれど採らず丹本には勝の上に吾字あり
○宇佐島、豐前國宇佐郡にあり通證に見林曰宇佐島非海島二川周流神山故有島名とあり二川とは寄藻川と御物川となり
○海北道中、海北は北海なり宗像は九州の北海にあればしかいふ初め宇佐に天降まし現在は海北の道中に坐すとなり
○道主貴、三女神を合せて申すなり海の北の道中の主たる神と云意貴は大己貴の貴に同じ
○水沼君、宗像氏と同じく大己貴命の末ならむと

第三

一書曰、日神與素戔嗚尊隔天安河而相對、乃立誓約曰、汝若不有姦女賊之心者、汝所生子必男矣、如生男者、予以爲子而令治天原也、於是日神先食其十握劍、化生兒瀛津嶋姫命、亦名市杵嶋姫命、又食九握劍、化生兒湍津姫命、又食八握劍、化生兒田霧姫命、已而素戔嗚尊、含其左髻所纏五百箇御統之瓊、而著於左手掌中、便化生男矣、則稱之曰、正哉吾勝、故因名之曰勝速日天忍穗耳尊、復含右髻之瓊、著於右手掌中、化生天穗日命、復含嬰頸之瓊、著於左臂中、化生天津彦根命、又自右臂中化生活津彦根命、又自左足中化生熊野忍蹈命、亦名熊野忍隅命、其素戔嗚尊所生之兒皆已男矣、故日神方知素戔嗚尊元有赤心、便取

思へど徴とすべきものなし谷重遠の鹽土傳に丹齋曰胸肩氏爲二左座一水沼氏爲二右座一とあるは宗像神社にての事かよく考ふべし

【寶鏡開始章】重播種子、種子を播きたる上に重れて種を播くを云

○毀其畔、畔は抄に田界也和名久呂一云阿世とあり畔を取放てば水潤れて苗枯るゝなり

○(注)波那豆、原本那豆顛倒す諸本に據て改む

○秋則云々、斑駒をして實りたる稲を踏荒さしむるなり云

○當新嘗時、私記にニイノアヒスルトキ又云ニハナヒキコストキとあり釋紀に新嘗者是新穀既熟乃後嘗新之謂之留波一今加奈比之辭是師說之所讀加一也とあり記に大嘗(オホニヘ)とあり記傳にニヘは稲穀(ニヒヲ)を約めたるにて新稲を以て嘗するを云名なりとあり嘗の字を用ひたるは支那にて秋祭を嘗と云へるによれり

○放戻、私記にクソマル

其六　男以爲日神之子、使治天原、卽以日神所生三女神者、使降居于葦原中國之宇佐嶋矣、今在海北道中、號曰道主貴、此筑紫水沼君等祭神是也、煖干也、此云備、

是後素戔嗚尊之爲行也甚無狀、何則天照大神以天狹田長田爲御田時、素戔嗚尊春則重播種子、重播種子、此云壹根磨根、且毀其畔、毀、此云波那豆、秋則放天斑駒、使伏田中、復見天照大神當新嘗時、則陰放戻於新宮、又見天照大神方織神衣居齋服殿、則剝天斑駒、穿殿甍而投納、是時天照大神驚動、以梭傷身、由此發慍、乃入于天石窟、閉磐戸而幽居焉、故六合之內常闇而不知晝夜之相代、于時八十萬神會合於天安河邊、計其可禱之方、故思兼神深謀遠慮、遂聚常世之長鳴鳥、使互長鳴、亦以手力雄神立磐戸之側、而中臣連遠祖天兒屋命、忌部遠祖太玉命、掘天香山之五百箇眞坂樹而上枝懸八坂瓊之五百箇御統、中枝懸八咫鏡、一云眞經津鏡、下枝懸青和幣和幣、此云尼枳底、白和幣、

とあり大便をするを云戾は丹本島本及私記に屎とあり玉篇に戾與矢同俗又作屎とあり戾屎同じ　○新宮、記に聞看大嘗之殿とあり重胤は是大嘗宮の權輿なりと云り　○神衣、神に獻り給ふ御衣にて和妙荒妙なり天八千々姫神衣を織りし事機殿儀式帳に見えたり　○齋服殿、機殿なり神衣を織る殿なるが故に齋服殿と云　○天斑駒、斑駒は毛のまだらなる駒なり　○甍、屋の棟の覆なり其狀魚鱗に似たる故にイラカと云　○梭、抒に杼通俗文云受緯曰梭等（今案卽杼也、比）亦謂之梭とあり織機具なり傍訓カヒとあるはカヒアと相似たるより誤れるにて御梭（ミヒ）なるべし　○會合、峯本及類史には合の字なし記に神集集而とあり　○禱、イノルは言寅なり願ひ思ふ所を言葉に述る意なり說文に禱告事求福也とあり　○常世之長鳴鳥、雞を云　○忌部、此下恐らくは首の字を脫す　○五百箇眞坂樹、五百箇は枝の繁きを云、眞坂樹は今神事に用ふる榊なり、古事記延喜式には賢木と書き日本後紀には榊と書けり、○掘、ネコジは根ながらほり取るを云ふ　○御紙、島本統の下玉の字あり　○八咫鏡、ヤタは八手にて兩手を竝べたる程の大きさの鏡と云意私記に讀咫爲阿多者手之義也一手之廣四寸兩手相加正是八寸也とあり口訣にも八咫鏡者面八寸鏡と云り一說にヤタは八頭にて八頭花崎、八葉形也と云る說もあれど採り難し　○（注）眞經津鏡、記傳にマフツは眞太にて太は美稱なりと云　○青和幣、拾遺に種麻以爲青和幣とあり麻なり　○白和幣、拾遺に穀木種殖之以作白和幣是木綿也とあり木綿なり麻に比ぶれば色白き故に白和幣と云　○茅纏之矟、私記に以茅纏其矛也とあり　○俳優、ものの憑きたるが如き狀態をなして種々の可笑しき所作をし神の御意を咲ましめ奉るを云通證に之を以て猿樂の本緣とし之を猿樂と云は猿女氏相傳の樂なればなりと云り　○眞坂樹爲鬘、記には天之眞拆を鬘と爲すと見えたり眞拆はマサキノカツラなり眞坂樹はマサキの誤かとも思はるれど賀茂松尾祭等に楓を鬘とすることあれば榊を鬘とすることもなしと云べからず傳說の異なれるにや　○以蘿爲手繦、拾遺には蘿葛とありて蔓草なり京都にては今もヒカゲと云り賀茂山を始

相與致其祈禱焉、又猿女君遠祖天鈿女命、則手持茅纏之矟、立於天石窟戸之前、巧作俳優、亦以天香山之眞坂樹爲鬘、以蘿爲手繦、手繦、此云多須枳、而火處燒覆槽置、覆槽置、此云于該布西、顯神明之憑談、顯神明之憑談、此云歌牟餓可梨、是時天照大神聞之而曰、吾比閉居石窟、謂當豐葦原中國必爲長夜、云何天鈿女命嘻樂如此者乎、乃以御手細開磐戸窺之、時手力雄神則奉承天照大神之手、引而奉出、於是中臣神忌部神則界以端出之繩、亦云左繩、端出之繩、此云斯梨倶梅儺波、乃請曰、勿復還幸、然後諸神歸罪過於素戔嗚尊、而科之以千座置戸、遂促徵矣、至使拔髮以贖其罪、亦曰、拔其手足之爪贖之、已而竟逐降焉、

め各處に生じ地上に長くはひ四季綠色なり鎭花祭大嘗祭には今も冠にさを羅へり手繼は手をすかす爲にかくる物なり故に手繼と云、抄には襷をタスキと訓り　○火處燒、庭燎を燒くを云　○覆槽、ウケは空筒ッヽなり內部の空虛なる筒を云此物の上に立て舞ふ時に響あらしめむ爲にさを設くるなり後の舞台なり　○(注)覆槽置云々、置及布西の二字類史に據て補ふ　○顯神明之憑談、是卽ち俳優の狀態なり、眞に神懸のありしにはあらず　○嘘笑、笑ひ樂むを云、說文に嘘大笑也とありエラギのエは笑ヱ顏、ほゝゑむなどのエにて笑なり　○端出之繩、今のしめ繩なりシリクメは尻籠めにて藁の端をこめて絡る繩と云意なり　○(注)亦云、此上原本繩字あり丹本島本に據て削る　○千座置戸、古へは罪過を犯したるものある時は其人より祓物を出して祓除をおはしめたり其料物に大上中下の別あり大祓には二十八種を出さしむ置戸は置物にて卽祓物なり千座の座は祓物を置く臺、千は數多きを云ひやがて多くの祓物を云　○促徵、促は督促するを云ハタルは責又は債の字を書く令義解に徵財曰債とあり　○蹴、名義抄に蹴アガフ、カフ、アタル、ツグナフなどありて物を出さしめて其罪に易るなり　○遂、原本遂に作る類史私記に據て改む

【第一一書】稚日女尊、舊紀に天照大神之妹也とあり丹生社傳亦同じ　○逆剝、大祓詞には生剝逆剝とあり生剝とは生きたるを其まゝ皮を剝くを云ひ逆剝とは苦しみもがきて剝かれじとするを强ひて剝ぐを云ひ生剝と云も同じ事なるを文の勢に重ね云なり（宇都氏の說に據る）　○於、丹本楓本及類史に據て補ふ　○閉著、サシツは戸ざすを云トヂマシマと訓るもよし　○天高市、紀に天安河とあり纂疏に蓋在天上取諸神集會之義とありて諸神の集會せらるゝより高市と云しにて安河と異なれる處にはあらじ　○高皇產靈尊、尊の字は島本及類史に據て補ふ

第一

一書曰、是後稚日女尊坐于齋服殿而織神之御服也、素戔嗚尊見之、則逆剝斑駒投入之於殿內、稚日女尊乃驚而墮機、以所持梭傷體而神退矣、故天照大神謂素盞嗚尊曰、汝猶有黑心、不欲與汝相見、乃入于天石窟而閉著磐戸焉、於是天下恒闇、無復晝夜之殊、故會八十萬神於天高市而問之、時有高皇產靈尊之息思兼神者、有思慮之智、乃思而白曰、宜圖造彼神之象而奉招禱也、故卽以石凝姥爲治工、採天香山之金、以作日矛、又全剝眞名鹿之皮、以作天羽鞴、用此奉造之神、是卽紀伊國所坐日前神也、石凝姥此云伊之居梨度咩、全剝此云宇都播伎、

○思兼神者、原本神の下云の字あり丹本島本峯本及類史に據て削る、　○圖造彼神之象、彼神とは日神を指し奉る象とは御形體の事には非ず御光に圖(ニ)るべき象を造らむと云るにて卽鏡の事なり(古史傳の說に據る)　○奉招禱、楓本島本禱の上に祈の字あり　○日矛、種々の說あり八咫鏡なりとも日神持給ふ所の矛なりとも或は日像鏡を著くる矛なりともいへど通釋に茅纒の矛の末に著る料なりといへる說穩當なるべし　○全剝眞名鹿之皮、眞名鹿は鹿なり眞名はほめて云り全剝は俗に云丸剝にするなり　○羽韜、抄に韜韋靈吹火也布岐加波とあり今フイゴと云吹皮の轉訛ぜるなり　○日前神、式に紀伊國名草郡日前神社(名神大月次新嘗相嘗、國懸神社(同上)とある是なり、日前神の御正體の事は拾遺に令石凝姥神鑄日像之鏡初度所鑄少不合意是紀伊國日前神也と見え此に用此奉造之神とは天照大神の前の御靈とます御鏡を申せり釋紀に引く大倭本紀の注には一鏡者天照大神之御靈名天縣神也一鏡者天照大神之前御靈名國懸大神今紀伊國名草宮崇敬解祭大神也とありて國懸神の御靈とす是は異說の如く聞ゆれど大日本史神祇志に日前神社國懸神社祀天照大神前靈天窟之變以思兼神議使石凝姥神造日像鏡其初度所鑄稱國懸大神又曰日前神とあるが如く大神の前御靈なば日前神とも國懸神とも申奉るなり然るに釋紀以後日矛を以て日前大神の御靈とする說あり誤れり(別に辨じたるものあり此には盡し難し)

【第二一書】垣田、纂疏云周以垣墻防禽獸也、活本埴田に作る　○亘以絡繩、アセナハはあざなへる繩なりあざなふは繩をより合する事を云繩を引わたすは他人の田を奪ひて我田とするなり亘は諸本及類史釋紀冒に作る纂疏に據て改む　○恩親之意、私記にオトムツマシキコ、ロモチテとあり楓本にコノカミヲト、トイフムツマシキミコ、ロヲモチテとあり是江家の點なりと云り　○平心、丹本平意に作り舊紀には悉の一字に作る　○擧體不平、ミコゾリテは身體悉くなりヤクサムは天武紀には不和を訓り平和ならざる意慰むの反對にてヤは病むの意なるべし

第二

一書曰、日神尊以天垣田爲御田、時素戔嗚尊、春則塡渠、毀畔、又秋、穀已成則亘以絡繩、且日神居織殿時、則生剝斑駒、納其殿內、凡此諸事盡是無狀、雖然日神恩親意、不慍不恨、皆以平心容焉、及至日神當新嘗之時、素戔嗚尊則於新宮御席之下、陰自送糞、日神不知、徑坐席上、由是日神擧體不平、故以恚恨、迺居于天石窟閉其磐戶、于時諸神憂之、乃使鏡作部遠祖天糠戶者造鏡、忌部遠祖太玉者造幣、玉作部遠祖豐玉者造玉、又使山雷者採五百箇眞坂樹八十玉籤、野槌者採五百箇野薦八十玉籤、凡此諸物皆來聚集、時中臣遠祖天兒屋命、則以神祝祝之、於是日神

方開磐戸而出焉、是時以鏡入其石窟者、觸戸小瑕、其瑕於今猶存、此卽伊勢崇祕之大神也、已而科罪於素戔嗚尊、而責其祓具、是以有手端吉棄物、足端凶棄物、亦以唾爲白和幣、以洟爲青和幣、用此解除竟、遂以神逐之理逐之送糞、此云倶蘇摩屢、玉籤、此云多摩倶之、祓具、此云波羅閇都母能、手端吉棄、此云多那須衞能余之岐羅毗、神祝祝之、此云加武保佐枳保佐枳、逐之、此云波羅賦、

○天磐戸、石凝姥神の父なり　○山雷、通釋云大山祇神なり　○玉籤、古史傳に縣居大人說に玉を著たる木竹を云とあり是玉串の本義なるべしとあり　○野薦、丹本峯本薦を篦に作り楓本は篦又薦に纂疏は篦に作る山陰に薦の誤とし田中本亦之に據る然るに私記にスヽキと訓み楓本亦之に據れるを以て通釋は原本に薦とあるを可とし、スヽキは萩薄などの總名にてこゝは薄なるべしと云り　○神祝、ホサクは史傳に云古言に同事を丁寧反覆して言ふを云字典に祝丁寧也請求之辭とあればホサクと云に祝字よく當れり　○小瑕、峯本小を少に作る御鏡に小瑕あること天德御記(釋紀所引)に瓦上在鏡一面其鏡徑八寸許頭雖有小瑕專無損圓規圭帶等甚分明見之者無不驚感と見えたり　○伊勢崇祕之大神、今の伊勢皇大神宮を申奉る崇祕の祕は丹本祠に作る其も聞ゆれど崇祕とあるもよく當れり　○手端吉棄物云々、正書に手足の爪を拔て墮ふとある是なり手爪は手端の吉棄物、足爪は足端の凶棄物なり、吉棄物凶棄物は惡解除善解除の本にて和世荒世の祓に當れり、棄物は祓ひ棄る物を云　○洟、字書に鼻液也とありハナタリなれど古くは之をヨタリと云しなり名義抄に洟スヽハナ、ヨタリと見ゆ　○以神逐之理逐之、通釋に理逐之に衍なり此は本神逐之神逐之と重ねて寫し譯りたる下の神字をまた理に寫し譯りて今の本の如くなりたるなりと云り　○神祝々之、以下十五字通釋には纂疏及校本に據て玉籤云々の下に收む枳々の一字峯本及續史紀略にはなし　○波羅賦、山陰云波は後の寫誤なるべし

【第三一書】安田、水旱共に安全なる田なり平田も亦同じ　○邑井田、直指云田地諸邑會祭之謂又按に邑に井びたる田か　○良田、昌本田下に處字あり　○纖田、切杙などありて

第三

一書曰、是後日神之田有三處焉、號曰天安田、天平田、天邑井田、此皆良田雖經霖旱、無所損傷、其素戔嗚尊之田亦有三處、號曰天樹田、天川依田、天口鋭田、此皆磽地、雨則流之、旱則焦之、故素戔嗚

尊妬害姉田、春則廢渠槽、及埋溝、毀畔、又重播種子、秋則捶籤、伏馬、凡此惡事曾無息時、雖然日神不惱、恒以平恕相容焉云云、至於日神開居于天石窟也、諸神遣中臣連遠祖興台産靈兒天兒屋命、而使祈焉、於是天兒屋命掘天香山之眞坂木、而上枝懸以鏡作遠祖天抜戸兒石凝戸邊所作八咫鏡、中枝懸以玉作遠祖伊斯諾尊兒天明玉所作八坂瓊之曲玉、下枝懸以粟國忌部遠祖天日鷲所作木綿、乃使忌部首遠祖太玉命執取、而廣厚稱辭祈啓矣、于時日神聞之曰、頃者人雖多請、未有若此言之麗美者也、乃細開磐戸而窺之、是時天手力雄神侍磐戸側、則引開之者、日神之光滿於六合、故諸神大喜、卽科素戔嗚尊千座置戸之解除、以手爪爲吉爪棄物、以足爪爲凶爪棄物、乃使天兒屋命掌其解除之太諄辭而宣之焉、世人愼收己爪者此其緣也、既而諸神嘖素戔嗚尊曰、汝所行甚無賴、故不可住於天上、亦不可居於葦原

危險なる田なり
○川依田、河流に傍ひて流れ易き田なり
○口鋭田、水口の鋭く急なる田なり、纂疏口の上に川字あり
○廢渠槽、ヒハカツと本注にあれど弘仁私記に比波奈津とあれば鵜は那の訛なるべし吉本丹本共に廢をハナチと訓める亦證とすべし
○捶籤、串刺にて田に串を刺し農夫を惱ましむるなり、一説には秋に至て田に札を立て他人の稻を占領する意なりとも云、捶は挿字の古體
○掘、原本握に作る類史に據て改む
○石凝戸邊、諸本石を己に作る上文に據て改む
○粟國、阿波國なり
○天日鷲、錄右京神別天語連條に神魂命七世孫天日鷲命とあり、左京多米連條にも見ゆ
○木綿、穀木の皮にて作る、穀は抄に楮穀木也和名加知とありて楮なり豐後風土記に速見郡柚富鄕此鄕之中栲樹多生常取栲皮以造木綿因曰柚富鄕とあり栲と穀は同

物なり又之をユフと稱するは齋終の義にてヲの轉にてフとなれるなり、其の說筌に詳なり
○廣厚稱辭、廣厚は懇篤なるを云稱辭は稱讃の意、類史厚を篤に作る
○引開、類史に引字なし
○手爪、丹本塩本及類史爪を抓に作る下同じ
○吉爪棄物凶爪棄物、通釋に信友校本及元々集古寫本に引るに爪字なしとて之を削る
○大諍辭、原本大を大に作る丹本島本峯本及類史紀略に據て改む諍辭に祝詞なり太を加へて太諍辭といふ太は稱讃の意ノリトは上祓詞に天津祝詞乃太詞言事、萬葉集に中臣のフトノリトコトとあり延喜式の古訓にもノリトコトと見えてノリトコトと云が正しくそれを略してノリトといへるなり言義は宣說言とあるべしよき
○無賴、史記高帝紀に見え注に多詐狡猾を謂ふとあり、私記にアヂキナシ又タノシゲナシ又サイハイナシと訓り
○宮貴、按に說文云貴和名抄雜四衣也俗用貴字、

中國宜急　適於底根之國、乃共逐降去、于時霖也、素戔嗚尊結束靑草、以爲笠蓑、而乞宿於衆神、衆神曰、汝是躬行濁惡而見逐謫者、如何乞宿於我、遂同距之、是以風雨雖甚　不得留　休而辛苦　降矣、自爾以來、世諱著笠蓑以入他人屋內、又諱負束草以入他人家內、有犯此者必債解除、此太古之遺法也、是後素戔嗚尊曰、諸神逐我、我今當永去、如何不與我姉相見而擅自徑去歟、廻復扇天扇國、上詣于天、時天鈿女見之而告言於日神也、日神曰、吾弟所以上來非復好意、必欲奪我之國者歟、吾雖姉女何當避乎、乃身裝武備云云、於是素戔嗚尊誓之曰、吾若懷不善而復上來者、吾今嚙玉生兒、必當爲女矣、如此則可以降女於葦原中國、如有淸心者、必當生男矣、如此則可以使男御天上、且姉之所生亦同　此誓、於是日神先嚙十握劍云云、素戔嗚尊乃瞿瞿然解其左髻所纏五百箇御統之瓊綸、而瓊響璫

瑲、濯浮於天渟名井、嚙其瓊端、置之左掌、而生兒正哉吾勝勝速日天忍穗根尊、復嚙右瓊置之右掌、而生兒天穗日命、此出雲臣、武藏國造、土師連等遠祖也、次天津彦根命、此茨城國造、額田部連等遠祖也、次活津彦根命、次熒速日命、次熊野大隅命、凡六男矣、於是素戔嗚尊白日神曰、吾所以更昇來者、衆神處我以根國、今當就去、若不與姉相見、終不能忍離、故實以清心復上來耳、今則奉覲已訖、當隨衆神之意、自此永歸根國矣、請姉照臨天國、自可平安、且吾以清心所生兒等亦奉於姉、已而復還降焉、廢渠槽、此云秘波鵝都、捶籤、此云久斯社志、興台產靈、此云許語等武須毗、太諄辭、此云布斗能理斗、轟轤然、此云乎謀苦留留爾、瑲瑲乎、此云奴儺等母母由羅爾、

笠毛詩注云笠所以禦雨也和名加佐とあり　○逐謫、類史遠謫に作る　○距、口訣拒に作る相通ず　○有犯此者、鹽土傳云人家諱此二者西國今尚有遺風又重胤の說に石見國鹿足郡大窪村、長門國阿武郡土居村に此遺風ありと云り　○犯、田中頼庸翁云天治本字鏡に僭僭也乎加志とあり最勝王經訓注にも侵乎加須とあり之に據るべし言海には阿行に之を出す　○遺法、通證云今按法宣（ノリハノル）也上之所宣下奉而行謂之法所謂律令格式皆是也　○扇天扇國、扇は動なり天地を震動せしむるを云　○我今、丹本我字なし　○女、私記にメノコと訓りり男はヲノコ、女はメノコと訓べし　○轟轤然、鹽土傳に瓊綸を解き曳く貝轟轤を轉ずるに比するを云とあり、ヲモは綸もなり瓊の綸を云クル、ニはクル〳〵と宛轉せしむるを云　○五百箇御統、御は峯本及元々集所引に據て補ふ　○瓊端、通釋云本にニノヲと訓たれど中又は尾に對して云事なればニノハシと訓べし　○出雲臣土師連、上に出づ　○武藏國造、舊紀に志賀高穴穗朝出雲臣祖十世孫兄多毛比命定賜國造と見ゆ　○茨城國造、茨城は常陸國茨城郡是なり舊紀に輕島豐明朝御世天津彦根命孫筑紫刀彌定賜國造と見ゆ　○額田部連、錄左京神別に天津彦根命孫意富伊我都命之後也と見ゆ　○活津彦根命、原本活の下目字あり丹本に據て削る　○次熒速日命、丹本なし下の六男をも五男とす其方正しかるべし　○熊野大隅命、楓本類史私記には隅を角に作り丹本には大隅命を栢樟日命とす　○處我以根國、通釋丹本

に據て處を遂に改む　○奉覩、禮記曲禮に諸侯北面而見天子曰覩とあり此の意にて覩の字を用ひたり　○瑣々、通釋山陰に據て瑣々の上に瑣響二字を補へり　○奴儺等毋毋出雜爾、原本奴上に乎字あり丹本に據て削る又丹本儺を難に作り一の毋字なし、私記にもヌナトモユラとあれば一は衍なるべし

【寶劍出現章】簸之川上、出雲風土記に出雲大川源は伯耆出雲二國の境鳥上峯より流るとあり又斐伊大河ともあり出雲にての大川なり斐伊郷は大原郡に屬す　○老翁、原本翁を公に作る島本及纂疏に據て改む、又按に公は翁の省略なるべし然らば原本のまゝにてもよし　○老婆、字鏡に娘（オミナ）、類聚記に嫗（オウナ）、抄に說文云嫗老女之稱也和名於無奈と見えてオミナと云るが正しく其かオウナともオムナとも音便に轉じて云るなり、オミナはヲミナに對して老女なり云　○少女、ヲトメは小都女にて少女の意　○國神、記傳云國神とは高天原にます神を天神と云に對して此國なる神を云なり　○八岐大蛇、記に高志八俣遠呂智とあり八岐は頭尾各々八岐あるを云ひヲ

是時、素戔嗚尊自天而降到於出雲國簸之川上、時聞川上有啼哭之聲、故尋聲、覓往者、有一老翁與老婆、中間置一少女、撫而哭之、素戔嗚尊問曰、汝等誰也、何爲哭之如此耶、對曰、吾是國神、號脚摩乳、我妻號手摩乳、此童女是吾兒也、號奇稲田姫、所以哭者、往時吾兒有八箇少女、毎年爲八岐大蛇所呑、今此少女且臨被呑、無由脫免、故以哀傷、素戔嗚尊勅曰、若然者、汝當以女奉吾耶、對曰、隨勅奉矣、故素戔嗚尊立化奇稲田姫爲湯津爪櫛、而挿於御髮、乃使脚摩乳手摩乳釀八醞酒、并作假廐（假廐、此云佐受枳）、八間、各置一口槽、而盛酒以待之也、至期果有大蛇、頭尾各有八岐、眼如赤酸醬（赤酸醬、此云阿箇箇鳥知）、松栢生於背上、而蔓延於八丘八谷之間、及至得酒、頭各入一槽飲醉而睡、時素戔嗚尊乃拔所帶十握劍、寸斬其蛇、至尾劍刃少缺、故割裂其尾視之、中

ロチは蛇の大なるものを云

○少女、原本少童に作る丹本及類史に據て改む

○八醞酒、幾度も造りかへせる濃き酒を云釋紀に私記曰或說一度釀熟絞取其汁棄其糟更用其酒爲汁亦更釀之如此八度是爲純酷之酒也謂之鹽者以其汁八度絞返故也今世亦謂一度便爲一鹽也謂之折者以其八度折返故也とあり原本傍訓クリはヲリの訛なり故に之を訂す

○假廢、釋紀に兼方案之今世棧敷歟とあり　○赤酸醬、抄に兼名苑云酸醬和名保々豆木とあり　○栢、抄に兼名苑云栢一名栩和名加閉とあり　○各入一槽、原本入字なし玉本に據て補ふ　○鈌、干祿字書に缺鈌上通下正とあり　○草薙劍、景行紀四十年に王所佩劍藂雲自抽之薙攘王之傍草因是得免故號其劍曰草薙也と見ゆ　○出雲之淸地、山蔭に上に既に出雲國とあれば此に又出雲といふべきあらずと云、淸は出雲風土記大原郡の條に須我山須我小川見え亦須我社と云も見ゆ井上頼圀翁云此須我社卽須賀宮の舊蹟なり往古は此社山上にありしが後世に至て今の地に移せり天文中牛尾城主信濃より來て此地を領し諏訪神を合祀し村名を諏訪村と爲しより神代以來の地名湮滅せり　○興言、諸本に興の字なし纂疏に據て補ふ　○清々之、心のはればれとしたるを云丹本纂疏には之の字なし　○則、島本峯本及類史に據て補ふ　○夜句茂多菟、八重雲起つなり　○伊都毛夜霸餓岐、出雲八重垣なり立出る雲の八重垣に似たるを云　○菟磨語味爾、令妻隱にて夫婦籠らしむる爲にの意、丹本及類史昧を味に作る　○夜霸餓枳菟俱盧、八重垣造るにて、夫婦籠る料に宮の內外の隔なる八重垣を造給ふを云　○贈迺夜霸餓岐廻、其八重垣をなり夫婦こもる爲に造る八重垣よと三句を承けて云るなりなばよと云に同じ素戔嗚尊が宮造りの際に雲の立昇るを御覽ぜられ其雲を序として八重垣造る狀態をありのまゝに歌によみ給ひしなり　○大己貴神第一の一書、第二の一書及古事記には六世の孫とあるを正書には素戔嗚尊の御子としたり大己貴の訓は私記にもオホアナムチとあれどオホナムチと訓べし

○宮首、宮の長官なり、又オビトと訓るは大人の意にて首長たる人を云

有一劍、此所謂草薙劍也、草薙劍、此云俱娑那伎能都留伎、一書曰、本名天蘇雲劍、蓋大蛇所居之上常有雲氣、故以名歟、至日本武皇子改名曰草薙劍。素戔嗚尊曰、是神劍也、吾何敢私以安乎、乃上獻於天神也、然後行覓將婚之處、遂到出雲之淸地焉、淸地、此云素鵝、乃興言曰、吾心淸淸之、此今呼此地曰淸、則於彼處建宮、或云、時武素戔嗚尊歌之曰、夜句茂多菟、伊都毛夜霸餓岐、菟磨語味爾、夜霸餓枳菟俱盧、贈迺夜霸餓岐廻、乃相與遊合而生兒大己貴神、因勅之曰、吾兒宮首者卽脚摩乳手摩乳也、故賜號於二神、曰稻田宮主神、已而素戔嗚尊遂就於根國矣、

【第一一書】簀狹、飯石

第一

一書曰、素戔嗚尊自天而降到於出雲簸之川上、則兒稻田宮主

郡須佐郷是なり
○於奇御戸爲起、通證に立爲妃也奇御戸古昔夫婦相會之處也と云り
○一云、丹本峯本一書云とし以下別行とす
【第二一書】安藝國可愛之川上、藻鹽草に石見國江川の上流なるべしと云り此川は安藝を經て石見に入り北海に注ぐ古はエノカハと云しが後に字音にてガウと唱ふるに至りしなるべし
○酒八甕、ヤハラは文字の如く八甕と云に同じ古は大なる甕に酒を醸したるなり故に甕の數によりて幾甕と數へたり
○釣、峯本敎に作る
○可畏之神、狼なるホカミと云ひ又虎神と云こと萬葉十六に蛇を夜刀神と云こと常陸風土記に見ゆ大蛇を云も此類なり
○書湯市村、尾張國愛智郡是なり
○熱田祝部云々、式に尾張國愛智郡熱田神社（名神大）とある是なり
○劍、丹本斬に作る
○蛇之麁正、通證に玉木氏の說なりて麁正は字の如く鋭利なるを云さい

簀狹之八箇耳女子號稻田媛、乃於奇御戸爲起而生兒、號清之湯山主三名狹漏彥八島篠、一云清之繫名坂輕彥八嶋手命、又云清之湯山主三名狹漏彥八嶋野、此神五世孫、卽大國主神、篠小竹也、此云斯奴、

第二

一書曰、是時素戔嗚尊下到於安藝國可愛之川上也、彼處有神、名曰脚摩手摩、其妻名曰稻田宮主簀狹之八箇耳、此神正在姙身、夫妻共愁、乃告素戔嗚尊曰、我生兒雖多、每生輒有八岐大蛇來呑、不得一存、今吾且產、恐亦見呑、是以哀傷、素戔嗚尊乃敎之曰、汝可以衆菓釀酒八甕、吾當爲汝殺蛇、二神隨敎設酒、至產時、必彼大蛇當戶將呑兒焉、素戔嗚尊勅蛇曰、汝是可畏之神、敢不饗乎、乃以八甕酒每口沃入、其蛇飲酒而睡、素戔嗚尊拔劍斬之、至斬尾時、劍刃少缺、割而視之、則劍在尾中、是號草薙劍、此今在尾張國吾湯市村、卽熱田祝部所掌之神是也、其斷蛇劍號曰

ひ通釋に蛇之明眞鋤（アカラマサヒ）なり明（アカラ）とは劍の刃の光り赫くを云鋤は眞美なりを通はせてヒとも云龕正はアカラのカミマサヒのヒを略き韓鋤はアカラのアミマサヒのマを略けるものにて共に同名也と云り

○此今在石上、丹本には此の字なく島本玉本には上の下に宮の字あり此に石上とあるは第三の一書に今在吉備神部許とあれば式に備前國赤坂郡石上布都之魂神社とある是ならむ又一說には大和國石上神宮なりとも云り尙よく考ふべし

○眞髮觸奇稻田媛、眞髮觸は櫛の枕詞なり

【第三一書】石松、石に生ひたる松を云石と松とにはあらず

○毒酒、諸の菓にて惡く醉べくつくれる酒なり葦牙にはヲエキと訓み人をして痺ゑしむる酒なりと云り

○素戔嗚尊、丹本醉而睡の下素戔嗚尊の四字なし

○蛇韓鋤之劍、纂疏に劍形韓鋤に類したるに因れりと云ひ通釋に龕正と同

蛇之龕正、此今在石上也、是後以稻田宮主簀狹之八箇耳生兒、眞髮觸奇稻田媛、遷置於出雲國簸川上而長養焉、然後素戔嗚尊以爲妃而所生兒之六世孫、是曰大己貴命、大己貴此云於褒婀娜武智、

第三

一書曰、素戔嗚尊欲幸奇稻田媛而乞之、脚摩乳手摩乳對曰、請先殺彼蛇、然後幸者宜也、彼大蛇每頭各有石松、兩脇有山、甚可畏矣、將何以殺之、素戔嗚尊乃計釀毒酒以飲之、蛇醉而睡、素戔嗚尊乃以蛇韓鋤之劍、斬頭斬腹、其斬尾之時、劍刃少缺、故裂尾而看、卽別有一劍焉、名爲草薙劍、此劍昔在素戔嗚尊許、今在於尾張國也、其素戔嗚尊斷蛇之劍、今在吉備神部許也、出雲簸之川上山是也、

第四

一書曰、素戔嗚尊所行無狀、故諸神科以千座置戶而遂逐之、是時、素戔嗚尊帥其子五十猛神、降到於新羅國、居曾尸茂梨之處、乃

興言曰、此地吾不欲居、遂以埴土作舟、乘之東渡、到出雲國簸川上所在鳥上之峯、時彼處有呑人大蛇、素戔嗚尊乃以天蠅斫之劍、斬彼大蛇、時斬蛇尾而及缺、卽擘而視之、尾中有一神劍、素戔嗚尊曰、此不可以吾私用也、乃遣五世孫天之葺根神上奉於天、此今所謂草薙劍矣、初五十猛神天降之時、多將樹種而下、然不殖韓地、盡以持歸、遂始自筑紫、凡大八洲國之內莫不播殖而成青山焉、所以稱五十猛命爲有功之神、卽紀伊國所坐大神是也、

第五

一書曰、素戔嗚尊曰、韓鄕之嶋、是有金銀、若使吾兒所御之國、不有浮寶者、未是佳也、乃拔鬚髯散之、卽成杉、又拔散胸毛、是成檜、尻毛是成柀、眉毛是成樟、已而定其當用、乃稱之曰、杉及樟此兩樹者可以爲浮寶、檜可以爲瑞宮之材、柀可以爲顯見蒼生奥津棄戸將臥之具、夫須噉八十木種皆能播生、于時素戔嗚尊之子、號

意なりと云
○吉備神部、式に備前國赤坂郡石上布都之魂神社是なり神部は祝部と云も同じ
○出雲云々、松下見林此九字は衍文なりとし、通證には今按或曰春日所藏古本出雲上有其斬二大蛇一之地則七字と云り通釋は纂牙故通證に據て此七字を補ふ
【第四一書】五十猛神、イツタケルと讀みたれど、イタケルと讀むを正しとす紀伊國名草郡伊太祁曾神社（名神大月次祭新嘗）は此神を祀る
○皆尸茂類、通證に見林曰高麗國有蘇志摩利或云蘇尼毋一書素戔嗚尊所作樂也遺音載在仁智要錄云々とありツシモリは韓鄕牛頭の意今江原道春川牛頭山あり卽其地なりと云
○鳥上之峯、出雲風土記に見ゆ、仁多郡にあり世に蛇遺山と云簸川の上流なり
○蠅斫之劍、給鑑に天十握劍其名天羽々斬古語大蛇謂之羽々言斬蛇尾也とあり蠅は羽々と同く蛇を

曰五十猛命、妹大屋津姫命、次抓津姫命、凡此三神亦能分布木種、卽奉渡於紀伊國也、然後素戔嗚尊居熊成峯而遂入於根國者矣、葉戸此云須多杯、被此云磨紀、

第六

一書曰、大國主神、亦名大物主神、亦號國作大己貴命、亦曰葦原醜男、亦曰八千戈神、亦曰大國玉神、亦曰顯國玉神、其子凡有一百八十一神、夫大己貴命與少彦名命、戮力一心、經營天下、復爲顯見蒼生及畜産、則定其療病之方、又爲攘鳥獸昆虫之災異、則定其禁厭之法、是以百姓至今咸蒙恩賴、嘗大己貴命謂少彦名命曰、吾等所造之國、豈謂善成之乎、少彦名命對曰、或有所成、或有不成、是談也、蓋有幽深之致焉、其後少彦名命行至熊野之御碕、遂適於常世鄕矣、亦曰、至淡嶋而緣粟莖者、則彈渡而至常世鄕矣、自後國中所未成者、大己貴神獨能巡造、遂到出雲國、乃興言曰、夫葦原中國本自荒芒、至及磐石草木咸能强

云峯本之字なし
○天之葦根神、記に天之冬衣神とあると同神なり
○上奉、丹本上字なし
○有功之神、經營の功あるを云
○紀伊國所坐大神、上に見えたる伊太祁曾神社是也
【第五一書】韓鄕之嶋、三韓地方を云
○浮寶、船を云
○鬚髯、丹本峰本及紀略鬢髯に作る
○杉、類史松に作る
○被、今の草被なるべし
○被可以爲云々、諸書何れも棺槨の事としたるを重胤は奥津は家宅の奥方にて内寢をいひ棄戸は簀子の上にて簀上なり瑞宮に對して天下人民の家宅を作る料に具へさせ給へるなりと云り
○大屋津姫命抓津姫命、式に伊太祁曾神社に竝びて大屋都比賣神社（名神大月次相嘗新嘗）都麻都比賣神社（名神大月次新嘗）見ゆ
○熊成峯、ワニナリと訓めるは非なり、記傳にクマナスと訓みナスはヌと同じく熊野の事なりと定

めたれど是もいかゞあらむ通釋には祕閣本にクマナリと訓るに從ひ後の考を俟つと云り

【第六一書】大國主神亦名云々、此に七名を擧たるが記には大物主神と大國玉神とを除きて幷有五名と云り

○葦原醜男、記に葦原色許男神とあり此に神とも命ともなきは脫たるならむ

○少彦名命、播磨風土記に少比古尼命とありされば名は尼と同じく尊稱か

○禁厭、マジナヒヤムルと訓り、マジナヒに厭の字を充てたるは史記の注に厭禳也とあり妖邪の氣に魅ぜられたるを禳ふ意なるべしマジは大祓詞に蠱物とあり御門祭詞に麻自許利とあるマジと同じく交はる意ナヒはウラナヒ、マカナヒなどのナヒと同じく其事を爲るをいひ禁は禁止にて止むる意なり私記にエムシヤムルと訓るエムシは厭爲にて字音によれるか古言にはあらざるべし

○愚頑、ミタマノフユは通證に御賜之殖（フユル也

暴然吾已摧伏莫不和順、遂因言、今理此國唯吾一身而已、其可與吾共理天下者、蓋有之乎、于時神光照海、忽然有浮來者、曰、如吾不在者、汝何能平此國乎、由吾在故、汝得建其大造之績矣、是時大己貴神問曰、然則汝是誰耶、對曰、吾是汝之幸魂奇魂也、大己貴神曰、唯然、廼知汝是吾之幸魂奇魂、今欲何處住耶、對曰、吾欲住於日本國之三諸山、故卽營宮彼處、使就而居、此大三輪之神也、此神之子、卽甘茂君等、大三輪君等、又姬踏鞴五十鈴姬命、又曰、事代主神化爲八尋熊鰐、通三嶋溝樴姬、或云玉櫛姬、而生兒姬蹈鞴五十鈴姬命、是爲神日本磐余彥火火出見天皇之后也、初大己貴神之平國也、行到出雲國五十狹狹之小汀而且當飲食、是時海上忽有人聲、乃驚而求之、都無所見、頃時有一箇小男、以白蘞皮爲舟、以鷦鷯翅爲衣、隨潮水以浮到、大己貴神卽取置掌中而翫之、則跳囓其頰、乃怪其物色、遣使曰於天神、于時高皇產靈尊聞之

と云ひ伴信友の説に神靈の威を震ひて殊更に幸ひ給ふを辱みたゝへて云るなりと云り

○是談也云々、通釋に後人傍注の攙入なりとあれど諸本いづれもあれば輙く捨難し

○熊野之御碕、出雲國なり

○常世國、此は外國を云

○淡島、伯耆國相見郡なり伯耆風土記に見ゆ

○荒芒、淮南子に見ゆ荒茫に同じく注に上古時也とあり

○大造之績、左傳成十三年に大造の文字見え注に造成也とあり大成に同じ績は功なり　○幸魂奇魂、數説あり一に幸魂奇魂は魂魄なりと云(纂疏)又奇魂は和魂幸魂は荒魂なりと云(通證集解)或は共に和魂にて其德用をいふ幸魂は其身を守りて幸あらしむるをいひ奇魂は奇しき德を以て萬事を識別し事業を成さしむる故の名なりと云り(記傳)　○日本國之三諸山、日本は五畿內の大和國、三諸山は三輪山なり　○大三輪之神、式に城上郡大神大物主神社(名神大月次相嘗新嘗)とあり貞觀元年二月正一位を授奉る　○甘茂君等、錄大和神別に賀茂朝臣大神朝臣同祖大國主神之後也と見ゆ　○白蔹皮、本草和名に藤摩子一名芄蘭和名加々美、抄に本草云白蔹和名夜末賀々美、徐長卿比女加々美、白前能加々美とあり物類稱呼に實は細長く三四寸有て糸瓜に似たり秋末熟して二つにわれ中より綿の如き物出る其殼は舟によく似たるものなりとあり　○鷦鷯、抄に和名佐々岐文選鷦鷯小鳥也とあり俗にミソサゞイと云極めて小き鳥なり　○物色、後漢書の注に物色謂形狀也とあり　○拖磨、丹本陀摩に作る　○娑、類史沙に作る

而曰、吾所產兒凡有一千五百座、其中一兒最惡、不順教養、自指間漏墮者必彼矣、宜愛而養之、此卽少彥名命是也、顯此云于都斯、蹈鞴此云多多羅、幸魂此云佐枳彌多摩、奇魂此云倶斯美拖磨、鷦鷯此云娑々岐、

日本書紀卷一

【天孫降臨章】大神、原本大を太に作る丹本及紀略に據て改む
○天津彦々火瓊々杵尊、他書眞柴の說に此は天津彦尊と稱すと彦火瓊々杵尊と申奉ると二名なりしを一つに連れて語傳へたるを書紀に其儘採られたるなりと云り天津彦は天津日子にて天津日神の御子の意彦火瓊々杵尊は稚穗に因れる御名にて穗之丹饒の意なり
○特鍾憐愛、私記に於支呂米久志止於毛不美已々呂乎安津女天と訓り按に於は和の訛にて別きてなるべし別きてめぐしと思ほす御心を皇孫命に鍾め給ふ由なり鍾をオキテと訓るは恐らくはワキテの誤にて殊の字の傍にあるべきを誤りて鍾の傍訓としたるものなるべし

日本書紀卷第二

神代下

天照大神之子正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊、娶高皇産靈尊之女栲幡千千姫、生天津彦彦火瓊瓊杵尊、故皇祖高皇産靈尊、特鍾憐愛、以崇養焉、遂欲立皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊、以爲葦原中國之主、然彼地多有螢火光神及蠅聲邪神、復有草木咸能言語、故高皇産靈尊召集八十諸神、而問之曰、吾欲令撥平葦原中國邪鬼、當遣誰者宜也、惟爾諸神勿隱所知、僉曰、天穗日命是神之傑也、可不試歟、於是俯順衆言、卽以天穗日命往平之、然此神佞媚於大己貴神、比及三年、尙不報聞、故仍遣其子大背飯三熊之大人、大人、此云于志、亦名武三熊之大人、此亦還順其父、遂不報聞、故高皇産靈尊更會諸神、問

○崇養、原本養を美に作るは養の省文なり丹本寮本楓本及類史等に據て改む崇をカタテと訓るは語義未詳、ヒタシは日足しなること上に述べたるが如し

○皇孫、スメミマと訓べしスメは天皇命のスメに同じくミマは御眞子なり

○螢火光神、記傳云蠅聲邪神をサバヘナスと訓るに對へてホタルナスと訓べし

○蠅聲、サバヘナスは如二五月蠅一なり

○撥平、字書に撥は治也除也とあり邪神を拂除きて平ぐるを云

○邪鬼、邪神なり支那にては神靈を神祇鬼と三つに區別す鬼をモノと訓るは萬葉にも例ありモノ、ケのモノも亦同じ

○惟爾、ネガハクハイマシとあるは私記の訓なり願くは汝なり

○神之傑、淮南子に智過二十人一者謂二之傑一とあり、イサヲと訓るは勇者の意にて勇氣勝れたるを云

○俯順、俯は依の誤かと云說あれどそれも穩なら

當遣者、僉曰、天國玉之子天稚彥、是壯士也、宜試之、於是高皇產靈尊賜二天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢一以遣之、此神亦不忠誠也、來到卽娶二顯國玉之女子下照姬、亦名高姬、亦名稚國玉、因留住之曰、吾亦欲レ馭二葦原中國一、遂不レ復二命一、是時高皇產靈尊恠二其久不來報一、乃遣二無名雉一伺之、其雉飛降止二於天稚彥門前所レ植槇、此云二多底婁一、湯津杜木之杪、杜木、此云二可豆邇一、時天探女、此云二阿麻能左愚謎一、見而謂二天稚彥一曰、奇鳥來居杜杪、天稚彥乃取二高皇產靈尊所賜天鹿兒弓天羽羽矢一、射雉斃之、其矢洞達雉胸而至二高皇產靈尊之座前一也、時高皇產靈尊見二其矢一曰、是矢則昔我賜二天稚彥一之矢也、血染二其矢一、蓋與二國神一相戰而然歟、於是取レ矢、還投下之、其矢落下、則中二天稚彥之胸上一、于レ時天稚彥新嘗休臥之時也、中レ矢立死、此世人所謂反矢可レ畏之緣也、天稚彥之妻下照姬哭泣悲哀聲達二于天一、是時天國玉聞二其哭聲一、則知二夫天稚彥已死一、乃遣二疾風舉レ尸致レ天、便造二喪屋一而殯之、卽以二川鴈一爲二持傾頭者及持帚者一、一云、以レ雞爲二持傾頭者一、以二川雁一爲二持帚者一、又以雀爲春

すもものまゝにてあるべし

○此神後嗣云々、出雲國造神賀詞に天穗比命乎國體見爾遣時爾云々國作之大神乎毛媚鎭天大八島國現事顯事令事避支とあり後には復命せられしなり

○大背飯三熊之大人、天夷鳥命と同神なり又稱背醒とも云遷却崇神詞には健三熊之命とあり

○亦名云々、此八字原本本文とす墓疏蕪鹽草等に據て分注とす

○天國玉、記に天津國玉神とあり

○天稚彦、神となきは不忠なりし故に擯斥したるなり式には出雲國に天若日子神社二座見ゆ

○天鹿兒弓及天羽々矢、天稚彦は第二回の御使にて將軍として下らしめ給ひしなり故に其證として弓矢を賜ひ討伐の權を附し給へり鹿兒弓は鹿を射るに用る大なる弓、羽々矢は羽張矢にて羽の廣く大なる矢なり云

○瑞國玉、大國主神の一名なり

○無名雉、記に雉名鳴女、一云、乃以川雁爲持傾頭者、亦爲持帚者、以鶺鴒爲戶者、以雀爲舂女、以鷦鷯爲哭者、以鴟爲造綿者、以烏爲宍人者、凡以衆鳥任事、而八日八夜啼哭悲歌、先是天稚彦在於葦原中國也、與味耜高彦根神友善、味耜、此云阿豆須岐、故味耜高彦根神昇天弔喪、時此神容貌、正類天稚彦平生之儀、故天稚彦親屬妻子皆謂吾君猶在、則攀牽衣帶、且喜且慟、時味耜高彦根神忿然作色曰、朋友之道理宜相弔、故不憚汚穢遠自赴哀、何爲誤我於亡者、則拔其帶劍大葉刈、刈、此云我里、亦名神戶劍、以斫仆喪屋、此卽落而爲山、今在美濃國藍見川之上喪山是也、世人惡以生誤死此其緣也、是後高皇產靈尊更會諸神、選當遣於葦原中國者、僉曰、磐裂磐裂、此云箇播裂根裂神之子、磐筒男磐筒女所生之子、經津主神、經津、此云賦都、是將佳也、時有天石窟所住神稜威雄走神之子甕速日神、甕速日神之子熯速日神、熯速日神之子武甕槌神、此神進曰、豈唯經津主神獨爲丈夫、而吾非丈夫者哉、其辭氣慷慨、故以卽配經津主神、令平葦原中國、二神於是降到出雲國五十田狹之小汀、則拔十握劍、倒植於地、

とあり賤しくして名も無きを云か

○湯津杜木、記に湯津楓とあり抄に楓をヲカツラ桂をメカツラと訓り記傳云湯津は五百箇にて枝の繁きを云楓は賀茂祭に用るかつらなり桂は所謂肉桂なり但し今世に多夫と云木あり桂に似たり古は之をも桂と呼びしなるべしさて此にあるは楓か桂か何れかと云に記に香木とも書き中昔の書までに人の門又庭などに在しを思ふに桂の方なるべしと云り杜の字に就ては公望私記に案杜與レ桂相近可レ爲レ誤也加之杜字都無二加津良之訓一也と云ひて桂の誤とすれど杜は古くより森にもサカキにもカツラにも通じて用ひたるにて桂の誤にはあらず

○杪、字書に木細枝也木末也とあり

○(注)可豆邏、原本此下に也の字あり丹本寮本等に據て削る

○天探女、龍熙近の說に探二他心一多二邪思一也とあり

○新嘗休臥之時也、新嘗して直會の酒に醉て臥せ

踞(ウチアグミニキテ(イ私))其鋒端(サキニ)而問(トヒテ)二大己貴神一(ノ ニ ノク)曰、高皇產靈尊(タカミムスビノミコト)欲(オボス)降(クダシマツリナ)二皇孫君一(スメミマノキミトシ玉ハムト コノクニ)臨(ノゾミ)此地(ココ)、故先遣(カレマヅツカハ)我二一神(ワレフタハシラノカミナ)駈除(ハラヒシヅメシム(私))平定(ムケシム)、汝意何如(イマシガコヽロイカニサリマツラムヤイナヤト云ニ)、當須避不、時大己貴神(コノ ニ ノ ノ カミ)對曰、當問(ヒテガ)我子(コニシカシテニカヘリコトモサム)、然後將報(コノトキニソノコトシロヌシノカミ)、是時其子事代主神(アルキテイマス)遊行(ユキテ(私))在於(ニ)出雲國三穗(ノノミホノ)三穗、此云二美保一之碕(サキニ)、以釣魚爲樂(テツリスルヲワザトアルニクトリノアソビヲ)、或曰、遊鳥爲樂(ワザトカレ)、故以熊野(クマノ)、諸手船(モロタフネ)、亦名天鳥船(アミツカフネ(丹))、載(ノセテ)使者稻背脛(ツカハシテハギヲ)遣之、而致(イタシ)高皇產靈尊勅(タカミムスビノミコトノリチ)於事代主神(ニ)、且問(カツハフカヘリコトモサムコトバナニ)將報之辭(マタ(私))、時事代主神謂(カタリテ)使者(ツカヒニ)曰、今天神(ノ)有(リ)此借問之勅(トヒ玉フミコトノリワガ)、我父宜(カゾヨロシク)當奉避(サリマツルベン)、吾亦不可違(タガヒマツラジ)、因於海中造(カニツクリテヤ)八重蒼柴籬(ヘアヲフシガキヲ)、柴、此云二府璽一(フミテ)蹈(フナヘヲ)船枻(船枻、此云二浮那能倍一)而避之、使者既還報命(ツカヒカヘリコトヲスカレ)、故大己貴神則以其子之辭(ノ ソノコノマヲスコトヲ)白於(ニ)一神曰、我怙之子既避去矣、故吾亦當(ワガタノメシコダニモサリマツリメカレアレヲサリ)避(マツルベシ)、如吾防禦者(ホセガマシカバクニノウチノモロカミタチカナラズ)、國內諸神必當同禦(マサニオナジクホセギテム)、今我奉避(イマワレサリマツル)、誰復敢有(タレカタアヘアラム)不順者(ロハヌモノ)、乃以平國時所杖之廣矛(チクニムケシトキニツケリシヒロホコヲ)授二一神一(サヅケ奉リテフタハシラノカミニノ)曰、吾以此矛(アレコノホコヲ)卒有治功(ツヒニアリトセルコト)、天孫若用此矛(アメミマモシテコノホコヲ)治(テサメ玉ハ)國者(クニヲ)、必當平安(カナラズサキクマシマサム)、今我當於百不足之八十隈(ワレマサニモヽズクタヤソクマニ)將隱(カクレ)去矣(ナム)、隈、此云二矩磨濃一(クマノ)、言訖(イヒテハリテツヒニ)遂隱(マカリマシヌコ)、於是(ニ)一神(フタハシラノカミ)誅(ツミナヒテ)諸不順鬼神等(ノ)(一云、一神遂誅邪神及草木石類皆已平了、其所不服者、唯星神香々背男耳、故加遣倭文神建葉槌命者則服、故二神登天也、倭文神此云二斯圖梨俄一)、果以復命(ツヒニテカヘリゴトノナス)、于時高皇產靈尊(ノ)以

りし時なるべし記に寢胡床とありアグラは上げ床なり今の長崎子の如き狀に作れるものか寢るには枕を用ひて頭の方高く胸は坂の如くなれる故に高胸坂に中りて死すと云るなり

○反矢可畏之緣、日訣云軍箭入之時敵射返其矢剛失利作山鳥鵰鷲蜂熊箭以篤密之爲儀也、薄鹽章云是後世弓道ニ鳴弦蓋目チ修シテ百千里外ノ彖敵邪神ナ射斃ス神術ノ根源也

○哭聲、オラブは叫ぶに同じ聲を揚て哭くなり

○疾風、ハヤは風力の速きを云チは風なり東風のチに同じ降紀に兼方案疾風者速風神也とあり

○喪屋、記傳云屍ヲ斂め留て其事を行ふ處なり

○殯、モガリは喪上りなり上りは天皇の崩御を神上りと申すより轉りて凡人の喪にてすることをも上りすと云なり

○川鴉、常の鴉ヲ云

○持傾頭者、又記目葬送之時觸死者食片行之人也

○春女、稻を舂く女を云

眞床追衾覆於皇孫天津彦彦火瓊瓊杵尊使降之、皇孫乃離天磐座、天磐座、此云阿麻能以簸矩羅、且排分天八重雲、稜威之道別道別而天降於日向襲之高千穗峯矣、既而皇孫遊行之狀者、則自槵日二上天浮橋、立於浮渚在平處、立於浮渚在平處、此云羽企爲磨梨陁毗逗而陁々志、而膂宍之空國、自頓丘國覓行去、頓丘、此云吡陁烏、覓國、此云矩貳磨儀、行去、此云逐麼麗、到於吾田長屋笠狹之碕矣、其地有一人、白、號事勝國勝長狹、皇孫問曰、國在耶以不、對曰、此焉有國、請任意遊之、故皇孫就而留住、時彼國有美人、名曰鹿葦津姬、亦名神吾田津姬、亦名木花之開耶姬、皇孫問此美人曰、汝誰之女子耶、對曰、妾是天神娶大山祇神、所生兒也、皇孫因而幸之、卽一夜而有娠、皇孫未之信曰、雖復天神何能一夜之間令人有娠乎、汝所懷者必非我子歟、故鹿葦津姬忿恨、乃作無戶室入居其內、而誓之曰、妾所娠、若非天孫之胤必當燒滅、如實天孫之胤火不能害、卽放火燒室、始起烟、末生出之兒、號火闌降命、是隼人等始祖也、火闌降、此云褒能須須美、次避熱而居生出之兒、號彦火火出見尊、次生出之兒、號

火明命、是尾張連等始祖也、凡三子矣、久之天津彦彦火瓊瓊杵尊崩、因葬筑紫日向可愛之山陵、

○鵠、抄に鵠小鳥也色青翠而食魚和名曾比とあり今世に川セミと云鳥なり

○尸者、數説あり私記に死人ニカハリテモノクラフ人ナリ、口訣に著死衣而謁弔とあり又一説に尸祝の義死者を祭る者を云ともあり尸者は記には見えず記傳に云るが如く疑はしきものなり　○哭者、記に哭女とあり其の意なり通證に紀熊野若家有死者傭饒舌婆子令之哭告鄉黨隨價高低有哭泣輕重と見え朝鮮には今も葬列に哭女あり予も嘗て之を實見せり　○潰綿者、釋紀に私記曰令以綿漬水沐浴於死者之人、纂疏に制殺死者之衣者とあり此者も記には見えず　○宍人、釋紀に私記曰庖丁之類也とあり　○八日八夜、こゝには八日八夜とあれど鎭火祭祝詞、天孫本紀、靈異記等多くは七日七夜とあり　○容貌、楓本にカホカタチ丹本にカホバセ又カタチと訓めり、通釋に楓本の訓に從ふべしと云り　○親屬、私記にウカラヤカラと訓り、重胤の説に父母兄弟妻子卽ち六親と云限はウカラなりヤカラは外家遠族の類を云とあれどこゝは近親を廣くさしたるなり但しチ、ハ、ウカラヤカラと訓る父母は重複にて用なし葦牙にはウカラとのみ訓り　○攀牽、楓本の訓に從ふべし　○汚穢、古は死穢を最も忌嫌へり故に汚穢を憚らずして云々と云り原本汚を汙に作る丹本寮本峯本に據て改む　○赴、原本起に作る諸本及類史に據て改む　○哀、通釋は類史環翠軒本に據て喪に改む　○大葉刈、記に大量とあり　○神戸劍、記に神度劍とあり出雲國に神門郡あり此地名によりて名つたるか又式に越中國新川郡神度神社あり此國古より刀劍の良工を出す亦故あるか考ふべし　○斫仆、丹本玉本仆を臥に作る　○喪山、大矢田神蹟考(三浦千春)に美濃國武儀郡大矢田村にありと云り　○是後、丹本紀略是の字なし　○此神、向本なし　○五十田狭之小汀、記に伊那佐之小濱とあり今の枠築町の海濱の舊名なり　○踞其鋒端、記に趺坐其劍前とありウチアグミと訓めるは記の文に據れり足を組むを云私記にシリウタゲとあるは臀打上げにて腰を懸くるを云　○當須遣不、島本峯本不を否に作る　○三穗之碕、風土記に島根郡美保鄉あり其地なり今美保關と云　○或云以下六字、水本云疑當小書分注　○鳥遊、鳥を射る事を云　○熊野諸手船、史傳云出雲國熊野にて作れる船なるべし諸手船とは幾多の水手の諸手にて漕ぐ如く行くことの速なる船を云　○鴟船、原本鳩船に作る諸本に據て改む鴟船と云るも行くことの速なるを云　○高皇產靈尊、尊は玉本に據て補ふ　○借問、問ひ試むるを云　○八重蒼柴籬、幾重にも圍みたる柴垣を云蒼は柴の色の青きを云　○蹈船枻而避之、記に蹈傾其船而隱也とあり船端を踏傾けて蒼柴垣の內に隱れ給ひしを云船を踏傾くるは再之を用ひざる意を示されしなり　○我怙之子、俗に力に爲る又賴みに思ふ子など云に同じ　○所杖之廣矛、葦齋云廣矛謂廣刃之矛也　○百不足之八十隈、百不足は八十の枕詞八十隈は多くの隈々を經て行く遠き處を云但し其實は天日隅宮に鎭まらせ給ふを云　○(注)星神香々背男、第二の一書に見ゆ參考すべし　○倭文神、倭文は文布とも書けり布に青筋あるを云此神倭文を作ることを掌られし故に倭文神と云　○健葉槌命、式に大和國葛下郡葛木倭文坐天羽雷命神社(大月次新嘗)あり此神を祭る　○眞床追衾、衾は床に臥す時に覆ふものなり故に眞床覆ふ衾と云追は借字なり　○離天磐座、磐座は天上の玉座なり磐は堅固にして動かざるを云　○日向襲之高千穗峯、今の大隅國囎唹郡霧島山なり襲之高千穗峯の霧島山なる事は高千穗峯考(矢野玄道翁)高千穗峯考(六人部是香)等に詳なり　○槵日二上、高千穗峯は第二の一書に日向槵日高千穗之峯第四の一書には高千穗槵日二上峯とあり第二の一書には高千穗槵觸之峯ともあり何れも同じことにてクシヒは奇びなり此山は靈山にて奇びなる事多きより云るなり二上は東峯西峯相竝び立てるを云　○立於浮渚在平處、浮渚は本注にウキシマリと訓り記には假字にて宇岐士摩理と書り渚は字書に小洲也とあり浮渚は浮洲にて浮島を云るか平處は平坦なる地にて浮島の如くなる平なる處に立してなるべし　○磐肉也空國、口訣に荒芒地纂疏に膏脊也脊上無肉故稱空國曰磐肉也空國則不毛之地とあり　○頓丘、山脉の續きてひたすらに岡なるを云　○吾田長屋笠狭之碕、吾田は薩摩國阿多郡阿多鄉是なり古は吾田國とも云て此邊の地を廣く指て云り今の所謂阿多半島の地域を云長屋は今の長永山のある邊を云ひ笠狭は河邊郡加世田鄉と云し地是なりと云　○事勝國勝長狭、第四の一書に亦名鹽土老翁とあり　○任意遊之、皇孫の御意のまゝに行幸ましませとなりミタセは海宮の章に來をミタセ天武紀元年に進行をミタスルと訓みたれば

第一

一書曰、天照大神勅天稚彦曰、豐葦原中國、是吾兒可王之地也、然慮有殘賊强暴横惡之神者、故汝先往平之、乃賜天鹿兒弓及天眞鹿兒矢、遣之、天稚彦受勅來降、則多娶國神女子、經八年無以報命、故天照大神乃召思兼神、問其不來之狀、時思兼神思而告曰、宜且遣雉問之、於是從彼神謀、乃使雉往候之、其雉飛下居于天稚彦門前湯津杜樹之杪而鳴之曰、天稚彦何故八年之間未有復命、時有國神號天探女、見其雉曰、鳴聲惡鳥在此樹上可射之、天稚彦乃取天神所賜天鹿兒弓天眞鹿兒矢便射之、則矢達雉胸、遂至天神所處、時天神見其矢曰、此昔我賜天稚彦之矢也、今何故

【第一一書】王、丹本私記主に作る　○殘賊强暴、チハヤフルは殘賊逸振なりフルは其狀を云普通に拘らず威德の奇しく猛きを云るなり殘賊は殘は賊也又惡也とあり賊は劫人也又傷害也とありて惡にして人を害するを云　○天眞鹿兒矢、鹿を射るに用る矢なり、上に羽々矢とあるに同じ　○假、ミシムは令見なり　○故、丹本なし

○昔、イムサキは往イニシ前サキなり　○我、丹本になし

來又は行の字の古言なり　○天神娶大山祇神所生、丹本鴨本風本大の字なし大山祇神にても山祇神にても天神娶の三字闕えず、平田翁所藏校本に此三字なしと雖諸本何れも同じければ姑く舊に依る、大山祇神の當昔の所在に就き通釋に式にいはゆる伊豫國越智郡大山積神社（名神大）是其御座所なりしなるべしと云りさもあるべし　○無戸室、文字の如く出入する戸口なき室なり云々は虛空の義なり　○大綱降命、ホホツリノミコトと訓べし　○始祖、丹本には始の字なし　○崩、カムアガリは神上りなり御靈の天上に還上らせ給ふを云崩は書記崩御に天子死曰崩とあり　○可愛之山陵、諸陵式に埃山陵とあり其御所在は神代三陵志（後醍院御桂）に今薩摩國高城郡水引郷宮内村なりと云ひ此處に確定せらる山陵の文字は文選西都賦注に三秦記曰名天子冢曰長山漢曰陵故通名山陵と見え喪葬令義解に帝王墳墓如山如陵故謂之山陵とありミサ、キのキは城にて屍を葬る域の意御小城の義なりと云　○葬、ヲサメマツルと訓み又ハフリマツルとも訓りヲサメは藏めにてハフリは葬りなり藏めは土中に藏むるを主とし葬りは葬送の事を營むと土中に藏むると相互りて云るなり

○呪、重胤云、ホキテはホサキテの略なり善惡に通じて云何れも祈る意ありネキテと有も理有に似たり通釋は記傳に據てトコヒと訓り
○當遭害、藻鹽草に當遭害ハ厭(マジナヒ殺サレムト云ヘル義也とあり
○柩、カバネと訓るは禮記曲禮に在レ牀曰レ尸在レ棺曰柩とあるによれるなるべし
○大臨、左傳宣十二年注に臨哭也、文選の注に臨謂俯屍哭也とあり親しく見て哭するを云ミナキは見泣なりミネも同し
○恰、原本拾に作る寮本島本峯本及類史に據て改む通釋云ヒトシクニタリにては同言重れりアタカモと訓べしノレリはニレリと云も同じ似るをナスともニスノスとも云ひ又ノルともレレリとも活けるなり
○吾君猶在、アガシナキハとあるは解し難し楓本には君の傍にシナキとのみあり按にシナデの誤にてアガキミハシナデナホマシ〳〵ケリの誤なるべし丹本在の上に存字あり

來、乃取レ矢而呪之曰、若以惡心射者、則天稚彥必當遭害、若以平心射者則當無恙、因還投之、卽其矢落下中于天稚彥之高胸、因以立死、此世人所謂返矢可畏之緣也、時天稚彥之妻子從天降來、將レ柩上去而於天作喪屋殯哭之、先是天稚彥與味耜高彥根神友善、故味耜高彥根神登天弔喪大臨焉、時此神形貌自與天稚彥恰然相似、故天稚彥妻子等見而喜之曰、吾君猶在、則攀持衣帶不可排離、時味耜高彥根神忿曰、朋友喪亡、故吾卽來弔、如何誤死人於我耶、乃拔十握劍斫倒喪屋、其屋墮而成山、此則美濃國喪山是也、世人惡以死者誤己、此其緣也、時味耜高彥根神光儀華艷映于二丘二谷之間、故喪會者歌之曰、或云、味耜高彥根神之妹下照媛、欲令衆人知映丘谷者、是味耜高彥根神、故歌之曰、

阿妹奈屢夜、乙登多奈婆多廼、汙奈餓勢屢、多磨廼彌素磨屢廼、阿奈陀磨波夜、彌多爾輔陁和拖邏須、阿泥素企多伽避顧禰、又歌之曰、阿磨佐箇屢、避奈菟謎廼、以和多邏素西渡、以嗣箇播

○笠曰、向本島本玉本此二字の下に闕の字あり
○華、原本花に作る丹本寮本國本等に據て改む
○妹、通證云本にはイロトと訓めれど記傳の說によりてイロネと訓べし
○媛、舊本國本媛に作る
○河曰、書紀也云々、天なる處曙曙の頃に點る御統の玉の光澤あるが如く二つの谷に光かゞやく味鋤高彦根神ぞと其容儀の華麗なることを稱讃したる歌なり記には多嗼迦淤美豆奴神遇の間の間に美蘇夜那美の四字加はり結句多伽弖繼繼の次に迦微誓也の四字加はれり
○河曰、倭姫命世紀云々、天雖に考の吐詞なり高の女の義なる瀰門の石川の片淵に網を張りたるに魚網の目の良き爲に魚の良く寄來るやうにと云て思ふ人の片よりに吾方へ來れかしと云るにてこゝには關係なき歌なり戈曲と稱して前の歌と共に樂府にて謠ひしよりこゝに出ぜるものと見えたり記には此歌を載せず
○夷曲、歌の曲名なり歌謠に夷女の云々とあるに

箇拖輔智、箇拖輔智爾、阿彌播利和拖嗣、妹慮豫嗣爾豫嗣豫利據禰、以嗣箇播、箇拖輔智、此兩首歌辭今號夷曲、既而天照大神以思兼神妹萬幡豐秋津姬命、配正哉吾勝々速日天忍穗耳尊爲妃、令降之於葦原中國、是時勝速日天忍穗耳尊、立于天浮橋而臨睨之曰、彼地未平矣、不須也頗傾也、凶目杵之國歟、乃更還登、具陳不降之狀、故天照大神復遣武甕槌神及經津主神、先行驅除、時二神降到出雲、便問大己貴神曰、汝將此國奉天神耶、以不、對曰、吾兒事代主射鳥遊遊、在三津之碕、今當問以報之、乃遣使人訪焉、對曰、天神所求、何不奉歟、故大己貴神以其子之辭報乎二神、二神乃昇天復命而告之曰、葦原中國皆已平竟、時天照大神勅曰、若然者方當降吾兒矣、且將降間、皇孫已生、號天津彦々火瓊々杵尊、時有奏曰、欲以此皇孫代降、故天照大神乃賜天津彦々火瓊々杵尊、八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍、三種寶物、又以中

臣上祖天兒屋命、忌部上祖太玉命、猨女上祖天鈿女命、鏡作上祖石凝姥命、玉作上祖玉屋命、凡五部神使配侍焉因勅皇孫曰、葦原千五百秋之瑞穗國、是吾子孫可王之地也、宜爾皇孫就而治焉行矣、寶祚之隆當與天壤無窮者矣、已而且降之間、先驅者還白、有一神居天八達之衢、其鼻長七咫、背長七尺餘、當言七尋、且口尻明耀、眼如八咫鏡而赫然似赤酸醬也、卽遣從神往問、時有八十萬神、皆不得目勝相問、故特勅天鈿女曰、汝是目勝於人者、宜往問之、天鈿女乃露其胸乳、抑裳帶於臍下、而笑噱向立、是時衢神問曰、天鈿女汝爲之何故耶、對曰、天照大神之子所幸道路、有如此居之者誰也、敢問之、衢神對曰、聞天照大神之子今當降行、故奉迎相待、吾名是猨田彦大神、時天鈿女復問曰、汝將先我行乎、將抑我先汝行乎、對曰、吾先啓行、天鈿女復問曰、汝何處到耶、皇孫何處到耶、對曰、天神之子則當到筑紫日向高千

依て名とす
○臨睨、上より見下すを云直指に強ちに見るを云とあり藻鹽草に欲迫（ホリセリ）の義とす平田翁の說もあれど確ならず
○不須也頗傾也、此國の喧ける狀態を御覽じ御頭を傾けて否と所思せるを云傾の下也の字楓本島本峯本に據て補ふ
○凶目杵之國、醜めく汚はしき國を云通釋に杵は汚の誤かと云り
○及、丹本になし
○射鳥遨遊、本書に遊鳥とあるに同じ字書に遨は遊也とあり
○三津之碕、出雲風土記に島根郡御津濱とある地なり
○八坂瓊曲玉及八咫鏡、此二種は大神の石窟に籠坐し時に五百箇眞坂樹に取著し玉鏡なり古事記に其遠岐斯八尺勾璁鏡とあるにて明かなり
○上祖、遠祖と云に同じ
○猨女、原本猿女に作る丹本寮本昌本及類史に據て改む、下同じ
○玉屋命、記に玉祖命とあり其意なり
○五部神、記には五伴緒

とあり、トモノヲは一の部屬又は團體を云多くの玉を緒に貫きて御統の玉となせるが如く多くの人を統率して一の團體としたるを云、以上の五柱の神は五部の統領の神なり

○配侍、其職に依て分配して奉仕せしむるを云

○葦原云々、玉本葦の上に豐の字あり

○可玉之地、丹本玉本及紀略玉を主に作る

○行矣、纂疏に送行之調とあり天降り給ふにつきて悲なくさきくいませと言壽ぎ給へるなり依てサキクと調めり

○寶祚、アマツヒツギと調り、天津日嗣は記傳に天津日大御神の大御任「ヨサシ」を受傳へ坐て其大御業を嗣々に所知看シロシメす由の御稱(ミナ)なりとあり天皇の御位を申奉るなり書紀に天業、基業、天基、大業、大運、天緒等の文字いづれもアマツヒツギと訓み又帝帝位、卽天皇位、踐祚等の文字をアマツヒツギシロシメスと訓たり、寶祚の字は文選に出て注に寶祚猶寶命也又謂國命也とあり ○興天壤無窮者、天壤は天地なり窮は窮極なり天地と共に極まりなきを云丹本に無窮をヒトシカラムと訓るもよし文字の相由天壤は文選に名與天壤俱、又史記にも見ゆ無窮は尚書に與國咸休永世無窮と見えたり萬葉二に天孫降臨の事を葦原の水穗の國を天地の依相の極みしろしめす神の命と云々と詠めるは此の神勅の意に同じ天地の依相の極みなどありけむを天壤無窮の文字を充奉りしなるべし ○先驅、丹本先驅に作る驅驅同じ ○天八達之衢、道路の巷筋にも分れたる所を云十字街なり ○七咫、咫の事八咫鏡の條に云りタに手にて片手を横へたる廣さを云七は正數にあらで大數なるべし ○背長七尺、鼻の長に比べて背の長七尺は短き故に當に七尋と言ふべしと注したるなるべし丹本には此四字なし ○七尋、尋は兩手を伸べひろげたる長さを云 ○口尻、尻をカクレと訓たるは言葉を忌みたるなり ○目勝、記に面勝神とあり目勝を尋ずとは猿田彦神の眼光に異れて面貌がちになりて正面に向ひ見る事能はざるを云 ○抑裳帶於臍下、裳帶は裳を結びたる紐なり抑はすシタレと訓り其意なり無祚には元々集所引に據て乘の字を補ひたれど本のまゝにて聞ゆ臍は丹本寮本等齊に作る齊臍に通ず ○咲嘲、原本咲を笑に作る丹本極本寮本等に據て改む下同じ釋紀に干舞と面者象此神面云々とあり ○將抑寮本鴨本極本等將の字なく丹本私記抑の字なし ○啓行、記に仕奉御前とあり ○魔隣、私記にはすシハナレと訓り次の拂分に對すればすシハナ

穗槌觸之峯、吾則應到伊勢之狹長田五十鈴川上、因曰、發顯我者汝也、故汝可以送我而致之矣、天鈿女還詣報狀、皇孫於是脫離天磐座、排分天八重雲、稜威道別道別而天降之也、果如先期、皇孫卽到筑紫日向高千穗槌觸之峯、其猨田彦神者卽到伊勢之狹長田五十鈴川上、卽天鈿女命隨猨田彦神所乞、遂以侍送焉、時皇孫勅天鈿女命、汝宜以所顯神名爲姓氏焉、因賜猨女君之號、故猨女君等男女皆呼爲君此其緣也、高胸、此云多歌武娜姿歌、頗傾也、此云歌矛志、

チと訓むよりオシハナレと訓る方妥當なるべし　○高千穗槌觸之峯、霧島山なり槌觸は奇びにて常に異りて奇異なるを云　○伊勢之狹長田五十鈴川上、狹長田は多氣郡五十鈴川上は度會郡なりされど古は五十鈴川上まで廣く狹長田と云しか　○致、向本楓本等到に作る　○姓氏、原本にはカバネと訓み私記並に丹本にはカバネウヂと訓りウヂとカバネとの區別は例へは猨女と云るは氏、君と云るは尸なればウヂカバネと云るが當れりされど神代には名ありて未だ氏なければ事實に於て姓氏と爲すべしなど云ことはあるまじきなり依て猨女君の號を賜ふとありて氏とは書されぬなり　○皆呼爲君、通釋に活字本又元々集に據て君を名と改め名は上に號とあるに同じく猨女君の名と云ことなればよく通えたりと云へり　○武娜婆歌、丹本島本歌を岐に作る

【第二一書】天津甕星、星神なり星神の名の古典に見えたるは此他に聞えず

○齋主神、經津主神なり上古は出陣の時に將軍自ら神祇を齋ひ祭りて將來の平安を祈れり齋主の名之に因りて起れり

○號曰、原本曰の字なし丹本紀略に據て補ふ

○東國機取、古は上野國碓氷嶺より以東の諸國を總べて東國と云り其起源は景行紀四十年に詳なり機取は下總國香取郡香取鄉是なり

○小汀、楓本島本峯本小を少に作る

○條々、下に言ふ所の條件なり

○顯露之事、次の神事に對して天下の萬般の政事を云

○神事、下に幽事とあるに同じ舊事紀天神本紀には汝則可以知幽神之事

第二

一書曰、天神遣經津主神武甕槌神使平定葦原中國、時二神曰、天有惡神、名曰天津甕星、亦名天香々背男、請先誅此神、然後下撥葦原中國、是時齋主神號曰齋之大人、此神今在乎東國機取之地也、既而二神降到出雲五十田狹之小汀、而問大己貴神曰、汝將以此國奉天神耶、以不、對曰、疑汝二神非是吾處來者、故不須許也、於是經津主神則還昇報告、時高皇產靈尊乃還遣二神、勅大己貴神曰、今者聞汝所言深有其理、故更條條而勅之、夫汝所治顯露之事宜是吾孫治之、汝則可以治神事、又汝應住天日隅宮者、今當供造、卽以千尋栲繩結爲百八十紐、其造宮之制者、柱則高太、板則廣厚、又將田供佃、又爲汝往來遊海之具、高橋浮橋及天鳥船亦、

とありさて其神事又は幽事とは何事ぞと云に纂疏に神事則冥府之事非祭祀牲幣之禮と云ひ口訣には仰德可奉祭祀也と云り纂疏の說は史傳及紀傳に之を基礎とし更に研究して世の治亂興廢は更にも云はず人身の吉凶禍福も亦此大神の掌り給ふ所なりさて其由を細說せり

○吾孫、纂疏吾を皇に作る

○天日隅宮、出雲風土記には日栖宮とあり日隅とは古事記に唯僕住所者如天神御子之天津日繼所知之登陀流天之御巢而云々治賜者云々とある如く此宮は天皇の大宮の制の如く構作れるに由れる名にて風土記に日栖とあるが正字なるべし或は御巢にてヒはミの轉語なりとの說もあれど文字のまゝにてよく聞ゆるなり潛みの宮といへるは非なり

○以千尋栲繩云々、上古の家作は長き繩を以て堅く結び圍むるが常なりそれを調を美しく飾りて千尋栲繩を以て百八十結び

將供造、又於天安河亦造打橋、又供造百八十縫之白楯、又當主汝祭祀者天穗日命是也、於是大己貴神報曰、天神勅教慇懃如此、敢不從命乎、吾所治顯露事者皇孫當治、吾將退治幽事、乃薦岐神於二神曰、是當代我而奉從也、吾將自此避去、卽躬披瑞之八坂瓊而長隱者矣、故經津主神以岐神爲鄕導、周流削平、有逆命者卽加斬戮、歸順者仍加褒美、是時歸順之首渠者大物主神及事代主神、乃合八十萬神於天高市、帥以昇天陳其誠欵之至、時高皇產靈尊勅大物主神、汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心、故今以吾女三穗津姬配汝爲妻、宜領八十萬神永爲皇孫奉護、乃使還降之、卽以紀伊國忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者、彥狹知神爲作盾者、天目一箇神爲作金者、天日鷲神爲作木綿者、櫛明玉神爲作玉者、乃使太玉命以弱肩被太手繩、而代御手以祭此神者始起於此矣、且天兒屋命主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事

結び固めむと云ひしなり　栲繩は栲の木皮を以て絡へる繩なり

○其造宮之制、山蔭に此は今當供造の下にあるべき文なり千尋云々も造宮の制なればなりと云り

○高太、原本太を大に作る丹本島本及類史に據て改む

○將田供佃、神の御食の料なり佃は字書に治田也とあり

○高橋浮橋、高橋は高く架け渡したる橋、浮橋は船を竝べて橋としたるものなり

○打橋、萬葉又源氏に見ゆ、假初に打架けたる橋を云

○百八十縫之白楯、百八十は楯の數の多きを云縫とは楯は縫て作るもの故に云白楯は木地のままにて飾りなきを云一說に白く塗りたる楯なりとも云

○當主汝祭祀者云々、これ殊に大己貴神を崇め奉らせ給ふなり

○岐神、纂疏云岐神主道路之神薦奉之而爲二神先導也

○躬拔瑞之八坂瓊、島本見林本及類史舊紀拔を被

而奉仕焉、高皇產靈尊因勅曰、吾則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣、汝天兒屋命太玉命宜持天津神籬降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉、乃使二神陪從天忍穗耳尊以降之、是時天照大神手持寶鏡授天忍穗耳尊而祝之曰、吾兒視此寶鏡當猶視吾、可與同床共殿以爲齋鏡復勅天兒屋命太玉命、惟爾二神亦同侍殿內善爲防護又勅曰、以吾高天原所御齋庭之穗亦當御於吾兒則以高皇產靈尊之女號萬幡姬配天忍穗耳尊爲妃降之、故時居於虛天而生兒、號天津彥火瓊々杵尊因欲以此皇孫代親而降、故以天兒屋命太玉命及諸部神等悉皆相授且服御之物一依前授然後天忍穗耳尊復還於天故天津彥火瓊々杵尊降到於日向槵日高千穗之峯而脅尖胸副國自頓丘覓國行去立於浮渚在平地乃召國主事勝國勝長狹而訪之對曰、是有國也取捨隨勅時皇孫因立宮殿是焉遊息後

に作る、披は原本にオヒテと訓り纂疏に披者負之意とあり御躬に八坂瓊を負持て隱り坐せりとなり内山眞龍の說には披はトキテと訓み御躬につけられし瓊を解きて隱り坐しも也と云ひ史傳には此說に據て大國主神が此玉を解て天神の御許に奉られしが後に大倭神社の御鎭代となれりと說かれ重胤も披をオキテと訓み大體史傳の說に據て說きたれど大倭神社の御鎭代となれりと云るは附會の說なり長く隱り坐さとあれば其隱り坐しは柞築大社なればやがて大社の御神鎭となりしなるべし（此事は予が別に細說したるものあり）

○鄕導、原本にクニノミチビキと訓めるは非なり鄕は嚮にて鄕國の鄕に非す故に平田翁はミチビキテと訓べしと云り今はそれに據れり

○周流削平、周く巡回し且つ平らぐるなり

○大物主神、記傳云初は大己貴神とのみ有しを此に至て大物主神と改めたこは高皇產靈神の賜へる

遊幸海濱見一美人、皇孫問曰、汝是誰之子耶、對曰、妾是大山祇神之子、名神吾田鹿葦津姬、亦名木花開耶姬、因白、亦吾姊磐長姬在、皇孫曰、吾欲以汝爲妻如之何、對曰、妾父大山祇神在、請以垂問、皇孫因謂大山祇神曰、吾見汝之女子、欲以爲妻、於是大山祇神乃使二女、持百机飲食奉進、時皇孫謂姊爲醜不御而罷、妹有國色引而幸之、則一夜有身、故磐長姬大慙而詛之曰、假使天孫不斥妾而御者、生兒永壽有如磐石之常存、今既不然、唯弟獨見御、故其生兒必如木花之移落、一云、磐長姬耻恨而、唾泣之曰、顯見蒼生者、如木花之、俄遷轉當衰去矣、此世人短折之緣也、此後神吾田鹿葦津姬見皇孫曰、妾孕天孫之子不可私以生也、皇孫曰、雖復天神之子如何一夜使人娠乎、抑非吾之兒歟、木花開耶姬甚以慙恨、乃作無戶室而誓之曰、吾所娠、是若他神之子者必不幸矣、是實天孫之子者必當全生、則入其室中、以火、

焚室于時焰初起時共生兒號火酢芹命次火盛時生兒號火明命次生兒號彦火火出見尊亦號火折尊齋主此云伊幡毗顯露此云阿羅幡貳齋庭此云踰貳波

にて物主とは八十萬神の首として皇孫を護奉らるるを云神之大人と云むが如し　○疏心、疏は疎に同じ睦親しむ心の薄きを云　○三穗津姫、式に大和國城下郡村屋坐彌富都比賣神社（大月次相嘗新嘗）あり大神神社に近き所也　○紀伊國、向本寮本峯本等伊の字なし　○手置帆負神、式に紀伊國名草郡鳴神社（名神大月次相嘗新嘗）あり手置帆負彦狭知の二神を祭ると云　○天目一箇神、錄山城神別山背忌寸の條に天都比古禰命子天麻比都禰命とあり　○作金者、カナタクミは鍛冶なり　○乃、丹本仍に作る　○以弱肩、丹本以の字なし原本にヨワカイナニと訓るは非なり私記に據て改む　○代御手、鴨本及私記御手代に作る記傳云御孫命に代り奉りて御幣を取持を云なり　○神事之宗源、神事は神祇の祭祀なり集解に按兒屋命專掌神事而爲宗源蓋猶後世神祇伯とあり丹本楓本峰本等に源を原に作る　○以太占之卜事而奉仕、兒屋命をして奉仕せしむるなり而して其子孫相繼て奉仕す神祇官の卜部二十人あり伊豆壹岐各五人對馬十人なり之を四國の卜部と云　○天津神籬、神祇官八神殿の起源なり天津は天より降し給ふものなる由、ヒモロギは日室城にて神の御室とするより起れる名なり纂疏に神籬謂叢祠也とあり或は榊なりとも云ひ語釋に就ても種々の說あり之に神籬の文字を充てたるは神祠の周圍に榊を立はやして籬としたるよりの事なるべし　○天津磐境、原本にイハサカと訓り記傳にはイハキと訓べしといひ通釋にはイハクラと訓べしとあれど舊訓のまゝにてよし磐境は神籬の在る所か磐石を以て堅固に築きたるを云　○吾兒視此寶鏡云々、寶鏡は八咫鏡なり當猶視吾子視此之鏡者專爲我御魂而如拜吾前伊都岐奉とある此意なり共殿は同じ御殿の內に共にましますを云ひ同床は同じ御殿の內にても一つ御床同じ御座に御側を離れずおはしますを云後世までも劍璽の間に劍璽を奉安せらるゝは此意なり又毎日鏡の御拜と云ことのありしも此の意なるべし　○齋鏡、天照大神の御鏡として齋き祭る鏡と云意なり　○吾高天原所御、稻穗は保食神の身に生出しを取らしめて天邑君をして之を耕作らしめ大神も高天原にて之を聞食すなり島本玉本には高の字なし　○齋庭之穗、齋庭は大嘗聞食す庭なり特更に齋ひ淨めたる故に齋の字を用ひたり是大嘗祭の本にて中臣壽詞に天津御饌遠長御膳乃遠御鏡止千秋乃五百秋仁瑞穗遠平介久安介久由庭仁所知食止事依奉氏云々とあるは此意を精しく述べられしものなり　○居於虛天、天降まさむとして既に御出發の後と云意なり　○天津彦火、峯本彦を彦々に作る下同じ　○諸部神、上に見えたる五部神其他の各部の神を云　○服御之物、皇孫命の御身に副はるべき總ての御物を申奉る　○胸副國、前に空國とあるに同じかるべし一說に鹿兒島神社近傍に字ムナソヒと稱する處多くあり其地方を廣く胸副國と云しなるべしとも云り尙よく考ふべし　○如之何、丹本之何倒置　○持百机飲食奉進、鉾取の禮物なり通釋玉本に據て蓮の下に之の字を補ふ　○有國色、國色の文字は公羊僖十年に出づ女の容色一國を蓋へりとの意　○詛、トコヒと訓りのろふを云字書に請神加殃謂之詛とあり　○斥、原本斥に作る寮本楓本島本及類史に據て改む　○有如磐石之常存、此傍訓稿本並に昌本に據るにもとトキハカキハノアマヒニトキハニマカラマシとありしを寬永本に寫誤り寬文本も之を踏襲したるものなり楓本は弘仁私記にトキハカキハノアマヒナラマシとありしを少しく訓み改めたるものなるべけれど如の字をアマヒと訓む事妥當ならず丹本の訓よく整ひたり　○如木花之移落、記に木花之阿摩比能微坐とあり之に據てコノハナノアマヒニと訓たるものなるべけれど如にアマヒの意ありとは見えずアマヒは甘く堅固ならずしてもろき意か或は雨にあひて其色の忽にあする意なるべし　○火酢芹命、原本酢を酸に作る諸本に據て改む下同じ　○火明命、本書には第二の御子とす　○火折尊、第五の一書には火炎衰時云云出兒云々火折尊とあり火折は火の勢の衰へたる時に生給ひしによりて名づけ奉れり　○齋主、山陰云主字は後人の加へたるなるべし　○踰、丹本瑜に作る

【第三一書】一書曰、丹本曰を云に作る
○火燄、ホノホは火之穂なり
○火炎、ホムラは火焔にて火の盛り上るを云なるべし
○竹刀、抄に日本紀私記云竹刀阿乎比衣とありアヲは青ヒエは刀を云
○竹屋、薩摩國阿多郡（今川邊郡に屬す）鷹屋郷あり是なり
○卜定田、太占を以て卜定したる田を云大嘗祭に國郡を卜定するはこれに同じ
○狹名田、眞長田の意田を稱へて云るなり
○甜酒、釋紀に美酒也とあり多米都物の多米に同じ
○淳浪田、日訣云熟田之稱
○鳥飯、カシテはカシギテのキの假名を略せるなり
○嘗之、宣賢抄云嘗ハ神ヲ祭リ宴ヲ設ケテ見ヲ賀スルナリ通釋にも尋常の大嘗新嘗の事には非ずして產養の爲に新嘗の御事を御子等の御爲に行はせ御坐せるなるべしと云り

第三

一書曰、初火燄明時生兒火明命、次火炎盛時生兒火進命、又曰火酢芹命、次避火炎時生兒火折彦火火出見尊、凡此三子火不能害、及母亦無所少損、時以竹刀截其兒臍、其所棄竹刀、終成竹林、故號彼地曰竹屋、時神吾田鹿葦津姬以卜定田、號曰狹名田、以其田稻釀天甜酒嘗之、又用淳浪田稻爲飯嘗之、

第四

一書曰、高皇產靈尊以眞床覆衾裹天津彦國光彦火瓊々杵尊、則引開天磐戸、排分天八重雲、以奉降之、于時大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天槵津大來目、背負天磐靫、臂著稜威高鞆、手捉天梔弓天羽々矢、及副持八目鳴鏑、又帶頭槌劍、而立天孫之前、遊行降來、到於日向襲之高千穗槵日二上峯、天浮橋而立於浮渚在之平地、筑紫宍空國自頓丘覓國行去、到於吾田長屋笠狹之御碕、時彼處有一神、名曰事勝國勝長狹、故天孫問其神曰、國在耶、對曰、在也、因曰、隨勅奉矣、故天孫留住於彼處、其事勝國勝神者是伊弉諾尊

之子也、亦名鹽土老翁（丹オキナ）、梔此云波茸、音之移反、頭槌此云箇步豆智、老翁此云烏膩、

第五

一書曰、天孫幸大山祇神之女子、吾田鹿葦津姫、則一夜有身、遂生四子、故吾田鹿葦津姫抱子而來進曰、天神之子寧可以私養乎、故告狀知聞、是時天孫見其子等嘲之曰、姸哉吾皇子者、聞喜而生之歟、故吾田鹿葦津姫乃慍之曰、何爲嘲妾乎、天孫曰、心疑之矣、故嘲之、何則雖復天神之子、豈能一夜之間使人有身者哉、固非我子矣、是以吾田鹿葦津姫益恨、作無戸室入居其內誓之曰、妾所生若非天神之胤者必亡、是若天神之胤者無所害、則放火焚室、其火初明時、蹈誥出兒自言、吾是天神之子、名火明命、吾父何處坐耶、次火盛時、蹈誥出兒亦言、吾是天神之子、名火進命、吾父及兄何處在耶、次火炎衰時、蹈誥出兒亦言、吾是天神之子、名火折尊、吾父及兄等何處在耶、次避火熱時、蹈誥出兒亦言、吾是天神之子、名彦火火出

【第四一書】一書曰、丹本曰を云に作る
○天津彦國光彦、是は天饒石國饒石など、同じ稱辭なり
○天磐戸、天津宮の御門の戸なり
○大伴連、大伴は武力を以て朝廷を守護し奉る部屬にて其數甚多し故に大伴と云連は群主にて其統領なり大伴は神代には職名なりしが後に氏の名となれり錄左京神別に大伴宿禰高皇產靈尊五世孫天押日命之後也とありて高皇產靈命の裔なり
○來目部、錄左京神別に久米直高御魂命八世孫味耳命之後也とあり
○天磐靫、靫は矢筒にて矢筒なり磐は其堅固なるをほめて云
○捉天梔弓、梔弓は梔の木にて作れる弓なり梔は今ハジと云て其實を蠟燭につくる木なるが性脆くして弓を作るに堪ず弓に作るは山ハゼとて別種なりと云捉は楓本昌本提に作る梔は中本玉本及類史梔に作り田中賴庸本は櫨に作る
○八目鳴鏑、字鏡に鳴鏑

なナリカブラと訓り之を射れば音をたて、空中を走行く故に鳴と云鏑は鏃大にして蕪に似たるを以てカブラヤと云八目は鏃に穴の幾個もあるにより名づけたり

○頭槌劍、纂疏に劍首如槌也今俗人所帶之劍有此形也とあり

○留住於彼處、於は丹本鴨本楓本に據て補ふ

○鹽土老翁、事勝國勝長狹神の一名なること自明なるが記傳に此は一柱の神名には非ずして凡ての事をよく識れる人を云ふなりと云ひ重胤は住吉の三神を一柱としたる神名なりと云りよく考ふべし

○桙、以下二十三字は第五一書の下に在りしを此に移す

○茸、原本茸に作る峯本楓本鴨本に據て改む

【第五一書】開喜而生之歟、日訓に嘲弄之辭也とあり

○疑之、原本之疑に作る鴨本及紀略に據て改む

○妾所生、通釋云本に生な嫌とあり纂疏に據て改む今亦之に據る

○何處坐耶、集解後文に

兒尊、吾父及兄等何處在耶、然後母吾田鹿葦津姫、自火燼中出來就而稱之曰、妾所生兒及妾身白、當火難、無所少損、天孫豈見之乎、對曰、我知本是吾兒、但一夜而有身、慮有疑者、欲使衆人皆知是吾兒、并亦天神能令一夜有娠、亦欲明汝有靈異之威、子等復有超倫之氣、故有前日之嘲辭也、

第六

一書曰、天忍穗根尊娶高皇産靈尊女子栲幡千千姫萬幡姫命、亦云、高皇産靈尊兒火之戸幡姫兒千千姫命、而生兒天火明命、次生天津彦根火瓊瓊杵根尊、其天火明命兒天香山是尾張連等遠祖也、及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇産靈尊勅八十諸神曰、葦原中國者磐根木株草葉猶能言語、夜者若熛火而喧響之、晝者如五月蠅而沸騰之云々、時高皇産靈尊勅曰、昔遣天稚彦於葦原中國、至今所以久不來者、蓋是國神有强禦之者、乃遣無名雄雉往候之、此雉降來因見粟田豆田、則留而不返、此世所謂雉頓使之

據て坐を在に改む
○蹈、踏なり
○火熱、寮本峰本及私記熱を勢に作る
○火燼、抄に燼火餘木也和名毛江久比とあり燃槪の意か
○對曰、原本對を報に作る鴨本楓本島本に據て改む
【第六一書】栲幡千千姫萬幡姫命、通釋云姫萬の間に兒の字を脫せしものなるべし丹本萬幡以下十七字なし
○火之戸幡姫兒千千姫命、丹本命の字なし
○瓊瓊杵根尊、向本鴨本根の字なし
○天香山、熱本山の下に命の字あり
○及至、丹本及を乃に作る
○木株、原本コノモトと訓み私記にコノタチとよみたるを本居翁はキネタチと訓べしと云り木株は木の切株なり
○草葉、原本カヤノカキハと訓るを私記に據て改むカキハは片葉なり
○若燎火、原本にホヘノモコロニと訓み私記にはホノホノモコロニシテと

緣也、故復遣無名雌雉、此鳥下來爲天稚彦所射、中其矢而上報云云、是時高皇產靈尊乃用眞床覆衾畏皇孫天津彦根火瓊々杵根尊、而排披天八重雲以奉降之、故稱此神曰天國饒石彦火瓊々杵尊、于時降到之處者、呼曰日向襲之高千穗添山峯矣、及其遊行之時也云々、到于吾田笠狹之御碕、遂登長屋之竹嶋、乃巡覽其地者、彼有人焉、名曰事勝國勝長狹、天孫因問之曰、此誰國歟、對曰、是長狹所住之國也、然今乃奉上天孫矣、天孫又問曰、其於秀起浪穗之上起八尋殿、而手玉玲瓏織紝之少女者是誰之子女耶、答曰、大山祇神之女等、大號磐長姫、少號木花開耶姫、亦號豐吾田津姫云々、皇孫因幸豐吾田津姫、則一夜而有身、皇孫疑之云々、遂生火酢芹命、次生火折尊、亦號彦火火出見尊、母誓已驗、方知實是皇孫之胤、然豐吾田津姫恨皇孫不與共言、皇孫憂之乃爲歌之曰、憶企都茂幡、陛爾幡譽戾耐母、佐禰耐據茂、阿黨播怒介茂舉、播磨都智耐理

響、熛火此云褒倍、喧響此云淡等娜比、五月蠅此云左魔陪、添山此云督褒里能耶麻、秀起此云左岐陁豆屢、

調り（呂を止とするは誤なり）熛は字書に火衆也とありモコロは如しと云意の古言なり萬葉に其例見ゆ

○昔、丹本に無し

○强禦、イムカフは射向ふなり　○衆田豆田、原本にアハフタマメフタと訓たれど抄にアハフマメフと訓るがよしフは漫茅生蓬生などの生にて其物の生ずる地を云　○此世所謂云々、頓使に就ては種々の說あれど往きて還らざる使を頓使と云ひ其使の還らざることを忌嫌ふなり　○上報、通釋云上字は不字の寫誤にて不報とありしならむか然する時は此後にもよく叶へり　○奉降之、原本之い字なし丹本楓本中本等に據て補ふ　○天國饒石云云　天饒國饒と云を約めて申せるなり　○添山、ソホリはソハルなり峰の二つ並びたるなり一つある上に亦一つ加はりたる心なり二上の峯は雄山雌山と副へるを以て云るなるべし　○秀起浪穂、浪穂とは浪の白く高く立てる先の所を云神武紀には蹈鞴秀とあり秀起てるところ卽ち波の穗なり　○手玉玉飾、手玉は手に纏きて飾とする玉、モユラは玉と玉と相觸れて發する音を云　○織紝、諸本紝を經に作るは非なり鴨本及私記原本に同じ紝は字書に機緯也また織也とあり或は紝に作り又緝に作る　○億企都蔗幡云々、宇部の說に此一書の傳は非なり此は彥火火出見尊の豐玉姬命に與へ給ひし御歌にして海宮の段の一書の文に深く怨み海を涉て徑去るさまある條に出べきを其處に出たる飫企都鄧利の歌と此の億企都蔗幡の歌と初句似たるより紛ひたるなりと云りさもあるべし歌の意は奥津海藻は海邊には寄れども吾妹子に却て濱より沖に遠く離れ行きて寢床を共にすること能はず濱千鳥はと云るにて御親らを濱千鳥に譬へて詠ませ給ひしなり丹本は怒今を奴今に磨を麻に理を里に作る　○淡等娜比、丹本淡を於に娜を那に作る

【第七一書】萬幡姬、原本幡を播に作る丹本寮本楓本等に據て改む

○天之杵火火置瀨尊、卽ち瓊々杵尊なり

○勝速日命兒天大耳尊、日讀に勝速日命以下を一柱の御名なりといへば兒天の二字は衍なるべし、丹本大を火に作る

○神皇產靈神、原本神の下高の字あり丹本寮本楓本等に據て削る

○天杵瀨命、瓊々杵尊なりキセはオキセの略

第七

一書曰、高皇產靈尊之女、天萬栲幡千幡姬、

一云、高皇產靈尊兒、萬幡姬兒玉依姬命、此神爲天忍骨命妃、生兒天之杵火火置瀨尊、

一云、勝速日命兒天大耳尊、此神娶丹舄姬、生兒火瓊々杵尊、

一云、神皇產靈尊之女、栲幡千幡姬、生兒火瓊々杵尊、

一云、天杵瀨命娶吾田津姬、生兒火明命、次火夜織命、次彥火火出

見尊、

第八

一書曰、正哉吾勝々速日天忍穗耳尊、娶高皇產靈尊之女、天萬栲幡千幡姫爲妃而生兒、號天照國照彥火明命、是尾張連等遠祖也、次天饒石國饒石天津彥火瓊々杵尊、此神娶大山祇神女子木花開耶姫命爲妃而生兒、號火酢芹命、次彥火火出見尊、

兄火闌降命、自有海幸、幸、此云左知、弟彥火々出見尊自有山幸、始兄弟二人相謂曰、試欲易幸、遂相易之、各不得其利、兄悔之乃還弟弓箭而乞己釣鉤、弟時既失兄鉤無由訪覓、故別作新鉤與兄、兄不肯受而責其故鉤、弟患之、卽以其橫刀鍛作新鉤、盛一箕而與之、兄忿之曰、非我故鉤雖尼多不取、益復急責、故彥火々出見尊憂苦甚深、行吟海畔、時逢鹽土老翁、老翁問曰、何故在此愁乎、對以事之本末、老翁曰、勿復憂、吾當爲汝計之、乃作無目籠、內彥火々出見尊於籠中沉之于海、卽自然有可怜小汀、可怜、此云于麻、小汀、此云波麻、於是棄籠遊

【第八一書】天饒石國饒石、通釋には舊訓よしといへど葦牙の訓に從ふべきか

【海宮遊幸章】海幸、幸とは海山にて魚貝鳥獸を獲る事を云卽ち漁獵を云之に幸又は利の字を當てたるは海にて魚貝を獲山にて鳥獸を獲るは幸なればなり獵師を佐都雄佐豆人と云ひ獵に用る弓矢を得物(サツ)矢佐都由美と云は海幸山幸のサチに同じ○欲易幸、此幸は漁獵に用る弓箭釣鉤を云其漁獵の具を易て相試みむと欲せらるゝなり○釣鉤、釣針なりチと云語釋未詳或は釣(ツリ)のツの轉か丹本島本鉤の字無く玉本釣の字なしされど楓本鴨本昌本等いづれも原本に同じく楓本には釣鉤引合チと訓べしと注し

私記にも釣鈎とあり弓箭と相對して云るなれば釣は必衍なりとも言ひ難し故に舊に從て改めず

○鐵作、カタシテのカタは鍛冶するを云カヂに同じ垂仁紀に鍛地をカタシドコロと訓るも同意なり

○行吟、吟は呻吟也語釋は通證に狀を呼ぶなるべしと云り或は直述にてもあるべし

○事之本末、アルカタチは狀のありのまゝなり始終の顚末なり

○勿復憂、元々集所引には憂の字の下に苦の字あり

○無目籠、抄に唐韻云籠竹器也和名古また四聲字苑云答海小籠也漢語抄云加文美とありカタミはカタマの轉語なるべし萬葉には玉藻間ともあり紀傳にカツマは堅津間の約にて編める竹と竹との間の堅く締まりて目の無きを云とあり

○海神之宮、海中にあり海神を祀れる神社は式に對馬島上縣郡和多都美御社(名神大)同下縣郡和多都美神社(名神大)同子神社(名神大)同和多都美神社(名神大)同

行、忽至海神之宮、其宮也雉堞整頓、臺宇玲瓏、門前有一井、井上有一湯津杜樹、枝葉扶疎、時彦火火出見尊、就其樹下、徙倚彷徨、良久有一美人、排闥而出、遂以玉鋺來當汲水、因擧目視之、乃驚而還入、白其父母曰、有一希客者、在門前樹下、海神於是鋪設八重席薦、以延內之、坐定、因問其來意、時彦火々出見尊對以情之委曲、海神乃集大小之魚、逼問之、僉曰、不識、唯赤女魚名也、比有口疾、而不來、固召之探其口者、果得失鈎、已而彦火々出見尊、因娶海神女豐玉姬、仍留住海宮、已經三年、彼處雖復安樂、猶有憶鄉之情、故時復太息、豐玉姬聞之謂其父曰、天孫悽然數歎、蓋懷土之憂乎、海神乃延彦火々出見尊、從容語曰、天孫若欲還鄉者、吾當奉送、便授所得釣鈎、因誨之曰、以此鈎與汝兄時、則陰呼此鈎曰、貧鈎、然後與之、復授潮滿瓊及潮涸瓊、而誨之曰、漬潮滿瓊者則潮忽滿、以此沒溺汝兄、若兄悔而祈者、還漬潮涸瓊、則潮自涸、以此救之、如

此逼惱、則汝兄自伏、反將歸去、豐玉姬謂天孫曰、妾已娠矣、當產不久、妾必以風濤急峻之日出到海濱、請爲我作產室相待矣、彥火々出見尊已還宮一遵海神之教、時兄火闌降命既被厄困、乃白伏罪曰、從今以後、吾將爲汝俳優之民、請施恩活、於是隨其所乞遂赦之、其火闌降命、卽吾田君小橋等之本祖也、後豐玉姬果如前期、將其女弟玉依姬直冒風波來到海邊、逮臨產時請曰、妾產時幸勿以看之、天孫猶不能忍、竊往覘之、豐玉姬方產化爲龍而甚慙之曰、如汝不尋我者、則使海陸相通、永無隔絕、今既辱之、將何以結親昵之情乎、乃以草裹兒棄之海邊、閉海途而徑去矣、故因以名兒曰彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、後久之彥火火出見尊崩、葬日向高屋山上陵、

和多都美神社以上四座あり壹岐島にも石田郡海神社(大)見え對馬は海神との緣故極めて深し敷田氏の標注には沖繩なりと云り

○雉堞整頓、雉堞の文字は文選蕪城賦に見ゆ注に雉長三丈高一丈堞城上短墻也とありタカカキヒメカキは此意にて訓をつけたるなり整頓は私記にトヽノホリソナハリと訓みトヽノヒソナハリと訓り原本の訓は江家の楓本にトヽノヒソナハリと訓り原本の訓は江家の說に據れり

○臺宇、私記丹本には二字にてウテナと訓り

○扶疏、シキモシはシキは繁くモシは茂るなりモはムクサカのムに同じ扶疏は字書に枝葉四布貌とあり枝葉の四方に茂るを云

○徙倚彷徨、徙は原本徒に作る類史に據て改むヨロホヒは力なくよろ〳〵と歩くを云タタズムは立休むにていかゞすべきかと立休みて前に進まざるを云徙倚は文選の注に時行也彷徨は字書に猶徘徊也とあり

○玉鋺、水を盛る器なり纂疏に椀に作る字鏡に鋺カナマリ抄に金鋺日本靈異記云其器皆鋺俗云賀奈萬利今按鋺字所出未詳古語謂椀爲麻利宜用金椀二字また盌小盂也字又作椀辨色立成云末利俗云毛比とあり箋注に大神宮儀式帳有水眞利神代紀允恭紀鋺訓萬利按末利蓋與鞠同語以其形圓爲名毛比是盌之古名源君以爲俗語者誤とあり

○八重席鷀、記には美智皮之疊敷八重亦絁疊八重敷其上とあり上古は高貴の人は敷物を幾重も敷き重ねて坐席としたるなり

○坐定、坐定まりてなり通釋にミマシサダマリテと訓たれど原本の訓も私記の說によれるものにて惑からず

○大小之魚、私記及楓本昌本にトホシロクチヒサキイラと訓みたれど

第一

一書曰、兄火酢芹命能得海幸、弟彦火火出見尊能得山幸、時兄弟欲互易其幸、故兄持弟之幸弓、入山覓獸、終不見獸之乾迹、弟持兄之幸鈎、入海釣魚、殊無所獲、遂失其鈎、是時兄還弟弓矢而責己鈎、弟患之、乃以所帶横刀作鈎、盛一箕與兄、兄不受曰、猶欲得吾之幸鈎、於是彦火火出見尊不知所求、但有憂吟、乃行至海邊、彷徨嗟嘆、時有一長老、忽然而至、自稱鹽土老翁、乃問之曰、君是誰者、何故患於此處乎、彦火火出見尊具言其事、老翁卽取嚢

【第一一書】幸弓、獵に用る弓を云　○覓獸、獸はシ、と訓りシ、は肉を云獸を獵るは其肉を獲むが爲なり依て一轉して獸をシ、と呼ぶに至れりマキは求むるなり　○乾迹、數日前に遺ひて既に乾けり足迹を云　○幸鈎、海幸に用ふる鈎を云　○嚢中玄櫛、嚢は種々の物を納るゝものなり玄櫛は色の黑き櫛なるべし　○大目鹿能、大なる目のあらき能なり向本丹本鹿を鹿に作るればカゴと訓むべきかと思へど私記にもオホマノアラコと訓

牽牙にハタノヒロモノハタノサモノと訓るが種なるべし　○亦女、本注に亦女鯛魚名也とあり原本に赤女は鯛と訓めるは非なり私記に妄加日太比と訓みて一つの魚の名なり第一の一書には赤女或云赤鯛とあり第三の一書にも赤女卽赤鯛也とあり赤鯛とあるより黑鯛に對して普通の鯛を云るなりと思ふ人もあるべけれど若し鯛ならむには赤女などと書くべきにあらず赤女は本名にて鯛に似たるところあるより赤女鯛とも赤鯛とも云るなり　○同召之、丹本同を因に作る　○時復大息、島本復の字なく峯本息の上歎の字ありナゲキは長息にて歎息するを云　○從容語曰、オモフルはオモムロに同じ靜にゆるやかに物言ふを云通證に從容面振也重遠曰西海僧至今有於蒐布留樹磨牛頭之言猶言畏懼顫白也とあり丹本に語の字なし　○貪鈎、貧しくなる鈎を云　○潮滿瓊者、集解云者字傍訓攙入　○產室、記に產殿とあり鹽土老翁云產室舊說在日向國那珂郡海濱號宇止磐窟宇止卽鵜鷀殿也　○厄困、原本厄を危に作る島本峯本に據て改む　○俳優之民、俳優の事第四の一書に詳に見えたりなほ火闌降命の子孫たる隼人の歌舞を爲すこと職員令延喜隼人式大嘗祭式等にも見ゆ　○吾田君小橋、古事記神武天皇段に阿多之小碕君と見えたる是なり　○覘、丹本島本に視に作る　○化爲龍、一書には八尋大熊鰐になるとあり　○向甚慙之、記傳云而下に脫文あるべし第三の一書には化爲八尋大鰐而知天孫視其私屏深慚恧恨とあり　○如汝不辱我者、原本汝を有に作る北本に據て改む　○闇海途、陸より海へ通ふ道を閉て往來することを得ざらしむるなり　○龍不合尊、記傳に俊成卿の古來風體抄に此御名をうのはふきあへずのみこと、書きたり必古き據ありけむ是に從ひて訓べしと云り　○久之、記に坐高千穗宮伍佰捌拾歲とあり　○高屋山上陵、記には御陵者卽在其高千穗山之西とあり今大隅國姶羅郡灌邊村大字蘆をば御陵地と確定せる陵の字の下に島本玉本治天下六十三萬七千八百九十二歲の十五字あり

中立櫛投地則化成五百箇竹林因取其竹作大目麁籠内火火出見尊於籠中投之于海

一云以無目堅間爲浮木以細繩繫著火火出見尊而沉之所謂堅間是今之竹籠也于時海底自有可怜小汀乃尋汀而進忽到海神豐玉彦之宮其宮也城闕崇華樓臺壯麗門外有井井傍有杜樹乃就樹下立之良久有一美人容貌絶世侍者群從自内而出將以玉壺汲水仰見火火出見尊便以驚還而白其父神曰門前井邊樹下有一貴客骨法非常若從天降者當有天垢從地來者當有地垢實是妙美之虛空彦者歟

一云豐玉姬之侍者以玉瓶汲水終不能滿俯視井中則倒映人笑之顏因以仰觀有一麗神倚於杜樹故還入白其王於是豐玉彦遣人問曰客是誰者何以至此火火出見尊對曰吾是天神之孫也乃遂言來意時海神迎拜延入慇懃奉慰因以女豐玉姬

めば鹿は誤なるべし
○浮木、抄舟車部舟類に査唐韵云楂(宇岐々)水中浮木也とありされどこゝに浮木とあるは査と同じ物か否かは詳ならず鹽土傳には舟を謂ふとあり
○城闕、カキヤは墻屋なり闕は觀謂之闕とあり物見なり或は宮門なりともいふ
○樓臺、タカドノは高殿なりウテナは詳ならず
○侍者、記に從婢とありマカタチは記傳に前子等等(マヘコラタチ)の意なるべしとあり
○以玉壺汲水、玉壺は原本にタマツボと訓たれど玉鋺と同じくタマモヒと訓べし又原本水の上に玉の字ありしが丹本鴨本寮本等に據て削る
○貴客、マラウトは稀人なり稀に來る人を云
○骨法、人相なり
○天垢、垢は原本カホと訓み私記にカタチと訓りいづれにても通ず鹽土傳に垢猶言氣象也とあり纂疏に瑜伽論を引きて天垢地垢と云ことは同書に出たりとあれどいかゞあるべきか

○虚空彦、天より降れるにもあらず地より來れるにもあらず天と地との中間なる虚空彦なりと云るなり通證に今按天津日高者天子之稱虚津日高者太子之稱とあり

○映、テレリと諸本によみたれどウツレリと訓べし

○人笑之顏、昌本人之咲顏に作り丹本笑之の二字なし

○共王、丹本玉本王を主に作る

○天神之孫、原本に孫をミマと訓たれどミコと訓べし昌本にミマコと訓り

○來意、ミタセルミコヽロと訓るはいかなる意か昌本纂疏にはキタレルミコヽロとあり

○上國、海國に對して此國を上國と云

○可詛言、トコヒイハマクは詛ひ言はむはなりマクはムを延べて言へるなり

○貧窮之本云々、これ詛言なり貧窮をマヂと訓るはマヅシの約言なり

○令其、鴨本其の字なし

○透蛇、原本逶を透に作る楓本鴨本及類史紀略に

妻之、故留住海宮已經三載、是後火火出見尊數有歎息、豐玉姫問曰、天孫豈欲還故鄉歟、對曰、然、豐玉姫卽白父神曰、在此貴客意望欲還上國、海神於是摠集海魚、覓問其鈎、有一魚、對曰、赤女久有口疾、或云赤鯛、疑是之呑乎、故卽召赤女、見其口者、鈎猶在口、便得之乃以授彦火々出見尊、因教之曰、以鈎與汝兄、時、則可詛言、貧窮之本、飢饉之始、困苦之根、而後與之、又汝兄涉海時、吾必起迅風洪濤、令其沒溺辛苦矣、於是乘火火出見尊於大鰐、以送致本鄉、先是且別時、豐玉姫從容語曰、妾已有身矣、當以風濤壯日出到海邊、請爲我造產屋以待之、是後豐玉姫果如其言來至、謂火々出見尊曰、妾今夜當產、請勿臨之、火々出見尊不聽、猶以櫛燃火視之、時豐玉姫化爲八尋大熊鰐、匍匐逶蛇、遂以見辱爲恨、則徑歸海鄉、留其女弟玉依姫持養兒焉、所以兒名稱彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊者、以彼海濱產屋全用鸕鷀羽爲草葺之而甍未

合時兒(アハセヌニミコ)(セザルトキニ私)即生(アレマセルテ)焉、故因以名(カレテナヅケタテマツル)焉、上國此云(チバフウハツクニト)羽播豆矩爾、

第二

一書曰、門前有(カドノマヘニリツノシミヅ)一好井、井上有(ヰノホトリニリモエノカツラノキ)百枝杜樹(モモエダトキ)、故彦火々出見尊跳(ヒコホホデミノミコトチドリノボリテ)昇其樹(キニ)而立之(タチヲフ)、于時海神之女豐玉姫(ワタツミノカミノムスメトヨタマヒメ)、手持(テニモチテ)玉鋺(タママリテ)來將汲(ニマムトテ)水、正見人影在(ヒトカゲノルヲ)於井中(ヰノナカニ)、乃仰視之(オドロキテミル)、驚而墜(オドロキテオトシツ)鋺(マリヲ)、鋺既破碎(ニワレクダケヌ)、不顧(ヒリミ)而還入(カヘリテカリナ)、謂父母曰(カブイロハニクヤソコ)、妾見一人在於井邊(ワレヒトリマスヲカタハラノヰノホトリニ)、樹上顏色甚美(キノヘニカホダヨクカタチ)、容貌且閑(ミヤビタリホドヽタヾビトナラズ)、殆非常之人者也(ミヤビヤカ丹)、時父神聞而奇之(アヤシミテ)、乃設八重席(チシキテヤヘタヽミチヘ)迎入(ルキシヅマリヌルトキテ)、坐定(フイデマセルミコ・ロヲ)、因問來意(コタフルニスアルカタ)、對以情之委曲(チヲ)、時海神便起憐心(ハタノヒロモノハタノサモノテトハス)、盡召鰭廣鰭狹(マスシラズト)而問之、皆曰不知(ウシナヘル)、但赤女有口疾(アカメリノヤマヒズマキコ)、不來(ヲ)、亦云(フクチメ)、口女有口疾(リノウレヘチ)、即急召至(スミヤカニシイダノサグレバノヲ)、探其口者(ウシナヘル)所失之針(タチドコロニエツコ)、得於是海神制曰(セノテイクオレクチメ)、爾口女從(リ)今以往(ユクサキジ)不得吞餌(ツリクフコトウアヅケジアメ)、又不得預天孫之饌(タチマツリモノニチテ)、即以口女魚所以不進(ユエハザルタテマツラ)御者(オホミモノニレ)、此其緣也(ソノコトノモトナリイタリ)、及至彦火火出見尊將歸之時(スルカヘリマサムトニノ)、海神白言(マラノマヲサク)、今者天之神之孫辱臨吾處(イマアメノカミノミマカジケナクイデマスアガモトニコ)、中心欣慶(ロノヨロコビ)、何日忘之(イヅレノヒカワスレム)、乃以思(チオモヘハ)、則潮溢之瓊(シホミツニヘハ)、思則潮涸之瓊(シホヒルニヘ)、副其鈎而奉進之曰(ソヘテソノチニタテマツリテアクスメ)、皇孫雖隔八重之隈(ミマヒヘダトヤヘノクマヂヲ)、冀時(ネガハクハヨリ〳〵ニマタ)復相憶而勿棄置也(アヒオモホシテナステタマヒソ)、因教之曰(チテシヘマツリテアクチノ)、以此鈎

通ずれどこゝには禁止の意なれば私記の訓妥當なるべし

○爾、オレはオノレなり汝と云に同じく人を罵りて云る稱なり

○不進御者、通釈には玉本に御供さあるを供御と改めて引きたれど原文のまゝにて通ず

○欣慶、原本慶を處に作る諸本に據て改む

○八重之隈、私記にヤソクマと訓るは古意に叶へり八潮路遠く隔つるを云

○後手投棄與之、是咒詛の術なり

○子孫八十連屬、子々孫孫に至るまで絶えざるを云

○俳人、上に俳優の民とあるに同じ

○狗人、犬に代りて吠ゆるより云

○哀之、カナシミ玉へとあれど私記にユルシタマへとあるがよし

○神德、靈德なり

○不離天皇宮墻之傍、記には書夜守護人とあり其意同じ

○代吠狗而奉事、隼人の元日卽位式等に吠聲を發する事隼人司式に見えた

與汝兄時、則稱貧鉤滅鉤落薄鉤、言訖以後手投棄與之、勿以向授、若兄起忿怒有賊害之心者、則出潮溢瓊以漂溺之、若已至厄苦求愍者、則出潮涸瓊以救之、如此逼惱、自當臣伏、時彦火火出見尊受彼瓊鉤、歸來本宮、一依海神之教、先以其鉤與兄、兄怒不受、故弟出潮溢瓊、則潮大溢、而兄自沒溺、因請之曰、吾當事汝爲奴僕、願垂救活、弟出潮涸瓊、則潮自涸、而兄還平復、已而兄改前言曰、吾是汝兄、如何爲人兄而事弟耶、弟時出潮溢瓊、兄見之走登高山、則潮亦沒山、兄緣高樹、則潮亦沒樹、兄既窮途無所逃去、乃伏罪曰、吾已過矣、從今以往吾子孫八十連屬、恒當爲汝俳人、一云、狗人、請哀之、弟還出涸瓊、則潮自息、於是兄知弟有神德、遂以伏事其弟、是以火酢芹命苗裔諸隼人等、至今不離天皇宮墻之傍、代吠狗而奉事者也、世人不憚失針、此其緣也、

りそれを云り

【第三一書】不忒、變動なきを云原本忒を惑に作り丹本滅に作る寮本峯本に據て改む

○兄釣鈎、丹本鴨本島本釣の字なし

○空手、鴨本楓本にムナデと訓るそよき

○低徊、ウナタレは頸垂なり憂ふる貌タチモトホリは立廻りにて心に憂ていかゞすべきかと彼處此處を廻り歩くを云

○川鴈、前に出つ

○羂、鳥を捕る器なり字鏡に貫、擊也挂也和奈とありワナは輪繩の意なるべし

○無目堅間小船、記にも無間勝間之小船とあり

○海驢、海獸なり形狀驢に似たる故に海驢と云小なる者長五尺許大なる者は丈餘あり茶褐色前跂は兩脇にありてやゝ長く後跂は短し形鰭の如く海中に群遊す抄毛群部に葦鹿とある是なり北海道にてはトヾと云

○饌百机、モヽトリノツクエモノは百人にて取持つ程の食物なり品多く分量亦多きを云

第三

一書曰、兄火酢芹命能得海幸、故號海幸彦、弟彦火々出見尊能得山幸、故號山幸彦、兄則每有風雨、輙失其利、弟則雖逢風雨、其幸不忒、時兄謂弟曰、吾試欲與汝換幸、弟許諾因易之、時兄取弟弓矢、入山獵獸、弟取兄釣鈎、入海釣魚、俱不得利、空手來歸、兄卽還弟弓矢而責己釣鈎、時弟已失鈎於海中、無因訪獲、故別作新鈎數千與之、兄怒不受、急責故鈎云云、是時弟往海濱、低徊愁吟、時有川鴈嬰羂困厄、卽起憐心、解而放去、須臾有鹽土老翁來、乃作無目堅間小船、載火々出見尊、推放海中、則自然沈去、忽有可怜御路、故尋路而往、自至海神之宮、是時海神自迎延入、乃鋪設海驢皮八重、使坐其上、兼設饌百机、以盡主人之禮、因從容問曰、天神之孫何以辱臨乎、

一云、頃吾兒來語曰、天孫憂居海濱、未審虛實、蓋有之乎、彦火々出見尊具申事之本末、因留息焉、海神則以其子豐玉姬妻之、

○盡主人之禮、客を饗應するをアルジマウケスと云卽其意なり
○繦綿、和昵離れざるの意、ムツマカニは睦まかになり
○鯛女、赤女を鯛女とも云るなり
○大鈎、大は借字にておほゞしき意爵々たる意なり此鈎を持る人は自ら心憂傳なるに至る
○踉蹌鈎、ス、は進にて人のそはそはして落付かぬを云スサム、ス、ロクのス、に同じ踉蹌に字書に踉高踏也蹌急行也とあり足を高く擧て急行と貌にて此鈎を持つ人は心の落付かぬを云
○凝駮鈎、ウルケは痴鈍なるを云字書に凝は不紅也駮は駮に同じとあり二字共に惡なる意原本駮を駿に作る鴨本寨本及類聚に據て改む
○授賜、原本授を授に作る丹本寨本楓本等に據て改む
○將以奉致、原本將の下作の字あり諸本に據て削る
○海田、低くして水の多き田を云

遂纏綿篤愛、已經三年、及至將歸、海神乃召鯛女、探其口者、卽得鈎焉、於是進此鈎于彦火々出見尊、因奉教之曰、以此與汝兄時、乃可稱曰、大鈎踉蹌鈎貧鈎凝駮鈎言訖、則可以後手投賜、已而召集鰐魚問之曰、天神之孫、今當還去、爾等幾日之內、將以奉致、時諸鰐魚各隨其長短、定其日數、中有一尋鰐、自言、一日之內則當致焉、故卽遣一尋鰐魚、以奉送焉、復進潮滿瓊潮涸瓊二種寶物、仍教用瓊之法、又教曰、兄作高田者、汝可作洿田、兄作洿田者、汝可作高田、海神盡誠奉助如此矣、時彦火々出見尊旣歸來、一遵神教、依而行之、弟時出潮滿瓊、卽兄擧手溺困、還出潮涸瓊、則休而平復、其後火酢芹命日以襤褸、而憂之曰、吾已貧矣、乃歸伏於弟、先是、豐玉姬謂天孫曰、妾已有娠也、天孫之胤豈可產於海中乎、故當產時必就君處、如爲我造產屋於海邊、以相待者、是所望也、故彦火火出見尊已還鄕、卽以鸕鷀之羽、葺爲產屋、屋蓋未

○一遵神教、峯本玉本神の上に海の字あり
○弟時、此下二十二字原本及諸本歸伏於弟の下に在り集解に據二古本纂疏及講述抄說一改之とあり古本は何れも原本に同じけれど今纂疏に據て改む
○襤褸、敝衣なり衣の破れて藍々然たるを云通證にヤツレは敝綴也といひ破れたるつゞれの義とす零落せるを云
○屋甍、丹本察本楓本等甍を蓋に作り口訣纂疏原本に同じ
○徑入居、丹本入屋に作る
○覘之、丹本覘を視に作る
○視其私屏、カキマミは垣間見にて竊に見るを云
○徑去、丹本楓本峯本徑を往に作る
○飫企都鄧利云々、飫企都鄧利は奥津鳥にて鴨の枕詞輌茂豆久志磨は鴨着島にて海神の宮を云和我謂禰志は我率寢しにて我は火火出見尊を申し奉る伊茂播和素邏珥は妹者不忘にて妹は豐玉姫を指して詔ふなり譽能據鄧馭鄧母は世之盡々にて命の

及合、豐玉姫自馭大龜、將女弟玉依姫光海來到、時孕月已滿、產期方急、由此不待葺合、徑入居焉、已而從容謂天孫曰、妾方產、請勿臨之、天孫心怪其言竊覘之、則化爲八尋大鰐、而知天孫視其私屏、深懷慙恨、既兒生之後、天孫就而問曰、兒名何稱者當可乎、對曰、宜號彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊、言訖乃涉海徑去、于時彥火々出見尊乃歌之曰、飫企都登利、輌茂豆句志磨爾、和我謂禰志、伊茂播和素邏珥、譽能據鄧馭鄧母、亦云、彥火々出見尊取婦人爲乳母湯母及飯嚼湯坐、凡諸部備行以奉養焉、于時權用他婦以乳養皇子焉、此世取乳母養兒之緣也、是後豐玉姫聞其兒端正、心甚憐重、欲復歸養、於義不可、故遣女弟玉依姫以來養者也、于時豐玉姫命寄玉依姫而奉報歌曰、阿輌娜磨迺、比訶利播阿利登、比鄧播伊珮耐、企弭我譽贈比志、多輔妬句阿利計利、凡此贈答二首號曰舉歌、海驢此云美知、踉蹌鈎此云須須能美賦、癡駮鈎此

あらむ限を云ふ
○取婦人、墓疏婦の上に他い字あり
○乳母、チオモは記傳にオモは兒を養育する婦人の稱なりとあり兒に乳を呑ましむるを乳母、湯を呑ましむるを湯母と云チオモは後にメノトと稱ふるに至れり　○飯嚼、飯を和げて兒に食はしむる婦を云　○湯坐、兒に沐浴せしむる婦を云、記には大湯坐若湯坐と云ふ稱見えたり　○用他婦、原本他の下に姫の字あり寮本鴨本峯本に據て削る　○此世、丹本世の下に人の字あり　○端正、キラ〳〵シに通ずに清ら〳〵しなるべしと云り　○寄、託してなり向本鴨本寄を依に作る　○阿柯娜磨迺云々、赤玉の光は有りと人は言へども君が光榮し貴く有りけりなり君は夫君火々出見尊を申し奉る光榮しのしは助辭なり貴しは美しく好きを云海を隔て、遠く離るれども常に夫君の御事を忘れ給はぬ眞情を詠み坐ぜる御歌なり　○舉歌、音律の高低に依りて名づけたるにて、調子を上げて歌ふを舉歌と云舉歌の中にも諸舉（モロアゲ）、後舉（シラゲ）片下等の別あり　○踉蹌之鈎、原本蹌の下之の字あるは衍なり諸本に據て削る　○須々能美賦、能は衍なるべし

云于樓該賦

【第四一書】山幸利、口訣に云るが如く山幸利海幸利は山海の字を互に換て見ざれば意通ぜずこは古くより誤り傳へしものなるべし
○橘之小戸、上卷四神出生の章に出づ

第四

一書曰、兄火酢芹命得山幸利、弟父折尊得海幸利云々、弟愁吟在海濱時、遇鹽筒老翁、老翁問曰、何故愁若此乎、火折尊對曰云々、老翁曰、勿復憂、吾將計之、計曰、海神所乘駿馬者八尋鰐也、此竪其鰭背而在橘之小戸、吾當與彼者共策、乃將火折尊、共往而見之、是時鰐魚策之曰、吾者八日以後方致天孫於海宮唯我王駿馬一尋鰐魚、是當一日之內必奉致焉、故今我歸而使彼出來、宜乘彼入海、入海之時、海中自有可怜小汀、隨其汀而進者、必至我王之宮、宮門井上當有湯津杜樹、宜就其樹上而居之、

○入海去矣、丹本去を中に作る

○寛坐、丹本寛の下に居の字あり向本楓本床の字あれど原本のまゝにてよしウチアクミは打足組なり打寛ぎて居ますを云
○鰡魚、本草和名に和名奈與之とあり抄亦同じ俗にボラと云名吉と云は天孫の御饌に預るを得ざるを忌み名惡と云べきを言忌みして名吉と云りと云
○生子八十連屬之裔、子々孫々に至るまでを云、裔原本に裏に作る丹本島本等に據て改む
○狹々貧鉤、狹々は小なるを云小にして貧なるべき鉤の意なるべし
○三唾下、これも呪詛の術なり
○入海鉤、原本鉤を鉤に

言訖卽入レ海去矣、故天孫隨ニ鰐所言、留居相待已八日矣、久之方有ニ一尋鰐來、因乘而入レ海、每遵ニ前鰐之教、時有ニ豐玉姫侍者、持ニ玉鋺ニ當汲ニ井水、見ニ人影在ニ水底、酌取之不レ得、因以仰見ニ天孫、卽入告ニ其王ニ曰、吾謂ニ我王獨能絶麗、今有ニ一客、彌復遠勝、海神聞之曰、試以察之、乃設ニ三床ニ請入、於是天孫於ニ邊床ニ則拭ニ其兩足、於ニ中床ニ則據ニ其兩手、於ニ內床ニ則寬ニ坐於眞床覆衾之上、海神見之、乃知ニ是天神之孫、益加崇敬云々、海神召ニ赤女口女ニ問之、時口女自レ口出レ鉤以奉焉、赤女卽赤鯛也、口女卽鰡魚也、時海神授ニ鉤彥火々出見尊ニ、因教之曰、還ニ兄鉤ニ時天孫則當言、汝生子八十連屬之裔、貧鉤狹々貧鉤言訖、三下唾與之、又兄入レ海釣時、天孫宜在ニ海濱ニ以作ニ風招ニ、風招卽嘯也、如此則吾起ニ瀛風邊風ニ、以奔波溺惱、火折尊歸來具遵ニ神教、至ニ乃兄釣之日、弟居レ濱而嘯之時迅風忽起、兄則溺苦、無由可レ生、便遙請弟曰、汝久居ニ海原ニ必有善術、

作る鴨本寮本及類史に據て改む
○風招、風を招く術なり
○嘯、字書に蹙口而出聲也とあり
○瀛風邊風、海の奥又は邊より吹來る風なり
○奔波、ハヤチとあるは非也アラナミと訓べきかと思へど暫く昌本に據る
○風亦隨息、原本隨を還に作る丹本及紀略に據て改む
○欲自伏事、丹本に欲を願に作る事は原本等に作る丹本峯本玉本等に據て改む
○者犢鼻、犢鼻は史記の注に三尺布作之形如牛鼻者也とあり倭訓栞に股袴(マタサギ)の義なり今も上總に此語遺れりと云り俗に云ふフンドシなり犢鼻を著くとは裸體になりて犢鼻をのみ著くるを云
○絡、赤土なり
○足占、古は足にて卜占をする事あり之を足占と云り萬葉十二に門に出立足占してとあり同四にも見えたり其狀に似たる故に足占を爲しと云り
○捫膝、私記にコシヲモ

願以救之、若活我者、吾生兒八十連屬、不離汝之垣邊、當爲俳優之民也、於是弟嘯已停而風亦隨息、故兄知弟德、欲自伏事、而弟有慍色、不與共言、於是兄著犢鼻、以赭塗掌塗面、告其弟曰、吾汚身如此、永爲汝俳優者、乃擧足踏行、學其溺苦之狀、初潮漬足時則爲足占、至膝時則擧足、至股時則走廻、至腰時則抱腰、至腋時則置手於胸、至頸時則擧手飄掌、自爾及今、曾無廢絶、先是豐玉姬出來、當產時、請皇孫曰、云々、皇孫不從、豐玉姬大恨之曰、不用吾言、令我屈辱、故自今以往、妾奴婢至君處者、勿復放還、君奴婢至妾處者、亦勿復還、遂以眞床覆衾及草裏其兒置之波瀲、則入海去矣、此海陸不相通之緣也、一云、置兒於波瀲者非也、豐玉姬命自抱而去、久之曰、天孫之胤不宜置此海中、乃使玉依姬抱之送出焉、初豐玉姬別去時、恨言既切、故火折尊知其不可復會、乃有贈歌、已見上、八十連屬此云野素豆々企、飄掌此云

チフと訓り諸本同じ捫は捻るを云字書に捫は持也とあり丹本には捫を抱に作る
○至腋時、原本時の字なし丹本峯本に據て補ふ
○熱掌、掌をひるがへすなり煩悶の狀を云
○抱之　原本抱を持に作る玉本に據て改む
○恨言既切、ヒタフルはヒタスラに同じ一途に恨み給ふなり
○陀毗盧箇須、原本須の下に也の字あり諸本に據て削る
【神皇承運章】姨、新撰字鏡に姨をヲバと訓り小母の義なり
○西洲之宮、高千穗宮なるべし、記に日子穗々手見命は高千穗宮に坐す事伍佰捌拾歳と見え、又神武天皇の卷にも高千穗宮に坐して其兄五瀬命と議り給ふ由見えたれば彦火々出見尊以來高千穗宮にましく〳〵しにて此に西洲の宮とあるも高千穗の宮なるべし
○吾平山上陵、聖蹟圖志に大隅國肝屬郡吾平郷上名(カミヤウ)村に在りと云此地に確定す

陀毗盧箇須、
彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊、以其姨玉依姬爲妃、生彦五瀬命、次稲飯命、次三毛入野命、次神日本磐余彦尊、凡生四男、久之彦波瀲武鸕鷀草葺不合尊崩於西洲之宮、因葬日向吾平山上陵、

第一
一書曰、先生彦五瀬命、次稲飯命、次三毛入野命、次狹野尊、亦號神日本磐余彦尊、所稱狹野者、是年少時之號也、後撥平天下奄有八洲、故復加號、曰神日本磐余彦尊、

第二
一書曰、先生彦五瀬命、次三毛野命、次稲飯命、次磐余彦尊、亦號神日本磐余彦火火出見尊、

第三
一書曰、先生彦五瀬命、次稲飯命、次神日本磐余彦火々出見尊、次稚三毛野尊、

第四
一書曰、先生彦五瀬命、次磐余彦火々出見尊、次彦稲飯命、次三毛入

【第一一書】狹野尊、狹野は地名なり霧島山の麓にあり
【第二一書】彦五瀨、彦原本なし向本に據て補ふ○火々出見、此四字丹本になし
【第三一書】火々出見、丹本鵜本此四字なし島本彦の字もなし
【第四一書】

野命、

日本書紀卷第二

【卽位前紀甲寅年】神日本磐余彥天皇、神は尊稱日本は大日本豐秋津洲と云ふ大日本に同じく日本全國を云ひ磐余は大和の地名に依りし御名なりスメラは統ろなり天下を統御し給ふを云本書に神代御三代をば天皇と申奉らず此御世より天皇と負せ奉りしは此御時始めて都を中州に定め天津日嗣の大業を恢弘し王澤を天下に及ぼし給ひしに由れり○神武天皇、以下御歷代支那風の御諡號を注せり神武天皇以下の御諡號は淡海御船奉勅撰ぶ所なりと云へば後人の加筆なること論なし御船は延曆四年七月に卒し書紀勅撰より遙に以後の人なり○諱彥火々出見、通釋云後人の攙入なり削去べし○小女、應本島本紀略少女に作る○確如、通證云字書確堅也剛也西域記確字皆作

日本書紀卷第三

神日本磐余彥天皇（神武天皇）

神日本磐余彥天皇、諱彥火々出見、彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊第四子也、母曰玉依姬、海童之小女也、天皇生而明達、意確如也、年十五立爲太子、長而娶日向國吾田邑吾平津媛、爲妃、生手研耳命、及年四十五歲、謂諸兄及子等曰、昔我天神高皇產靈尊、大日孁尊、擧此豐葦原瑞穗國、而授我天祖彥火瓊々杵尊、於是彥火瓊々杵尊、闢天關、披雲路、駈仙蹕以戾止、是時運屬鴻荒、時鍾草昧、故蒙以養正治此西偏、皇祖皇考、乃神乃聖、積慶重暉、多歷年所、自天祖降跡、以逮于今一百七十九萬二千四百七十餘歲、而邈邈之地猶未霑於王澤、遂使邑有君、村有長、各自分疆、用相凌躒、抑又聞

曜

○太子、信友校本に異本太上皇字ありと云り
○日向國吾田邑、後の薩摩國阿多郡阿多郷なり
○手研耳命、熟本舊紀此下研耳命の三字あり
○雲、原本雲に作る中本雲本峯本等に據て改む
○天祖、拾遺に天照大神吾勝尊彦火尊彦瀲尊を天祖と稱す
○於是彦火瓊々杵尊、彦は原本なし熟本に據て補ふ
○天闕、原本に天闕とあり應本島本峯本に據て改む私記に之をアマノイハトと訓り天津宮の御門を云アマノイハクラと訓るは當らず
○駈仙蹕、原本に仙は山とあり諸本に據て改む卓氏藻林に仙蹕天子行導也とありミサキハラヒオヒは行幸の御前を拂ひ追ふを云
○風止、日向の高千穂の峯に天降り給ふを云
○運屬鴻荒云々、漢文の潤色なれど當時未開蒙昧なりしを其狀況に隨て德化を施し給ひしを云西偏は日向國を指せり

於鹽土老翁曰、東有美地、青山四周、其中亦有乘天磐船而飛降者、余謂、彼地必當足以恢弘天業、光宅天下、蓋六合之中心乎、厥飛降者、謂是饒速日歟、何不就而都之乎、諸皇子對曰、理實灼然、我亦恒以爲念、宜早行之、是年也太歲甲寅、其年冬十月丁巳朔辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、至速吸之門、時有一漁人、乘艇而至、天皇招之、因問曰、汝誰也、對曰、臣是國神、名曰珍彦、釣魚於曲浦、聞天神子來、故卽奉迎、又問之曰、汝能爲我導耶、對曰、導之矣、天皇勅授漁人椎檝末、令執而牽納於皇舟、以爲海導者、乃特賜名爲椎根津彦、椎、此云辭哭、此卽倭直部始祖也、行至筑紫國菟狹、菟狹者地名也、此云宇佐、時有菟狹國造祖號曰菟狹津彦、菟狹津媛、乃於菟狹川上造一柱騰宮而奉饗焉、一柱騰宮、此云阿斯毗苦徒鞅餓離能宮、是時、勅以菟狹津媛賜妻之於侍臣天種子命、天種子命是中臣氏之遠祖也、十有一月丙戌朔甲午、天皇至筑紫國岡水門、十有二月丙辰朔壬午、至安藝國、居于埃宮、

○皇祖皇考、私記に此四字を美乎也と訓み傍に四字惣御祖也と注す　○乃神乃聖云々、御歷代の聖德の勝れ給ふを云　○自天祖降跡、以下廿三字信友は後人の攙入なれば削正すべしと云り　○邃邈之地、遠く遙なる地を云北本峯本邈を夐に作る　○王澤、原本に玉澤とあり應本島本峯本に據て改む　○村有長、アレは鈴木氏の說に在處の意なりとあれど疑しヒトコノカミは人子の上にて人の長たる意　○凌蹀、シノギキシルは侮犯し競爭ふを云舊紀に陵轢とあり、名義抄に蹀轢二正音歷字鏡集にも蹀轢同また字書に鄭氏云與轢同とありて相通して用ひたるなり　○鹽土翁、神代卷下に出づ　○而、原本無し諸本に據て補ふ　○天業、諸本に大業とあり舊紀亦同じアマツヒツギの解釋は神代卷下に出づ　○光宅天下、文選注に光大也宅居也とあり天皇は天下を宅として德澤を大に施し給ふ由なり　○六合、神代卷上に出づ　○饒速日、舊紀に忍穗耳尊の御子とあれど釋紀記に見えず記傳に系統の不明なる神なりとて精しく考證せり　○太歲、星の名木星を云漢書律歷志に分二十八宿爲十二次歲星十二歲而周天是年行一次也とあり一年に行くこと一次十二歲にて天を一周す故に古人其天を廻り行く順序を以て之を十干十二支に配當して年を數へたり我國にては古く之を用ひたる事なけれど漢土の風に倣て歷史を編纂せられし故に御代の改まる毎に卽位元年の太歲の次(ヤド)る干支を書されたり但此には特に重大事たる東征の歲次を書されたり　○椎檮、椎木にて作れる舟棹なり抄に檮棹竿也和名佐乎とあり　○倭直、錄大和神別に大和宿禰出自神知津彦命(一名椎根津彦)也とあり天武天皇十二年連の姓を同十四年忌寸を勝寶中宿禰の姓を賜はれり　○菟狹、豐前國宇佐郡　○菟狹川、今の驛館川也と云　○一柱騰宮、記に足一騰宮とあり岸によりて造れるに依て名づく　○(注)宮、集解古本に據れりとて瀰椰に作る　○崗水門、筑前國遠賀郡、應本門の下に行宮の二字あり　○埃宮、記には多祁理宮とあり通證に安藝郡府中總社傳言是埃宮之舊趾也と云ふ藝藩通志卷二には今其地を知らずと云ひ一說として或はいふ安藝國故國府の地なり上古の地勢を考ふるに其の地實に水陸要衝に當りて後に國府をも居られし所なればその江邊に行宮を設け給ひ江宮と稱せられたるさもあるべきか多祁理宮も同じ行宮にて竹の宮ともまた江の宮とも稱し奉り二書しるす所名を異にせしなるべきかと云り

【乙卯年】高島宮、備中國小田郡神島の南に高島あり此地なりと云　○脩、原本備に作る諸本に據て改む　○兵食、カテは抄に粮糧和名加天とあり

【戊午年】(二月)難波、今の大阪より尼崎邊までの海畔を云　○華、諸本花に作る　○也、原本なし熟本島本峯本に據て補ふ　(三月)遡流、淀川を遡り大和川の方に折て河內に至れるなり　○草香邑、河內國河內郡

乙卯年春三月甲寅朔己未、徙入吉備國、起行宮以居之、是曰高嶋宮、積三年間、脩舟檝、蓄兵食、將欲以一擧而平天下也、

戊午年春二月丁酉朔丁未、皇師遂東、舳艫相接、方到難波之碕、會有奔潮太急、因以名爲浪速國、亦曰浪華、今謂難波訛也(訛、此云與許奈磨盧)　三月丁卯朔丙子、遡流而上、徑至河內國草香邑靑雲白肩之津、夏四月丙申朔甲辰、皇師勒兵步趣龍田、而其路狹嶮、人不得並行、乃還更欲東踰膽駒山而入中洲、時長髓彥聞之曰、夫天神子等所以來者、必

○青雲、白肩の枕詞
(四月)龍田、大和國生駒(平群)郡龍田町及三郷村
○膽駒山、同郡此に越ゆるを嗜越(クラカリ)と云
○中洲、大和國を云ウチは大内のウチに同じ歴代都し給ふによりて云
○孔舍衛坂、私記にクサニ、クサカと兩訓あり古より兩説ありしなるべし島本衛を樹に作り峰本衛に作る集解に衛は衝の誤なりとあれど尚考べし
○流矢、イタヤクシは記に痛矢串とあるに據る
○冲衿、冲は深也衿は襟に同じ震襟と云が如し
○向日征虜云々、皇軍河内にあれば日は膽駒山の東に昇る故に云
○祓祭神祇、神祇はアマツヤシロクニツヤシロと訓べし天津社國津社を敬祭して神助を祈給ふなり
○隨影壓蹈、日の御蔭に隨て敵軍を壓倒するを云
○令、ノリゴチは宣告するを云
○草香津、諸本香の下にの字あり楓本原本に同じ
○雄詰、神代紀上に出づ
○(注)多鶏糜、原本糜を

日本書紀卷第三　神武天皇　即位前紀　戊午年

將奪我國則盡起屬兵徼之於孔舍衛坂與之會戰有流矢中五瀨命肱脛皇師不能進戰天皇憂之乃運神策於冲衿曰今我是日神子孫而向日征虜此逆天道也不若退還示弱禮祭神祇背負日神之威隨影壓蹈如此則曾不血刃虜必自敗矣僉曰然於是令軍中曰且停勿復進乃引軍還虜亦不敢逼却至草香津植盾而爲雄誥焉雄誥此云烏多鶏糜因改號其津曰盾津今云蓼津訛也初孔舍衛之戰有人隱於大樹而得免難仍指其樹曰恩如母時人因號其地曰母木邑今云飫悶迺奇訛也五月丙寅朔癸酉軍至茅渟山城水門井水門亦名山茅渟此云智怒時五瀨命矢瘡痛甚乃撫劍而雄誥之曰撫劍此云都盧耆能多伽彌居利爾慨歎曰慨哉大丈夫慨哉此云于黎多棄伽夜被傷於虜手將不報而死耶時人因號其處曰雄水門進到于紀伊國竈山而五瀨命薨于軍因葬竈山六月乙未朔丁巳軍至名草邑則誅名草戸畔者戸畔此云姤槃遂越狹野而到熊野神邑且登天磐盾仍引軍漸進海中卒遇暴風皇舟漂蕩時

盧に作る熱本應本島本に據て改む
○母木邑、河内國中河内郡豐浦村、今云以下八字恐らくは誤あらむ
（五月）茅渟、和泉國の地名古は和泉日根大鳥三郡に亘て茅渟と云
○山城水門、日根郡雄水門を云
○竈山、神名式云名草郡竈山神社諸陵式云竈山墓彦五瀨命在二紀伊國名草郡一
（六月）名草邑、紀伊國名草郡
○狹野、同國東牟婁郡三輪崎村大字佐野
○而、原本なし北本應本峯本に據て補ふ
○熊野神邑、東牟婁郡にあり通證云俗名二神藏一處疑是也
○天磐盾、神藏山なるべし
○暴風、アカラシマカゼは速力の早き風を云皇極紀に急なアカラサマと訓める其意なり
○鋤持神、劍の古名をサヒと云特殊なる劍を持ち給ひしにや記には穗々出見尊を送奉りし一尋鰐の名とす
○常世鄕、外國を云記に

稻飯命乃歎曰、嗟乎、吾祖則天神、母則海神、如何厄二我於陸一、復厄二我於海一乎、言訖乃拔レ劍入レ海、化爲鋤持神一、三毛入野命亦恨之曰、我母及姨並是海神、何爲起二波瀾一以灌溺乎、則蹈二浪秀一而往二乎常世鄕一矣、天皇獨與二皇子手研耳命一、帥レ軍而進、至二熊野荒坂津一、亦名丹敷浦因誅二丹敷戶畔者一、時神吐二毒氣一、人物咸瘁、由レ是皇軍不レ能復振一、時彼處有レ人、號曰熊野高倉下一、忽夜夢、天照大神謂二武甕雷神一曰、夫葦原中國猶聞喧擾之響焉、聞擾之響焉、此云左揶霓利奈離、宜汝更往而征之、武甕雷神對曰、雖予不レ行、而下二予平國之劍一、則國將自平矣、天照大神曰、諾、諾、此云字毎那利、時武甕雷神登二謂高倉下一曰、予劍號曰二師靈一、屠能瀰哆磨、今當置二汝庫裏一、宜取而獻之天孫一、高倉下曰、唯唯而寤之、明旦依二夢中教一、開レ庫視之、果有二落劍一、倒立於庫底板一、卽取以進之、于レ時天皇適寐、忽然而寤之曰、予何長眠若此乎、尋而中レ毒士卒悉復醒起、既而皇師欲レ趣二中洲一、而山中嶮絕、無復可レ行之路、乃捿徨不レ知二其所一、跋涉、時夜夢、天照大神訓二于天皇一曰、朕今遣二頭八咫烏一、

は本書と同じ、御毛沼命者渡坐于常世國とある を錄には飯氷命を以て新羅國王の祖とす ○手研耳、應本島本に手の字なし ○荒坂津、亦名丹敷浦、三輪崎狹野の邊の海灣 ○瘁、玉篇に病也とあり言海にヲユは衰へ弱るなりと云 ○熊野高倉下、舊紀に天香語山命の一名とすされど記紀には見えず ○(注)毎、島本應本等女に作る ○登、卽に同じ ○高倉下、諸本下の字なし舊紀に據て補ふ下同じ ○師靈、記云此刀名云佐士布都神亦名布都御魂坐石上神宮也(節略) ○捜道、垂仁紀五年に進退なシ、マヒと訓めり進退窘谷まりて徘徊趦趄する狀を云通俗にシ、マヒは慶シ、マヒなるべしと云 ○頭八咫烏、頭の大きさ八咫ある大烏錄山城神別鴨縣主の條に神魂命之孫鴨建津之身命化如二大烏一翔飛奉導とあり鴨建津之身命は賀茂別雷神命の母玉依日賣の父 ○鄉導者、鄉は嚮と同じ郷に作るは非諸本に據て改むクニノミチビキと訓るも非なり ○日臣命、錄有京高志連の條に高魂命九世孫とあり押目命の支孫なり ○督將元戎、文選閑居賦の注に元戎大兵也とあり之に據てオホツハモノと訓り ○菟田下縣、大和國宇陀郡なり縣を縣に作るは俗字 ○穿邑、今宇賀志村と云 ○有能導之功、原本有能倒置熱本應本島本等に據て改む

宜以爲鄉導者、果有頭八咫烏、自空翔降、天皇曰、此烏之來自叶祥夢、大哉赫矣、我皇祖天照大神、欲以助成基業乎、是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、因號其所至之處、曰菟田穿邑、穿邑此云于介知能務羅于時勅譽日臣命曰、汝忠而且勇、加能有導之功、是以改汝名爲道臣、

《八月》魁帥、後漢書光武紀に出づ注に魁帥人長也とあり ○(注)瀰、原本彌に作る島本峯本に據て改む ○望見、オセルは神代下に出づ ○施機、記に張押機とありオシは倭名抄敵彊具に鼠弩於之と見ゆ此は鼠を取る押機なり押機は壓死せしむべく造れる機を云 ○詰、諸本諮に作る例に

秋八月甲午朔乙未、天皇使徵兄猾及弟猾者、猾、此云宇介志是兩人、菟田縣之魁帥者也、魁帥、此云比登誤迺伽瀰時兄猾不來、弟猾卽詣至、因拜軍門而告之曰、臣兄兄猾之爲逆狀也、聞天孫且到、卽起兵將襲、望見皇師之威、懼不敢敵、乃潛伏其兵、權作新宮、而殿內施機、欲因請饗以作難、願知此詐、善爲之備、天皇卽遣道臣命、察其逆狀、時道臣命審知

據て改む
○催、島本玉本推に作る
○獲罪於天、原本罪の下兄の字あり北本楓本峯本に據て削る此四字論語八佾に出づ天は君に喩へたり
○蹂、倭名抄に豆不奈岐とあり通證云今俗云豆久不之
○菟田血原、志云在上田口村
○牛酒、後漢書光武紀に出づ漢文の潤色なり我國の饗宴に牛肉を主とすることなし
○于儀能多伽機珥云々、一首の大意は兄猾が機を張りたる小智を鴨羂に譬へて詠ませ給ひしにて宇陀の高城に鴨羂を張りて待ちしに鴨はかゝらず鯨羅れり妻子等が魚を乞はば前妻之を乞はば其肉の少き處をへぎ取て與へ後妻之を乞はば肉の多き處をいか程にても與ふるならむ然らずや否と戲れさせ給ふなり(橘守部の說)伊殊區波辭は磯魚細(イソナクハシ)にて鯨の枕詞固奈瀰は抄に前妻和名毛止豆女一名古奈美とあり多智曾縻は立柧棱なり柧棱は

有レ賊害之心、而大怒詰嘖之曰、虜爾所造屋、爾自居之、飫例、因案劍彎弓逼令催入、兄猾獲罪於天、事無所辭、乃自蹈機而壓死、時陳其屍而斬之、流血沒レ蹂、故號其地曰菟田血原、已而弟猾大設牛酒、以勞饗皇師焉、天皇以其酒宍班賜軍卒、乃爲御謠之曰、謠、此云宇于儀能多伽機珥、辭藝和奈破蘆、和餓末菟夜、辭藝破佐夜羅孺、伊殊區波辭、區旎羅佐夜離、固奈瀰餓、那居波佐縻、多智曾縻能未迺、那鷄句塢、居氣辭被惠禰、宇破奈利餓、那居波佐磨、伊智佐介幾未迺、於朋鷄句塢、居氣儀被惠禰、是謂來目歌、今樂府奏此歌者、猶有手量大小及音聲巨細、此古之遺式也、是後天皇欲省吉野之地、乃從菟田穿邑、親率輕兵巡幸焉、至吉野時、有人出自井中、光而有尾、天皇問之曰、汝何人、對曰、臣是國神、名爲井光、此則吉野首部始祖也、更少進、亦有尾而披磐石而出者、天皇問之曰、汝何人、對曰、臣是磐排別之子、排別、此云飫時和句、此則吉野國樔部始祖也、及緣水西行、亦有作梁取魚者、梁、此云柯奈、天皇問之、對曰、

抄に和名曾波乃木とあり俗に錦木と云細小なる赤き實成る立柧棱の如く實の少きなの意にて枕詞とす那鶏句塢は無きなり居氣酵被事爾は扱(コ)きし揖(ヒ)ゑれなり扱(コキ)て蔑取(ギト)れさなり宇破 奈利は抄に後妻和名宇波奈利とあり伊智佐介幾末は柃木實なり柃は抄に比佐加木とあり今俗にビシヤカキと云赤黑く紫ばみたる實最多く成る故に柃の實の多なとかけたるなり居氣儀は幾許なり敬の多きを云 ○來目歌、令集解(神樂寮)に久米舞大伴氏彈琴佐伯持刀儀即斬蜘蛛准とあり ○樂府、集解云按令所謂雅樂寮也トヨノアカリと訓るは非なりウタマヒノツカサと訓べし ○省、字書に省察也とあり島本峯本省に作る ○輕兵、イサ、キは僅少の意又按に精銳なる兵を云 ○吉野首、錄大和神別に吉野連加爾比加尼之後也云々井光女自天降來白雲別神之女也名曰豐御富天皇卽名水光姫今吉野連所祭水光神是也とあり ○國樔、吉野川の上流に南國栖村あり其邊七村を國栖莊と云國栖の事應神紀十九年十月に見ゆ參考すべし ○梁、倭名抄漁具に毛詩註梁魚梁也唐韻云簿取魚箔也和名夜奈とあり ○阿太養鵜部、阿太は宇陀郡にあり養鵜部は鵜を養て魚を捕るを職掌とする部民

臣是苞苴擔之子、苞苴擔、此云、瑕倍毛苞、此則阿太養鵜部始祖也、

(九月)高倉山、志云有二宇道同西一 ○域、原本城に作る熱本槿本に據て改む ○國見岳、通證云在伊賀見村上方跨二勢伊二州一 島本峯本岳を丘に作る ○女坂、志云在二宇陀郡宮奥村西一界十市郡一 ○男坂、志云在二宇陀郡牛坂村西一界城上郡一 ○墨坂、志云在二宇陀郡萩原村西一 ○磐余邑、十市郡 ○蠱害、ヌミの義未詳 ○香山社、式云大和國十市郡天香山坐櫛眞命神社是なり ○平瓮、抄云盆唐韻云盆瓦器也爾雅云瓮謂之缶一 兼名苑云瓮一名盂辨色立成云盆比良加俗保止伎平は平らかなる意カは土器

九月甲子朔戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巔、瞻望域中、時國見岳上則有八十梟帥、梟帥、此云多稽麼、又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置炼炭、其女坂男坂墨坂之號由此而起也、復有兄磯城軍、布滿於磐余邑、磯、此云志、賊虜所據、皆是要害之地、故道路絶塞無處可通、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢、有天神訓之曰、宜取天香山社中土、香山、此云介遇夜縶、以造天平瓮八十枚、平瓮、此云毗逕介、并造嚴瓮、嚴瓮、此云怡途背、而敬祭天神地祇、亦爲嚴呪詛、嚴呪詛、此云怡途能伽辭離、如此則虜自平伏、天皇祇承夢訓、依以將行、時弟猾又奏曰、倭國磯城邑有磯城八十梟帥、又高尾張邑或本云、葛城邑也、有赤銅八十梟帥、此類皆欲與天皇距戰、臣竊爲天皇憂之、宜今當取天香山埴、以造天平瓮、而祭天社

國社之神、然後擊虜則易除也、天皇既以夢辭爲吉兆、及聞弟猾之言、益喜於懷、乃使椎根津彥着弊衣服及蓑笠、爲老父貌、又使弟猾被箕、爲老嫗貌、而勅之曰、宜汝二人到天香山、潛取其嶺土、而可來旋矣、基業成否、當以汝爲占、努力愼焉、是時虜兵滿路、難以往還、時椎根津彥乃祈之曰、我皇當能定此國者、行路自通、如不能者、賊必防禦、言訖、徑去、時羣虜見二人、大喚之曰、大醜乎（大醜、此云鞅奈瀰爾勾、）老父老嫗、則相與鬬道使行、二人得至其山、取土來歸、於是天皇甚悅、乃以此埴造作八十平瓮、天手抉八十枚（手抉、此云多衢餌離）嚴瓮而陟于丹生川上、用祭天神地祇、則於彼菟田川之朝原、譬如水沫而有所咒著也、天皇又因祈之曰、吾今當以八十平瓮無水造飴、飴成則吾必不假鋒刃之威、坐平天下、乃造飴、飴卽自成、又祈之曰、吾今當以嚴瓮沉于丹生之川、如魚無大小悉醉而流、譬猶柀葉之浮流者、（柀、此云磨紀、）吾必能定此國、如其不爾、終無所成、乃沉瓮於川、其口向下、頃之魚皆浮出、隨水喚喝、時椎根津彥見而奏

の總名
○嚴瓮、原本瓮を瓮に作る崇神紀十年に據て改む下同じ倭名抄に甕烏貢反字亦作瓮とあり甕に同じ
○咒詛、神に祈て人を詛ふを云
○磯城邑、磯城郡
○高尾張邑、葛城の舊名
○赤銅、銅は北本應本島本鋼に作る
○宜、集解云衍
○使、原本無し熱本應本中本に據て補ふ
○老父、倭名抄に翁老人也於岐奈とあり父は原本人に作る島本應本峯本に據て改む
○老嫗、倭名抄に嫗於無奈とありムはミの音便なり
○基業、此には此文字を用ふ
○焉、北本應本等歟に作る
○手抉、通證云以手指剔抉也今所謂手壺小壺之類
○丹生川上、通釋に宇陀郡迫間村にある式社阿紀神社所在の地なるべしと云り
○菟田川、集解に大和志を引きて一名萩原川下井

足にて東西二水會し宇陀川と云と云り
○鉾、抄に鉾岡米とありこゝにタカネと訓るは束れの意にて鉾の形の長きを束れたるより出たる名なるべし
○頃之、原本之の字無し北本應本峯本等に據て補ふ
○喰噣、文選吳都賦注に喰噣魚在水中群出口貌とあり
○顯齋、諸說あり通釋に天皇親ら高皇產靈神となり道臣命をして祭らしめ給ひしなりとあれど鈴木氏の說の如く天神の御靈を眼前に令坐奉りて齋かせ給ふ義なるべしとす
○齋主、祭主に同じ
○嚴媛、古の制主として女を用て神を祭らしむ故に嚴媛と云
○野椎、諸本並釋紀亦同じ通釋野雷とす
(十一月)伽牟伽筮能、伊勢の枕詞
○異波臂茂等倍屢、異は發語にて延圖るなり
○之多儀瀰、細螺なり抄に漢語抄云細螺之太々美とあり倉藥昆虫攷に榮螺

之、天皇大喜、乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹、以祭諸神、自此始有嚴瓮之置也、時勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、顯齋此云于圖詩怡破哦用汝爲齋主、授以嚴媛之號、而名其所置埴瓮爲嚴瓮、又火名爲嚴香來雷、水名爲嚴罔象女、罔象女此云彌蒐破迺迷、粮名爲嚴稻魂女、稻魂女此云于伽能迷、薪名爲嚴山雷、草名爲嚴野椎、冬十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之粮、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、是役也、天皇志存必克、乃爲御謠之曰、伽牟伽筮能、伊齊能于瀰能、於費異之珥夜、異波臂茂等倍屢、之多儀瀰能、之多儀瀰能、阿誤豫、阿誤豫、之多太瀰能、異波比茂等倍離、于智豆之夜莽務、于智豆之夜莽務、謠意、以大石喩其國見丘也、旣而餘黨猶繁、其情難測、乃顧勅道臣命、汝宜帥大來目部、作大室於忍坂邑、盛設宴饗、誘虜而取之、道臣命於是奉密旨、掘窖於忍坂而選我猛卒、與虜雜居、陰期之曰、酒酣之後、吾則起歌、汝等聞吾歌聲、則一時刺虜、已而坐定酒行、虜不知我之有陰謀、任情徑醉、時道

臣命乃起而歌之曰、於佐箇迺、於朋務露夜珥、比苔嗟破而、異離烏利苔毛、比苔瑳破而、枳伊離烏利苔毛、瀰都瀰都志、倶梅能固邏餓、勾鶩都都伊、異志都都伊毛智、于智豆之夜莽務、時我卒聞歌、倶拔其頭椎劍、一時殺虜、虜無復噍類者、皇軍大悅、仰天而咲、因歌之曰、伊莽波豫、伊莽波豫、阿阿時夜塢、伊莽儺而毛阿誤豫、伊莽儺而毛阿誤豫、今來目部歌而後大哂、是其緣也、又歌之曰、愛瀰詩烏、毗儺利毛毛那比苔、比苔破易陪迺毛、多牟伽毗毛勢儒、此皆承密旨而歌之、非敢自專者也、時天皇曰、戰勝而無驕者、良將之行也、今魁賊已滅、而同惡者匈匈、十數羣、其情不可知、如何久居一處無以制變、乃徙營於別處、

に似て細小なり玉蓋の間より舌を横に出すを以て舌曲と云とあり　○忍坂邑、大和國磯城郡　○宴饗、朝廷の饗宴を云アカリは記傳に御酒をめして大御顏の赤らみますより云る名なりと云　○誘、ヲコツリは通釋云ヲコめきて人を欺き誘ふを云　○窖、說文に地室也とあり地を掘て人の住むべく作れるを云　○酣、飲洽也とあり酒宴の最中を云　○比苔、原本苔を苦に作る北本應本に據て改む下同じ　○瀰都瀰都志、來目の枕詞、稜威言別云稜威稜威しき來目の子等にて才德勇威あるを云志は助辭なり　○異志都都伊、石槌にて上代の劍名　○頭椎劍、神代紀下に見ゆ　○噍類、遺類と云に同じ史記高祖紀の注に無復有活而噍食者也と見ゆ　○伊莽波豫云々、一首の意はいつしかと思ひし時至りぬア、悅ばしや吾子よ年來の欝憤はれし今日は共に樂しみ遊べ汝等も大に哂へやと云なり阿々時夜塢の阿々は笑聲シヤは唉く辭ヲはコに同じ　○今來目部云々、此は後の久米舞の時の狀態を云　○愛瀰詩烏云々、一首の意は蝦夷は一人能く百人に當るの力ありと雖も抵抗もせずして討たれたりとなりエミシは土蜘蛛を云土蜘蛛をエミシと云は常に穴に棲みて自然に身に毛生ひ鬚の長くのびて蝦に似たるによれり陸奥の蝦夷をいふも其意は同じ　○自專、專を古くよりタクメと訓たるは非なり記傳に專をタウメと訓むは誤なり然るに和名抄に專日本紀云專顓二字讀太宇女乎佐女今按專訓毛波良專一之義也太宇女者毛波良之古語也とあれどタウメは老女の事にて專一をタウメといふべき由なし書紀の讀訓に依て誤れる說なりと云り　○匈匈、通釋云私記に以比乎曾利つゝとあり乎はコなり漢書に天下匈々注に喧擾之意とあれば言コツリにて鼎りて喧擾く義なるべし　○徙、原本徒に作る楓本吉本中本に據て改む　○十數群、トタムラと訓るは十黨(トタムラ)なるべし推古紀に人皆有黨(タムラ)とありタムラは屯と同言なり

(十一月)怡奘過、誘引の聲集解過を過に作り過音倭の三字私記の撥入とす

○天壓神、記傳云天神の御子の御軍の向ふ處敵なく物を壓ひしぐが如き御勢なりし故の名なるべし

○烏鳥、應本鳥を鳴に作り吉一本烏字無し

○(注)此、原本者に作る前後の例に據て改む

○慄、慄の說なるべし字書に慄懼貌とあり

○葉盤、窪手に對して淺く平なる意大嘗新嘗に用ふるは柏葉を竹の針にて刺して小皿の形に作れるもの記傳に作をナシてとよめるナはサの畫の消たるものなりと云

○爲之奈何、應本烏本峯本之字なし

○起、原本赴に作る北本應本中本に據て改む

○勁卒、說文云勁強也強き兵卒を云

○儵忽之間、私記にニハカニ又タチマチニと訓り儵は正字通に倏本作儵條俗倏字とあり倏忽に同じ思も及ばざる程急速なるを云

○今胄、今は甲也甲胄に

十有一月癸亥朔己巳、皇師大擧、將攻磯城彥、先遣使者徵兄磯城、兄磯城不承命、更遣頭八咫烏召之、時烏到其營而鳴之曰、天神子召汝、怡奘過、怡奘過、過、音倭、兄磯城忿之曰、聞天壓神至、而吾爲慨憤時、奈何烏烏若此惡鳴耶、惡、此云飫麁、乃彎弓射之、烏卽避去、次到弟磯城宅、而鳴之曰、天神子召汝、怡奘過、怡奘過、時弟磯城慄然改容曰、臣聞天壓神至、旦夕畏懼、善乎烏、汝鳴之若此者歟、卽作葉盤八枚、盛食饗之、葉盤、此云毗羅爾、因以隨烏、詣到、而告之曰、吾兄兄磯城聞天神子來、則聚八十梟帥、具兵甲、將與決戰、可早圖之、天皇乃會諸將、問之曰、今兄磯城果有逆賊之意、召亦不來、爲之奈何、諸將曰、兄磯城黠賊也、宜先遣弟磯城、曉喩之、幷說兄倉下弟倉下、如遂不歸順、然後擧兵臨之亦未晚也、倉下、此云衢羅餌、乃使弟磯城、開示利害、而兄磯城等猶守愚謀、不肯承伏、時椎根津彥計之曰、今者宜先遣我女軍、出自忍坂道、虜見之必盡銳而起、吾則駈馳勁卒直指墨坂、取菟田川水、以灌其炭火、儵

忽之間出其不意則破之必也天皇善其策乃出女軍以臨之虜謂大兵已至畢力相待先是皇軍攻必取戰必勝而介冑之士不無疲弊故聊爲御謠以慰將卒之心焉謠曰

哆哆奈梅豆伊那瑳能椰摩能虛能茅由毛易喩者摩毛羅毘多多介陪磨和例破椰隈怒之摩途等利宇介譬餓等茂伊茅輸開珥虛禰果以男軍越墨坂從後夾擊破之斬其梟帥兄磯城等

同じ　○哆々奈梅豆云々、一首の大意は皇軍は幸に運戰連勝すれど各處にて奮鬪せし爲に疲勞し今伊那瑳山にありて飢ゑつゝあれば鵜飼等は鮮魚を多く携來て兵士を速に慰勞せよと宣給しなり哆々奈梅は盾並にて伊那瑳の枕詞盾を並て射ると云意にて次句にかゝる　○伊那瑳能椰摩、所在未詳　○易喩者摩毛羅毘、行候なりイは發語ラヒはりの延たるにてマモリなりマモリは斥候するを云斥候しつゝ交戰するを云　○和例破椰隈怒、吾は飢ぬなりヤは歎詞エはウエの略敵は頑強にて斥候に日數を費し食糧の缺乏を來したるなり　○之摩途等利、島津島にて鵜の枕詞　○宇介譬餓等茂、鵜飼の徒なり古へは鵜飼多くありて魚を捕へたり阿多養鷗等を云　○伊茅輸開珥虛禰、今助に來れなり今は今速にの意助には鮮魚など食料を持來て飢を救ふを云コネは來れなり　○梟帥、梟は字書に健也雄也帥は統也領也とあり其意を得て人子の上と訓みタケルとも云

（十二月）天陰、ヒシケテは日の時雨るゝ意　○雨氷、記傳云もと氷の降るをいひ轉じて雨の甚しく降るを云　○金色靈鵄、鵄は抄に鳶本草云鳶一名鳶和名度比とあり靈鵄は其靈異あるもの靈鵄の來るは猶八咫烏の瑞の如し　○皇弓之弭、原本之字なし北本島本峯本に據て補

十有二月癸巳朔丙申皇師遂擊長髓彥連戰不能取勝時忽然天陰而雨氷乃有金色靈鵄飛來止于皇弓之弭其鵄光曄煜狀如流電由是長髓彥軍卒皆迷眩不復力戰長髓是邑之本號焉因亦以爲人名及皇軍之得鵄瑞也時人仍號鵄邑今云鳥見是訛也昔孔舍衞之戰五

ふ

○迷眩、通鑑云迷目醉也眩目淸也

○鳥見、添下郡の地名

○孔舍衛、峯本衛を衛に作りカと訓み島本衛に作る

○中矢、イエテはイラエテのラを省けるにて被射而なり

○憤懣、說文云懣怨也

○窮誅、悉く誅するを云

○瀰都瀰都志云々、一首の意は久米部の粟生に生ずる一本の韮は其莖根も芽なも繁ぎて悉く滅さむと云て遺恨甚しき長髓彦の一族は遺る所なく悉く之を誅せむとなり

○介書茂等珥、記及舊紀に此句なし衍なり

○阿波赴、粟生にて粟の生ずる島を云

○介瀰羅、香韮なるべし

○曾迺餓毛苦、記には曾泥賀母登とあり迺は根にて其根之莖なりネをノとせるは樂府にて誤ひ改めしなるべし

○瀰都瀰都志云々、一首の意は久米部の籬の下に植し韮を食へば口疼くが如く五瀬命の御遺誡當時を思へば何時も忘るゝこ

瀨命中矢而薨、天皇衙之、常懷憤懣、至此役也、意欲窮誅、乃爲御謠之曰、瀰都瀰都志、倶梅能故邏餓、介耆茂等珥、阿波赴珥破、介瀰羅毗苔茂苔、曾迺餓毛苔、曾禰梅屠那藝豆、于笞豆之夜莽務、又謠之曰、瀰都瀰都志、倶梅能故邏餓、介耆茂等珥、宇惠志破餌介瀰、勾致珥比倶、和例破涴輸例儒、于智豆之夜莽務、因復縱兵急攻之、凡諸御謠、皆謂來目歌、此的取歌者名之也、時長髓彦乃遣行人言於天皇曰、嘗有天神之子、乘天磐船自天降止、號曰櫛玉饒速日命、饒速日、此云鄭藝波揶臣、是娶吾妹三炊屋媛、亦名長髓媛、亦名鳥見屋媛、遂有兒息、名曰可美眞手命、可美眞手、此云于麗詩莽耐、故吾以饒速日命爲君而奉焉、夫天神之子豈有兩種乎、奈何更稱天神子、以奪人地乎、吾心推之未必爲信、天皇曰、天神子亦多耳、汝所爲君、是實天神之子者、必有表物、可相示之、長髓彦卽取饒速日命之天羽羽矢一隻及步靫、以奉示天皇、天皇覽之曰、事不虛也、還以所御天羽羽矢一隻及步靫、賜示於長髓彦、長髓彦見其天表、益懷踧踖、然而

凶器已搆、其勢不レ得中休、而猶守迷圖、無復改意、饒速日命本知天神慇懃、懃唯天孫是與、且見夫長髓彦稟性愎很、不可教以天人之際、乃殺之、帥其衆而歸順焉、天皇素聞饒速日命是自天降者、而今果立忠効、則褒而寵之、此物部氏之遠祖也、

己未年春二月壬辰朔辛亥、命諸將練士卒、是時層富縣波哆丘岬有新城戸畔者、丘岬、此云塢介佐棄、又和珥坂下有居勢祝者、坂下、此云瑳伽梅苔、臍見長柄、又高尾張邑有土蜘蛛、其爲人也、身短而手足長、與侏儒相類、皇軍結葛網而掩襲殺之、因改號其邑曰葛城、夫磐余之地、舊名片居、片居、此云伽哆萎、亦曰片立、片立、此云伽哆哆知、逮我皇師之破虜也、大軍集而滿於其地、因改號爲磐余、或曰、天皇往嘗嚴瓮粮出軍而征、是時磯城八十梟帥於彼處屯聚居之、屯聚居、此云怡波瀰萎、果與天皇大戰、遂爲皇師所滅、故名之曰磐余邑、又皇師立詰之處、是謂猛田、作城處號曰城田、又賊衆戰死而僵

と能はず故に賊虜は悉く誅せむとなり
○急、原本忽に作る應本島本峯本に據て改む
○來目歌、來目舞の時に謠ふ歌を云
○的取歌者、歌へる人の名を取て名づけたりとの意
○(注)饒速日云々、此注は上文初出の條にあるべし
○可美眞手命、記には宇摩志麻遲命とあり
○兩種、私記にフタハラとある方よし
○天皇曰、以下十五字應本島本峯本等なし
○天羽々矢、神代紀に見ゆ靫も同じく見ゆ
○賜示、奉示に對する語なれど啣か疑し
○愎很、私記にイスカシマニモトルと訓む原本にクスカシとあるは非なり字書に很同レ狠戾也不聽從也愎は很也とあり
○天人之際、君臣之道と云に同じ
○物部、武を以て朝廷に仕奉る部屬を云後に氏の名となれり此氏族甚多し
【己未年】(二月)層富縣、添上添下郡是なり

○渡哆丘、添下郡五條の西に赤膚山あり是か ○和珥坂、添上郡和珥村あり ○居勢祝、葛上郡に巨勢山田神社あり又古瀬村あり此祝は神主祝部の祝にはあらざるべし ○臍見長柄丘、式に葛上郡長柄神社あり其地なりと云(重胤の説)長柄は兩訓あれど私記の説よし ○土蜘蛛、摂津風土記に土蜘蛛此人恒居穴中故號賤名曰土蜘蛛とあり景行紀常陸風土記等を併考ふるにいづれも穴居せりさればツチグモは土籠りにて土に籠り住む意なるべし ○偏師、一部分の軍勢を云 ○侏儒、身の長の短き人なり ○結葛網云々、蜘蛛と云の縁語なるべし ○葛城、後の葛上下兩郡の地 ○(注)伽哆婆、婆原本婁に作る熟本に據て改む ○或曰、以下曰磐金邑に至る恐くは分注ならむ ○出軍而征、而原本西に作る信友校本に據て改む ○猛田、十市郡竹田村あり ○城田、未詳録大和神別巨勢城田臣あり或は巨勢郷の内ならむか ○埴安、十市郡なり萬葉に埴安堤埴安御門原など見ゆ

(三月)自我東征於茲六年、甲寅年より今年己未に至る正しく六年なり ○賴以皇天之威、皇祖天神の靈威に賴てなり ○尙梗、字書に猛也如彊梗頑梗また荒也とあり故にコハシとも訓むアレタリとも訓む ○中洲、應本島本豫本洲州に作る ○風塵、風起れば塵揚て天地昏濁なり因て世の騷擾に喩ふ ○恢廓、漢書吾丘壽王傳に恢廓祖業と見ゆ恢は大也廣大貌廓は開也張小使大之意とあり ○規摹、規は字書に謀畫也摹は有所抑倣也とあ

屍枕臂處、呼爲頰枕田、天皇以前年秋九月、潛取天香山之埴土、以造八十平瓮、躬自齋戒祭諸神、遂得安定區宇、故號取土之處曰埴安、

三月辛酉朔丁卯、下令曰、自我東征於茲六年矣、賴以皇天之威、凶徒就戮、雖邊土未清、餘妖尙梗、而中洲之地無復風塵、誠宜恢廓皇都、規摹大壯、而今運屬此屯蒙、民心朴素、巢捿穴住、俗惟常、夫大人立制、義必隨時、苟有利民、何妨聖造、且當披拂山林、經營宮室、而恭臨寶位、以鎭元元、上則答乾靈授國之德、下則弘皇孫養正之心、然後兼六合、以開都、掩八紘、而爲宇、不亦可乎、觀夫畝傍山、畝傍山、此云宇禰摩夜摩、東南橿原地者、蓋國之墺區乎、可治之、是月、卽命有司、

り

○大壯、易繫辭に上古穴居而野處後世聖人易之以宮室上棟下宇以待風雨蓋取諸大壯也と見え宮室は穴居よりも壯大なる故に宮室の意に用ふ　○此屯蒙、熱本及舊紀此字なし是なるが如し易序卦云屯者物之始生也物生必蒙故受之以蒙蒙者蒙也物之穉也　○大人、易に大人者與天地合其德與日月合其明とあり故にヒジリと訓む　○苟有利民、クホサの義未詳　○何妨聖造、聖造は皇宮造營を云大人は時勢に伴ひて制度を立つ故に苟くも人民に利益あらば皇居の御造營も亦可なりとの意なり　○寶位、タカミクラヰは高御座居なり寶位の字は易に聖人大寶曰位とあるに據る　○元元、字書に民也とあり戰國策注云元善也民之類善故稱元　○乾靈、乾は天也靈は神靈也皇祖天神を云　○養正、上に出づ　○八紘、淮南子に九州外有八澤方千里八澤之外有八紘亦方千里とあり　○畝傍山、大和國高市郡　○墺區、文選西都賦に見え注に言四塞之險易爲備禦墺猶深險也と云　○是月、舊紀庚辰に作る　○經始帝宅、拾遺に天富命をして手置帆負彦狹知二神の孫を擧て正殿を構立せしむ云々と見ゆ

經始帝宅、

【庚申年】(八月)正妃、ムカヒメは向妻、正しく夫に對(ムカ)ふ意

○華胄、貴族なり華は字の如し胄は字書に裔也後也とあり(九月)乙巳、諸本己巳に作る干支を推すに此月に己巳なし舊紀に據て改む

○以爲正妃、通證云所謂女御入內之儀也

【辛酉年】(正月)卽帝位、此卽位の事拾遺に詳なり舊紀天皇本紀にも詳なれど拾遺其他の書を取集めて記せるものなり

○橿原宮、紀略此上に畝火の二字あり

○元年、天皇卽位の首の年を云公羊傳に元年者何君之始年也とあり

○皇后、記に求爲大后之美人とあり大后は本

庚申年秋八月癸丑朔戊辰、天皇當立正妃、改廣求華胄、時有人奏之曰、事代主神共三嶋溝樴耳神之女玉櫛媛所生兒、號曰媛蹈鞴五十鈴媛命、是國色之秀者、天皇悅之、九月壬午朔乙巳、納媛蹈鞴五十鈴媛命以爲正妃、

(元年)辛酉年春正月庚辰朔、天皇卽帝位於橿原宮、是歲爲天皇元年、尊正妃爲皇后、生皇子神八井耳命、神渟名川耳尊、故古語稱之曰於畝傍之橿原也、太立宮柱於底磐之根、峻峙搏風於高天之原、而始馭天下之天皇、號曰神日本磐余彦火火出見天皇焉、初天皇草創天基之日也、大伴氏之遠祖道臣命帥大來目部奉承密策、能以諷歌倒語

書に皇后とあるに同じ古は天皇の御妻等を總てキサキと申し其中の最上なる御一方を殊に尊みてオホキサキと申せり卽ち後の皇后なり漢土にて皇后の稱の始は初學記に秦稱皇帝正嫡曰皇后漢因之と見ゆ ○神八井耳命、諸本耳字なし紀靖紀及記に據て補ふ ○太立宮柱云々、上古の宮殿制作の狀態を述べて聖德を稱へ奉れるなり ○始馭天下、この御世に至りて天下悉く食國となれるを云 ○天基、アマツヒツギは天照大神の御位を繼承し給ふを云それに種々の文字を充てたるなり義に於て異なる所なし ○草創、東征以來の事を云 ○密策、祕密の勅旨 ○諷歌、諷は字書に不用正言託辭以感人也とあり他事に托して底意を述べたる歌を云 ○倒語、後世の所謂合詞(アヒコトバ)なり ○妖氣、通鑑に謂凶邪亂賊之風塵とあり信友校本に氣を氛に作れど拾遺にも妖氣とあり他にさる本なし

掃蕩妖氣、倒語之用、始起乎茲、

【二年】築坂、高市郡、楓本に筑坂とあり ○來目邑、高市郡にあり今も久米村と云 ○珍彥、頓史に椎根津彥とあり ○倭國造、此倭國は城下郡大和郷を云次に葛城國造とあるにて後の大和國の全土にあらざること明なり國造は伴造に對して地方にありて其國を治むる人を云 ○(注)珍彥云々、上文初出の條にあるべきなり ○猛田、已に出づ十市郡 ○縣主、一縣の主なり後の郡司と云が如し ○菟田主水部、菟田は宇陀郡主水は飲料の水を掌る職掌其の部屬を主水部と云 ○葛城、後城上城下の兩郡に分る ○葛城國造、葛城も後葛上葛下の兩郡に分る ○葛野主殿縣主部、葛野は山城の地名抄に山城國葛野郡葛野郷とある是なり主殿は宮殿を守る職掌にて其部屬を主殿部と云縣主も主殿部も何れも後氏の名となる

二年春二月甲辰朔乙巳、天皇定功行賞、賜道臣命宅地居于築坂邑、以寵異之、亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地、今號來目邑、此其緣也、以珍彥爲倭國造、珍彥、此云于磐吐故、又給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、是菟田主水部遠祖也、弟磯城名黑速、爲磯城縣主、復以劍根者爲葛城國造、又頭八咫烏亦入賞例、其苗裔卽葛野主殿縣主部是也、

【四年】降鑒、鑒は字書に鏡也照也とあり故にヒカリと訓り ○鄰祀、應本峯本及紀略鄰の下祭の字あり孝經に周公鄰祀后稷以配天注に郊祀祭天也祭天於南

四年春二月壬戌朔甲申、詔曰、我皇祖之靈也自天降鑒、光助朕躬、今諸虜已平、海內無事、可以郊祀天神、用申大孝者也、乃立靈畤於鳥見山中、其地號曰上小野榛原、下小野榛原、用祭皇祖天神焉、

郊ニ故曰レ郊とあり郊祀は南郊に於て祖先を天に配して祭るなり、こゝは皇祖天神を祭らせ給ふにて我國にては漢土の如く無形の天を祭ることなし鳥見の山中にて祀らせ給ふこと郊外にて祀ると聊相似たるに依て郊祀の字を借用せるのみ　○申大孝、百行孝より大なるはなし故に孝を大孝と云申は字書に致也舒也とあり　○靈時、字書に天地五帝所ニ基址ニ祭地也また時止也言神靈之所ニ依止ニ也とあり祭の庭を云神代紀に所謂齋庭なり　○鳥見、字陀郡萩原に天の森と稱する所あり是その遺跡なりと云

【卅一年】卅有一年、應本島本卅に作るは非なり　○腋上、葛上郡　○嗛間丘、通證云又名ニ國見山ニ在ニ本間村南ニ　○妍哉乎、乎は衍なるべし　○國之獲、私記にクニミテツとあり　○内木綿、眞迮國の枕詞　○眞迮國、記傳に眞に狹き國と云る意なりと云一說に眞幸國なりとあり　○蜻蛉、抄に蜻蛉和名カゲロフとあり雄略紀にはアキツと訓り　○臀呿、蜻蛉の雌雄互に尾を銜て輪になりて飛ぶ狀を云　○浦安國、心安き國なり　○細矛千足國、原本に細矛をホソホコと訓るは非なり、細矛は知の枕詞、千足は物の不足なく充實する意　○磯輪上秀眞國、磯輪上は枕詞か、秀眞は文字の如く秀でたる眞國の意、通釋云、磯輪はイソワと訓べし磯回の意大日本の土地は海中に高く磯を回らし萬國に秀出て外國の船のよりつき難き意　○大神、中本大字なし　○玉牆内國、國號考云玉牆を廻らしたる如く山の周れる内にある國といふ意、通釋には玉牆は枕詞なり牆の内つ國と云義にて外國に對へて内つ國と親しみ愛して詔へるなりと云　○虛空見日本國、虛空見は饒速日命の虛空より見られし國と云意

卅有一年夏四月乙酉朔、皇輿巡幸、因登腋上嗛間丘、而廻望國、狀曰、妍哉乎國之獲矣、妍哉、此云ニ瓦ウツユフノマサキクニトゴトシ妍奈珥夜、雖ニ内木綿之眞迮國、猶如蜻蛉之臀呿焉、由レ是始有ニ秋津洲之號ニ也、昔伊弉諾尊目ニ此國ニ曰、日本者浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、秀眞國、此云ニ袍圖莽勾儛ニ復大己貴大神目之曰、玉牆内國、及下至饒速日命乘ニ天磐船ニ而翔ニ行太虛ニ也、睨ニ是鄕ニ而降上之、故因目之曰ニ虛空見日本國ニ矣、

【四十二年】

【七十六年】一百廿七歲、記に一百三十七歲と

卅有二年春正月壬子朔甲寅、立ニ皇子神渟名川耳尊ニ爲ニ皇太子ニ、

七十有六年春三月甲午朔甲辰、天皇崩ニ于橿原宮ニ、時年一百廿七歲、明

あり
○畝傍山東北陵、記に畝傍山之北方白橿尾上とあり、東北は私記にウシトラノスミと訓り

年秋九月乙卯朔丙寅、葬畝傍山東北陵、

日本書紀卷第三

日本書紀卷第四（ヤマトフミノマキノツイデヨハシラニアタルマキ（北））

神渟名川耳天皇　綏靖天皇
磯城津彦玉手看天皇　安寧天皇
大日本彦耜友天皇　懿德天皇
觀松彦香殖稻天皇　孝昭天皇
日本足彦押人天皇　孝安天皇
大日本根子彦太瓊天皇　孝靈天皇
大日本根子彦國牽天皇　孝元天皇
稚日本根子彦太日日天皇　開化天皇

神渟名川耳天皇（スイゼイテムワウ）　綏靖天皇

神渟名川耳天皇（カムヌナカハミミノ）、神日本磐余彦（神武）天皇第三子也（ノミハシラニアタリタマフミコナリ）、母曰媛蹈鞴五十（ハハヒメヒトタタライ）

【卽位前紀】神渟名川耳、應本名を中に作る○風姿、私記にミヤビと訓り風は字書に氣韻也と

あり風采と云に同じ姿は態也とあり
○岐嶷、私記にイコウカニオサオサシとあり字義は文選吳都賦注に少而賢者と見ゆ
○魁偉、字鏡に傀を太々波志と訓み靈異記名義抄に偉を多々波シクと訓り萬葉に十五月(モチヅキ)之多田波思家武登とあり滿又は湛の字の意魁偉いづれも字書に大也とあり
○沈毅、私記一にシヅミツヨシ同二にオコ〳〵シとありオコは嚴なる意か沈原本沉に作る北本應本に據て改む
○喪、原本哀に作る北本及私記に據て改む
○庶兄、私記にイロネとあれどマヽアニと訓べし
○厝懷、厝は字書に措に同じとあり
○諒闇、字書に天子居喪之稱也孔安國曰諒信也闇默也默而不言也とありミモノオモヒは親の喪に籠り謹々として樂しまざるを云
○威福自由、文選注に威福は賞罰也とあり賞罰心のまゝに自由なるを云原本威を盛に作る北本應本

鈴媛命、事代主神之大女也、天皇風姿岐嶷、少有雄拔之氣、及壯容貌魁偉、武藝過人、而志尙沈毅、至冊八歲神日本磐余彥天皇崩、時神渟名川耳尊孝性純深、悲慕無已、特留心於喪葬之事焉、其庶兄手研耳命、行年已長、久歷朝機、故亦委事而親之、然其王立操厝懷、本乖仁義、遂以諒闇之際、威福自由、苞藏禍心、圖害二弟、于時也大歲己卯、冬十一月、神渟名川耳尊、與兄神八井耳命、陰知其志、而善防之、至於山陵事畢、乃使弓部稚彥造弓、倭鍛部天津眞浦造眞麻鏃、矢部作箭、及弓矢既成、神渟名川耳尊欲以射殺手研耳命、會有手研耳命於片丘大窖中、獨臥于大牀、時神渟名川耳尊謂神八井耳命曰、今適其時也、夫言貴密、事宜愼、故我之陰謀本無預者、今日之事、唯吾與爾自行之耳、吾當先開窖戸、爾其射之、因相隨進入、神渟名川耳尊突開其戸、神八井耳命則手脚戰慄不能放矢、時神渟名川耳尊、掣取其兄所持弓矢、而射手研耳命、一發中胷、再發中背、遂殺之、

於是、神八井耳命懣然自服、讓於神渟名川耳尊曰、吾是乃兄、而懦弱不能致果、今汝特挺神武、自誅元惡、宜哉乎、汝之光臨天位、以承皇祖之業、吾當爲汝輔之奉典神祇者、是卽多臣之始祖也、

及紀略に據て改む
○苞藏禍心、惡心を包み藏すを云
○弓部、玉本に弓削部とあり弓削部を略して弓部と云り弓を作る部屬なり
○倭鍛部、韓鍛部に對して云るか或は大倭國に住る鍛部なればしか云るかいづれとも定め難し　○天津眞浦、記神代卷に鍛人天津麻羅と見ゆ記傳に一神の名にはあらで鍛人の通稱かと云　○眞麻鏃、眞麻は神代紀に眞鹿兒矢と見ゆ鏃は抄調度部に箭其足曰鏑或謂之鏃訓夜佐岐俗云夜之利とあり　○矢部、ヤハキと訓み矢を作る部屬を云　○片丘、大和國葛下郡　○睿、字書に地室也とあり　○神渟名川耳、神の字玉本及下文に據て補ふ　○預、アヅフは相副也顯宗紀にソフと訓り　○一發、ヒトサは一刺なるべし弓に矢をつがへるを矢刺と云其サシのシを略けるならむ天武紀に一箭をヒトサと訓るも亦同じ通證にサは矢なりと云は信ど難し　○自服、私記の訓よし　○不能致果、標注にイは發語シキナカラズは及ばずなりと云致果は左傳宣公二年に殺敵爲果致果爲致とあり　○奉典神祇、天社國社の事をつかさどり奉らせ給ふを云記には僕者扶汝命爲忌人而仕奉也とあり記傳に忌人（イハヒビト）は天皇の御親行ひ給ふ御神事を扶け奉り給ふ職を云なりさるは上代には御神事をあるが中に最も重き御業として天皇大御親仕奉り給へる故に其御扶輔を爲給ふなればいと〳〵重き職掌にぞ有ける上に扶汝命といひ書紀にも爲汝輔とあるに心を著くべきものぞとあるが如く忌人となりて天皇の行はせ給ふ御神事を輔佐て奉らせ給ひ天社國社の事をも掌らせ給ひ後の神祇伯の職に當らせ給ひしなり　○是卽、北本に卽是とあり　○多臣、多は大和國十市郡の地名なり此地に住みしより後に氏の名となれり、記には多臣以外に小子部連坂合部連火君大分君阿蘇臣筑紫三家連雀部臣小長谷造都祁直伊余國造科野國造道奥石城國造常道仲國造長狹國造伊勢船木直尾張丹羽臣嶋田臣等いづれも此命の子孫なりとあり其同族甚多し

【元年】高丘宮、志云葛上郡高丘宮古蹟森脇村今南葛城郡吐田鄉村大字森脇
○皇太后、太を原本大に作る諸本に據て改む
【二年】五十鈴依媛、水本媛の下命の字を補ふ
○（注）也、北本なし
【四年】畝傍山北、志云高市郡神八井耳墓在山本村稱御陵山

（庚辰）元年春正月壬申朔己卯、神渟名川耳尊卽天皇位、都葛城、是謂高丘宮、尊皇后曰皇太后、是年也太歲庚辰、

（辛未）二年春正月、立五十鈴依媛爲皇后、一書云、磯城縣主女川派媛、一書（女擧）云、春日縣主大日諸女縣繒媛也、卽天皇之姨也、后生磯城津彥玉手看天皇、

（癸巳）四年夏四月、神八井耳命薨、卽葬于畝傍山北、

【廿五年】午、原本子に作る北本紀略に據て改む
【卅三年】八十四、楓本引一本及紀略八十三とし記には四十五歳とす

【即位前紀】年廿一、集解に原作二十一按下文曰崩年五十七編年記即位年廿據此推考則二字衍と云て十一に改む
○秋、水本に據て補ふ
○太子、通證、集解、通釋並に前後の例に據て皇字を上に補ふ

【元年】桃花鳥田丘上陵、高市郡白橿村大字四條畑云在二字畝傍一青村東南丘一俗呼二主膳冢一
【二年】片鹽、葛下郡○浮孔宮、志云在二葛下郡三倉堂村一一證には河内國と云
【三年】(注)川津媛、記に河俣比賣とあり

(甲辰)廿五年春正月壬午朔戊子、立皇子磯城津彦玉手看尊、爲皇太子、
(壬子)卅三年夏五月、天皇不豫、癸酉、崩、時年八十四、

磯城津彦玉手看天皇　安寧天皇

磯城津彦玉手看天皇、神渟名川耳天皇太子也、母曰五十鈴依媛命、事代主神之少女也、天皇以神渟名川耳天皇廿五年、立爲皇太子、年廿一、卅三年夏五月、神渟名川耳天皇崩、其年秋七月癸亥朔乙丑、太子即天皇位、

(癸丑)元年冬十月丙戌朔丙申、葬神渟名川耳天皇於倭桃花鳥田丘上陵、尊皇后曰皇太后、是年也太歳癸丑、
(甲寅)二年、遷都於片鹽、是謂浮孔宮、
(乙卯)三年春正月戊寅朔壬午、立渟名底仲媛命、亦曰渟名襲媛、爲皇后、一書云、磯城縣主葉大間宿禰女糸井媛、一云、江女川津媛、先是后生二皇子、第一曰息石耳命、第二曰大日本彦耜友天皇、一云、生三皇子、第一曰常津彦某兄、第二曰大日本彦耜友天皇、第三曰磯城津彦命、

【十一年】皇太子也、也は衍なりとて集解に削る　○猪使連、錄右京皇別に猪使宿禰と見ゆ天武紀十三年十二月宿禰となる

【卅八年】五十七、記に四十九歲とあり紀略大日本史本書に同じ

【卽位前紀】鴨玉、玉は原本玉に作る北本玉本及紀略に據て改む式內常陸國新治郡鴨大神御子神主神社の主を三條西本に玉に作る亦證とすべし　○壬戌、集解前後の例に據て之を削る

【元年】畝傍山南御陰井上陵、南は諸陵式に西南とす高市郡白橿村大字吉田にあり志に在吉田村御蔭井西北丘と云　○己丑、原本乙丑に作る丙子朔此月乙丑なし通證に據て改む

【二年】輕、高市郡白橿村の東部大字大輕の地　○曲峽宮、記に輕之境岡宮とあり通證に寺島氏曰舊趾在輕町坤方今名田有末波利乎佐と云

（癸亥）十一年春正月壬戌朔、立大日本彥耜友尊爲皇太子也、弟磯城津彥命、是猪使連之始祖也、

（庚寅）卅八年冬十二月庚戌朔乙卯、天皇崩、時年五十七、

大日本彥耜友天皇　懿德天皇

大日本彥耜友天皇、磯城津彥玉手看天皇第二子也、母曰渟名底仲媛命、事代主神孫、鴨玉女也、磯城津彥玉手看天皇十一年春正月壬戌、立爲皇太子、年十六、卅八年冬十二月、磯城津彥玉手看天皇崩、

（辛卯）元年春二月己酉朔壬子、皇太子卽天皇位、秋八月丙午朔、葬磯城津彥玉手看天皇於畝傍山南御陰井上陵、九月丙子朔己丑、尊皇后曰皇太后、是年也太歲辛卯、

（壬辰）二年春正月甲戌朔戊寅、遷都於輕地、是謂曲峽宮、二月癸卯朔癸丑、立天豐津媛命爲皇后、一云、磯城縣主葉江男、弟猪手女泉媛、一云、磯城縣主太眞稚彥女飯日媛也、后生觀松彥香殖稻天皇、一云、天皇母弟武石彥奇友背命、

【廿二年】戊午、原本戊子に作る北本應本玉本及紀略に據て改む

【卅四年】天皇崩、記に御年四十五歲とあり紀略には七十七とす大日本史亦同じ

【卽位前紀】母皇后、集解此下に曰の字を補ふ

○朔戊午、諸本なし舊紀に據て補ふ

○戊午、原本戊子に作る北本玉本及紀略に據て補ふ

○纖沙谿上陵、高市郡白橿村大字池尻、志云在畦畝村西纖沙谿

【元年】甲午、原本甲子に作る北本紀略及舊紀に據て改む

○秋、原本なし北本應本玉本及紀略に據て補ふ

○七月、大倭注進狀七月の下に甲寅朔の三字あり紀に無きは脫たるか

○掖上、葛上郡南葛城郡にあり

○池心宮、志云在池內御所二村間

【廿九年】(注)狹太雄、原本雄を媛に作る集解に據て改む

【六十八年】和珥臣、和珥は大和國添上郡今檪本

(壬子)廿二年春二月丁未朔戊午、立觀松彥香殖稻尊爲皇太子、年十八、

(甲子)卅四年秋九月甲子朔辛未、天皇崩、

觀松彥香殖稻天皇　孝昭天皇

觀松彥香殖稻天皇、大日本彥耜友天皇太子也、母皇后天豐津媛命、息石耳命之女也、天皇以大日本彥耜友天皇廿二年二月丁未朔戊午、立爲皇太子、卅四年秋九月、大日本彥耜友天皇崩、明年冬十月戊午朔庚午、葬大日本彥耜友天皇於畝傍山南纖沙谿上陵、

(丙寅)元年春正月丙戌朔甲午、皇太子卽天皇位、夏四月乙卯朔己未、尊皇后曰皇太后、秋七月遷都於掖上、是謂池心宮、是年也太歲丙寅、

(甲午)廿九年春正月甲辰朔丙午、立世襲足媛爲皇后、一云、磯城縣主葉江女淳名城津媛、一云、倭國豐秋狹太雄女大井媛也、后生天足彥國押人命、日本足彥國押人天皇、

(庚戌)六十八年春正月丁亥朔庚子、立日本足彥國押人尊爲皇太子、年廿、天足彥國押人命、此和珥臣等始祖也、

村の地名にて和珥臣は錄に大春日朝臣同祖とあり春日和珥臣とも見え同族頗多く記には大宅粟田小野等十數氏を擧ぐ

【八十三年】天皇崩、記に御年九十三歲とあり紀略には百十四とす大日本史亦同じ

【即位前紀】香殖稻、原本稻の字を脫す前後の例に據て補ふ

【元年】乙酉、北本玉本及紀略己酉に作る　○辛卯、北本玉本及紀略辛亥に作る

【二年】室、葛上郡牟婁鄕あり今秋津村大字室の名存す是其地なり　○秋津島宮、編年記云大和國葛上郡今掖上池南西田中也

【廿六年】

【卅八年】葬觀松彥香殖稻天皇、此事舊紀には上文八十三年八月天皇崩の下に明年八月葬於掖上博多山上陵とあれど紀略も亦本書に同じ　○博多山上陵、式に大和國葛上郡とあり南葛城郡三室村（御所町の西南）

【七十六年】

八十三年秋八月丁巳朔辛酉、天皇崩、

日本足彥國押人天皇　孝安天皇

日本足彥國押人天皇、觀松彥香殖稻天皇第二子也、母曰世襲足媛、尾張連遠祖瀛津世襲之妹也、天皇以觀松彥香殖稻天皇六十八年春正月、立爲皇太子、八十三年秋八月、觀松彥香殖稻天皇崩、

元年春正月乙酉朔辛卯、皇太子卽天皇位、秋八月辛巳朔、尊皇后曰皇太后、是年也太歲己丑、

二年冬十月、遷都於室地、是謂秋津嶋宮、

廿六年春二月己丑朔壬寅、立姪押媛爲皇后、一云、磯城縣主葉江女長媛、一云、十市縣主五十坂彥女五十坂媛也、

后生大日本根子彥太瓊天皇、

卅八年秋八月丙子朔己丑、葬觀松彥香殖稻天皇于掖上博多山上陵、

七十六年春正月己巳朔癸酉、立大日本根子彥太瓊尊爲皇太子、年廿六、

【百二年】天皇崩、記に御ゥ百二十三歳とあり紀略には百卅七とす大日本史亦同じ

【即位前紀】蓋、以下十一字集解に私記の攙入として削る

○甲午、原本甲子に作る北本應本玉本及紀略に據て改む

○玉手丘上陵、南葛城郡掖上村大字玉手、前王廟陵記云玉手村是也在二室村西北河東一

○黑田、抄に大和國城下郡黑田鄉久留多とあり今都村大字黑田是なり

○廬戸宮、志云在二宮古黑田二村間鄙杜一

【元年】太子、集解太の上に皇の字を補ふ

【二年】(壬)十市縣主云々、誤あるべし記には十市縣主之祖大目之女細比賣命とあり

○某姉、イロは兄弟をイロセイロト母をイロハといふイロにて人を親愛していふ言なり某の字をかく訓るは記傳に人を親みて云るより轉て其名を云べき時に名に代て伊呂と云しことのありしにや某は名に代て云字なりとあ

(庚午)百二年春正月戊戌朔丙午、天皇崩、

大日本根子彦太瓊天皇　孝靈天皇

大日本根子彦太瓊天皇、日本足彦國押人天皇、(一云)太子也、母曰二押媛一、蓋天足彦國押人命之女乎、天皇以二日本足彦國押人天皇七十六年春正月一、立爲二皇太子一、百二年春正月、日本足彦國押人天皇崩、秋九月甲午朔丙午、葬二日本足彦國押人天皇于玉手丘上陵一、冬十二月癸亥朔丙寅、皇太子遷都於黑田、是謂二廬戸宮一、

(辛未)元年春正月壬辰朔癸卯、太子卽天皇位、尊二皇后一曰二皇太后一、是年也太歲辛未、

(壬申)二年春二月丙辰朔丙寅、立二細媛命一爲二皇后一、(一云、春日千乳早山香媛、一云、十市縣主等祖女、眞香媛也、)后生二大日本根子彦國牽天皇一、妃倭國香媛(亦名紅某姉、)生二倭迹迹日百襲姬命、彦五十狹芹彦命、(亦名吉備津彦命、)倭迹迹稚屋姬命、亦妃紅某弟、生二彦狹嶋命、稚武彦命、弟稚武彦命、是吉備臣之始祖也、

り

【卅六年】

【七十六年】天皇崩、記に御年一百六歲とあり紀略は百十とし大日本史は百廿八とす

【即位前紀】磯城縣主大目、記には十市縣主之祖大目とあり

【元年】太子、集解太の上に皇の字を補ふ

【四年】三月、水訂本云推曆三月癸未朔十二日甲午正月甲申朔十一日甲午蓋正訛作三平○境原宮、通證に寺島氏曰在高市郡輕村大道西里民云佐加伎婆羅とあり

【六年】片丘馬坂陵、北葛城郡王寺村大字王寺、志云在王寺村馬背坂東山中

(丙午)卅六年春正月己亥朔、立彥國牽尊爲皇太子、

(丙戌)七十六年春二月丙午朔癸丑、天皇崩、

大日本根子彥國牽天皇　孝元天皇

大日本根子彥國牽天皇、大日本根子彥太瓊天皇之太子也、母曰細媛命、磯城縣主大目之女也、天皇以大日本根子彥太瓊天皇卅六年春正月、立爲皇太子、年十九、七十六年春二月、大日本根子彥太瓊天皇崩、

(丁亥)元年春正月辛未朔甲申、太子即天皇位、尊皇后曰皇太后、是年也太歲丁亥、

(庚寅)四年春三月甲申朔甲午、遷都於輕地、是謂境原宮、

(壬辰)六年秋九月戊戌朔癸卯、葬大日本根子彥太瓊天皇于片丘馬坂陵、

(癸巳)七年春二月丙寅朔丁卯、立欝色謎命爲皇后、后生二男一女、第一曰大彥命、第二曰稚日本根子彥大日日天皇、第三曰倭迹迹姬命、一云、天皇母命也、妃伊香色謎命生彥太忍信命、次妃河內青玉繫女、埴安媛、生武埴安

【七年】謎、原本遺に作る北本及紀略に據て改む下同じ
○大日日、原本フトヒ、と訓るは非なり記に大毘々命とありオホヒ、と訓べきなり
○膳臣、原本膳ヵ臣に作る北本玉本及紀略に據て改む
○武内宿禰之祖父、記には父とす景行紀に據るに此彦太忍信命の子屋主忍男武雄心命の子武内宿禰なり兩說異れり
【廿二年】
【五十七年】大日本根子彦國牽、此八字恐らくは衍ならむ
○天皇崩、記に御年五十七歲とあり紀略は百十七とし大日本史は百十六とす
【卽位前紀】
○太子、集解太の上に皇字を補ふ
【元年】春日、抄に大和國添上郡春日郷加須加とあり今の奈良市及其附近の地なり
○率川宮、率原本に卒とあり北本聽本玉本に據て改む下同じ奈良市野田四愚院趾は其宮趾なるべし

彦命、兄大彦命、是阿倍臣、膳臣、阿閉臣、狹狹城山君、筑紫國造、越國造、伊賀臣、凡七族之始祖也、彦太忍信命、是武内宿禰之祖父也、

廿二年春正月己巳朔壬午、立稚日本根子彦大日日尊爲皇太子、年十六、

五十七年秋九月壬申朔癸酉、大日本根子彦國牽天皇崩、

稚日本根子彦大日日天皇　開化天皇

稚日本根子彦大日日天皇、大日本根子彦國牽天皇第二子也、母曰欝色謎命、穗積臣遠祖欝色雄命之妹也、天皇以大日本根子彦國牽天皇廿二年春正月、立爲皇太子、年十六、五十七年秋九月、大日本根子彦國牽天皇崩、冬十一月辛未朔壬午、太子卽天皇位、

元年春正月庚午朔癸酉、尊皇后曰皇太后、冬十月丙申朔戊申、遷都于春日之地、春日、此云一箇酒鵝、是謂率川宮、率川、此云一伊社箇波一、是年也太歲甲申、

五年春二月丁未朔壬子、葬大日本根子彦國牽天皇于劍池嶋上陵、

と云

【五年】劍池島上陵、高市郡白橿村大字石川、志云在二石河村劍池南一俗呼二中山家一

【六年】注、是庶母也、集解云私記攙入

○産隅、産原本彦に作る北本應本及紀略に據て改む垂仁紀には彦湯隅命とあり

○彦坐王命、原本命字なし北本に據て補ふ應本此下に次妃吉備彦之女色媛生武豐葉田鹿別命の十七字あり

【廿八年】御間城入彦尊、彦の下五十瓊殖の四字を脱せる歟

【六十年】率川坂本陵、奈良市油坂町字山の寺、廟陵記云或曰今在二奈良林小路韓國社奥念佛寺境内一

○(注)年百十五、記に御年六十三歳とあり紀略は百十三とし大日本史百十一とす

六年春正月辛丑朔甲寅、立二伊香色謎命一爲二皇后一、是庶母也、后生二御間城入彦五十瓊殖天皇一、先是、天皇納二丹波竹野媛一爲二妃一、生二彦湯産隅命一、亦名彦蒋鋤命、次妃、和珥臣遠祖姥津命之妹、姥津媛生二彦坐王命一、

廿八年春正月癸巳朔丁酉、立二御間城入彦尊一爲二皇太子一、年十九、

六十年夏四月丙辰朔甲子、天皇崩、冬十月癸丑朔乙卯、葬二于春日率川坂本陵一、一云、坂上陵、時年百十五、

日本書紀卷第四

日本書紀卷第五

御間城入彥五十瓊殖天皇　崇神天皇

御間城入彥五十瓊殖天皇、稚日本根子彥大日日天皇第二子也、母曰伊香色謎命、物部氏遠祖、大綜麻杵之女也、天皇年十九歲、立爲皇太子、識性聰敏、幼好雄略、既壯寬博謹愼、崇重神祇、恒有經綸天業之心焉、六十年夏四月、稚日本根子彥大日日天皇崩、

元年春正月壬午朔甲午、皇太子卽天皇位、尊皇后曰皇太后、二月辛亥朔丙寅、立御間城姬爲皇后、先是后生活目入彥五十狹茅天皇、彥五十狹茅命、國方姬命、千千衝倭姬命、倭彥命、五十日鶴彥命、又妃紀伊國荒河戸畔女、遠津年魚眼眼妙媛、生豐城入彥命、豐鍬入姬命、次妃尾張大海媛、一云、大海宿禰女八坂振天某邊、生八坂入彥命、渟名城入姬命、十市瓊入姬命、是年也太歲甲申、

【卽位前紀】根子彥、原本彥を脫す前紀に據て補ふ下同じ　○謎、原本謎に作り北本姬に作る前紀に據て改む　○崇重、崇をカタテと訓むこと天孫降臨章に見ゆ

【元年】御間城姬、大彥命の女　○尾張大海媛、記に尾張連之祖意富阿麻比賣とあり　○(注)一云以下十三字、原本眼妙媛の下に入たり集解の說に據て此に移む　某は原本其に作る北本類史に據て改む　○渟名城、北本玉本及紀略名を中に作る

(丙戌)三年秋九月、遷都於磯城、是謂瑞籬宮、

(丁亥)四年冬十月庚申朔壬午、詔曰、惟我皇祖、諸天皇等、光臨宸極者、豈爲一身乎、蓋所以司牧人神、經綸天下、故能世闡玄功、時流至德、今朕奉承大運、愛育黎元、何當聿遵皇祖之跡、永保無窮之祚、其羣卿百僚、竭爾忠貞、共安天下、不亦可乎、

(戊子)五年、國內多疾疫、民有死亡者、且大半矣、

(己丑)六年、百姓流離、或有背叛、其勢難以德治之、是以晨興夕惕、請罪神祇、先是天照大神倭大國魂二神、並祭於天皇大殿之內、然畏其神勢、共住不安、故以天照大神託豐鍬入姬命、祭於倭笠縫邑、仍立磯堅城神籬、神籬此云比莽呂岐、亦以日本大國魂神託淳名城入姬命令祭、然淳名城入姬髮落體瘦而不能祭、

【三年】磯城、大和國舊城上城下兩郡是なり　○瑞籬宮、磯城郡三輪町大字金屋、志云在三輪村東南志紀御縣神社西

【四年】宸極、字書に謂北極也と見え文選解尙書表注に宸極帝位とあり北極星を以て帝位に喩ふるなり　○司牧人神、司は主、牧は養なり人神の文字後漢書隗囂傳に出づ人と神となり牧原本收に作る北本應本に據て改む　○玄功、梁書敬帝紀に孔子を贊めて闡玄功とあり深遠なる功業なり　○黎元、文選注に百姓也とあり人民なり云　○聿遵、字書に聿訓述也、述前所以申遂とあり　○共、原本並に作る北本に據て改む

【五年】疾疫、抄に說文云疫（衣夜美一云度歧乃介）民皆病也とあり民皆病みて役に赴くが如くなる故かく云釋名にも疫役也言有鬼行役也とあり

【六年】流離、漢書師古注に謂亡其居處也とあり寄邊なくさまよふを云　○天照大神、八咫鏡を申す　○倭大國魂神、式に大和國山邊郡大和坐大國魂神社とあり大國魂神は大己貴神の荒魂にましまして大倭註進狀に在大倭豐秋津國守國家因以號曰倭大國魂神亦曰大地主神以八尺瓊爲神體とあり倭原本和に作る北本應本及紀略に據て改む　○笠縫邑、志に在十市郡十市新木二村間小祠尙存とあり奈良縣史蹟調査會報告書（大宮氏調査）に現今の磯城郡多村大字新木及秦の庄に亘れる地域にして當昔神籬の舊趾は大字秦庄字みやかまちにて元此地に大神宮の祠宇ありしを後に秦樂寺の境內に移し後更に春日神社の地內に移し今も笠縫大神宮と云る小祠を存せりと云　○磯堅城、通證に疑堅字是傍註謬挿入于本文者歟と、磯城は神代紀に所謂磐境に同じ石キは城にて磐石を以て築固めたる一區域を云　○神籬、神祠

を云詳に神代紀に出づ　○令祭、原本令の字なし北本玉本に據て補ふ　○體瘦、ヤサカミは瘦屈(ヤセカ、ミ)の略なりと云

【七年】(二月)鴻基、帝位を云ふ　○王風、風は教化感化なり王化と云に同じ　○轉、原本博に作る北本に據て改む　○命神龜、龜卜の文字此に初て見ゆ、命は周禮春官大卜の注に命龜告龜以所卜之事とあり職員令神祇官卜兆の義解に卜者灼龜也凡灼龜占吉凶者是卜部之執業と見えたり　○神淺茅原、通證に城上郡笠村上方爲笠山其野曰淺茅原とあり　○然猶、原本猶字なし北本玉本に據て補ふ　○沐浴、ユカハアミは齋川浴なり水に浴して齋み清むるを云　○裏、原本なし北本玉本に據て補ふ　○貴人、ウマヒトと訓むべし舊訓ムチとあるは非なり

(八月)倭迹迹神淺茅原目妙姬、倭迹々日百襲姬なるべしされば迹の誤か　○大水口宿禰、錄左京神

(崇神)七年春二月丁丑朔辛卯、詔曰、昔我皇祖大啓鴻基、其後聖業逾高、王風轉盛、不意、今當朕世數有災害、恐朝無善政、取咎於神祇耶、盍命神龜以極致災之所由也、於是天皇乃幸于神淺茅原、而會八十萬神、以卜問、是時神明憑倭迹迹日百襲姬命曰、天皇何憂國之不治也、若能敬祭我者、必當自平矣、天皇問曰、教如此者誰神也、答曰、我是倭國域內所居神、名爲大物主神、時得神語隨教祭祀、然猶於事無驗、天皇乃沐浴齋戒、潔淨殿內、祈之曰、朕禮神尙未盡耶、何不享之甚也、冀亦夢裏教之、以畢神恩、是夜夢有一貴人、對立殿戶、自稱大物主神曰、天皇勿復爲愁國之不治、是吾意也、若以吾兒大田田根子、令祭吾者、則立平矣、亦有海外之國、自當歸伏、秋八月癸卯朔己酉、倭迹迹神淺茅原目妙姬、穗積臣遠祖大水口宿禰、伊勢麻績君、三人共同夢而奏言、昨夜夢之有一貴人、誨曰、以大田田根子命爲祭大物主、大

神之主、亦以市磯長尾市爲祭倭大國魂神主、必天下太平矣、天皇得夢辭益歡於心、布告天下求大田田根子、卽於茅渟縣陶邑、得大田田根子而貢之、天皇卽親臨于神淺茅原、會諸王卿及八十諸部、而問大田田根子曰、汝其誰子、對曰、父曰大物主大神、母曰活玉依媛、陶津耳之女、亦云、奇日方天日方武茅渟祇之女也、天皇曰、朕當榮樂、乃卜使物部連祖伊香色雄爲神班物者、吉之、又卜便祭他神不吉、十一月壬申朔己卯、命伊香色雄而以物部八十手所作祭神之物、卽以大田田根子、爲祭大物主大神之主、又以長尾市、爲祭倭大國魂神之主、然後卜祭他神吉焉、便別祭八十萬羣神、仍定天社國社及神地神戸、於是疫病始息、國內漸謐、五穀既成、百姓饒之、

別穗積臣の條に伊香賀色雄命の男とあり　○伊勢麻績君、拾遺に長白羽神伊勢國麻績祖とあり此には名を逸す　○昨夜、昨は名義抄にキソフと訓み萬葉にはキソと訓めり　○市磯長尾市、市磯は十市郡の地名垂仁紀に倭直祖長尾市とあり　○大國魂、原本大字なし北本玉本に據て補ふ　○陶邑、式に和泉國大鳥郡陶荒田神社とある陶の地にて今の泉北郡東西陶器村是なり　○父曰大物主大神、記には大物主大神娶陶津耳命之女活玉依毘賣生子名櫛御方命之子飯肩巢見命之子建甕槌命之子僕意富多々泥古とあり錄攝津神別神人の條には大國主命五世孫大田田根子命とあり　○亦云以下十五字、水訂本云按大田々根子自稱外家不可二辭蓋亦云以下十五字或附異說於下而誤爲本文乎集解には分注とす　○神班物者　釋紀に班幣帛之人也とあり班は分なり分ちて奉るを云舊紀天孫本紀に班神物とあり　○壬申朔己卯、原本丁卯とあり北本熱本應本及玉本丁卯朔己卯とあり干支を推すに丁卯は十月二十五日にして十一月の朔にあらず故に丁卯を改て壬申とし己卯は諸本に據る　○物部八十手、物部とは武を以て仕奉る部曲を云此は職名にて氏にはあらず八十手は八十人と云に同じ　○祭神之物、此下拜祭の二字など脫たるか祭神の物は記に天之八十比羅訶を作るとあればそれ等の祭具を指せり　○以長尾市云々、此大神の御社は城上郡穴磯邑なり　○便別、大物主神と國魂神の別にと云意　○定天社國社、八十萬群神を祭るに就きて其祭るべき天神地祇の社を定め給ひしなり原本天を大に作る諸本に據て改む　○神地神戸、神地は後の所謂神領、神戸は其神領に附る民戸なり　○饒之、玉本紀略饒足に作る

八年夏四月庚子朔乙卯、以高橋邑人活日爲大神之掌酒、掌酒、此云佐介弭苦。冬十二月丙申朔乙卯、天皇以大田田根子令祭大神、是日活日自擧神酒、獻天皇、仍歌之曰、許能瀰枳破、和餓瀰枳那羅孺、椰磨等那殊、於朋望能農之能、介瀰之瀰枳、伊句譬佐、伊句臂佐、如此歌之、宴于神宮、卽宴竟之、諸大夫等歌之曰、宇磨佐開、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、伊弟氐由介那、瀰和能等能渡塢、於茲天皇歌之曰、宇磨佐階、瀰和能等能能、阿佐妬珥毛、於辭寐羅箇禰、瀰和能等能渡烏、卽開神宮門而幸行之、所謂大田田根子、今三輪君等之始祖也、

【八年】高橋邑、武烈紀の歌及萬葉十二に振の高橋と詠るを參考するに石上の地なるべし　○掌酒、酒を醸す事を掌る人　○神酒、ミキをミワとも云るは酒器より出たる名なるべし酒器をミワと云るは萬葉二に哭澤のもりに三輪すゑ斯れとも同十三に五十串立神酒（ミワ）すゑ奉るなど見えたり倭訓栞にみわはいはひべと云るも同物なるべしと云り　○許能瀰枳破云々、此歌は大神神社にて釀せる酒を天皇に奉らむとして言祭ざてよめるにて此神酒は我が造れる酒にはあらず大和國を作り成されし尊き大物主神の釀して奉らゝ神酒なれば幾久しく聞食せとなり　○宴、トヨノアカリは豐明にて宴會を云　○神宮、大三輪の神殿を云　○宇磨佐開云々、ウマサケは美酒なりミワと續けたるは美酒の造らゝ三輪と云るにて此地世々酒に名あるに因れりアサトは戸は夕に閉ち朝に之を開くを云一首の意は今日の宴會の樂しければ長き冬夜の明くるまで飲み明し三輪の殿の門の戸の朝開きたる後に出往むそれまでは飲續ぐべしとなり　○宇磨佐階云々、諸大夫の歌後歌明かして後に還らむと詠みしに對して然り徹夜飲明し三輪の殿門を翌朝押開きて還らむと詠み結ひとなり　○能渡烏の烏は原本馬に作る北本應本に據て改む　○三輪君等、記に大田々根子の子孫として神君鴨君が奉げ氏錄には賀茂朝臣神人神直が擧げたり

【九年】赤盾赤矛、赤色の盾矛なり　○墨坂神、墨坂のこと神武紀に見ゆ此神は記傳に式に宇太水分神社とある是なるべしとあり宇陀郡

九年春三月甲子朔戊寅、天皇夢有神人、誨之曰、以赤盾八枚赤矛八竿、祠墨坂神、亦以黑盾八枚黑矛八竿、祠大坂神、夏四月甲午朔己酉、依

夢之教、祭墨坂神大坂神、

十年秋七月丙戌朔己酉、詔群卿曰、導民之本、在於教化也、今既禮神祇、災害皆耗、然遠荒人等、猶不受正朔、是未習王化耳、其選群卿、遣于四方、令知朕憲、九月丙戌朔甲午、以大彦命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彦遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受教者、乃擧兵伐之、既而共授印綬、爲將軍、壬子、大彦命到於和珥坂上、時有少女、歌之曰、一云、大彦命到山背平坂、時道側有童女歌之曰、瀰磨紀異利寐胡播椰、飫迺餓烏塢、志齊務苦、農殊末句志羅珥、比賣那素寐殊望、一云、於朋耆妬庸利、于介伽卑氏、許呂須望、於是大彦命異之、問童女曰、汝言何辭、對曰、勿言也、唯歌耳、乃重詠先歌、忽不見矣、大彦乃還而具以狀奏、於是天皇姑倭迹迹日百襲姬命、聰明叡智、能識未然、乃知其歌恠、言于天皇、是武埴安彦將謀反之表者也、吾聞、武埴安彦之妻吾田媛、密來之取倭香山土、裹領巾頭而、祈曰、是倭國之物實則反之、物實、此云望能志呂、是以知有事焉、非早圖必後之、於

下井足村にあり
○黑盾黑矛、黑色の盾矛なり
○大坂神、大坂は抄に葛上郡大坂鄕あり式に葛下郡大坂山口神社とある是なるべし葛上葛下と郡の異なるは堺近き故なりと記傳に云り
○夏、原本なし水訂本に據て補ふ
○甲午、原本甲子に作る北本賀本に據て補ふ
【十年】(七月)教化、オモムクルは通證に趣面向也與背向反對とあり
○遠荒、荒は字書に邊裔也とあり
○不受正朔、正朔は曆なり漢土にて王者代を易ふれば正朔を改むを奉ずるはその支配に從ふなり故に此意をとりて用ひしにて漢文の飾のみノリは法なり命令を云
○憲、釋紀及紀略に意に作るを勝れりとす
(九月)大彦命、孝元天皇第一皇子
○北陸、クヌガノミチは陸の道にて海道に對して云り記には高志道とあり
○武渟川別、大彦命の御子

○東海、ウメツミチと訓るは海道(ウミツミチ)の轉訛せるなり記に東方十二道とあり
○吉備津彦、孝靈天皇々子彦五十狹芹彦命の亦の名なり
○西道、主として吉備國を指せり
○丹波道主命、開化天皇々子彦坐王の御子
○丹波、こゝは三丹及因幡伯耆を總べて云るなり
○印綬、漢文の潤色なり我國上古にはさるものなし劍又は矛などを授け賜ひしなるべし
○爲將軍、職原抄に將軍之號起二于此一とあれど書に始て見えたるまでにて之を以て將軍の始とすべからず
○和珥坂、神武紀に出づ
○平坂、記に怖羅坂とあり山城國相樂郡に屬す
○瀰磨紀異利寐胡云々、此歌は武埴安彦が天皇を弑し奉らむと計畫するを知ずして四道將軍の四方に出發せむとするは危險なりとて其意を諷したる歌なりミマキイリヒコは天皇の御名ハヤは歎きの聲オノカヲは己が夫に

是更留諸將軍而議之、未幾時、武埴安彦與妻吾田媛、謀反逆興師、忽至、各分道、而夫從山背、婦從大坂、共入欲襲帝京、時天皇遣五十狹芹彦命、擊吾田媛之師、卽遮於大坂、皆大破之、殺吾田媛、悉斬其軍卒、復遣大彦與和珥臣遠祖彦國葺、向山背、擊埴安彦、爰以忌瓮鎭坐於和珥武堅坂上、則率精兵、進登那羅山、而軍之、時官軍屯聚而蹢跙草木、因以號其山曰那羅山、(蹢跙、此云布麻多那羅須)更避那羅山、而進到輪韓河、與埴安彦、挾河屯之、各相挑焉、故時人改號其河曰挑河、今謂泉河訛也、埴安彦望之問彦國葺曰、何由矣汝興師來耶、對曰、汝逆天無道、欲傾王室、故擧義兵、欲討汝逆、是天皇之命也、於是各爭先射、武埴安彦先射彦國葺、不得中、後彦國葺射埴安彦、中胷而殺焉、其軍衆、稍退、則追破於河北、而斬首過半、屍骨多溢、故號其處曰羽振苑、亦其卒怖走、屎漏于褌、乃脫甲而逃之、知不得免、叩頭曰我君、故時人號其脫甲處曰伽和羅褌、屎處曰屎褌、今謂樟葉訛也、又號叩頭之處曰我君、(叩頭、此云酒務)

是後、倭迹迹日百襲姫命爲大物主神之妻、然其神常晝不見而夜來矣、倭迹迹姫命語夫曰、君常晝不見者、分明不得視其尊顏、願暫留之、明旦仰欲觀美麗之威儀、大神對曰、言理灼然、吾明旦入汝櫛笥而居、願無驚吾形、爰倭迹迹姫命心裏密異之、待明以見櫛笥、遂有美麗小蛇、其長大如衣紐、則驚之叫啼、時大神有恥、忽化人形、謂其妻曰、汝不忍令羞吾、吾還令羞汝、仍踐大虛登于御諸山、爰倭迹迹姫命仰見而悔之急居、急居、此云菟岐于、則箸撞陰而薨、乃葬於大市、故時人號其墓、謂箸墓也、是墓者日人作、夜人作、故運大坂山石而造、則自山至于墓、人民相踵、以手遞傳而運焉、時人歌之曰、飫朋佐介珥、菟藝廼烦例屢、伊辭務邏塢、多誤辭珥固佐摩、固辭介氐務介茂、冬十月乙卯朔、詔群臣曰、今反者悉伏誅、畿內無事、唯海外荒俗、騷動未止、其四道將軍等今急發之、丙子、將軍等共發路、

（注）一云云々、通釋に吉川惟足自筆本に一云二字なく本文として前より續けて書き日本紀歌解にも引續て一首として解けりとありオホキドは大城門にて皇宮の御門を云宮門より窺ひて殺さむとするをも知らず姫が遊びを爲せりとなり

○大彦、通釋、此下命の字を補ふ

○恠、原本シルマシとあるは非なりシルシと訓べし

○武埴安彦、孝元天皇々子

○謀反、名例律云八虐一曰謀反註謂謀危國家

○香山、神武紀に見ゆ

○裳領巾頭而、領巾は抄に婦人項上飾也とあり頭はハシなり原本而字なし北本に據て補ふ

○物實、モノザネと云に同じく物と成べき種子を云　○則反之、標注に大和國を己が物と定めし故其物實は己が手に反るとの意と云則の字集解に乃て己は四道將軍を指し夫は天皇を喩へて申せりシセムトは弑し奉らむとするを云ひヌスマクシラニは密に其計畫をするをも知らずしてなりヒメは四道將軍を指しナソヒはノアソビにて姫が遊び樂しめりとなり

に改作り通釋之に據る　○大坂、葛上郡の郷名　○彦國葺、錄吉田連條に天帶彦國押人命四世孫とあり或は三世孫なりとも云　○忌瓮、神武紀に嚴瓮とあるに同じく神祭に用る器　○武錄坂、記に丸邇坂とあり　○鎭坐、記に居忌瓮とあり居とは土を掘て下方を稍埋置を云忌瓮なるゑは卽ち祭祀を行ふなり　○掘繞、大和國添上郡　○躊躇、字書に躊躇足也躇行不進貌とあり足踏みをするなり　○輪韓河、志に相樂郡木津川本名輪韓川又拔川又泉川とあり　○興、北本及紀略に據て補ふ　○挾、原本狹に作る北本に據て改む　○逆天云々、漢文の潤色なり　○義兵、漢書注に救亂誅暴謂之義兵也とあり　○羽振苑、山城國相樂郡祝園郷是なり　○甲、倭名抄にもヨロヒとあり正き訓なれど玆はカワラと云る地名の本なればカワラと訓てし　○褌、釋名に褌貫也貫兩脚上擊要中也とあり抄に方言注云袴而無踞謂之褌頌萬之毛乃一云知比佐岐毛能とあり字鏡に志太乃波加萬と訓り　○卯頭、字書に首卯地也とありノミは斬る也祈請の義　○屎、通釋は信友校本に據て屎の下に漏字水本に據て之字を補ふ　○樟葉、河內國交野郡　○我君、山城國相樂郡和伎坐天乃夫支賣神社とある和伎卽ち我君なりとあり　○來矣、私記にミタスと見れど恐くは誤なるべし　○栁筒、栁を納るゝ筒なり筒は飯筒廐筒の筒に同じ　○心裏、集解云裏俗而擅入　○衣紐、原本紐を細に作る北本應也及私記に據て改む　○御諸山、卽ち三輪山なり北本及紀略御を三に作る　○急居、ツキウは突居るなり俗に所謂臀もちを突くを云　○磐墓、大和國城上郡大市郷箸中村（磯城郡織田村大字箸中）にあり　○大坂山、葛下郡　○以手遞傳、タゴシは手越なり手渡にするを云　○飫朋佐介珥云々、一首の意は大坂山に多くの人の登りて其山の石を採り之を手越にするはいかに多くの人にても容易ならぬこと哉と慕を樂く現狀を見て詠るなりツキノボレルは踵登れるにて大坂山の石を採らむとて多くの人の山に登れるを云タゴシは上に云り倒は原本側に作る北本及釋紀に據て改む　○反、原本返に作る北本中本及紀略に據て改む　○畿內、令義解に畿猶讀也言千畿之內とあり　○海外、畿內に對して畿外を云り　○騷動、トヨクはトヨミサワグの中間を略したるなり北本にはトヨムと訓り　○急、原本忽に作る北本に據て改む

【十一年】異俗多歸、此事史書に見えたるは姓氏錄吉田連の條なり

【十二年】曰、原本なし集解に據て補ふ　○朕初承天位、以下百姓蒙災逆は漢書成帝紀鴻嘉元年二月の詔に朕承天地獲保宗廟而有所蔽德不能綏刑罰不中寬失職迺國告訴者不絕是以陰陽錯謬寒暑失序月不光百姓蒙幸云々とあるを參考して書けり　○宗廟、孝經孔安國注に宗者尊也廟者貌也父母既

（甲午）十一年夏四月壬子朔己卯、四道將軍以平戎夷之狀奏焉、是歲異俗多歸、國內安寧、

（乙未）十二年春三月丁丑朔丁亥、詔曰、朕初承天位、獲保宗廟、明有所蔽、德不能綏、是以陰陽謬錯、寒暑失序、疫病多起、百姓蒙災、然今解罪改過、敦禮神祇、亦垂教而緩荒俗、擧兵以討不服、是以官無廢事、下無逸民、教化流行、衆庶樂業、異俗重譯來、海外既歸化、宜當此時、更校人民、令知長幼之次第、及課役之先後焉、秋九月甲辰朔己丑、始校人民、

更科調役、此謂男之弭調、女之手末調也、是以天神地祇共和享、而風雨順時、百穀用成、家給人足、天下大平矣、故稱謂御肇國天皇也、

沒宅兆其靈而於之祭祀謂之尊貌也とあり祖先を祭るの所なりそれより轉じて國家の意に用ふ　○官無廢事、以下十六字同じく成帝紀鴻嘉二年三月の詔中の文字を應用せり　○逸民、同書師古注に逸は逋也とあり　○重譯、譯は字書に傳他國之語言文字而達其意也とありヲサは韓の方言なりと云或は篋と同じく修むる意か　○歸化、令義解に謂遠方之人欽化內歸とあり　○校人民、校は字書に檢校也とありシラベカゾフルなり　○長幼之次第、令制に正丁次丁中男の差別あり年度に就て調庸の差あるを云　○課役之先後、賦役令義解に課者調及副物田租之類役者庸及雜徭之類とありその先後とは同令に國司皆須親知貧富强弱因對戶口卽作九等定簿預爲次第依次赴役とある是なり役の字千祿字書に役役並正とあり　○甲辰、辰當に戌に改むべし　○調役、記傳にミツギは御供給なり公に用給ふ諸の物を下より供給（ツギ）奉る意とあり役は力役にて正丁歲役十日次丁二人同一正丁と令にあるが如く毎年に公の用に使役さるるを云エタチは役立にて役に發赴くを云　○弭調、弓を以て射たる獸を貢るを云通釋は信友校本集解及拾遺に據て上に弓字を補ふ　○手末調、手にて造れる布帛の類を貢るを云　○御肇國、私記にハツクニシラシ、と訓み改たり通釋之に據る肇國の文字は尙書に見ゆ肇は始也

【十七年】要用、私記にムネツモノとあり主都物の義　○甚、ニヘサニは上に出づ　○舶、字書に云海中大船

【四十八年】淨沐、沐は說文に濯髮也とありされど浴の字の意に用ひしなり常に沐浴と連れ言ふよりまぎれしかと記傳に云り　○御諸山、北本江本及舊紀御を三に作る下同じ　○弄槍、ホコユケは槍行かせにて槍を突遣ることを云　○擊刀、擊つをカクと云

十七年秋七月丙午朔、詔曰、船者天下之要用也、今海邊之民、由無船以甚苦步運、其令諸國俾造船舶、冬十月、始造船舶、

（庚子）

（辛未）

四十八年春正月己卯朔戊子、天皇勅豐城命、活目尊曰、汝等二子、慈愛共齊、不知曷爲嗣、各宜夢、朕以夢占之、二皇子於是被命、淨沐而祈寐、各得夢也、會明、兄豐城命以夢辭奏于天皇曰、自登御諸山向東、而八廻弄槍、八廻擊刀、弟活目尊以夢辭奏言、自登御諸山之嶺、繩紘四方、逐食粟雀、則天皇相夢、謂二子曰、兄則一片向東、當治東國、弟是悉

は古言なり振る意なりと云

○繩、北本に綱とあり楓本舊紀には縄とあり

○絙、原本に絙とあるは俗體なり字書に大索也とありハフは萬葉に延を訓み張りわたす意なり

○夏、原本なし舊紀及水訂本に據て補ふ

○東國、原本國字なし上文及舊紀に據て補ふ

○下毛野君、此下に水訂本等の字を補ふ

【六十年】武淳照命、記に建比良鳥命とあり天穗日命の子大背飯三熊之大人なり神代卷下に見ゆ

○出雲大神宮、作業大社なり

○武諸隅、矢田部造は物部氏の庶族にて武諸隅は伊香色雄命の子大新川命の一男なり

○（注）大母隅、母の下恐くは呂を脫す

○出雲振根、錄右京神別土師宿禰の條に天穗日命十二世孫可美乾飯根命饒津國神別土師連の條に同命十二世孫飯入根命と見ゆされば振根も十二世の孫なり

○數日、シバシハに暫く

臨四方、宜繼朕位、夏四月戊申朔丙寅、立活目尊爲皇太子、以豐城命令治東國、是上毛野君・下毛野君之始祖也、

六十年秋七月丙申朔己酉、詔群臣曰、武日照命（一云、武夷鳥、又云、天夷鳥、）從天將來神寶、藏于出雲大神宮、是欲見焉、則遣矢田部造遠祖武諸隅（一書云、一名大母隅也、）而使獻、當是時、出雲臣之遠祖出雲振根主于神寶、是往筑紫國、而不遇矣、其弟飯入根則被皇命、以神寶付弟甘美韓日狹與子鸕濡渟、而貢上、既而出雲振根從筑紫還來之、聞神寶獻于朝廷、責其弟飯入根曰、數日當待、何恐之乎、輙許神寶、是以既經年月、猶懷恨忿、有殺弟之志、仍欺弟曰、頃者於止屋淵多生菱、願共行欲見、則隨兄而往之、先是兄竊作木刀、形似眞刀、當時自佩之、弟佩眞刀、共到淵頭、兄謂弟曰、淵水清冷、願欲共游沐、弟從兄言、各解佩刀置淵邊、沐於水中、乃兄先上陸、取弟眞刀自佩、後弟驚而取兄木刀、共相擊矣、弟不得拔木刀、兄擊弟飯入根而殺之、故時人歌之曰、椰句毛多茙、伊頭毛多鷄流餓、波鷄流多知、茙（入書紀出雲島帥所獻太刀銘）

頭邏佐波磨枳、佐微那辭珥、阿波禮於是甘美韓日狹、鷦濡渟、參向朝廷曲奏其狀、則遣吉備津彥與武渟河別、以誅出雲振根、故出雲臣等畏是事、不祭大神而有間、時丹波氷上人、名氷香戸邊、啓于皇太子活目尊曰、己子有小兒、而自然言之、玉菱鎭石、出雲人祭、眞種之甘美鏡、押羽振、甘美御神底寶、御寶主、山河之水泳御魂、靜挂、甘美御神底寶、御寶主也、菱、此云毛、是非似小兒之言、若有託言乎、於是皇太子奏于天皇、則勅之使祭、

（葛多卷鈴）

○根怒、諸本同じ釋紀亦同じ
○仍、北本應本及釋紀に據て補ふ
○止屋淵、神門郡鹽冶郷にあり
○菱、字書に菱水草可食とありモは水草の總名なり
○則隨兄、則の上に恐くは弟の字を脫す
○椰句毛多菟云々、一首の意は出雲梟帥が佩びし大刀は表面は黑葛を多く纏さて餝りたれど刀身なければ討たれたりあゝ憐むべしとなり佐微は眞身（サミ）なり刀身なり此歌記には倭建命の御歌とす
○氷上、抄に氷上郡氷上郷あり
○玉菱鎭石云々、泳原本沐に作る北本に據て改む玉勝間に玉菱鎭石は出雲の序なり鎭石は沈きにて玉藻沈き嚴藻と云意につゞけたり眞種は詳ならず押羽振は鏡を押振り擧げて祭れといふこと底寶は此上もなき寶御寶主は寶の主人にて寶の長たる由何れも玉をほめて云り御魂は御玉にて山河の底なる水泳る御玉といふ意靜挂は鎭挂て祭れとの意なり總ての意は鏡と玉とを以て出雲大神を祭るべしとの意なりと云り通釋に眞種は眞住の誤か眞澄鏡なりとあり

【六十二年】農、ナリハヒと訓るは五穀の成就（ナル）べきやうに勞き作るによれり漢書文帝紀二年九月の詔に農天下之大本也民所恃以生也とあり
○恃、原本特に作る北本楓本應本に據て改む
○狹山、丹比郡狹山郷今

（乙酉）六十二年秋七月乙卯朔丙辰、詔曰、農天下之大本也、民所恃以生也、今河內狹山埴田水少、是以其國百姓忘於農事、其多開池溝、以寬民業、冬十月造依網池、十一月、作苅坂池、反折池、一云、天皇居桑間宮造是三池也、

（戊子）六十五年秋七月、任邦國遣蘇那曷叱知令朝貢也、任那者、去筑紫國

丹南郡狭山村の中央に狭山池あり東西四町南北八町

○池溝、ウナテは畝路(ウナヂ)の義田間の用水の溝を云　○依網池、池址は今攝津國住吉郡依羅村大字庭井に僅に存し仁右衛門池と云　○苅坂池反折池、所在未詳記に輕之酒折池とありされば高市郡なるべし　○桑間宮、所在未詳　【六十五年】任那國、今の朝鮮慶尚南道の地にて新羅百濟の間に今在せる小國なり國名の義は垂仁紀に見ゆ　○鶏林、東國通鑑に(新羅)王夜聞金城西始林間有鶏聲遲明遣瓠公視之有金色小櫝掛樹枝白鶏鳴於下開之有小男兒以其出於金櫝姓金氏有鶏怪改始林名鶏林因以爲國號(節略)とあり此の故事に因りて新羅を鶏林と云

二千餘里、北阻海以在鶏林之西南、

【六十八年】天皇踐祚、通證云據前後例天皇二字當移在屬字上踐祚二字疑衍

○百廿歲、記に御年百六十八歲とあり紀略本書に同じ大日本史百十九とす

○山邊道上陵、大和國磯城郡柳本村大字柳本、志云在澁谷村南今稱向山陵

天皇踐祚六十八年冬十二月戊申朔壬子崩時年百廿歲明年秋八月甲辰朔甲寅葬于山邊道上陵

日本書紀卷第五

日本書紀卷第六

活目入彥五十狹茅天皇　垂仁天皇

活目入彥五十狹茅天皇、御間城入彥五十瓊殖天皇第三子也、母皇后曰御間城姬、大彥命之女也、天皇以御間城天皇廿九年歲次壬子春正月己亥朔、生於瑞籬宮、生而有岐嶷之姿、及壯、倜儻大度、率性任眞、無所矯飾、天皇愛之、引置左右、廿四歲因夢祥、以立爲皇太子、六十八年冬十二月、御間城入彥五十瓊殖天皇崩、

元年春正月丁巳朔戊寅、皇太子卽天皇位、冬十月癸卯朔癸丑、葬御間城天皇於山邊道上陵、十一月壬申朔癸酉、尊皇后曰皇太后、是年也太歲壬辰、

二年春二月辛未朔己卯、立狹穗姬爲皇后、后生譽津別命、生而天皇愛之、常在左右、及壯而不言、冬十月、更都於纒向、是謂珠城宮也、是歲、

【卽位前紀】大彥命、孝元天皇皇子

○歲次、ホシノヤドリと訓べし歲は歲星卽ち木星なり木星は一年に行くこと一次にして四時功畢り十二年にして日を一周す故に十二支を之に配當し其經行の躔次を以て年を紀す次は字書に止也宿也とあり

○岐嶷、綏靖紀（一〇一頁）に見ゆ

○倜儻、字書に卓異也とあり

○大度、度量大なるを云

○左右、モトコは許處の義なるべし或は許床の略なるべしとも云

○天皇、御父御間城天皇を申す

○廿四歲、集解云按崇神紀四十八年條當作廿歲（一二〇頁參照）

【元年】冬十月云々、前紀に秋八月甲辰朔甲寅とあり

【二年】狹穿媛、產生命の御子開化天皇の御孫

○不書、マコト、ハズは物言はぬ寄辭なるか云

○珍城宮、帝王編年記云卷向珍城宮大和國上郡今纒向河北里西田中也

○蓋先皇、以下十字集解云非本文之衍歟人所加

○疋、マキは卷也卷きたればなり神功紀にはムラと訓む字書に匹計布帛之數「白匹古以四丈爲一匹」俗作疋とあり疋は俗字

○遮、タヘテはサヘテの誤か

○二國之怨、任那と新羅との二國なり

【注】遠國、今の越前加賀能登越中越後なり云

○筒飯浦、越前國敦賀郡

○角鹿、今の敦賀なり記に都奴賀とあり

○惡富加羅國、東國通鑑に大智洛國とあり古金官國とも云今の慶尙道南道金海府なり

○阿利叱智干岐、旱岐は新羅の爵級にて我が正三位に當る

任那人蘇那曷叱智請之、欲歸于國、蓋先皇之世來朝未還歟、故敦賞蘇那曷叱智、仍賚赤絹一百疋、賜任那王、然新羅人遮之於道而奪焉、其二國之怨始起於是時也、

一云、御間城天皇之世、額有角人、乘一船泊于越國笥飯浦、故號其處曰角鹿也、問之曰、何國人也、對曰、意富加羅國王之子、名都怒我阿羅斯等、亦名曰于斯岐阿利叱智干岐、傳聞日本國有聖皇、以歸化之、到于穴門時、其國有人、名伊都都比古、謂臣曰、吾則是國王也、除吾復無二王、故勿往他處、然臣究見其爲人、必知非王也、卽更還之、不知道路、留連嶋浦、自北海廻之、經出雲國、至於此間也、是時遇天皇崩、便留之、仕活目天皇、逮于三年、天皇問都怒我阿羅斯等曰、欲歸汝國耶、對諮、甚望也、天皇詔阿羅斯等曰、汝不迷道、速詣之、遇先皇而仕歟、是以改汝本國名、追負御間城天皇御名、便爲汝國名、仍以赤織絹給阿羅斯等、返于本土、故號其國謂彌摩那國、其是之緣也、於是阿羅斯等以所給赤絹藏于己國郡府、新羅人聞之、起兵至之、皆奪其赤絹、是二國相怨之始也、一云、初都怒我阿羅斯等、有國之時、黃牛負田

○穴門、長門國なり
○天皇崩、原本崩を角に作る應本中本に據て改む
○逮、原本建に作る中本に據て改む
○所給、原本所の字なし熱本に據て補ふ
○郡府、郡の府庫
○一云云々、此事記には天日槍の事とせり傳の異れるなり
○有國、信友校本有を在に改め作る
○黄牛、抄に黄牛和名阿米宇之蓋其色如飴とあり
○田器、鍬鋤の類なるべし
○田舍、抄人倫部に田舍兒偉那迦比斗とあり田園の間に舍宅を構て居るより云
○牛直、牛の價なり
○授牛直、原本直を主に作る北本應本中本に據て改む
○比賣語曾社、式に攝津國東成郡比賣許曾神社（名神大月次相嘗新嘗）とあり
○豐國國前郡、豐國は後の豐前豐後、國前郡は豐前に屬す豐國比賣語曾社神は田川郡辛國息長大姫

器、將往田舍、黄牛忽失、則尋迹覓之、跡留一郡家中、時有一老夫、曰、汝所求牛者、入此郡家中、然郡公等曰、由牛所負物而推之、必設殺食、若其主覓至、則以物償耳、卽殺食也、若問牛直欲得何物、莫望財物、便欲得郡內祭神、云爾、俄而郡公等到之曰、牛直欲得何物、對如老父之教、其所祭神、是白石也、以白石授牛直、因以將來置于寢中、其神石化美麗童女、於是阿羅斯等大歡之欲合、然阿羅斯等去他處之間、童女忽失也、阿羅斯等大驚之、問己婦曰、童女何處去矣、對曰、向東方、則尋追求、遂遠浮海以入日本國、所求童女者、詣于難波、爲比賣語曾社神、且至豐國國前郡、復爲比賣語曾社神、並二處見祭焉、

（甲午）三年春三月、新羅王子天日槍來歸焉、將來物、羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿鹿赤石玉一箇、出石小刀一口、出石桙一枝、日鏡一面、熊神籬一具、并七物、則藏于但馬國、常爲神物也、

一云、初天日槍、乘艇泊于播磨國、在於宍粟邑時、天皇遣三輪君祖大友

主、與倭直祖長尾市於播磨、而問天日槍曰、汝也誰人、且何國人也、天日槍對曰、僕新羅國主之子也、然聞日本國有聖皇、則以己國授弟知古而化歸之、仍貢献物、葉細珠、足高珠、鵜鹿鹿赤石珠、出石刀子、出石槍、日鏡、熊神籬、膽狹淺大刀、并八物、仍詔天日槍曰、播磨國宍粟邑、淡路島出淺邑、是二邑、汝任意居之、時天日槍啓之曰、臣將住處、若垂天恩、聽臣情願地者、臣親歷視諸國、則合于臣心、欲被給、乃聽之、於是天日槍自菟道河泝之、北入近江國吾名邑而暫住、復更自近江、經若狹國、西到但馬國、則定住處也、是以近江國鏡谷陶人、則天日槍之從人也、故天日槍娶但馬出嶋人、太耳女、麻多烏、生但馬諸助也、諸助生但馬日槍、日槍生清彦、清彦生田道間守之、

大目命社是なり

【三年】天日槍、垂仁天皇九十年に常世國に遣されし田道間守は日槍の玄孫とあれば同御代の三年に歸化せりと云事年代合はず播磨風土記には葦原志許乎命の時代なりとす　○羽太玉足高玉、形狀によれる名なりと思へど意義未詳　○鵜鹿鹿赤石玉、赤石は地名に因れるか　○出石小刀出石桙、但馬國出石郡によれる名なるべし　○日鏡、日に擬して賞めたるなるべし此日鏡と出石桙とは日槍に殊に由ありげに聞ゆ　○熊神籬、いかなるものか詳ならねど文字に就きて考ふるに神籬は我國の神籬と相似る所あるに依て名付しなるべし　○藏于但馬國、式に但馬國出石郡伊豆志坐神社八座(並名神大)の神物と爲れりとなり　【注】宍粟邑、播磨國宍粟郡宍粟郷あり　○新羅國主、ニリシは韓語　○葉細珠、羽太玉と相對する名　○膽狹淺大刀、式に播磨國賀古郡日岡坐天伊佐々比古神社ありされば膽狹淺は地名なるべし原本膽を瞻に作る北本應本中本に據て改む　○播磨國宍粟邑云々、原本に播磨國出淺邑淡路國宍粟邑とあるは非なり集解に改て置換たり今之に據る出淺は神祇志料に生石(イヅシ)神今津名郡由良浦佐毘山の生石崎に在り生石田神とある是なりと云　○菟道河、源な近江に發し山城攝津を經て海に入る故に播磨より攝津に出で河を遡て近江に入りしなり　○泝之、原本之の字なし北本應本に據て補ふ　○近江國吾名邑、坂田郡同名なるべし　○而、北本應本中本に據て補ふ　○鏡谷陶人、鏡谷は蒲生郡、陶人は陶器を作る人なり中本には鏡村谷とあり　○出島、出石なり　○田道間守之、應本之の字なし

【四年】謀反、崇神紀十年に出て同訓なれどこゝはソムキテと訓べきか

四年秋九月丙戌朔戊申、皇后母兄狹穗彦王謀反、欲危社稷、

(乙本)

○社稷、支那にて土穀の神を云古へ國滅れば其社稷を變置す故に國家を社稷と謂ふ
○燕居、閒居に同じ禮記玉藻の注に謂私燕所居也とあり
○誂、字書に誘也以微言動之也とありアトラフは賴みてなさしむるなり
○必與汝云々、原本與二字重複す應本玉本に據て一字を削る
○弑、シセマツレは奉令死の意なり
○匕首、字書に劍之最短者其首類匕故名長一尺八寸とありヒモカタナとは懷中に佩て下帶に挿す故の名なり
○裀、字書に近身衣也とあり下着を云
○遂有諫云々、通釋には衍文とし集解は歟の字衍といへどこのまゝ本文として聞ゆ

【五年】來目、大和國高市郡
○高宮、抄に葛上郡高宮とありされど久米村を去る遠し此地なるや否は決め難し
○錦色小蛇、小蛇を原本

因伺皇后之燕居而語之曰、汝孰愛兄與夫焉、於是皇后不知所問之意趣輒對曰、愛兄也、則誂皇后曰、夫以色事人、色衰寵緩、今天下多佳人、各遞進求寵、豈永得恃色乎、是以冀吾登鴻祚、必與汝照臨天下、則高枕而永終百年、亦不快乎、願爲我弑天皇、仍取匕首授皇后曰、是匕首佩于裀中、當天皇之寢、廼刺頸而弑焉、皇后於是心裏兢戰、不知所如、然視兄王之志、便不可得諫、故受其匕首、獨無所藏、以著衣中、遂有諫兄之情歟、

(丙申)五年冬十月己卯朔、天皇幸來目、居於高宮、時天皇枕皇后膝而晝寢、於是皇后既無成事、而空思之、兄王所謀、適是時也、卽眼淚流之落帝面、天皇則寤之、語皇后曰、朕今日夢矣、錦色小蛇、繞于朕頸、復大雨從狹穗發而來之濡面、是何祥也、皇后則知不得匿謀、而悚恐伏地、曲上兄王之反狀、因以奏曰、妾不能違兄王之志、亦不得背天皇之恩、告言則亡兄王、不言則傾社稷、是以一則以懼、一則以悲、俯

にスコシキヲロチと訓たれど優ならず故に削る抄に脚鏡之岐伊美とあり恐く是なるべし
○狹穂、添上郡にあり狹穂彦の本據
○咽喉、抄疾病部に咽喉唐韻云咽噎（噎亦作嚥）見須一食事也とあり集解喉を咽に改めたれど不レ必レにてあるべし
○進退血泣、原本血の上に而の字あり嚥本玉本に據て削るシ、マヒは神武紀に陵遲とあり其處に云り血泣は字書に泣盡繼ぐ以血とありイサツは神代紀哭泣の下に云り
○一思矣、集解に一をヒトハシラと訓たれど私記にもヒトハシとありヒトヘニの誤か
○勞、イタツクと訓べしネギラフと訓む非なり
○八綱田、錄和泉皇別に豐美首嚬城入彦命男倭日向建日向八綱田之孫也とあり
○稻城、通證云積稻作レ城此亦可レ疑蓋古有別制今不可考也唐書日本傳曰國無城郭縣木爲柵落此紀卷與域同訓古人謂城者亦可以推知

仰喉咽、進退血泣、日夜懷悒、無所訴言、唯今日也、天皇枕妾膝而寢之、於是妾一思矣、若有狂婦成兄志者、適遇是時、不勞以成功乎、茲意未竟、眼涕自流、則擧袖拭涕、從袖溢之沾帝面、故今日夢也、必是事應焉、錦色小蛇則授妾匕首也、大雨忽發則妾眼涙也、天皇謂皇后曰、是非汝罪也、卽發近縣卒、命上毛野君、遠祖八綱田、令擊狹穗彦、時狹穗彦興師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降、於是皇后悲之曰、吾雖皇后、既亡兄王、何以面目莅天下耶、則抱王子譽津別命、而入之於兄王稻城、天皇更益軍衆、悉圍其城、卽勅城中曰、急出皇后與皇子、然不出矣、則將軍八綱田放火焚其城、於焉皇后令懷抱皇子、踰城上而出之、因以奏請曰、妾始所以逃入兄城、若有因妾子免兄罪乎、今不得免、乃知妾有罪、何得面縛、自經而死耳、唯妾雖死之、敢勿忘天皇之恩、願妾所掌後宮之事、宜授好仇、丹波國有五婦人、志並貞潔、是丹波道主王之女也、（道主王者、稚日本根子大日日天皇之孫、彦坐王子也、一云、彦湯隅王之子也）當納掖庭、以盈後宮之數、天皇聽矣、時火興城崩、軍衆悉走、狹穗

彦與妹共死于城中、天皇於是美將軍八綱田之功、號其名謂倭日向武日向彦八綱田也、

○奏請、原本奏を奉に作る北本應本玉本に據て改む　○面縛、自ら捕はるゝを云左傳僖六年注に縛手於後唯見其面と見え面縛の義明かなり　○目經、ワナキは羂にかゝる意　○後宮、原本後を后に作る北本應本玉本に據て改む下同じ　○好仇、毛詩周南關雎に窈窕淑女君子好逑とありて注に逑は匹也と云り逑は仇に同じ俗に云ふ連合(ツレアヒ)なり　○丹波國、熱本玉本丹上其の字あり　○(注)稚日本根子、原本稚を雖とす北本應本中本に據て改む　○(注)之孫、原本之を子に作る信友の說に據て改む　○(注)彦湯隅王、原本湯を陽に作る諸本に據て改む開化紀には彦湯産隅命とあり、○掖庭、字書に宮中旁舍也後宮嬪妃所居之地別於正宮而言とありウチツミヤは內津宮にて中宮を云　○功、イサミは勇なりイサヲシも勇しく雄々しきをいへば意は同じ　○倭日向、原本倭の字なし北本應本中本に據て補ふ

【七年】當麻邑、葛下郡　○毀角申鉤、力の强きを云角は獸角鉤は鉤の俗字にて字書に兵器也似劍而曲所以鉤殺人也とあり角を毀壞し鉤を引伸す力あるを云　○爭力、原本力を刀に作る應本中本に據て改む　○野見宿禰、錄右京神別に土師宿禰天穗日命十二世孫可美乾飯根命之後也とありて出雲宿禰と同系なり野見は地名出雲風土記に飯石郡野見あり　○捎、角と通ず角力に同じ　○是以、廣前云以恐術　○腰折田、葛下郡貫福寺村にありと云　○留仕、原本任に作る諸本に據て改む

七年秋七月己巳朔乙亥、左右奏言、當麻邑有勇悍士、曰當麻蹶速、其爲人也强力、以能毀角申鉤、恒語衆中曰、於四方求之、豈有比我力者乎、何遇强力者、而不期死生、頓得爭力焉、天皇聞之、詔羣卿曰、朕聞、當麻蹶速者天下之力士也、若有比此人耶、一臣進言、臣聞、出雲國有勇士、曰野見宿禰、試召是人、欲當于蹶速、卽日遣倭直祖長尾市、喚野見宿禰、於是野見宿禰自出雲至、則當麻蹶速與野見宿禰令捎力、二人相對立、各擧足相蹶、則蹶折當麻蹶速之脇骨、亦蹈折其腰而殺之、故奪當麻蹶速之地、悉賜野見宿禰、是以其邑有腰折田之緣也、野見宿禰乃留仕焉、

【十五年】渟葉田瓊入媛、皇代記には渟の下名の字あり
○前瓊入媛、原本前を筯に作る熱本玉本及下文に據て改む記に阿耶美能伊理比賣命とあり
○到葛野、到諸本なし類史に據て補ふ葛野は山城國葛野郡なり
○興、爰に始めて見ゆ抄に四聲字苑云輿一字或作輿(古之)車無輪者也とあり
○弟國、乙訓郡記傳に古へは葛野と云しは大名にて乙訓郡のあたりまでかけて泛く葛野と云しなりとあり
○大足彦尊、下文彦の下忍代別の三字あり此は略せるか
○池速別命、記に伊許波夜和氣命とあり
○稚淺津姫命、記に阿耶美都比賣命とあり
【廿三年】令有司、令は諸本になし延解に據て補ふ
○鳴鶴、字續に鶴ク、ヒ又コヒ抄に野干按鶴入鳥也漢書抄云古布日本紀私記云久々比とあり箋注にコフはコヒの轉今俗に白

(丙午)十五年春二月乙卯朔甲子、喚丹波五女納於掖庭、第一曰日葉酢媛、第二曰渟葉田瓊入媛、第三曰眞砥野媛、第四曰前瓊入媛、第五曰竹野媛、秋八月壬午朔立日葉酢媛命爲皇后、以皇后弟之三女爲妃、唯竹野媛者、因形姿醜返於本土、則羞其見返、到葛野自墮輿而死之、故號其地謂墮國、今謂弟國訛也、皇后日葉酢媛命生三男二女、第一曰五十瓊敷入彦命、第二曰大足彦尊、第三曰大中姫命、第四曰倭姫命、第五曰稚城瓊入彦命、妃渟葉田瓊入媛生鐸石別命與膽香足姫命、次妃前瓊入媛生池速別命、稚淺津姫命、

(甲寅)廿三年秋九月丙寅朔丁卯、詔群卿曰、譽津別王、是生年既卅、髯鬚八掬、猶泣如兒、常不言、何由矣、因令有司而議之、冬十月乙丑朔壬申、天皇立於大殿前、譽津別皇子侍之、時有鳴鶴、度大虛、皇子仰觀鶴曰、是何物耶、天皇則知皇子見鶴得言而喜之、詔左右曰、誰能捕是鳥獻之、於是鳥取造祖天湯河板舉奏言、臣必捕而獻、卽天皇勅湯河板舉(板舉、此云佗儺)曰、汝獻是鳥必敦賞矣、時湯河板舉遠望鶴飛之方、追尋詣出雲國而捕

獲、或曰、得于但馬國、十一月甲午朔乙未、湯河板擧獻鵠也、譽津別命弄是鵠、遂得言語、由是敦賞湯河板擧、則賜姓而曰鳥取造、因亦定鳥取部、鳥養部、譽津部、

（丙辰）廿五年春二月丁巳朔甲子、詔阿倍臣、遠祖武渟川別、和珥臣、遠祖彦國葺、中臣連、遠祖大鹿嶋、物部連、遠祖十千根、大伴連、遠祖武日、五大夫曰、我先皇御間城入彦五十瓊殖、天皇、惟叡作聖、欽明聰達、深執謙損、志懷沖退、綱繆機衡、禮祭神祇、剋己勤躬、日愼一日、是以人民富足、天下太平也、今當朕世、祭祀神祇、豈得有怠乎、三月丁亥朔丙申、離天照大神於豐耜入姫命、託于倭姫命、爰倭姫命求鎮坐大神之處、而詣菟田筱幡、筱、此云佐佐、更還之入近江國、東廻美濃、到伊勢國、時天照大神誨倭姫命曰、是神風伊勢國、則常世之浪重浪歸國也、傍國可怜國也、欲居是國、故隨大神教、其祠立於伊勢國、因興齋宮于五十鈴川上、是謂磯宮、則天照大神始自天降之處也、

一云、天皇以倭姫命爲御杖、貢奉於天照大神、是以倭姫命以天照大神、鎮

鳥と呼もの是なりと云
○得言、アギトフは口を動かして物言はむとする形容を云
○鳥取造、錄右京神別に鳥取部連角凝魂命三世孫天湯河桁命之後也とあり
○出雲國、國の字玉本に據て補ふ
○或曰、以下七字は廣前云細書すべし
○鳥養部、鳥を飼養する部屬を云
○譽津部、譽津別皇子の御名を負ひて仕奉る部屬なり記に到坐す地毎に品遲部を定むとあり出雲大神參拜に往き給し時處々にて之を定め給へり
【廿五年】(二月)武渟川別、崇神紀十年に出づ
○彦國葺、同上(一一九頁)
○大鹿島、尊卑分脈云天兒屋根命九世孫久志宇賀主命の子國摩大鹿島命
○十千根、宇麻志麻治命六世孫伊香色雄命の子
○武日、道臣命七世の孫
○五大夫、原本五を吾に作る北本應本中本に據て改む
○作聖、仙覺抄に此文を引きて作を惟とす
○沖退、謙損と對句なり

坐於磯城瑞籬之本而祠之、然後隨神誨、取丁巳年冬十月甲子、遷于伊勢國渡遇宮、是時倭大神、著穂積臣遠祖大水口宿禰、而誨之曰、太初之時、期曰、天照大神、悉治天原、皇御孫尊、專治葦原中國之八十魂神、我親治大地官者、言已訖焉、然先皇御間城天皇、雖祭祀神祇、微細未探其源根、以粗留於枝葉、故其天皇短命也、是以今汝御孫尊、悔先皇之不及而愼祭、則汝尊壽命延長、復天下太平矣、時天皇聞是言、則仰中臣連祖探湯主而卜之、誰人以令祭大倭大神、卽淳名城稚姬命食卜焉、因以命淳名城稚姬命、定神地於穴磯邑、祠於大市長岡岬、然是淳名城稚姬命、既身體悉瘦弱以不能祭、是以、命大倭直祖長尾市宿禰、令祭矣、

字書に沖は虛也和也退は遜課也とあり謬延に同じ　○繼繆機衡、萬機の政を統治め給ふを云機衡の文字は後漢書郎顗傳に尚書璣在機衡と見え注に北斗魁星第三爲機第五爲衡於天文爲喉舌云々とあり繼繆は同書張衡傳に察二紀五緯之繼繆通皇と見え注に相次之貌とあり順序を立つるなり依て萬機の政を統治め給ふ意に用ひたり　(三月)嚮紹入媛命、入は玉名類史に據て補ふ　○菟田筱城、志ゝ宇陀郡山邊郡屬已藤(今猶存)神祠とあり儀式解亦之に據る　○入遠江國云々、儀式帳に次淡海坂田宮坐貴次美濃伊久良賀宮坐貴次伊勢桑名野代宮坐貴とあり　○神風、伊勢の枕詞神武紀の大御歌に出づ　○常世之浪重浪歸國、常世は海外重浪は打重れて寄する浪なり伊勢國は東南に大海に臨みて打寄する浪も遙に海外の方より重々(シクシク)に寄る浪ぞと詔給るにて浪の清淨なるを賞し自ら其地の清らかなることをも能め給へるなり　○傍國可怜國、傍國は堅固なる國なりかく浪は寄すとも動くことなく堅固に可怜國なりとなり　○其祠立於伊勢國、記傳に立は定の誤なり此大神には必ず宮と申す例なるに此に祠とあるは其祭るべき所を申せるなり經略卷に倭伊勢大神祠とありこゝも祠るべき處を伊勢國と定めてなり五十鈴川上に其宮を興つゝ云るなりと云り　○因興齋宮、原本齋を齊に作る脫本類史に據、改る齋宮は大神を齋ひ奉る宮卽ち皇大神宮なり　○磯宮、應本風本中本磯を礒に作る五十鈴川の磯に造奉りしに因て磯宮と申せり大倭本紀(明文抄所引)に天皇之始大神來之時大副護齋殿三面子鈴一合也注に一鏡者天照大神之御靈名天懸(アマカケ)大神今伊勢國磯宮崇神耳祭大神也とあり磯宮卽ち皇大神宮なり　○天照大神始自天降之處也、拾遺に仍隱神殿二立其祠於伊勢國云々始在天上預結幽契衛神生降深有以焉と見えて高皇産靈大神宮儀式帳にも書出天原に坐て見し求ぎ鴨し處に鎭り坐ぬと見え神代より此地に鎭り坐むと思食しゝ故に始自天降之處也と申せり　(注)寶枕、原本杖を枝に作る諸本に據て改む古くは多く御杖代といへど御枝とのみも申せり　○鎭于於磯城瑞籬之本、磯城は崇神紀六年に出つ瑞籬に神域にある柵なる云瑞籬卽ち神垣なりと云賦あれど農耕の下に大宮を建てゝ齋ひ祭りしにて瑞籬は神籬にはあらず　○取丁巳年冬十月甲子、集解に取を切に改む丁巳は二十六年なり通證云冬十月當作秋九月、澁川氏曰以長曆推之此年十月無甲子、九月十七日爲甲子至今內宮祭日也集解之を非とし甲子は甲午の誤とせり　○渡遇

宮、五十鈴の宮にて卽ち磯宮なり　○是時倭大神云々、天照大神は神誨のまゝに齋祭らせ給ひしかど大國魂神をば懇に祭り給はず且八十魂神の祭祀も缺る所ありしに依て此神託はありしなり　○太初之時、神世を云　○專治葦原中國之八十魂神、八十魂神は天神地祇諸神を云治は祭るなり　○治大地官、大地官は土地を掌り守る官職の意にて卽ち大國魂神とましますを云大地主神と申も亦同じ　○未探、原本探を採に作る北本應本に據て改む　○留於枝葉、本を忘て末に心を留るを云ノチノヨと訓るは非なり　○食卜、神祇令義解に凡卜者必先畫龜然後灼之兆順食墨是爲卜食とありアフは合ふにて其卜に當るを云　○穴磯邑、城上郡穴師村なり　○祠於大市長岡岬、大市は穴磯邑の內なり神祇志に式に城上郡穴師坐兵主神社（名神大月次相嘗新嘗）とある是なりと云　○大倭直、椎根津彥の子孫なり神武紀甲寅年（八二頁）に見ゆ

【廿六年】大連、記傳に大連と云號是に始めて見えたり然るに延喜式歷運記に仲哀天皇始置二大連一とあるは如何ならむとあり通釋にはこゝに大連とあるは後に大連と稱へると異にて其氏の內にて私に呼べる稱なることうつなしと云り

【廿七年】祠官、後の神祇官なり　○神幣、禮代として神に奉る物を云マヒの語釋未詳　○以時祠之、祈年新嘗月次等の祭祀を云　○始興、一般に兵器を奉る事となれるを云特殊の例は前に已に見ゆ　○屯倉、釋紀に天子之米廩也とあり御田に熟れる稻穀を藏むる御倉及其官舍を合せて云　○來目邑、五年に見ゆ

【廿八年】身狹桃花鳥坂、陵墓一覽云倭彥命墓

廿六年秋八月戊寅朔庚辰、天皇勅二物部十千根大連一曰、屢遣二使者一於出雲國一、雖レ撿二校其國之神寶一、無二分明申言者一、汝親行二于出雲一、宜撿校定、則十千根大連校二定神寶一、而分明奏言之、仍令レ掌二神寶一也、

廿七年秋八月癸酉朔己卯、令二祠官卜一兵器爲二神幣一、吉之、故弓矢及横刀納二諸神之社一、仍更定二神地神戸一、以レ時祠之、蓋兵器祭二神祇一、始興二於是時一也、是歲興二屯倉一于來目邑一、屯倉、此云二彌夜氣一、

廿八年冬十月丙寅朔庚午、天皇母弟倭彥命薨、十一月丙申朔丁酉、葬二倭彥命一于身狹桃花鳥坂一、於是集二近習者一、悉生而埋二立於陵域一、數日不レ死、晝夜泣吟、遂死而爛臭之、犬烏聚噉焉、天皇聞二此泣吟之聲一、心有二悲傷一、詔二羣卿一曰、夫以二生所一レ愛令二殉一レ亡者一、是甚傷矣、其雖二古風一之、非良

大和國高市郡澤村大字北越智
○陵域、墓域とあるべきなり
○泣吟、私記にニヨフと訓り聲呼(ネヨビ)の義か
○殉、字書に用人送死也とあり
【卅年】諦、字書に與審同說也とあり名義抄字類抄いづれもマウスと訓り
【卅二年】皇后日葉酢媛命薨、書紀には皇后には悉く薨と書り崩と書るは續紀以下の事にて令の制なり
○有日、原本日を曰に作る中本に據て改む有日とは日數の多くありしを云
○貴使者、遣ほ應本中本に據て補ふ
○土部、記に土師部とあり埴土にて種々の物を作る人を土師と云ひ其部屬を土師部と云土部は師を略せるにて矢作部を矢部弓削部を弓部と云が如し
○日葉酢媛命之墓、記に此后者葬狹木之寺間陵とあり狹木は大和國添下郡なり陵墓要覽に生駒郡平城村大字山陵(ミサキ)字御陵前とあり

何從、自今以後、議之止殉、(ヤメヨシルシタガハシムルヿヲ)

卅年春正月己未朔甲子、天皇詔五十瓊敷命、大足彦尊曰、汝等各言情願之物也、兄王諮、欲得弓矢、弟王諮、欲得皇位、於是天皇詔之曰、各宜隨情、則弓矢賜五十瓊敷命、仍詔大足彦命曰、汝必繼朕位、

(癸亥)卅二年秋七月甲戌朔己卯、皇后日葉酢媛命(一云、日葉酢根命也)薨、臨葬有日焉、天皇詔群卿曰、從死之道、前知不可、今此行之葬奈之爲何、於是野見宿禰進曰、夫君王陵墓、埋立生人、是不良也、豈得傳後葉乎、願今將議便事而奏之、則遣使者、喚上出雲國之土部壹佰人、自領土部等、取埴以造作人馬及種種物形、獻于天皇曰、自今以後、以是土物、更易生人、樹於陵墓、爲後葉之法則、天皇於是大喜之、詔野見宿禰曰、汝之便議、寔洽朕心、則其土物、始立于日葉酢媛命之墓、仍號是土物、謂埴輪、亦名立物也、仍下令曰、自今以後、陵墓必樹是土物、無傷人焉、天皇厚賞野見宿禰之功、亦賜鍛地、卽任土部職、因改本姓、謂土部臣、是土部連等主天皇喪葬之緣也、所謂野見宿禰、是土部連等之始祖也、

○埴輪、抄に埴輪波邇和日本紀私記云山陵緣邊作埴人形立如車輪者也とあり土物を車輪の如くに埋むるに依て名づく
○立物、陵墓の周圍に立つるより云
○鍛地、カタシは鎔師なり土物を鎔造る地を云
【卅四年】大國不遲、記に大國之淵とあり諸本遲を避に誤る記に據て改む
○瑞、祥瑞也シルシと訓べしミツとあるは非なり
○比至行宮、原本至の字重複す應本中本に據て削る
○白、應本熱本なし
○三尾君、三尾は近江國高島郡三尾鄉是なり
○子石田君、玉本子の字なし衍なるべし
【卅五年】高石池、和泉國大鳥郡なり記に日下之高津池とあり
○茅渟池、和泉國日根郡
○倭狹城池、添下郡志云在常福寺村
○迹見池、添下郡池內村
○太平、原本太を大に作る楓本中本に據て改む
【卅七年】
【卅九年】冬、例に據て補ふ

卅四年春三月乙丑朔丙寅、天皇幸山背、時左右奏言之、此國有佳人、曰綺戸邊、姿形美麗、山背大國不遲之女也、天皇於茲執矛祈之曰、必遇其佳人、道路見瑞、比至于行宮、大龜出河中、天皇舉矛刺龜、忽化爲白石、謂左右曰、因此物而推之、必有驗乎、仍喚綺戸邊納于後宮、生磐衝別命、是三尾君之始祖也、先是娶山背苅幡戸邊、生三男、第一曰祖別命、第二曰五十日足彥命、第三曰膳武別命、五十日足彥命、是子石田君之始祖也、

卅五年秋九月、遣五十瓊敷命于河內國、作高石池、茅渟池、冬十月、作倭狹城池、及迹見池、是歲、令諸國多開池溝、數八百之、以農爲事、因是百姓富寬、天下太平也、

卅七年春正月戊寅朔、立大足彥尊爲皇太子、

卅九年冬十月、五十瓊敷命居於茅渟菟砥川上宮、作劍一千口、因名其劍謂川上部、亦名曰裸伴、裸伴、此云阿箇婀我等母、藏于石上神宮也、是後命五十瓊

敷命、俾主石上神宮之神寶、

一云、五十瓊敷皇子、居于茅渟菟砥河上、而喚鍛名河上、作大刀一千口、是時楯部、倭文部、神弓削部、神矢作部、大穴磯部、泊橿部、玉作部、神刑部、日置部、大刀佩部、并十箇品部賜五十瓊敷皇子、其一千口大刀者、藏于忍坂邑、然後從忍坂移之、藏于石上神宮、是時神乞之言、春日臣族、名市河　令治、因以命市河令治、是今物部首之始祖也、

○菟砥川上宮、和泉國日根郡にあり記に鳥取之河上宮とあり

○川上部、記には定河上部とありて楯部以下十箇の品部の總稱とす

○裸伴、舊紀には裸花之伴とあり諸說あれども臆測のみにて穩當ならず

○石上神宮、神代上寶劍出現章第二の一書に出づ

【注】楯部、楯を縫作る部民なり云

○倭文部、倭文を作る部民なり云

○神弓削部神矢作部、祭具たる弓または矢を作る部民　○大穴磯部、穴磯は大和國城上郡の地名其地に置けるの神戸　○泊橿部、泊橿は山城國乙訓郡（摂津にもあり）の地名其地に置けるの神戸　○玉作部、玉を作る部民大穴磯以下は地名なれば或は玉作も地名か　○神刑部、河內國若江郡に刑部郷あり此地に置けし神戸か　○日置部、大和國葛上郡に日置郷あり其他にも同名の地多し地名によれる部なるべし　○大刀佩部、劍を佩て非常を守る人なり大祓詞に劍佩伴男とあるに同じ私記に此以外に騎大中臣部ありと見ゆ　○品部、部ゐ伴造なり　○五十瓊敷命、諸本數なし例に據て補ふ　○忍坂邑、城上郡　○春日臣、記に天押帶日子命者春日臣祖とあり孝昭天皇々子天押帶日子命の後　○市河、錄大和皇別に布留宿禰、天足彦國押人命七世孫米餅搗大使主命之後也男本書命男市川臣大鮪鷦天皇御世遷倭賀布都努斯神社於石上郷布瑠村高庭之地以市川臣爲神主とあり仁德天皇の御世の人なりとすれば然後從忍坂移之とあるは仁德天皇の御世の事なるか事の序に此に記されしなり姓氏錄に正さし書紀に誤りとするは非なり　○物部首、錄摂津皇別に物部首見ゆ天武紀十二年九月連の姓を賜ふ

【八十七年】大中姫命、原本命なし舊紀及下文に據て補ふ

○天神庫、抄祭祀具に寶倉保久良とあり神寶を收奉る倉なりホは秀（ホ）にて其構造高く秀でたるによりて天は美稱なり

○梯、字書に木階也とあり今云ハシゴなり

（戊午）八十七年春二月丁亥朔辛卯、五十瓊敷命謂妹大中姫命曰、我老也、不能掌神寶、自今以後、必汝主焉、大中姫命辭曰、吾手弱女人也、何能登天神庫耶、（神庫、此云保玖羅）五十瓊敷命曰、神庫雖高、我能爲神庫造梯、豈煩登庫乎、故諺曰神之神庫隨樹梯之、此其緣也、然遂大中姫命授物部十千根、

○神之神庫、熱本應本玉本神を天に作る是なるに似たり
○桑田村、丹波國桑田郡桑田鄉是なり
○牟士那、抄に說文云貉似狐而善睡者也漢語抄云無之奈とあり
○在、諸本有に作る集解に據る
【八十八年】在、諸本有に作る集解に據る
○曾孫、抄に爾雅云孫之子爲曾孫和名比々古とあり
○羽太玉、以下神寶三年紀に見ゆ
○鵜鹿鹿、原本一の鹿字なし中本引一本及上文に據て補ふ
○匿、シナメは和訓栞に垂仁紀に匿の字を訓り新撰字鏡に圖をしなぶとよみ取物而藏と注せる是なりとあり
○御所、吉一本中一本所を前に作る

大連而令治、故物部連等至于今治石上神寶、是其緣也、昔丹波國桑田村有人、名曰甕襲、則甕襲家有犬、名曰足往、是犬咋山獸名牟士那而殺之、則獸腹有八尺瓊勾玉、因以獻之、是玉今在石上神宮、

(己未)八十八年秋七月己酉朔戊午、詔群卿曰、朕聞、新羅王子天日槍初來之時、將來寶物今在但馬、元爲國人見貴、則爲神寶也、朕欲見其寶物、卽日遣使者、詔天日槍之曾孫清彥而令獻、於是清彥被勅、乃自捧神寶、而獻之、羽太玉一箇、足高玉一箇、鵜鹿鹿赤石玉一箇、日鏡一面、熊神籬一具、唯有小刀一、名曰出石、則清彥忽以爲、非獻刀子、仍匿袍中而自佩之、天皇未知匿小刀之情、欲寵清彥、而召之賜酒於御所、時刀子從袍中出而顯之、天皇見之、親問清彥曰、爾袍中刀子者、何刀子也、爰清彥知不得匿刀子而呈言、所獻神寶之類也、則天皇謂清彥曰、其神寶之、豈得離類乎、乃出而獻焉、皆藏於神府、然後開寶府而視之、小刀自失、則使問清彥曰、爾所獻刀子忽失矣、若至汝所乎、清彥答曰、昨夕刀子

○爲刀子立祠、釋紀に正六位上生石社なりとあり神祇志に淡路常磐草を引て津名郡由良浦佐毘田の生石崎に在り生石明神と云ふとあり

○(注)太耳、原本耳を平に作る熟本吉本中本に據て改む

【九十年】非時香菓、橘は霜雪を凌て冬もあり貯藏久しきに堪へ時ならぬ季にもあり香しき菓實なれば非時香菓と云

【九十九年】戊午朔、長曆を推すに七月は乙巳朔にして戊午十四日なり集解之に據て乙巳朔戊午に作る

○百卌歲、記に百五十三歲とあり水訂本云帝以崇神廿九年生此年百三十九歲也正差一年

○菅原伏見陵、式云在大和國添上郡陵墓歌覽云生駒郡都跡村大字尼辻字西池

○八竿八縵　記に縵八縵矛八矛と見え紀傳に橘の枝なからなるを隱橘と云

自然至於臣家、乃明旦失焉、天皇則惶之、且更勿覓、是後出石刀子自然至于淡路嶋、其嶋人謂神、而爲刀子立祠、是於今所祠也、昔有一人、乘艇而泊于但馬國、因問曰、汝何國人也、對曰、新羅王子、名曰天日槍、則留于但馬、娶其國前津耳一云前津見、一云太耳、女麻拖能烏、生但馬諸助、是清彦之祖父也、

(辛酉)九十年春二月庚子朔、天皇命田道間守、遣常世國、令求非時香菓、香菓、此云箇倶能未今謂橘是也、

(壬戌)九十九年秋七月戊午朔、天皇崩於纒向宮、時年百卌歲、冬十二月癸卯朔壬子、葬於菅原伏見陵、明年春三月辛未朔壬午、田道間守至自常世國、則賫物也非時香菓八竿八縵、田道間守於是泣悲歎之曰、受命天朝、遠往絕域、萬里蹈浪、遙度弱水、是常世國、則神仙秘區、俗非所臻、是以往來之間、自經十年、豈期獨凌峻瀾、更向本土乎、然賴聖帝之神靈、僅得還來、今天皇既崩、不得復命、臣雖生之、亦何

葉を取たるを桙橘と云とあり

○遙度弱水、後漢書東夷傳夫餘國の條に北有弱水一地方二千里とあり北の方遙に隔れる國名にて遠往絶域と對句なり

○是常世國云々、潤飾に添たる漢文なり三韓にても漢土にても神仙祕區など云べき地にあらず

○瀾、字書に大波爲瀾とあり

○三宅連・錄右京諸蕃に三宅連新羅國王子天日桙命之後也とあり

益矣、乃向天皇之陵、叫哭而自死之、群臣聞皆流涙也、田道間守是三宅連之始祖也、

日本書紀卷第六

日本書紀卷第七（ヤマトノフミノアキノフミヒトナ・ハシラニアタルアキ（北））

大足彦忍代別天皇　景行天皇
稚足彦天皇　成務天皇（ヤイム（北））

大足彦忍代別天皇　景行天皇

大足彦忍代別天皇（オホタラシヒコオシロワケノ）、活目入彦五十狹茅天皇（ハ）ノ第三子也（ナリ）、母（ト）皇后（キサキ）曰（ヒ）日葉洲媛命（スノヒメノミコト）、丹波道主王（タニハノミチヌシノオホキミ）之女（ムスメ）也（ナリ）、活目入彦五十狹茅天皇（イクメイリヒコイサチノスメラミコト）卅七年（ヨトセ）、立爲皇太子（ヒツギノミコトニタテリ）、時年（トキニ）廿一（ハタチ）、九十九年春二月、活目入彦五十狹茅天皇崩（カムアガリ）、

（辛未）元年秋七月己巳朔己卯（十一）、太子（ヒツギノミコ）卽皇位（アマツヒツギシロシメス）、因（テ）以改元（ムカヘテ）、是年也太歲辛未、

（壬申）二年春三月丙寅朔戊辰（三）、立播磨稻日大郎姬（ハリマノイナビノオホイラツメ）（一云、稻日稚郎姬、郎姬、此云異羅苑咩）、爲皇后（キサキ）、后（キサキ）生（ウミ）二男（ヒコ）、第一（ヒトツ）曰大碓皇子（オホウスノミコ）、第二（フタツ）曰小碓尊（ヲウスノミコト）（一書云、皇后生三男、其第三曰稚倭根子皇子、其大碓皇子、小碓尊、一日同胞而雙生、天皇異之（アヤシビタマヒキ）、則誥（タケビタマヒキ）於碓、故因號（ナヅケ）其二王（ミコ）曰大碓小碓也、是小碓尊（ヲウスノミコト）、亦名（ハ）日本童男（ヤマトワラハ）（童男、此云（ハ）烏具奈）、亦曰（ハ）日本武尊（ヤマトタケノミコト）、幼（ワカクシテ）有雄略之

【卽位前紀】

○春二月、垂仁紀には秋七月とす

【元年】太子の上に集解皇の字を補ふ

○改元、改元の文字始て見ゆ元は元年なり元年を改むるを云

【二年】丙寅、原本寅を戊に作る北本に據て改む

○稻日大郎姬、記に吉備臣の祖若建吉備津日子の女とあり郎女をイラツメと訓るイラは親む詞イロハイロネのイロと同じ郎

は字書に僕稱二主人一曰レ郎とあり

○（注）咩、原本重複中本類史に據て削る○碓、抄器皿部に碓（賀良宇須）踏舂具也とあり字鏡には宇須とあり　○誥、字書に誥は告也とありタケブは猛く叫ぶなりと云雄誥の條を參考すべし碓に對して誥び坐し理由は詳ならず　○日本武尊、川上梟帥が倭の國には吾等に勝りて建き男ましませりと武勇を稱へて奉りし御名なり御名の訓は記傳にヤマトダケと訓みしを信友の比古婆衣卷三にヤマトタケルと稱し奉たりしなるべしとて精しく考證せり　○一丈、十尺を丈と云ッヱは杖と訓義同じ　○扛鼎、鼎は說文に三足兩耳和二五味一之寶器也とありカナへは金瓮なり扛は舉也力の强きを云史記項羽本紀に力能扛レ鼎とあり

氣、反レ壯（イキ　テ　ヲサカリニ）　容貌魁偉、身長（ヒト　ツヱ）一丈、力能扛レ鼎焉、

【三年】車駕、儀制令に車駕行幸所レ稱とあり車駕と稱するは天子車に乘て行給ふ故に其乘物を指して直に至尊を指斥せざるなり

○屋主忍男武雄心命、孝元天皇皇子彥太忍信命の子、原本命を念に作る諸本に據て改む

○阿備柏原、今海草郡安原村松原に柏原の小名ありと云　○紀直、舊紀に神皇產靈尊兒天御食持命紀直等祖とあり姓氏錄亦同じ　○武內宿禰、此名の訓は記傳にタケウチと訓べし（武之內と之を添てよむは古言を知らぬみだり言なり）と云るを比古婆衣卷三に兄を味師內宿禰と稱へる味師に對へたる美稱にて多祁志宇智宿禰と稱ひしなるべしと云り

（癸酉）三年春二月庚寅朔、卜（ウラフルニテ）幸二于紀伊國一、將祭祀群（ムトイハヒマツラモロ〳〵ノアマツヤシロクニツヤシロヲ）神祇、而不吉、乃車駕（ミユキ　ヤミヌ）止之、遣二屋主忍男武雄心命一（テ　ヤ　ヌシ　オシ　タケ　ヲ　ノ　ヲ　ノ　ミコト）猪心命（一云武）令レ祭、爰屋主忍男武雄心命詣（イデマシテ）之、居二于阿備柏原一而祭祀神祇、仍住（テ　ア　ビノ　カシハバラニ　イハヒマツル　テ　ヨリテ　ヲ　ス）九年、則娶紀直遠祖菟道彥之女影媛、生二武內宿禰一、

【四年】八坂入彥皇子、崇神帝の御子

○乘輿、儀制令に服御所レ稱とあり義解に凡物御二王者一皆稱二乘輿御物一（略）假如二乘輿御馬乘輿御書等之類一也と見ゆ天子を乘輿と申すは猶行幸を車駕と云が如し

○泳宮、宮趾今美濃國可

（甲戌）四年春二月甲寅朔、甲子（十二）、天皇幸二美濃一、左右奏言之、茲國有二佳人一、曰弟媛、容姿端正、八坂入彥皇子之女也、天皇欲得爲妃、幸二弟媛之家一、弟媛聞乘輿車駕、則隱二竹林一、於是天皇權令（シバラク　メムト）弟媛至而居于泳宮、泳宮、此云二區玖利能彌揶一、鯉魚浮レ池、朝夕臨視而戲遊、時弟媛欲レ見二其鯉魚遊一而密來臨二池、天皇

兒郡久々利村にありと云○鯉魚、抄龍魚部に七卷食經云鯉魚(古比)とあり○不便、私記にモヤ〳〵アラスと訓り訓義未詳○納帷幕之中、私記にオホトノ、ウチニマキルと訓りオホトノは大殿なりこゝは行幸の際なれば帷幕の字を用ひたるか原本帷を惟に作るは誤寫○忍之別皇子、記に押別命とあり舊紀之を足に作る○熨　原本尉に作る北本玉本に據て改む○五十狹城入彦皇子、原本入の字なし北本玉本に據て補ふ北本子を女に作る上に七男六女とあるに據れば皇女は誤なり○二尾氏、原本三の字なし北本中本に據て補ふ○讃岐國造、國造本紀に神櫛鳥豐別命景行帝兄神櫛王三世孫瀛貴保命定賜國造とあり○播磨別、國造本紀に志賀高穴穗朝稻背入彦命孫伊許自別命定賜國造また錄右京皇別佐伯直の條に稻背入彦命の男御諸別に播磨を中分して賜ふ仍て針間別と號すとあり

則留而通之、爰弟媛以爲、夫婦之道、古今達則也、然於吾而不便、則請天皇曰、妾性不欲交接之道、今不勝皇命之威、暫納帷幕之中、然意所不快、亦形姿穢陋、久之不堪陪於掖庭、唯有妾姉、名曰八坂入媛、容姿麗美、志亦貞潔、宜納後宮、天皇聽之、仍喚八坂入媛爲妃、生七男六女、第一曰稚足彦天皇、第二曰五百城入彦皇子、第三曰忍之別皇子、第四曰稚倭根子皇子、第五曰大酢別皇子、第六曰渟熨斗皇女、第七曰渟名城皇女、第八曰五百城入姫皇女、第九曰麻依姫皇女、第十曰五十狹城入彦皇子、第十一曰吉備兄彦皇子、第十二曰高城入姫皇女、第十三曰弟姫皇女、又妃三尾氏磐城別之妹、水齒郎媛、生五百野皇女、次妃五十河媛、生神櫛皇子、稻背入彦皇子、其兄神櫛皇子、是讃岐國造之始祖也、弟稻背入彦皇子、是播磨別之始祖也、次妃阿倍氏木事之女高田媛、生武國凝別皇子、是伊豫國御村別之始祖也、次妃日向髮長大田根、生日向襲津彦皇子、是阿牟君之始祖也、次妃襲武媛、生國乳別皇子、

○阿倍氏、大彦命の後
○伊豫御村別、御村は今詳ならず
○大田根、集解根の下に媛の字を補ふ
○阿牟君、國造本紀に阿武國造、抄に長門國阿武郡阿武郷見ゆ
○水沼別、神代紀に筑紫水沼君見え抄に筑後國三潴郡三潴郷(美無萬)見ゆ此地なるべし
○火國別、火國は肥前肥後を云
○除日本武尊云々之外、記に若帶日子命與倭建命亦五百木之入日子命此三王負太子之名と見えて此三柱は日嗣御子とまし〳〵しなり　○封國郡、コトヨサシは國郡を治むる事を寄(ヨサ)し給ふなり封は字書に爵諸侯也王者以土地與人立爲諸侯曰封とあり　○苗裔、ミアナスエは御足之末にて子孫をアトと云に同じ通證にアナは名なりと云されば名ノ末にて名跡の末なり苗裔何れも字書に末也とあり裔を曜に作るは俗字なり　○是月、集解云按是月以下五十八字錯簡疑應在于二十年以後之紀以二十七年小碓命年十六考之是年先于大碓命誕生之年八年　○神骨、記に神大根王とあり兄遠子弟遠子も兄比賣弟比賣とあり

【十二年】(七月)熊襲、襲は國の名抄に大隅(古くは日向に屬す)國噌唹郡とある是なり熊と云は記傳に彼梟帥どもの建かりし故に云熊鷲熊鷹皆猛きを云稱なりと見ゆ紀中の例を按ずるに人に熊襲といひ國名に襲と云

與國背別皇子、一云宮道別皇子、豐戸別皇子、其兄國乳別皇子、是水沼別之始祖也、弟豐戸別皇子、是火國別之始祖也、夫天皇之男女前後并八十子、然除日本武尊、稚足彦天皇、五百城入彦皇子之外、七十餘子、皆封國郡、各如其國、故當今時、謂諸國之別者、卽其別王之苗裔焉、是月、天皇聞美濃國造、名神骨之女、兄名兄遠子、弟名弟遠子、並有國色、則遣大碓命、使察其婦女之容姿、時大碓命便密通而不復命、由是恨大碓命、冬十一月庚辰朔、乘輿自美濃還、則更都於纒向、是謂日代宮、

(壬午)十二年秋七月、熊襲反之不朝貢、八月乙未朔己酉、幸筑紫、九月甲子朔戊辰、到周芳娑磨、時天皇南望之、詔羣卿曰、於南方烟氣多起、必賊將在、則留之、先遣多臣祖武諸木、國前臣祖菟名手、物部君祖夏花、令察

其狀、爰有女人、曰神夏磯媛、其徒衆甚多、一國之魁帥也、聆天皇之使者至、則拔磯津山賢木、以上枝挂八握劍、中枝挂八咫鏡、下枝挂八尺瓊、亦素幡樹于船舳、參向而啓之曰、願無下兵、我之屬類、必不有違者、今將歸德矣、唯有殘賊者、一曰鼻垂、妄假名號、山谷嚮聚、屯結於菟狹川上、二曰耳垂、殘賊貪婪、屢略人民、是居於御木川上、三曰麻剝、潛聚徒黨、居於高羽川上、四曰土折猪折、隱住於綠野川上、獨恃山川之險、以多掠人民、是四人也、其所據並要害之地、故各領眷屬、爲一處之長也、皆曰、不從皇命、願急擊之、勿失、於是武諸木等先誘麻剝之徒、仍賜赤衣褌及種種奇物、兼令攜不服之三人、乃率己衆而參來、悉捕誅之、天皇遂幸筑紫、到豐前國長峽縣興行宮而居、故號其處曰京也、冬十月、到碩田國、其地形廣大亦麗、因名碩田也、碩田、此云於保岐陀、到速見邑、有女人、曰速津媛、爲一處之長、其聞天皇車駕而自奉迎之諮言、茲山有大石窟、曰鼠石窟、有二土蜘蛛、住其石窟、一曰青、二曰白、又於直

（八月）筑紫、今の九州を云

（九月）周芳淺磨、抄に周防國佐波郡佐波郷とある是なり周芳はスハと訓べし北本熟本應本曆を曆に作る

○多臣、綏靖紀（一〇三頁）に出づ原本臣を巨に作る北本熟本に據て改む

○國前臣、記孝靈帝の條に日子刺肩別命者豐國之國前臣之祖とあり國前は抄に豐後國國埼郡とある是なり

○物部君、垂仁紀卅九年（一一七頁）に見えたる物部首に同じさか

○神夏磯媛、通釋に夏の字を音に用ひし例なければカムナツシヒメと訓べしと云されど暫く改め難し

○甚多、ニヘサクと私記にあり甚饒富多皆同訓なり賑多（ニキサハ）の意か

○聆、字書に聽也とあり

○抜磯津山賢木云々、劍鏡玉を賢木に懸て奉るは聖德を稱へ言壽を奉るなり磯津山は未詳原本之の字なし北本熟本に據て補ふ

○素幡、白旗なり白旗を

入縣禰疑野有三土蜘蛛、一曰打猨、二曰八田、三曰國摩侶、是五人並其爲人强力亦衆類多之、皆曰不從皇命、若强喚者興兵距焉、天皇惡之不得進行、卽留于來田見邑、權興宮室而居之、仍與群臣議之曰、今多動兵衆、以討土蜘蛛、若其畏我兵勢、將隱山野、必爲後愁、則採海石榴樹作椎爲兵、因簡猛卒、授兵椎、以穿山排草襲石室之土蜘蛛、而破于稻葉川上、悉殺其黨、血流至踝、故時人其作海石榴椎之處曰海石榴市、亦血流之處曰血田也、復將討打猨、徑度禰疑山、時賊虜之矢、横自山射之、流於官軍前如雨、天皇更返城原、而卜於水上、便勒兵先擊八田於禰疑野而破、爰打猨謂不可勝而請服、然不聽矣、皆自投洞谷而死之、天皇初將討賊、次于柏峽大野、其野有石、長六尺、廣三尺、厚一尺五寸、天皇祈之曰、朕得滅土蜘蛛者、將蹶茲石、如柏葉而擧焉、因蹶之、則如柏上於大虛、故號其石曰蹈石也、是時禱神、則志我神、直入物部神、直入中臣神、三神矣、十一月、到日向國、起行宮以

樹つるは心の潔白なるを證して歸順を表するなり
○不有違者、違ふこと無しとなり玉本有の上に可の字あれど無くとも聞ゆ
○假名號、文選注に竊名號謂爲帝號也とあれどこゝは僭て衆を欺誘き居るを云
○菟狹、神武紀に出づ
○貪婪、楚辭注に愛財曰貪愛食曰婪とありオホキは通證に下文望訓於保美意通と云
○御木、抄に豐前國上毛郡(加牟豆美介)あり是なり豐前志に御木川は今の廣津川なりとあり
○高羽、抄に豐前國田河郡是なり豐前志に高羽川は今の伊田川なるべしと云
○綠野川、豐前志に此川今詳ならずと云通證に豐後國大野郡かといふは地理違へり
○誘、ヲコツルは招き誘ふを云或は招釣の意かと云
○攜、字書に與麾同手指麾也とあり
○豐前國、抄に豐前止與久邇乃美知乃久知とあり豐國の道の口の意

○長峽縣、集解に豐前國企救郡長野なるべしとあれど京都郡の舊名なり豐前志に行宮の跡は京都郡御所谷にありと云

（十月）頓田、抄に豐後國大分郡とある是なり

○速見邑、抄に同國速見郡あり是なり風土記に速水郡とあり

○鼠石窟、豐後志に速見郡北石垣村に在りと云

○直入縣、抄に同國直入郡あり是なり

○碩毘野、豐後風土記云碩毘野在柏原野之東天皇親欲伐此賊在茲野勅歷勞兵衆因謂碩毘野

○國麻侶、北本侶を呂に作る通證云人名曰摩侶始出于此

○來田見邑、風土記云直入郡球覃郷在郡北

○備興宮室而、原本而の字なし北本熟本玉本に據て補ふ

○海石榴樹、抄草木部に椿（豆波岐）楊氏漢語抄云海石榴（和名同上式文用之）と見ゆ秉燭譚に唐ノ時分ニハツバキヲ海石榴トイヘルニヤとあり

○爲兵、兵は兵器武器なり

○兵椎、兵器たる椎なり兵と椎とにあらず

○穿山排草、椎を以て山を穿ち草を開きたりと云は非なり別に其器あるべし椎は石室を覆ふ時に用ひしなり字書に椎擊物之具如鐵椎木椎とあり

○石室之土蜘蛛、之原本なし北本熟本青本に據て補ふ

○稽葉川、所在未詳

○日海石榴市、日原本なし應本中本に據て補ふ海石榴市は風土記に大野郡在郡南とあれど直入郡都野を其地とすべし

○血田、風土記に大野郡在郡南とあり

○徑、原本任に作るは徑の誤寫徑に徑の省文なり

○城原、今の直入郡城原村大字米納なり城原八幡宮あ

居之、是謂高屋宮、十二月癸巳朔丁酉、議討熊襲、於是天皇詔群卿曰、朕聞之、襲國有厚鹿文、迩鹿文者、是兩人熊襲之渠帥者也、衆類甚多、是謂熊襲八十梟帥、其鋒不可當焉、少興師則不堪滅賊、多動兵是百姓之害、何不假鋒及之威、坐平其國、時有一臣進曰、熊襲梟帥有二女、兄曰市乾鹿文、乾此云賦、弟曰市鹿文、容既端正、心且雄武、宜示重幣以攜納麾下、因以伺其消息、犯不意之處、則曾不血刃、賊必自敗、天皇詔、可也、於是示幣欺其二女、而納幕下、天皇則通市乾鹿文、而陽寵、時市乾鹿文奏于天皇曰、無愁熊襲之不服、妾有良謀、卽令從一二兵於己、而返家、以多設醇酒、令飲己父、乃醉而寐之、市乾鹿文密斷弦、爰從兵一人進殺熊襲梟帥、天皇則惡其不孝之甚、而誅市乾鹿文、仍以弟市鹿文賜於火國造、

り　○洞谷、北本熱本應本洞ヵ澗に作る　○柏峽大野、風土記に直入郡柏原郷あり　○柏葉、柏は抄草木部に槲(可之波)唐韻云柏(和名同上)木名也とあり記傳にカシハは一樹の稱に非ず何樹にまれ飲食の具に用ふる葉を云とありハラのラは助辭なり　○如柏、集解は壺井本に據て下に葉の字を補ふ無くとも通ず　○志我神、通證に筑前國糟屋郡志加海神社とあれど信け難し今不詳　○直入物部神、豐後國志云直入郡社家村に在り　○直入中臣神、同云直入郡中野村に在り　(十一月)高屋宮、抄に大隅國肝屬郡鷹屋郷あり高屋は此處か　(十二月)熊襲八十梟帥、衆類甚多きに依て八十梟帥と云總稱なり　○容既端正、玉本既を顔に作る心且と對句なれば原本の儘にて通ず　○攜納麾下、集解攜を僞に改む恐くは非オモトは御許なり軍中なる故に麾下と書けり　○消息、易豐卦の彖の辭の注に謂ニ進退一とありアルカタチは現在の狀況なり　○詔可也、集解詔の下に曰の字を補ふ　○陽寵、陽は字書に與レ佯同詐也とあり　○醇酒、漢書曹參傳の注に醇酒不レ澆謂ニ厚酒一也とあり字鏡に醲厚酒也加良支酒と見ゆ　○火國造、國造本紀云火國造瑞籬朝大分國造同祖志貴多奈彦命兒遲男江命定ニ賜國造一

【十三年】日向國造、國造本紀云日向國造輕島豐明朝御世豐國別皇子三世孫老男定ニ賜國造一

【十七年】子湯縣、抄に日向國兒湯郡あり是なり　○丹裳小野、同郡三宅村の邊なるべしと云　○陟、原本涉に作る北本熱本及類史に據て改む　○歌曰云々、此大御歌記には倭建命能煩野に至りましゝ時に詠ませる歌とし之を三首に分てり傳說を異にせるなり一首の大意は大空を仰見れば鄕里なる大和の方向より雲が立來る大和國は青山四面に繞り天下の多くの國々の中にて最も美しき國なれば恙なく壯健なる人々は平群山の白檮の枝を髻華に刺して樂しみ遊べと仰せられしにて都を御出發遊されしより既に六年に成りしかば大和國を慕はしく思召す大御心の殊に切なるより其の至情を詠み出てさせ給ひしなり　○波辭枳豫辭、愛(ハ)しきよしなりハシはウルハシにて愛する意ヨシは助辭なり記にはハシケヤシとありヤシもヨシも同じ　○和藝幣能伽多由、吾家の方よりたなびくはよりの意　○區毛位多知區暮、雲居起來もなりクモヰはこゝは直に其雲を

(癸未)十三年夏五月、悉平ニ襲國一、因以居ニ於高屋宮一、已六年也、於是其國有ニ佳人一、曰ニ御刀媛一(彌波迦志御刀、此云)、則召爲ニ妃、生ニ豐國別皇子一、是日向國造之始祖也、

(丁亥)十七年春三月戊戌朔己酉、幸ニ子湯縣一、遊ニ于丹裳小野一、時東望之、謂ニ左右一曰、是國也直向ニ於日出方一、故號ニ其國一曰ニ日向一也、是日陟ニ野中大石一、憶ニ京都一而歌之曰、波辭枳豫辭、和藝幣能伽多由、區毛位多知區暮、夜摩苔波、區珥能摩保邏摩、多多儺豆久、阿烏伽枳夜摩、許莽例屢、夜摩苔之、于漏破試、異能知能摩曾祁務比苔破、多多瀰許莽、弊遇利能夜摩能、志邏伽之餓延塢、于受珥左勢、許能固、是謂ニ思邦歌一也、

指して云結のモは歌きの意記には以上三句を一首として此者片歌也とあり　○夜摩苦波、倭はなり原本苦を苦に作る北本聽本に據て改む下同じ　○區珥能摩保邇摩、國の眞區、マホラマ、なりマホは眞秀にて眞に秀でたる意ラは添て云神武紀に國之墺區乎とあるに同じ　○多々儺豆久、守部の說に疊畳附(タ、ナミツク)にて四面に重り立る山の形容なりと云　○阿烏伽枳夜摩許莽阿隈、青垣山隱れるなり青山の四方に廻れるを云　○夜摩苦之子漏破試、倭し愛しなりシは助辭なり記には以上を一首とす　○異能知能、命のなり　○摩曾祁務世苦波、眞幸けむ人はなり記に麻多祁牟比登波とあり　○多々瀰許莽、疊薦にて平群の枕詞原本瀰を彌に作る北本師史に從ふ下同じ　○鷺遇利能夜摩能、平群の山のなり　○志邇那之餓延塡、白檀かの美しきを頭に挿し後に金銀を以て之を造るに至れり　○是謂思邦歌、樂府にて此歌を思邦歌と稱したりと云なり

【十八年】三月巡狩、文選西都賦に巡者循也狩牧也謂天子巡幸守牧也とあり　○夷守、兵部式に筑前國驛馬夷守十五匹とあり今の帥屋郡多々羅村ならむかと云　○石瀨河、同式に筑前石瀨五匹と見ゆ　○諸縣君、諸縣は日向國諸縣郡なり　○依羅、聽本依の字なし　四月熊縣、肥後國球磨郡なり　○自海路而、原本而の字なし北本聽本に據て補ふ　○葦北小嶋、肥後國葦北郡　○進食、ミヲシのミは御ヲシは食するを云　○山部阿弭古、山部をヤマと訓むは延喜四年の詔に臣下之禮必稱君父諱比者先帝御名及廟之諱公

十八年春三月、天皇將向京以巡狩筑紫國、始到夷守、是時於石瀨河邊、人衆聚集、於是天皇遙望之詔左右曰、其集者何人也、若賊乎、乃遣兄夷守、弟夷守二人令覩、乃弟夷守還來而諮之曰、諸縣君泉媛依獻大御食而其族會之、夏四月壬戌朔甲子、到熊縣、其處有熊津彥者兄弟二人、天皇先使徵兄熊、則從使詣之、因徵弟熊、而不來、故遣兵誅之、壬申、自海路而泊於葦北小嶋而進食、時召山部阿弭古之祖小左、令進冷水、適是時嶋中無水、不知所爲、則仰之祈于天神地祇、忽寒泉從崖傍涌出、乃酌以獻焉、故號其嶋曰水嶋也、其泉猶今在水嶋崖也、五月壬辰朔、從葦北發船、到火國、於是日沒也、夜冥不知著岸、遙視火光、天皇詔挾杪者曰、直指火處、因指火往之、卽得著岸、天皇問其火光處曰、何謂邑

私觸犯不忍聞之目今以後宜幷改避於是改姓山部爲山とあり桓武天皇の御諱を避けたるなり山部は氏、阿弭古は姓なり

○冷水、私記にサムキミモヒと訓りサムキは寒冷なるを云モヒは飲料の水を云

○水嶋　肥後風土記に球磨縣乾七里海中有島名曰水島とあり今八代郡植柳村西南の海口にありと云

○猶今、集解今猶に改作る

（五月）火國、後の肥前肥後を云國名の起はこゝに見えたるが如し

○狹杪者、北本楓本吉本熱本及類史杪を梔に作る抄舟車部舵の條に今按舟人呼狹杪爲舵師是とあり舵は舵に同じ

○火光處、仙覺抄所引火下之の字あり

○八代縣、肥後國八代郡なり

○豐村、抄に八代郡豐福郷あり

（六月）高來縣、肥前國高來郡是なり

○玉杵名邑、抄に肥後國

也、國人對曰、是八代縣豐村、亦尋其火、是誰人之火也、然不得主、茲知非人火、故名其國曰火國、六月辛酉朔癸亥、自高來縣渡玉杵名邑、時殺其處之土蜘蛛津頰焉、丙子、到阿蘇國也、其國郊原曠遠、不見人居、天皇曰、是國有人乎、時有二神、曰阿蘇都彦、阿蘇都媛、忽化人以遊詣之曰、吾二人在、何無人耶、故號其國曰阿蘇、秋七月辛卯朔甲午、到筑紫後國御木、居於高田行宮、時有僵樹、長九百七十丈焉、百寮蹈其樹而往來、時人歌曰、阿佐志毛能、瀰概能佐烏麼志、魔幣苑者彌、伊和哆羅秀暮、彌開能佐烏麼志、爰天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵嶋山、當夕日暉、亦覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木也、故是國宜號御木國、丁酉、到八女縣、則越藤山、以南望粟岬、詔之曰、其山峯岫重疊、且美麗之甚、若神有其山乎、時水沼縣主猿大海奏言、有女神名曰八女津媛、常居山中、故八女國之名由此而起也、八月、到的邑而進食、是日、膳夫等遺盞、故時人號其忘盞處曰浮

羽、今謂的者訛也、昔筑紫俗號盞曰浮羽、

玉名郡あり　○阿蘇國、國造本紀に阿蘇國造見えたり抄に肥後國阿蘇郡阿蘇郷見ゆ今の阿蘇郡の地なり　○阿蘇都彦、式に肥後國阿蘇郡健磐龍命神社阿蘇比咩神社あり阿蘇都彦は健磐龍命の神號なるべし磐龍命は記傳に神八井耳命の子とあり阿蘇都媛に磐龍命の妃なるべし　○七月御木、抄に筑後國御毛郡とあり是なり　○高田行宮、宮詳本詳　○百寮、文選西都賦注に寮は官也とあり　○阿佐志毛能、朝霜之にて消にいひかけたる枕詞　○巍巍能佐烏麻志、御木之真小橋にて歌れたる樹なり云原本巍を巍に作る北本熟本に鑄て改む下同じ　○電幣蒐書爾、前津君にて諸細なり云　○伊和昨羅幕、伊和ら昨羅すらなりイは發語ワは濁るを延べて云ヱは助辭　○歴木、抄に釣樟本草云釣樟一名烏樟(久奴岐)また擧樹本草云擧樹(久奴木)日本紀私記云歴木と見えたり箋注に按歴木俗作櫪新撰字鏡云櫪同久奴木本書里蘊類樂子鄙見擧樹は本草和名に奈美久奴岐とありて別物なりと云此御木の歴木の事中島廣足氏の歴木考に其實地を詳記せり　○朝日暉、類史暉を光に作る下同じ　○杵島山、逸文風土記に肥前國杵島郡の南に杵島山あり毎歳春秋郷閭士女登望の由見ゆ　○亦霞、亦の字は諸本に據て補ふ　○阿蘇山、肥後國阿蘇郡にあり原本山の下也の字あり北本熟本に據て削る　○八女縣、持統紀に上毛野(カミツケノ)郡とあり筑後國上妻郡下妻郡是なり　○藤山、原本に藤を前に作る北本中本及類史に據て改む按に藤の字を省略して萩と書けるを更に誤て前と爲れり藤山は御井郡にあり　○葉岬、所在未詳玉本葉を栗に北本岬を崎に作る　○峯岫、岫は字書に山穴也また峯巒亦稱岫とあり此に峯稱なる云るなればクキの訓は當らず　○水沼縣主、出自未詳水沼別は上に出づ　○由此而起、而原本なし諸本に據て補ふ　○的邑、筑後國生葉郡是なり　○亦盞處、原本北本魂本忘を是に作る類史中本に據り此に改むるは自明の理なり　○浮羽、筑後風土記に俗謂酒盞爲宇枳とあり記八千矛神の御歌の條に爲宇岐由比(盞結)同類略天皇の段に多麻宇岐(玉盞)とあれば浮は盞なりされば此に盞を號けて浮羽と曰ふとあれど浮は盞羽は者也(ハヤ)の者(ハ)にて助辭なり

【十九年】

【二十年】廿年、河海抄所引本廿三年に作るは何に據れるか詳ならず

○五百野皇女、上に出づ倭姫命に代て奉仕し給ひしなるべし世記には相並びて仕奉らしと如く見ゆれど疑はし

【廿五年】令察北陸云々、面證に今按此乃採摩使之起原と云り

【廿七年】(二月)日高見國、東夷の日高見國は武

十九年秋九月甲申朔癸卯、天皇至自日向、

廿年春二月辛巳朔甲申、遣五百野皇女令祭天照大神、

廿五年秋七月庚辰朔壬午、遣武內宿禰令察北陸、及東方諸國之地形、且百姓之消息也、

廿七年春二月辛丑朔壬子、武內宿禰自東國還之奏言、東夷之中、有日高見國、其國人、男女並椎結文身、爲人勇悍、是總曰蝦夷、亦土地沃

に陸奥國桃生郡日高見神社あればその邊なるべし常陸風土記に信太郡をば此地本日高見國云とあり
○椎結、髪を結び擧るを云漢書西南夷傳注に結讀曰髻如椎之形也とあり椎結は形の椎に似たるに因れり
○文身、モトロケはマダラと通じ身を斑にする由なりと云
○蝦夷、鬚長く生て蝦に似るより名づく齊明紀に熟蝦夷麁蝦夷の名見ゆ
（八月）
（十月）
○何處、ウヅコはイヅコなり但し他に用例を見ず
○弟彦公、天孫本紀に火明命九世孫弟彦命あり此人ならむか
○石占横立、石占は伊勢桑名郡の地名か
○田子之稲置、田子は尾張國愛智郡の地名か
○乳近之稲置、北本近を延に作る集解に按智多郡有近崎村與田光阻數村相近蓋此地と云り
（十二月）
○宴、ニヒムロウタゲと訓しは記に御室樂（ニヒムロウタゲ）とあるに據

壤而曠之、擊可取也、秋八月、熊襲亦反之、侵邊境不止、冬十月丁酉朔己酉、遣日本武尊令擊熊襲、時年十六、於是日本武尊曰、吾得善射者欲與行、其何處有善射者焉、或者啓之曰、美濃國有善射者、曰弟彦公、於是日本武尊遣葛城人宮戸彦喚弟彦公、故弟彦公便率石占横立、及尾張田子之稲置、乳近之稲置而來、則從日本武尊而行之、十二月、到於熊襲國、因以伺其消息及地形之嶮易、時熊襲有魁帥者、名取石鹿文、亦曰川上梟帥、悉集親族而欲宴、於是日本武尊解髪作童女姿、以密伺川上梟帥之宴時、仍劍佩裾裏、入於川上梟帥之宴室、居女人之中、川上梟帥感其童女容姿、則携手同席、擧坏令飲而戲弄、于時也更深人闌、川上梟帥且被酒、於是日本武尊抽裾中之劍、刺川上梟帥之胸、未及之死、川上梟帥叩頭曰、且待之、吾有所言、時日本武尊留劍待之、川上梟帥啓之曰、汝尊誰人也、對曰、吾是大足彦天皇之子也、名日本童男也、川上梟帥亦啓之曰、吾是國中之强力者也、是以當

て調しなるべしニヒムロは新室ウタゲは打上なり手を打て樂しむを云 ○解髮作童女姿、記に垂髮童女と云、緩梳垂具結御髮とある是なり ○劍佩裹、北本玉本劍佩を佩劍に作る ○席、シキは敷居なり敷物の意 ○坏、北本杯に作る ○弄、マサグルは目探なるべし倭訓栞には間探なりと云 ○人闌、字書に闌希也とあり ○賤賊、原本賊を賤に作る應本楓本中本に據て改む ○無恒噉、原本噉を唯一の二字に作る北本吉本中本に據て改む 噉は漢書高帝紀に無噉類と見え注に無復有活而噉食者とあり噉は啗也物を食ふ者無きを云 ○穴海、下文に吉備穴濟とあり穴は國造本紀に吉備穴國とある是なるべし抄に備後國安那郡とあるも亦同じ ○柏濟、通證云吉備國成羽郡野里村

【廿八年】

○背有害心、原本有の字なし北本無に據て補ふ ○禍害二字、藤原字書に物を禍害とあり ○日本武尊、原本尊の字なし集解に從て補ふ

【四十年】
（六月）
（七月）

時諸人、不勝我之威力、而無不從者、吾多遇武力矣、未有若皇子者、是以賤賊、陋曰以奉尊號、若聽乎、曰、聽之、即啓曰、自今以後、號皇子、應稱日本武皇子、言訖、乃通胸而殺之、故至于今稱曰日本武尊、是其緣也、然後遣弟彥等、悉斬其黨類、無餘噍、既而從海路還倭、到吉備以渡穴海、其處有惡神、則殺之、亦比至難波、殺柏濟之惡神、濟、此云和多利

廿八年春二月乙丑朔、日本武尊奏平熊襲之狀曰、臣賴天皇之神靈、以兵一舉、頓誅熊襲之魁帥者、悉平其國、是以西洲既謐、百姓無事、唯吉備穴濟神、及難波柏濟神、皆有害心、以放毒氣、令苦路人、並爲禍害之藪、故悉殺其惡神、並開水陸之徑、天皇於是美日本武尊之功、而異愛、

卅年夏六月、東夷多叛、邊境騷動、秋七月癸未朔戊戌、天皇詔群卿曰、今東國不安、暴神多起、亦蝦夷悉叛、屢略人民、遣誰人以平其亂、羣臣皆不

知誰遣也、日本武尊奏言、臣則先勞西征、是役必大碓皇子之事矣、時大碓皇子愕然之、逃隱草中、則遣使者召來、爰天皇責曰、汝不欲矣、豈强遣耶、何未對賊以豫懼甚焉、因此遂封美濃、仍如封地、是身毛津君、守君、二族之始祖也、於是日本武尊雄誥之曰、熊襲既平、未經幾年、今更東夷叛之、何日逮于大平矣、臣雖勞之、頓平其亂、則天皇持斧鉞、以授日本武尊、曰、朕聞、其東夷也、識性暴强、凌犯爲宗、村之無長、邑之勿首、各貪封堺、並相盜略、亦山有邪神、郊有姦鬼、遮衢塞徑、多令苦人、其東夷之中、蝦夷是尤强焉、男女交居、父子無別、冬則宿穴、夏則住樔、衣毛飲血、昆弟相疑、登山如飛禽、行草如走獸、承恩則忘、見怨必報、是以、箭藏頭髻、刀佩衣中、或聚黨類、而犯邊界、或伺農桑、以略人民、擊則隱草、追則入山、故往古來未染王化、今朕察汝爲人也、身體長大、容姿端正、力能扛鼎、猛如雷電、所向無前、所攻必勝、卽知之、形則我子、實則神人、是寔天愍朕不叡、且國不平、令經綸天業不絕宗廟乎、亦是天下、則汝

○封、四年紀（一四四頁）に出づ
○身毛津君、身毛津は抄に美濃國武藝（今云武儀）郡とある是なり錄左京皇別に牟義公に作る
○守君、美濃國に守と云地名見えず抄に信濃國佐久郡茂理鄉あり錄左京皇別に守公と見ゆ
○二族之始祖也、原本也の字なし北本楓本中本に據て補ふ應本玉本二の上に凡の字あり
○大平、中本大を太に作る諸本原本に同じ
○持斧鉞、抄征戰具類に鉄鉞禹佐賀利鉄亦作斧とあり刑戮の具なり征伐の時之を將帥に授けて誅戮を委任すされどこゝは唯漢文の潤色のみ記には比々羅木之八尋矛とあり
○冬則宿穴、蝦夷の生活の狀態を述べたるものなるが禮記の禮運に據て書ける漢文の潤色あり
○昆弟、昆は兄也兄弟と云に同じ

○忘、原本忌に作る諸本に據て改む
○頭髓、通證に結髮云多久布佐婆(フサヌル)也今云多布佐とあり北本熱本髓を髮に作る
○雷電、抄天地部に雷和名奈流加美一云以加豆知)玉篇云電、和名以奈比加利一云以奈流比久云以奈豆末)雷之光也とあり名義は稍突(イナツルミ)なりと云
○頭向無前、向ふ所敵なきを云
○實則神人、ムサネは子核(ミサネ)の義
○不叡、ヲサナシは長無しにて幼稚と同じ
○不平、私記にミダレタルを測り
○示之、原本示を永に作る北本熱本に據て改む
○自令帶釵、原本釵を頂に作る水本に據て改む
○理三月劍、此句漢高祖紀に出づ漢文の潤色なり
○浹辰、左傳成公九年の注に浹辰十二日也疏に浹爲周匝也子至亥爲十二辰謂周子亥十二辰故爲十二日也とあり
○吉備武彦、錄有京皇別壓原公の條に孝靈天皇皇

天下也、是位則汝位也、願深謀遠慮、探姦伺變、示之以威、懷之以德、不煩兵甲、自令臣隷、卽巧言調暴神、振武以攘姦鬼、於是日本武尊乃受斧鉞、以再拜奏之曰、嘗西征之年、賴皇靈之威、提三尺劍、擊熊襲國、未經浹辰、賊首伏罪、今亦賴神祇之靈、借天皇之威、往臨其境、示以德教、猶有不服卽擧兵擊、仍重再拜之、天皇則命吉備武彦與大伴武日連、令從日本武尊、亦以七掬脛爲膳夫、冬十月壬子朔癸丑、日本武尊發路之、戊午、拄道拜伊勢神宮、仍辭于倭姬命曰、今被天皇之命、而東征將誅諸叛者、故辭之、於是倭姬命取草薙劍、授日本武尊曰、愼之莫忘也、是歲、日本武尊初至駿河、其處賊陽從之、欺曰、是野也麋鹿甚多、氣如朝霧、足如茂林、臨而應狩、日本武尊信其言、入野中而覓獸、賊有殺王之情、王謂日本武尊也、放火燒其野、王知被欺、則以燧出火之、向燒而得免、一云、王所佩劍叢雲自抽之薙攘王之傍草、因是得免、故號其劍曰草薙也、叢雲此云茂羅玖毛、王曰、殆被欺、則悉焚其賊衆而滅之、故號其處曰燒津、亦進相模、欲往上總、望海高言曰、是

子稚武彦命の孫とあり
○大伴武日連、垂仁紀廿五年に見ゆ（一三二頁）
○七掬脛、記に久米直之祖七拳脛とあり
○膳夫、古は食物は主と柏葉に盛りしより之を調理する人をカシハデと云
（十月）枉道、道を迂回するを云字書に枉音狂亂貌とあれど名義抄に枉俗枉字マガルマグとあり
○拜伊勢神宮、記に參入伊勢大御神宮拜神朝廷とあり
○辭于倭姫命云々、辭は罷申なり征路に罷赴かむとて其由を申すなり下文には暇申とあり記に自其姨倭比賣命者天皇既所以思吾死乎何擊遣西方之惡人等而返參上來之間未經幾時不賜軍衆今更平遣東方十二道之惡人等と見え書紀と傳說を異にせり
○草薙劍、名稱の起因は下に見ゆ此劍の事神代紀上寶劍出現章に詳なり
○是歲、通證云或曰歲當作月
○麋鹿、麋は字書に獸名似鹿而大とあり
○茂林、シモトは楮也木

小海耳、可立跳渡、乃至于海中暴風忽起、王船漂蕩而不可渡、時有從王之妾曰、弟橘媛穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒、是必海神心也、願以妾之身、贖王之命而入海、言訖、乃披瀾入之、暴風卽止、船得著岸、故時人號其海曰馳水也、爰日本武尊則從上總轉入陸奥國、時大鏡懸於王船、從海路廻於葦浦、橫渡玉浦至蝦夷境、蝦夷賊首嶋津神、國津神等、屯於竹水門而欲距、然遙視王船、豫怖其威勢、而心裏知之不可勝、悉捨弓矢、望拜之曰、仰視君容、秀於人倫、若神之乎、欲知姓名、王對之曰、吾是現人神之子也、於是蝦夷等悉慄、則褰裳披浪、自扶王船而着岸、仍面縛服罪、故免其罪、因以俘其首帥、而令從身也、蝦夷既平、自日高見國還之西南歷常陸至甲斐國、居于酒折宮、時擧燭而進食、是夜、以歌之問侍者曰、珥比麼利、菟玖波塢須擬氏、異玖用加禰菟流、諸侍者不能答言、時有秉燭者、續王歌之末而歌曰、伽餓奈倍氏、用珥波虛虛能用、比珥波苔塢伽塢、卽美秉燭人之聰

の細枝を云
○(注)王謂云々、集解には私記の攙入として之を削る
○燧、抄燈火部に燧比宇知とあり此燧のこと記に亦賜御囊而詔者若有急事解茲囊口云々故知見欺而解開其嫉倭比賣命之所給囊口而見者火打有其裏云々以其火打而打出火者向火而燒退とあり同書裏書に兼久案之今世俗號火打囊付于刀者可爲此因緣也と云るは誠に然るべし
○向燒、記に著向火而燒退とあり
○燒津、抄に駿河國益頭郡益頭郷とある是なり燒の音を忌て益の字を充しが後文字に引れてマシツと誤り訓り今は燒津(ヤイヅ)と云
○相摸、國造本紀には相武國とあり
○上總、倭遺に好麻所生故謂之總國とあり始め總國と云しが後に分れて二國と爲る其年代は未詳
○高言、コトアゲの解は神代紀上(一六頁)に出づ
○暴風、抄に暴風漢語抄

而敦賞、則居是宮、以輙部賜大伴連之遠祖武日也、於是日本武尊曰、蝦夷凶首、咸伏其辜、唯信濃國越國頗未從化、則自甲斐北轉、歷武藏上野、西逮于碓日坂、時日本武尊每有顧弟橘媛之情、故登碓日嶺、而東南望之、三歎曰、吾嬬者耶、嬬、此云莵摩、故因號山東諸國、曰吾嬬國也、於是分道、遣吉備武彦於越國、令監察其地形峻易、及人民順不、則日本武尊進入信濃、是國也山高谷幽、翠嶺萬重、人倚杖而難升、巖嶮磴紆、長峯數千、馬頓轡而不進、然日本武尊披烟凌霧、遙徑大山、既逮子峯、而飢之、食於山中、山神令苦王、以化白鹿立於王前、王異之、以一箇蒜彈白鹿、則中眼而殺之、爰王忽失道、不知所出、時白狗自來、有導王之狀、隨狗而行之、得出美濃、吉備武彦自越出而遇之、先是度信濃坂者、多得神氣、以瘞臥、但從殺白鹿之後、踰是山者、嚼蒜塗人及牛馬、自不中神氣也、日本武尊更還於尾張、卽娶尾張氏之女宮簀媛、而淹留踰月、於是聞近江膽吹山有荒神、卽解劍置於宮簀媛家、而徒行之、至膽

吹山山神化大蛇當道、爰日本武尊不知主神化蛇之謂、是大蛇必荒神之使也、既得殺主神、其使者豈足求乎、因跨蛇猶行、時山神之興雲零氷峯霧谷曀、無復可行之路、乃捿遑不知其所跋涉、然凌霧強行、方僅得出、猶失意如醉、因居山下之泉側、乃飲其水而醒之、故號其泉曰居醒泉也、日本武尊於是始有痛身、然稍起之還於尾張、爰不入宮簀媛之家、便移伊勢而到尾津、昔日本武尊向東之歳、停尾津濱而進食、是時解一劍置於松下、遂忘而去、今至於此、是劍猶存、故歌曰、烏波利珥、多陀珥霧伽幣流、比苔菟麻菟、阿波例比等菟麻菟、比苔珥阿利勢摩、岐農岐勢摩之塢、多知波開摩之塢、逮于能褒野而痛甚之、則以所俘蝦夷等獻於神宮、因遣吉備武彦、奏之於天皇曰、臣受命天朝、遠征東夷、則被神恩、賴皇威、而叛者伏罪、荒神自調、是以卷甲戢戈、愷悌還之、冀曷日曷時、復命天朝、然天命忽至、隙駒難停、是以獨臥曠野、無誰語之、豈惜身亡、唯愁不面、既而崩于能褒野、

云波夜知又能和岐乃加世とありアカラシマカゼはアカラサマカゼにて忽ち急に吹起る風を云

○妾、抄に妾（和名乎无奈女或説言非正嫡）小妻也とあれどこゝはミメと訓べし

○弟橘媛、式に上總國長柄郡橘神社あり

○穗積氏、崇神紀に出づ

○泌、説文に俠流也とあり段注に俠流者輕快之流と見ゆ

○以妾之身、北本紀略及私記以加賤に作り中本之の下賤の字あり應本楓本原本に同じ

○馳水、今相摸國三浦郡浦賀町に走水と云地あり亦走水神社（祭神日本武尊）あり

○陸奥國、萬葉十八に美知能久齊明紀に陸道奥とあり京よりの道の奥にあるを以て名づく今の陸前陸中陸奥の三國を云

○葦浦、常陸國安是湖なりとの説あれど詳ならず

○玉浦竹水門も同じく未詳

○望拜、オホミの訓義未詳

○現人神、通證云言神而現于人匪直也人也此

時年卅、天皇聞之、寢不安席、食不甘味、晝夜嗟咽、泣悲摽擗、因以大歎之曰、我子小碓王、昔熊襲叛之日、未及總角、久煩征伐、既而恒在左右、補睦不及、然東夷騷動、勿使討者、忍愛以入賊境、一日之無不顧、是以朝夕進退、佇待還日、何禍兮、何罪兮、不意之間、倏亡我子、自今以後、與誰人之經綸鴻業耶、卽詔羣卿、命百寮、仍葬於伊勢國能褒野陵、時日本武尊化白鳥、從陵出之、指倭國而飛之、群臣等因以開其棺槨而視之、明衣空留而屍骨無之、於是遣使者追尋白鳥、則停於倭琴彈原、仍於其處造陵焉、白鳥更飛至河內、留舊市邑、亦其處作陵、故時人號是三陵、曰白鳥陵、然遂高翔上天、徒葬衣冠、因欲錄功名、卽定武部也、是歲也天皇踐祚四十三年焉、

指天皇　○面縛、垂仁紀五年に出づ（一一九頁）　○俘、字書に見囚戰而獲敵之人、物曰俘とあり　○酒折宮、今甲斐國西山梨郡里垣村宮蹟に酒折神社あり　○侍者、御前に伺候する人なり云　○珥比奴利、抄に常陸國新治郡新治郷あり是なり　○菟玖波塩如嬢氏　筑波なり云ひさてなり抄に筑渡郡筑渡郷あり是なり　○異玖用加嘯菟流、幾夜か寢つるなり記傳に凡て日數を經ることなり云に幾夜宿てと云は古も今も常なりとあり　○秉燭者、記に御火燒之老人とあり　○伽倶奈倍氏、記傳に日々並カ、ナヘ、てなりカは二日三日のカにて日數を計へ云言カ、と重ねたるは日々夜々など云と同じナベテとは今日迄の日を並て都てと云ことなりとあり　○用珥波嘯々能用、夜には九夜なり九と云は當夜を數へぬなり　○比珥波若嘯伽嘯、日には十日をなり結のヲは歎きの辭なり　○報部、報貢部にて報を貢て仕奉れる由の名　○信濃國、齊明紀及記に科野とあり通證に今按科木出が此國其濃度其報シナヒ、強國名此の義に出るかと云　○越國、孝元紀七年に出づ　○頗求從化、玉本化の上に王の字を補ふ　○確日坂、抄に上野國碓水郡あり信濃と上野との境にあり　○顯、字書に眷念也とあり　○三歎、記傳にネモコロニナゲカシヲと訓べしと云り　○吾嬬者耶、記に阿豆麻波夜とありハヤは深く歎息する辭なり嬬は字書に妻也とあり　○山東諸國、令義解に東山道山東謂信濃與上野界山也とあり界山とは碓水嶺なり云　○書嬬國、記には故登ニ立其(足柄)坂三歎詔云阿豆麻波夜ニ故號ニ其國ニ謂阿豆麻也とあり足柄碓水以東の相模武藏安房上總下總常陸上野下野の八ケ國所謂關八州の地なり　○監察、原本監を鑒に作る北本熟本應本に據て改む　○磯紀、字書に磯は奥崎同登陸と通也紀は屈曲崎也とありカケハシは倭訓栞に懸階の義卽棧道也と見ゆ　○賴響、文選陸士衡詩の注に賴猶言也とありナヅムは煩雜の字の義にて滯り溺るな

云　○大山、ミヤマは眞山の意　○徑、字書に猶行也又行過也とあり　○令苦王、通釋上に將の字を補ふ　○白鹿、記傳にシロキカと訓べし鹿の字シカともカセキとも訓べからずと云此白鹿の條のこと記には足柄山の事とせり　○信濃坂、記傳に美濃國惠奈郡より信濃國伊那郡に越ゆる國堺の坂なりと云　○瘼臥、抄に私記云宇江不世利とあり神武紀に瘁をヲエヌと訓りウエ音通ふ瘼は字書に病也とあり　○宮簪媛、熱田緣起に稻種の妹とす稻種は舊事紀に火明命十二世孫建稻種命と見ゆ　○近江膽吹山、近江と美濃との境にあり坂田郡に屬す膽吹山の荒振神の事記に以其御刀之草那藝劍置其美夜受比賣之許而取伊服岐能山之神幸行於是詔茲山神者徒手直取而騰其山之時白猪逢于山邊其大如牛爾爲言舉而詔是化白猪者其神之使者雖今不殺還時將殺而騰坐於是零大氷雨打惑倭建命（此化白猪者非其神之使者當其神之正身因言舉見惑也）とあり比較して異同ある事を知べし北本膽吹を五十葺に作る　○徒行、記に徒手とあり　○山神化大蛇、記には白猪とあり　○圭神、記に其神之正身とあり共意なり　○荒神之使、記にも神之使者とあり神使の事此に始て見ゆ　○零氷、原本氷を水に作る北本熱本玉本に據て改む記にも大氷雨とあり　○峯霧、キリは霧立つ意の古言　○谷曖、毛詩邶風終風の篇の傳に陰而風曰曖とあり　○跋涉、原本跋を跂に作る諸本に據て改む　○居醒泉、近江國坂田郡にあり今も醒井と云記には玉倉部之清泉とあり　○尾津、伊勢國桑名郡にあり勢陽雜記に今戸津と云とあり　○是劍、是の字は北本に據て補ふ　○烏渡利耳云々、尾張に直接に向へる一つ松人にあらむには衣を著せましを大刀をも佩せましをにて孤松の尊の佩かせ給ひし御劍を能く守護せる功を愛で、詠ませ給ひしなり一松と云て更にあはれ一松と重れて宣給ひしは深く之を歎賞し給ひしなり　○比苦、苦原本苦に作る北本應本に據て改む　○能褒野、伊勢國鈴鹿郡にあり陵墓要覽云川崎村大字田村字女ヶ坂　○獻於神宮、皇大神宮に俘を獻て捷を奏せられしなり　○自調、調は字書に和也和合也又揉伏也とあり自ら從ひ伏するを云　○卷甲戢戈、甲を卷くは身に著たる甲を脫ぎて之を卷くを云戢めは字書に藏兵也とありて手に執りて戈を藏めて用ひざるを示すにて戰鬪を止むるを云　○愷悌、字書に愷悌言樂易也また愷は康也悌は善兄弟也とあり戰終りて平和になり心樂しむを云故にイクサトケテと訓り凱旋の誤と云說あれど記の序にも愷悌歸於華夏とあり必ず誤とも云べからず　○天命、字書に天道之流行而賦於物者有物必有則如命令也とあり　○隙駒難停、駒は駒馬隙は穴也日月の速に經過するを駒馬の馳せて穴を過るに譬ふ　○曠野、荒野なりノラのラに添て云助辭　○崩、此に崩の字を用ひしは特に崇め奉りしなりミコトに尊を用ひ墓を陵と稱し奉りて一に天皇に同じ常陸風土記には倭武天皇とも記奉れり　○時年卅、水本云按二十七年條當三十二　○喉咽、喉は哽と通じ書けるにや字書に哽咽は悲歎而氣結喉塞鳴咽不能成聲也とあり　○摽擗、集解に擗摽の誤とす毛詩邶風に寤擗有摽とあり字書に擗は拊心也摽も拊心貌又擊也とあり悲哀胸に滿ちいかゞすべきかと之を撫づるを云　○小碓王、原本小を少に作る應本に據て改む　○未及總角、總角は抄人倫部に毛詩注云總角（辨色立成云阿介萬岐）結髮也とあり古は年齡十五六歲の間は髮を額に束ね十七八歲の頃は分けて角子と爲せり角子卽ち總角なり故にアゲマキと云髮を上げて卷き束ぬるより云る名なるべし　○進退、進むも知らず退くことをも知らずして行き迷ふを云　○佇待、佇は字書に久立也とあり爪立ちて還り給はむ日を待つを云　○不意之間、ユクリモナクに因緣（ユカリ）もなくの轉かと云思ひがけずの意　○儵亡、原本儵を倏に作る北本に據て改む字書に儵倏本字俗誤借爲倏儵作倏とありアカラメサスは思ひがけず俄なる意アカラメは明目にて目たゝきをする一瞬間を云瞬間は最も短き時間なるが其間にと云ことにてやがて急遽の意となる倏は字書に倏忽也又犬走疾也倏俗字とあり　○棺櫬、字書に棺は所以掩屍棺之言完所以藏屍令完也櫬は棺也以親近其身故以櫬爲名とありヒツキはヒトキにて人の屍を納むる匣の意ミキは御棺也類史櫬を槨に作る　○明衣、字書に贈死者之衣曰明衣とありミソは御衣なり　○倭琴彈原、今大和國南葛城郡（葛上郡）秋津村大字富田　○舊市、今河內國南河內郡（古市郡）古市村志云白鳥陵在古市村陵上有祠稱伊岐宮　○衣冠、ミツツモノは御衣つ物なり　○武部、記に建部とあり御名代の民なり倭建命の御名を取りて名づく

【五十一年】（正月）招群卿、熱本招を詔に作り類史卿を臣に作る　○必、類史心に作る

五十一年（辛酉）春正月壬午朔戊子、招群卿（トヨノアカリキコシメス）而宴（ヒカズヘヌ北）數日矣、時皇子稚足彥尊（ワカタラシヒコノ）、

○狂生、淮南子詮言訓に持無所監謂之狂生とあり
○墻闕、原本闕を閣に作る北本熱本に據て改む字書に墻に牆俗字墻は知蔽也闕は門旁戸也とも内中小門也ともあり闕にては通ぜず
○非常、意外の事件を云
○灼然、信友校本此上に理の字を補ふ
○(注)耶、北本懸本玉本及類史掛に作る
(八月)棟梁之臣、文選嘯亭別集の注に棟梁喩大臣也とあり此も其意を採て用ひたるか國家の棟梁たる臣と云ことにて職名にはあらずムネトルはムネトアルの約にて主として國政を執る を云北本にはヲホマツリコトノヲヽマチキムタチと訓り釋紀に私記を引て可謂大臣之姿歟と云
○初日本武尊云々、通證に以下三節疑前年錯簡と云り
○年魚市郡、愛智郡なり
○喧譁、字書に呼譟也とありナリトヨクは鳴動くにて立騒ぐを云
○倭姫命、原本姫なし北

武内宿禰、不參赴于宴庭、天皇召之問其故、因以奏之曰、其宴樂之日、輩卿百寮、必情在戲遊、不存國家、若有狂生而伺墻闕之隙乎、故侍門下、備非常、時天皇謂之曰、灼然、灼然、此云以耶知舉、則異寵焉、秋八月己酉朔壬子、立稚足彦尊爲皇太子、是日命武内宿禰爲棟梁之臣、初日本武尊所佩草薙横刀、是今在尾張國年魚市郡熱田社也、於是所獻神宮、蝦夷等、晝夜喧譁、出入無禮、時倭姫命曰、是蝦夷等不可近於神宮、則進上於朝庭、仍令安置御諸山傍、未經幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里、而脅人民、天皇聞之詔群卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有獸心、難住中國、故隨其情願、令班邦畿之外、是今播磨、讃岐、伊豫、安芸、阿波、凡五國佐伯部之別祖也、初日本武尊娶兩道入姫皇女爲妃、生稲依別王、次足仲彦天皇、次布忍入姫命、次稚武王、其兄稲依別王、是犬上君、武部君、凡二族之始祖也、又妃吉備武彦之女、吉備穴戸武媛、生武卵王與十城別王、其兄武卵王、是讃岐綾君之始祖也、弟十城別王、是伊豫別君之始祖也、次妃

穗積氏忍山宿禰之女、弟橘媛生稚武彥王、

本應本中本に據て補ふ　○近、原本近下就の字あり北本應本に據て削る　○御諸山、三輪山なり北本御を三に作る　○神山、御諸山なり大神大物主神の鎭まり坐すによりて神山と云　○中國、畿內と云に同じ諸國の中央に在る意畿外に對して云　○邦畿之外、邦畿は畿內を云毛詩に邦畿千里とあり畿は疆也天皇の都し給ふ國の境內を云意邦畿之外は畿外なり　○伊豫、原本豫を勢に作る北本應本玉本及姓氏錄に據て改む　○佐伯部之別祖、原本別の字なし北本中本に據て補ふサヘキは書彥暗譯とある如く日夜間分け難きことを云ひてさへぎしより名づけしなり別祖は佐伯部は他にもありしによりて區別して云しならむ　○犬上君、犬上は近江國犬上郡なり錄左京皇別に犬上朝臣見ゆ　○武部君、錄右京皇別に建部公見ゆ　○武卵王、原本卵を皷に作る北本應本中本に據て改む　○讃岐綾君、綾は讃岐國阿野郡是なり今鵜足郡を合せて綾歌郡と稱す　○伊豫別君、別は伊豫國和氣郡是なり

【五十二年】大郎姬、原本大を太に作る北本及上文に據て改む　○八坂入媛、原本入を八に作る諸本に據て改む

【五十三年】東海、崇神紀十年(一一六頁)に見ゆ　○淡水門、記に定東之淡水門とあり淡は安房國、東と云は阿波と別たむが爲なり此時安房は未だ一國の名に非ず上總國の內なり水門は安房と相摸國御浦郡の御崎との間の海門なり　○覺賀鳥、抄に鵂鴟美佐古日本紀私記云覺賀鳥(賀久加乃止利)公望案高橋氏文云水佐古とあり　○白蛤、高橋氏文に八尺白蛤とあり抄に海蛤を宇无岐乃加比と訓み蚌蛤を波末久利と訓り碩鼠漫筆にウムギを石決明(アハビ)ならむと云り原本蛤を蛤に作る北本應本中本に據て改む下同じ　○磐鹿六鴈、錄左京皇別膳大伴部の條に大彥命(孝元天皇皇子)孫磐鹿六雁命と見ゆ　○以蒲爲手繦、蒲は抄に唐韻云蒲(可末)草名似藺可以爲席也とあり手繦は神代紀上に出づ　○膾、抄に鱠唐韻云鱠奈萬須細切實也とあり　○賜膳大伴部、大伴部とは膳夫等の多く其伴の廣き由の稱賜とは多くの膳夫部を悉く率ゐ掌らしめて其部の首長と爲給を云　○綺宮、未詳通證に疑是飯高郡川俣村也と云ひ內山眞龍の宮所記には能褒野の北白鳥陵に近き處にありカムハタの宮と云といへり

五十二年夏五月甲辰朔丁未、皇后播磨大郎姬薨、秋七月癸卯朔己巳、立八坂入媛命爲皇后、

五十三年秋八月丁卯朔、天皇詔羣卿曰、朕顧愛子、何日止乎、冀欲巡狩小碓王所平之國、是月、乘輿幸伊勢、轉入東海、冬十月、至上總國、從海路渡淡水門、是時聞覺賀鳥之聲、欲見其鳥形、尋而出海中、仍得白蛤、於是膳臣遠祖名磐鹿六鴈、以蒲爲手繦、白蛤爲膾而進之、故美六鴈之功、而賜膳大伴部、十二月、從東國還之、居伊勢也、是謂綺宮、

【五十四年】

【五十五年】拜、北本は領に作る

○東山道十五國都督、東山道は五畿七道と分れし後の東山道とは異なり通釋に記傳の說を引て崇神天皇の時に武淳川別命を東方十二道に遣すとある十二道は十二國なればそれなるべしと云ひ十五國とあるも十二國の誤ならむと說きたれど若し然らむには崇神紀十年（二六頁）の例に據て山海と書くべきなり然るに東山道と書かれしは自ら別なればなり按に此は崇神紀四十八年に以豐城命令治東とある其東國を指るものにて國造本紀に據るに上毛野下毛野道奥菊多道尻岐閇阿尺思太伊久梁羽浮田信夫白河石背石城那須科野以上の十五箇國なるべし東國と云るは箱根山以東の國々なる伊勢尾張參河などを此國々の內に數ふるは穩ならず都督はカミ（私記には大加美とあり）と云訓に此文字を後に充てしなり其職掌は蓋國造の上にありて之を統率するなり當時東北邊夷其勢盛にして國造のみの力にては薄弱なれば都督を置て之を統一せしめ地方の開發と共に蝦夷の防備に當らしめ給ひしなるべし　○豐城命、豐城入彥命なり崇神紀四十八年（二三頁）に出つ　○春日穴咋邑、夫詳一說に式內穴次神社添上郡古市村井栗森にあり穴栗坂神と稱す穴次の次は咋の誤にて穴栗は穴咋の轉說なるべしと云

【五十六年】專、タウメと訓るは非なりモハラと訓べし

○首帥、集解に首を曾に改めしは非なり

○頓首、閑禮の注に頓首は頭拜叩地也とありヲガミは折屈むなり折れ屈みて敬禮するなり云

○東、集解前後の文に據て東の下國の字を補ふ

【五十七年】坂手池、坂手は今磯城郡川東村大字

（甲子）五十四年秋九月辛卯朔己酉、自伊勢還於倭居纒向宮、

（乙丑）五十五年春二月戊子朔壬辰、以彥狹嶋王拜東山道十五國都督、是豐城命之孫也、然到春日穴咋邑、臥病而薨之、是時、東國百姓悲其王不至、竊盜王尸葬於上野國、

（丙寅）五十六年秋八月、詔御諸別王曰、汝父彥狹嶋王、不得向任所而早薨、故汝專領東國、是以御諸別王承天皇命、且欲成父業、則行治之早得善政、時蝦夷騷動、卽擧兵而擊焉、時蝦夷首帥、足振邊、大羽振邊、遠津闇男邊等、叩頭而來之、頓首受罪、盡獻其地、因以免降者而誅不服、是以東久之無事焉、由是其子孫於今有東國、

（丁卯）五十七年秋九月、造坂手池、卽竹蒔其堤上、冬十月、令諸國興田部屯倉、

(戊辰)五十八年春二月辛丑朔辛亥、幸近江國、居志賀三歲、是謂高穴穗宮、

(庚午)六十年冬十一月乙酉朔、辛卯、天皇崩於高穴穗宮、時年一百六歲、

稚足彥天皇　成務天皇

稚足彥天皇、大足彥忍代別、天皇第四子也、母皇后曰八坂入姬命、八坂入彥皇子之女也、大足彥天皇四十六年、立爲太子、年廿四、六十年冬十一月、大足彥天皇崩、

(辛未)元年春正月甲申朔戊子、皇太子卽位、是年也太歲辛未、

(壬申)二年冬十一月癸酉朔壬午、葬大足彥天皇於倭國之山邊道上陵、尊皇后曰皇太后、

(癸酉)三年春正月癸酉朔己卯、以武內宿禰爲大臣也、初天皇與武內宿禰同日生之、故有異寵焉、

坂手是なり志に城下郡坂手池今十市郡東竹田村卽此とあり　○田部屯倉、田部と屯倉となり記傳に田部とは屯家の御田を佃らしむる料に定置るゝ部民なりと云屯倉は垂仁紀廿七年に出づ(一三四頁)　【五十八年】志賀、近江國滋賀郡　○高穴穗宮、滋賀郡穴太(アナホ)にあり今坂本村の大字穴太是なり　【六十年】時年一百六歲、北本は之を分注とす記には百三十七歲とあり垂仁紀三十七年の條に據るに水鏡に百四十三歲とあるが實に合へり　【卽位前紀】成務天皇、北本セイブと訓り　○母皇后、原本皇なし北本中本玉本に據て補ふ　○八坂入彥皇子、崇神天皇々子　○卅六年、景行紀(一六一頁)に五十一年八月とす　○太子、集解は太の上に皇の字を補ふ　○年廿四、通證に延佳曰按成務在位六十年百七歲崩據之則景行三十一年成務二十四歲也とあり北本は之を分注とす　【元年】【二年】山邊道上陵、諸陵式云在大和國城上郡陵墓要覽に磯城郡柳本村大字澁谷　【三年】大臣、傍訓にオホマチキミとあるを記傳にオホオミと訓べし此號は官名に非ずたゞ臣(オミ)と云に大と云美稱を加へて尊み給へるにて連姓の人に大連を賜ふと同じされば此號古は臣の姓の人に限りて賜はりしなり後大臣大連の人相並びて國政を執りしが更に大臣を置くことゝなり此時より全く官名となれりと云　○同日生之、集解云按單同生日

非同年也

【四年】聰明神武、以下廿四字は先帝の德の勝れ給ひしことを稱へ奉りしものなるが悉く漢文の潤色なり文選史通賢の注に聰於無聞曰聰照臨四方曰明以內知外曰神剋定禍亂闢土斥疆曰武とあり

○膺籙受圖、文選東京賦の注に膺當也籙五時之籙也圖河圖也とあり籙も圖も天神與ふる所の冊命にて君主の天下を有するを云　○治天順人、楓本中本治を洽に作り北本給に作るは何れも非なり治天は天を治むるなり順人は人心の嚮ふ所に順ふなり　○德侔覆燾、字書に侔は齊也燾は覆也とあり天は萬物を覆ひ養ふを德とす德は天に同じとなり倣訓オホヒノスとあるを通證にはオホフと訓改めたり　○協造化、字書に協は合也造化は創造化育之謂とあり道は造化の神の意に合へりとなり　○普天率土云々、毛詩小雅に溥天之下莫非王土率土之濱莫非王臣と見ゆ文選には普天之下とあり普は徧也天は徧く覆へるが故に普天と云率土の率は循也とあり天下と云に同じ　○寀氣懷靈、文選謝靈運傳論に見え注に受氣懷靈謂人也とありきればコロツノモノと訓るは當らずオホミタカラと訓べきか　○蠢爾、蠢は字書に蠢動也とあり抄略貌部並に字類抄に牽久來久と訓り　○悛野心、字書に悛は改也野心は謂其心放縱不可制也とあり　○幹了者、考課令義解に幹強也了慧也言強幹慧了自能其事也とありヲサ〳〵シは通證に長々しなりと云るが如し　○中區、中州と云に同じ區は區域也　○蕃屏、蕃は藩と通ず字書に藩は屏也保衛也とあり古傳僖廿四年に封建親戚以蕃屏周と見ゆ通釋にはマモリ標注にはマカキと訓り

【五年】國郡立造長云々、國造本紀を按するに載する所の國百四十四國にして國造縣主を置くこと既に櫻原の御世に始まれりされば此御世に新に置れしにはあらで大に整理し擴張せられしなるべし記に定賜大國小國之國造亦定賜國々之堺及

四年春二月丙寅朔、詔之曰、我先皇大足彦天皇、聰明神武、膺籙受圖、治天順人、撥賊反正、德侔覆燾、道協造化、是以普天率土莫不王臣、稟氣懷靈、何非得處、今朕嗣踐寶祚、夙夜兢惕、然黎元蠢爾、不悛野心、是國郡無君長、縣邑無首渠者焉、自今以後、國郡立長、縣邑置首、卽取當國之幹了者、任其國郡之首長、是爲中區之蕃屏也、

五年秋九月、令諸國、以國郡立造長、縣邑置稻置、並賜楯矛、以爲表、則隔山河而分國縣、隨阡陌以定邑里、因以東西爲日縱、南北爲日橫、山陽曰影面、山陰曰背面、是以百姓安居、天下無事焉、

四十八年春三月庚辰朔、立甥足仲彥尊爲皇太子、

大縣小縣之縣主」とあり
○並賜楯矛、國造及稻置に任ぜられし表として楯矛を賜ひしなり
○隨阡陌云々、私記に仟佰をタ、サノミチと訓み抄居處部に大路唐韻云道路南北曰阡私記曰多知之乃美知東西曰陌與古之乃美知とあり道路の横縱に隨て邑里を定むとなり
○日縱、私記にヒノタ、シ日横はヒノヨコシとありシは助辭なり
○山陽曰影面、陽は字書に山南也とありカゲトモは日の影の面に當る意影津面の約
○山陰曰背面、陰は說文に山之北也とありソトモは文字の如く日の背面に當る意背津面の約なり
【四十八年】甥、抄人倫部に爾雅云兄弟之子爲甥和名乎比とあり北本には姪に作る
○足仲彥尊、原本尊なし北本熱本玉本に據て補ふ
【六十年】時年一百七歲、上文立太子の御年二十四とあるに據て數ふれば九十八歲なり記には九十五歲とす

六十年（庚午）夏六月己巳朔己卯（十一）、天皇崩、時年一百七歲、

日本書紀卷第七（ヤマトフミノマキノツイデナ・ハシラニアタルマキ）

【卽位前紀】母皇后、通證に云るが如く追尊の號なり
○端正、神代紀海宮遊幸章第三一書に出づ
○十尺、一丈なるヲエと云こと景行紀卽位前紀（一四二頁）に見ゆ
○時年卅一、北本本文とす之に據る集解之に同じ
○狹城盾列陵、式云大和國添下郡、陵墓要覽に生駒郡（舊添下郡）平城村大字山陵字卿陵前とあり

日本書紀卷第八

足仲彥天皇　仲哀天皇

足仲彥天皇、日本武尊第二子也、母皇后曰兩道入姬命、活日入彥五十狹茅天皇之女也、天皇容姿端正、身長十尺、稚足彥天皇四十八年、立爲太子、時年卅一、稚足彥天皇無男、故立爲嗣、六十年、天皇崩、明年秋九月壬辰朔丁酉、葬于倭國狹城盾列陵、多多那美

元年春正月庚寅朔庚子、皇太子卽天皇位、秋九月丙戌朔、尊母皇后曰皇太后、冬十一月乙酉朔、詔群臣曰、朕未逮于弱冠、而父王旣崩之、乃神靈化白鳥而上天、仰望之情、一日勿息、是以冀獲白鳥、養之於陵域之池、因以覩其鳥、欲慰顧情、則令諸國、俾貢白鳥、閏十一月乙卯朔戊午、越國貢白鳥四隻、於是送鳥使人宿菟道河邊、時蘆髮蒲兒別王視其白鳥而問之曰、何處將去白鳥也、越人答曰、天皇戀父王而將養狎、故

○閏、ノチと訓む漢書に後某月に作り穀梁傳文公六年に閏月者附二月之餘日一也積分而成二于月一者也とあり
○越國、越前加賀能登越中越後の五國を云
○四隻、說文に隻鳥一枚也从又持隹持二隹一曰レ隻とあり
○菟道、山城國宇治郡
○蘆髮蒲見別王、日本武尊山代の玖々麻毛理比賣を娶て生坐る御子
○狎、字書に親習也とあり
○參赴之、北本之の字なし
○父是天也、儀禮喪服傳に父者子之天也とあり
○太歲壬申、先帝は六十年庚午崩ず空位二年なり

【二年】(正月)叔父、爾雅に父之昆弟後生爲二叔父一とあり
○彥人大兄、信友校本此下皇子の二字を補ふ
○來熊田造祖、本系未詳釋紀系圖に來の字なし

(二月)角鹿、越前國敦賀郡
○笥飯宮、今敦賀町に大內町(御所の辻とも云)と云かありて古の行宮の趾

貢之、則蒲見別王謂二越人一曰、雖二白鳥一而燒之則爲二黑鳥一、仍强之奪二白鳥一而將去、爰越人參赴之請焉、天皇於是惡二蒲見別王無禮於先王一、乃遣兵卒而誅矣、蒲見別王、則天皇之異母弟也、時人曰、父是天也、兄亦君也、其慢天違君、何得免誅耶、是年也太歲壬申、

(癸酉)二年春正月甲寅朔甲子、立二氣長足姬尊一爲二皇后一、先是娶二叔父彥人大兄之女大中姬一爲二妃一、生二麛坂皇子、忍熊皇子一、次娶二來熊田造祖大酒主之女弟媛一、生二譽屋別皇子一、二月癸未朔戊子、幸二角鹿一、卽興二行宮一而居之、是謂笥飯宮、卽月定二淡路屯倉一、三月癸丑朔丁卯、天皇巡狩南國、於是留皇后及百寮一而從駕、二三卿大夫、及官人數百而輕行之、至二紀伊國一而居于德勒津宮一、當二是時一、熊襲叛之不朝貢、天皇於是將討二熊襲國一、則自德勒津發之、浮海而幸二穴門一、卽日遣二使角鹿一、勅二皇后一曰、便從二其津發之一、逢於穴門一、夏六月辛巳朔庚寅、天皇泊二于豐浦津一、且皇后從二角鹿一發而行之、到渟田門一、食二於船上一、時海鯽魚多聚二船傍一、皇后以酒灑鯽魚、鯽魚卽醉而浮之、時海人多獲二其魚一而歡曰、聖王所賞之魚焉、故其處之魚、至二于六月一

常傾俘如醉、其是之緣也、秋七月辛亥朔乙卯、皇后泊豐浦津、是日、皇后得如意珠於海中、九月、興宮室于穴門而居之、是謂穴門豐浦宮、

なりと云式に敦賀郡氣比神社七座とあり其一座は仲哀天皇なり

○淡路屯倉、郡名未詳

○(二月)德勒津宮、紀伊國續風土記云名草郡新宮上郷新在家村にあり　○當是時、當の字は北本楓本及類史に據て補ふ　○穴門、今の長門なり垂仁紀二年に出つ　○遣使、原本使遣とあり玉本に據て改む　(六月)豐浦津、長門國豐浦郡にあり　○淳田門、信友の說に若狹國三方郡常神浦と琴引崎の間の海門にて今もノタノトと云とあり　○海鯽魚、抄に海鯽魚海魚立成云海鯽魚知沼とあり知沼鯛とす　○瀧鮑魚、考本通釋鮑の上に海の字を補ひたり　此に省略せるにて既文には非す　○賞、集解に賞原作賞誤賞與也賜也と云ゞ賞に改む　○如意珠、宇佐八幡緣起に干珠滿珠とあり　(九月)豐浦宮、編年記に長門國豐浦郡北樹林是也とあり内山眞龍の說に豐浦郡忌宮神社此宮地なりと云

【八年】(正月)筑紫、九州を云　○岡縣主、岡は筑前國遠賀郡の地貝原氏の說に同郡蘆屋津是なりと云　○天皇之車駕、原本之の字なし北本中本及類史に據て補ふ車駕を原本にオホムタスルと訓るは去御出の義なるべし　○五百枝賢木、枝の多く茂れる賢木なり云神代上に五百箇眞坂樹とあるに同じ原本五の字なし北本楓本に據て補ふ　○九尋船、長さ九尋ある大なる船なり云　○挂、原本掛に作る北本に據て改む下同じ掛は挂の俗字　○周芳沙麼之浦、景行紀十二年に出つ麼原本歷に

八年春正月己卯朔壬午、辛筑紫、時岡縣主祖熊鰐、聞天皇之車駕、豫拔取五百枝賢木、以立九尋船之舳、而上枝挂白銅鏡、中枝挂十握劍、下枝挂八尺瓊、參迎于周芳沙麼之浦、而獻魚鹽地、因以奏言、自穴門至向津野大濟爲東門、以名龍屋大濟爲西門、限沒利嶋、阿閑嶋爲御筥、割柴嶋爲御甌、御甌、此云瓱那陁、以逆兒海爲鹽地、既而導海路、自山鹿岬廻之入岡浦、到水門、御船不得進、則問熊鰐曰、朕聞、汝熊鰐者有明心、以參來、何船不進、熊鰐奏之曰、御船所以不得進者、非臣罪、是浦口有男女二神、男神曰大倉主、女神曰菟夫羅媛、必是神之心歟、天皇則禱祈之、以

作る北本類史に據て改む
○魚鹽地、魚を漁り鹽を燒く地を云
○向津野大濟、向津野は抄に豐前國宇佐郡向野鄕とある是なり
○以名籠屋大濟、筑前國遠賀郡若松と戸畑兩村（今は市）の間の渡を云其の岬を今も名古屋崎と云以の字北本次に作る
○沒利島、通證に今毛豆禮島と云名籠屋崎を距る二里許長門國に屬すゝあり今の六連島なり
○阿閑島、今藍島と云六連島の西北にあり
○御筥、筥は物を盛る器なり沒利阿閑の兩島を以て御贄を漁獲する御筥の地と爲すとなり
○柴島、筑前風土記に塢舸縣之海中有兩島其一曰河斗（カハ）島其一曰資波島とある資波島は卽ち柴島なり
○御甑、抄に堝（奈閑）とあり此にては堝より轉じて御贄を漁る御甑の地と爲すとなり筥といひ甑と云は魚貝の最も多き地を云
○逆見海、通證に長門國美禰郡作美なりと云は地

挾杪者倭國菟田人伊賀彥、爲祝令祭、則船得進、皇后別船自洞海洞、此云久岐、入之、潮涸不得進、時熊鰐更還之、自洞奉迎皇后、則見御船不進、惶懼之、忽作魚沼鳥池、悉聚魚鳥、皇后看是魚鳥之遊、而忿心稍解、及潮滿、卽泊于崗津、又筑紫伊覩縣主祖五十迹手、聞天皇之行、拔取五百枝賢木、立于船之舳艫、上枝挂八尺瓊、中枝挂白銅鏡、下枝挂十握劍、參迎于穴門引嶋、而獻之、因以奏言、臣敢所以獻是物者、天皇如八尺瓊之勾、以曲妙御宇、且如白銅鏡、以分明看行山川海原、乃提是十握劍、平天下矣、天皇卽美五十迹手曰、伊蘇志、故時人號五十迹手之本土、曰伊蘇國、今謂伊覩者訛也、己亥、到儺縣、因以居橿日宮、秋九月乙亥朔己卯、詔群臣以議討熊襲、時有神託皇后而誨曰、天皇何憂熊襲之不服、是膂宍之空國也、豈足擧兵伐乎、愈茲國而有寶國、譬如美女之睩、有向津國、睩、此云麻眼炎之金銀彩色多在其國、是謂拷衾新羅國焉、若能祭吾者、則曾不血刃、其國必自服矣、復熊襲爲服、

理合はず八幡宮本紀に豐浦郡の西南武久村の沖なり云とあり ○鹽地、鹽田也 ○山鹿岬、筑前國遠賀郡山鹿郷にあり ○崗浦、神武紀に崗水門とあるに同じ今蘆屋湊と云 ○水門、遠賀川の水門なり ○大倉主、菟夫羅媛、和爾雅に云兩社今並に遠賀郡蘆屋村にあり ○自淵海、筑前風土記に鳥旗奥名蛸門（クキノト）堤奇小船とあり今も戸畑若松の中間より深く入こめる海を淵海と云自は原本白に作る熟本應本及類史に據て改む ○伊覩縣主、伊覩は筑前國怡土（以止）郡是なり五十迹手の祖は風土記に高麗國意呂山自天降坐目枠之苗裔五十迹手とあり ○引島、沒利島の東南にあり大なる島なり今彦島と云 ○因以奏言、此五十迹手が奏言は上古よりかゝる賀祭ありしを今獻物によそへて取合せて申せるなるべし此人が新に言ひ出たる詞とも見えず神皇實錄には天御中主神大日靈尊と皇孫降臨の時に盟して寶玉へる勅として此詞を引たれど疑はしき書なれば輙く信ず難し ○伊蘇志、勤勞の意 ○儺縣、筑前國那珂郡是なり ○櫛日宮、筑前國糟屋郡香椎郷にあり糟屋郡も古は儺縣の中なりしなり（九月）脅宍之空國、神代下天孫降臨章に出つ原本宍の字なし北本楓本に據て補ふ ○愈、字書に勝也とあり ○美女之睩、睩は眉引なり眉毛を云字書に睩視貌とあり借て眉引に用ひたるか北本美を處に作る ○向津國、新羅國は我國の對岸にあり故に云か ○（寸）云、原本なし諸本に據て補ふ ○眼炎、字書に炎は火光上也また光也とあり史記司馬相如傳に耀日月之末光絶炎と見ゆ集解に古本に炎耀とありと云へどさる本なし古事記には炎耀とあり眼炎にても聞ゆれば補ふの要なし傍訓ロクはヤクの訛 ○金銀彩色、古は我國は金銀出ざりし故に今其多、ある國を財嚮せしめむと僞給なり彩色は錦繡綾羅の類のうるはしき物を云シミノモノは染物の義なるべし ○梭岑、新羅の忱詞梭岑自と挂けたり ○穴門直、國造本紀に穴門國造繼向日代朝御世櫻井田部連祖麻伎都美命四世孫速都鳥命宣賜國造とあれど踐立と麻伎津美命との關係は詳ならず ○如天津水影云々、天津水影とは物の形の水底に映れるを云其水影を伏して見るが如く對岸にある新羅國を天上より見下して明かに知食せりとの意 ○皇后始之有胎、此時には皇后の御懷姙ありしことを天皇もまだ知食さぬ程なりしより故に始て胎みまさりと云

其祭之、以天皇之御船及穴門直踐立所獻之水田名大田、是等物爲幣也、天皇聞神言、有疑之情、便登高岳遙望之、大海曠遠而不見國、於是天皇對神曰、朕周望之、有海無國、豈於大虛有國乎、誰神徒誘朕、復我皇祖諸天皇等盡祭神祇、豈有遺神耶、時神亦託皇后曰、如天津水影押伏而我所見國、何謂無國、以誹謗我言、其汝王之、如此言而遂不信者、汝不得其國、唯今皇后始之有胎、其子有獲焉、然天皇猶不信、以强擊熊襲、不得勝而還之、

【九年】忽有痛身、分注に賊矢に中り給ふとあるを指せるか記には神託を

九年（庚辰）春二月癸卯朔丁未、天皇忽有痛身、而明日崩、一云、天皇親伐熊襲、中賊矢而崩也、時年

五十二、卽知不用神言而早崩、於是皇后及大臣武内宿禰、匿天皇之喪、不令知天下、則皇后詔大臣、及中臣烏賊津連、大三輪大友主君、物部膽咋連、大伴武以連曰、今天下未知天皇之崩、若百姓知之有懈怠者乎、則命四大夫、領百寮、令守宮中、竊收天皇之屍、付武内宿禰、以從海路、遷穴門、而殯于豐浦宮、爲无火殯斂、甲子、大臣武内宿禰自穴門還之、復奏於皇后、是年、由新羅役、以不得葬天皇也、

請むと天皇御琴を彈かせ給ひ建内宿禰は沙庭に居て神命を請奉りしに皇后に神懸ありたり然るに天皇は神託を詐なりとして御琴を押退けて彈給ず默坐せられしに神怒甚しく建内宿禰は其御琴を遊ばせと勸め奉りしかば心にもなく其琴を彈かせ給ひしに幾程もなく琴音聞えず火を擧て見れば既に崩御ましましぬとあり　○時年五十二、記にも御年伍拾貳歳（壬戌年六月十一日崩也）とあり但し書紀にては仲哀天皇元年は壬申にて九年は庚辰なり記に壬戌とあるとは合はず月も二月丁未にて異同あり傳說の異なれるなり原本此五字を分注とす北本に據て改む　○卽知、以下九字原本分注とす北本に據て改む集解は私記攙入として削る　○匿、シナメはかくすを云　○中臣烏賊津連、姓氏錄に雷大臣命とあり　○大三輪大友主、垂仁紀三年一書に出づ　○物部膽咋連、天孫本紀に饒速日命七世孫十市根命の子と見ゆ　○大伴武以連、道臣命八世の孫にして父は建日大連と云　○懈怠者乎、原本者の字なし北本應本中本に據て補ふ　○殯、神代上四神出生章第九一書（一七頁）に見ゆ　○无火殯斂、密喪なるが故に燈燎を點ぜず人なして知らしめざるなり云豐浦社說に此殯宮の趾は豐浦宮の辰巳なる小山にありと云　○（注）云、原本謂に作る北本に從ふ

日本書紀卷第八（ヤマトフミノマキノツイデヤハシラニアタルマキ（北））

日本書紀卷第九

氣長足姫尊　神功皇后

氣長足姫尊、稚日本根子彥大日日天皇之曾孫、氣長宿禰王之女也、母曰葛城高額媛、足仲彥天皇二年、立爲皇后、幼而聰明叡智、貌容壯麗、父王異焉、九年春二月、足仲彥天皇崩於筑紫橿日宮、時皇后傷天皇不從神教而早崩、以爲、知所祟之神、欲求財寶國、是以命群臣及百寮、以解罪改過、更造齋宮於小山田邑、三月壬申朔、皇后選吉日入齋宮、親爲神主、則命武內宿禰令撫琴、喚中臣烏賊津使主爲審神者、因以千繪高繪置琴頭尾、而請曰、先日教天皇者誰神也、願欲知其名、逮于七日七夜、乃答曰、神風伊勢國之、百傳度逢縣之、拆鈴五十鈴宮所居神名、撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉、亦問之、除是神、復

【攝政前紀】神功皇后、北本皇后の二字なし

○大日々、原本大を太に作る北本中本に據て改む

○氣長宿禰王、開化天皇の皇子彥坐王の子山代之大筒木眞若王の子迦邇米雷王の子息長宿禰王なり

○葛城高額媛、天日矛の曾孫多遲摩比多訶の女なり北本額を類に作る

（仲哀天皇九年二月）橿日宮、北イ本日を氷に作る

○解罪改過、記に取國之大祓佐而云云爲國之大祓とあり臨時の大祓を行はしめ給ひしなり

○更造齋宮於小山田邑、仲哀天皇先に齋宮を造られしが此に更に齋宮を小山田邑に造らしめ給ひしなり小山田邑は糟屋郡にあり齋宮の遺址は同郡山田村伊野にありと云

○日命武內宿禰令撫

琴、前に神託を請奉らしゝ時は天皇御親ら御琴を撫給ひしが今回は武内大臣をして撫しめ給ひしなり

○審神者、サニハは記傳に清庭(サニハ)にて神を降し請せ奉りて其命を請はむが爲に齋清めたる庭を云とあり此は其齋庭を指るにはあらで清庭に候して神命を請ひ奉る人を云審神の文字を塡てたるは神託を審察するに因れり

○千繒高繒、千繒の高繒にて千は數の多きを云ひ高は積置る繒の高く累れるを云繒は字書に帛也とあり

○神風、神武紀に出づ

○百傳、度逢の枕詞

○度逢縣、度會郡なり度會の起因は伊勢風土記に見ゆ

○拆鈴、鈴の口の柝たる由にて五十鈴の枕詞

○撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命、天照大御神の荒魂を申し奉る御名なり撞賢木は賢木を衝立たる狀の嚴めしきを云或は齋榊(イツキサカキ)のイを省きたるなりとも云嚴之御

有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡所居神之有也、問亦有耶、答曰於天事代於虛事代玉籤入彥嚴之事代主神有之也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、於是審神者曰、今不答而更後有言乎、則對曰、於日向國橘小門之水底、所居而水葉稚之出居神、名表筒男、中筒男、底筒男、神之有也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、遂不言且有神矣、時得神語隨教而祭、然後遣吉備臣祖鴨別、令擊熊襲國、未經浹辰而自服焉、且荷持田村(荷持、此云能登利)有羽白熊鷲者、其爲人强健、亦身有翼、能飛以高翔、是以不從皇命、每略盜人民、戊子、皇后欲擊熊鷲、而自橿日宮遷于松峽宮、時飄風忽起、御笠墮風、故時人號其處曰御笠也、辛卯、至層增岐野、卽擧兵擊羽白熊鷲而滅之、謂左右曰、取得熊鷲我心則安、故號其處曰安也、丙申、轉至山門縣、則誅土蜘蛛田油津媛、時田油津媛之兄夏羽、興軍而迎來、然聞其妹被誅而逃之、夏四月壬寅朔甲辰、北到火前國松浦縣、而進食於玉嶋里小河之側、於是皇后勾針爲鉤、取粒

の枕詞なり嚴之御魂にいつくしく長く坐す御魂の意天疎は天に遠く離るゝを云ひ日の枕詞向津姫は日は直に向ひ仰見る故に向津日と云或は荒御魂の皇大神の御詳をさからせむはしまして遙に向ひ居給ふ義(雨胤の說)とも向はしき意(新異記に意をムカシヒと讀せる其意にて意津媛なるべし(敷田年治の說)とも云

○復有神乎、復の字は北本に據て補ふ

○蟹獲、花すゝきの轉にて(袖中鈔の說)穗にかゝる枕詞或は字のまゝに蟹の如きすゝきにて穗の事を云るにもあるべし獲はヲギなるを相似たる故に古ゝは通はして誤にも用ひしなるべし

○穗出吾也、穗は秀なり言に顯して示し給ふを云蟹獲の穗に出たる如くあらはに顯して示せる吾はの意

○於尾田吾田節之淡郡所居神、神祇志料に淡郡は阿波國阿波郡にて式内建布都神社(祭神建御雷之男神)なるべしと云原本神の字なし北本に據て補

爲餌、抽取裳縷爲緡、登河中石上、而投鈎祈之曰、朕西欲求財國、若有成事者河魚飲鈎、因以舉竿乃獲細鱗魚、時皇后曰、希見物也、希見、此云梅豆邏志、故時人號其處曰梅豆羅國、今謂松浦訛焉、是以其國女人每當四月上旬、以鈎投河中、捕年魚於今不絶、唯男夫雖釣以不能獲魚、既而皇后則識神教有驗、更祭祀神祇、躬欲西征、爰定神田而佃之、時引儺河水、欲潤神田、而掘溝、及于迹驚岡、大磐塞之不得穿溝、皇后召武內宿禰、捧劍鏡、令禱祈神祇、而求通溝、則當時雷電霹靂、蹴裂其磐、令通穿水、故時人號其溝曰裂田溝也、皇后還詣橿日浦、解髮臨海曰、吾被神祇之教、賴皇祖之靈、浮涉滄海、躬欲西征、是以今頭滌海水、若有驗者、髮自分爲兩、卽入海洗之、髮自分也、皇后便結分髮而爲髻、因以謂羣臣曰、夫興師動衆、國之大事、安危成敗、必在於斯、今有所征伐、以事付群臣、若事不成者、罪在於羣臣、是甚傷焉、吾婦女之加以不肖、然暫假男貌、强起雄略、上蒙神祇之靈、下藉群臣之

助振兵甲而度嶮浪、整艫船以求財土、若事就者羣臣共有功、事不就者吾獨有罪、既有此意、其共議之、羣臣皆曰、皇后爲天下計、所以安宗廟社稷、且罪不及于臣下、頓首奉詔、秋九月庚午朔己卯、令諸國集船舶練兵甲、時軍卒難集、皇后曰、必神心焉、則立大三輪社、以奉刀矛矣、軍衆自聚、於是使吾瓮海人烏摩呂、出於西海、令察有國耶、還曰、國不見也、又遣磯鹿海人名草、而令視、數日還之曰、西北有山、帶雲横絙、蓋有國乎、爰卜吉日、而臨發、有日、時皇后親執斧鉞、令三軍曰、金鼓無節、旌旗錯亂、則士卒不整、貪財多欲、懷私內顧、必爲敵所虜、其敵少而勿輕、敵强而無屈、則干暴勿聽、自服勿殺、遂戰勝者必有賞、背走者自有罪、既而神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、和魂、此云珥伎弭多摩、荒魂、此云阿遲濔多摩、卽得神教而拜禮之、因以依網吾彥男垂見、爲祭神主、于時也、適當皇后之開胎、皇后則取石挿腰、而祈之曰、事竟還日、產於茲土、其石今在于伊覩縣道邊、既而則

ふ

○於天事代於虛事代、釋紀に兼方案之廣知天地事之義也とあり

○玉籤入彥、玉籤は祭具なり祭具を以て御名に稱へしは撞賢木と稱へたると同義入彥は親しみ尊む意

○嚴之事代主神、嚴は嚴之御魂の嚴に同じ事代主神は征韓の後長田に鎭座し給へり主は原本に脫たるを釋紀に據て補ふ

○所居、居原本底に作る北本中本及釋紀に據て改む

○水葉稚之出居神、水葉は瑞葉にて稚葉なり稚葉の美しく芽ぐみ出たるが如く顯れ居る神と云意なり事代主神は秋の薄を以て喩へ此三柱の神は春の稚葉を以て喩へて覺し坐るなり水底とあるより文字に捕はれて水の事なりとも海藻なりとも云へど海藻ならむには如玉藻などあるべきなり又水葉は水なりと云るが如きは殊に附會の說なり

○表筒男、以下三柱は住吉大神にて御鎭座の事は下に見ゆ

○荷持田村、貝原氏の説に筑前國夜須郡野鳥村なりと云今朝倉郡秋月村の野鳥谷に當るか通證には肥前國高來郡野鳥郷なりとす

○松峡宮、筑前國夜須郡粟田村にありと云

○御笠、筑前國御笠郡御笠郷是なり

○層增岐野、筑前續風土記に怡土郡雷村雷山にありと云へど朝倉(舊夜須)郡安野村を其地とすべし

○安、筑前國夜須郡なり

○山門縣、山は原本小に作る活本玉本に據て改む山門は筑後國山門郡山門郷今清水村大字山門是なり

○田油津媛之兄、之の字は北本中本に據て補ふ

(四月)火前國松浦縣、肥前國松浦郡なり

○玉島里、貝原氏説に松浦郡濱崎驛より南方半里許にありと云今大村大字南山の淀姫社其故蹟なり

○鈎、神代紀下海宮遊幸章(六四頁)に見ゆ

○粒、飯粒なり

○縷、原本系に作る北本に據て改む

○繒、字書に綸也とあり

攝荒魂爲軍先鋒、請和魂爲王船鎮、冬十月己亥朔辛丑、從和珥津發之、時飛廉起風、陽侯舉浪、海中大魚悉浮扶船、則大風順吹、帆舶隨波、不勞櫂楫、便到新羅、時隨船潮涙遠逮國中、卽知天神地祇悉助歟、新羅王於是戰々栗々、厝身無所、則集諸人曰、新羅之建國以來、未嘗聞海水凌國、若天運盡之、國爲海乎、是言未訖之間、船師滿海、旌旗耀日、鼓吹起聲、山川悉振、新羅王遙望以爲、非常之兵、將滅己國、誓焉失志、乃今醒之曰、吾聞、東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其國之神兵也、豈可舉兵以距乎、卽素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、因以叩頭之曰、從今以後、長與乾坤、伏爲飼部、其不乾船柂、而春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以每年貢男女之調、則重誓之曰、非東日更出西、且除阿利那禮河、返以之逆流、及河石昇爲星辰、而殊闕春秋之朝、怠廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉、時或曰、欲誅新羅王、於是皇后曰、初承神教、將授金銀之國、又號令三軍曰、勿殺自服、今既

獲財國、亦人自降服、殺之不祥、乃解其縛、爲飼部、遂入其國中、封重寶府庫、收圖籍文書、卽以皇后所杖矛、樹於新羅王門、爲後葉之印、故其矛今猶樹于新羅王之門也、爰新羅王波沙寐錦、卽以微叱己知波珍干岐爲質、仍賫金銀彩色及綾羅縑絹、載于八十艘船、令從官軍、是以新羅王常以八十船之調、貢于日本國、其是之緣也、於是高麗百濟二國王、聞新羅收圖籍降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭而欵曰、從今以後、永稱西蕃、不絶朝貢、故因以定內官家、是所謂之三韓也、皇后從新羅還之、十二月戊戌朔辛亥、生譽田天皇於筑紫、故時人號其產處曰宇瀰也、

○細鱗魚、抄に本草云鰾魚蘇敬注云一名鮎魚（阿由漢語抄云銀口魚又云細鱗魚）崔禹食經云貌似鱒而小有白皮無鱗春生夏長秋衰冬死故名年魚也とあり　○今謂松浦訛也、原本也を焉に作る　○男夫雖釣、釣原本鈎に作る今訂す　○祭祀、祀原本祝に作る北本楓本中本に據て改む　○神田、ミトシロと云る例は續紀に御戸代祝詞式に御刀代延曆儀式帳に大神乃御刀代などあり御年代の義なり年は稻を云ひ代は田を云　○儺河、儺は仲哀紀に儺縣とあり筑前國那珂郡なり　○欲潤神田而、而の字は原本になし北本に據て補ふ　○迹驚岡、那珂（筑紫）郡安德村にあり　○霹靂、抄に釋名云霹靂（和名加夫渡計）霹析也靂歷也所歷皆破析也とあり　○通穿、穿は原本になし中本に據て補ふ　○頭滌海水、滌は原本濮に作る北本に據て改む　○結分髮而爲髻、女裝を改めて男裝をなす給ふなり　○興師動衆國之大事、興師動衆は吳子勵士に國之大事は左傳成十三年に出づ　○不肖、漢書注に肖似也言無所象類謂不才之人とありヲサナシは幼稚なる意　○不事就者、北本就を成に作る　○吾獨有罪、原本吾の字なし北本楓本中本に據て補ふ　○皇后爲天下云々、漢書高后紀に群臣皆曰皇太后爲天下計所以安宗廟社稷甚深頓首奉詔とあり此文に據れるならむ　（九月）練、ネラフはネルの延語　○大三輪社、式に筑前國夜須郡於保奈牟智神社とある是なり　○吾瓮海人、吾瓮は仲哀紀八年に阿閇島とあり筑前國糟屋郡に屬す　○磯鹿、筑前國糟屋郡志珂鄕是なり今志賀島村と云ふ　○令視、原本視を覩に作る北本應本に據て改む　○執斧鉞云々、漢文の潤色なり斧鉞は景行紀に注す三軍は左傳襄公十一年に見え注に萬二千五百人爲軍とあり　○金鼓無節云々、金鼓は金と鼓となり進には鼓をうち退には金をうつとあり旌旗金鼓は大將の司る所にして師の耳目たり金鼓節度なく旌旗の錯亂するは統一する所なきを云　○神有誨、此神は住吉の神なり　○和魂、荒魂に對する稱なり稻に和稻荒稻あり布帛に和妙荒妙あるが如く神魂も機に應じて兩種の作用を爲し荒浪の岸を擊ち暴風の家を破るが如く當る所悉く擊破せざれば止まざるは荒魂の作用にて笹波の靜に動き春風の膚に快きが如きは和魂の作用なり但し風の如き波の如きは其狀態に就て名づくるのみにて全く同一の物なれど神魂は各獨立して同時に兩方面

に活動し給ふこと此にも和魂は玉身に副て壽命を守り荒魂は先鋒を爲て師船を導くとあるが如し故に荒魂は荒魂和魂は和魂として各々別箇の神社に齋祭るなり　○服玉身、北本には服の上に昵の字あり又玉を王に作る中本も王に作る玉身をミヅイデと訓るは御子なり直に指し奉らざるなりされどオホミマと訓む方確ならむ玉身は玉體に同じ　○拜禮之、此時祭られしは式に筑前國那珂郡住吉神社三座とある社なるべし　○依紐吾彥男乘見、依網は攝津國住吉郡の地名にて後に氏と爲る吾彥は尸男乘見は名なり　○開胎、ウムガツキは產月なり　○取石挿腰云々、記に其腹姙臨產卽爲鎭御腹取石以鎭御裳之腰とあり石を取て腰に挿むは御產期を延さしめ給はむとの呪術なり　○其石今在于伊覩縣道邊、此石の事釋紀所引の筑紫風土記に逸都縣とあり又筑前風土記島藥五にも精しく見えたり萬葉には怡土郡深江村子負原とあり覩原本都に作る北本に據て改む　○攜、原本にオキヲキテと訓み熟田本にはヲキオキテと訓り招き安きての意なるべし字書に攜は手指麾也とあり　○請、ネキテは願じてなり新請(コヒネギ)の意　(十月)和珥津、對馬國上縣郡にあり今鰐浦と云　○飛廉、楚辭離騷經の注に風伯也とあり　○陽侯、淮南子覽冥訓の注に大波を起す神とあり　○海中大魚云々、記には海原之魚不問大小悉負御船而渡とあり　○扶船、扶は原本挾に作る北本に據て改む　○大風順吹云々、オヒカセは追風、ホッムはホは帆ツムは船を云、通證に蓋積物之船也とあり記に順風大起御船從波渡と書り　○鰐嶋、原本檻を誤に作る通證に權當作鰐字書檻一作鰐進船具也とあるに據て改む　○隨船潮涙、私記に此四字をフナナミと訓り船と涙と共になるべし楓本にマナ、ミとあるはフナ、ミの誤なるべし　○新羅王、三國史記に據るに第十代奈解王五年(後漢建安五年)に當る然るに本書下文に新羅王波沙寐錦とあり此人は三國史記に朴婆娑とあり第五代の王にて時代大に異同あり　○戰々栗々、字書に戰懼也慄戰懼也謂有所懼而肢體戰動也とあり北本中本栗を慄に作る栗は慄に通ず　○眉身無所、セムスベシラズは爲術知らずなり眉は置也　○新羅之建國、新羅の始祖は姓氏錄に稻飯命者新羅國王の祖とあるを三國史記には朴居世前漢孝宣帝五鳳元年卽位とあり崇神天皇四十一年に當れり　○盡之、之は原本なし北本中本に據て補ふ　○彆、字書に失氣也とあり　○神國、神國の文字此に始て見ゆ三代實錄十六貞觀十一年十二月十四日の條に日本朝廢所謂神明之國奈利とあり神宮雜事記卷一東大寺要錄卷一等にも神國の文字見ゆ　○素旆、字書に繼旆日旆とあり旆は帛全幅長八尺者とあり大なる旗にてそれに次ぐ物　○素組以面縛、史記秦始皇本紀に子嬰卽係頸以組白馬素車降軹道旁と見え注に組者天子璽也係頸者言欲自殺也素車白馬喪人之服也とあり面縛は垂仁紀五年に見ゆ　○圖籍、地圖と戶籍にてヘフムダは戶の籍なり　○飼部、馬を飼養する賤しき職なり　○柂、柁の俗字字書に柁正船木也設於船尾とあり　○馬梳、馬の櫛なり馬櫛と鞭とを獻るは釋紀の說の如く飼部たることを表するものなり　○不煩、イタツクは勞づくなり　○除阿利那禮河、除の字は衍ならむと思へど姑く舊に據る阿利那禮河の所在に就き通證に松下見林の說を擧げて鴨綠江とすれど阿利は南那禮は國の義なり地圖を按するに新羅の都(今の慶州)の附近にて最も大なるは洛東江にて北より南に流れて海に注げば恐らくは此川なるべし　○以之、之の字集解は古本に無しとて削る　○星辰、私記に大星謂美加保志とあり　○息、原本忍に作る集解に據て改む　○皇后所杖矛云々、此事記にも見ゆ　○新羅王門、新羅王城は三國史記に始祖以來居金城至後世多處兩月城とあり其地は輿地勝覽に慶尙南道慶州府本新羅古都金城在府東四里月城在府東南五里とあり今の慶尙南道慶州にあり　○微叱己知波珍干岐、微叱己知は三國史記新羅本紀に實聖尼師今元年三月與倭國通好以奈勿王子末斯欣爲質とある末斯欣なるべく波珍干岐は同國官位十七等の第四位に當る波珍飡なるべし但し實聖の元年は東晉安帝元興元年にて履中天皇三年なれば年代に異同あり　○質、ムカハリは身代なり質は字書に以物相贄とあり　○綾羅縑絹、抄に綾は似綺而細者也和名阿夜羅は此間云良一名蟬翼(セミノハ)縑は其絲細緻數兼於絹和名加止利絹は絁帛也和名岐沼とありアヤは文なりカトリは堅織の約　○八十艘船、カハラは未詳艘を數ふるに一腹二腹と云へばハラは之に同じきか　○高麗、後漢書高勾驪に魏志高句麗に作り在遼東之東千里南與沃沮北與夫餘接都於丸都之下とあり始祖は朱蒙と云隋書に其先夫餘に出づ南に走り一大水を渡り國を建て自ら高句麗と號し高を以て氏とすとあり　○百濟、始祖は東明と云隋書に其先は高麗より出づ夫餘の人之を奉ず其後仇台と云者始て國を帶方の故地に立つて漸く强國となる初百家を以て海を濟る因て百濟と號すと云とあり　○歎曰、歎原本歎に作る北本楓本中本に據て改む　○西蕃、記傳に西のミヤツコクニと訓るが宜し　○內官家、北本楓本中本には內の下に屯の字家の下に倉の字あれど原本のまゝにて通す記には定渡屯家とあり　○所謂之三韓也、三韓は新羅高麗百濟なりされど古代には三韓と云しは馬韓辰韓弁韓なり新羅は弁韓中の一國にて高麗は古の朝鮮の北方にあり三韓の內にはあらず然るに高麗百濟新羅各其傍なる國々を併呑して此三國漸く强大なるに至れり依て自ら三國を並べて三韓と稱するに至れりされど神功

皇后の頃には此三國を併せて三韓と稱することは未だ無かりしを後の名稱を前に及ぼして所謂三韓也と書されしなり　○宇瀰、筑前國糟屋郡宇美村なり今宇美八幡宮あり

(注)沙麼、周防國佐波郡　○內避高、北本高の字なし　○所望之國、熊襲國を云　○無實國、ウツケは顯宗紀に虛の字を訓り其意なり鹿角は中空なる故に譬に取るなり　○謾語、字書に誑言也とあり　○向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊、通證に今按向匱男(ムカヒツヲ)與本章向津媛通五御魂(イツノミタマ)與嚴之御魂同速狹騰(ハヤサノボリノ)尊萬葉集云天照日女之命一云指上日女之命とあり　○聞惡事之言坐、速狹騰と云を靈魂の天に上る意に聞給て諱給ふなりキヽクキコトノタマヒマスと訓り

一云、足仲彥天皇居筑紫橿日宮、是有神託沙麼縣主祖、內避高、國避高、松屋種、以誨天皇曰、御孫尊也、若欲得寶國耶、將現授之、便復曰、琴將來以進于皇后、則隨神言而皇后撫琴、於是神託皇后、以誨之曰、今御孫尊所望之國、譬如鹿角、以無實國也、其今御孫尊所御之船、及穴戶直踐立所貢之水田、名大田爲幣、能祭我者、則如美女之眸、而金銀多之眼炎國以授御孫尊、時天皇對神曰、其雖神何謾語耶、何處將有國、且朕所乘船既奉於神、朕乘曷船、然未知誰神、願欲知其名、時神稱其名曰、表筒雄、中筒雄、底筒雄、如是稱三神名、且重曰、吾名向匱男聞襲大歷五御魂速狹騰尊也、時天皇謂皇后曰、聞惡事之言坐婦人乎、何言速狹騰也、於是神謂天皇曰、汝王如是不信、必不得其國、唯今皇后懷妊之子、蓋有獲歟、是夜天皇忽病發以崩之、然後皇后隨神教而祭、則皇后爲男束裝、征新羅、時神導之、由是隨船浪之、遠及于新羅國中、於是新羅王宇流助富利智干、參迎跪之、取王船、卽叩頭曰、臣自今以後、於日本國所居神御子、爲內官家、無絕朝貢、一云、禽獲新羅王詣于海邊、拔王臍肋令匍匐石上、俄而

○臑肋、抄に野王按臑字亦作臑阿波大古倍云阿波大〻勝骨也又〻字集略云肋大骨介乃保禰 幹骨也とあり
○宰、ミコトモチは私記に令持天皇御言之人也とあり
○篤報之、篤は北本に敦に作る
○窆、字書に葬下棺也とあり

○津守連、錄和泉神別に火明命之男天香山命之後也又攝津神別に津守宿禰火明命八世孫大御日足尼之後也と見ゆ
○祠立於穴門山田邑、式に長門國豐浦郡住吉坐荒御魂神社三座とある是なり今長府の西豐東上村大字楠乃に在り

【攝政元年】

○詳、史記刺客傳索隱に詳音陽餌也とあり

斬之埋沙中、則留一人、爲新羅宰、而還之、然後新羅王妻不知埋夫屍之地、獨有誘宰之情、乃誂宰曰、汝當令識埋王屍之處、必篤報之、且吾爲汝妻、於是宰信誘言、密告埋屍之處、則王妻與國人、共議之殺宰、更出王屍、葬於他處、時取宰屍、埋于王墓土底、以舉王櫬、窆其上、曰、尊卑次第固當如此、於是天皇聞之、重發震忿、大起軍衆、欲頓滅新羅、是以軍船滿海而詣之、是時、新羅國人悉懼、不知所如、則相集共議之、殺王妻、以謝罪、

於是從軍神表筒男、中筒男、底筒男、三神誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓于皇后曰、神欲居之地、必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之神主、仍祠立於穴門山田邑、

爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、卽收天皇之喪、從海路以向京、時麑坂王忍熊王聞天皇崩、亦皇后西征、幷皇子新生、而密謀之曰、亦皇后有子、羣臣皆從焉、必共議之立幼主、吾等何以兄從弟乎、乃詳爲天皇作陵、詣播磨興山陵於赤石、仍編船絙于淡

路嶋、運其嶋石、而造之、則每人令取兵而待皇后、於是犬上君祖倉見別、與吉師祖五十狹茅宿禰、共隸于麑坂王、因以爲將軍、令興東國兵、時麑坂王忍熊王共出菟餓野、而祈狩之曰、祈狩、此云于氣比餓利。若有成事、必獲良獸、也、二王各居假庇、赤猪忽出之登假庇、咋麑坂王而殺焉、軍士悉慄也、忍熊王謂倉見別曰、是事大恠也、於此不可待敵、則引軍更返屯於住吉、時皇后聞忍熊王起師以待之、命武內宿禰懷皇子、横出南海泊于紀伊水門、皇后之船直指難波、于時皇后之船廻於海中、以不能進、更還務古水門而卜之、於是天照大神誨之曰、我之荒魂不可近皇居、當居御心廣田國、卽以山背根子之女葉山媛令祭、亦稚日女尊誨之曰、吾欲居活田長峽國、因以海上五十狹茅令祭、亦事代主尊誨之曰、祠吾于御心長田國、則以葉山媛之弟長媛令祭、亦表筒男、中筒男、底筒男、三神誨之曰、吾和魂宜居大津渟中倉之長峽、便因看往來船、於是隨神教以鎭坐焉、則平得度海、忍熊王復引軍退之、到菟道而軍之、皇后

○赤石、播磨國赤石郡
○絙、紐の誤字なり字書に大索也とあり崇神紀にハエと訓み字類抄名義抄にはワタルと訓り
○犬上君、景行紀五十一年(一六一頁)に見ゆ
○吉師祖、錄攝津皇別に吉志難波忌寸同祖大彥命之後也と見ゆ記には上に難波の二字あり
○隸、字書に附屬也とあり
○菟餓野、トガノと訓べし攝津志に西成郡菟餓野北至天滿北野等南至高橋町之總名也とあり今天滿川南北の地に當る
○祈狩、神にうけひて狩を爲し其獲に依りて吉凶を占ふなり
○假庇、神代紀上寶劍出現章(三六頁)に見ゆ
○赤猪、集解云赤猪は野猪なり
○恠　シルマシは前兆の意
○住吉、通證に住吉郡或曰倭名抄兎原郡住吉疑此とあり
○出南海、記には因疑人心具喪船御子載其喪船云々とあり
○紀伊水門、紀伊川の水

門か然らざれば和歌浦或は湯淺灣等にやありけむ
○難波、神武紀乙卯年（八二頁）に出づ
○務古水門、攝津國武庫郡にあり兵庫の舊名なり北本武庫に作る
○皇居、原本居を后に作る北本應本に據て改む
○御心廣田國、御心は廣と云む爲の發語式に攝津國武庫郡廣田神社あり是なり今大社村大字廣田にあり
○山背根子、錄攝津國神別山代直の條に天御影命十一世孫山代根子と見ゆ
○稚日女尊、天照大神の御妹
○活田長峽國、式に攝津國八部（今武庫）郡生田神社あり是なり長峽は地勢による名か
○海上五十狹茅、海上は上總下總兩國に海上郡あり國造本紀に上海上國造下海上國造共に天穗日命の孫と見ゆ
○御心長田國、御心は長を云む爲の發語式に攝津國八部（今武庫）郡長田神社あり是なり今林田村大字長田にあり
○大津淳中倉之長峽、攝

南詣紀伊國、會太子於日高、以議及群臣、遽欲攻忍熊王、更遷小竹宮、小竹、此云之賀、適是時也、晝暗如夜、已經多日、時人曰、常夜行之也、皇后問紀直祖豐耳曰、是恠何由矣、時有一老父曰、傳聞、如是恠謂阿豆那比之罪也、問何謂也、對曰、二社祝者共合葬歟、因以令推問、巷里有一人曰、小竹祝與天野祝共爲善友、小竹祝逢病而死之、天野祝血泣曰、吾也生爲交友、何死之無同穴乎、則伏屍側而自死、仍合葬焉、蓋是之乎、乃開墓視之實也、故更改棺槨、各異處以埋之、則日暉炳燦、日夜有別、三月丙申朔庚子、命武內宿禰、和珥臣祖武振熊、率數萬衆、令擊忍熊王、爰武內宿禰等選精兵、從山背出之、至菟道、以屯河北、忍熊王出營欲戰、時有熊之凝者、爲忍熊王軍之先鋒、熊之凝者、葛野首之祖也、一云、多吳吉師之遠祖也、則欲勸己衆、因以高唱之歌曰、烏智箇多能、阿邏々麻菟麼邏、摩菟麼邏珥、和多利喩祇氏、菟區喩彌珥、末利椰塢多具陪、宇摩比等破、于摩譬苔奴知野、伊徒姑播茂、伊徒姑奴池、伊裝阿波那和例波、多摩岐波屢、于池能阿屠餓、波邏濃知

津國風土記に住吉大神（略）寛可住國時到於沼名椋之長岡之前乃謂斯實可住之國遂讃稱之云眞住吉國乃是定神社今俗略之直稱須美乃叡とあり

○退之、之の字は北本中本に據て補ふ

○遽、原本遂に作る北本に據て改む

○日高、紀伊國日高郡

○小竹宮、和泉志に古蹟在尾井村（和泉郡）とあれど紀伊國續風土記に紀伊國那賀郡志野村（今長田村大字志野）とあるに據るべし

○阿豆那比之罪、未詳、通證集解等に種々の說あれど何れも取り難し

○天野祝、天野社は式に紀伊國伊都郡丹生都比女神社是なり

○日暉炳燦、私記にヒノヒカリテリテと訓り字書に暉は或作輝光也炳は著明也とあり燦は名義抄に音榮とのみ見えたり燦と通じ用ひしか

○武振熊、記に難波根子建振熊命とあり

○率、原本卒に作る北本中本に據て改む

波、異佐誤阿例椰、伊裝阿波那和例波、時武內宿禰令三軍悉令椎結、因以號令曰、各以儲弦藏于髮中、且佩木刀、既而擧皇后之命、誘忍熊王曰、吾勿貪天下、唯懷幼王從君王者也、豈有距戰耶、願共絕弦、捨兵與連和焉、然則君王登天業、以安席高枕專制萬機、則顯令軍中、悉斷弦解刀投於河水、忍熊王信其誘言、悉令軍衆解兵投河水而斷弦、爰武內宿禰令三軍、出儲弦更張、以佩眞刀、度河而進之、忍熊王知被欺、謂倉見別、五十狹茅宿禰曰、吾旣被欺、今無儲兵、豈可得戰乎、曳兵稍退、武內宿禰出精兵而追之、適遇于逢坂、以破、故號其處曰逢坂也、軍衆走之、及于狹々浪栗林而多斬、於是血流溢栗林、故惡是事至于今、其栗林之菓不進御所也、忍熊王逃無所入、則喚五十狹茅宿禰而歌之曰、伊裝阿藝、伊佐智須區禰、多摩枳波屢、于知能阿曾餓、勾夫苑智能、伊多氐於破孺破、珥倍迺利能、介豆岐齊奈、則共沈瀨田濟而死之、于時武內宿禰歌之曰、阿布彌能彌、齊多能和多利珥、伽豆區苔利、梅珥志彌曳泥麼、異

枳廼倍呂之茂、於是探其屍而不得也、然後數日之、出於菟道河、武內宿禰亦歌曰、阿布瀰能瀰、齊多能和多利珥、介豆區苔利、多那伽瀰須疑氏、于泥珥等、羅倍菟、冬十月癸亥朔甲子、群臣尊皇后曰皇太后、是年也太歲辛巳、則爲攝政元年、

○葛野首、原本野の下城の字あり北本に據て削る　○一云多奚吉師之遠祖也、原本此の下一云多奚吾師之遠祖也の十字あり吾と吉と一字異れるのみにて全く同文なり其吾も吉の誤ならむと思はる、北本には此十字なし之に據て削る　○欲勸己衆、身方の軍勢を奬勵せむと欲してなり　○烏智箇多能云々、彼方の松原に涉り往きて槻弓に末利矢をつがへ貴き人は貴き人と近親の人は近親の人と相對して勇ましく戰ひて敵を打破らむとなり烏智箇多能は彼方の阿羅々麻莵麼邏はまばらに松の生たる原を云原本々を乙に作る北本中本に據て改む、摩莵麼邏珥は上句を打返して松原にと云ひしなり、菟區喩瀰は槻にて作れる弓、末利郷は鏑矢を形狀によりてマリヤと云か未詳、宇摩比等は貴き人身分良き人を云、于摩譬苦奴知は貴人等なりドチは俗に同志と云に同じ、原本苦を苦に作る北本に據て改む、ヤは感動詞、伊徒姑は親しみ深き人を云近親の意、播茂のハは助辭モは感動詞、伊徒姑奴池は近親同士なり、伊裝阿波那和例波は我等はイザ戰むとなり　○多摩岐波慝云々、武內朝臣の腹の中は砂にてもあらむやさることもなかるべし强力なる槻弓に末利矢をたぐひて射れば輙く破ることを得べしいざ戰むとなり、多摩岐波慝は內の枕詞、于池能阿層餓は內の朝臣がにて武內宿禰を云、波邏濃知波は腹の中はなり、異佐誤阿例郷は砂有むやなりヤは反語にて豈砂有むや恐るべき事もなしとなり　○椎結、景行紀廿七年に見ゆ椎は原本推に作る景行紀に據て改む　○號令、ノリゴチは宣言なり命令するを云　○以儲弦、以は原本なし中本に據て補ふ儲弦は豫備の弦なり名義抄に設をチサと訓り其意なりチサとウサとは相通ふ故に兩樣に云り　○髮中、タキフサは垂れたる髮を上げて攝れ結ぶ意タブサはタキフサのキを略せるなり集解に古本に據れりとて髮を髻に改作る　○連和、ウルハシは相親しむを云連和は連合和親の意　○投於河水、於は中本に據て補ふ　○度河而進之、北本度を渡に作る而の字は楓本中本に據て補ふ　○儲兵、豫備の兵器卽ち大刀弓矢などを云　○逢坂、近江國滋賀郡　○狹々浪、同上古へ近江國の西南に亘れる地名なりしなるべし　○栗林、供御の栗實を獻る林　○及、すヒシキと訓べし神代紀上に見ゆ　○御所、オモノは御食物の意　○伊裝阿藝云々、吾兄五十狹茅宿禰よ武內宿禰の頭槌の刀の痛手を負むよりは瀨田河に沈て共に死むとなり、伊裝阿藝はいざ吾君なり、吾君は親しみ尊みていふ、句夫菟智は頭槌の刀なり神代紀下に見ゆ、伊多氐於破儒破は痛手負すあらむにはなり、珥倍迺利能は鳰鳥之にて、抄に鵜鶘方言注云鵜鶘(辨色立成云瀰保)野鳧小而好沒水中也とあり字鏡には鵜鶘及び鳰をニホと訓りかつきを言はむ爲の序なり介豆ハ齊奈は潛き爲むにて水に溺るゝを云　○瀨田濟、近江國栗本郡勢多郷にあり　○阿布瀰能瀰云々、一首の意は瀨田の濟に潛く鳥を尋ねど目に見えねば憤ろしとなり忍熊王の水に身を投ぜられて打取ることを得ざるを憤り詠るなり　○探、マケは求むるを云　○菟道河、原本河を阿に作る諸本に據て改む　○多那伽瀰、田上なり瀨田川の沿岸にて瀨田と宇治との中間にあり栗本郡に屬す瀰は原本泓に作る諸本に據て改む　○太歲、原本太を大に作る北本中本に據て改む　○攝政、私記には見えず北本楓本共にマツリコトフサネテサメタマフと訓り攝は字書に總也代也と見え天皇に代りて萬機の政を總ね治め給ふなり是我國に於ける攝政の始なるが後の攝政とは大に趣の異なるものあり

【二年】長野陵、式に河內國志紀郡とあり記に河內惠賀之長江と見ゆ陵墓

二年冬十一月丁亥朔甲午、葬天皇於河內國長野陵、

要覽云河內國南河內郡藤井寺村大字岡

【三年】磐余、大和國十市郡

○若櫻宮、編年記云大和國十市郡磐余里是也志云古蹟池內村、

○(注)是謂若櫻宮、此五字は北本にイ本有之と傍注し玉本には全く見えざれば後人の攙入なるべし

【五年】三月、原本二月に作る北本楓本中本に據て改む

○汙禮斯伐、毛麻利叱智、富羅母智、以上三人の名

○微叱許智伐旱、微叱己知波珍干岐とありしハなり伐旱は冠位にて釋紀に伐旱一位然則先爲三位今爲二位とあり

○給、字書に欺なりとあり

○沒、原本設に作る北本楓本に據て改む

○孥、字書に奴也とありツカサヤツコは官奴なり

○葛城襲津彥、記孝元天皇の段に建內宿禰之子葛城長江曾都毘古者玉手臣生江臣阿藝那臣等之祖也とあり葛城は大和國の地名なり　○鉏海水門、對馬國の內なるべし　○水手、應神紀十三年に見ゆ　○蒭靈、抄祭祀具に蒭靈日本紀私記云蒭靈(久散比度賀太)とあり此字禮記檀弓に出て注に束茅爲人馬と見ゆ　○檻中、ウナヤは倭訓栞に憂く憾む屋の義なりと云　○蹈鞴津、繼體紀に多々羅と見ゆ任那の地名　○草羅城、東國通鑑に新羅慈悲王六年倭侵新羅敢良城とあり文獻備考を按るに慶尙道梁山郡なり新羅の時初め敢良州と云しを後良州と改め高麗に至りて梁州と改め李朝に至りて梁山州と改めしを後州を郡と改めたり城をサシと

(癸未)三年春正月丙戌朔戊子、立譽田別皇子爲皇太子、因以都於磐余、是謂若櫻宮、

(乙酉)五年春三月癸卯朔己酉、新羅王遣汙禮斯伐、毛麻利叱智、富羅母智等朝貢、仍有返先質微叱許智伐旱之情、是以誂許智伐旱而紿之曰、使者汙禮斯伐、毛麻利叱智等告臣曰、我王以坐臣久不還而悉沒妻子爲孥、冀暫還本土、知虛實而請焉、皇太后則聽之、因以副葛城襲津彥而遣之、共到對馬宿于鉏海水門、時新羅使者毛麻利叱智等、竊分船及水手、載微叱旱岐令逃於新羅、乃造蒭靈置微叱許智之床、詳爲病者、告襲津彥曰、微叱許智忽病之將死、襲津彥使人、令看病者、卽知欺而捉新羅使者三人、納檻中、以火焚而殺、乃詣新羅、次于蹈鞴津、拔草羅城還之、是時俘人等、今桑原、佐糜、高宮、忍海、凡四邑漢人等始祖也、

訓るは東雅に百濟の方言なりと云り　○桑原、大和國葛上郡　○佐糜、同郡　○高宮、同郡　○忍海、大和國忍海郡　○漢人、アヤヒトは通證に阿夜文也猶言文物之國也とあり

【十三年】筍飯大神、式に越前國敦賀郡氣比神社七座とあり祭神伊奢沙和氣命なり神祇志料に按此神は天日槍命にはあらじか日槍は神武天皇以來海路を往來し始めの人にて皇后外家の祖なる故彼征伐の時海路を祈り給へる事等もありしを以て太子に此神を拜ましめて報賽しつるにやあらむとあり　○鶏、字書に鰐實曰、鶏慮曰、鰐さより鰐は角の盃なるが其酒を盛れるを鶏と云さなり　○詩、サカホカヒは酒祝なり酒宴を催して祝賀するを云　○虛能彌企破云々、一首の意は此御酒は我醸せる御酒にあらず常世國に坐す酒の神少御神の殊にほぎ祝ひて献來れる御酒ぞ酒杯を重ねて聞食せさなり皇太子の氣比の參詣畢りて歸坐せるを喜ばせられ酒宴を開き此御酒は神の献られ御酒なれば大に飲て幸を得べしと皇太子を祝福せられ供奉の人々かねぎらはれしなり區之能伽彌は酒の神、等虛像珥伊麻輸は常世に坐すにて少彦名神の常世に渡坐しゝこと神代上に見えたり、伊破多多須は石立すにて此神は石を神實として祭れるが多ければ其意なり、等豫保枳は豐壽、保枳茂苦倍之は壽き廻(モト)ほしなり言壽きて喜び廻るを云苦は原本苦に作る北本に據て改む、訶武保枳は神壽ぎなり、保枳玖流保之は言壽ぎて喜び狂ふなり、摩苑利虛辭彌企層は獻來し御酒ぞなり、阿佐孺塢齊は杯をほさずして聞食せさなり、佐々は奬むる詞今もサ、さ云　○許能彌企塢云々、此御酒を醸したる人は鼓を曰のほとりに立て歌ひつゝ醸みしならむ此御酒を飲めば飲むに隨ひて益々樂しく誠に神の献られし御酒ならむさゝ鶏まで賜はらむさ皇太后の眞心をこめて賜へる御酒ぞ聞食し滿膣の喜を流給ひしなり、曾倍苑豆彌于輸珥多氏云々は鼓を曰の邊に立て、之を打ち歌を謠ひて酒をつくりこむを云、大嘗祭に稻舂歌を謠ひて稻を舂くさ同じ意なり、此の狀を皇太后の御歌に壽ぎ廻(モト)ほし壽ぎ狂(クル)ほしさよまぜられしなり伽彌雞梅伽墓は醸みけむ哉にてカモは感歎の意阿椰珥は祝詞に綾爾提伎さあるアヤにてアもヤも感動詞、于多は轉(ウタ、)なりより

十三年春二月丁巳朔甲子、命武内宿禰從太子令拜角鹿筍飯大神、癸酉、太子至自角鹿、是日、皇太后宴太子於大殿、皇太后舉觴以壽、于太子、因以歌曰、虛能彌企破、和餓彌企那羅儒、區之能伽彌、等虛豫珥伊麻輸、伊破多多須、周玖那彌伽未能、等豫保枳、保枳茂苦倍之、訶武保枳、保枳玖流保之、摩苑利虛辭彌企層、阿佐孺塢齊佐佐、武内宿禰爲太子、答歌之曰、許能彌企塢、伽彌雞武比等破、曾能苑豆彌、于輸珥多氏氏、于多比苑苑、伽彌雞梅伽墓、許能彌企能、阿椰珥于多娜濃芝作沙、

一層進むを云、ウタ、のタとタヌシのタと重なる故に一つを省きてウタと云り

【卅九年】(注)魏志、晉陳壽撰
○三年、魏志二年とす
○斗、魏志升に作る
○鄧夏、魏志劉夏に作る
○也、魏志になし
【四十年】忠、魏志中に作る
○携、魏志儁に作る
○也、魏志になし
【四十三年】倭女王、楓本に據て補ふ
○伊聲者掖耶約、魏志伊聲者掖邪狗に作る
【四十六年】卓淳國、釋紀に任那國之別種也今の朝鮮慶尚南道漆原地方
○(注)斯摩宿禰云々、傍訓攙入か摩は中本に據て改む
○甲子年、四十四年なり
○深德、オムカシミは喜び感ずる意
○若雖有路津、通釋に若の下或は無船舶の三字を脱したるかと云り
○傔人、字書に傔は從也とあり從者を云
○肖古王、記に照古王とあり原本肖を背に作るは非なり四十九年紀及古事記に據て改む

卅九年(己未)、是年也太歲己未、魏志云、明帝景初三年六月、倭女王遣大夫難斗米等、詣郡求詣天子朝獻、太守鄧夏遣使將送詣京都也、

四十年(庚申)、魏志云、正始元年、遣建忠校尉梯携等奉詔書印綬、詣倭國也、

四十三年(癸亥)、魏志云、正始四年、倭女王復遣使大夫伊聲者掖耶約等八人上獻、

四十六年(丙寅)春三月乙亥朔、遣斯摩宿禰于卓淳國、斯摩宿禰者、不知何姓人也、於是卓淳王末錦旱岐告斯摩宿禰曰、甲子年七月中、百濟人久氐彌州流、莫古三人到於我土曰、百濟王聞東方有日本貴國、而遣臣等令朝其貴國、故求道路以至于斯土、若能教臣等令通道路、則我王必深德君王、時謂久氐等曰、本聞東有貴國、然未曾有通、不知其道、唯海遠浪嶮、則乘大船僅可得通、若雖有路津、何以得達耶、於是久氐等曰、然卽當今不得通也、不若更還之、備船舶而後通矣、仍曰、若有貴國使人來、必應告吾國、如此乃還、爰斯摩宿禰卽以傔人爾波移與卓淳人過古二人、遣于百濟國、慰勞其王、時百濟肖古王、深之歡喜而厚遇焉、仍以五色綵絹各一

○綵絹、シミは染なり色々に染めたる絹を云
○角弓、字書に以角飾弓也とあり抄調度部征戰具に角弓爾雅注云弭（都能由美）今之角弓也とあり
○鐵鋌、鋌は字書に銅鐵樸也とあり抄珍寶部に鐵久路加禰此間一訓禰利箋注に當依新撰字鏡及日本紀訓云禰利加禰也とあり
○幣、原本弊に作る集解に從て改む

【四十七年】

○沙比新羅、新羅の地名なるべし集解に新羅の二字ル衍として削る
○禁錮囹、禮記月令の疏に囹圄囹圄也所以止出入皆罪人所舍也とありヒトヤは人屋の意カラムは獄に繫ぎて他に出づるを禁ずるなり
○相易以爲、原本以の字なし中本に據て補ふ
○請此辭者、通釋誤を語に改作るは非なり
○推問、字書に謂推求審問也とあり

疋、及角弓箭、并鐵鋌四十枚、幣爾波移、便復開寶藏、以示諸珍異曰、吾國多有是珍寶、欲貢貴國、不知道路、有志無從、然猶今付使者、尋貢獻耳、於是爾波移奉事而還告志摩宿禰、便自卓淳還之也、

卌七年夏四月、百濟王使久氐、彌州流、莫古、令朝貢、時新羅國調使與久氐共詣、於是皇太后太子譽田別尊大歡喜之曰、先王所望國人今來朝之、痛哉不逮于天皇矣、群臣皆莫不流涕、仍檢挍二國之貢物、於是新羅貢物者珍異甚多、百濟貢物者少賤不良、便問久氐等曰、百濟貢物不及新羅、奈之何、對曰、臣等失道至沙比新羅、則新羅人捕臣等禁囹圄、經三月而欲殺、時久氐等向天而咒詛之、新羅人怖其咒詛而不殺、則奪我貢物、因以爲己國之貢物、以新羅賤物、相易以爲臣國之貢物、謂臣等曰、若誤此辭者、及于還日當殺汝等、故久氐等恐怖而從耳、是以僅得達于天朝、時皇太后譽田別尊責新羅使者、因以祈天神曰、當遣誰人於百濟、將檢事之虛實、當遣誰人於新羅、將推問其罪、便天神誨之曰、

○(注)其姓人、中本にイ本人充とあり
○(注)槻本首、錄になし天武紀朱鳥元年に槻本村主あり
○(注)是歟也、也は恐は衍なり
○濫　禮記禮器の注に濫亦盜竊也とあり

令武内宿禰行議、因以千熊長彦爲使者、當如所願、千熊長彦者、分明不知其姓人、云、武藏國人、今是額田部槻本首等之始祖也、百濟記云、職麻那那加比跪者、蓋是歟也、於是遣千熊長彦于新羅、責以濫百濟之獻物、

【四十九年】荒田別、應神紀十五年に見ゆ錄河内皇別止美連の條に豐城入彦命之後也四世孫荒田別命と見え右京皇別大野朝臣の條に豐城入彦命四世孫大荒田別命とあり
○鹿我別、國造本紀浮田國造の條に瑞籬朝五世孫賀我別王とあるを國造本紀考(栗田寛)に瑞籬朝の下に皇子豐城命の五字を補ひて賀我別は荒田別の子なるべしと云り

四十九年春三月、以荒田別鹿我別爲將軍、則與久氐等共勒兵而度之、至卓淳國、將襲新羅、時或曰、兵衆少之、不可破新羅、更復奉上沙白、蓋盧、請增軍士、卽命木羅斤資、沙沙奴跪、是二人不知其姓人也、但木羅斤資者、百濟將也、領精兵、與沙白蓋盧共遣之、俱集于卓淳、擊新羅而破之、因以平定比自㶱、南加羅、喙國、安羅、多羅、卓淳、加羅七國、仍移兵西廻至古奚津、屠南蠻忱彌多禮、以賜百濟、於是其王肖古、及王子貴須、亦領軍來會、時比利、辟中、布彌支、半古四邑自然降服、是以百濟王父子、及荒田別、木羅斤資等共會意流村、今云州流須祇、相見欣感、厚禮送遣之、唯千熊長彦與百濟王、至于百濟國、登辟支山、盟之、復登古沙山、共居磐石上、時百濟王盟之曰、若敷草爲坐、恐見火燒、且取木爲坐、恐爲水流、故居磐石而盟者、示長遠之不朽者也、是

○卓淳國、原本國を因に作る中本に據て改む卓淳は欽明紀に喙淳とあり安羅の東北慶尙南道漆原地方是なりと云
○沙白蓋盧　集解云按卓淳人
○沙々奴跪、北本跪を垢に作る
○比自㶱、文獻備考輿地考に新羅火王郡(本比自

火邵一云比斯伐）高麗昌寧郡本（李朝昌寧郡とあり慶尙南道昌寧地方を云○南加羅、文獻備考を按ずるに加羅に金官駕洛大伽那小伽耶古寧伽倻阿羅伽倻星山伽倻の數種あり此は其の中の南方にありし國にて慶尙南道龜浦地方ならむと云　○喙國、慶尙南道蔚山附近の地ならむと云　○安羅、文獻備考を按るに阿羅伽倻國は慶尙道咸安にて馬山浦に近き地　○多羅、文獻備考を按るに慶尙道陝州郡なり新羅の時初め大良と稱せしを後江陽郡と改め高麗の時には陝州と云ひ李朝に至て陝州郡と改む　○加羅、文獻備考を按るに金官駕洛國の一名にて百濟の東にあり慶尙南道金海地方なり　○古冬津、比自体以下七國より西南邊より東にある地、南海島の上陸地なりと云　○南蠻忱彌多禮、三國史記地理一に南海郡神文王初置、轉也山郡海中島也景德王改名今因之とあり轉也山は南海島の舊名にて轉也山卽ち忱彌多禮なり　○比利辟中布彌支半古、以上の四邑は慶尙南道河東郡にあり南海島對岸の地なり　○意流村、河東郡の內なれど其地詳ならず　○欣懸、四十六年紀に出づ　○至于百濟國、至は北本應本中本に據て補ふ　○辟支山、今忠淸南道大興縣に白日（ヘツキール）山あり或は是かと云支は原本友に作る北本中本に據て改む　○古沙山、北史百濟傳に古沙城の名見ゆ其地未詳　○數草、原本數を數に作る北本に據て改む　○都下、百濟の都なり

以自今以後、千秋萬歲、無絕無窮、常稱西蕃、春秋朝貢、則將千熊長彥、至都下厚加禮遇、亦副久氐等而送之、

【五十年】

○任、字書に堪也とあり　○多少、繼體紀廿三年に加羅多沙津とあり通釋文獻備考に據て新羅河東郡本韓多沙郡本（李）朝慶尙道河東府とある地なりと云　○驛、ウマヤタチは厩館なり抄居處部道路具に唐令云諸道須置驛者每州里置一驛（无末反）とあり街道適當の地に馬匹を飼置きて官公使人の往來

（庚午）五十年春二月、荒田別等還之、夏五月、千熊長彥、久氐等至自百濟、於是皇太后歡之問久氐曰、海西諸韓既賜汝國、今何事以頻復來也、久氐等奏曰、天朝鴻澤遠及弊邑、吾王歡喜踊躍不任于心、故因還使、以致至誠、雖逮萬世、何年非朝、皇太后勅云、善哉汝言、是朕懷也、增賜多沙城、爲往還路驛、

（辛未）五十一年春三月、百濟王亦遣久氐朝貢、於是皇太后語太子及武內宿禰曰、朕所交親百濟國者、是天所致、非由人故、玩好珍物、先所未有、

不ル闕ニ歲時、常來貢献、朕省ニ此欵、毎用喜焉、如ニ朕存時、敦加ニ恩惠、卽年以ニ千熊長彦、副ニ久氐等、遣ニ百濟國、因以垂ニ大恩、曰、朕從ニ神所驗、始開ニ道路、平ニ定海西、以賜ニ百濟、今復厚結ル好、永寵賞之、是時百濟王父子、並額致地、啓曰、貴國鴻恩重ニ於天地、何日何時敢有ル忘哉、聖王在ル上、明如ニ日月、今臣在ル下、固如ニ山岳、永爲ニ西蕃、終無ニ貳心、

五十二年秋九月丁卯朔丙子、久氐等從ニ千熊長彦、詣之、則獻ニ七枝刀一口、七子鏡一面、及種種重寶、仍啓曰、臣國以西有ル水、源出ル自ニ谷那鐵山、其邈七日行之不ル及、當ル飲ニ是水、便取ニ是山鐵、以永奉ニ聖朝、乃謂ニ孫枕流王、曰、今我所ル通、海東貴國、是天所ル啓、是以垂ニ天恩、割ニ海西而賜ル我、由ル是國基永固、汝當善脩ニ和好、聚ニ歛土物、奉貢不ル絶、雖ル死何恨、自ル是後、毎ル年相續朝貢焉、

五十五年、百濟肖古王薨、

五十六年、百濟王子貴須立爲ル王、

に便ならしむ故に馬屋と云馬屋のある所また館あり故にウマヤタチと云

【五十一年】

○欵、款の俗字字書に誠也とあり

○永寵賞之、北本永を示に作る

○額、字書に額也とあり額を地に致すは卽ち拜むなり

○西蕃、蕃はトナリクニと訓む例なるを北本にオホムタカラと訓るは珍らし

【五十二年】七枝刀、北本枝を枚に作る七枝とは制作によれる名なり本は一本にて鋒は七つに分れ七つの鞘に納むるによれる名にやあらむ

○七子鏡、周圍に七つの子ありて俗に七曜の紋と云るものゝ如き狀したる鏡なるべし

○谷那鐵山、百濟の地なるべし通釋文獻備考に據て全羅道百濟欲乃郡新羅谷城郡とある地ならむかと云

○天所啓、啓は字書に開也とあり

○自是後、集解後の上に以の字を補ふ無くも通ず

【五十五年】肖古王、肖は原本背に作る北本玉本に據て改む

【五十六年】

【六十二年】日沙至比跪、百濟にて襲津彦を訛りてかく稱ひしなるべし

○新羅人莊飭、下復其社稷に至る北本は本文とす楓山傍書に從ひ新羅至社稷清本爲疏猶可見他本也とあるに據れば清原家の本は分注としたるも他本は北野本と同じく本文とせしなるべし莊裝音通す

○沙誘於津、北本津の上に襲の字あり恐くは衍

○百久至、原本至を氏に作る北本に據て改む

○國沙利、譯紀國を闕に作り前本は闕に作る

○妹以皇言、原本妹の字なし北本中本に據て補ふ

○石穴、イハッポは岩壺の義岩をほり穿ちて壺とするを云

【六十四年】

【六十五年】阿花、東國通鑑阿莘に作るは非なり

【六十六年】日貢獻、北本中本獻の下に之也の二字あり

【六十九年】狹城盾列

六十二年、新羅不朝、卽年遣襲津彦擊新羅、

百濟記云、壬午年、新羅不奉貴國、貴國遣沙至比跪令討之、新羅人莊飭美女二人、迎誘於津、沙至比跪受其美女、反伐加羅國、加羅國王己本旱岐、及兒百久至、阿首至、國沙利、伊羅麻酒、爾汶至等、將其人民、來奔百濟、百濟厚遇之、加羅國王妹旣殿至、向大倭啓云、天皇遣沙至比跪、以討新羅、而納新羅美女、捨而不討、反滅我國、兄弟人民皆爲流沈、不任憂思、故以來啓、天皇大怒、卽遣木羅斤資、領兵衆來集加羅、復其社稷、一云、沙至比跪知天皇怒、不敢公還、乃自竄伏、其妹有幸於皇宮者、比跪密遣使人問天皇怒解不、妹乃託夢言、今夜夢、見沙至比跪、天皇大怒云、比跪何敢來、妹以皇言報之、比跪知不免、入石穴而死也、

六十四年、百濟國貴須王薨、王子枕流王立爲王、

六十五年、百濟枕流王薨、王子阿花年少、叔父辰斯奪立爲王、

六十六年、是年、晉武帝泰初二年、晉起居注云、武帝泰初二年十月、倭女王遣重譯貢獻、

六十九年夏四月辛酉朔丁丑、皇太后崩於稚櫻宮、時年一百歲、冬十月戊午朔壬申、葬狹城盾列陵、是日、追尊皇太后、曰氣長足姬尊、是年也太歲己

陵、式に大和國添下郡とあり今生駒郡平城村大字山陵にあり
○太歳、原本大に作る中本に據て改む

丑、

日本書紀卷第九

ヤマトフミノマキノツイデコ、ノハシラニアタルマキ(北)

日本書紀卷第十

譽田天皇　應神天皇

譽田天皇、足仲彥天皇第四子也、母曰氣長足姬尊、天皇以皇后討新羅之年歲次庚辰冬十二月、生於筑紫之蚊田、幼而聰達、玄監深遠、動容進止、聖表有異焉、皇太后攝政之三年、立爲皇太子、時年三初天皇在孕而、天神地祇授三韓、既產之、宍生腕上、其形如鞆、是肖皇太后爲雄裝之負鞆、肖此云阿叡、故稱其名謂譽田天皇、上古時俗、號鞆謂優武多焉、一云、初天皇爲太子、行于越國、拜祭角鹿筍飯大神、時大神與太子名相易、故號大神曰去來紗別神、太子名譽田別尊、然則可謂大神本名譽田別神、太子元名去來紗別尊、然無所見也、未詳、攝政六十九年夏四月、皇太后崩、時年百歲

元年春正月丁亥朔、皇太子卽位、是年也太歲庚寅、

二年春三月庚戌朔壬子、立仲姬爲皇后、后生荒田皇女、大鷦鷯天皇、根

【卽位前紀】

○蚊田、宇瀰の舊名筑前國糟屋郡にあり

○玄監、字書に玄は幽遠也監は視也とあり其心幽遠の處にありて萬事を視察するを云

○〈注〉時年三、按るに天皇仲哀天皇庚辰に生れ給へば攝政三年は四歲に成給ふ

○鞆、神代上に見ゆ分注に上古時俗號鞆謂優武多とあり之據てホムダとも傍訓を施したれど鞆をホムダと云ることなく誤なること紀傳三十に辨じたるが如し

○肖、アエは似ると云に同じアヤカルのアヤもアエの轉語

○雄裝、ヲヨソヒはヲ、

鳥皇子、先是天皇以皇后姉高城入姬爲妃、生額田大中彥皇子、大山守皇子、去來眞稚皇子、大原皇女、澇來田皇女、又妃皇后弟弟姬、生阿倍皇女、淡路御原皇女、紀之菟野皇女、次妃和珥臣祖日觸使主之女、宮主宅姬、生菟道稚郎子皇子、矢田皇女、雌鳥皇女、次妃宅媛之弟小甌媛、小甌、此云摩烏難、生菟道稚郎姬皇女、次妃河派仲彥女弟媛、生稚野毛二派皇子、派、此云摩多、次妃櫻井田部連男鉏之妹糸媛、生隼總別皇子、次妃日向泉長媛、生大葉枝皇子、小葉枝皇子、凡是天皇男女并廿王也、根鳥皇子、是大田君之始祖也、大山守皇子、是土形君、榛原君、凡二族之始祖也、去來眞稚皇子、是深河別之始祖也、

シキヨソヒと訓べきを省略したるものならむ　○(注)一云、此傳は古事記の傳に同じ　○去來紗、應本紗を沙に作る下同じ　○然則云云、集解に古本に無しとて削る　○(注)時年百歲、集解古本になしとて削る

【元年】

【二年】庚戌朔壬子、通證に推長曆當作庚辰朔壬午とあり通釋亦之に從ふ　○仲姬、景行天皇の曾孫にて品陀眞若王の女　○澇來田、原本來の字なし北本寮本中本に據て補ふ　○阿倍、原本倍を位に作る北本楓本中本に據て改む　○宅媛之弟、原本弟の字なし田本北本寮本に據て補ふ　○弟媛、原本媛を姬に作る田本北本寮本に據て改む　○長媛、原本媛を姬に作る田本類史に據て改む　○大葉枝、原本大を太に作る田本北本に據て改む　○廿王、按るに今此に擧る所は十九王なり一柱漏れたり記には廿六王の御名を擧たり　○大田君、同名の地多ければ何れとも定め難し　○土形君、姓氏錄に見えず遠江國城飼郡に土形鄉あり次の榛原も同國なれば城飼郡土形鄉に緣故あるべし　○榛原君、遠江國に蓁原郡蓁原鄉あり此鄉に緣故あるべし此氏は姓氏錄にも見ゆ　○深河別、深河は式に山城國葛野郡深川神社大和志に山邊郡深川村あれば是等の地に由あるべきか他に徵すべきものなし

【三年】庚戌、大和國高市郡　○海人、海邊にありて漁獵を業とする人を云　○訕嗟、字書に訕は毀語

三年冬十月辛未朔癸酉、東蝦夷悉朝貢、卽役蝦夷而作廐坂道、十一月、處々海人、訕嗟之不從命、訕嗟、此云佐麼賣玖、則遣阿曇連祖大濱宿禰、平其訕

也、咤は雜語也とありてかしましく騷ぐを云
○阿曇連、神代上に見え海神の子孫なり
○海人之幸、海人の部類を掌る長官なりミコトモチは勅命を奉じて之を統領するを云宰は字書に治也云〻樂事一者とあり
○佐麼阿摩、さばめく海人の意
○辰斯王立之、辰斯王の事は神功紀六十五年に見ゆ立之二字原本になし田本に據て補ふ　○貴國天皇、集解天朝の二字に改めたれど諸本何れも同じ
○紀角宿禰、武內宿禰の男なり羽田矢代宿禰石川宿禰木菟宿禰何れも同じく武內宿禰の男　○木菟、原本木を不に作る諸本に據て改む　○嗜讓、神代上に出づ　○由是、北本由を於に作る　○殺辰斯王、東國通鑑に晉大元十七年百濟辰斯王八月十一日薨於狗原行宮枕流王子阿莘立とあり晉大元十七年は仁德天皇八十年壬辰に當り百廿一年後の事なり好太王碑文に倭以辛卯年來渡海破百殘新羅以爲臣民とある前年の事と思はるれば仁德天皇御世の事とする方正しきが如し

咤、因爲海人之宰、故俗人諺曰佐麼阿摩者、其是緣也、是歲、百濟辰斯王立之失禮於貴國天皇、故遣紀角宿禰、羽田矢代宿禰、石川宿禰、木菟宿禰、嗜讓其无禮狀、由是百濟國殺辰斯王以謝之、紀角宿禰等便立阿花爲王而歸、

【五年】定海人及山守部、海人と山守との部を定むとの意海人は海人部なること勿論なれど部を脫せるにはあらず山守部は官林を守る部民なり
○枯野、船の輕くして疾く走るによりて名づくとあれど式に伊豆國田方郡輕野神社又抄に同郡狩野郷あれば地名を取れるなるべし
○〔注〕由船輕疾云々、此十九字は集解に私記攙入として削る　【六年】二月、中本三月に作る　○菟道野、山城國宇治郡　○知麼能云々、此御歌は近江國に行幸の際菟道野の邊にて人家の數多く榮ゆるを見そなはして詠ませ給ひしなりチバは千葉にて葛の葉の數多く繁茂せるを云千葉の葛さいひかけたる發語モ、ヲタルは百千足にて家庭の數多く榮え茂れるを云ヤニハは家庭クニノホは國の秀にて國原の秀れたる狀も見ゆさなり知麼の麼は原本麼に作り彌例麼の麼は磨に作る共に田本北本

（甲午）五年秋八月庚寅朔壬寅、令諸國定海人及山守部、冬十月、科伊豆國令造船、長十丈、船既成之、試浮于海、便輕泛疾行如馳、故名其船曰枯野、

由船輕疾名枯野、是義違焉、若謂輕野、後人訛歟、

（乙未）六年春二月、天皇幸近江國、至菟道野上而歌之曰、

知麼能、伽豆怒塢彌例麼、茂々智儺蘆、夜珥波母彌喩、區珥能朋母彌喩、

見百千足家庭見國秀見

七年秋九月、高麗人、百濟人、任那人、新羅人、並來朝、時命武内宿禰、領諸韓人等作池、因以名池號韓人池、

八年春三月、百濟人來朝、百濟記云、阿花王立无禮於貴國、故奪我枕彌多禮、及峴南支侵谷那東韓之地、是以遣王子直支于天朝、以脩先王之好也、

九年夏四月、遣武内宿禰於筑紫、以監察百姓、時武内宿禰弟甘美内宿禰、欲廢兄、卽讒言于天皇、武内宿禰常有望天下之情、今聞、在筑紫而密謀之曰、獨裂筑紫、招三韓令朝於己、遂將有天下、於是天皇則遣使以令殺武内宿禰、時武内宿禰歎之曰、吾元無貳心、以忠事君、今何禍矣、無罪而死耶、於是有壹伎直祖眞根子者、其爲人能似武内宿禰之形、獨惜武内宿禰無罪而空死、便語武内宿禰曰、今大臣以忠事君、既無黑心、天下共知、願密避之、參赴于朝、親辨無罪、而後死不晚也、且時人每云、僕形似大臣、故今我代大臣而死之、以明大臣之丹心、則伏劍自死焉、時武内宿禰獨大悲之、竊避筑紫、浮海、以從南海廻之、泊於紀水門、僅得逮朝、乃辨無罪、天皇則推問武内宿禰與甘美

に據て改む

【七年】韓人池、志に在城上郡唐古村今呼柳田池とあり

【八年】(注)枕彌多禮、神功紀四十九年(一九〇頁)に出で枕を忱に作る○峴南支侵谷那、支侵は魏志東夷傳馬韓五十四國の中に見え谷那は神功紀五十二年(一九二頁)に見ゆ地圖を按ずるに此四國は何れも全羅南道蟾津江西方の地なり○直支、十五年の紀に見ゆる阿直支と同人ならむ

【九年】甘美内宿禰、武内宿禰の異母弟内は地名より取れる事武内の内に同じ山城國綴喜郡に有智郷あり兄弟共にこゝにて生立ちしによれるならむ○欲廢兄、原本欲の字なし田本北本應本等に補ふ○讒言、字鏡にヨコスと訓るは邪(ヨコ)すにて邪なる無實の言をなすを云○在筑紫、北本楓本中本在を侍に作る○吾元無貳心、原本元の字なし田本北本應本等に據て補ふ○以忠事君、北本以忠を

忠以に作り忠はツトメと訓み楓本應本亦同くツトメと訓り下文に以忠とあるは楓本應本はマメと訓み北本は此と同じくツトメと訓り名義抄に忠をタヾシ、マコト、ナヲシ、ウヤマフと訓るを引て通釋にこゝはマコトと訓べしと云へど尚よく考べし ○壹後直祖眞根子、錄右京神別に壹岐直天兒屋根命十一世孫雷大臣之後也とあり眞根子は武内宿禰の筑紫に居し時仕へし人ならむ原本祖の字なし田本北本寮本に據て補ふ ○似、私記にタウハレリと訓り名義抄にニタリ、アエタリとはあれどタウハレリい訓なし義未詳 ○黑心、神代紀上に見ゆ赤き心の對語 ○丹心、字書に赤心也無二濁一曰赤とあり ○劍、原本釵に作る田本に據て改む ○從南海、四國の沿岸より直に紀伊に至りしなるべし ○紀水門、紀國の水門とあれど何處とも定め難し、○與、田本になし ○探湯、允恭紀四年に盟神探湯とあり神明に誓ひて熱湯を探るを云後世の起請に同じ ○磯城川、大和國城上郡にあり今の泊瀬川なり ○濱、田本寮本應本湄に作る湄は字書に臨水如二眉也一とあり ○賜紀直等之祖、紀直は武内宿禰の母家にて殺さむとせし弟を救して母家の奴婢にせしなり原本紀の下伊の字あり田本北本寮本に據て削る

【十一年】劍池、大和國高市郡石川村 ○輕池、同郡大歌留村 ○鹿垣池、同郡飛鳥村 ○厩坂池、同郡厩坂の附近にあり厩坂の事三年並十五年紀に見ゆ ○諸縣君、諸縣は日向國諸縣郡なり舊事紀に豐國別命日向諸縣君祖とあり命は景行天皇の皇子 ○國色之秀、國内に勝れたる美人

【十三年】專使、專ら媛を召す爲の使なり ○九月中、集解に中は衍

内宿禰、於是二人各堅執而爭之、是非難決、天皇勅之、令請神祇探湯、是以武内宿禰與甘美内宿禰、共出于磯城川濱、爲探湯、武内宿禰勝之、便執横刀以毆仆甘美内宿禰、遂欲殺矣、天皇勅之令釋、仍賜紀直等之祖也、

十一年冬十月、作劍池、輕池、鹿垣池、厩坂池、是歲、有人奏之曰、日向國有孃子、名髮長媛、卽諸縣君牛諸井之女也、是國色之秀者、天皇悅之、心裏欲覓、

十三年春三月、天皇遣專使以徵髮長媛、秋九月中、髮長媛至自日向、便安置於桑津邑、爰皇子大鷦鷯尊、及見髮長媛、感其形之美麗、常有戀情、於是天皇知大鷦鷯尊感髮長媛而欲配、是以天皇宴于

なりとして削る
○桑津邑、攝津國豐島郡桑津鄉是なり今河邊郡に東西桑津村あり
○因、釋紀同(トモ)に作る
○上坐、田本類史上の字なし
○指、北本にはサシテとあり私記にサシクシタマヒテと訓り挿櫛賜ひての義なりとし古へ婚儀の時櫛を挿して其主を定めたればこの意を得て訓るなりといへどサシテと訓むが穩ならむ原本指を捎に作る楓本中本に據て改む
○伊奘阿藝云々、此歌は髮長媛の麗しき姿を橘の花蘂の中に含み籠れる實に譬へ汝は此媛を妃として榮えしめよと宣給ひしなり、伊奘は誘ふ意吾君は親しみて云、原本奘を裝に作る田本に據て改む、伽遇破志は香細(カグハシ)しなり、細しは名細し花細しなどの細しにて細かに行き渡るを云遇は原本愚に作る田本に據て改む下同じ、辭豆曳羅波は下枝等者にて羅は助辭、瀰菟遇利能は三栗之にて中にかゝる枕詞、府

後宮之日、始喚髮長媛、因以上坐於宴席、時撫大鷦鷯尊、以指髮長媛、乃歌之曰、伊奘阿藝、怒珥比蘆菟彌珥、比蘆菟瀰珥、和餓喩區瀰智珥、伽遇破志、波那多智麼那、辭豆曳羅波、比等未那等利、保菟曳波、等利委餓羅辭、瀰菟遇利能、那伽菟曳能、府保語茂利、阿伽例蘆塢等咩、伊奘佐伽麼曳那、於是大鷦鷯尊蒙御歌、便知得賜髮長媛、而大悅之、報歌曰、瀰豆多摩蘆、豫佐瀰能伊戒珥、奴那波區利、破陪鷄區辭羅珥、委遇比菟區、伽破摩多曳能、比辭餓羅能、佐辭雞區辭羅珥、阿餓許居呂辭、伊夜于古珥辭氏、大鷦鷯尊與髮長媛、既得交慇懃、獨對髮長媛、歌之曰、彌知能之利、古破儴塢等綿塢、伽未能語等、枳虛曳之介迺、阿比摩區羅摩區、又歌之曰、彌知能之利、古波儴塢等綿、阿羅素破儒、泥辭區塢之叙、于蘆波辭彌茂布、

一云、日向諸縣君牛仕于朝庭、年既老耆之不能仕、仍致仕、退於本土、則貢上己女髮長媛、始至播磨、時天皇幸淡路島、而遊獵之、於是天皇西望之、數十麋

鹿浮海來之、便入于播磨鹿子水門、天皇謂左右曰、其何麋鹿也、泛海多來、爰左右共視而奇、則遣使令察、使者至見皆人也、唯以著角鹿皮爲衣服耳、問曰誰人也、對曰、諸縣君牛、是年者之、雖致仕、不得忘朝、故以己女髮長媛而貢上矣、天皇悅之、卽喚令從御船、是以時人號其著岸之處曰鹿子水門也、凡水手曰鹿子、蓋始起于是時也、

保語茂利は通語に含隱也と言せり、花の將に開かむとする狀を表はせる語にて含み蔵れるなり花の中に含み蔵れる橘の實をまだ世ごれれる嬢子に喩へたり、同伽倻蘇塢等咩は麗(アカ)れる少女にて麗しき顏の少女と云意、伊奚佐伽麼曳那は伊岐に誘ふ意佐伽麼曳は釋紀に以髮長媛配于鶴鶏、而可榮也とありサカバエは榮えむの延びたるなり、那は命令の意の助辭にてネと云に同じ　○瀰豆多摩蘆云々、此歌の意は天皇の髮長媛を賜ふを謝し奉り依網池に尊を手繰つゝ其尊の延るを知す河俣江の菱殼の刺すをも知すしてありしは吾愚なりし故なりと申されしにて延けく不知には尊の彼方此方に延ふるが如く天皇の大御心映えさせ給をも知らずとの意刺しけく不知は菱殼の身を刺すをも知すにと云て刺すに髮長媛を指し給ことを含めて宣給ひしなり　瀰豆多摩蘆は水溜るにて池にかゝる枕詞、奴那波區利は尊繰りなり尊は沼に繩の如く生ずるもの故之を採るには繰り寄するを繰りと云破陪羅區辭羅耳は延(ハヘ)けく不知なり延へけくは延ふを云委遇比菟區は堰杙衝くなり堰に杙を打ちて水を塞く意、伽破摩多屯能は川俣江にて河內國若江郡にあり比辭餓羅能は菱殼之、佐辭雞區辭羅耳は刺しけく不知なり髮長媛を指し給ふを知らずとの意阿餓許屋呂辭は吾心にてシは强むる意の助辭伊夜子吉耳辭氏は瀰愚にしてなり　○得交、神代上に遘合とあるに同じ原本交を大に誤る田本應本に據て改む　○麋鹿、原本殿動に作る田本北本宮本に據て改む　○瀰知能之利云々、此歌の意は日向なる木蟋蟀子を鳴神の音を聞くが如くたゞ遙によそに聞き居りしを緣ありてかく慇懃にするが嬉しとなり、瀰知能之利は道の後なり備後を吉備乃美知之志利肥後を比乃美知乃志利と云が如し此は日向國を云日向は筑紫の南端なればなり古破儀は日向國の地名那珂郡に巨田村あり諸縣郡の堺なり或は是か伽耶能語等は電の如くに根唐屯之弁廼ぼ聞えけれどもなり雷の如く遙かに聞き給ひしとなり阿比摩區羅摩區は相枕纏くにて互に手枕を交はす意　○瀰知能之利云々、此歌の意は木蟋蟀子は遠き國より天皇に召されて來たれば他人に見えじと思ひしに少しも拒む心なく順ひ寢るがあはれに愛はしく思ふとなり瀰知の瀰の字原本彌を瀰に作る田本に據て改む下同じ、泥辭區塢之叙は寢しをそにて辭區は語氣を强むる意の助辭下の之も助辭なり于盧波辭瀰茂布は愛はしみ思ふなり　○(注)一云、原本云を曰に作る田本に據て改む北本には一書曰とあり　○老書、字書に老は七十曰耄とあり原本書を書に作る田本北本楓本に據て改む　○致仕、唐六典に年六十以上應致仕とあり老軀任に堪へずして官職を辭するを云　○麋鹿、抄に麋、於保之可(オホシカ)、鹿而大毛不、斑且冬至解角者也とあれど普通の鹿と見てよと應本に麋の字なし　○鹿子水門、播磨國賀古郡の湊なり　○左右、原本右の字なし諸本に據て補ふ　○泛海多來、原本海の上巨の字あり北本宮本に據て削る　○著角、原本角を爭に作る諸本に據て改む　○水手、舟子とも云ひ何れもカコと讀ずカコは楫子(カヂコ)の意鹿子の義ならねど言葉の同じきよりかく語傳へしなるべし

【十四年】縫衣工女、百濟風の衣服を縫ふ女工なり原本工を二に作る諸本一

十四年春二月、百濟王貢縫衣工女、曰眞毛津、是今來目衣縫之始祖也、

是歲、弓月君自百濟來歸、因以奏之曰、臣領己國之人夫百廿縣而歸化、然因新羅人之拒、皆留加羅國、爰遣葛城襲津彥、而召弓月之人夫於加羅、然經三年而襲津彥不來焉、

十五年秋八月壬戌朔丁卯、百濟王遣阿直岐貢良馬二匹、卽養於輕坂上廐、因以阿直岐令掌飼、故號其養馬之處曰廐坂也、阿直岐亦能讀經典、卽太子菟道稚郎子師焉、於是天皇問阿直岐曰、如勝汝博士亦有耶、對曰、有王仁者、是秀也、時遣上毛野君祖荒田別巫別於百濟、仍徵王仁也、其阿直岐者、阿直岐史之始祖也、

に據て改む
○來目衣縫、大和國高市郡に久米鄉あり此處に住しに依て來目衣縫と云
○弓月君、錄右京諸蕃に太秦公宿禰秦始皇十三世孫孝武王之後也男功滿王足仲彥天皇八年來朝男融通王（一曰弓月君）譽田天王十四年來朝率二百二十七縣百姓歸化獻金銀玉帛等物と見ゆ融通王は卽ち弓月君なり其子孫大に蕃衍す
○臣、原本目に作る田本北本寮本等に據て改む
○加羅國、神功紀四十九年（一九〇頁）に見ゆ

【十五年】阿直岐、記に阿知吉師に作る我國に歸化し子孫阿直史と稱す田本應本岐を伎に作る
○以阿直岐、原本以の字重複す田本北本楓本に據て削る　○經典、經書典籍を云卽ち儒書なり　○太子、原本太を大に作る諸本に據て改む　○王仁、記に和邇吉師とあり續紀四十に文忌寸最弟武生連眞象等云漢高帝之後云々後王狗轉至百濟久素王時聖朝遣使徵召文人久素王卽以狗孫王仁貢焉是文武生等之祖也とあり文筆を以て朝廷に仕へ其子孫は大和河內に蕃衍す河內志に王仁墓在交野郡藤坂村と云　○荒田別巫別、神功紀四十九年（一九〇頁）に見ゆ巫別は鹿我別とあり

【十六年】
○故所謂、田本に故の字なし恐くは衍
○書首、記に文首とあり本紀姓氏錄拾遺等に書文武生櫻野など見ゆるは何

十六年春二月、王仁來之、則太子菟道稚郎子師之、習諸典籍於王仁、莫不通達、故所謂王仁者、是書首等之始祖也、是歲、百濟阿花王薨、天皇召直支王、謂之曰、汝返於國以嗣位、仍且賜東韓之地而遣之、東韓者、甘羅城、高雉城、爾林城是也、

れも王仁の裔なり　○阿花王薨、阿花の薨年三國史記年表に阿莘（莘は花を誤れるなり）王十四年東晉安帝義熙元年とす此年に我が履中天皇六年に當り百廿年の差あり　○直支王、本紀八年に見ゆ三國史記に腆支王とあり我國に來朝せ[illegible]儘人質の如くなりて留れり此事三國史記に六年五月王與倭國結好以太子腆支爲質とありてよく合へり　○東韓之地、八年に見ゆ　○（注）廿羅高雜爾林、全羅南道蟾津江の西岸三國史記に六年五月王與倭國結好以太子腆支爲質とありてよく合へり　○東韓之地、八年に見ゆ　○（注）廿羅高雜爾林、全羅南道蟾津江の西岸なるべしと云　○平群木菟宿禰、武內宿禰の男　○的戶田宿禰、仁德紀十二年（二一八頁）に見ゆ、木菟宿禰と同族なれど父名未詳或は襲津彥の子か　○新羅人拒、人の字田本に之に作る　○弓月之人夫、上（二〇二頁）に見ゆ

八月、遣平群木菟宿禰、的戶田宿禰、於加羅、仍授精兵、詔之曰、襲津彥久之不還、必由新羅人拒而滯之、汝等急往之擊新羅、披其道路、於是木菟宿禰等進精兵、莅于新羅之境、新羅王愕之服其罪、乃率弓月之人夫、與襲津彥共來焉、

【十九年】吉野宮、志に吉野郡行宮古蹟五所一池一田莊志曰村雄略天皇二年幸吉野御馬瀨卽此一大瀧村一宮瀧村一下市村平城七世天子屢幸于此又御吉野村有大井川嵐山等名相傳後村上帝之行宮云々と見ゆ此時のは何れなるか未詳　○國樔人、神武紀に出づ　○醴酒、抄飲食部に醴古佐計一日一宿酒也箋注に按造酒司式云醴酒者米四升麴二升酒三升和合釀造得醴九升八中略與今俗呼阿萬左計少不同とあり濃き酒なり　○伽辭能輔珥云々、一首

十九年冬十月戊戌朔、幸吉野宮、時國樔人來朝之、因以醴酒獻于天皇、而歌之曰、伽辭能輔珥、豫區周塢菟區利、豫區周珥、伽綿蘆淤朋瀰枳、宇摩羅珥、枳虛之茂知塢勢、磨呂俄智、歌之旣訖、卽打口以仰咲、今國樔獻土毛之日、歌訖卽擊口仰咲者、蓋上古之遺則也、夫國樔者、其爲人甚淳朴也、每取山菓食、亦煮蝦蟆爲上味、名曰毛瀰、其土自京東南之隔山而居于吉野河上、峯嶮谷深、道路狹嶮、故雖不遠於京、本希朝來、然自此之後、屢參赴以獻土毛、其土毛者栗菌及年魚之類焉、

の意は橿生なる大樹の許に横臼を設けて歌ひ舞ひつゝ釀める大御酒ぞ吾大君美らに聞食させ給へとなり、伽辭能輔珥は樹生(カシフ)にて樹の生(オフ)る地なり、豫區周は横臼なり堅臼の反對にて木を横に穿りたるならむと契沖云、伽綿蘆淤朋瀰枳は釀(カ)める大御酒なり記には迦美斯意富美岐とあり、宇摩羅珥は顯宗紀に美の字を訓り美味の意、枳虛之茂知塢勢は聞し以ち飲せにてヲスはめすに同じ磨呂俄智は磨呂は我己ゝ云意、知は尊稱父と同じ、天皇を親み尊みて己が父と申奉れるなり我國體の尊さはかゝる古事古語にても知らる田本北本磨を摩に田本俄を餓に作る　○打臼以仰咲、記に擊二口鼓一爲二伎とあり酒を飲みて心樂しく口鼓を打て伎(ワザ)をなし謠ひ舞ふなるべし大嘗祭式に宮內官人引二吉野國栖十二人檜笛十二人一入レ自二朝堂院東掖門一就レ位奏二古風一とあるは此時の事濫觴たり　○土毛、令義解に謂二土地之所レ生爲一毛也とあり　○毎取山菓、田本山の字取の上にあり菓を果に作る　○蝦蟆、抄に蛙加閇流とありカヘルには數種ありこゝにては本草啓蒙に山蛤ヤマガヘルアカガヘルとあるものならむか　○嚥、字書に山峯也とあり　○栗菌、漢名栗樹耳小茸にして黑色を帶ぶ　○年魚、神功紀(一五頁)に出づ

【廿年】倭漢直、倭漢直等は大和河內に分居す大和なるを東漢直といひ河內なるを西漢直と云住する方角によりてしか云　○阿知使主、阿知は名使主は職名專ら外國へ使する職なり後姓の如くなれり阿知使主父子の高麗吳に使せしこと本紀に見ゆ續紀卅八坂上刈田麻呂等上表に臣等本是後漢靈帝之曾孫阿智王之後と見ゆ阿智王は阿知使主なり　○都加使主、雄略紀廿三年(二六六頁)に東漢直掬(ツカ)とあり是なり　○率己之黨類十七縣云々、續紀卅二寶龜三年四月坂上刈田麻呂等上言に先祖阿智使主輕島豐明宮馭宇天皇御世率十七縣人夫一歸化詔賜二高市郡檜前村一而居焉凡高市郡內者檜前忌寸及十七縣人夫滿地而居と見ゆ

【廿二年】(三月)大隅宮、攝津志云西成郡大隅宮古蹟在二西大道村一吉田氏曰大道村にあらで大坂の中なるべし　○(注)兄媛者、以下十三字集解云古本無蓋私記攙入　○(注)御友別命、錄右京皇別吉備臣の條に稚武彥命孫御友別命とあり　○省親、省は字書に視也察也とあり　○溫淸、禮記曲禮に爲二

(己酉)廿年秋九月、倭漢直祖阿知使主、其子都加使主、並率二己之黨類十七縣一而來歸焉、

(辛亥)廿二年春三月甲申朔戊子、天皇幸二難波一居二於大隅宮一。丁酉、登二高臺一而遠望、時妃兄媛侍之、望西以大歎、兄媛者、吉備臣祖御友別之妹也、於是天皇問二兄媛一曰、何爾歎之甚也、對曰、近日妾有戀父母之情、便因西望而自歎矣、冀暫還之、得省親歟、爰天皇愛兄媛篤溫淸之情、則謂之曰、爾不視二親一、既經多年、還欲定省、於理灼然、則聽之、仍喚淡路御原之海人八十人爲

人子一者謂冬温而夏清暑定而晨省とあるより出づ寒暖につけて親を思ふを云原本清を清に作るは非なり字書に清は冷也とあり

○定省、上の注に暑定而晨省とあるを採る朝夕に親を省み思ふなり

○御原、淡路國三原郡是なり

二四月二大津、卽ち難波津なり

○居高臺、此段は仁德天皇吉備の黑日賣が歸鄕を惜ませ給ひ事に託して淡路島に幸し吉備に赴かせ給はむとて歌詠ませ給へると相類す

○阿波泥辭摩云々、此御歌は皇媛の歸省を甚く惜みて詠ませ給ふにて一首の意は吾身と皇媛とは淡路島小豆島の相並びて在るが如く相隔びてありしを誰が片去らしめて散りぬにしたるか吾は此島の如く何時までも相並びてあらむものなとの意なり、阿波泥・原本泥を涙に作る北本察本に據て改む、異郡數多那羅弭・小豆島と相並べるないひ鯛は物の二つ雨なるル云田

水手、送于吉備、夏四月、兄媛自大津發船而往之、天皇居高臺望兄媛之船、以歌曰、阿波泥辭摩、異椰敷多那羅弭、阿豆枳辭摩、異椰敷多那羅弭、豫呂辭枳辭摩之魔儀伽多佐例阿羅智之、吉備那流伊慕塢、阿比瀰菟流慕能、秋九月辛巳朔丙戌、天皇狩于淡路嶋、是嶋者横海在難波之西、峯巖紛錯、陵谷相續、芳草萋蔚、長瀾凝渡、亦麋鹿兎鳩多在其嶋、故乘輿屢遊之、天皇便自淡路轉以幸吉備、遊于小豆嶋、庚寅、亦移居於葉田葉田、此云簸娜、葦守宮、時御友別參赴之、則以其兄弟子孫、爲膳夫而奉饗焉、天皇於是看御友別謹惶侍奉之狀、而有悅情、因以割吉備國封其子等也、則分川嶋縣封長子稻速別、是下道臣之始祖也、次以上道縣封中子仲彥、是上道臣、香屋臣之始祖也、次以三野縣封弟彥、是三野臣之始祖也、復以波區藝縣封御友別弟鴨別、是笠臣之始祖也、卽以苑縣封兄浦凝別、是苑臣之始祖也、卽以織部縣賜兄媛、是以其子孫於今在于吉備國、是其緣也、

本弭を珥に作る下同じ阿豆枳辭摩異郷敦多那羅弭は小豆島と淡路島と彌二並びにて上句と文(アヤ)をなせり小豆島は古は備前國兒島郡に屬す後講岐國に屬して郡となる、儒伽多佐例阿羅智之は誰が片去らしめ離散せしめたりとなり朕が兄媛と相耦びて居たるを誰が一人を片々へ去らしめ離れしめたるかとなりアラチのアラは神代紀に散去をアラケと訓るアラに同じくそれを多行にかけて活用したるなり、墓能の墓は原本莫に作る田本北本寮本に據て改む　(九月)峯巖紛錯云々、漢文の潤色なれば悉く古言にては訓み難し紛錯は峯の巖の互に重なり合へるか云　○薺蔚、毛詩曹風に薺分蔚分とあり字書に草木繁密貌と云ひモクシゲクは萬葉二にモクサクとある同意なり　○潺湲、字書に流水貌とあり　○葉田、備前國上道郡に蟠多郷あり若し此ならむには葦守も此地にあるべきなり　○葦守宮、備中國賀夜郡足守郷あり是ならむと云說あれど詳ならず今足守を距る一里許に土田々云ふ地あり或は土田は古く土(ハ)田と呼びしかを葉田とすれば備中國なり尙よく考ふべし　○爲膳夫、天皇の御饌聞食す時には御子の侍すること景行紀等に見えて膳夫は重き役なれば御友別の兄弟子孫自ら此役を勤めしならむ　○川島縣、仁德紀六十七年に於吉備中國川島河派有大虬令苦人云々とあり川島河は今の河邊川なりされば川島縣は此川島河に包まるゝ後の下道小田兩郡の地域或は之に淺口郡を加へたる地域か云るなるべし　○稻速別、國造本紀に下道國造輕島豐明朝御世封兄彥命亦名稻建別定賜國造とあり建は速の誤ならむ　○下道臣、下道は備中國下道郡なり天武紀十三年十一月吉備朝臣の姓を賜ふ　○上道縣、備前國上道郡なり國造本紀に上道國造輕島豐明宮御世元封中彥命兒多佐臣始國造と見え古は上道國と云り　○上道臣、續紀二十に天平寶字元年七月備前國造上道正道及上道斐太都賜姓朝臣とあり　○香屋臣、香屋は備中國賀夜郡是なり國造本紀に加夜國造輕島豐明朝御世上道國造同祖元封中彥命改定賜國造とあり古は加夜國と云　○三野縣、備前國御野郡なり國造本紀に三野國造輕島豐明朝御世元封弟彥命次定賜國造と見え古は三野國と云　○波區藝縣、國造本紀にも波久岐國見えたれど詳ならぬを國史綜覽卷二に國造紀の笠臣國造の笠臣は笠目の訛にて笠目の地は卽ち波區藝縣なり波久岐は初名にて笠目は後名なりとあり　○鴨別、神功紀に見ゆ　○笠臣、錄右京皇別に笠朝臣孝纖天皇皇子稚武彥命之後也應神天皇巡幸吉備國登加佐來山之時飄風吹放御笠天皇怪之鴨別命言神祇欲奉天皇故其狀爾天皇欲知其眞偽令獵其山所得甚多天皇大悅賜名賀佐とあり天武紀十三年十一月臣を改て朝臣を賜ふ原本臣を田に作る田本熱本に據て改む　○苑臣、史に見えず原本臣を丘に作る田本に據て改む　○織部縣、備中國賀夜郡服部郷より是なるべし

【廿五年】直支王薨、三國史記に腆支王十六年春三月王薨とあり宋武帝永初元年にて我允恭天皇九年庚申に當れり　○久爾辛、三國史記に久爾辛王腆支王長子とあり　○大倭、田本になし衍か　○木滿致、未詳　○(注、木羅斤資、神功紀四十九年に見ゆ　○天皇、田本天朝に作る

【廿八年】高麗王、三國史記に據るに高麗長壽王十一年なり

廿五年(田寅)、百濟直支王薨、卽子久爾辛立爲王、王年幼、大倭木滿致執國政、與王母相姦、多行無禮、天皇聞而召之(シ玉フ)、百濟記云、木滿致者、是木羅斤資討新羅時娶國往還貴國、承制天朝執我國政、權重當世、然天皇聞其暴召之、

廿八年(丁巳)秋九月、高麗王遣使朝貢、因以上表、其表曰、高麗王敎日本國也、時太子菟道稚郎子讀其表、怒之責高麗之使、以表狀無禮、則破其表、

卅一年秋八月、詔群卿曰、官船名枯野者、伊豆國所貢之船也、是朽之不堪用、然久爲官用、功不可忘、何其船名勿絶而得傳後葉焉、群卿便被詔以令有司、取其船材爲薪而燒鹽、於是得五百籠鹽、則施之周賜諸國、因令造船、是以諸國一時貢上五百船、悉集於武庫水門、當是時、新羅調使共宿武庫、爰於新羅停忽失火、卽引之及于聚船、而多船見焚、由是責新羅人、新羅王聞之、驚然大驚、乃貢能匠者、是猪名部等之始祖也、初枯野船爲鹽薪燒之日、有餘燼、則奇其不燒而獻之、天皇異以令作琴、其音鏗鏘而遠聆、是時天皇歌之曰、訶羅怒烏、之褒珥椰枳、之餓阿摩離、虛等珥苑句離、訶枳譬句椰、由羅能斗能、斗那訶能、異句離珥敷例多苑、那豆能紀能、佐椰佐椰、

〔卅一年〕枯野、五年紀一九七頁に見ゆ

○忘、原本忌に作る諸本に據て改む

○武庫水門、神功紀攝政元年（一八二頁）に出づ

○停、通證に停蓋與亭通用とあり亭は字書に留也行旅宿會之所館也とあり

○鏗然、鏗は字書に失氣也とあり

○猪名部、猪名は攝津國河邊郡の地名此地に住みしより猪名部と云

○餘燼、抄燼火部云燼（毛江久比）火餘木也

○不燒、原本に不燼に作る田本頌史に據て改む

○鏗鏘、字書に樂聲也とあり

○訶羅怒烏云々、一首の意は枯野の古材を以て鹽を燒き其餘燼を琴に作りて彈けば其音淡路由良の海中なる巖に生い立てる浸漬（ナヅ）の木の潮風に觸れて音立つる如く亮々と鳴響くなり之餓阿摩離は其が餘りなり所謂餘燼なり、訶枳譬句椰は搔き彈くやなりヤは助辭、由羅能斗能は由良の門のにて淡路國津名郡由良湊、斗那訶能は門中にて海上なり云、異句離珥敷例多苑は海の岩に振られ立つなりイクリは海中の巖を云フレタツは浪に振り搖られて生立つなり、那豆能紀能は紀傳に浸漬（ナヅ）之木となり凡て水に浸ることをナヅムと云へば海中に立てる木を浸漬（ナヅ）の木と云木とは草なも能めし植物の總名なればこゝの木は荻蘆ならむかといひ守部は海松ならむ八丈島の海の巖に海松と云木生じたるが浪に觸れて鳴ること眞に絃を搔くが如しと云原本紀能の下に紀の字あり田本熟本及頌史に據て削る

【卅七年】遣阿知使主都加使主於吳、通釋に雄略の御世の事のまぎれて傳へられしならむと云
○吳、三國時代の吳なり吳をクレといふは本紀の久禮波久禮志二人の者の吳國の嚮導をして至りしに因るかと云吳國は應神天皇十一年に滅び三十七年は西晉惠帝光熙元年なれば吳と云ふべきにあらねど尙舊號を以て書せるならむ
○兄媛弟媛、姉妹にて裁縫を善くするものなり
○吳織穴織、吳織は吳の織女穴織は漢(アヤ)の織女なるべしと云後世絹絁を吳服と云はこゝに因す通證補正に攝州豐島郡池田邑舊名吳服里有吳織穴織祠とあり
【卅九年】直支王、廿五年の紀に既に薨ずとあれば妹を遣はしゝは其遺命に由るならむ
【四十年】耶、田本邪に作る
○尤、字書に最也とあり
○無悒、字書に悒は憂也とあり憂ふることなしとなり
○欲知、原本知を和に作

卅七年春二月戊午朔、遣阿知使主、都加使主於吳、令求縫工女、爰阿知使主等、渡高麗國、欲達于吳、則至高麗、更不知道路、乞知道者於高麗、高麗王乃副久禮波、久禮志二人爲導者、由是得通吳、吳王於是與工女兄媛、弟媛、吳織、穴織、四婦女、

卅九年春二月、百濟直支王、遣其妹新齊都媛以令仕、爰新齊都媛率七婦女而來歸焉、

四十年春正月辛丑朔戊申、天皇召大山守命、大鷦鷯尊、問之曰、汝等者愛子耶、對言、甚愛也、亦問之、長與少孰尤焉、大山守命對言、不逮于長子、於是天皇有不悅之色、時大鷦鷯尊預察天皇之色、以對言、長者多經寒暑、既爲成人、更無悒矣、唯少子者、未知其成不、是以少子甚憐之、天皇大悅曰、汝言寔合朕之心、是時、天皇常有立菟道稚郎子爲太子之情、然欲知二皇子之意、故發是問、是以不悅大山守命之對言也、甲子、立菟道稚郎子爲嗣、卽日任大山守命令掌山川林野、以

る田本に據て改む　○爲嗣、記に宇遲能和紀郎子所知天津日繼也とあり　○令掌山川林野、記に大山守命爲山海之政とあり山川林野の事務を掌らしめ給ひしなり　○令知國事、記に大雀命執食國之政以白賜とあり一般の國務を掌らしめ給しなり

【四十一年】明宮、記に輕島之明宮とあり輕島は大和國高市郡大歌留の地なり舊都址要覽に白橿村大字大輕春日神社の邊と云　○時年一百一十歲、此天皇仲哀天皇九年庚辰に生れ給ひ此年百十一歲に坐ます一年の差あり北本に之を分注せし歲の字なし記には一百三十歲とあり又此紀陵墓を洩せり諸陵式に惠我藻伏岡陵在河內國志紀郡とあり陵墓要覽に南河內郡古市村大字雙田と見ゆ　○胷形大神、筑前國宗像郡宗像神社なり神代紀瑞珠盟約章（二三頁）に見ゆ　○有乞工女等、有は北本應本甲本に據て補ふ　○御使君、未詳　○津國、攝の字を加へたるは後の事なり　○吳衣縫、吳は大和國高市郡にあり吳人を住ましめしより地名となれり志に高市郡吳津孫神社在栗原村とあり栗原吳原語相似たり　○蚊屋衣縫、蚊屋は備中國賀陽郡なり

大鵠鶏尊、爲太子輔之、令知國事、

四十一年春二月甲午朔戊申、天皇崩于明宮、時年一百一十歲、（一云崩于大隅宮）

是月、阿知使主等自吳至筑紫、時胷形大神有乞工女等、故以兄媛奉於胷形大神、是則今在筑紫國御使君之祖也、既而率其三婦女、以至津國、及于武庫、而天皇崩之不及、卽獻于大鵠鶏尊、是女人等之後、今吳衣縫、蚊屋衣縫是也、

日本書紀卷第十

日本書紀卷第十一

大鷦鷯天皇　仁德天皇

大鷦鷯天皇、譽田天皇之第四子也、母曰仲姬命、五百城入彥皇子之孫也、天皇幼而聰明叡智、貌容美麗、及壯仁寬慈惠、四十一年春二月、譽田天皇崩、時太子菟道稚郎子、讓位于大鷦鷯尊、未卽帝位、仍諮大鷦鷯尊、夫君天下以治萬民者、蓋之如天、容之如地、上有驩心、以使百姓、百姓欣然、天下安矣、今我也弟之、且文獻不足、何敢繼嗣位登天業乎、大王者風姿岐嶷、仁孝遠聆、以齒且長、足爲天下之君、其先帝立我爲太子、豈有能才乎、唯愛之者也、亦奉宗廟社稷重事也、僕之不佞、不足以稱、夫昆上而季下、聖君而愚臣、古今之常典焉、願王勿疑、須卽帝位、我則爲臣之助耳、大鷦鷯尊對言、先皇

【卽位前紀】仲姬、品陀眞若王の御女
○五百城入彥皇子、景行天皇皇子
○貌容、集解舊紀容貌に作る
○太子、舊紀此上に皇の字あり
○夫君天下云々、以下天下安矣まで三十三字漢書高后紀の文を取れり
○蓋之、ウダキオホフは懷き覆ふなり
○文獻、論語八佾の注に文典籍也獻賢也と見ゆ
○風姿岐嶷、綏靖紀八一〇一頁)に見ゆ
○齒、齡也年齡を云北本應本に齒を齔に作る
○奉宗廟社稷云々、以下不足以稱までは漢書文帝紀を取て少く變更せり
○不佞、ミツナウシテは眞稜威(ミイツ)無くして

なるべし
○昆上而季下、字書に昆季謂兄弟也とあり
○常典、前本常の字を典の傍訓として常也とあり
○皇位者一日之不可空、文選勸進表に尊位不可久虛萬機不可久曠、虛之二日則尊位以殆曠之、汝長則萬機以亂とあるに據れり
○預選明德云々、以下令聞於國までは文選册魏公九錫文に先王並建明德、胙之以土分、之以民、崇其寵章、備其禮物とあるに本づく
○爲貳、貳は字書に副也とあり
○額田大中彦皇子、天皇の御兄原本中を仲に作る中本及集解に據て改む
○屯田及屯倉、諸國にある官田及官倉なり
○淤宇宿禰、諸本淤を游に作る出雲國造系圖に意宇足奴(スクネ)あり又前本北本等傍訓にオウとあるに據て改む
○皇太子、前本皇の字なし下同じ
○山守地、倭の屯田も山守部の掌る所なりとの意
○倭直祖麻呂、雄根津彦

謂、皇位者一日之不可空、故預選明德、立王爲貳、祚之以嗣、授之以民、崇其寵章、令聞於國、我雖不賢、豈棄先帝之命、輙從弟王之願乎、固辭不承、各相讓之、是時額田大中彦皇子、將掌倭屯田及屯倉、而謂其屯田司出雲臣之祖淤宇宿禰曰、是屯田者自本山守地、是以今吾將治矣、爾之不可掌、時淤宇宿禰啓于皇太子、皇太子謂之曰、汝便啓大鷦鷯尊、於是淤宇宿禰啓大鷦鷯尊曰、臣所任屯田者大中彦皇子距不令治、大鷦鷯尊問倭直祖麻呂曰、倭屯田者元謂山守地、是如何、對言、臣之不知、唯臣弟吾子籠知也、適是時、吾子籠遣於韓國、而未還、爰大鷦鷯尊謂淤宇曰、爾躬往於韓國、以喚吾子籠、其兼日夜而急往、乃差淡路之海人八十人爲水手、爰淤宇往于韓國、卽率吾子籠而來之、因問倭屯田、對言、傳聞之、於纒向玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彦尊定倭屯田也、是時勅旨、凡倭屯田者、每御宇帝皇之屯田也、其雖帝皇之子、非御宇者不得掌矣、是謂山守地非之也、時大鷦鷯尊遣吾子

の裔なり
○吾子籠、雄略紀二年に大和國造吾子籠宿禰とあり
○淤宇、舊紀此下に宿禰の二字あり
○差、字書に使也とあり
○八十人、原本八の字なし類史に據て補ふ
○玉城宮、垂仁天皇の宮所
○勅旨、公式令詔書式義解に詔書勅旨同是綸言云々尋常小事爲勅也とあり
○大鷦鷯尊乃知云々、大鷦鷯尊原本になし集解に據古本補とあるに從ふ
○將渡河、前本渡を度に作る
○度子、抄人倫部に渡子日本紀私記云渡子和太利毛利今按俗云和太之毛利一云和太利毛利とあり舊紀渡に作る下同じ
○知破揶臂苔云々、知破揶臂苔は千早人にて宇治の枕詞千早は千早振の千早に同じ敏速なる人は宇治の濟に來り棹を取て我を助けよとなり破揶鷄務臂苔は敏速なる人を云シは助辭なり和餓毛胡珥虛務は我許に來れとの意

籠於額田大中彦皇子、而令知狀、大中彦皇子更無如何焉、大鷦鷯尊乃知其惡、而赦之勿罪、然後大山守皇子每恨先帝廢之非立而重有是怨、則謀之曰、我殺太子、遂登帝位、爰大鷦鷯尊預聞其謀、密告太子、備兵令守、時太子設兵待之、大山守皇子不知其備兵、獨領數百兵士、夜半發而行之、會明、詣菟道將渡河、時太子服布袍、取檝、密接度子、以載大山守皇子而濟、至于河中、跳度子蹈船而傾、於是大山守皇子墮河而沒、更浮流之、歌曰、知破揶臂苔、于旎能和多利珥、佐烏刀利珥、破揶鷄務臂苔辭、和餓毛胡珥虛務、然伏兵、多起、不得著岸、遂沈而死焉、令求其屍、泛於考羅濟、時太子視其屍、歌之曰、智破揶臂等、于泥能和多利珥、和多利涅珥、多豆屢、阿豆瑳由瀰摩由彌、伊枳羅牟苔、虛々呂破望閑耐、伊斗羅牟苔、虛々呂破望閑耐、望苔弊破、枳瀰烏於望臂泥、須惡幣破、伊暮烏於望比泥、伊羅那鷄區、曾虛珥於望比、伽那志鷄區、虛虛珥於望臂、伊枳羅儒層區屢、阿豆瑳由瀰摩由瀰、乃葬于那羅山、既而興宮

○考羅漢、山城國綴喜郡に今河原村あり宇治川の下流
○智破瑯臂等云々、初二句上に出づ
○和多利淫斯多呂麻、渡り出に植てるにてデは堤なり植てるとは生立てあるん云
○阿豆瑳由瀰、梓弓なり抄に梓孫切云梓(阿都佐)木名樹之屬也とあり
○麻由瀰、抄に檀唐韻云檀(末由美)木名也とあり此木河堤に並立てれば同じく弓に作る梓と並べ歌ひ給へり
○伊和羅牟苦、伐らむとなりイは發語、梓檀を伐るといひて大山守命を斬ることを籠められしなり
○耆慮呂破望閇耐、心には思ふと雖もなり
○伊斗羅牟苦、取らむとなりイは同じく發語取るは伐取ることなるが底意には殺すことを籠めたり
○望者敗破、本方者なり本方末方と云は弓の緣語
○枳瀰鳥於望臂泥、君を思ひ出でゝなり君は御父應神天皇を指し奉る前本泥を涅に作る下同じ
○幽墓破、末方者なり

室於菟道而居之、猶由讓位於大鷦鷯尊、以久不即皇位、爰皇位空之既經三載、時有海人、賫鮮魚之苞苴、獻于菟道宮也、太子令海人曰、我非天皇、乃返之令進難波、大鷦鷯尊亦返以令獻菟道、於是海人之苞苴鯵於往還、更返之取他鮮魚而獻焉、讓如前日、鮮魚亦鯵、海人苦於屢還、乃棄鮮魚而哭、故諺曰、有海人耶、因己物以泣、其是之緣也、太子曰、我知不可奪兄王之志、豈久生之煩天下乎、乃自死焉、時大鷦鷯尊聞太子薨、以驚之、從難波馳之到菟道宮、爰太子薨之經三日、時大鷦鷯尊摽擗叫哭不知所如、乃解髮跨屍、以三呼曰、我弟皇子、乃應時而活、自起以居、爰大鷦鷯尊語太子曰、悲兮、惜兮、何所以歎白、近之、若死者有知、先帝何謂我乎、乃太子啓兄王曰、天命也、誰能留焉、若有向天皇之御所、具奏兄王聖之且有讓矣、然聖王聞我死、以急馳遠路、豈得無勞乎、乃進同母妹八田皇女曰、雖不足納采、僅充掖庭之數、乃且伏棺而薨、於是大鷦鷯尊素服、爲之發哀、哭之甚慟、仍葬於

伊暮烏於望比泥は妹を思ひ出でゝなり契沖云大山守皇子の同母妹大原皇女澍甲皇女あり或は太子の妃たるかと云り、伊羅那鷄區は物語類にいらなく泣きいらなくふるまひ等あるいらなくに同じそれを延ばしてイラナケクと云るにて悲しくを悲しけくと云に同じ守部氏は苛痛くなりと云ひ敷田氏は苛泣くなりと云たれど尙よく考ふべし　○曾虛耳於望比、彼處に思ひなり　○伽那志鷄區、悲しけくなり　○虛虛耳於望臂、此處に思ひなり　○伊枳羅儒層區屢、伐らずぞ來るなり、大山守皇子を殺さむと思ひしかど御父君の御靈いかがと思ひ出で妹君達の愁傷を痛切に思ひ出でゝ殺さず流るゝまゝにして來れりとなり　○葬于那羅山、陵墓要覽云添上郡佐保村大字法蓮寺　○興宮室於菟道、宮址は今久世郡宇治町にあり宇治神社又離宮八幡宮と稱す　○賞、字書に齎俗作賞とあり　○鮮魚、鮮は字書に生魚也とありアサラケキは新鮮の意　○苞苴、記に大贄に作る抄調度部厨膳具に唐韵云苞(日本紀私記云於保邇倍俗云阿良萬岐)裹魚肉也とあり　○鮓、抄龍魚部に野王案鮓(和語云阿佐流)魚肉爛也とあり鮓は鮧と同じ　○有海人耶云々、有海人耶は海人にあれやなり此諺は常には已が無き物の欲くて得難きに泣く習なるに海人は已がもてる物を人に献ることの得難きに愁泣くとて常の習と反對なるを云　○摽擗、景行紀四十年に出つ　○叫哭、垂仁紀九十九年に出づ　○解髮跨屍以三呼、通證云是我邦招魂之法也　○納采、原本采を綵に作る前本に據て改む儀禮士昏禮注に使人納其采擇之禮とあり夫家より女家に正式に女を娶る由を申入れて取定むる禮なり　○素服、アサノミソと訓るは麻の御衣の義にて喪服なり喪葬令に凡天皇爲本服二等以上親喪服錫紵義解に錫紵者細布卽用淺墨濃とあり　○菟道山上、諸陵式に宇治墓菟道稚郎皇子在山城國宇治郡とあり陵墓要覽云宇治村大字菟道

【元年】卽天皇位、大日本史に水鏡皇年代略記並爲時年二十四與本書不合とあり(應神紀十三年參照))　○皇大后、北本楓本應本大を太に作る　○高津宮、攝津志に東生郡大阪安國寺坂北有小祠此其古蹤とあり今大阪市東區餌差町高津中學校の西南隅に宮址の碑石を建つ　○弗埀色、埀は抄天地部水土類に唐韻云埀(和名之良豆知)白土也とありウハヌリセズは荒壁のまゝにて上塗せざるを云

菟道山上

元年春正月丁丑朔己卯、大鷦鷯尊卽天皇位、尊皇后曰皇大后、都難波、是謂高津宮、卽宮垣室屋弗埀色也、桷梁柱楹弗藻飾也、茅茨之蓋弗剪齊也、此不以私曲之故留耕績之時者也、初天皇生日、木菟入于產殿、明旦譽田天皇喚大臣武內宿禰、語之曰、是何瑞也、大臣對言、吉祥也、復當昨日臣妻產時、鷦鷯入于產屋、是亦異焉、爰天皇曰、今朕之子與大臣之子同日共產、並有瑞、是天之表焉、以爲取其鳥名、各相易名子、爲後葉之契也、則取鷦鷯名、以名太子、曰大鷦鷯皇子、取木菟名號

○桷 説文云桷、抄屋處部に桷は榱椽注云桷（和名抄）屋四阿大椽也とあり棟より檐に直す材なり屋は唐韻云屋（宇都波利）棟也とあり桂は說文云桂（波之良）桧也とあり ○弗藻餝、論語公冶長に藻梲とあり藻は水草梲は梁上の短柱梲に水草の彫刻をするは防火の厭とするなり餝はかざりなりミガキカザラズは磨き餝らずに實素にする也云 ○茅茨之蓋、字書に茅は菅也茨は以茅蓋屋也とあり菅草の屋根なり云 ○弗剪齊、韓非子に茅茨不剪とあり軒の端を剪り齊へざるなり云 ○績、原本北本績に作る前本楓本に據て改む 北本中本に據て改む ○臣、ヤツコラマのラマは語調解に附て云爾と聞えたりとあり ○鵄鴨、神代紀上に出づ ○並有瑞、原本並を敏に作る前本應本に據て改む ○平群臣、平群は大和國平群郡に住るに依て氏の名とす天武天皇十三年に朝臣を賜ふ ○太歲、原本太を大に作る前本に據て改む

大臣之子、曰木菟宿禰、是平群臣之始祖也、是年也太歲癸酉、

【二年】磐之媛命、葛城襲津彦の女前本之の字なし ○皇后年大兄去々、原本に皇の字なし北本楓本に據て補ふ ○住吉仲皇子、記に墨江之中津王に作る ○大草香皇子、記に大日下王に作る ○磐梭皇女、履中天皇の皇后と爲り給ふ

【四年】高臺、記には高山とあり ○詠德之音、文選四子講德論に見ゆ意は訓の如し ○家々、前本毎家に作る ○康哉之歌、尚書益稷に股肱良哉歷事康哉とある を採れり原本之の字なし前本應本に據て補ふ ○億兆、字書に萬々曰億萬億曰兆とあり國民の數をさか云

二年春三月辛未朔戊寅、立磐之媛命爲皇后、皇后生大兄去來穗別天皇、住吉仲皇子、瑞齒別天皇、雄朝津間稚子宿禰天皇、又妃日向髮長媛生大草香皇子、幡梭皇女、

四年春二月己未朔甲子、詔羣臣曰、朕登高臺以遠望之、烟氣不起於域中、以爲百姓既貧、而家無炊者、朕聞、古聖王之世、人々誦詠德之音、家々有康哉之歌、今朕臨億兆、於茲三年、頌音不聆、炊烟轉疎、卽知五穀不登、百姓窮乏也、封畿之內、尙有不給者、況乎畿外諸國耶、三月己丑朔己酉、詔曰、自今之後、至于三載、悉除課役、以息百姓之苦、是日始之、黼衣鞋履不弊、盡不更爲也、溫飯煖羹不酸飯不易也、削

心約志、以從事乎無爲、是以宮垣崩而不造、茅茨壞以不葺、風雨入隙而沾衣、被星辰漏壞而露、牀蓐是後風雨順時、五穀豐穰、三稔之間、百姓富寬、頌德既滿、炊烟亦繁、

○封畿、前本封を邦に作る　○自今之後、前本之を以に作る　○課役、課は貢物役は勞役　○以息百姓之苦、原本以の字なし前本に據て補ふ　○黼衣、字書に古禮服刺繡如斧形者曰黼とあり黼衣はその模樣の附ける衣服にて古へ漢土の天子の服なり　○鞋履、前本應本鞋を維に北本應本履を屨に作る抄葉束部に鞋は線鞋絲鞋等見え何れも久都と訓じ箋注に按說文鞋作鞵釋名鞵解也著時縮其上如履然解其上則舒解也後世所謂都毛奴支是也とあり履は唐韻云革曰履(久豆)とあり　○弊、前本原本幣に作る北本應本に據て改む　○酸鹹、スヘルは酸味を生じて損へるを云　○倒心約志云々、此二句十字は六韜に出づ　○風雨入隙、記に據に屋根朽ちて雨漏りしを云前本北本隙を蹊に作るは古字なり　○星辰漏壞、屋根の朽ちたるを云　○蓐、前本にミマシキと訓り御身敷の義なり　○炊烟亦繁、延喜六年の竟宴歌に「たかどのに登りて見れば天の下四方に烟りて今ぞ富みぬる」(藤原時平)とあるはこゝを詠めるなり

【七年】

○豈有愁乎、前本豈有を更無に作り豈有を傍書とし乎を焉に作る　○天之立君云々、此句は荀子に據り次の以百姓爲本云々百姓富之則朕富也などの語は左傳書經論語等に據て句を作りたれど單なる潤色に非ずして天皇の大御心を寫し奉りしなり　○定壬生部、ミブベは御產(ミウブ)部にて皇子出生の時產殿に仕へ奉る部民なり定とは御名代の民として壬生部の名を負せた

七年夏四月辛未朔、天皇居臺上而遠望之、烟氣多起、是日語皇后曰、朕既富矣、豈有愁乎、皇后對諮、何謂富焉、天皇曰、烟氣滿國、百姓自富歟、皇后且言、宮垣壞而不得修、殿屋破之衣被露、何謂富乎、天皇曰、其天之立君、是爲百姓、然則君以百姓爲本、是以古聖王者、一人飢寒、顧之責身、今百姓貧之、則朕貧也、百姓富之、則朕富也、未之有百姓富之君貧矣、秋八月己巳朔丁丑、爲大兄去來穗別皇子定壬生部、亦爲皇后定葛城部、九月、諸國悉請之曰、課役並免、既經三年、因

る長兵を宅るを云云に姪の時字なり記に爲二女子伊邪本和氣命之御名代一定二壬生部一とあり

○葛城部、記に爲二大后石之日賣命之御名代一定二葛城部一とあり葛城は皇后の本居の地なり

○黔首、漢書楊文志の注に秦謂二人爲一黔首一言其頭黑也とあり國民を云

○鰥寡、抄人倫部に鰥名云無妻曰鰥和名也毛乎又無夫曰寡和名夜毛女とあり

○獲罪于天、天をキミと訓めどこゝは君の意に非ずアメと訓る方當れり【十年】甫、字書に方始也とあり ○不領、領は合に同じウナガサレズシテは促されずしてなり上よりの命を受けずしての意 ○簀、抄器皿部篇の條に漢語抄云阿自賀今按又用二簀字一と見えたるを箋注に阿自賀者織二草爲一器以盛二土者一則用二簀字一爲允とあり簀簀に箋注に本是一字と云 ○競、原本爭に作る前本に據て改む ○聖帝、ヒジリは日知（ヒシリ）にて日の如く知しめす意

【十一年】乏、前本之に作る

○不駃、水の流通よからぬを云駃は字書に與快同とあり

○霖雨、抄天地部に霖雨名霖雨云霖（和名奈加阿女）二日以上雨也とあり

○十月、引南水、通證に青島氏曰和州河州之流水也とあり

○掘江、是卽ち難波堀江なり浪速上古圖說に今の

此以宮殿朽壞、府庫已空、今黔首富饒、而不拾遺、是以里無鰥寡、家有餘儲、若當此時、非貢稅調以修理宮室者、懼之其獲罪于天乎、然猶忍之不聽矣、

十年冬十月、甫科課役、以構造宮室、於是百姓之不領、而扶老携幼、運材負簀、不問日夜、竭力競作、是以未經幾時、而宮室悉成、故於今稱聖帝也、

十一年夏四月戊寅朔甲午、詔羣臣曰、今朕視是國者、郊澤曠遠、而田圃少乏、且河水橫逝、以流末不駃、聊逢霖雨、海潮逆上而巷里乘船、道路亦涅、故群臣共視之、決橫源而通海、塞逆流以全田宅、冬十月、掘宮北之郊原、引南水以入西海、因以號其水曰掘江、又將防北河之澇、以築茨田堤、是時有兩處之築、而乃壞之難塞、時天皇夢、有神誨、

之曰、武藏人强頸、河內人茨田連衫子、（衫子、此云菅呂毋能古、）二人以祭於河伯、必獲塞、則覓二人而得之、因以禱于河神、爰强頸泣悲之、沒水而死、乃其堤成焉、唯衫子取全匏兩箇、臨于難塞水、乃取兩箇匏投於水中、請之曰、河神祟之、以吾爲幣、是以今吾來也、必欲得我者沉是匏、而不合泛、則吾知眞神、親入水中、若不得沉匏者自知僞神、何徒亡吾身、於是飄風忽起、引匏沒水、匏轉浪上而不沉、則瀰々汎以遠流、是以衫子雖不死、而其堤且成也、是因衫子之幹、其身非亡耳、故時人號其兩處、曰强頸斷間、衫子斷間也、是歲新羅人朝貢、則勞於是役、

上町と天滿の鄕の間なる大川なり古大和川河內川其餘の小川より難波入江に落合ふ水風雨烈敷時は山城河より流るゝ水と入江にさし込み津の國河內兩邊の田圃を害ひし故入江より郊原を掘切り南水を西の海へ導しなり附て云將防北河之澇以築茨田堤と云は山城河の水今の河內茨田郡へ溢れ込み川尻快からざる故堤を築き河水を導き給しなりとあり

○澇、字書に淹也潦に同じとあり名義抄にはオホ水と訓み字類抄には張をコムと訓り水の多くして滯るをいふ俗に人ごみこみ合ふ等のコミと同じく籠る意か　○茨田堤、河內國茨田郡なり式に同郡堤根神社あり今北河內郡に屬す　○築、下文に所謂斷間なり築は其斷間の築くべき處を云信友は築而は斷間の誤寫ならむと云り　○茨田連、錄右京皇別に茨田連神八井耳命男彥八井耳命之後とあり天武天皇十三年宿禰の姓を賜ふ　○河伯、抄天地部に河伯兼名苑云河伯一名水伯（河神也和名加波乃賀美）とあり此に河伯とあるは眞の神にあらずして蛟の類なり　○獲塞、政治要略所引には獲塞擁に作る　○全匏、抄術藝部に拍浮文選注云拍浮（拍打也今案俗云於布須是也）箋注に按仁德紀全匏於不之比佐古謂可抱以拍浮水泳也之匏也とあり　○今吾來、前本今を令に作る　○不合泛、前本合を令に作る　○瀰々、字書に水疾聲一曰水流貌或作瀰とあり原本瀰に作る前本北本應本に據て改む　○汎、字書に浮貌也とあり原本沉に作る前本に據て改む　○且成也、前本且を亦に作る　○强頸斷間、攝津志に東成郡絕間池在千林村今尙稱絕間古來屬河州茨田郡とあり　○衫子斷間、河內志に茨田郡太田村とあり

【十二年】令射、イクハシムは射食はしむなり矢の的に食ひ入るを云　○不得通的、前本通の上に射の字あり

十二年（甲申）秋七月辛未朔癸酉、高麗國貢鐵盾鐵的、八月庚子朔己酉、饗高麗客於朝、是日集群臣及百寮、令射高麗所獻之鐵盾的、諸人不得

○的臣、準神紀十六年に見ゆ（二〇二頁）○射殺的而通焉、而の字前本北本に據て補ふ○見之、前本之の字なし○勝巧、前本巧を工に作る○的戸田宿禰、記傳に此人初名盾人にて此時に戸田と賜へる如くあるは誤ならむ初名戸田にて、此時盾人と賜へるなるべしと云り○小泊瀨造、記に神八井耳命者小長谷造祖也とあり○賢遺臣、賢名の世に遺るとの意ならむ原本臣の下也の字あり前本に據て削る○栗隈縣、山城國久世郡栗隈郷なり○豐年之、原本之を也に作る前本に據て改む

通的唯的臣祖盾人宿禰射殺的而通焉時高麗客等見之畏其射之勝巧共起以拜朝明日美盾人宿禰而賜名曰的戸田宿禰同日小泊瀨造祖宿禰臣賜名曰賢遺（賢遺此云左河之能宮里）臣冬十月掘大溝於山背栗隈縣以潤田是以其百姓每豐年之

（乙酉）十三年秋九月始立茨田屯倉因定春米部冬十月造和珥池是月築横野堤

（丙戌）十四年冬十一月爲橋於猪甘津卽號其處曰小橋也是歲作大道置於京中自南門直指之至丹比邑又掘大溝於感玖乃引石河水而潤上鈴鹿下鈴鹿上豐浦下豐浦四處郊原以墾之得四萬餘頃之田故其處百姓寬饒之無凶年之患

【十四年】猪甘津、摂津國東生郡なり今大阪市東成區猪飼野町に當る　○小橋、今ヲバセと呼ぶと云　○京中、抄職官部に右京職美濃乃美作止豆加佐とあり官位令左右京大夫の傍訓にもミサトと訓ミサトは御里の義なるべし　○丹比邑、河内國丹比郡あり後丹南丹北八上の三郡に分る式に丹比郡丹比神社あり今丹南郡丹治井村に在り此地なるべし　○感玖、河内國石川郡錦日郷あり式に同郡感日神社見ゆ今南河内郡中村河内村赤坂村等の内ならむと云　○石河、河内志に安宿郡石川自古市郡流經志紀郡界至片山云々至大縣界與土師川合とあり　○上下鈴鹿、所在未詳　○上下豐浦、河内國河内郡豐浦郷あり今中河内郡枚岡村大字豐浦出雲井に當る　○四萬餘頃、頃に頃證に唐令云畝百爲頃後世借代字とあり此事は孝德紀大化二年の條に詳に見ゆ原本頃を項に作る諸本に據て改む

【十六年】宮人、後宮職員令義解に婦人仕官者之惣號也とあり
○桑田、丹波國桑田郡桑田鄉是なり
○舍人、左右に親近する人を云
○棄、前本及類史妨に作る
○卽歌曰、前本及類史仍以歌問之曰に作る
○瀰儺曾虛赴、水底經に次句にかゝる枕詞
○播磨國造、國造本紀に針間國造志賀高穴穗朝稻背入彥命孫伊許自別命定賜國造とあり
○瀰箇始報、播磨風土記に據るに瞋潮にて餝磨郡の地名
○以播區娜輸、巖下すなり嶺より谷に巖を下すを云原本娜を郷に作る前本北ゝに據て改む
○伽之古俱等望、畏くともなり
○不和、アマナハズは諾はぬを云
○聞之、前本及類史になし
○玖賀媛之墓、所在不詳
【十七年】砥田宿禰、前本砥田を盾人に作る是なるに似たり

（戊子）十六年秋七月戊寅朔、天皇以宮人桑田玖賀媛、示近習舍人等曰、朕欲愛是婦女、苦皇后之妬不能合、以經多年、何徒棄其盛年乎、卽歌曰、瀰儺曾虛赴、於瀰能烏苦咩烏、多例椰始儺播務、於是播磨國造祖速待獨進之、歌曰、瀰箇始報、破利摩波椰摩智、以播區娜輸、伽之古俱等望、阿例椰始儺破務、卽日以玖賀媛賜速待、明日之夕、速待詣于玖賀媛之家、而玖賀媛不和、乃强近帷內、時玖賀媛曰、妾之寡婦以終年、何能爲君之妻乎、於是天皇聞之、欲遂速待之志、以玖賀媛副速待、送遣於桑田、則玖賀媛發病死于道中、故於今有玖賀媛之墓也、

（己丑）十七年、新羅不朝貢、秋九月、遣的臣祖砥田宿禰、小泊瀨造祖賢遣臣、而問闕貢之事、於是新羅人懼之、乃貢獻調絹一千四百六十匹、及種種雜物幷八十艘、

（庚午）廿二年春正月、天皇語皇后曰、納八田皇女將爲妃、時皇后不聽、爰天皇歌以乞於皇后曰、于磨臂苔能、多菟屢虛等太氐、于磋由豆流、多

曳麼苑餓務珥、奈羅陪氏毛餓望、皇后答歌曰、虛呂望虛曾、赴多幣茂豫
者、瑳用廼虛烏、那羅陪務者瀰破、箇辭古者呂箇茂、天皇又歌曰、於辭氏
屢、那珥破能瑳者能、那羅弭破莽、那羅陪務苦虛屑、曾能古破阿利鷄梅、
皇后答歌曰、那苑務始能、譬務始能虛呂望、赴多幣者氏、箇區瀰夜儀利
破、阿珥豫區望阿羅儒、天皇又歌曰、阿佐豆磨能、避箇能烏瑳箇烏、箇多
那者珥、瀰致喩區茂能茂、多愚譬氏序豫枳、皇后遂謂不聽、故默之亦
不答言、

○種々雜物、クサハヒと訓るハヒは多き狀を云るか此語源氏蓬生等に見ゆ

【廿二年】八田皇女、天皇の異母妹なり

○不聽、前本にウケユルサズと訓り原本にウナツルサヌとあるナツはケユの訛なるべし

○于磨曾苦能、貴（ウマ）人のにて御自を宣給ふ

○多竟婆素尊太氏、立つる言立なり

○于羅山豆流、神功紀堀政元年に儲弦をウサユツルと訓り豐備の弦を云

○多曳麼苑餓務珥、顯えなば繼むにゝて弦のきれなばかけがひにせむとの意原本曳麼を由磨に作る

眞本に誤て改む　○奈羅陪氏毛餓望、並てもがもにて八田皇女をば皇后と竝べ置かむと欲すとなり　○虛呂望虛曾云々、衣なぞなら夜二重に重ねても宜しかるべけれど人はさはあるべからずとなり契沖云こそなきにて結ぶこと天智紀にも例あり萬葉には多しサヨトコは眞夜床にて夜の衾を云そを並べむと欲する君は畏き哉にて此の畏きは俗に空おそろしと云恐しの意、ロは助辭なり原本用を由に作る前本及原本の傍書に據て改む箇の字前本に介に作る下同じ　○於辭氏歷云々、オシテは押照にて難波の枕詞、並濱は濱の並べるを云ひ並べむとこそとは夜床を並べむとの意其子は八田皇女を指せり　○那苑務始能云々、夏蟲の火はムシの衣を云む鶯の序ムシは苧にて麻の一種なり苧衣を二重着てある如く幾人も一人の周圍を取圍みなるはいかで宜しからむや宜しからずにて要重れは宜しからずとの意なり　○阿佐豆磨能云々、朝妻は大和國葛上郡の地名ヒカも地名なるべしその小坂を越ゆるに一人にて泣きつゝ越えむより道連れと語らひつゝ越ゆるが宜からむと云るにて皇后も八田皇女と相竝びて親しみ給が宜からむとなり

【卅年】（九月）熊野岬、紀伊國牟婁郡にあり上に出づ

○御綱葉、柏の葉に三岐一ツの鋒ありて尖れ

卅年秋九月乙卯朔乙丑、皇后遊行紀國到熊野岬、卽取其處之御綱
葉一箇、始婆而還、於是天皇伺皇后不在、而娶八田皇女納於宮中、時皇

る故に三角の義を取りて名づけたりと云記に大后爲將豐樂而於採御綱柏幸行木國とあり○於是、原本是の下日の字あり前本に據て削る○葉濟、景行紀に柏濟とあり記に御津前と見ゆ○大津、應神紀廿二年に見ゆ二〇五頁）○那珥波譬苔云々、難波人よ鈴船の綱執りて引け腰までも海中に入りて船出せむとする御船を疾く引き止めよとなり鈴船は私記に以鈴餝舟也とあり御船に綱延へて鈴を著けしを云腰なづみは腰まで水に沒りて行惱むを云○泝江、記に泝於堀江隨河而上山代とあれば堀江より淀川を泝りて山城國へ上られしなり○夜莽之呂珥云々、いざ疾く急ぎて山城にて早く追付けよ鳥山よ我思ふ妻卽ち皇后の大和の本居に還り給はぬ先に疾く追付き難波の都に還り坐すべく申奉れとなりイシケのイは發語シケは及(シ)けなり追及ぶを云○山背河、今の木津川なり

后到難波濟、聞天皇合八田皇女而大恨之、則其所採御綱葉投於海、而不著岸、故時人號散葉之海曰葉濟也、爰天皇不知皇后忿不著岸、親幸大津待皇后之船、而歌曰、那珥波譬苔、須儒赴泥苔羅齊、許辭那豆瀰、曾能赴尼苔羅齊、於朋瀰赴泥苔禮、時皇后不泊于大津、更引之泝江、自山背廻而向倭、明日天皇遣舍人鳥山、令還皇后、乃歌之曰、夜莽之呂珥、伊辭鷄苔利夜莽、伊辭鷄之鷄、阿餓茂赴苑摩珥、伊辭枳阿波牟伽茂、皇后不還猶行之、至山背河而歌曰、苑藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、箇破能朋利、涴餓能朋例麼、箇波區莽珥、多知瑳箇踰屢、毛毛多羅儒、椰素麼能紀破、於朋耆瀰呂箇茂、卽越那羅山望葛城歌之曰、苑藝泥赴、椰莽之呂餓波烏、瀰椰能朋利、和餓能朋例麼、阿烏珥豫辭、儺羅烏輸疑、烏陀氏、夜莽苔烏輸疑、和餓瀰餓朋辭區珥波、箇豆羅紀多伽瀰椰、和藝幣能阿多利、更還山背、興宮室於筒城岡南而居之、冬十月甲申朔、遣的臣祖口持臣、喚皇后、一云、和珥臣祖口子臣、爰口持臣至筒城宮、雖謁皇后而默之不

○菟藝泥赴云々、嫉きまゝに天皇の御意に背きて大和の本居へ還らむとて山城川を泝りつゝも川岸に生ふる榛の木の榮ゆるを見れば天皇を慕ひ奉る心深しとなりツギネフは記傳に繼苗生ならむ山の木を伐りたる跡に繼ぎて植うべき苗を蒔き生すべき地を云苗の約ネなり繼苗生山と續く枕詞なりと云河隈は川の曲りこもれる所モゝタラズは百足らずにて八十の枕詞ヤソハノキは八枝榛なり榛の木のことは神武紀戊午年に見ゆこゝは榛を天皇に喩へまゐりオホキミロカモは大君哉の意にてロは助辭なり前本節に介に作る下同じ

○越那婦山望葛城歌之間、紀に自山代廻到坐那具山歌曰とあり

○菟藝泥赴云々、山城河を泝り來て此奈良坂より見渡せば我見まほしき國我家の邊は更に此處より奈良を過ぎ大和を越えて彼方の先にありとの意アフニヨシは青土よしにて奈良の枕詞ヲタテは私記に小楯也とあれど或は地

答、時日持臣沽雪雨、以經日夜、伏于皇后殿前而不避、於是日持臣妹國依媛仕于皇后、適是時侍皇后之側、見其兄沽雨而流涕之、歌曰、

挪莽辭呂能、菟々紀能瀰挪珥、茂能莽烏輸、和餓齊烏瀰例麼、那瀰多愚摩辭茂、時皇后謂國依媛曰、何爾泣之、對言、今伏庭請謁者妾兄也、沽雨不避、猶伏將謁、是以泣悲耳、時皇后謂之曰、告汝兄令速還、吾遂不返焉、日持則返之復奏于天皇、十一月甲寅朔庚申、天皇浮江幸山背、時桑枝沿水而流之、天皇視桑枝歌之曰、菟怒瑳破赴、以破能譬謎餓、飫朋呂伽珥枳許瑳怒、于羅愚破能紀、豫屢麻士枳、箇破能區莽愚莽、豫呂朋譬喩玖伽茂、于羅愚破能紀、明日乘輿詣于筒城宮喚皇后、皇后不肯參兒、時天皇歌曰、菟藝泥赴、挪摩之呂謎能、許久波茂知、于智辭於朋泥、佐和佐和珥、儺餓伊幣劑虛曾、于知和多須、椰餓波曳儺須、企以利摩莽區例、亦歌曰、菟藝泥赴、夜莽之呂謎能、許玖波茂知、于智辭於朋泥、泥士漏能、辭漏多娜武枳、摩箇儒鷄麼虛曾、辭羅儒等茂伊波梅、時皇后

令奏言、陛下納八田皇女爲妃、其不欲副皇女而爲后、遂不奉見、乃車駕還宮、天皇於是恨皇后大忿、而猶有戀思、

名ならむ大和を過ぎの大和は城下郡大和鄕にて奈良より續ける地なりワガミガホシクニハは我見欲し國カツラギタカミヤは葛城高宮にて皇后の本居の地なり　(十月)筒城岡、山城國綴喜郡なり山城志に筒城宮自多多羅村至水取村地名尙存とあり前本岡を崗に作る　○的臣、皇后と同族なり記に此時天皇より皇后につかはされし大御歌二首を載せたり　○默、原本點に作る諸本に據て改む　○揶莽辭呂能云々、山城の筒城の宮に物申す我兄を見れば涙蒲(グマ)しきことよと云なり前本愚を遇に作る　(十一月)沁、原本江に誤る前本北本に據て改む沁は字書に同沿俗省とあり　○菟怒瑳破赴云々、磐之媛が餘りに强情にて天皇の御言をも穩かにうけ入れず執拗なるが如く桑の枝が此處彼處の河の隈々に引懸りゆる〳〵と流れ行く哉との意なりツヌサハフは石にかゝる枕詞、オホロカニキコサヌは大凡に聽さぬにてオホロカはオボロケと同じ聽さぬは聽かぬを延べたるなり皇后の妬心烈しくして天皇の御言を大凡には聽入れまさぬを云ウラクハノキは末桑の木にて桑の木の末、ウラ)枝を云ひそのウラクハに裏强(ウラコハ)をかけたり心裏强は俗に云强情なり皇后天皇の御言を聞召し入れず心裏强に坐するを下に含みて云るなりヨルマシキは寄るまじきなり原本士を志に作る前本北本應本に據て改むヨロボヒユクは徒倚行哉なり徒倚は神代紀に出づ　○不肯參、肯の字前本中本に據て補ふ　○天皇歌曰、記に天皇御立其大后所坐殿戶歌曰と云り　○菟藝泥赴揶摩之呂謎能云々、道すがら目に觸れし山城女の木鍬もて掘りし大根の淸爽なるが如く皇后が淸爽なる殿に坐ます由を聞召して多く扈從をつれて此に來れりと云るにてウチシオホネは打ちし大根打つとは土を掘ることオホネは抄菜蔬部に蕪於保禰俗用大根二字とありサワ〳〵には大根の色も味も淸爽(サワヤカ)なる如くにの意ナガイヘセコソは汝が家爲こそにて家爲は釋に家也言造居家也とあるが如く爽かに宮作りて坐ませばとなり一說に言へばこそなりとも云打渡すは見渡すに同じヤガハエナスは彌木榮如(ヤクハヘナス)なり祝詞に八桑枝の如くとある八桑枝と同じく樹木の生繁るを云ひ其狀の如くにの意にて扈從の盛なるを云原本揶を耶に作る前本に據て改む　○菟藝泥赴云々、多年の間相睦びし仲ならずともかく夫婦の間にてかばかりの事ありともそれを恨て朕が言を退くべきにあらずと云にてネシロノは根白のなり大根の白きを云原本漏を滿に作る前本應本中本に據て改むシロキタヾムキは白腕なり抄形體部に腕太々乎岐俗云宇天とありマカヅケバコソは纏かざらばこそにて皇后の御手を枕にせざればこそ知らずとも云はめとなり

【卅一年】

卅(癸卯)一年春正月癸丑朔丁卯(十五)、立大兄(オホヒ子ノ前)去來穗別尊爲皇太子、

【卅五年】

卅(丁未)五年夏六月、皇后磐之媛命薨於筒城宮、

卅(己酉)七年冬十一月甲戌朔乙酉(十二)、葬皇后於那羅山、

卅(庚戌)八年春正月癸酉朔戊寅(六)、立八田皇女爲皇后、秋七月、天皇與皇后居

【卅七年】那羅山、前本那を乃に作り羅の傍に樂の字を書す諸陵式に平城坂上墓磐之媛命在大和國添上郡陵墓要覽云生

高臺而避暑、時每夜自菟餓野、有聞鹿鳴、其聲寥亮而悲之、共起可憐之情、及月盡以鹿鳴不聆、爰天皇語皇后曰、當是夕而鹿不鳴、其何由焉、明日猪名縣佐伯部獻苞苴、天皇令膳夫以問曰、其苞苴何物也、對言、牡鹿也、問之何處鹿也、曰、菟餓野、時天皇以爲、是苞苴者必其鳴鹿也、因語皇后曰、朕比有懷抱、聞鹿聲而慰之、今推佐伯部獲鹿之日夜及山野、卽當鳴鹿、其人雖不知朕之愛、以適逢獵獲、猶不得已而有恨、故佐伯部不欲近於皇居、乃令有司、移鄉于安藝淳田、此今淳田佐伯部之祖也、俗曰、昔有一人、往菟餓宿于野中、時二鹿臥傍、將及雞鳴、牡鹿謂牝鹿曰、吾今夜夢之、白霜多降之覆吾身、是何祥焉、牝鹿答曰、汝之出行、必爲人見射而死、卽以白鹽塗其身、如霜素之應也、時宿人心裏異之、未及昧爽、有獵人以射牡鹿而殺、是以時人諺曰、鳴牡鹿矣隨相夢也、

菟餓野【卅八年】

○菟餓野、攝津志に兎餓野北至天滿北町南至京橋町平野町之惣名とあり原本菟を兎に作る前本北本醫本に據て改む下同じ

○可憐之情、前本北本憐を怜に作る

○猪名縣、攝津國河邊豐能二郡の舊名なり

○佐伯部、景行紀五十一年に見ゆ集解云按佐伯是日本武尊所俘蝦夷之裔散在于此者蝦夷爲人好獵故其裔爲獵人

○是苞苴者、苞苴は卽位前紀に見ゆ前本者の字なし

○語皇后、原本語を謂に作る前本に據て改む

○獵獲、通證云射得也爾雅秋獵爲獮獮又殺也とあり

○皇居、原本皇后に誤る諸本に據て改む

○安藝淳田、安藝國沼田郡沼田鄉是なり

○俗曰云々、醫本俗の下人の字あり釋紀所引攝津風土記に夢野の牡牝の鹿の物語あり　○將及雞鳴、アカツキは曉なり原本及を又に作る諸本に據て改む　○白鹽、抄欽食部に白鹽(河和之保)人常所食也とあり　○獵人、前本北本醫本獵を獵に作る獵獵同じ　○相夢、夢合なり崇神紀に既に見ゆれば上古よりの遺風ならむよく合せに幸惡合せに不幸となるもの故夢合

せも輕々しくはせぬものぞと鹿の上の物語に就て云るなり

【四十年】二月、原本二を三に作る前本北本應本及釋紀に據て補ふ
○雌鳥皇女、天皇の異母妹にて矢田皇女の實妹
○隼別皇子、天皇の異母弟
○媒、ナカタチは中立の意說文に媒謀也謀合二姓以成昏媾也とあり
○爲皇女、原本爲の字なし前本應本に據て補ふ
○縑、說文に幷絲繒也とあり繒は帛也また帛之總名とあればこゝは帛の總名の意に用ひしなるべし
○比佐箇多能云々、天皇雌鳥の皇女を幸さむとて來給へど我らが機織るは隼別命の襲の料として雌鳥皇女より織らしめらるゝものなりと云にて、ヒサカタは天の枕詞、アメカナハタは天金機なり、私記に昔飾機以金鎖取鳴聲織也とあり、ミオスヒガネは御襲衣料にて襲とは頭より躰を覆ふもの後世の婦人の被衣（カツキ）の如し主として女の用ふるものなるが男子も忍び歩きに被きしも

（壬子）四十年春二月、納雌鳥皇女欲爲妃、以隼別皇子爲媒、時隼別皇子密親娶、而久之不復命、於是天皇不知有夫、而親臨雌鳥皇女之殿、時爲皇女織縑女人等歌之曰、比佐箇多能、阿梅箇難麼多、謎迺利餓、於瑠箇儺麼多、波揶歩佐和氣能、瀰於須譬餓泥、爰天皇知隼別皇子密婚而恨之、然重皇后之言、亦敦友于之義、而忍之勿罪、俄而隼別皇子枕皇女之膝以臥、乃語之曰、孰捷鷦鷯與隼焉、曰隼捷也、乃皇子曰、是我所先也、天皇聞是言、更亦起恨、時隼別皇子之舍人等歌曰、破夜歩佐波、阿梅珥能朋利、等弭箇慨梨、伊菟岐餓宇倍能、娑芽岐等羅佐泥、天皇聞是歌、而勃然大怒之曰、朕以私恨不欲失親忍之也、何聖矣私事將及于社稷、則欲殺隼別皇子、時皇子率雌鳥皇女、欲納伊勢神宮而馳、於是天皇聞隼別皇子逃走、卽遣吉備品遲部雄鰤・播磨佐伯直阿俄能胡曰、追之所逮卽殺、爰皇后奏言、雌鳥皇女寔當重罪、然其殺之日、不欲露

皇女身、乃因勅雄鯽等、莫取皇女所賚之足玉手玉、雄鯽等追之至菟田、迫於素珥山、時隱草中僅得免、急走而越山、於是皇子歌曰、破始多氐能、佐餓始枳揶摩茂、和餐毛古等、赴耿利古喩例麼、揶須武志呂箇茂、爰雄鯽等知免、以急追及于伊勢蔣代野、而殺之、時雄鯽等探皇女之玉、自裳中得之、乃以二王屍、埋于廬杵河邊、而復命、皇后令問雄鯽等曰、見皇女之玉乎、對言、不見也、是歲、當新嘗之月、以宴會日、賜酒於內外命婦等、於是近江山君稚守山妻與采女磐坂媛二女之手有纏良珠、皇后見其珠、既似雌鳥皇女之珠、則疑之命有司、推問其玉所得之由、對言、佐伯直阿俄能胡妻之玉也、仍推鞫阿俄能胡、對曰、誅皇女之日、探而取之、卽將殺阿俄能胡、於是阿俄能胡乃獻己之私地、請免死、故納其地、赦死罪、是以號其地曰玉代、

のと見ゆ、ガネは像て其料に殷くる意なり、記には此事天皇雌鳥皇女と唱和し給ひしことゝして歌詞も異れり　○友于、尙書君陳に惟孝友于兄弟とあるを採れり原本友于を于支に北本中本干支に作りたれど前本に據て改む　○皇女之膝、原本膝を勝に作る北本中本に據て改む　○破夜歩佐波云々、隼は天に登り飛び翔りて五十槻の上なる鷦鷯を捕れと云意にて五十槻は五百つと繁く生茂りたる槻の意トラサネは取らされにて鷦鷯を取れ大鷦鷯を弑し奉れとの意なり原本等弭の弭を珥に嫒等の嫒を婆に誤る諸本に據て正す　○勃然字書に變色貌とあり　○何覺矣、覺は字書に與覺同隙罅也又爭端とありオモヒと訓るは何の意ありてかの意　○欲納伊勢神宮、通證に按遊罪于神地免刑罰とあり　○吉備品遲部、垂仁紀二十三年にある譽津部にて記の開化段に日子坐王の孫息長日子は吉備品遲君の祖とあり　○因勅、原本因を由に作る前本に據て改む　○皇女所賚之足玉手玉、記には女鳥王所纏玉鋼とあり　○素珥山、大和國宇陀郡に素爾谷曾爾川あり同郡ならむ　○破始多氐能云々、梯立を登るが如く峻しき山も妹と手を取りて登れば席に居るが如くにて峻しとも思はで越ゆると云なり記にサガシキヤマを久良波斯夜麻に作る倉梯山は十市郡にあり　○蔣代野、未詳通證に伊勢國三重郡とす　○廬杵河、通證に疑今宇城河屬壹志郡壹志郡與宇陀郡相界とあり　○通證に十月、十一月なり　○內外命婦、職員令義解に婦人帶五位以上曰內命婦也五位以上妻曰外命婦也とあれど此時には未ださる定めなければ只官人の妻又は官女を云るならむ　○近江山君、雄略紀に近江狹々城山君あり　○采女、

史には此に始て見えたれど倭姫命世記に崇神天皇の御世皇大神采女ありウネメは御饌に仕奉るものにて項に領巾を嬰けるよりウナゲ女と云ふなり ○推問、原本推の字なし前本に據て補ふ ○妻之、原本倒置す前本に據て改む ○推鞫、鞫は字書に窮理罪人とありカウガへはカムガへの音便にて考へなり ○免死、前本免を贖に作る ○玉代、未詳大和國葛上郡に玉手丘河內國安宿郡に玉手山玉手村あり此內か

【四十一年】紀角宿禰、應神紀三年に見ゆ ○壇場、字書に大界曰壇小界曰場とあり壇は疆に同じ ○百濟王之族、原本族を孫に作る諸本に據て改む ○懼之、前本懼を悚に作る ○鐵鎖、前本北本鎖を鏁に作る鏁は鎖の俗字 ○石川錦織首、錄河內諸蕃に錦部連百濟國速古大王之後也とあり是ならむ ○之家、原本之の字なし前本中本楓本に據て補ふ ○活焉、ワタラハムは渡らむなり生活するを云

【四十三年】依網屯倉、阿弭古、前本北本屯を土に作る西宮記竟宴歌集亦同じ記に開化天皇々子建豐波豆羅和氣王を依網之阿毘古等之祖とし錄攝津皇別に依網宿禰彥坐命之後也とす抄に河內國丹比郡依羅鄉三宅鄉あり ○張網捕鳥、通證に依網之名所起也と云り ○此鳥之類、原本之の字なし前本應本に據て捕ふ ○俱知、抄羽族部に鷙（多賀）鷹鷂總名也日本紀私記云俱知（兩字急讀）屈百濟俗號鷹曰俱知也

（癸丑）四十一年春三月、遣紀角宿禰於百濟、始分國郡堺場、具錄鄉土所出、是時百濟王之族酒君无禮、由是紀角宿禰訶責百濟王、百濟王懼之、以鐵鎖縛酒君、附襲津彥而進上、爰酒君來則逃匿于石川錦織首許呂斯之家、則欺之曰、天皇既赦臣罪、故寄汝而活焉、久之天皇遂赦其罪、

（乙卯）四十三年秋九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕異鳥、獻於天皇曰、臣每張網捕鳥、未曾得是鳥之類、故奇而獻之、天皇召酒君示鳥曰、是何鳥矣、酒君對言、此鳥之類多在百濟、得馴而能從人、亦捷飛之掠諸鳥、百濟俗號此鳥曰俱知（是今時鷹也）乃授酒君令養馴、未幾時而得馴、酒君則以韋緡著其足、以小鈴著其尾、居腕上獻于天皇、是日幸百舌鳥野而遊獵、時雌雉多起、乃放鷹令捕、忽獲數十雉、是月甫定鷹甘部、故時人號其養鷹之處曰鷹甘邑也、

とあり　○（注）是今時、前本是の字時の字なし　○（注）鷹、抄羽旅部に鷹鷂雅云一歳名之黄鷹（和賀太加）二歳名之撫鷹（加太加閉利）三歳名之青鷹白鷹云々とあり　○章鞋、抄諸度部細工具に章唐韻云章一乎之鞋渡、柔皮也又鷹文且亡擊也韻云擊（今夜一字両訓在鷹河之乎在、犬養、豆那）とあり繕は字書に繩也と見ゆ　○百舌鳥野、和泉國大鳥郡　○數十雉、原本十を于に作る諸本に據て改む　○鷹甘部、職員令主鷹司に養鷹戸とあり　○鷹甘邑、摂津志住吉郡に鷹合村あり今南百濟村と稱す

【五十年】卿、原本前本鷹に作る譯紀古事記に據て改む抄羽旅部に鴻雁毛詩鴻雁疏云大曰鴻小曰雁加利とあり　○多莽者破屢六々、内の書見アッよ汝こそは世にも國にも稀なる長壽の人なれば此日本の國にも雁の卵産むと云ことを汝は聞知れるかとなりタマキハルは内の枕詞内の書見は武内宿禰を親しみて云詞世の遠人國の長人は世に遠く長く生き永らへし人の義カリコムトは雁子産むとにてコムは子産むの略、記に像能筆保臂等の句なし阿者豆辭莽加蘇良美都に作り企箇輸加岐久夜とす　○夜輸瀰始之云々、天皇の此事を吾に問はゼ給ふは尤の御ことなり宜給はすが如く吾は世の遠長き人なれど我日本國にては雁の子産むことは未だ聞き申さずと云意なりヤスミシ、は安見知にて天下を安く知食す意大君にかゝる枕詞ウベナ〳〵は諸々の義前の御歌の世の遠人世の長人を承けて云ワレヲトハスは我に問はゼ給ふなり問はすは問ふの敬語ナは歎辭なり記に夜輸瀰始之和我於朋枳瀰波多迦比迦流比能美古に次の三句を宇倍志許曾斗比多麻閇麻許曾邇斗比多麻閇に和例破枳箇儒を伊麻陀岐加受に作る

【五十三年】上毛野君祖竹葉瀬、譯左京皇別に上毛野朝臣豊城入彦命五世孫多奇波世君之後とあり　○殘日典、治部式祥瑞條

五十年春三月壬辰朔丙申、河内人奏言、於茨田堤雁産之、即日遣使令視、曰既實也、天皇於是歌以問武内宿禰曰、多莽者破屢、宇知能阿曾、儺虚曾破、豫能等保臂等、儺虚曾波、區珥能那餓臂等、阿者豆辭莽、那莽等能區珥珥、箇利古武等、儺波企箇輸那、武内宿禰答歌曰、夜輸瀰始之、和我於朋枳瀰波、于陪儺于陪儺、和例烏斗波輸儺、阿企苑辭摩、那莽等能倶珥珥、箇利古武等、和例破枳箇儒、

（乙丑）五十三年、新羅不朝貢、夏五月、遣上毛野君祖竹葉瀬、令問其闕貢、是道路之間獲白鹿、乃還之獻于天皇、更改日而行、俄且重遣竹葉瀬之弟

に白鹿を上瑞に入れたり此頃より白鹿を獲ることなどを祥瑞とする支那思想の既に傳はりしなり○固塞、塞は抄天地部に野王案塞(和名曾古)險要之處所以隔内外也とあり○潰之、ニゲアカレヌは逃げ散れぬなり○乘之、モムテはモミテにて揉みの意なるべし

【五十五年】伊寺水門、陸前國北上川の河口にて今の宮城縣牡鹿郡石卷町ならむ景行天皇の御世日本武尊東征の時常陸國平潟より出で今の石卷湊に上陸せられしものゝ如し然れば伊寺水門は今の石卷なるべしと云(日本地理志料)○手纏、神代紀に出づ弓射る時臂にまくものなり

【五十八年】荒陵、今大阪天王寺の西南に在り俗に茶臼山と云前王廟陵記に天王寺舊記云四天王寺在難波荒陵村俗號荒陵寺西南有荒陵相傳仁德天皇築之以爲陵處其後

田道、則詔之曰、若新羅距者擧兵擊之、仍授精兵、新羅起兵而距之、爰新羅人日日挑戰、田道固塞而不出、時新羅軍卒一人有放于營外、卽掠俘之、因問消息、對曰、有强力者曰百衝、輕捷猛幹、每爲軍右前鋒、故伺之擊左則敗也、時新羅空左備右、於是田道連精騎擊其左、新羅軍潰之、因縱兵乘之、殺數百人、卽虜四邑之人民以歸焉、

(丁卯)五十五年蝦夷叛之、遣田道令擊、則爲蝦夷所敗、以死于伊寺水門、時有從者、取得田道之手纏與其妻、乃抱手纏而縊死、時人聞而流涕矣、是後蝦夷亦襲之略人民、因以掘田道墓、則有大虵發瞋目自墓出以咋、蝦夷悉被虵毒而多死亡、唯一二人得免耳、故時人云、田道雖既亡遂報讎、何死人之無知耶、

(庚午)五十八年夏五月、當荒陵松林之南道、忽生兩歷木、挾路而末合、冬十月、吳國高麗國並朝貢、

(壬申)六十年冬十月、差白鳥陵守等充役丁、時天皇親臨于役所、爰陵守目

杵忽化白鹿以走、於是天皇詔之曰、是陵本自空、故欲除其陵守、而甫差役丁、今視是惟者甚懼之、無動陵守者、則且授土師連等、

以爲此地不可更石津原以定陵處、大山陵是也、此陵空荒故名荒陵、俗云茶臼山、とあり

○歴木、景行紀十八年（一五一頁）に見ゆ

○挾道国末令、治部式に祥瑞の條に見ゆる合生連理木是なり　【六十年】白鳥陵、伊勢大和及河内國の三處にあり此時のは何れなるか詳ならねど都近き邊なるべければ河内古市の御陵なるべし　○陵守、式に陵戸守戸あり陵戸は山陵に附ける戸を云ひ守戸は差點して陵を守らしむる戸なり諸陵式に凡山陵者置陵戸五烟、令守之云々其非陵墓戸差點令守者先取近陵墓戸充之とあり　○役丁、丁をヨボロとよめるは調（ヨボロ）昔の強く脚力に堪ふるに由れり公役に從ふ人夫を云陵戸は不課戸なるを陵戸を除かむとして役に赴かしめられしなり　○親臨、親の字前本に據て補ふ　○土師連、垂仁紀三十二年（一三五頁）に見ゆ

【六十二年】遠江、記（神代）に遠淡海と見えトホツアフミと訓むが正し倭名抄に止保太阿不三とあるは訛れるなり此國に淡水あれば昔はたゞ淡海國と云ひしを同名の國二つあるを以て京より遠きを遠津淡海近きを近津淡海と呼分けたり　○國司、始て此に出づ是は後の國守とは異りて天皇の大命を承り持ちて國政を執り國造などの治否を檢察し大嘗祭の御料などを收むる臨時の役にて大化以後の按察使の如きものなりミコトモチは御言持にて天皇の大命を執持つ義なり　○大井河、大井は駿河國廬原郡大井郷是なり此河

（甲戌）六十二年夏五月、遠江國司表上言、有大樹、自大井河流之停于河曲、其大十圍、本一以末兩、時遣倭直吾子籠令造船、而自南海運之、將來于難波津、以宛御船也、是歳、額田大中彦皇子獵于闘鶏、時皇子自山上望之、瞻野中有物、其形如廬、仍遣使者令視、還來之曰、窟也、因喚闘鶏稲置大山主問之曰、有其野中者何窖矣、啓之曰、氷室也、皇子曰、其藏如何、亦奚用焉、曰、掘土丈餘、以草蓋其上、敦敷茅萩、取氷以置其上、既經夏月而不泮、其用之、卽當熱月漬水酒以用也、皇子則將來其氷、獻于御所、天皇歡之、自是以後、每當季冬必藏氷、至春分始散氷也、

は遠江と駿河の界を流るゝ大河なり　○停、原本渟に作る前本に據て改む　○額田大中彦皇子、應神天皇皇子　○鬪鷄、主水式に大和國山邊郡都介氷室一所とある是なり今磯城郡都介野村に屬す　○仍遣、前本仍を乃に作る　○鬪鷄稻置、允恭紀二年に鬪鷄國造貶其姓謂稻置とあれば此時は國造たりしなり記に神八井耳命都祁直之祖とあれど尸を異にすれば同氏なるか詳ならず　○氷室、氷を納め置く室なり大和志に都介氷室在山田村隣村福住有氷室神社とあり　○掘土丈餘、原本土丈を上文に誤る諸本に據て訂す　○茅荻、倭名抄其他の書に茅はチ荻はヲギと訓めど神功紀にも荻をスゝキと訓り通證に今按荻與薄同名猶萱與草共訓加夜蓋通別之異也と云　○泮、字書に散也とあり、○其用之、原本用を由に作る前本に據て改む　○藏氷、これ氷樣の起源なり　○至春分始散氷、主水式に供御氷者起四月一日盡九月三十日とあり春分始散とは周禮天官に秋刪氷室冬藏春啓夏頒氷とある文によりて書きしなるべし

【六十五年】宿儺、通證に大野郡蜂谷庄出羽平有洞窟土人傳云宿儺之所住也とあり　○膝、原本滕に作る諸本に據て改む　○膕踵、私記にクヒヒスヨホロクボと訓む踵は禮記曲禮の疏に脚後也とあり脚首の後を云膕は俗に云コブラなり

【六十七年】甲申、北本應本申を子に作る前本原本に同じ　○石津原、和泉國大鳥郡にあり此に河内とあるは當時未だ和泉國を置れざりしに由る　○定陵地、是御在世中に山陵を造らせ給ひしにて所謂壽藏なり　○役民、原本民を氏に作る前本北本及類史に據て改む　○百舌鳥、抄羽族部に鵙一名鷦（漢語抄云伯勞毛

（丁丑）六十五年、飛驒國有一人、曰宿儺、其爲人壹體有兩面、面各相背、項合無項、各有手足、其有膝而無膕踵、力多以輕捷、左右佩劍、四手並用弓矢、是以不隨皇命、掠略人民爲樂、於是遣和珥臣祖難波根子武振熊而誅之、

（己卯）六十七年冬十月庚辰朔甲申、幸河内石津原、以定陵地、丁酉、始築陵、是日有鹿、忽起野中、走之入役民之中、而仆死、時異其忽死、以探其痍、卽百舌鳥自耳出之飛去、因視耳中、悉咋割剝、故號其處曰百舌鳥耳原者、其是之緣也、是歲、於吉備中國川嶋河派、有大虬、令苦人、時路人觸其處而行、必被其毒、以多死亡、於是笠臣祖縣守、爲人勇悍而强力、臨派淵以三全瓠投水曰、汝屢吐毒令苦路人、余殺汝虬、汝沉是瓠、則

受」伯旁也私記云百舌鳥とあり

○咋剤　集解に割鮓聚國史無倦訓幾入とあり

○吉備中國、抄に備中吉備乃美知乃奈加と注す

○川島河、原本鳴を鳴に作る前本北本熊本に據て改む今河邊川と云源を伯耆境なる阿賀郡名荷嶺に發して南流し高梁の西を經て窪屋郡に至りて東西に分れ二川となりて海に入る此國にての大川なれば大川とも云　○大虬、抄龍魚部に蛟（美都知日本紀私記用「大蚪二字」）龍之屬也とあり又說文に虬龍子有角者と云ミヅチは水之虬なるべしチは蛇類の總稱なり　○笠臣、應神紀二十二年に見ゆ　○淵、應本派を流に作る　○岫穴、抄天地部に陸詞曰岫（和名久岐）山穴似袖とあり久岐は漏クキなり山の穴ありてくゝり行くべきを云此は虬族の往來して棲める水中の洞穴なればユキカフイハヤと訓り　○縣守淵、岡山縣地誌に縣守淵は窪屋郡酒津村高梁川の合流する所にあり今三子（ミツコ）淵と云へり蓋三子は蚪（ミツチ）の訛稱なるべしとあり　○夙興夜寐云々、以下政令流行に至る迄三十四字は淮南子脩務訓の文を借りて聖德を稱へ奉れり單なる潤色形容に非ずして御仁德の程を現はし奉れるものなれば其心して見るべし淮南子に蒲を瑰に作る蒲は貯に同じ同書の注に寬猶富也野民曰「孤無父曰」孤孀寡婦也とあり　○以振、原本以を心に作る前本北本中本に據て補ふ

余避之、不能沈者仍斬汝身、時水虬化鹿以引入瓠、瓠不沈、卽擧劍入水斬虬、更求虬之黨類、乃諸虬族滿淵底之岫穴、悉斬之、河水變血、故號其水曰縣守淵也、當此時妖氣稍動、敎者一二始起、於是天皇夙興夜寐、輕賦薄斂、以寬民萠、布德施惠、以振困窮、弔死問疾以養孤孀、是以政令流行、天下太平、廿餘年無事矣、

【八十七年】天皇崩、御年を脫ぜり記に八十三歲とあり大日本史に水鏡皇代記皇年代略記神皇正統記並日一百一十歲據之推ると則帝以應神帝二十一年生也然本書敏帝奥平群本並同日而生而木菟神百濟見應神帝三年紀帝髮長媛見十三年紀諸書之說其謬可知故不取とあり

○百舌鳥野陵、諸陵式に百舌鳥耳原中陵在和泉國大鳥郡和泉志に在軸松村東今號大山陵とあり陵墓要覽に泉北郡軸松村とあり

（己亥）八十七年春正月戊子朔癸卯、天皇崩、冬十月癸未朔己丑、葬于百舌鳥野陵、

日本書紀卷第十一

日本書紀卷第十二

去來穗別天皇　履中天皇
瑞齒別天皇　反正天皇

去來穗別天皇　履中天皇

去來穗別天皇、大鷦鷯天皇太子也、去來、此云伊弉、母曰磐之媛命、葛城襲津彦女也、大鷦鷯天皇卌一年春正月、立爲皇太子、時年二十五、八十七年春正月、大鷦鷯天皇崩、皇太子自諒闇出之、未卽尊位之間、以羽田矢代宿禰之女黑媛欲爲妃、納采既訖、遣住吉仲皇子而告吉日、時仲皇子冒太子名、以奸黑媛、是夜仲皇子忘手鈴於黑媛之家而歸焉、明日之夜、太子不知仲皇子自奸而到之、乃入室開帳居於玉床、時床頭有鈴音、太子異之、問黑媛曰、何鈴也、對曰、昨夜之非太子所賞鈴乎、何更問妾、太子

【卽位前紀】去來穗別天皇、記に伊邪本和氣命に作る
○葛城襲津彦、神功紀五年(一八六頁)に見ゆ
○(注)時年十五、仁德紀七年八月壬生部を定むとあるに據れば御年廿五なり(二一六頁參照)
○諒闇、綏靖紀卽位前紀(一〇一頁)に見ゆ
○羽田矢代宿禰、應神紀三年(一九七頁)に出つ
○納采、仁德紀卽位前紀(一一三頁)に見ゆ
○住吉仲皇子、天皇の同母弟
○告吉日、婚禮を行ふべき吉日を選定して告ぐるなり
○冒、タガヘテは違てな

り仲皇子太子なりと伴り名を違へてなり冒は字書に犯也とあり
○手鈴、釋紀に以鈴爲施如手玉也とあり
○明日之夜云々、古は夫先づ婦家に就て婚を結びしこと常にて此も其例なり
○室、ヨドノは夜殿なり
北本にはネヤと訓り
○帳、抄調度部屏障具に幃を止波利と訓み帳は釋名云帳張也施張於床上也とあり
○居於玉床時、北本寮本時の字なし
○昨夜之、集解之の字を衍として削る通證荀子の文を擧げて衍に非るを證す
○賞、俗に齎の字に作る字書に持以與人也とあり
○木菟宿禰、應神紀三年(此より百廿八年前)に見ゆ
○物部大前宿禰、天孫本紀に宇麻志麻治命十一世孫物部連祖連公孫とあり
○阿知使主、應神紀廿年に見ゆ
○不在、北本寮本不を所に作る

自知仲皇子冒名以干黑媛則默之避也爰仲皇子畏有事將殺太子密興兵圍太子宮時平群木菟宿禰物部大前宿禰漢直祖阿知使主三人啓於太子太子不信一云太子醉以不起故三人扶太子令乘馬而逃之一云大前宿禰抱太子而乘馬仲皇子不知太子不在而焚太子宮通夜火不滅太子到河內國埴生坂而醒之顧望難波見火光而大驚則急馳之自大坂向倭至于飛鳥山遇少女於山口問之曰此山有人乎對曰執兵者多滿山中宜廻自當摩徑踰之太子於是以爲聆少女言而得免難則歌之曰於朋佐箇珥阿布夜烏等迷烏瀰知度沛麼哆駄珥破能邏孺哆者摩知烏能流則更還之發當縣兵令從身自龍田山踰之時有數十人執兵追來者太子遠望之曰其彼來者誰人也何步行急之若賊人乎因隱山中而待之近則遣一人問曰曷人且何處往矣對曰淡路野嶋之海人也阿曇連濱子一云阿曇連黑友爲仲皇子令追太子於是出伏兵圍之悉得捕當是時倭直吾子籠素好仲皇子預知其謀密聚精兵數百於攪食栗林

○埴生坂、記に多遲比野とあり河内志に丹南（南河内）郡羽曳山在二郡東南一山勢起伏逶迤連二亘石川古市錦部三郡一本郡平尾丘丹比丘埴生坂皆此山脈とあり今埴生村の地なり

○大阪、記に大阪山口とあり河内國石川（南河内）郡山田村にあり今上野山と云

○飛鳥山、河内志に古市（南河内）郡飛鳥山飛鳥村上方とあり今駒谷村にあり

○遇少女於山口、通釋所引の僧覺峯の説に埴生坂は今野の上と云ひ堺より古市へ來る道にて難波の方よく見ゆる處なり、それより石川を渡り駒谷の邊に至るこれより東は次第に山に入る故駒谷の邊を大坂山口と云しなり大坂は今山田と云邊大坂の磯長と云天皇の少女に逢玉し所は駒谷を過ぎて飛鳥の里との間なりと云

○當麻徑、大和國葛下（北葛城）郡に當麻鄉あり今も當麻村と云あり當麻路は地圖を按るに二あり一は二上山の南方を行く

爲仲皇子ノ將レ拒ニ太子一、時太子不レ知兵塞一而出レ山行數里、兵衆多塞、不レ得進行一、乃遣使者問曰、誰人也、對曰、倭直吾子籠也、便還問使者曰、誰使焉、曰、皇太子之使、時吾子籠憚其軍衆多在、乃謂使者曰、傳聞、皇太子有非常之事、將レ助以備兵待之、然太子疑其心一、欲レ殺、則吾子籠愕之、獻己妹日之媛、仍請レ赦死罪、乃免之、其倭直等貢采女、蓋始于此時一歟、太子便居於石上振神宮、於是瑞齒別皇子知太子不レ在、尋之追詣、然太子疑弟王之心一而不レ喚、時瑞齒別皇子令レ謂曰、僕無黑心、唯愁太子不レ在而參赴耳、爰太子傳告弟王曰、我畏仲皇子之逆、獨避至於此、何且非レ疑レ汝耶、其仲皇子在之、獨猶爲我病、遂欲レ除、故汝宜勿黑心、更返難波一而殺仲皇子、然後乃見焉、瑞齒別皇子啓太子一曰、大人何憂之甚也、今仲皇子無道、群臣及百姓共惡怨之、復其門下人皆叛爲レ賊、獨居之無與誰謀、臣雖知其逆一未受太子命一之、故獨慷慨之耳、今既被命、豈難於殺仲皇子一乎、唯獨懼之、既殺仲皇子、猶且疑臣歟、冀見得忠直者、欲明

道にて竹内越と云一は二上山の北方を行く道にて穴虫越と云何れとも決し難けれど竹内越ならむか ○於關佐箇瑕云々、大坂にて遇へる少女に道路を問ひしかば直に進ませて迂曲して當麻路を往けと教へたりとなり哆書の書原本嗜に作り寮本嗜に作る今北本に從ふ ○白龍田山踰之、龍田山は大和國平群(生駒)郡三郷村の西方なる瀧倉貴山の南に接す天皇此道を踰え給ひしとすれば當麻路は踰えずして駒谷より北行し國分立野を經給ふならむされど下の攪食栗林の事不審を生ず通釋には天皇の御身方の一將兵を率ゐて此道をとりしを誤り傳へしかと云り ○野島、萬葉六にも淡路の野島の海人と見ゆ淡路國津名郡野島村なるべし ○阿曇連濱子、摩神紀三年に見ゆ ○(注)黑友、原本黑を里に作る北本楓本熱本に據て改む ○得捕、原本倒置す北本熱本に據て改む ○陵直書子能、仁德紀卽位前紀に見ゆ ○預、頗史傳に作る預傳通用す ○攪食栗林、志云忍海郡廣村元名攪食又云忍海郡栗栖郷已廢存柳原村卽此 ○將拒、楓本拒を拒に作る ○直采女、采女は仁德紀四十年に出つ集解に據孝德紀二年之女二考之賣旅非貢采女之制書千鈴神別貴族以此謝罪自降等處也とあり ○石上振神宮、大和國山邊郡にあり垂仁紀三十九年に出つ ○喚、字書に召也とあり ○謁、字書に告也とあり ○黑心、北本寮本異心に作る ○何且、北本且を其に作る ○大人、集解に按人疑子之誤、然則大當作太とあり ○靈徵、字書に激昂之義とあり名義抄にネタムと訓めり ○見得、見は字書に見在也とあり其意に用ひたり ○不欺、サダカナルコトは意志の確實なるを云 ○刺領巾、記に曾婆加里とあり ○錦衣褌、褌は下の袴なり脱ぐべきものにあらず集解に按褌袴同訓蓋寫袴誤褌とあり ○厠、抄号處部に廁賀波夜とあり箋注に王念孫曰廁之言側也亦謂溷側也とありカハヤは川屋の義と云 ○惡、字書に憂之篤也とあり ○村合屯倉、所在未詳

臣之不欺、太子則副木菟宿禰而遣焉、爰瑞齒別皇子歎之曰、今太子與仲皇子並兄也、誰從矣、誰乖矣、然亡無道就有道、其誰疑我、則詣于難波、伺仲皇子之消息、仲皇子思太子已逃亡而無備、時有近習隼人、曰刺領巾、瑞齒別皇子陰喚刺領巾、而誂之曰、爲我殺仲皇子、吾必敦報汝、乃脫錦衣褌與之、刺領巾恃其誂言、獨執矛、以伺仲皇子入厠而刺殺、卽隷于瑞齒別皇子、於是木菟宿禰啓於瑞齒別皇子曰、刺領巾爲人殺己君、其爲我雖有大功、於己君無慈之甚矣、豈得生乎、乃殺刺領巾、卽日向倭也、夜半臻於石上而復命、於是喚弟王以敦寵、仍賜村合屯倉、是日、捉阿曇連濱子、

元年春二月壬午朔、皇太子卽位於磐余稚櫻宮、夏四月辛巳朔丁酉、召阿曇連濱子、詔之曰、汝與仲皇子、共謀逆、將傾國家、罪當于死、然垂大恩而免死科墨、卽日黥之、因此時人曰阿曇目、亦免從濱子野嶋海人等之罪、役於倭蔣代屯倉、秋七月己酉朔壬子、立葦田宿禰之女黑媛爲皇妃、妃生磐坂市邊押羽皇子、御馬皇子、青海皇女、一曰飯豐皇女、次妃幡梭皇女生中磯皇女、是年也太歲庚子、

二年春正月丙午朔己酉、立瑞齒別皇子爲儲君、冬十月都於磐余、當是時、平羣木菟宿禰、蘇賀滿智宿禰、物部伊莒弗大連、圓豆夫羅大使主共執國事、十一月、作磐余池、

三年冬十一月丙寅朔辛未、天皇泛兩枝船于磐余市磯池、與皇妃各分乘而遊宴、膳臣余磯獻酒、時櫻花落于御盞、天皇異之、則召物部長

【元年】磐余稚櫻宮、宮趾は志に十市(今磯城郡池内村(今安倍村の大字)とす拾遺に此御世を後磐余稚櫻宮と稱し神功皇后の御世に分つ　○科墨、墨は額を刻みて墨を入るゝを云支那に所謂五刑の一なり我國にては上古五刑の名は聞えざれど墨刑は行はれたり見えたり　○黥之、黥は尙書呂刑疏に黥面卽墨刑也とありメサキキザムは目の邊を刻むを云　○阿曇目、濱子が此刑に處せられしより其狀なるなぞ一般に之を阿曇目と稱するに至りしなり　○倭蔣代屯倉、所在未詳　○葦田宿禰、記に葛城曾都毘古之子葦田宿禰とあり　○妃生、原本生の字なし諸本に據て補ふ　○中磯皇女、類史磯の下に城の字あり　【二年】儲君、字書に稱太子者言爲君之副也とあり　○蘇賀滿智宿禰、錄河內皇別蘇何の條に孝元天皇皇子彥太忍信命之後也とあり大日本史に箭口朝臣條云宗我石川宿禰四世孫稻目公卿補任云稻目滿智宿禰之曾孫也由是考之滿智爲石川之子明矣とあり　○物部伊莒弗大連、天孫本紀に饒速日命十世孫伊莒佛公五十琴宿禰之子とあり原本莒弗を莒佛に作る北本に據て改む　○圓大使主、記に都夫良意富美に作り雄略紀に圓大臣とす公卿補任に葛城圓使主武內宿禰曾孫葛城襲津彥孫玉田宿禰子也と見ゆ　○磐余池、下文の市磯池なり

【三年】兩枝船、兩岐になれる木にて造れる船、記垂仁の段にも二俣樞作二俣小舟とあり　○磐余市磯池、志に十市

郡池内村（今磯城郡安倍村大字池内）とあり原本磐を盤に作る北本に據て改む
○物部長眞膽連、饒速日命三世の孫出雲色男命四世孫と錄有京神別に見ゆ
○掖上室山、志に室村南葛城郡掖上村大字室）にあり
○稚櫻部造、錄有京神別若櫻部造の條に神饒速日命三世孫出雲色男命之後也とあり
○膳臣余磯、國造本紀若狹國造の條に膳臣荒磯命と見え佐白米命の子　○稚櫻部臣、錄有京皇別に若櫻部朝臣大彦命孫伊波我牟都加利命之後也とあり　【四年】國史、諸國にありて記錄を掌る職なり史は字書に掌書之官也とあり　○紀言事、言と事とにて言は舊聞異事の類は事實なり　○達四方志、志は字書に與誌同記也積記其事也とあり諸國の文書記錄の類を中央に通達するを云左傳杜預序に周禮有史官掌邦國四方之事達四方之志とあり之に據て書けり　○石上溝、志に山城郡長柄村朝和村大字長柄とあり

【五年】二月於筑紫所居三神、筑前國宗像郡宗像神社三座官幣大社是なり
○禱回不祠、禱は祈願ふを云ひ祠は祭祀を行ふを云祈禱のみして祭祀をば行ひ結すとなり
○九月狩獵、字書に馬獵曰獵とあり抄調度部鞍馬具に獵訓久豆和都夏俗云久都和とあり
○飼部之黥、飼部は一種

眞膽連、詔之曰、是花也非時而來、其何處之花矣、汝自可求、於是長眞膽、連、獨尋花、獲于掖上室山而獻之、天皇歡其希有、卽爲宮名、故謂磐余稚櫻宮、其此之緣也、是日改長眞膽連之本姓曰稚櫻部造、又號膳臣余磯曰稚櫻部臣、

四年秋八月辛卯朔戊戌、始之於諸國置國史、記言事達四方志、冬十月、掘石上溝、

（甲辰）五年春三月戊午朔、於筑紫所居三神見于宮中、言、何奪我民矣、吾今慚汝、於是禱而不祠、秋九月乙酉朔壬寅、天皇狩于淡路嶋、是日、河內飼部等、從駕執轡、先是飼部之黥皆未差、時居嶋伊弉諾神託祝曰、不堪血腥、因以卜之、兆云、惡飼部等黥之氣、故自是後、頓絕以不黥飼部而止之、癸卯、有如風之聲、呼於大虛曰、劍刀太子王

の賤民と定めし故良民と別つ爲に黥して使ひ給ひしならむ續紀天平十六年免天下馬飼雜戸人等勅曰汝等今負姓人所恥也云々とあり　○未差、差は字書に病除也癒也とあり　○居島伊奘諾神、淡路國津名郡伊佐奈岐神社（多賀村にあり官幣大社）是なり　○兆云、職員令神祇官の義解に卜者灼龜也兆者灼龜縱横之文也とあり　○頓、字類抄名義抄に頓をヒタフルと訓り　○劍刀太子王也、劍刀は太子の枕詞劍刀身とかゝるは普通なるがミをヒともいへばこゝはヒの一語にいひかけたり　○鳥往來之汝妹、鳥往來は釋紀に欲謂羽田之發語也とあり羽田之汝妹は葦田宿禰の女黑媛なり羽田は高市郡波多鄕にて皇妃もと其鄕に住給ひし故に羽田之汝妹と云るなるべし　○羽狹丹葬立往、羽狹は志に吉野郡北莊馬佐村とあり葬は葬ることにて羽狹に葬奉るべしとの意　○狹名來田蔣津之命、未詳通證云蓋黑媛之別號（十月）求其咎、神の怒を招きし原因を求め給ふなり　○車持君、錄左京皇別に車持公豐城入彥命八世孫狹君之後也雄略天皇御世供進乘輿仍賜姓車持公とあり　○充神者、カムベラノタミは通證に神戸等民也とあり　○得實、原本得の字なし北本に據て補ふ　○數之、數は字書に責也とあり　○惡解除善解除、解除は祓除に同じ身に受けし罪穢を解除する式なり之に善惡の兩祓あり延曆二十年五月の格文にも見えたり神代紀に手端の吉棄物足端の凶棄物見え吉棄物は善解除の料凶棄物は惡解除の料なり今も行はせらる、節折の式に和世荒世の儀あり荒世は惡解除にて和世は善解除なり善惡は常に云ふ善惡と異なり精粗の意に解すべし　○長渚崎、攝津志に河邊郡長洲濱長洲村あり此地ならむか

也、亦呼之曰、鳥往來羽田之汝妹者、羽狹丹葬立往、汝妹、此云儺邇毛、亦曰、狹名來田蔣津之命、羽狹丹葬立往也、俄而使者忽來曰、皇妃薨、天皇大驚之、便命駕而歸焉、丙午、自淡路至、冬十月甲寅朔甲子、葬皇妃、既而天皇悔之不治神祟而亡皇妃、更求其咎、或者曰、車持君行於筑紫國、而悉按車持部、兼取充神者、必是罪矣、天皇則喚車持君、以推問之、事既得實焉、因以數之曰、爾雖車持君、縱撿挍天子之百姓、罪一也、既分寄于神祇、車持部、兼奪取之、罪二也、則負惡解除、善解除、而出於長渚崎令祓禊、既而詔之曰、自今以後、不得掌筑紫之車持部、乃悉收以更分之、奉於三神、

【六年】草香幡梭皇女、仁德天皇の皇女にて履中天皇の異母妹

（乙巳）六年春正月癸未朔戊子、立草香幡梭皇女爲皇后、辛卯、始建藏職、因

○始建蔵職、蔵職は御蔵を掌る職官、蔵部はその下に附屬して物品を出納する職なり職員令に内蔵頭助允各一人大少屬二人大少主鈴各二人蔵部四十人と見ゆ拾遺に後の磐余の稚櫻の朝に至て三韓の貢献絶ることなく齎蔵の倫に更に内蔵を建て官物を分收め始めて蔵部を定むとある是なり

○鯽魚磯別王、下文に據るに景行天皇々子神櫛皇子の末なるべし

○太姫郎姫、原本太を大に作る北本中本に據て改む

○後宮、原本後を后に作る北本寮本に據て改む　○嬪、職員令に嬪四員有五位以上とあり是は令の制度なり妃夫人嬪共にミメと訓む御妻の義なり

○八尋室、廣大なる室を云八尋は神代紀に見ゆ　○住吉邑、志に攝津國住吉郡住吉村俗呼『富士宅』とあり　○讃岐國造、景行紀四年（一四三頁）に見ゆ　○脚咋別、脚咋の地未詳　○玉體不悆、字書に悆は喜也とあり不悆は御病し給ふを云　○水土弗調、ヤクサミは不平又不和なり訓り惱むを云原本弗を不に作る北本寮本應本に據て改む　○（注）年七十、記に六十四歲とす仁德紀七年に壬生部を定むとあるに據れば八十七歲即位前紀の文に據れば七十七歲なり　○百舌鳥耳原陵、諸陵式に百舌鳥耳原南陵和泉國大鳥郡と見え陵墓要覽に泉北郡神石村大字上石津とあり大山陵の南

定藏部、二月癸丑朔、喚鯽魚磯別王之女太姫郎姫、高鶴郎姫、納於後宮、並爲嬪、於是二嬪恒歎之曰、悲哉吾兄王何處去耶、天皇聞其歎而問之曰、汝何歎息也、對曰、妾兄鷲住王、爲人强力輕捷、由是獨馳越八尋屋而遊行、既經多日不得面言、故歎耳、天皇悅其强力以喚之、不參來、亦重使而召、猶不參來、恒居於住吉邑、自是以後、廢以不求、是讃岐國造、阿波國脚咋別、凡二族之始祖也、三月壬午朔丙申、天皇玉體不悆、水土弗調、崩于稚櫻宮、時年七十冬十月己酉朔壬子、葬百舌鳥耳原陵、

瑞齒別天皇　反正天皇

【即位前紀】立爲皇太子、原本立爲の二字重複す諸本に據て削る北本皇の字なし

○淡路宮、淡路國三原郡

瑞齒別天皇、去來穗別天皇同母弟也、去來穗別天皇二年立爲皇太子、天皇初生于淡路宮、生而齒如一骨、容姿美麗、於是有井、曰瑞井、則

汲而洗太子、時多遲花落有于井中、因爲太子名也、多遲花者今虎杖花也、故稱謂多遲比瑞齒別天皇、六年春三月、去來穗別天皇崩、

元年春正月丁丑朔戊寅、儲君卽天皇位、秋八月甲辰朔己酉、立大宅臣祖木事之女津野媛、爲皇夫人、生香火姬皇女、圓皇女、又納夫人弟媛、生財皇女、與高部皇子、冬十月、都於河內丹比、是謂柴籬宮、當是時、風雨順時、五穀成熟、人民富饒、天下太平、是年也太歲丙午、

五年春正月甲申朔丙午、天皇崩于正寢、

○齒如一骨、記に天皇御身之長九尺二寸半御齒長一寸廣二分上下等齊既如貫珠とあり　○瑞井、集解に三原郡志知川村產宮の社前にありと云り　○落有于井中、北本落の字なく應本有の字なし　○虎杖花、抄草木部に虎杖(伊太止里)本草疏云虎杖一名武杖とあり內膳式雜菜の中にも見え古は鹽漬にして食へり

【元年】大宅臣、錄河內皇別に大宅臣天足彥國押人命之後也とあり天武紀十三年十一月姓朝臣を賜ふ原本大を太に作る北本熟本に據て改む　○木事、彥國押人命七世の孫米餅搗大使主の子(錄大和皇別布留宿禰の條)　○皇夫人、北本にキサキと訓み私と注せり私記の訓なり夫人は令に妃夫人嬪とある夫人に同じ皇夫人の文字此に始めて見ゆ　○香火姬皇女、記に甲斐郎女とあり　○圓皇女、記に都夫良郎女とあり　○財皇女、記に財王とあり　○高部皇子、記に多訶辨郎女とあり高の上の與の字應本なし　○柴籬宮、編年記に河內丹比郡今宮坂上路北室地是也志に丹比(中河內)郡松原庄植田村とあり

【五年】五年、原本五を六に作る寮本熟本類史及舊紀に據て改む　○正寢、正寢は正殿なり字書に謂居室之正屋とあり天皇の御年は記に六十歲とあり大日本史に本書享年闕諸書皆云六十據此則以仁德帝四十年生然皇母磐之姬以仁德帝三十五年崩諸說不足信今無所考と云り

日本書紀卷第十二

日本書紀卷第十三

雄朝津間稚子宿禰天皇　允恭天皇
穴穂天皇　安康天皇

【卽位前紀】岐嶷、綏靖垂仁紀に見えてイコヨカと訓みたるな此にはカブロと訓り抄疾病部に禿をカブロと訓むカブロヨリは幼き時よりの意
○總角、景行紀四十年（一九九頁）に見ゆ
○不便、景行紀四年（一四三頁）に見ゆ
○五年、原本六年に作る北本・本熱本に據て改む
○仁孝、北本にはヒトヲメグミすヤニシタガフミチマシマスと訓り何れにても通ずれど傳言に用ひたるとは用言に用ひたるど

雄朝津間稚子宿禰天皇　允恭天皇

雄朝津間稚子宿禰天皇、瑞齒別天皇同母弟也、天皇自岐嶷至於總角、仁惠儉下、及壯篤病、容止不便、五年春正月、瑞齒別天皇崩、爰群卿議之曰、方今大鷦鷯天皇之子、雄朝津間稚子宿禰皇子、與大草香皇子、然雄朝津間稚子宿禰皇子長之仁孝、卽選吉日、跪上天皇之璽、雄朝津間稚子宿禰皇子謝曰、我之不天、久離篤疾、不能步行、且我既欲除病、獨非奏言、而密破身治病、猶勿差、由是先皇責之曰、汝雖患病、縱破身不孝、孰甚於茲、矣其長生之、遂不得繼業、亦我兄二、

天皇愚我而輕之群卿共所知夫天下者大器也帝位者鴻業也且民之父母斯則聖賢之職豈下愚之任乎更選賢王宜立矣寡人弗敢當羣臣再拜言夫帝位不可以久曠天命不可以謙距今大王留時逆衆不正號位臣等恐百姓望絶也願大王雖勞猶卽天皇位雄朝津間稚子宿禰皇子曰奉宗廟社稷重事也寡人篤疾不足以稱猶辭而不聽於是羣臣皆固請曰臣伏計之大王奉皇祖宗廟最宜稱雖天下萬民皆以爲宜願大王聽之

元年冬十有二月妃忍坂大中姫命苦羣臣之憂吟而親執洗手水進于皇子前仍啓之曰大王辭而不卽位位空之既經年月羣臣百寮愁之不知所爲願大王從群望强卽帝位然皇子不欲聽而背居不言於是大中姫命惶之不知退而侍之經四五剋當于此時季冬之節風亦烈寒大中姫命所捧鋺水溢而腕凝不堪寒以將死皇子顧之驚則扶起謂之曰嗣位重事不得輙就是以於今不從然今羣臣之請事理

の別あり
○我之不天、原本之の字なし北本熱本楓本に據て補ふ不天は篤疾に罹らせ給ひしを云
○雖患病、原本雖の字なし北本應本熱本に據て補ふ
○夫天下者大器也、莊子雜篇に出づ
○下愚、上智に對して云論語陽貨に出づ
○夫帝位云々、以下謙距に至る十四字は後漢光武紀の文を採れり
○寡人、禮記曲禮に諸侯與民言自稱曰寡人とあり寡德の人と云ふ意
○今大王云々、以下號位に至る十字は同じく光武紀に見ゆ

【元年】忍坂大中姫命、應神天皇の御孫にして稚渟毛二派皇子の御子なり
○親執洗手水、集解に進盥水者蓋亦取盥洗而受劍璽之義とあり
○所捧鋺水、鋺は神代紀に見ゆ死に易へて水を捧ぐることは上代よりの例なりと云說ありさもあるべし北本捧を奉に作る

○璽符、支那にて璽は天子の印ないひ符は郡符の事なれど此はミシルシと訓めば三種の神器のことを申奉りしならむ
○共爲天下、北本共の上に仰の字あり
○即帝位、こゝに遷都の事は見えねど記に坐遠飛鳥宮治天下也とあり

【二年】定刑部、記に爲大后御名代定刑部とあり刑部は其御名代の名なり皇后の御名は忍坂大中姫命と申し大和國城上郡忍坂郷は其本居の地なるが故に之を採りて忍坂部と稱したり
○木梨輕皇子、記に木梨之輕王とあり
○名形大娘皇女、記に長田大郎女とあり
○境黑彦皇子、境は大和國高市郡の地名
○輕大娘、輕は前に云
○八釣白彦皇子、八釣は大和國の地名高市郡に八釣村、十市郡に下八釣村あり
○但馬橘大娘皇女、大和國高市郡の地名今も橘村あり
○酒見皇女、酒見も地名ならむ摩騰に酒り總尼張

灼然、何遂謝耶、爰大中姫命仰歎、則謂群卿曰、皇子將聽璽臣之請、今當上天皇璽符、於是羣臣大喜、即日捧天皇之璽符、再拜上焉、皇子曰、群卿共爲天下請寡人、寡人何敢遂辭、乃即帝位、是年也太歲壬子、

二年春二月丙申朔己酉、立忍坂大中姫爲皇后、是日、爲皇后定刑部、皇后生木梨輕皇子、名形大娘皇女、境黑彦皇子、穴穂天皇、輕大娘皇女、八釣白彦皇子、大泊瀬稚武天皇、但馬橘大娘皇女、酒見皇女、初皇后隨母在家、獨遊苑中、時鬪雞國造從傍徑行之、乘馬而莅籬、謂皇后嘲之曰、能作園乎、汝者也、汝、此云那鼻苦也、且曰、壓乞戸母、其蘭一莖焉、壓乞、此云異提、戸母、此云親自、皇后則採一根蘭、與於乘馬者、因以問曰、何用求蘭耶、乘馬者對曰、行山撥蠻也、蠻、此云摩愚那岐、時皇后結之意、裏乘馬者辭无禮、即謂之曰、首也、余不忘矣、是後皇后登祚之年、覓乘馬乞蘭者、而數昔日之罪、以欲殺、爰乞蘭者、額拾地叩頭曰、臣之罪實當萬死、然當其日不知貴者、於是皇后赦死刑、貶其姓、謂稲置、

に酒見神社あり　○鬪鷄國造、仁德紀六十二年に見ゆ　○汝者、ナビトは汝人なり汝は能く園を作り得るやと輕しめて云るなり　○贋乞戸母、贋乞は呼びかけの發語なり萬葉には乞の字をイデと訓ませたり戸母は婦人の通稱萬葉には刀自と書けり戸主の意にて家の内の事を主として治むる人を云へど敬稱にも用ふるなり、いで戸母其蘭一本を吾れに與へよと强ひて蘭を乞求むるなり　○蘭、抄飲食部鹽梅類に蘭養生秘要云蘭蕙草阿良々木と見え箋注に爾雅所謂蔺山蒜蓋是其榮薰臭故名蘭蔺今俗呼野蒜者是也(節略)とあり　○蟻、抄蟲豸部に蟻蟻爾雅集注云蟻蟻(漢語抄云加豆乎元之目木紀私記云蟻末久奈岐)小虫亂飛也磑則天風春則天雨とあり通證に今云目塞又云糠子と云へりマクナギは目くなぎなり目前を飛び交はし屢々瞬きせしむるより名づけたり、くなぎは瞼を搖かすを云鶺鴒をニハクナギと云ひ婚するをクナグと云よりまくなぎにくなぎを云ひかけて戲れしなり　○謂之曰、原本之の字なし楓本應本中本に據て補ふ　○首也余不忘矣、首は大人の義にてこゝは尊稱に用ひたり汝の無禮の言は余は終生之を忘れじとなり　○登祚之年、ナリイデタマフは皇后となり給ふを云されど皇后に登祚と云こと當らず天皇登祚の年と解すべきか　○萬死、コロスツミは死罪なり原本にヨロスとあるはコロスの誤なり　○貶其姓、姓は尸なり國造の尸を貶して稻置とせられしなり仁德紀六十二年に鬪鷄稻置大山主とあり同氏なるべきに此に國造とあるは或は其後國造になされしを此に至りて貶されしか又は此時に貶されし姓を仁德紀に及ぼして書けるか何れにてもあるべし

【三年】良醫、クスシは藥爲なり藥を用ひて人の病を癒す人を云北本醫を醫に作る醫は醫と同じ說文に醫は治レ病工也とあり

【四年】姓名勿錯、姓氏の區別は氏は上古の中臣齋部物部の類、中古の源平橘の類にて姓は朝臣宿禰國造縣主稻置の類を云氏は内なり身内の義にて同じ血統の續ける範圍を云上古は諸家の職業いづれも世襲にて同職相襲ぎしかば職名卽ち氏の名となれり中臣齋部卜部鏡作玉作の類是なり姓卽ち尸は其職業の統率者卽ち同一血族の首領者をいひ頭根の意なり尸は我國特有の制度にて支那になければ止を得ず姓の字を書き

三年(甲寅)春正月辛酉朔、遣使求良醫於新羅、秋八月、醫至自新羅、則令治天皇病、未經幾時、病已差也、天皇歡之、厚賞醫以歸于國、

四年(乙卯)秋九月辛巳朔己丑、詔曰、上古之治、人民得所、姓名勿錯、今朕踐祚於茲四年矣、上下相爭、百姓不安、或誤失己姓、或故認高氏、其不至於治者、蓋由是也、朕雖不賢、豈非正其錯乎、羣臣議定奏之、群臣皆言、陛下舉失正枉而定氏姓者、臣等冒死奏可、戊申、詔曰、羣卿百寮及諸國造等皆各言、或帝皇之裔、或異之天降、然三才顯分以來、多歷萬歲、是以一氏蕃息、更爲萬姓、難知其實、故諸氏姓人等、沐浴齋戒、各爲盟神探湯、則於味橿丘之辭禍戶碑、坐探湯瓮、而引諸人、令赴曰、得實則全、僞者

しより姓と氏と混同したれど氏と戸とは全く別箇の物なり此に姓名と云へるは戸と氏となり上古は同氏は同じ處に住みて戸も氏も混同することなかりきとなり

○故認高氏、原本に故をコトタヘと訓るはタヘはサラの誤なり北本中本に據て訂す高氏は家柄の高き氏、名族などと云に同じ　○冒死、カムカムツカマツラムは通釋に考み仕らむの意なりと云へど考みにては通ぜず興國本にもカムくとあれど假名の誤あらむもはかり難ければ尚よく考ふべし　○帝皇之裔、皇別なる云ミコハナは御子の端の意か北本にはノチと訓り　○異之天降、神別なる云　○三才顯分以來、三才なるミツノミチと訓るは天地人の三道と云意天地人と分れたる時よりにて世の始よりの意　○蕃息、ウマハリは殖るひろがるなる云産張の義か字書に蕃滋也息生也とあり　○齋戒、キヨマハリと訓るは清まりの意　○盟神探湯、憲神紀九年に見ゆ　○味橿丘之辭禍戸碑、味橿丘は大和國高市郡にあり辭禍戸碑は記に言八十禍津日前とあり式に同郡甘樫坐神社四座と見ゆ八十禍津日神大禍津日神神直毘神大直毘神の四座を祀る此神等を祀りて探湯を行はしめて竭かれるを直くし給ひしに據て此地名は記れるなるべし原本及諸本碑を碑に作る前本及釋紀に據て改む　○探湯瓮、瓮は探湯の湯を沸かす釜なり　○木綿手襷、木綿を以て手襷とするなり　○自是之後氏姓自定、此には氏姓の定まりしことのみ見ゆれど戸令に近江大津宮庚午年籍不除とある義解に雄朝津間稚子宿禰尊御世諸氏爭姓紛亂不定卽斎煮湯令以手探攤詐偽者燭眞誠者全於是定姓遣籍とあり集解所引の古記にも小朝津間稚子宿禰尊御世云々以此定姓遣籍也とありて此御世に戸籍をも作られしなり

必害、盟神探湯、此云區訶能智、或置納釜煮沸、撰手探湯瓮、或燒斧火色、置于掌、於是諸人各著木綿手襷而赴釜探湯、則得實者自全、不得實者皆傷、是以故詐者愕然之、豫退無進、自是之後、氏姓自定、更無詐人、

【五年】地震、始めて此に見ゆ推古紀に地動とありて訓同じナヰは地フルは震るなり

○葛城襲津彦之孫、雄略紀七年六月には襲津彦の子とあり

○殯宮大夫、殯宮の事を司る長官

○宿禰田畏有事、察本北イ本に宿禰の二字なし

○武内宿禰之墓域、編年記五に大和國葛下郡葛宝破賀墓是也公卿補任亦同じ大和志には高市郡鳥屋

(癸巳)五年秋七月丙子朔己丑、(十四)地震、先是命葛城襲津彦之孫玉田宿禰、主瑞齒別天皇之殯、則當地震夕、遣尾張連吾襲、察殯宮之消息、時諸人悉聚無闕、唯玉田宿禰無之也、吾襲奏言、殯宮大夫玉田宿禰非見殯所、則亦遣吾襲於葛城、令視玉田宿禰、是日、玉田宿禰方集男女而酒宴焉、吾襲擧狀具告玉田宿禰、宿禰則畏有事、以馬一匹授吾襲、爲禮幣、乃密遮吾襲而殺于道路、因以逃隱武内宿禰之墓域、天皇聞之喚玉

田宿禰、玉田宿禰疑之、甲服襖中而參赴、甲端自衣中出之、天皇分明欲知其狀、乃令小墾田采女賜酒于玉田宿禰、爰采女分明瞻衣中有鎧、而具奏于天皇、天皇設兵將殺玉田宿禰、乃密逃出而匿家、天皇更發卒圍玉田家而捕之乃誅、冬十有一月甲戌朔甲申、葬瑞齒別天皇于百舌鳥耳原陵、

七年（戊午）冬十二月壬戌朔、讌于新室、天皇親之撫琴、皇后起儛、儛既終而不言禮事、當時風俗、於宴會儛者儛終、則自對座長曰、奉娘子也、時天皇謂皇后曰、何失常禮也、皇后惶之復起儛、儛竟言奉娘子、天皇卽問皇后曰、所奉娘子者誰也、欲知姓字、皇后不獲已而奏言、妾弟名弟姬焉、容姿絕妙無比、其艶色徹衣而晃之、是以時人號曰衣通郎姬也、天皇之志存于衣通郎姬、故强皇后而令進、皇后知之不輙言禮事、爰天皇歡喜、則明日遣使者喚弟姬、時弟姬隨母、以在於近江坂田、弟姬畏皇后之情、而不參向、又重七喚、猶固辭以不至、於是天皇不悅、而復勅一舍

村にありと見ゆ域原本城に作る集解に據て改む
○玉田宿禰疑之、玉田の二字原本なし寮本北本に據て補ふ
○甲服襖中、字書に襖は袍襖也とありウハギと訓り表衣の下に甲を著たるなり
○小墾田采女、小墾田は大和國高市郡
○百舌鳥耳原陵、諸陵式に和泉國大鳥郡とあり陵墓要覽に泉北郡向井村大字中筋と見ゆ
【七年】讌于新室、上代より新室祝の宴ぜしこと常なり景行紀に宴をニヒムロウタゲと訓り
○禮事、ウケコトはウヤコトの誤なるべし北本寮本には禮をキヤと訓めり
○座長、北本にクラカミと訓み私と注ぜり私記の訓なり俗に所謂上座の人を云
○衣通郎姬、北本にソトホリイラツメと訓み古點と注ぜり寮本の訓も亦同じ記に藤原之琴節郎女と見ゆ
○存、類史在に作る
○令進、原本令の字なし北本應本中本に據て補ふ

○坂田、近江國坂田郡是なり
○中臣烏賊津使主、仲哀紀神功紀等に見ゆるは同名異人なり
○糒、抄飲食部に糒（保之以比）乾飯也とあり
○裲、字書に衣身也とあり肌衣カ云

○飡、字書に啖也とあり飡の俗字
○忠臣、名義抄にも忠はタヾシ、ナホシ、マコトなど訓みたればタヾシキヒトと訓るも聞ゆれど北本にはマメナルマチキムタチと訓り何れか善からむ考ふべし
○春日、添上郡
○食、乾飯を食ふなりカレヒには餉の字を充つれど糒も同じ物なり
○櫟井、添上郡櫟本村あり是ならむと云
○藤原、大和國高市郡
○結髮、北本髮本共にカミナイシと訓りナイはアゲの誤かされど中本にはカミアゲシと訓み左傍にカミナイシ私とあれば誤

人中臣烏賊津使主曰、皇后所進之娘子弟姬、喚而不來、汝自往之、召將弟姬以來、必敦賞矣、爰烏賊津使主承命退之、糒裹裲中、到坂田、伏于弟姬庭中、言、天皇命以召之、弟姬對曰、豈非懼天皇之命、唯不欲傷皇后之志耳、妾雖身亡、不參赴、時烏賊津使主對言、臣既被天皇命、必召率來矣、若不將來、必罪之、故返被極刑、寧伏庭而死耳、仍經七日、伏於庭中、與飲食而不飡、密食懷中之糒、於是弟姬以爲、妾因皇后之嫉、既拒天皇命、且亡君之忠臣、是亦妾罪、則從烏賊津使主而來之、到倭春日、食于櫟井上、弟姬親賜酒于使主、慰其意、使主卽日至京、留弟姬於倭直吾子籠之家、復命天皇、天皇大歡之、美烏賊津使主而敦寵焉、然皇后之色不平、是以勿近宮中、則別構殿屋於藤原而居也、適產大泊瀨天皇之夕、天皇始幸藤原宮、皇后聞之恨曰、妾初自結髮陪於後宮、既經多年、甚哉天皇也、今妾產之、死生相半、何故當今夕、必幸藤原、乃自出之燒產殿而將死、天皇聞之大驚曰、朕過也、因慰喻皇后之意焉、

ともいひ難し結髮するは婦人の婚期に至りてすることにて之をカミアゲと云へば結髮よりとは婚姻の初めよりの意なり　○因慰喩、ヤスメコシラヘタマフと訓るは心を安めしめ取なし給ふ意なり　因は類史に自に作る

【八年】二月、應本三月に作る下文に櫻花の事見ゆれば三月とある方勝れるか　○衣通郎姫、原本郎の字なし北本類史に據て補ふ　○歌曰云々、歌の意は今宵は吾が兄の君の來給ふべし其は蜘蛛の出て來て這ひ廻るを見ても明かなりとなり　○和餓勢故餓、吾兄子がにて夫を云此は天皇を申し奉る　○佐瑳餓泥能、小蟹のにて蜘蛛の別名なればやがて枕詞とす蜘蛛は其狀蟹の如くにて小なれば小蟹と云　○區茂能於虛奈比、蜘蛛の行ひにて行ひは擧動(フルマヒ)と云に同じ古今集にはふるまひとせり　○虛豫比辭流辭毛、今宵著(シル)しもなりシルシは著しきを云毛は感動詞漢土にても此虫の來つて人の衣に著く時は親客ありて喜あるべしと云へば其風俗の傳れるかはた我國にも古へよりかゝる諺の自らありしにもあるべし　○佐瑳羅餓多云々、如此朕れを戀慕ふ衣通姫とは皇后や臣達を憚りて衣を解き放つて寬やかに寢しはたゞの一夜ばかりなるか飽かぬ心すとの意なり　○佐瑳羅餓多、諸說あれど釋紀に小形也形謂小形文とあるを取る小形の文樣ある錦と云ひかけられしなり　○邇之枳能臂毛弘、錦の紐なり錦は既に履中紀にも見えたり　○等枳舍氣帝、解き放(サ)けてなり　○阿麻哆絆泥受邇、敷多は寢すになり原本邇を迹に作る北本寮本中本に據て改む　○波那具波辭、花細しにて細しは賞美の意闕くることなく充實するを云　○佐區羅能梅涅、櫻の愛でなり能は如きの意を含めて郎女の麗はしきは花の如く愛ぐしとなり　○許等梅涅麼、異愛でばにて寵愛の他に異るを云下文に朕心異愛之とある意なり　○波

(己未)八年春二月、幸于藤原、密察衣通郎姫之消息、是夕衣通郎姫戀天皇而獨居、其不知天皇之臨、而歌曰、和餓勢故餓、勾倍枳豫臂奈利、佐瑳餓泥能、區茂能於虛奈比、虛豫比辭流辭毛、天皇聆是歌、則有感情、而歌之曰、佐瑳羅餓多、邇之枳能臂毛弘、等枳舍氣帝、阿麻哆絆泥受邇、多儴比等用能未、明旦、天皇見井傍櫻華而歌之曰、波那具波辭、佐區羅能梅涅、許等梅涅麼、波椰區波梅涅孺、和我梅豆留古羅、皇后聞之且大恨也、於是衣通郎姫奏言、妾常近王宮、而晝夜相續、欲視陛下之威儀、然皇后則妾之姉也、因妾以恨陛下、亦爲妾苦、是以、冀離王居、而欲遠居、若皇后嫉意少息歟、天皇則更興造宮室於河內茅渟、而衣通郎姫令居、因此以屢遊獵于日根野、

郷臨波梅浬羅、早くは愛ですにて容易に愛づることを得ざりしを云馬越津使主を遣し其他苦小隼雄等をうじて召出で給ひしを云　○和我梅豆留古羅、吾愛づる子等にて羅は休め辭なり　○威儀、威ありて儀表とすべきを云　○以恨陛下、原本以の下恒の字あり寮本類史に據て削る　○茅渟、原本渟を淳に作る北本寮本に據て改む茅渟は和泉國日根郡にあり神武紀即位前紀戊午年五月(八四頁)に見ゆ和泉名所圖會日根郡の條に衣通姫の舊跡は中筋村にありと云　○日根野、和泉國日根郡にあり

【九年】茅渟宮、和泉志に日根郡上郷中村にありと云

【十年】是百姓之苦歟、原本歟の字なし北本寮本楓本に據て補ふ

【十一年】等虛辭陪邇、長へにて永久に變らぬを云　○根彌母阿閇椰毛、君も逢へやもにて椰はヨに通じて希望の助辭毛は歎辭　○異舍儺等利、磯魚(イサナ)漁り又は鯨魚(イサナ)捕りにて海の枕詞なり　○宇彌能波摩毛能、海の濱藻のなり　○余留等枳等弘、寄る藻々なにて弘は歎辭なり　○仙覺抄弘を於に作る海の濱藻の風のまに〳〵うち寄するが如く君も永へに時々コリ〳〵行幸し給へよかしと云なり　○奈能利曾毛、莫吉濃にて他人に聞かしむるなかれとのこゝの古事より負へる名なり通證に今所謂穢俵師是也と云又九海等通用能利亦出于此云倭名鈔曰本朝式莫鳴栄奈里曾漢語鈔云神馬藻三字云奈乃里曾按本文未詳但神馬莫鳴之義也云々とあり　○大伴室屋連、錄河内神別に高上連天押日命十一世孫り伴室屋大連之後也とあり　○藤原部、諸國に部民を置かれけむも地名絶えて見えず天武紀十二年に藤原部造賜姓曰連と見ゆ

九年春二月、幸茅渟宮。秋八月、幸茅渟。冬十月、幸茅渟。

十年春正月、幸茅渟。於是皇后奏言、妾如毫毛非嫉弟姬。然恐陛下屢幸於茅渟。是百姓之苦歟。仰願宜除車駕之數也。是後希有之幸焉。

十一年春三月癸卯朔丙午、幸於茅渟宮。衣通郎姬歌之曰、等虛辭陪邇、根彌母阿閇椰毛、異舍儺等利、宇彌能波摩毛能、余留等枳等枳弘、時天皇謂衣通郎姬曰、是歌不可聆他人。皇后聞必大恨。故時人號濱藻、謂奈能利曾毛也。先是衣通郎姬、居于藤原宮。時天皇詔大伴室屋連曰、朕頃得美麗嬢子。是皇后母弟也。朕心異愛之。冀其名欲傳于後葉。奈何、室屋連依勅而奏可。則科諸國造等、爲衣通郎姬定藤原部。

【十四年】莫々紛紛、アリノマガヒは在之亂にて亂雜の狀を云
○焱起蠅散、通證に狀ニ獸之多ニ猶言雲集霧散ニとあり
○島神、淡路國津名郡伊奘諾神社を云釋紀に天書曰十四年行ニ幸淡路國ニ祠ニ伊弉諾大神ニとあり
○眞珠、抄珍寶部に日本紀私記云眞珠之良太麻とあり
○白水郎、抄人倫部に辨色立成云白水郎和名阿萬とあり
○長邑、阿波國那賀郡にあり
○勝於諸海人、類史勝の上能の字あり寮本海人を白水郎に作る
○好深探、原本此三字なし北本楓本中本に據て補ふ
○須臾、原本差頃之に作る北本寮本に據て改む
○蝮、鰒に通じ用ふ鰒は抄龜貝部に本草云鮑一名鰒(阿波比)とあり
○其墓、墓所詳ならず標注(敷田年治)に或人の說を擧げて阿波國板野郡里浦村鰯山の麓にありといへど慥ならず

(乙丑)十四年秋九月癸丑朔甲子(十二)、天皇獵于淡路嶋、時麋鹿猿猪、莫莫紛紛、盈于山谷、焱起蠅散、然終日以不獲一獸、於是獵止以更卜矣、嶋神祟之曰、不得獸者是我之心也、赤石海底有眞珠、其珠祠於我、則悉當得獸、爰更集處處之白水郎、以令探赤石海底、海深不能至底、唯有一海人、曰男狹磯、是阿波國長邑之海人也、勝於諸海人、好深探、是腰繫繩入海底、須臾之出曰、於海底有大蝮、其處光也、諸人皆曰、嶋神所請之珠、殆有是蝮腹乎、亦入探之、爰男狹磯抱大蝮而泛出之、乃息絶以死浪上、既而下繩測海底、六十尋、則割蝮、實眞珠有腹中、其大如桃子、乃祠嶋神而獵之、多獲獸也、唯悲男狹磯入海死之、則作墓厚葬、其墓猶今存之、

(甲戌)廿三年春三月甲午朔庚子、立木梨輕皇子爲皇太子、容姿佳麗、見者自感、同母妹輕大郎皇女、亦艷妙也、太子恒念合大娘皇女、畏有罪而默之、然感情既盛、殆將至死、爰以爲徒空死者、雖有罪、何得忍乎、遂竊通、乃悒懷少息、因以歌之曰、阿資臂紀能、椰摩娜烏免約利、椰摩娜箇

【廿三年】空死、原本空を非に作る北本に據て改む

○因以、寮本仍の一字に作る

彌、斯哆媚烏和之勢、志哆那企貳、和餓儺勾兎摩、箇哆儺企貳、和餓儺勾兎摩、去鰐去曾、椰主區津娜布例、

○阿賣情紀能云々、此歌は足曳の山田を作り山高み下樋を走しせまでの四句は下泣といはむ爲の序なり大意は心にのみ思ひて下泣に泣て墓ひし妻は昨夜こそ安く膚觸れて慥々たる心も少しはやすまれりとなり下樋は表面にあらはさず下に埋めたる樋を云山田は山にありて高きが故に地を掘り下樋を伏せて水を通はすが其下樋の如く下に泣くとなり津娜布例の津は恐くは波の訛ならむか

廿四年夏六月、御膳羹汁凝以作氷、天皇異之卜其所由、卜者曰、有內亂、蓋親親相姦乎、時有人曰、木梨輕太子干同母妹輕大郎皇女、因以推問焉、辭既實也、太子是爲儲君、不得罪、則流輕大娘皇女於伊豫、是時太子歌之曰、於褒企彌烏、志摩珥波夫利、布儺阿摩利、異餓幣利去牟鋤、和餓哆哆瀰山瑇、去等烏許曾、哆哆瀰等異絆梅、和餓兎摩烏由梅、又歌之曰、阿摩儀霧、箇留惋等賣、異哆儺介麼、臂等資利奴陪瀰、幡舍能夜摩能、波刀能、資哆儺企邇奈勾、

【廿四年】羹汁、抄飲食部に羹辯注云有菜曰羹阿豆毛乃とあり熱くして食ふ故にあつものと云

○內亂、字書に謂姦小功以上親父祖妾及與和者とあり

○親々相姦、我國の上古は異母兄弟姉妹の相婚し又は姑庶母異母妹に通することは妨げなかりしかど同母兄弟姉妹の相姦するは罪とせり

○流輕大娘皇女、記は此段傳を異にす

○於褒企彌烏云々、大君（大娘皇女）を島に流さるゝも乘手多く船に乘得れば歸來給はむそれ故に諸共に敷きし疊はゆめ〳〵粗略にすることなかれ疊と云ひても我妻の敷きしものそと云るにて皇女は島流にせらるゝとも其敷きし疊は歸來給ふまで粗略にすべからずと愛情の切なる狀をよみ給ひしなり

○阿摩儀霧云々、アマタムは輕の枕詞、輕少女は大娘の皇女を云、羽狹の山は大和國吉野郡にあること履中紀五年に見ゆ輕少女よ余が痛み悲しみて甚しく泣かば他人が知りぬべき故に羽狹の山の鳩の忍音に泣くが如く余も下泣に泣きつゝあるぞとなり鳩は喉音にて咽ぶが如く鳴く故に譬喩にせられたり

【四十二年】年八十一、原本八十一を若干に作る北本に據て改む應本年の

四十二年春正月乙亥朔戊子、天皇崩、時年八十一、於是新羅王聞天皇

字なし大日本史に本書享年闕舊事紀云七十八古事記云七十八歲甲午正月十五日崩水鏡愚管抄神皇正統記等諸書並云八十今按天皇反正帝同母弟也母后崩全レ今九十八年諸書皆誤今不レ取とあり然るに御母磐之姬は仁德天皇三十五年に薨じ給ひぬれば其年より數ふれば百七年なり

○種々樂人、此樂人は天皇の御大葬に參列する爲に上りしなるべし

○哭、原本哭をアワテと訓るは刀ネをア禾と訓み誤れるなりミネ奉るは慟哭するを云

○冬十一月、下文に冬十月己卯に天皇を葬り奉ること見ゆれば此四字疑らくは衍ならむ

○闕、字書に息也止也とあり

○耳成山、大和國三山の一にして十市(磯城)郡にあり

○畝傍山、同じく三山の一にて高市郡にあり

○顧、字書に眷念也とあり

○琴引坂、葛上(南葛城)郡にあり

既崩、驚愁之貢上調船八十艘、及種種樂人八十、是泊對馬而大哭、到筑紫亦大哭、泊于難波津、則皆素服之、悉捧御調、且張種種樂器、自難波至于京、或哭泣、或歌儛、遂參會於殯宮也、冬十一月、新羅弔使等喪禮既闋而還之、爰新羅人恒愛京城傍耳成山、畝傍山、則到琴引坂、顧之曰、宇泥咩巴椰、彌彌巴椰、是未習風俗之言語、故訛畝傍山謂宇泥咩、訛耳成山謂瀰瀰耳、時倭飼部從新羅人、聞是辭而疑之、以爲、新羅人通采女耳、乃返之啓于大泊瀨皇子、皇子則悉禁固新羅使者而推問、時新羅使者啓之曰、無犯采女、唯愛京傍之兩山而言耳、則知虛言、皆原之、於是新羅人大恨、更減貢上之物色及船數、冬十月庚午朔己卯、葬天皇於河內長野原陵、

穴穗天皇　安康天皇

穴穗天皇、雄朝津間稚子宿禰天皇第二子也、一云、第三子也、母曰忍坂大中姬、

○宇泥咩云々、敵彷はや耳成はやにてはやは歎辭
○原之、字書に宥罪曰原とあり
○長野原陵、書陵式に河内國志紀郡陵墓雲電に南河内郡道明寺村大字國府とあり

【即位前紀】(注)一云第三子、大日本史に今考允恭紀爲其第三子明矣古事記亦同故從之とあり
○稚渟毛二岐皇子、應神天皇々子
○葬禮、原本葬ヲ舞に作る北本に據て改む
○穴穂括箭輕括箭、地調度部征服具に唐韻云箭(夜渡箭)箭受弦處也とあり括は筈の古字なり記に此王子所作之矢者即今時之矢者也此謂穴穂箭也また輕太子云々備作兵器爾時所作矢者與其矢之內故號其矢謂輕箭也とあり古事記と併考ふるに括には深き意味なく穴穂箭輕箭と云に括の字を添て用ひたるなるべしされば訓もアナホヤカルヤと訓むべくアナホヤハズカルヤハズと云は文字に拘泥したる訓な

命、稚渟毛二岐皇子之女也、四十二年春正月、天皇崩、冬十月、葬禮畢之、是時太子行暴虐、淫于姉女、國人謗之、群臣不從、悉隷穴穂皇子、爰太子欲襲穴穂皇子、而密設兵、穴穂皇子復興兵將戰、故穴穂括箭、輕括箭、始起于此時也、時太子知羣臣不從百姓乖違、乃出之匿物部大前宿禰之家、穴穂皇子聞則圍之、大前宿禰出門而迎之、穴穂皇子歌之曰、

於朋摩弊、烏摩弊輸區逞餓、訶那杜加礙、訶區多智豫羅涅、阿梅多知夜梅牟、大前宿禰答歌之曰、瀰椰比等能、阿由臂能古輸孺、於智珥峽等、瀰椰比等等豫牟、佐杜弭等茂由梅、乃啓皇子曰、願勿害太子、臣將議、由是太子自死于大前宿禰之家、一云流伊豫國十二月己巳朔壬午、穴穂皇子即天皇位、尊皇后曰皇太后、則遷都于石上、是謂穴穂宮、當是時大泊瀬皇子欲聘瑞齒別天皇之女等、女名不見諸記、於是皇女等皆對曰、君王恒暴强也、儵忽忿起、則朝見者夕被殺、夕見者朝被殺、今妾等顏色不秀、加以情性拙之、若威儀言語、如毫毛不似王意、豈爲親乎、是以不能奉命、遂遁以不

り
○始起于此時也、輕括箭は鏃を銅にて作り從來の箭と制作の異なれるより之を輕括箭と稱し之に對して從來のまゝに鐵にて作れるを輕括箭と稱し此に穴穗括箭輕括箭と云名稱の始て起れるなり　○物部大前宿禰、履中紀卽位前紀に見ゆ　○於朋摩弊云々、記に到其門時雹大氷雨とあり大前宿禰の門前に至りし時大雨の降來りしかば暫時雨宿りの爲に門の蔭に立寄りて雨を霽れさすべし然かせよと宣給ひしなり記傳に下心には兵士共に門まで進み寄り攻めよとの意なりと云り大前小前は兄弟二人の名金門は堅固なる門を云立寄られのラネはレを延ばしたるにて立寄れの意雨立止めむは止ましめむにて雨の止むまで待たむとなり杜は原本社に作る北本に據て改む　○瀰那比等能云々、宮人の脚結の小鈴が落ちたりとて宮人の立騷ぐを見て鄕人も立騷ぐが決して騷ぐ勿れとなり脚結は膝の下邊に著くる行縢（ハヾキ）の如きもの小鈴は其飾に附るなり小鈴の落たるに太子の宿禰の家に落來させ給へるは官女等の足結の小鈴を取落したるが如くいさゝかなることなれば宮人も鄕人もゆめ〳〵立騷ぐこと勿れ程よく取爲さむとなり　○（注）一云流伊豫國、古事記の傳なり　○遷都于石上、石上は大和國山邊郡なり北本寮本于の字なし　○穴穗宮、志に在山邊郡出村とあり此天皇初めより此地に住み給ひければ遷都于石上と記さでもあるべきを例に依りて如此記せり　○（注）女名云々、此六字集解に私記の攙入として削る　○皆對云、原本皆の字なし應本中本に據て補ふ

聽矣、（ウケ玉ハラ（北））

【元年】幡梭皇女、記に若日下王とあり御兄大草香皇子に對しての御名ならむ　○坂本臣、錄和泉皇別に坂本朝臣建內宿禰男紀角宿禰之後也男白城宿禰三世孫建日臣因居賜姓坂本臣とあり坂本は和泉國和泉郡の地名坂本鄕（泉北郡鄕莊村）是なり　○荇菜、ヲムナメは抄人倫部に妾文字集略云妾（和名乎无奈女）小妻也とあり荇菜の字は毛詩周南關雎に見ゆ多年生の草にて葉は蓴に似て缺刻あり嫩の時は食すべしと云抄に之をアサ、と訓りヲムナメと訓るは關雎の詩の

（甲午）元年春二月戊辰朔、天皇爲大泊瀨皇子、欲聘大草香皇子妹幡梭皇女、則遣坂本臣祖根使主、請於大草香皇子曰、願得幡梭皇女、以欲配大泊瀨皇子、爰大草香皇子對言、僕頃患重病不得愈、譬如物積船以待潮者、然死之命也、何足惜乎、但以妹幡梭皇女之孤而不能易死耳、今陛下不嫌其醜、將滿荇菜之數、是甚之大恩也、何辭命乎、故欲呈丹心、捧私寶名押木珠縵、一云、立縵、又云、磐木縵、附所使臣根使主、而敢奉獻、願物雖微輕賤、納爲信契、於是根使主見押木珠縵感其麗美、以爲盜爲己寶、則詐之奏天皇曰、大草香皇子者不奉命、乃謂臣曰、其雖同族、豈

意によれるなるべし
○押木珠縵、珠縵は萬葉に玉襷かけわ時なしと見え玉を以て飾れる頭髮の裝飾具なり押木は詳ならねど木の枝の形なぜるものを立てゝ之に玉を排置よく飾れるなるべし磐木と云るも同じ意なるべし立縵とは押木の立る狀を云るなるべし
○信契、字書に符契曰信とあり
○大草香皇子之家、原本皇子を天皇に作る北本應本中本に據て改む
○難波吉師、神功紀磯城前紀に吉師祖五十狹芽宿禰あり記に之を難波吉師部之祖とす
○皇尸側、皇下子の字を脫ぜしなるべし
○皇子之妻、原本妻を毒に作る北本弊本に據て改む

以吾妹得爲妻耶、既而留縵入已而不獻、於是天皇信根使主之讒言、則大怒之起兵、圍大草香皇子之家而殺之、是時難波吉師日香蚊父子、並仕于大草香皇子、共傷其君无罪死之、則父抱王頸、二子各執王足、而唱曰、吾君無罪以死之、悲乎我父子三人生事之死不殉、是不臣矣、卽自刎之死於皇尸側、軍衆悉流涕、爰取大草香皇子之妻中蒂姬納于宮中、因爲妃、復遂喚播磨皇女、配大泊瀨皇子、是年也太歲甲午、

【二年】眉輪王、記に目弱王に作る
○大草香皇子、原本大の字なし北本中本に據て補ふ

(乙未)二年春正月癸巳朔己酉、立中蒂姬命爲皇后、甚寵也、初中蒂姬命、生眉輪王於大草香皇子、乃依母以得免罪、常養宮中、

【三年】見弑、記に御年五十六歲とす大日本史天皇卽位下に帝王編年記雄略天皇紀雄曰年五十四皇年代略記五十三歲と書年缺故不書とあり ○二人共に泊瀨天皇記、原本共に下石の字あり北本に據て削る記は紀の誤なるも記の下に北本據ゑイ也の字あり ○二年後乃葬、記傳に脫れありて御大葬の後れとならむと云
○當時皇陵、諸陵式に大和國添下郡、書に寶平家邑陵墓を覽に生駒郡伏見村と字寶夷とあり

(丙申)三年秋八月甲申朔壬辰、天皇爲眉輪王見弑、瀨天皇記三年後、乃葬菅原伏見陵、

日本書紀卷第十三

日本書紀卷第十四

ヤマトフミノマキノツイデトアマリヨマキニアタルマキ

大泊瀨幼武天皇　雄略天皇

大泊瀨幼武天皇、雄朝津間稚子宿禰天皇第五子也、天皇產而神光滿レ殿、長而伉健過レ人、三年八月、穴穗天皇意レ將沐浴、幸于山宮、遂登レ樓兮遊、目因命レ酒兮肆、宴爾乃情、盤樂極、問以言談、顧謂皇后、去來穗別天皇女曰中蒂姬皇女、更名長田大娘皇女也、大鷦鷯天皇子大草香皇子、娶長田王女生眉輪王也、於後穴穗天皇用根臣讒、殺大草香皇子而立中蒂姬皇女爲皇后、語在穴穗天皇紀、曰、吾妹、稱妻爲妹、蓋古之俗乎、汝雖親昵、朕畏眉輪王、眉輪王幼年遊戲樓下、悉聞所談、旣而穴穗天皇枕皇后膝、晝醉眠臥、於是眉輪王伺其熟睡而刺弑之、是日大舍人闕姓字也、驟言於天皇曰、穴穗天皇爲眉輪王見弑、天皇大驚、卽猜兄等、被甲帶刀、率兵自將、逼問八釣白彥皇子、皇子見其欲害、嘿坐不語、天皇乃拔刀而斬、更逼問

【卽位前紀】產而神光滿殿、編年記に產を生に殿を室に作る
○伉健、漢書宣帝紀注に伉は强也とあり
○意將沐浴幸于山宮、山宮は詳かならず唯山近き離宮なるべし沐浴は何の爲にせられしか知り難けれど記に天皇坐神床而晝寢とあるを併考ふるに神祭の爲の沐浴なるべし然るに神祭に當りて登樓云々因命レ酒兮肆宴云々枕皇后膝などあるは御愼みなき御仕業なり、或は神祭終りて後の事にやおはしけむ
○情盤、盤は般と通ず爾雅に盤は樂也とあり
○(注)去來別天皇女云々、集解に以下七十七字は私記の攙入とす
○(注)稱妻爲妹、以下九

字は集解に同じく私記攙入とす
○刺獄、前本中本獄を殺に作る
○大舍人、職員令左右大舍人寮の義解に是供奉之人也とあり舍人は皇太子皇子諸王にも皆附置かるれば天皇の召使はるゝをば特に大舍人と云しなり
○猜、字書に疑也とあり
○率兵、原本率を卒に作る寮本應本中本に據て改む
○案劾、字書に案は考也劾は論人罪狀也とあり
○得間、間の訓ヒトマは人間にて人の見ぬ間なり
○圓大臣、綱中紀に圓大使主に作る大使主は美稱此に大臣と記せるは國事を執るに至れるより改めしなり(一三八頁)
○詛忍逆歟、原本詛を誰に作る寮本應本等に據て改む
○脚帶、安康紀即位前紀に出づ之を索めたるは軍中の行動を輕便にするが爲なり
○飫瀰能古簸云々、オミノコは圓大臣を指すタヘは栲妙荒妙の妙にて布帛の總稱ナヘヲシは七重

坂合黑彥皇子、皇子亦知將害、嘿坐不語、天皇忿怒彌盛、乃復并爲欲殺眉輪王、案劾所由、眉輪王曰、臣元不求天位、唯報父仇而已、坂合黑彥皇子深恐所疑、竊語眉輪王、遂共得間而出、逃入圓大臣宅、天皇使使乞之、大臣以使報曰、蓋聞人臣有事逃入王室、未見君王隱匿臣舍、方今坂合黑彥皇子與眉輪王、深恃臣心、來臣之舍、詛忍送歟、由是天皇復益興兵圍大臣宅、出立於庭、索脚帶、時大臣妻持來脚帶、愴矣傷懷而歌曰、飫瀰能古簸、多倍能婆伽摩鳴、那那陛鳴絁、爾播爾陀陀始諦、阿遙比那陀須暮、大臣裝束已畢、進軍門跪拜曰、臣雖被戮、莫敢聽命、古人有云、匹夫之志難可奪、方屬乎臣、伏願大王奉獻臣女韓媛與葛城宅七區、請以贖罪、天皇不許、縱火燔宅、於是大臣與黑彥皇子、眉輪王、俱被燔死、時坂合部連贄宿禰、抱皇子屍而見燔死、其舍人等(闕名字也)收取所燒、遂難擇骨、盛之一棺、合葬新漢擬本南丘、(擬字未詳、蓋是槻乎)冬十月癸未朔、天皇恨穴穗天皇曾欲以市邊押磐皇

子傳國、而遙付囑後事乃使人於市邊押磐皇子、陽期校獵、勸遊郊野曰、近江狹狹城山君韓帠言、今於近江來田綿蚊屋野猪鹿多有、其戴角類枯樹末、其聚脚如弱木株、呼吸氣息似於朝霧、願與皇子、孟冬作陰之月、寒風肅煞之晨、將逍遙於郊野、聊娛情以騁射、市邊押磐皇子乃隨馳獵、於是大泊瀨天皇彎弓驟馬、而陽呼曰、猪有、卽射殺市邊押磐皇子、皇子帳內佐伯部賣輪、更名仲子抱屍駭惋、不解所由、反側呼號往還頭脚、天皇尙誅之、是月、御馬皇子以曾善三輪君身狹、故思欲遣慮而往、不意道逢邀軍於三輪磐井側、逆戰不久被捉、臨刑指井而詛曰、此水者百姓唯得飲焉、王者獨不能飲矣、十一月壬子朔甲子、天皇命有司、設壇於泊瀨朝倉、卽天皇位、遂定宮焉、以平群臣眞鳥爲大臣、以大伴連室屋、物部連目爲大連、

をしにて幾重も著くるを云ニハニタ、シテアユヒナタスモは庭に立ちて足結を直すなり立たしは立つを延べたる語ナタスのナはタに通ひタヾスなり足結を正すを云モは助辭足結を正すとは今軍立ちせむとして帛の袴を幾重も重ね著け足結を堅く結びて身を整ふるを云　○匹夫之志難可奪、論語子罕に三軍可奪師也匹夫不可奪志也とあるを指せり　○宅七區、記に副五處之屯宅以獻所謂五村屯宅者今葛城五村苑人也とあり　○坂合部費宿禰、錄左京神別に坂合部宿禰火明命八世孫邇倍足尼之後也、又和泉神別に坂合部火闌降命七世孫夜麻等古命之後也とあり又大彦命の後にも坂合部連首あり此坂合部連は何れとも決し難し　○新漢擬本南丘、集解に槻原作擬轉寫誤原注有擬字未詳蓋是槻乎八字後人所加とあり新漢は大和國高市郡の地名なるが大和志に吉野郡新漢南峯俗呼天狗森在今木村とあり高市郡と吉野郡とは界を接すれば後吉野郡に入りしなるべし同郡大淀村下淵の上方に大字今木存す槻は今のケヤキなり　○以古邊押磐皇子、原本磐を盤に作る前本寮本中本に據て改む　○挾獵、原本挾を狹に作る應本に據て改む挾は漢書成帝紀の注に柃謂以木自相貫穿爲闌校耳とあり　○狹々城山君、錄攝津皇別に佐々貴山公大彦命之後也とあり佐々貴は近江國蒲生郡の地名式に同郡沙々貴神社あり此邊に住める山君なり　○來田綿蚊屋野、近江國蒲生郡の地名大安寺資財帳同三綱記に蒲生郡來田綿來田綿寺など見ゆれば同地方なるべし　○其戴角云云、記に指舉角者如枯樹とあり　○其聚脚云々、記に其立足者如荻原とあり弱木は楮にて若木を云株は原本林に作る前本寮本に據て改む　○孟

冬作塗之月云々、文選四京賦の語を取る然は原本然に作る然然相似たるより誤れり文選に據て改む　○帳内、舍人なり皇子皇族に朝廷より附置く人なり軍防令に帳内取六位以下子及庶人爲之給帳内二品一百六十人二品一百四十人云々と見ゆ　○佐伯部、景行紀五十一年に見ゆ　○(注)仲子、前本寮本仲手子に作る　○駭惋、イワケアワテは安閑紀に驚駭を皇極紀に喘息を訓り驚き騷くを云喘息をイワケと訓るは驚くをイワケと云より轉じたるにて驚く時は息つがひし荒くなるより云アッカヒは神代紀に見ゆ　○反側、萬葉九に、反側コイマロビ足ずりしつゝなど見え轉び代すを云此段神代紀諸尊の冉尊の神去ませるを悼みませる條によく似たり元は神代紀の如くありしを漢文に譯してかゝ改めしかと思はる　○御馬皇子、履中天皇々子　○三輪磐井、集解に按大和志城上郡岩坂村有岩坂井二村唯一井群飲不竭蓋此とあり　○命有司設壇、後漢書光武紀に命有司設壇場とある文を取りたれど主もて壇を築きたるにあらで神代ながらの高御座を設けさせ給へるなり　○泊瀬朝倉、帝王編年記に泊瀬朝倉宮城上郡磐坂谷也大和志に在城上郡黑崎岩坂二村間とあり朝倉と云る紀因は錄山城諸蕃秦忌寸の條に見ゆ　○平群臣眞鳥、木菟宿禰の子　○大伴連室屋、允恭紀十一年に見ゆ　○物部連目、舊紀に宇麻志麻治命十一世孫物部目大連公伊莒弗宿禰子とあり

【元年】草香幡梭姫皇女、原本梭を榱に作る中本に據て改む仁德天皇々女にて大草香皇子の御妹　○(注)橘姫皇女、皇女の二字前本に據て補ふ　○侍伊勢大神祠、景行紀廿年五百野皇女を侍せしめ給ひしより此に至るまで齋王のこと見えず洩れたるなるべし　○稚媛、本紀七年に詳なり　○(注)吉備窪屋臣、窪屋は備中國の郡名　○磐城皇子、原本磐を盤に作る前本寮本應本中本に據て改む　○星川稚宮皇子、星川は大和國山邊郡の地名なり此皇子は清寧紀卽位前紀に燔殺のこと見ゆ　○春日臣珥、孝昭紀六十八年に天足彦國押

(丁酉)元年春三月庚戌朔壬子、立草香幡梭姫皇女爲皇后、(更名橘姫皇女)是月立三妃、元妃葛城圓大臣女曰韓媛、生白髮武廣國押稚日本根子天皇、與稚足姫皇女、(更名栲幡娘姫皇女)是皇女侍伊勢大神祠、次有吉備上道臣女稚媛、(一本云、吉備窪屋臣女、)生二男、長曰磐城皇子、少曰星川稚宮皇子、(見下文)次有春日和珥臣深目女、曰童女君、生春日大娘皇女、(更名高橋皇女)童女君者本是采女、天皇與一夜而脤、遂生女子、天皇疑不養、及女子行步、天皇御大殿、物部目大連侍焉、女子過庭、目大連顧謂群臣曰、麗哉女子、古人有云、娜毗騰耶嶋麼珥、(此古語未詳)徐步清庭者、言誰女子、天皇曰、何故問耶、目大連對曰、臣觀女子行步容儀能似天皇、天皇曰、見此者咸言、如卿

人命此和珥臣等始祖也とあり和珥は大和國添上郡の地名なれば春日を冠したり

○春日大娘皇女、後に仁賢天皇の皇后に立給ふ

○娜毗騰耶幡麽珥、娜毗騰は汝なり允恭紀二年に汝を那鼻苔と注せり幡麽珥は母似なり其子の親によく似たるを云麽は原本に磨に作る前本寮本に據て改む

○逎、集韻に通作道或作道とあり道は正韻に言也とあれば道にても逎にてもイフと訓べきなり

○易産腹者云々、かゝる諺は古くより行はれしなるべし

【二年】百濟池津媛、下の注に據るに百濟より貢れる女

○石河楯、應神紀三年に見えし石川宿禰の後ならむ錄左京皇別に石川朝臣孝元天皇々子彦太忍信命之後也とあり

○來目部、神代紀（六〇頁）及神武紀（九〇頁）に見ゆ大伴連の率ゐる部屬

○四支、支は枝にて手足を云

所逎、然朕與一宵而脹、產女殊常、由是生疑、大連曰、然則一宵喚幾廻乎、天皇曰、七廻喚之、大連曰、此娘子以清身意奉與一宵、安輙生疑嫌他有潔、臣聞、易產腹者、以褌觸體、卽便懷脹、況與終宵而妄生疑也、天皇命大連、以女子爲皇女、以母爲妃、是年也太歲丁酉、

（戊戌）二年秋七月、百濟池津媛違天皇將幸、淫於石河楯舊本云石河股合首祖楯、天皇大怒、詔大伴室屋大連、使來目部張夫婦四支於木置假庋上、以火燒死、

百濟新撰云、己巳年、蓋鹵王立、天皇遣阿禮奴跪來索女郎、百濟莊飾慕尼夫人女、曰適稽女郎、貢進於天皇、

冬十月辛未朔癸酉、幸于吉野宮、丙子、幸御馬瀨、命虞人縱獵、凌重巘赴長莽、未及移影、獮什七八、每獵大獲、鳥獸將盡、遂旋憩乎林泉、相羊乎藪澤、息行夫展車馬、問羣臣曰、獵場之樂、使膳夫割鮮、何與自割、羣臣忽莫能對、於是天皇大怒、拔刀斬御者大津馬飼、是日車駕至自吉野宮、國內居民咸皆振怖、由是皇太后與皇后、聞之大懼、使倭采女日媛舉酒迎進、天皇見采女面貌端麗、形容溫雅、乃和顏悅色曰、朕豈不欲覩汝妍唉、乃相携手入於後

○假殿、神代紀上に見ゆ　○(注)己巳年、允恭天皇十八年にて此年より三十年前　○阿嶋奴跪、詳ならず　○女郎、エハシトは彼國の方言なるべし　○夫人、ハシカシも彼國の方言なるべし　○御馬瀬、吉野郡麻志口村卽是なり　○虞人、左傳昭二十年の注に掌山澤之官とあり然れどこゝは獵師なり　○凌重巖、巖は字書に曰山峰とあり集解に凌を陵に作る　○長莽、文選西京賦に獵獵徒赴長莽とあり注に莽は草長謂深且遠也と見ゆ　○未及移彩綱什七八、此二句も西京賦に見え注に獵は殺也とあり時刻未移らざるに既に十の七八を獲たりとなり　○林泉、字書に謂林木泉石とあり　○相羊乎藪澤、字書に有水曰澤無水曰藪また相羊は徘徊と同じとあり藪澤を經り遊ぶを云　○息行夫展車馬、行夫は狩人展は字書に整也また息也とあり　○割鮮、ナマスは生切にて鮮魚をうすく切りてナマながら食ふなり割は字書に以刀裂之とあり　○御者、ムマソヒは馬副なり說文に御は使馬也とあり　○目媛、履中紀卽位前紀に目之媛に作る　○端麗、神代紀に端正を允恭紀に佳麗をキラ〳〵シと訓り　○妍咲、エマヒはエミに同じ笑める狀を云　○相携手、原本手を乎に作る熊本中本に據て改む　○宍人部、食肉を料理する者の部屬なり原本宍を雪に作る誤皇太后、皇の字は前本熊本中本に據て補ふ　○歷問、通證に各唱名而問之也とあり　○宍人部、食肉を料理する者の部屬なり原本宍を雪に作る前本熊本中本に據て改む下同じ　○鄙人所云云々、當時の諺なり貴相知心とは天皇の御心を皇太后の悟りまぜるを鄙人の云へる詞に擬へて語へるなり　○厨人、庖人なり庖厨にありて料理する人を云　○菟田御戸部、菟田は大和國宇陀郡、御戸部は御田部にて皇太后御頭の田作る部民を云　○眞鋒田高天、二人の名なり　○吾子籠、仁德紀卽位前紀に見ゆこゝの吾子籠は其子孫ならむか　○典穗子鳥別、狹穗は氏子鳥別は名　○臣連伴造國造、此神武紀に始て見ゆ臣は臣の尸の氏、連は連の尸の氏を云臣連も伴造の中なれど勢力最大なるが故に別に取出て云るなり伴造は伴は部曲を爲せるを云ふ造は御家津子なり團體を爲せる御家の子の義、中臣忌部卜部鍛作玉作弓削部矢作部籌背是伴造なり其部屬甚多さを以て八十伴緒と云

宮語皇太后曰、今日遊獵大獲禽獸、欲與羣臣割鮮野饗、歷問羣臣、莫能有對、故朕嗔焉、皇太后知斯詔情、奉慰天皇曰、群臣不悟陛下、因遊獵場置宍人部、降問群臣、群臣嘿然、理且難對、今貢未晚、以我爲初膳臣長野能作宍膾、願以此貢、天皇跪禮而受曰、善哉、鄙人所云貴相知心、此之謂也、皇太后視天皇悅、歡喜盈懷、更欲貢人曰、我之厨人菟田御戸部、眞鋒田高天、以此二人、請將加貢爲宍人部、自茲以後、大倭國造吾子籠宿禰、貢狹穗子鳥別爲宍人部、臣連伴造國造又隨續貢、是月置史戸、河上舍人部、天皇以心爲師、誤殺人衆、天下誹謗言、大惡天皇也、唯所愛寵、史部身狹村主青、檜隈民使博德等也、

國造は伴造に對して國郡にありて仕奉る部屬を云　○史戸、集解及信友校本戸を部に作る下文に史部とあればこゝも部とあるべきなれど姓氏錄にも史戸と云ふ氏見えたれば必ず訛なりとも云へからず　フヒトベは文人部にて文筆を以て仕ふる部屬を云　○河上舍人部、河上は吉野川の河上にて其所に吉野宮の舍人部を置き禁中の內舍人に擬へ吉野宮の宿直雜役をせしめ給ひしなるべし（標注の說）　○以心爲師、莊子人間世に見ゆ　○史部、上の史戸に同じ　○身狹村主青、身狹は大和國高市郡の地名に由れる氏村主は戸にて訓のスクリは韓語なるべし錄左京諸蕃に牟佐村主吳孫權男高之後也とあり　○檜隈民使博德、檜隈は大和國高市郡檜前村に由れる氏民使は民を治る職に由れる戸博德は名なり錄右京諸蕃に檜前村主漢高祖男齊王肥之後也又攝津國諸蕃檜前忌寸石占忌寸同祖阿智王之後也とあり此二流の內檜前忌寸の族なるべし

【三年】譖、原本讀に作る寮本中本に據て改む通證に之古知爲强言也古知與乃利古知之古知同とあり字鏡に譖毀也讒也と見ゆ　○湯人廬城部連、湯人は湯坐（ユヱ）なり皇子御誕生の時に產湯に仕ふる人にて已に神代紀垂仁紀に見ゆ廬城は伊勢國壹志郡の地名此氏人廬城部五百木部伊福部と書す皆同じ姓氏錄に火明命の後と云　○汙、前本竒に作る　○任身、任は妊娠と同じ　○流言、傳へ言ふなり　○誘率、原本率を卒に作る諸本に據て改むアトヘは誂に同じくタシは出しとは井の誤にて率なるべし標注にはアトヘキテと訓り　○廬城河、伊勢國壹志郡にあり　○神鏡、皇女の身に副へて持給ひし鏡なるべし　○經死、原本經を絰に作る諸本に據て改む　○虹、抄天地部に虹毛詩注云蟒蝀和名爾之）虹也とあり　集解に按靈異之物所隱沒必有氣而見是其精也と云　○掘虹起處、原掘を堀に作る應本に據て改む　○有石、通證に蓋是醫書所謂石癥也とあり　○執殺、中本殺の下子の字あり　○逃匿、信友校本は此上に國見の二字あり集解には報殺の訓を改めて逃れしは相苦喩なりとす

【四年】葛城山、大和國葛下郡と忍海郡に亘れる

三年夏四月、阿閉臣國見（更名磯鹿特牛）疑詔拷幡皇女與湯人廬城部連武彥曰、武彥汙皇女而使任身、湯人、此云臾衞、武彥之父枳莒喩聞此流言、恐禍及身、誘率武彥於廬城河、僞使鸕鷀沒水捕魚、因其不意而打殺之、天皇聞遣使者案問皇女、皇女對言、妾不識也、俄而皇女賫持神鏡、詣於五十鈴河上、伺人不行、埋鏡經死、天皇疑皇女不在、恒使闇夜來西求覓、乃於河上虹見如蛇四五丈者、掘虹起處而獲神鏡、移行未遠、得皇女屍、割而觀之、腹中有物如水、水中有石、枳莒喩由斯得雪子罪、還悔殺子、報殺國見、逃匿石上神宮、

四年春二月、天皇射獵於葛城山、急見長人、來望丹谷、面貌容儀相似

山にて今南葛城郡にあり河内國に界と金剛山に連なり

○丹谷、丹は支那にては仙に關することに用ふれば此所を仙郷に擬へて丹谷の文字を用ふ

○現人之神、顯身の神と申す義にて天皇の中奉る

○鬼魅、原本魅を導に作る商本に據て改む

○一事主神、式に大和國葛上郡葛木坐一事主神社（名神大月次相嘗新嘗）とある是なり此神社は今河内國南河内郡金剛山上に坐さり

○盤于遊田、字書に盤は樂也書に文王不敢盤于遊田とあり遊は字の如く田は獵なり

○來目水、大和國高市郡にあり

○有德天皇、通證に與上文大靈天皇也相照應ミ云

○河上小野、吉野川の上にて式の鹿鹽神社所在の地なり

○虻、抄虫多部に宗說文云蚊（字亦作蝱阿夫）醬人喰虫也とあり

○蜻蛉、抄蟲多部に蜻蛉一名蜻蛉（加介呂布）本草

天皇、天皇知是神、猶故問曰、何處公也、長人對曰、現人之神、先稱王諱、然後應詔、天皇答曰、朕是幼武尊也、長人次稱曰、僕是一事主神也、遂與盤于遊田、駈逐一鹿、相辭發箭、並轡馳騁、言詞恭恪、有若逢仙、於是日晚田罷、神侍送天皇、至來目水、是時百姓咸言、有德天皇也、秋八月辛卯朔戊申、行幸吉野宮、庚戌、幸于河上小野、命虞人駈獸、欲躬射而待、虻疾飛來噬天皇臂、於是蜻蛉忽然飛來、嚙虻將去、天皇嘉厥有心、詔羣臣曰、爲朕讃蜻蛉歌賦之、群臣莫能敢賦者、天皇乃口號曰、野磨等能、鳴武羅能陀該爾、之之符須登、拖例柯擧能居登、飫哀磨陛爾麻鳴須、一本、以飫哀磨陛爾麻鳴須、易從哀枳彌爾麻鳴須、飫哀枳、瀰簸、賊據鳴枳舸斯題、拖磨磨枳能、阿娛羅爾陀陀伺、一本、以陀陀伺、易伊麻伺、施都麼枳能、阿娛羅爾陀陀伺、斯斯磨都登、倭我伊麻西麼、佐謂麻都登、倭我陁陁西麼、陁倶符羅爾、阿武柯枳都枳都、曾能阿武鳴、婀枳豆波野倶璧、波賦武志謀、飫哀枳瀰爾磨都羅符、儺我柯陁播於柯武、婀岐豆斯麻野麻登、一本、以麼賦武志謀以下易舸矩能御等羅爾於麼武登薩羅瀰豆、野磨等能矩爾鳴、婀岐豆斯麻登以算、因讃

和名にも蜻蛉和名加岐呂布とあれど神武紀の古訓にアキツとあるぞよき　○鳴武羅能陀該爾、小村嶽は吉野郡國栖莊小村上方に在り　○拖例柯擧能居登、此事は獸の伏すないふ　○(注)飫裒枳瀰爾麻鳴須、大君に奏すなり原本彌を珍に作る中本に據て改む　○賊據鳴枳舸斯題、其所を聞かしてなり聞かしてはは聞給ひてなり原本賊を賦に誤る　○拖磨磨枳能云々、玉纓の胡床に立たしにて立たしは立給ひの意抄調度部坐臥具に胡床(阿久良)とあり玉を以て飾りたる胡床なり今の椅子の如きものに立ち給ひしなるべし注の伊麻伺は居坐しなり　○施都覽枳能、倭文纏きのにて倭文は麻布の筋あるものなり胡床を倭文にて纏きて飾るなり　○倭我伊麻西麼、原本麼を磨に作る前本に據て改む　○佐謂麻都登、眞猪待つとなりさは美稱　○陁俱符羅爾、抄形體部に腓訓古無長脚腓也とあれば臂を手腓(タコムラ)と紹へるなり　○波賦武志謀、這ふ蟲もにて昆虫類をすべて匐匍ふ虫と云なり　○飫裒枳瀰爾磨都羅符、大君に順服(マツ)らふにてまつらふは仕奉るにてラフはルの延びたるなり　○儺我柯陀播於柯武云々、形は形見にて汝が名を形見として今より永く此野邊に遺し置きてアキツと言はむとなり一首の大意は大和の小村嶽に猪伏し居ると何人が申すぞ朕れは此事を聞きて玉や綾にて飾りたる胡床に立て猪を待ちてとらむとせしに猪は來らで朕が腕肉を喫はむとて虻飛びつき來りしを蜻蛉飛び來て其虻を速くも咋ひ去れりあはれ昆虫までも朕に仕奉れり蜻蛉に汝が名を形見として此地に遺し置かむとなり　○(注)一本云云々、古事記の傳なりその意は此の如く名に負はむとて虛空(ソラ)見つ倭の國を蜻蛉洲と云となり

蜻蛉、名此地爲蜻蛉野、

【五年】挍獵、漢書揚雄傳に因挍獵賦以風とあり注に謂圍守禽獸而大獵也と云　○努力、本紀廿三年にユメと訓り之に從ふべし　○暴出、急又儻忽をもアカラサマと訓り俄にの意　○五情無主、文選勸進表に見ゆ五情は喜怒愛樂死を云無主は主を失ふにて失魂に同じ　○野須瀰斯志云々、八隅知し我大君は仁德紀五十年に見ゆ遊ばしゝは獵をし給ふを云原本麼を磨に作る前本寮本應本に據て改む猪のうたき畏こみは猪の怒れる聲が恐ろしさにてウタキは今ウナル

(辛丑)五年春二月、天皇挍獵于葛城山、靈鳥忽來、其大如雀、尾長曳地、而且鳴曰、努力努力、俄而見逐、嗔猪從草中暴出逐人、獨徒緣樹大懼、天皇詔舍人曰、猛獸逢人則止、宜逆射而且刺、舍人性懦弱、緣樹失色、五情無主、嗔猪直來欲噬天皇、天皇用弓刺止、擧脚踏殺、於是田罷、欲斬舍人、舍人臨刑而作歌曰、野須瀰斯志、倭俄飫裒枳瀰能、阿蘇麼斯志、斯斯能宇拖枳、舸斯固瀰、倭俄尼碍能裒利志、阿理鳴能宇倍能、婆利我曳陁阿西鳴、皇后聞悲、興感止之、詔曰、皇后不與天皇而顧舍人、對曰、國人皆

と云に同じ記には斯々の下に夜美斯志能(病猪ノ)の一句ありアリヲは荒丘にてその荒丘の上の樣が枝吾兄をなり榛(ハリ)の木は俗にハムノ木と云其枝に登りて命助かりし故に親みて吾が兄よと擬人法に詠めり日本武尊が尾張國尾津前なる松を一つ松吾兄をと詠み給へるに同じ此の歌論(別而作)とあれど記傳には木に登りて命助かりし時に詠めるなるべしと云るはさもあるべし

○安野云々、晏子春秋に國人皆以君安野而不安國好獸而惡人無乃不可乎とあるを採て句を成せり

○豺狼、抄毛群部に狼一名豺和名於保加美とあり字書云豺與狗通

○獵得善言而歸、此段の前後いと漢めきたり

○(注)逸樂女郎也、此五字前本察本なし ○軍君、注に琨支君とあるに同じく卽ち琨支王なり軍は名にて君は彼地の方言なりと云るは非なり ○上君之命、原本之の字なし中イ本に據て補ふ ○各羅島、筑前國志摩(今糸島)郡に韓良郷あり圖を按するに宮浦西浦小田等諸村の地域にて壱岐島と相對したる地なれば此處ならむか尙よく考ふべし ○武寧王、東國通鑑に昆支之子牟大立二十三年薨云々子斯摩立云々書論(武寧又武烈紀四年に立)島王爲武寧王とあり ○主島、前本察本共に右にニリムセマ、左にネリムセマと訓を施せり中本に主をマサシと訓るは據る所を知らず ○五子、原本五を吾に作る前本察本楓本等に據て改む ○(注)辛丑年、卽ち五年なり ○蓋鹵王、原本此下遣王の二字あり應本中本に據て除く

【六年】(二月)泊瀨小野、大和志に城上(今磯

謂、陛下安野而好獸、無乃不可乎、今陛下以嗔猪故而斬舍人、陛下譬無異於豺狼也、大皇乃與皇后上車歸、呼萬歲曰、樂哉、人皆獵禽獸、朕獵得善言而歸、夏四月、百濟加須利君(蓋鹵王也)飛聞池津媛之所燔殺(通稽女邸也)而籌議曰、昔貢女人爲采女、而旣無禮、失我國名、自今以後不合貢女、乃告其弟軍君(琨支君也)曰、汝宜往日本以事天皇、軍君對曰、上君之命不可奉違、願賜君婦而後奉遣、加須利君則以孕婦旣嫁與軍君曰、我之孕婦旣當產月、若於路產、冀載一船、隨至何處、速令送國、遂與辭訣、奉遣於朝、六月丙戌朔、孕婦果如加須利君言、於筑紫各羅嶋產兒、仍名此兒曰嶋君、於是軍君卽以一船送嶋君於國、是爲武寧王、百濟人呼此嶋曰主嶋也、秋七月、軍君入京、旣而有五子、(百濟新撰云、辛丑年、蓋鹵王遣弟琨支君、向大倭侍天皇、以脩先王之好也、)

六年(辛亥)春二月壬子朔乙卯、天皇遊乎泊瀨小野、觀山野之體勢、慨然興

感歌曰、擧暮利矩能、播都制能野磨播、伊底拖智能、與慮斯企野磨、和斯里底能、與盧斯企夜磨能、據暮利矩能、播都制能夜麻播、阿野爾于羅虞波斯、阿野爾于羅虞波斯、於是名小野曰道小野、三月辛巳朔丁亥、天皇欲使后妃親桑以勸蠶事、爰命螺嬴誤聚嬰兒、奉獻天皇、天皇大咲、賜嬰兒於螺嬴曰、汝宜自養、螺嬴卽養嬰兒於宮墻之下、仍賜姓爲少子部連、夏四月、吳國遣使貢獻、

城）郡泊瀨小野、初瀨村西とあり　○擧暮利矩能、泊瀨の枕詞泊瀨は山の中にこめられたる處なれば隱り國の長谷と續けたりと云　○播都制能野磨播、泊瀨の山はなり　○伊底拖智能與慮斯企野磨、出で立ちの宜しき山にて山の姿勢をほめたる詞　○和斯里底能與盧斯企夜磨能、走出の宜しき山にて山の麓の狀を云出立走出と相對して云りハシリをワシリといふは僅をハツカといふに同じ以下三句上句に同じ　○阿野爾于羅虞波斯、嗚呼心妙はしにてアヤは驚歎の辭ウラクハシはウラは心、クハシは缺くることなきを云ひ心に深く愛づるを云打返したるは古歌の例なり　○道小野、此名今聞えず　（三月）螺嬴、人名なり抄蟲多部に爾雅注云蠐螬（佐曾利）似蜂而細腰者也兼名苑云一名螺嬴とありてスガルの訓なし通證に壎囊抄曰佐曾里者佐々利蜂也常陸國人云賀蘇里是也萬葉集云腰細之須輕（スガル）娘子云々今俗名此虫云似我蜂とあり此蟲の名をとりて名とせしは私記に螺嬴取他子爲己子因此爲名とあるが如く他人の嬰兒を取て養ふこと螺嬴に似たるより名づけしなるべし　○蠶、上代よりカヒコをたゞコと訓ること萬葉集其他に見ゆカヒコと云は人家に飼養するに依て名づくコは本名なり蠶の字或は蚕に作る蚕は蟬蚓にて字書に俗用爲蠶字非とあり　○嬰兒、字書に胸前曰嬰抱之嬰前乳養故曰嬰と有　○宮墻之下、之の字は前本寮本應本に據て補ふ　○少子部連、錄左京皇別にも小子部宿禰多朝臣同祖神八井耳之後也大泊瀨幼武天皇御世螺嬴所遣諸國收殺蠶兒誤聚小兒貢之天皇大哂賜姓小兒部連と見え嬰兒を養育することを掌りしより名に負ひしなり　○吳國遣使貢獻、此年は宋孝武帝大明六年に當る吳既に滅びて百數十年の後なり

【七年】（七月）三諸岳神、三諸岳は大和國三輪山なり此に三諸岳の神とあるは三輪山に鎭座す大物主神にはあらずして此山に棲める大蛇を云　○（注）大物主神、原本主の上に代の字あり前本寮

（癸卯）七年秋七月甲戌朔丙子、天皇詔少子部連蠶嬴曰、朕欲見三諸岳神之形、或云、此山之神爲大物主神也、或云、菟田墨坂神也、汝膂力過人、自行捉來、蠶嬴答曰、試往捉之、乃登三諸岳、捉取大蛇、奉示天皇、天皇不齋戒、其雷虺虺、日精赫赫、天皇畏、

本に據て削る
○菟田墨坂神、崇神紀九年（一一五頁）に見ゆ
○魂々、字書に魂二蛇蟲とあるをこゝは毛詩召南に魂々其雷とあるを取て書けるにて雷の形容に用ひたり
○賜名爲雷、上古に雷と云るは雷電の雷のみにあらず恐るべく威力あるものを總べてイカヅチと云り此も其例にて大蛇を指して雷と稱せり其雷を補へるに依て鯉魚に名を賜ひて雷と改め給ひしなり此事靈異記に精しく見えたり
（八月）官者、舍人なり後漢書百官志に官者主宮中婢僕とあり通釈に信女模本に據て官を宦に改む
○弓削部、弓を造る部民なり
○取急、こゝは假初にの意
○吉備下道臣前津屋、下道臣は應神紀二十二年に見ゆ
○（注）或本云云々、此九字原本傍注とす應本楓本中本に載て分註とす
○身毛君、錄左京皇別に

蔽日不見、劫入殿中、使放於岳、仍改賜名爲雷、八月、官者吉備弓削部、虛空取急歸家、吉備下道臣前津屋或本云、國造吉備臣山、留使虛空、經月不肯聽上京都、天皇遣身毛君丈夫召焉、虛空被召來言、前津屋以小女爲天皇人、以大女爲己人、競令相鬪、見幼女勝、卽拔刀而殺、復以小雄雞呼爲天皇、雞、拔毛剪蹇、以大雄雞呼爲己雞、著鈴金距、競令鬪之、見禿雞勝、亦拔刀而殺、天皇聞是語、遣物部兵士卅人、誅殺前津屋并族七十人、是歲吉備上道臣田狹侍於殿側、盛稱稚媛於朋友曰、天下麗人莫若吾姉、茂矣綽矣、諸好備矣、曄矣溫矣、種相足矣、鉛花弗御、蘭澤無加、曠世罕儔、當時獨秀者也、天皇傾耳遙聽、而心悅焉、便欲自求稚媛爲女御、拜田狹爲任那國司、俄而天皇幸稚媛、田狹臣娶稚媛而生兄君弟君也、別本云、田狹臣婦名毛媛者、葛城襲津彦子、玉田宿禰之女也、天皇聞體貌閑麗、殺夫自幸焉、田狹旣之任所、聞天皇之幸、其婦、思欲求援而入新羅、于時、新羅不事中國、天皇詔田狹臣子弟君、與吉備海部直赤尾、曰、汝宜往罰新羅、於是西漢才伎歡因知利在側、乃進而奏曰、

巧於奴者多在韓國可召而使天皇詔群臣曰然則宜以歡因智利副弟君等取道於百濟并下勑書令獻巧者於是弟君銜命率衆行到百濟而入其國國神化爲老女忽然逢路弟君就訪國之遠近老女報言復行一日而後可到弟君自思路遠不伐而還集聚百濟所貢今來才伎於大嶋中託稱候風淹留數月任那國司田狹臣乃喜弟君不伐而還密使人於百濟戒弟君曰汝之領項有何牢錮而伐人乎傳聞天皇幸吾婦遂有兒息兒息已見上文今恐禍及於身可蹻足待吾兒汝者跨據百濟勿使通於日本吾者據有任那亦勿通於日本弟君之婦樟媛國家情深君臣義切忠踰白日節冠青松惡斯謀叛盜殺其夫隱埋室內乃與海部直赤尾將百濟所獻手末才伎在大嶋天皇聞弟君不在遣日鷹吉士堅磐固安錢堅磐此云柯陁之波使共復命遂即安置於倭國吾礪廣津廣津此云比盧岐頭邑而病死者衆由是天皇詔大伴大連室屋命東漢直掬以新漢陶部高貴鞍部堅貴畫部因斯羅我錦部定安那錦譯語卯安那等遷居

牢義(ムゲ)公景行天皇々子大碓命之後也とあり
○大女、小女に對して年長けたる女を云
○小雄雞、下文によりてチヒサカケノヲトリと訓むべくスコシキナルカケノヲトリと訓むは非なり
○金距、抄羽族部鳥體に蔣魴切韻云距(訓阿古江)雞雄脛有岐也とありアコエは足蹶(アケ)にて蹶爪なり是に金芒を施すは鬪ふに利あらしめむとての所爲なり
○禿鷄、上文に毛を拔き翼を剪るとあれば禿はアカハタカと訓むをよしとすツブレは潰の意毛翼なごを取られて身の潰れたるを云
○物部兵士、物部の部下の兵士なり
○吉備上道臣田狹、上道臣は應神紀二十二年に見ゆ(二〇六頁)國造本紀に上道國造輕島豐明朝御世元封中彥兒多佐臣始國造とあり此田狹は其子孫の襲名せしなるべし
○茂矣綽矣、以下八字文選神女賦に出づ
○曄矣溫矣、同じく神女賦に出づ

○鉛花弗卿鬱鬱無加、文選洛神賦に出づ鉛は鉛に同じ鉛花は白粉鬱鬱は香油なり色も繕はず香も加ふることなく自然のまゝにて艷しきを云　○譬世罕儔、罕は遠也遠き世にも類稀なりとなり　○女御、始て此に見ゆされど後世の女御とは異なり天皇のめし給ふ御女（ミメ）といふ義　○田狹臣奏而援、以下十三字類史には分注とす　○（注）別本、諸家に傳はる一書にて本紀の一本にあらず　○豐欲求援、田狹朝廷に奏かむとして其援を求めむと欲せしなり　○中國、史記五帝本紀の注に帝王所、都爲中故曰中國とあり　○吉備海部直、舊紀に海部直に饒速日尊の後とりゆれどそれか否は明かならず　○西漢才伎、西漢は河内漢なり本系詳ならず才伎は手人にて今の技手なり　○今來才伎、今來は外國より今新に來れるを云　○大鳴、海中の大なる鳴と云意にて鳴の名にあらざるべし　○汝之領項云々、領項はクビなり窄鎖は牢固に固じく固きを云汝の頸は牢固なりと云確信ありて他人を伐たむとするか汝の命も亦賴むべからざるものにあらずやとなり　○（注）兒息已見上文、此六字集解私記攙入として削る　○可蹻足待、蹻は字書に舉足行、高也又猶翹也とあり是を爪立つるを云足を爪立てゝ待つべしとなり　○忠臣自日節延青松、訓にて意明かなり實にめでたき語なり　○日鷹吉士、下文に難波日鷹吉士とあり氏族志にこの日鷹吉士を難波忌寸同祖として大彦命の族とす　○倭國書鏡廣津邑、大和志に城下郡にありと云り然るに河内國渡河郡に跡部郷あり用明紀二年に大連間々卽退於阿都（阿都大連之別業所在地名也）と見え廣津も錄河内皇別廣爽津公の條に依家地名負壽來津君者と見えたれば倭國とあれど疑はゝきに似たりよく考ふべし　○計、廣津、以下八字原本案の字の下にあり前本案本に據て此に移す　○東漢直掬、應神紀二十年に倭漢直阿知使主其子都賀（ツカ）使主とある都賀と同人か或は其子の襲名せしなるべし　○新漢、上に出づ　○陶部、土師の造れる土器と異なる外國風の土器を造る人なるべし陶は抄器皿部に瓦器一云陶器鞦訓須惠毛能とあり　○鞍部、鞍作なり是も外國風の鞍作なるべし後に氏となれども姓氏錄には見えず職員令內藏寮及大藏者に典履二人掌縫作鞍履等具及檢校百濟手部百濟手部十人云々とあるは此子孫なるべし　○畫部、畫師なり職員令中務者畫工司に正一人掌繪事彩色判事云々畫師四人畫部六十人とあり錄左京諸蕃漢（モロコシ）に大鬧忌寸出自魏文帝之後安貴公大泊瀨幼武天皇御世率四衆歸化男麁（一名長貴）善繪工小泊瀨稚鷦鷯天皇美其能賜姓首六々見ゆ　○錦部、錦を織る部屬なりニシゴリはニシキオリの略語、錄右京諸蕃に錦織村主韓國人波努志之後也又河內諸蕃に錦部連百濟國速古大王之後也など見えたり其他諸國に此の地名多きはこの部民の住めるなり　○譯語、通事なり推古紀に以鞍作福利爲通事とあり　○上桃原、集解に按推古天皇二十四年紀曰桃原墓聖德太子傳曆備詠曰河內國石川東條太子御廟東南卽此據是則河內國石川郡とあり　○眞神原、崇峻紀に始作法興寺一此地名飛鳥眞神原とある其地にて大和國高市郡なり　○（注）漢手人部、令に見ゆる百濟手部なり　○宍人部、庖丁を云原本宍を害に作る前本楓本應本中本に據て改む

于上桃原、下桃原、眞神原、三所、或本云吉備臣弟君還自百濟、獻漢手人部、衣縫部、宍人部、

【八年】身狹村主青、此人及博德のこと本紀二年に出づ

○取假、前の取急と同訓にて意も同じ假は休暇なり

○蹻馬、馬飼なり

（八年）

八年春二月、遣身狹村主青、檜隈民使博德、使於吳國、自天皇卽位至于是歲、新羅國背誕、苞苴不入、於今八年、而大懼中國之心、脩好於高麗、由是高麗王遣精兵一百人、守新羅、有頃高麗軍士一人取假歸國、時以新羅人爲典馬、典馬、此云于麻柯毗、而顧謂之曰、汝國爲吾國所破非久矣、一云、汝

○鷄之雄者、此諷告いかなる意か詳かならざれど按に平素高麗人を雄雞に譬へたる故に家内養ふ所の雄雞を殺せといへば國内所在の高麗人を殺せとの意に解せられしなるべし

○遺高麗一人、遺は原本遣に作る前本楓本中本に據て改む

○筑足流、新羅の地名なれど詳ならず

○綴旒、抄調度部征戰具に唐韻云旒(波太阿之)旌旗之末垂者也とあり文選册魏公九錫文に當此時若綴旒と見え注に言爲下所執持東西耳とあり

○日本府、我國より設けたる政廳にて今の朝鮮總督府の如し

○高麗諸將未、中本未を來に作る

○地道、地下を穿てる道なり私記にシタツミチと訓り

○輜車、原本輜を轜に作る前本寮本に據て改む釋名に輜車載輜重臥息其中之車也輜厠也所載衣物雜厠其中也とあり

國果成吾土非久矣、其典馬聞之、陽患其腹、退而在後、遂逃入國、說其所語、於是新羅王乃知高麗僞守、遣使馳告國人曰、人殺家內所養鷄之雄者、國人知意、盡殺國內所有高麗人、惟有遺高麗一人、乘間得脫、逃入其國、皆具爲說之、高麗王卽發軍兵、屯聚筑足流城、或本云、都久斯岐城、遂歌舞興樂、於是新羅王夜聞高麗軍四面歌舞、知賊盡入新羅地、乃使人於任那王曰、高麗王征伐我國、當此之時、若綴旒、然國之危殆過於累卵、命之脩短太所不計、伏請救於日本府行軍元帥等、由是任那王勸膳臣斑鳩、斑鳩、此云伊柯屢餌吉備臣小梨、難波吉士赤目子、往救新羅、膳臣等未至營止、高麗諸將未與膳臣等相戰、皆怖、膳臣等乃自力勞軍、令軍中促爲攻具、急進攻之、與高麗相守十餘日、乃夜鑿險爲地道、悉過輜車設奇兵、會明高麗謂膳臣等爲遁也、悉軍來追、乃縱奇兵、步騎夾攻、大破之、二國之怨自此而生、言二國者、高麗新羅也、膳臣等謂新羅曰、汝以至弱當至强、官軍不救、必爲所乘、將成人地殆於此役、自今以後、豈背天朝也、

【九年】(二月)凡河内直、神代紀(二三頁)に見ゆ

○祠胸方神、胸方神は宗像神社なり香賜は奉幣使として采女は神饌供進の爲に遣されしこと平野春日祭等の例にて知るべし

○壇所、祭庭なり

○弓削連、録河内神別に天高御魂乃命孫天吡和志可氣流夜命之後也天武天皇十三年に弓削連賜姓曰宿禰とあり

○國郡縣、原本郡を内に作る前本寮本に據て改む

○三島郡藍原、攝津國に在り三島郡は分れて上下兩郡となる藍原は島下郡に屬す

(三月)神戒天皇、通證に神乃上文所謂胸方神也とあり

○紀小弓宿禰、紀角宿禰の孫

○蘇我韓子宿禰、蘇賀滿智宿禰の子

○大伴談連、室屋の子

○小鹿火宿禰、記傳に小弓宿禰の子なりと云り

○匝羅、神功紀に草羅とあり同地なり

○薄伐、薄は字書に迫也過迫也とあり

(己巳)九年春二月甲子朔、遣凡河内直香賜與采女、祠胸方神、香賜與采女既至壇所(香賜、此云飾抱夫)、及將行事、其采女、天皇聞之曰、祠神祈福可不慎歟、乃遣難波日鷹吉士將誅之時、香賜卽逃亡不在、天皇復遣弓削連豐穗、菩求國郡縣、遂於三嶋郡藍原、執而斬焉、三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是不果行、勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、(談此云甞陁利)小鹿火宿禰等曰、新羅自居西土、累葉稱臣、朝聘無違、貢職允濟、逮乎朕之王天下、投身對馬之外、竄跡吨羅之表、阻高麗之貢、呑百濟之城、況復朝聘既闕、貢職莫脩、狼子野心、飽飛飢附、以汝四卿、拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰襲行、於是紀小弓宿禰使大伴室屋大連、憂陳於天皇曰、臣雖拙弱、敬奉勅矣、但今臣婦命過之際、莫能視養臣者、公冀將此事具陳天皇、於是大伴室屋大連具爲陳之、天皇聞悲頽歎、以吉備上道采女大海、賜於紀小弓宿禰、爲隨身視養、遂推轂以遣焉、紀小弓宿禰等卽入新羅、行屠傍郡、(行屠、並行並擊)新羅王夜聞官軍四面鼓聲、知盡

○襲行、襲は字書に與レ恭同とあり
○頽歎、頽は正字通に頽字之譌とあり頽は字書に懷也壞也とあり
○推轂、相扶くるを云正字通に謂推揚使登進如推車使前也とあり
○(注)行屠云々、此六字集解私記攙入として削る
○喙地、神功紀に喙國とあり
○數百騎、原本騎下馬軍の二字あり前本楓イ本に據て削る
○紀岡前來目連、岡前は平群郡にあり此人も亦紀氏の同族なり
○從軍覓出、恐らくは誤あるべし
○踏叱、雄詰と云に同じ
○已陷、陷は死ぬるを云
○有頃、原本頃を項に作る中本に據て改む
○遺衆、新羅の遺衆なり
○大將軍、名目始めて見ゆ
(五月)大磐宿禰、顯宗紀三年に生磐宿禰と見ゆ
○兵馬船官、馬官と船官となり
○專用威命、コロは神代紀に嗜讓をコロビと訓めるコロにてタチは立なる

得喙地、與數百騎亂走、是以大敗、小弓宿禰追斬敵將陣中、喙地悉定、遺衆不下、紀小弓宿禰亦收兵、與大伴談連等會、兵復大振、與遺衆戰、是夕大伴談連及紀岡前來目連皆力鬪而死、談連從人同姓津麻呂、後入軍中尋覓其主、從軍覓出問曰、吾主大伴公何處在也、人告之曰、汝主等果爲敵手所殺、指示屍處、津麻呂聞之、踏叱曰、主既已陷、何用獨全、因復赴敵、同時殞命、有頃遺衆自退、官軍亦隨而却、大將軍紀小弓宿禰値病而薨、夏五月、紀大磐宿禰聞父既薨、乃向新羅、執小鹿火宿禰、所掌兵馬船官及諸小官、專用威命、於是小鹿火宿禰深怨、乎大磐宿禰、乃詐告於韓子宿禰曰、大磐宿禰謂僕曰、我當復執韓子宿禰、所掌之官、不久也、願固守之、由是韓子宿禰與大磐宿禰有隙、於是百濟王聞日本諸將緣小事有隙、乃使人於韓子宿禰等曰、欲觀國堺、請垂降臨、是以韓子宿禰等並轡而往、及至於河、大磐宿禰飲馬於河、是時韓子宿禰從後而射大磐宿禰鞍瓦後橋、大磐宿禰愕然反視、射墮韓子宿禰、於中

べし言語荒々しく擅に振舞ふ云

○所掌之官、何の官なるか知らず

○百濟王、東國通鑑に擬るに此時は百濟第四主蓋鹵王に當れり

○有縁、中本藻に隙に作る隙は隙の古字なり

○垂降臨、イデマサヘは出幸せを延べたるなり

○鞍瓦後橋、抄調度部に楊氏漢語抄云鞍橋（久良波無）一云鞍瓦とあり鞍の前輪後輪すべてを云後橋は後輪なり

○龍驤虎視、以下折衝四海までの四句十六字は文選冊魏公九錫文に出づ驤は舉也八維は天下の四方四角なり折衝は姦惡を折挫し彊敵を衝突するを云

○喪葬者、職員令に喪儀司正一人掌凶事儀式及喪葬之具とあり朝廷より喪儀司を遣して葬らしめ給ふなり

○田身輪邑、和泉志に日根郡淡輪村舊作田身輪紀小弓宿禰墓在淡輪村東墓呼有小冢七また上道大海墓在淡輪村南俗稱小陵紀小弓妻也とあ

流而死、是三臣由前相競行亂於道、不及百濟王宮而却還矣、於是采女大海、從小弓宿禰喪到來日本、遂憂諮於大伴室屋大連曰、妾不知葬所、願占良地、大連卽爲奏之、天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰、龍驤虎視、旁曉八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、充視喪者、又汝大伴卿、與紀卿等同國近隣之人、由來尙矣、於是大連奉勅、使土師連小鳥、作冢墓於田身輪邑而葬之也、由是大海欣悅不能自默、以韓奴室、兄麿、弟麿、御倉、小倉、針六口送大連、吉備上道蚊嶋田邑家人部是也、別小鹿火宿禰從紀小弓宿禰喪來、時獨留角國、使倭子連（連未詳何姓人）奉八咫鏡於大伴大連、而祈請曰、僕不堪共紀卿奉事天朝、故請留住角國、是以、大連爲奏於天皇、使留居于角國、是角臣等初居角國而名角臣、自此始也、秋七月壬辰朔、河內國言、飛鳥戸郡人田邊史伯孫女者、古市郡人書首加龍之妻也、伯孫聞女產兒、往賀聖家、而月夜還、於蓬墓丘譽田陵下、（蓬墓此云逢騎）逢騎赤駿者、其馬時濩略而龍鬐、歎

り今泉南郡淡輪村あり是なり
○蚊島田邑、備前國上道郡
○角國、周防國都濃郡
○（注 連未詳何姓人、此六字集解に私記攙入として削る
○紀卿、大磐宿禰
○角臣、國造本紀に都怒國造難波高津朝紀朝臣同祖都濃足尼兒田島宿禰定賜國造とあり此文と合はず此は角宿禰新羅に使し還來てこゝに留れるを小鹿火宿禰の事に誤り傳へたるなるべしと記傳に云り

（七月）飛鳥戸郡、河内國安宿郡なり　○田邊史、錄有京諸蕃に漢王之後知總之後也と見え伯孫は姓氏錄に百尊と書げり田邊は通證に今有田邊邑屬國分村とあり　○蓬丘、蓬蒿はイチゴなり陵邊に此樹多かりしより地名となりしなるべし　○譽田陵、應神天皇の山陵にて古市村大字譽田村にあり　○赤駿、赤き馬なり駿は字書に馬之美稱とあり　○蕩略云々、文選赭白馬賦に欻聳擢以鴻驚時濩略而龍翥とあるに據て書けり濩略は甘泉賦の注に寵行之貌也（甘泉賦には蠖略とあり）と云ひ翥は字書に飛舉也と見ゆ　○異體蓬生云々、文選赭白馬賦に異體峯生殊相逸發超攄絶夫塵轍驅驚迅於滅沒とあるに據れり蓬は峯と云ひ注に殊相逸發は殊なる形相の逸れて發するなりとあり　○驄馬、抄牛馬部に驄馬青白雜毛馬也とあり所謂薦毛の馬なり　○超攄絶於埃塵、原本絶を絶に作る諸本に據て改む埃塵は文選には塵轍とあり馬の馳ること轍の塵の起るよりも速なりとの意超攄は驅驚と對句にて行走貌と注せり　○驅驚迅於滅沒、原本驅字重複す應本楓本中本に據て除く又原本驚を驚に作る前本及文選に據て改む走りはすること滅沒するよりも迅速なりとなり滅沒の字は列子に出で文選の注に皆言疾也とありホルモカニシテ失ヌとあるホルは萬葉十九に天雲乎富呂爾布美安多之鳴神毛とある富呂と同言なるべし散々（チリヂリ）に見えて失せぬと云ふ意なるべしモカは助辭なり　○所換土馬也、原本也の字なし前本寮本に據て補ふ土馬は垂仁紀に取土造作人馬及種々物形とある土馬なり

【十年】身狹村主青等、原本等の字なし諸本に據て補ふ
○鵝、抄羽族部に形如雁人家所養とあり釋紀にオホカリと訓り
○水間君、神代紀に見ゆ
○（注 嶺縣、嶺は肥前國神崎郡三根郷是なり

（丙午）十年秋九月乙酉朔戊子、身狹村主青等將吳所獻二鵝、到於筑紫、是鵝爲水間君犬所齧死、（別本云、是鵝爲筑紫嶺縣主泥麻呂犬所齧死、）由是水間君恐怖憂愁、不能自默、獻鴻十隻與養鳥人、請以贖罪、天皇許焉、冬十月乙卯朔辛酉、以水間君所獻養鳥人等、安置於輕村、磐余村二所、

（七月）
聳擢而鴻驚、異體蓬生、殊相逸發、伯孫就視而心欲之、乃鞭所乘驄馬齊頭並轡、爾乃赤駿超攄絶於埃塵、驅驚迅於滅沒、於是驄馬後而怠足、不可復追、其乘駿者知伯孫所欲、仍停換馬相辭取別、伯孫得駿甚歡、驟而入廐、解鞍秣馬眠之、其明旦赤駿變爲土馬、伯孫心異之、還覓譽田陵、乃見驄馬在於土馬之間、取而代而置所換土馬也、

○鴻、抄羽族部に毛詩鴻鴈篇注云大曰鴻小曰鴈(加利)とあり
○養鳥人、文字の如く鳥養なり
○輕村、大和國高市郡
○磐余村、大和國十市郡
〔十一年〕栗太郡、抄に栗本鄉久留毛止あり
○谷上濱、神功紀元年に見ゆ萬葉集に田上とあり
○川瀨舍人、谷上川にて鵜飼を護る人を云谷上川は今田上川と云
○磐余吳琴彈、磐余は地名吳は氏琴彈は名なり令に雅樂寮伎樂師一人義解に謂吳樂とあり
○壡手屋形麻呂、壡手は大和國城下郡の地名屋形麻呂は名なり前本壡を壡に作る
○鳥官、令に見えざれど鳥養あれば之を掌る官職もあるべきなり
○菟田人、菟田は宇陀郡なり
○鳥養部、上に出づ
○直丁、官ぞの內にて駈使する仕丁を云
〔十二年〕木工、抄人倫部に四聲字苑云工(和名太久美)匠也匠巧人也とあり

十一年夏五月辛亥朔、近江國栗太郡言、白鷴鷄居于谷上濱、因詔置川瀨舍人、秋七月、有從百濟國逃化來者、自稱名曰貴信、又稱貴信吳國人也、磐余吳琴彈壡手屋形麻呂等是其後也、冬十月、鳥官之禽、爲菟田人狗所齧死、天皇瞋、黥面而爲鳥養部、於是信濃國直丁與武藏國直丁待宿、相謂曰、嗟乎、我國積鳥之高、同於小墓、旦暮而食、尙有其餘、今天皇由一鳥之故、而黥人面、太無道理、惡行之主也、天皇聞而使聚積之、直丁等不能忽備、仍詔爲鳥養部、

十二年夏四月丙子朔己卯、身狹村主青與檜隈民使博德出使于吳、冬十月癸酉朔壬午、天皇命木工闘鷄御田、一本云、猪名部始起樓閣、於是御田登樓、疾走四面、有若飛行、時有伊勢采女、仰觀樓上、怪彼疾行、顚仆於庭、覆所擎饌、之物也天皇便疑御田、奸其采女、自念將刑而付物部、時秦酒公侍坐、欲以琴聲使悟於天皇、橫琴彈曰、柯武柯嚴能、伊制能、伊制能奴能、婆柯曳鳴、伊哀甫流柯枳底、志我都知厦麻泥爾、飫哀枳瀰爾、

柯拖俱都柯陪、麻都羅武騰、倭我伊能致謀、那我俱母鵝騰、伊比志拖俱彌幡夜、阿拖羅陀俱彌幡夜、於是天皇悟琴聲、而赦其罪、

○鬬鷄、上に云り
○(注)猪名部、應神紀三十一年に見ゆ
○(注)蓋誤也、此三字集解に私記攙入として削る
○樓閣、高殿なり仁德紀に出づ　○四面、原本面を方に作る諸本に據て改む　○采女、記に伊勢國之三重采女とあり　○秦酒公、仁德紀四十三年に見ゆ　○(注)饌者云々、此七字集解私記攙入として削る　○物部、職員令刑部省司獄司に物部四十人掌主當罪人決罰事とある是なり　○柯武柯嚏能、伊勢の枕詞　○伊制能伊制能奴能、伊勢の伊勢の野のにて折返して云るは調べのためなり此に伊勢國を引き出でたるは伊勢の采女を聞えしめむとなり　○滲柯屯鳴、詳ならねど榮枝なるべし　○伊哀甫流柯枳底、此句解き難けれど試に云はゞ木を伐取る意にて伊は發語ホフルは屠ると同じく伐取ることか　○志我都矩屢麻泥爾、志は其なり其木の盡るまでになり　○飫哀枳瀰爾、大君になり　○柯拖俱都柯陪麻都羅武騰、堅く仕奉らむとなり　○倭我伊能致謀、我命もなり　○那我俱母鵝騰、長くもがとなりモガは希望の意　○伊比志拖俱彌幡夜、言ひし工はやなり　○阿拖羅陀俱彌幡夜、可惜工はやなり一首の意は伊勢の野に榮ゆる木を其木の盡るまで堅らかに宮造り仕奉らむと欲しそれ故に我命も長くもがもと思ひしものを今將に罪せられむとするは實に惜しむべきことなりとなり橘守部の說に伊勢の五十鈴宮の五百世經るまで榮え坐む如く大君に仕奉らむと我命を長くもがもと思ひしに今罪せられむとするは惜むべきことなりと解きたれど賤しき工匠の例に大御神の大宮を引出むは畏きことならずや

【十三年】(三月)狹穗彦、開化天皇々子彦坐王の子、垂仁紀四年五年參照
○玄孫、抄人倫部子孫類に爾雅云曾孫之子爲玄孫和名夜之波古倭訓栞に彌類孫の義にやと云
○山邊小嶋子、山邊は大和國山邊郡なり
○馬八匹大刀八口、被具なり
○耶麼能謎能云々、山邊の小島子の爲には馬の八匹ばかりは惜くもなしとなり涅羅賦の涅は前本は沮に寮本は但に作るテラフと訓みて釋紀に人照也

(己酉)十三年春三月、狹穗彦玄孫齒田根命竊干采女山邊小嶋子、天皇聞以齒田根命、收付於物部目大連而使責讓、齒田根命以馬八匹大刀八口、祓除罪過、既而歌曰、耶麼能謎能、故思麼古喻衞爾、比登涅羅賦、宇麼能耶都擬播、鳴思稽矩謀那斯、目大連聞而奏之、天皇使齒田根命資財露置於餌香市邊橘本之土、遂以餌香長野邑賜物部目大連、秋八月、播磨國御井隈人文石小麻呂有力强心、肆行暴虐、路中抄刼、不使通行、又斷商客艖舶、悉以奪取、兼違國法、不輸租賦、於是天皇遣春日

言瞋罪也と解きたれど涅にても泥にてもテと訓べきにあらず敷田氏ネラフにて人狙ふ也物部氏の事を云さいへり此句よく考ふべし

○飼香市邊橋本之土、河内志に古市郡會賀郷賀市の「古市村北會我川西」又呼曰「會我」とあり古へ名高かりし市なり（今南河内郡道明寺村國分の舊名）橋本は橋樹を植ゑたる地、中本には橋本とあり橋本ならむには衛我河に架けたる橋の本なり

○長野邑、河内志に古市郡長野山饗田碓井土師等即此一名藻伏山舊墟志紀郡一見廟陵式とあり

（八月）御井陵、所在未詳播磨風土記佐用郡の條に獨臺都比古命治井養狭郡云吾古多國故曰大村治井盡号曰御井とある御井是か

○文石、倭名抄に飾磨郡穴無郷見ゆ之と同じきか

○抄劫、訓義未詳中本にはカスメオビヤカシテとあり字書に抄は略取也劫は刦倍作刦強取也奪去也とあり　○商客艇紺、抄人倫部に商賈を阿岐比斗と訓り字書に艇は小舟也紺は艇之小者とあり　○不輸、輸は字書に致也とあり　○春日小野臣、記に天押帶日子命（孝昭天皇々子）者春日臣小野臣之祖とあり　○火炬、炬は字書に束蒸以燒也とあり　（九月）九月の上に秋の字あり衍なり故に削る　○實、字書に實は到又也凡庫貨財曰所、木（節略）とあり木を斫る爲の奉なり字鏡に實（知今反）椓字礩也阿氏とありアテは木を斫る時に下に當つる意　○使脱衣裙、抄裝束部に野王案在上曰衣在下曰裳物謂之服また裙裳釋名云上曰裙下曰裳（音裳毛）とあり玉篇には裙下裳也とあり上に著くるを裳さいひ下に著くるを裙とすそはさにかくに上に著くるをキヌと

小野臣大樹、領敢死士一百、並持火炬、圍宅而燒、時自火炎中白狗暴出、逐大樹臣、其大如馬、大樹臣神色不變、拔刀斬之、卽化爲文石、小麻呂、九月、木工猪名部眞根、以石爲質、揮斧劉材、終日劉之、不誤傷及、天皇遊詣其所、而怪問曰、恒不誤中石耶、眞根答曰、竟不誤矣、乃喚集采女、使脱衣裙、而著犢鼻露所相撲、於是眞根暫停仰視而劉、不覺手誤傷及、天皇因嘖讓曰、何處奴不畏朕、用不貞心、妄　輒輕答、仍付物部、使刑於野、爰有同伴巧者、歎惜眞根、而作歌曰、婀拖羅斯枳、偉儺謎能陀倶彌、柯該志須彌儺嗜、旨我那稽麼、拖例柯柯該武預、婀拖羅須彌儺嗜、天皇聞是歌、反生悔惜、喟然頹歎曰、幾失人哉、乃以赦使、乘於甲斐黑駒、馳詣刑所、止而赦之、用解徽纏、復作歌曰、農播拖磨能、柯彼能矩盧古磨、矩羅枳制播、伊能致志儺磨志、柯彼能倶盧古磨、一本、換伊能致志儺磨志、而云伊志柯孺阿羅磨志、

いひそれに對して下に著くるをモと云しは疑なく此は上の衣と下の裙とを脱がしめたるなり　○着犢鼻、神代紀海宮游幸章第四一書に見ゆ此は男子の著くべきものを強ひて女子に著けしめ膚を全く露はして相撲せしめられしなり　○輕答、輕は前本紀本に據て補ふ　○婀拖維斯根云々、可惜（アタラ）しき猪名部の工匠掛けし墨縄其が無からば誰か掛けむ可惜墨縄にて猪名部の工匠が若し死なば今より後は誰がその墨縄なば打つべき實に惜しむべき事ぞと工匠の道の將に癈れむとするを慨歎して詠めるなりかけし墨縄とは墨縄を打つを云シガナケバは其が無からばにて其人が無くあらばなり　○喟然、字書に歎聲とあり　○甲斐黒駒、甲斐國は上古より名馬を産したれば牧を設けて年毎に良馬を上らしめられしにて類聚三代格天長四年太政官符に置甲斐國牧監事甲斐國都留郡有牛馬之牧毎年依本寮之命貢駿馬肥牛と見え延喜式北山抄年中行事歌合等諸書にも見えたり此黒駒は甲斐國より進れり故に甲斐の黒駒と云　○徽纆、易坎象に繫以徽纆說文に三股曰徽兩股曰纆（並縄也）また纆は繩也とあれば纆は當に𦃃に作るべし　○農播拖磨能云々、ヌハタマは黒にかゝる枕詞甲斐の黒駒に若し鞍を着けなどせばその間に直根は刑せらるべし鞍をも置かず黒駒に鞭打ちて迅く〳〵刑所に至りて赦罪の旨を傳へよとなり注の伊志柯孺阿羅磨志は伊は發語及(シ)かずあらましにて處刑以前に刑所に及ふこと能はじとなり

【十四年】(正月)吳國使、記傳に此は實に彼(南朝)國王より奉れる使にあらじ韓人ども議りて吳國王の使として吳國の人を遣したるならむと云り十四年は宋明帝泰始六年なり　○才技、仁賢紀六年に巧手者及工匠をテヒトと訓り　○漢織吳織云々、應神紀三十七年に見え漢を穴に作れり　○住吉津、記の仁德天皇の段に定墨江之津とあり今の大坂市の住吉なり　○磯齶津路、今詳ならず萬葉六に遊覽住吉濱遷宮之時道上守部王應詔歌に從千沼回雨曾零來四八津之白水郎云々と見え攝津志に住吉郡住吉浦又曰磯齶津とあり

十四年春正月丙寅朔戊寅、身狹村主青等共吳國使、將吳所獻手末才伎漢織吳織及衣縫兄媛弟媛等、泊於住吉津、是月、爲吳客道通磯齶津路、名吳坂、三月、命臣連迎吳使、卽安置吳人於檜隈野、因名吳原、以衣縫兄媛奉大三輪神、以弟媛爲漢衣縫部也、漢織吳織衣縫是飛鳥衣縫部、伊勢衣縫之先也、夏四月甲午朔、天皇欲設吳人、歷問群臣曰、其共食者誰好乎、群臣僉曰、根使主可、天皇卽命根使主、爲共食者、遂於石上高拔原饗吳人、時密遣舍人視察裝飾、舍人復命曰、根使主所著玉縵、大貴最好、又衆人云、前迎使時又亦著之、於是天皇欲自見命臣連裝如饗之時、引見殿前、皇后仰天歔欷啼泣傷哀、天皇問曰、何由

泣耶、皇后避床而對曰、此玉縵者、昔妾兄大草香皇子、奉穴穗天皇勅進妾於陛下時、爲妾所獻之物也、故致疑於根使主、不覺涕垂哀泣矣、天皇聞驚大怒、深責根使主、根使主對言、死罪死罪、實臣之愆、詔曰、根使主、自今以後、子子孫孫八十聯綿、莫預宰臣之例、乃將斬之、根使主逃匿、至於日根、造稻城而待戰、遂爲官軍見殺、天皇命有司二分子孫、一分爲大草香部民以封、皇后、一分賜茅渟縣主爲負囊者、卽求難波吉士日香香子孫、賜姓爲大草香部吉士、其日香香等語、在穴穗天皇紀、事平之後、小根使主小根使主、根使主子也、夜臥謂人曰、天皇城不堅、我父城堅、天皇傳聞是語、使人見根使主宅、實如其言、故收殺之、根使主之後、爲坂本臣、自是始焉、

○吳坂、今詳ならず記傳に住吉より喜連へ行く間の低き岡山の所なるべしと云　○檜隈野、大和國高市郡　○吳原、高市郡栗原なるべし　○飛鳥衣縫部、崇峻紀元年に壞飛鳥衣縫造祖樹葉之家始作法興寺とあり今の法興寺の地に住みしなり　○伊勢衣縫、應神紀三十七年(二〇八頁)に見ゆ　(四月設、アヘタマフは神代紀及下文に饗をアヘと訓り饗應の意字書に唐制諸郡燕蕃將吏謂之旬設云々とあり又物語類にも饗應することをアルジマウケと云るはこゝの設の字に當れり　○共食者、客と相共に飲食する人を云通證に相宴(アヒウタゲ)人にてアタケのウを省きてアヒタゲヒトと云るなりと云ひ通釋には相喫人と云治部式に凡蕃客入朝者差云々供食二人(掌饗日各對使者飲宴)とある是なり　○石上高拔原、石上は山邊郡なれど高拔原は今詳ならず　○大貫、ケヤカは貫の字の古言ケサヤカのサを省きて書けるか　○引見、字書に謂導見天子也とあり　○歔欷、字書に悲泣氣咽而抽息也とありすホシナケクは思し歎くなり　○何由泣耶、何由の二字前本應本に據て補ふ　○不覺、オロカは愚に云ふ不覺(フカク)の意　○根使主對言、根使主の三字前本應本寮本に據て補ふ　○死罪、通證に言罪當誅也とあり　○子々孫々八十聯綿、神代紀に子孫八十連屬(ウミノコノヤツヅキ)と見ゆ　○日根、和泉國日根郡　○稻城、垂仁紀五年に見ゆ　○大草香部、大草香皇子の御名代の民なり　○茅渟縣主、錄和泉皇別に珍縣主彌城入彥命三世孫御諸別命之後也とあり集解に按日根根使主本居之地而蓋茅渟所管故賜其縣主とあり根使主を討つに功ありしなるべし　○負囊者、古事記に於大穴牟遲神負帶爲從者とあり賤しき職なり　○大草香部吉士、錄に見えず天武紀十二年十月の條に草壁吉士賜姓曰連とある是ならむか　○在穴穗天皇紀、安康紀元年に出づ　○收、字書に捕也拘收也とあり　○坂本臣、坂本は和泉國和泉郡坂本郷是なり

茅渟縣主に賜ひし根使主の子孫此の地に住して後坂本臣の姓を賜はりしなるべし

【十五年】秦民、熱本中本民を氏に作る、應神天皇十四年に弓月君の率ゐ來りし百廿七縣の民なり錄左京諸蕃太秦公宿禰の條に大鶴鶏天皇御世以百廿七縣秦民分置諸郡卽使養蠶織絹貢之云々と見ゆ

○秦造酒、錄山城諸蕃秦忌寸の條に普洞王(弓月君の孫)男秦公酒大泊瀨稚武天皇御世爾普洞王時秦氏摠被却略今見在者十不存一請遣勅使拾括招集天皇遣使小子部雷率大隅阿多隼人等搜括鳩集得秦氏九十二部一萬八千六百七十人遂賜於酒爰率秦氏養蠶織絹盛篚詣闕貢進如丘如山積畜朝廷天皇嘉之特降寵命賜号曰禹都萬佐是盈積有利益之義也云々とあり　○百八十種勝、百八十種は多きをいふ勝は通證に或訓末佐蓋禹豆麻佐之略集解に按勝部蓋優勝之義諸秦氏之中優勝織工者とあり錄に上勝木勝不波勝秦勝等の姓見ゆ　○奉獻、前本奉の字なし　○庸調絹縑、庸調は崇神紀十二年に見ゆ縑は抄布帛部に毛詩注云絹(加止利)縑也釋名云縑其絲細緻數兼於絹也とあり原本調の下御調也の三字あり前本寮本中本等に據て削る　○禹豆麻佐、拾遺に言隨積埋益也とあり

十五年、秦民分散、臣連等各隨欲駈使、勿委秦造、由是秦造酒甚以爲憂、而仕於天皇、天皇愛寵之、詔聚秦民賜於秦酒公、公仍領率百八十種勝、奉獻庸調絹縑、充積朝庭、因賜姓曰禹豆麻佐、一云禹豆母利麻佐、皆盈積之貌也、

【十六年】殖桑、田令に凡課桑漆一上戸桑三百根漆一百根以上中戸桑二百根漆七十根以上下戸桑一百根漆卌根以上云々と見え令の制度に於ても桑蠶を奬勵せられたり　○漢部、漢人(阿知使主の後)の部民なり　○賜姓曰直、此氏人大和と河内に分れ住せる故大和漢直河内漢直あり天武天皇十一年倭漢直に連姓を賜ひ十四年六月倭及河内漢直に忌寸姓を賜ふ　○(注)一云、原本一の下本の字あり前本寮本に據て削る

十六年秋七月、詔宜桑國縣殖桑、又散遷秦民使獻庸調、冬十月、詔聚漢部定其伴造者、賜姓曰直、一云、「賜」漢使主等、賜姓曰直、

【十七年】朝夕御膳、古へ御饌は朝夕に聞食され一般にも朝夕に之を食す故に祝詞にも朝御食夕御食と云り三度之を食するは後世の事なり　○清器、通證に今按凡飲

十七年春三月丁丑朔戊寅、詔土師連等使進應盛朝夕御膳清器者、於是土師連祖吾笥仍進攝津國來狹狹村、山背國內村、俯見村、伊勢國藤形村、及丹波但馬因幡私民部、名曰贄土師部、

食御器以土器爲貴陶器爲清潔此遺風耳とあり　○來熒々村、攝津志に能勢（今豐島郡宿野村舊名來熒々制造有十鎧宿野村出とあり　○内村、抄に綴喜郡字賀郷あり山城志に綴喜郡内里一名箕里とあり（今有知郷村と云）　○俯見村、山城志に紀伊郡代見日本紀作俯見とあり今の代見町なり　○藤形村、延喜儀式帳に壹志藤方片樋宮倭姫世記論述抄に藤方村今在津城南一里屬一志郡とあり　○私民部、細義は通證に蓋以民人爲藩籬也と云り私の字を加へたるは公の民部に對して云り　○賀土師部、錄大和神別に賀土師連天穗日命十六世孫意富曾禰連之後也とあり賀は凡て供御に就きて云語なり

【十八年】朝日郎、未詳

○伊賀青墓、所在未詳

○相持、相互に進擊せずして各其位置を維持するを云左傳昭元年に子與子家持之、杜注に持之無所取與とあり

○聞物部、聞は豐前國企敎郡なり

○翳、字書に掩也蔽也とあり

○猪名部、前本察本名を使に作る是非を決し難し猪名部にても猪使部にても蒐代宿禰が所有せる私の部曲なるべし之を地名とするは恐らく非ならむ

【十九年】穴穗部、天皇の御兄安康天皇に御子坐さざりし故に其御名代として置かれしなり

十八年秋八月己亥朔戊申、遣物部菟代宿禰、物部目連、以伐伊勢朝日郎、朝日郎聞官軍至、卽逆戰　於伊賀青墓、自矜能射、謂官軍曰、朝日郎手誰人可中也、其所發箭穿二重甲、官軍皆懼、菟代宿禰不敢進擊、相持二日一夜、於是物部目連自執大刀、使筑紫聞物部大斧手執楯、叱於軍中、俱進、朝日郎乃遙見、而射穿大斧手楯二重甲、并入身肉一寸、大斧手以楯翳物部目連、目連卽獲朝日郎斬之、由是菟代宿禰羞愧不克、七日不復命、天皇問侍臣曰、菟代宿禰何不復命、爰有讃岐田虫別、進而奏曰、菟代宿禰怯也、二日一夜之間不能擒執朝日郎、而物部目連奉筑紫聞物部大斧手、獲斬朝日郎矣、天皇聞之怒、輙奪菟代宿禰所有猪名部、賜物部目連、

十九年春三月丙寅朔戊寅、詔置穴穗部、

（丙辰）廿年冬、高麗王大發軍兵、伐盡百濟、爰有少許遺衆、聚居倉下、兵粮既盡、憂泣茲深、於是高麗諸將言於王曰、百濟心許非常、臣每見之、不覺自失、恐更蔓生、請遂除之、王曰、不可矣、寡人聞、百濟國者、爲日本國之官家、所由來遠久矣、又其王入仕天皇、四隣之所共識也、遂止之、百濟記云、蓋鹵王乙卯年冬、狛大軍來、攻大城、七日七夜、王城陷、遂失尉禮國、王及大后王子等皆沒敵手、

【廿年】高麗王云々伐盡百濟、三國史記を按るにこの年は宋後廢帝元徽四年高麗長壽王六十四年百濟文周王二年に當れり高麗の百濟を滅ぼす事は三國史記に二十一年（蓋鹵王）秋九月麗王巨璉帥兵三萬來圍王都漢城、閉城門不能出戰、麗人分兵爲四道來攻、父棄鼠縱火焚燒城門、人心危懼、或有欲出降者、王窘不知所圖、領數十騎出門西走、麗人追而害之とあり蓋鹵王の殺されしは十八年なれば雄略天皇の十九年にて一年の差あり百濟記に乙卯年とあるは三國史記とよく符合せり又本書にも百濟記にも冬とあるを三國史記には秋九月とし月の異同あり　○倉下、ヘスオトは通證に蓋韓語也とあり　○百濟心許非常、以下請遂除之までは隋書高祖紀の文に據りて書すコ、ロバエは綏靖紀卽位前紀に立操を皇極紀に意氣を訓り心許は通證に猶言心底とあり　○憂生、左傳隱元年に無使滋蔓、蔓難圖也云々とありウマハリは允恭紀四年に蕃息を訓りはびこるを云　○其王、原本其の字なし前本寮本に據て補ふ　○（注）狛、狛は貊とあるを正しとす記傳に高麗に貊字を書くは彼隣國に濊貊と云ふ國あり又後漢書に勾驪一名貊耳と云ひ又其別種に小水貊ありされば貊と云は其あたりの凡ての舊名かと云　○王城陷、百濟當時の都は漢城なり三國史記に近肖古王二十六年（仁德天皇五十九年東晉簡文帝咸安元年）移都漢山とあり漢山は卽ち漢城なり　○尉禮國、卽ち百濟國なり始祖溫祚尉禮城に都せしに據りて尉禮國と云り尉禮は三國史記に百濟始祖溫祚王都河南尉禮城と見え文獻備考に忠淸（今忠淸北）道稷山郡新羅時代の蛇山縣なりと云　○大后、原本に右に斤於流コニフルクサシ左にコオクサシムコムサルクサシムと傍訓を附す中本にコンチルクサシムとあり楓本は原本と殆ど同じくコニフルクサシのサシなくコオクをコオルクとす

（丁巳）廿一年春三月、天皇聞百濟爲高麗所破、以久麻那利賜汶洲王、救興其國、時人皆云、百濟國雖屬既亡、聚憂倉下、實賴於天皇、更造其國、

【廿一年】久麻那利、下文分注に久麻那利者任那國下哆呼利縣之別邑也とあり三國史記を按るに文周王元年移都於熊津と見え此地は今の忠正南道公州の地なり熊津は新羅時代（神文王名を改む）の名稱にて百濟の時には熊川と稱せり熊川卽ち久麻那利なること疑なし　○汶洲王、三國史記に文周王（或作汶洲）蓋鹵王之子也とあり　○（注）末多王、汶洲の子文周王の弟汶洲王蓋鹵王母弟也、日本舊記云、以久麻那利賜末多王、蓋是誤也、久麻那利者任那國下哆呼利縣之別邑也、

昆支の子なり二十三年紀に詳に見ゆ　○下略呼唎聲、原本驚を聊に作る應本中本に據て改む原本にアルシタコリノコホリと訓り

【廿二年】丹波國餘社郡、丹後國與謝郡なり續紀五に和銅六年割丹波國五郡始置丹後國とあり此時は分國以前なり故に丹波とあり　○管川、釋紀所引丹後風土記に與謝郡日置里此里有筒川村此人夫日下部首等先祖名云筒川嶼子爲人姿容秀美風流無類所謂水江浦嶼子者也云々と見ゆ　○水江、前本寮本瑞江に作る　○蓬萊山、山海經海內北經に蓬萊山在海中注に上有仙人宮室皆以金玉爲之鳥獸盡白望之如雲在渤海中と見ゆ　○語在別卷、浦島子の傳は本朝神仙傳に見ゆ事奇異に屬する故に別卷にありと云ひて略せしなるべし集解には此四字私記據入謂別卷者卽私記とあり

（戊午）廿二年春正月己酉朔、以白髮皇子爲皇太子、秋七月、丹波國餘社郡管川人、水江浦嶋子、乘船而釣、遂得大龜、便化爲女、於是浦嶋子感以爲婦、相逐入海、到蓬萊山、歷觀仙衆、語在別卷、

【廿三年】四月、文斤王、（或云壬乞）文周王之長子とあり年十三にて位を繼ぎ三年にて薨ず　○昆支王、軍君なり本紀五年に見ゆ　○末多王、東國通鑑東城王元年の條に冬十一月百濟王三斤薨文周王弟昆支之子牟大立とあり　○誡勅、原本試に作る下文に據て改む　○安致臣、舊紀天孫本紀に饒速日命九世孫物部竺志連公奄智（アチ）綾連等之祖とあり　○馬飼臣、本系詳ならず　○七月、賞罰支度、以下並付皇太子に至る十三字

（己未）廿三年夏四月、百濟文斤王薨、天皇以昆支王五子中、第二末多王、幼年聰明、勅喚內裏、親撫頭面、誡勅慇懃、使王其國、仍賜兵器、并遣筑紫國軍士五百人、衛送於國、是爲東城王、是歲、百濟調賦益於常例、筑紫安致臣、馬飼臣等、率船師以擊高麗、秋七月辛丑朔、天皇寢疾不預、詔賞罰支度、事無巨細、並付皇太子、八月庚午朔丙子、天皇疾彌甚、與百寮辭訣、並握手獻欷、崩于大殿、遺詔於大伴室屋大連、與東漢掬直曰、方今區宇一家、烟火萬里、百姓艾安、四夷賓服、此又天意、欲寧區夏、所以小心勵己、日慎一日、蓋爲百姓、故也、臣連伴造、每日朝參、國司

郡司隨時朝集、何不罄竭心府、誠勅慇懃、義乃君臣、情兼父子、庶藉臣連智力內外歡心、欲令普天之下、永保安樂、不謂、遘疾彌留、至於大漸、此乃人生常分、何足言及、但朝野衣冠未得鮮麗、教化政刑猶未盡善、興言念此、唯以留恨、今年踰若干、不復稱天、筋力精神一時勞竭、如此之事本非爲身、止欲安養百姓、所以致此、人生子孫誰不屬念、既爲天下事須割情、今星川王、心懷悖惡、行闕友于、古人有言、知臣莫若君、知子莫若父、縱使星川得志、共治家國、必當戮辱遍於臣連、酷毒流於民庶、夫惡子孫已爲百姓所憚、好子孫足堪負荷大業、此雖朕家事、不容隱、大連等民部廣大充盈於國、皇太子地居上嗣、仁孝著聞、以其行業堪成朕志、以此共治天下、朕雖瞑目、何所復恨、一本云、星川王腹惡心麁、天下著聞、不幸朕崩之後、當害皇太子、汝等民部甚多、努力相助、勿令侮慢、是時、征新羅將軍吉備臣尾代行至吉備國過家、後所率五百蝦夷等聞天皇崩、乃相謂之曰、領制吾國天皇既崩、時不可失也、乃相聚結、侵寇傍郡、於是尾代從家來、會蝦

隋書高祖紀の文に據れり支度は通證に度者計也支者分也計分年貢雜物之義也今俗法令云於伎弖備用云支度卽此義とあり

(八月)天皇疾彌甚、以下朕雖瞑目何所復恨に至る三百四十四字隋書高祖紀に據て文を成せり

○辭訣並握手、並の字は前本應本中本に據て補ふ

○崩于大殿、大日本史に本書享年缺脫事紀古事記並曰一百二十四古事記注云己巳年八月九日崩水鏡一代要記並曰九十三神皇正統記曰八十愚管鈔曰百四按本書允恭帝七年十二月皇后產大泊瀨天皇之夕帝始幸藤原宮據之推之則實爲六十二とあり

○烟火萬里、字書に煙火は猶言人煙とあり人家遠く續きて炊煙連り揚るを云

○艾安、字書に與乂安同治安也とあり

○四夷賓服、賓は字書に服也懷德而服也とあり

○區夏、文選檄蜀文の注に中國也とあり

○國司、職員令に大國上

國中國下國いづれも守一人と見ゆ　○郡司、郡の大少領を云此の時既に國司國造を並置たれど未だ郡司の名目ありしにはあらず縣主を郡司と云しなるべし　○朝集、朝集使なり　○磐踏心府、字書に磐は盡也府は與腑通とあり　○遺孫瀰留、字書に遺は遇也瀰留は謂病日甚久留於身而不愈也今謂病重顏死爲瀰留一本此とあり文字はいづれも尙書より出づ　○大漸、尙書顧命に嗚呼疾大漸惟幾字書に大漸は疾甚劇也とありトコックニは底津國を云死を云詞を忌み避けしならむ　○年踰若干、聖算詳ならざりし故に若干と書きしなるべし　○非爲身、原本身の字なし隋書に據て補ふ　○人生子孫、人の字原本なし隋書に據て補ふ　○星川王、第三皇子　○友于、尙書君陳に惟孝友于兄弟とあるに出づ字書に謂兄弟相愛也後世因謂兄弟爲友于とあり　○知臣莫若君云々、管子大匡篇左傳(僖公昭公)韓非子十過篇等に出づ　○流、ホドコリナムは顯宗紀二年に被を賦遲紀五年に連延を訓り　○堪、字書に勝也任也とあり　○地居上嗣、地は地位なり上嗣は儲君を云　○雖瞑目、雖の字前本寮本中本應本に據て補ふ　○(注)勿令侮慢、前本寮本慢の下也の字あり　○征新羅、三國史記に慈悲麻立干王十九年(雄略天皇二十年)倭人侵東邊同二十年同二十一年倭人擧兵五道來侵とあれば二十三年にも新羅を伐たしめ給ひしなるべし　○淩婆水門、周防國佐波郡　○空彈弓弦、弦音をたて、敵を欺き油斷せしめてそを射るなり　○二隊、タムラは屯なり部隊を云　○二囊、囊は字書に受箭器也とあり抄調度部征醍具に周禮注云箙夜奈久比唐令用胡籙二字)盛矢器也とあり　○瀰致爾阿賦耶云々、ミチニアフヤは道に遇ふやにて道とは戰場に出向ふを云今戰場に出立つ尾代の子の名は天にこそ聞えすあらめ國中には聞え渡りなむとなり　○浦掛水門、丹後國與謝郡宇良神社あり此地か　○(注)盡殺、楓イ本中本殺の下也の字あり

夷於淩婆水門、合戰而射、蝦夷等或踊或伏、能避脫箭、終不可射、是以尾代空彈弓弦於海濱上、射死踊伏者二隊、二囊之箭既盡、卽喚船人索箭、船人恐而自退、尾代乃立弓執末而歌曰、瀰致爾阿賦耶、嗚之慮能古、阿每爾擧曾、枳擧曳儒阿羅每、矩爾爾播、枳擧曳底那、唱訖自斬數人、更追至丹波國浦掛水門、盡逼殺之、一本云、追至浦掛、遣人盡殺、

日本書紀卷第十四

○弘計、北本寮本弘を雄に作る

【卽位前紀】白髮武廣國押稚日本根子天皇、記に白髮大倭根子命と記し奉る
○清寧天皇、前後の例に據て補ふ
○葛城韓媛、圓大臣の女
○天下之位、延本舊紀下を皇に作る
○大藏之官、大藏は諸國の調及金銀珠玉等の貨財を納むる所なり錄山城諸蕃秦忌寸の條に役諸秦氏構八丈大藏於宮側納其貢物故名其地曰長谷朝倉宮是時始置大藏官員云々とあり
○磐城皇子、雄略天皇第

日本書紀卷第十五（トマキアマリイツマキニアタルマキ）

白髮武廣國押稚日本根子天皇　清寧天皇
弘計天皇　顯宗天皇
億計天皇　仁賢天皇

白髮武廣國押稚日本根子天皇（シラカタケヒロクニオシワカヤマトネコノスメラミコト）　清寧天皇

白髮武廣國押稚日本根子天皇、大泊瀨幼武天皇（オホハツセワカタケノ）第三子也、母曰葛城韓媛（カツラキノカラヒメト）、天皇生而白髮（アレマシナガラシラカ）、長而愛民（ヒトヲ）、大泊瀨天皇於諸子中特所靈異（クシビニアヤシミ玉フ）、廿二年立爲皇太子、廿三年八月、大泊瀨天皇崩、吉備稚媛陰謂幼子星川皇子曰、欲登天下之位、先取大藏之官、長子磐城皇子聞母夫人教其幼子之語曰、皇太子雖是我弟、安可欺乎、不可爲也、星川皇子不聽、輙隨母夫人之意、遂取大藏官、鑰閉外門、戒備乎難、權勢自由費

一の皇子星川皇子の同母兄

○鑰開、鑰は字書に鎖亦作鑰所以屬門戸箱篋之具使人不得開者とあり抄居處部に楊氏漢語抄云鑰子藏乃賀波とあり鍵をかけて閉すなり

○戒備乎雖、原本戒を式に作る北本及舊紀に據て改む

○橋勢、原本權を擁に作る北本寮本中本に據て改む

○費用、原本用を由に作る北本寮本應本等に據て改む

○東漢掬直、應神紀二十年(二〇四頁)に見ゆ

○異父兄、雄略紀七年に田狭臣娶稚姫而生兄君弟君也とあり

○城丘前來目、雄略紀九年に紀國前來目連あり新羅に戰死す集解に蓋其子也と云り

○河内三野縣主、三野は河内國若江郡にあり淵河内神別に美努連角凝魂命三世孫天湯川田奈命之後也と見え天武天皇十三年に三野連を賜ふ ○薬香部吉士、雄略紀十四年に見ゆ ○祈生、生命を助けむ事を請ふなり契沖の生或當作告と云るはいかゞあらむ ○刑類、コロスツミは死罪なり ○難波來目邑大井戸、攝津志に住吉(今東成)郡遠里小野舊名難波來目大井戸とあり ○十町、抄天地部に蒼頡篇云町(末知)田區也田令に田長卅步廣十二步爲一段十段爲一町とあり是は大寶令の制なればこゝに町とあると必す同一ならざるも相似たるより此文字を用ひしものなり

用官物於是大伴室屋大連言於東漢掬直曰大泊瀬天皇之遺詔今將至矣宜從遺詔奉皇太子乃發軍士圍繞大藏白外拒開縱火燔殺是時吉備稚媛磐城皇子異父兄兄君城丘前來目名隨星川皇子而被燔殺焉惟河内三野縣主小根慄然振怖避火逃出抱草香部吉士漢彦脚因使祈生於大伴室屋大連曰奴縣主小根事星川皇子者信而無有背於皇太子乞降洪恩救賜他命漢彦乃具爲啓於大伴大連不入刑類小根仍使漢彦啓於大連曰大伴大連我君降大慈愍促短之命既續延長獲觀日色輙以難波來目邑大井戸田十町送於大連又以田地與于漢彦以報其恩是月吉備上道臣等聞朝作亂思救其腹所生星川皇子率船師四十艘來浮於海既而聞被燔殺自海而歸天皇卽遣使責讓於上道臣等而奪其所領山部冬十月己巳朔壬申大伴室屋大連率臣連等奉璽於皇太子

○率船師卌艘、上道臣の勢力の大なりしこと船師卌艘を率來りしにて想像せらる　○既而、北本中本に據て而の字を補ふ　○天皇、皇太子とあるべきか通證にもしか云り　○山部、山守部なり應神紀五年（一九七頁）に見ゆ　○璽、三種神器なり

【元年】壇場、壇は字書に祭場也擇平坦之地以土塡築之也とありマツリトノと訓るは之に因れり然れどもこゝは御即位の事を申せるなればタカミクラと訓る方穩なるべし

○磐余甕栗、編年記に磐余甕栗宮大和國十市郡白香谷是也、志に古蹟池内御厨子邑（今磯城郡安倍村大字池尻の内）とあり

○皇太夫人、公式令義解に天子母登后位者爲皇太后居妃位者爲皇妃居夫人位者爲皇太夫人也とあり

○丹比高鷲原陵、諸陵式に河内國丹比郡とあり陵墓要覽に南河内郡高鷲村大字界と見ゆ

○造墓陵北、河内志に隼人墓在高鷲原陵北とあり

○太歲、原本太を大に作る北本に據て改む

【二年】恨無子、記に此天皇無皇后亦無皇子故爲御名代定白髮部とあり下の舍人膳夫靱負

元年春正月戊戌朔壬子、命有司設壇場於磐余甕栗陟天皇位、遂定宮焉、尊葛城韓媛爲皇太夫人、以大伴室屋大連爲大連、平群眞鳥大臣爲大臣、並如故、臣連伴造等各依職位焉、冬十月癸巳朔辛丑、葬大泊瀨天皇于丹比高鷲原陵、于時隼人晝夜哀號陵側、與食不喫、七日而死、有司造墓陵北、以禮葬之、是年也太歲庚申、

二年春二月、天皇恨無子、乃遣大伴室屋大連於諸國、置白髮部舍人、白髮部膳夫、白髮部靱負、冀垂遺跡、令觀於後、冬十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市邊押磐皇子、子億計弘計、畏敬兼抱、思奉爲君、奉養甚謹、以私供給、便起柴宮、權奉安置、乘驛馳奏、天皇愕然驚歎、良以愴懷曰、懿哉悅哉、天垂博愛、賜以兩兒、是月、使小楯持節將左右舍人、至赤石奉迎、語在弘計天皇紀

告御名代の部民なり　○舍人、仁德紀十六年雄略紀即位前紀に出づ　○靱負、後世の衞門兵衞の類なるユゲヒは靱負の略にて靱を負て奉仕するより職名となれり　○依大嘗供奉之料、大嘗祭に供へ奉るべき料物を採る用務に依てとなり大嘗の名此に始て見えたれど大寶令の制度までは毎年の御祭なも總て大嘗と云へばこゝは何れにてありしか定め難し北本には依以下於に至る九字なし　○伊與來目部、伊豫國に久米郡あり國造本紀に伊豫國造に並びて久味國造あり久米部は大久米命の子孫にて世々伊豫國に住みしより國名又は郡名ともなりしなり續日本後紀に伊豫國人浮穴直千繼等賜姓春江宿禰子繼之先大久米命也とも見えたり　○縮見屯倉首、攝磨國美囊郡に志深八之々美、郷あり美囊郡は赤石郡と堺を接す古くは赤石郡の内なりしなるべし屯倉は既に出づ首は其長なり　○忍海部造、攝河内皇別に忍海部開化天皇々子比古由牟須美命之後也とあり　○市邊押磐皇子、寰中天皇々子、雄略紀即位前紀を參照すべし　○億計、記に意富祁とあり　○弘計、記に袁祁とあり北本及紀略雄計に作る下同じ　○兼抱、通證に兼抱二皇子也とあり　○以私供給、私物を以て供給し奉るなり四字を以て句とする故に物の字を略せり　○柴宮、質素なる宮を云　○安置、マセは坐させ奉るなり　○乘驛、ハユマは早馬なり古は驛毎に馬を繫飼ひて乘用に充つ是即ち早馬なり　○天皇愕然、記には天皇崩御の後の事とす　○良以、集解以の字を久の字に改めたるは傍訓に據れり　○持節、軍防令義解に節者以旄牛尾爲之とあれどこゝはたゞ御使の譜とすべき物を云り

【三年】持節云々、以下迎入宮中まで十一字後漢書安帝紀の文に據れり其注に續漢志曰皇太子皇子皆安車朱班輪青蓋金華蓋皇子爲王駕以乘之故曰王青蓋車とあり

○飯豐皇女、履中天皇々女

○角刺宮、大和國忍海（今南葛城郡、志に角刺宮古蹟在忍海村今村民是祠祭之とあり村社角刺神社是なり

○（注）此日有夫云々、此五字集解に私記攝入とす

○巡省風俗、天武紀以下に見ゆる巡察使にて政跡の治否百姓の消息を檢せしむるなり

○宴臣連於大庭、戊辰は十八日なり其前日は丁卯にて中卯の日なりされば

（三年）三年春正月丙辰朔、小楯等奉億計弘計、到攝津國、使臣連持節、以王青蓋車迎入宮中、夏四月乙酉朔辛卯、以億計王爲皇太子、以弘計王爲皇子、秋七月、飯豐皇女於角刺宮與夫初交、謂人曰、一知女道、又安可異、終不願交於男、此日有夫、未詳也、九月壬子朔癸丑、遣臣連巡省風俗、冬十月壬午朔乙酉、詔、犬馬器玩不得獻上、十一月辛亥朔戊辰、宴臣連於大庭、賜綿帛、皆任其自取、盡力而出、是月、海表諸蕃並遣使進調、

（三年）四年、春正月庚戌朔丙辰、宴海表諸蕃使者於朝堂、賜物各有差、夏閏五月、大餺、五日、秋八月丁未朔癸丑、天皇親錄囚徒、是日、蝦夷隼人並內附、九月丙子朔、天皇御射殿、詔百寮及海表使者射、賜物各有差、

五年春正月甲戌朔己丑、天皇崩于宮、時年若干、冬十一月庚午朔戊寅、葬于河內坂門原陵、

此に宴とあるは大嘗の宴なり

【四年】大餔、餔は字書に與レ酺通とあり酺は酺之爲レ言布也王德布ニ於天下一而合聚飲食爲レ酺とあり　○親錄囚徒、錄は漢書雋不疑傳の注に省ニ錄之一也知ニ其情狀有ニ寃滯一與不ニ也とあり　○內附、マキシタガフとあるが如く京に參りて種々の物を進りしを云しなるべし　○射殿、弓場殿なり拾芥抄宮城部に武德殿謂ニ之射場殿一騎射競馬於ニ此所一覽レ之とあり　【五年】崩于宮、トツミヤは離宮なり　○時年若干、大日本史に水鏡一代要記皇年代略記並曰四十一皇代記歷代皇紀並曰四十二未レ知ニ孰是一とあり神皇正統記には三十九歲とす、○河內坂門原陵、諸陵式に河內國古市郡河內志に古市郡西浦村稱曰ニ白髮山陵一陵墓要覽に南河內郡西浦村大字西浦とあり

弘計天皇　顯宗天皇

弘計天皇、更名來目稚子、大兄去來穗別天皇孫也、市邊押磐皇子子也、母曰ニ荑媛一、荑此云ニ波曳一、譜第曰、市邊押磐皇子娶ニ蟻臣女荑媛一、遂生ニ三男二女一、其一曰ニ居夏姬一、其二曰ニ億計王一、更名嶋稚子、更名大石尊、其三曰ニ弘計王一、更名來目稚子、其四曰ニ飯豐女王一、亦名忍海部女王、其五曰ニ橘王一、一本以ニ飯豐女王一列ニ叙於億計王之上一、蟻臣者、葦田宿禰子也、天皇久居ニ邊裔一、悉知ニ百姓憂苦一、恒見ニ枉屈一、若納ニ四體溝隍一、布ニ德施一惠、政令流行、卹ニ貧養一孀、天下親附、穴穗天皇三年十月、天皇父市邊押磐皇子及帳內佐伯部仲子、於ニ蚊屋野一爲ニ大泊瀨天皇一見ニ殺、因埋ニ同穴一、於是天皇與ニ億計王一聞ニ父見ニ射、恐懼皆逃亡自匿、帳內日下部連使主、使主日下部連之名也、使主此云ニ於瀰一、與ニ其子吾田彥一、吾田彥使主之子也、竊奉天

【卽位前紀】弘計、北本寮本に雄計とあり記に袁祁之石巢別命と記し奉る　○(注)來目稚子、集解に按稱ニ來目一者伊與來目部小楯奉レ迎而爲ニ皇子一故蓋有ニ此稱一と云　○(注)譜第、系圖の書を云字書に譜は布也布列見ニ其事一也第は次第也とあり　○(注)飯豐女王、履中紀元年には押磐皇子の同母妹なる靑海皇女の一名とす　○(注)葦田宿禰、襲津彥の子履中紀元年に出づ　○邊裔、都より遠ざかり

し地なり云字書に邊は邊境也爲は邊也又來也とあり
○枉屈、字書に枉は屈也寃也とあり
○若納四隅溝隍、四隅は手足なり溝隍は字書に溝池城壕也また城池也有水曰池無水曰隍とあり民の憂を憂として其災を除かむが爲に己の身を隍池の中に納るゝが如くせらるゝを云
○嬬、寡婦なり
（安康天皇三年）帳内、雄略紀即位前紀に見ゆ
○蚊屋野、雄略紀即位前紀に見ゆ
○日下部連使主、錄河内皇別に日下部連彦坐命之子狹穗彦命之後也とあり
○（注）使主日下部連之名也、此九字は集解私記攙入として削
○（注）吾田彦使主之子也、此八字同じく攙入として削る
○丹波國余社郡、丹後國與謝郡なり二十二年紀に出づ
○縮見山石室、縮見は美濃郡にあり清寧紀二年に出づ
○（注）縮見云々、此十二字集解私記攙入として削

皇與億計王、避難丹波國余社郡、使主遂改名字曰田疾來、尙恐見誅、從茲遁入播磨國縮見山石室而自經死、天皇尙不識使主所之、勸兄億計王向播磨國赤石郡、俱改字曰丹波小子、就仕於縮見屯倉首、倉首、忍海部造細目也、吾田彦至此不離、固執臣禮、白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連先祖伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物、一云、巡行郡縣適會縮見屯倉首縱賞新室以夜繼晝、爾乃天皇謂兄億計王曰、避亂於斯、年踰數紀、顯名著貴、方屬今宵、億計王惻然歎曰、其自造揚見害、孰與全身免厄也歟、天皇曰、吾是去來穗別天皇之孫、而困事於人、飼牧牛馬、豈若顯名被害也歟、遂與億計王相抱涕泣、不能自禁、億計王曰、然即非弟、誰能激揚大節、可以顯著、天皇固辭曰、僕不才、豈敢宣揚德業、億計王曰、弟英才賢德、爰無以過、如是相讓、再三、而果使天皇自許稱述、俱就室外居、乎下風、屯倉首命居竈傍左右、秉燭、夜深酒酣、次第儛訖、屯倉首謂小楯曰、僕見此秉燭者、貴人而賤己、先人而後己、

る

（清寧天皇二年）辨新嘗供物、通證に蓋是悠紀主基ト定之國郡而供物專指二拔穗一也とあり辨は辨備するを云

○（注）田租、田令の義解に田賦爲レ租とあり

○數紀、字書に十二年曰レ紀とあり

○導揚、原本導を導に作る舊紀に據て改む字書に導は言也揚は發也顯也稱說也とあり言ひ顯すを云

○免厄、舊紀厄を死に作る

○困事、ヲエは神武紀戊午年六月の條に瘁を景行紀四十年に瘼を訓り困しみ衰ふるを云

○激揚大節、大節は大事と云に同じ重大なる事を十分に言ひ顯すを云

○不才、ミツナシは仁德紀卽位前紀に不佞を訓り稜威無しの意か

○下風、允恭紀七年に坐長をクラカミと訓り然らばクラシリは坐後の義にて下座を云

○恭敬撙節、以下九字禮記曲禮の文なり疏に撙者趨也節者法度也言恒趨二於法度一とあり立居振舞

恭敬撙節、退讓以明禮、撙猶趍也、相從也、止也、可謂君子、於是小楯撫絃、命棄燭者曰、起儛、於是兄弟相讓、久而不レ起、小楯嘖之曰、何爲太遲、速起儛之、億計王起儛既了、天皇次起自整衣帶、爲二室壽一曰、築立稚室葛根、築立柱者、此家長御心之鎭也、取擧棟梁者、此家長御心之林也、取置椽橑者、此家長御心之齊也、取置蘆葦者、此家長御心之平也、蘆、葦此云二哀都利一、葦音之潤反、取結繩葛者、此家長御壽之堅也、取葺草葉者、此家長御富之餘也、出雲者新墾、新墾之十握稻之穗、於淺甕釀酒、美飲喫哉、美飲喫哉、此云二于寶羅一、爾烏野羅甫屢柯俟也、吾子等、子者男子之通稱也、脚日木此傍山牡鹿之角、牡鹿、此云二左鳴子乎一、擧而吾儛者、旨酒餌香市不二以直買一、手掌摎亮、手掌摎亮、此云二陀那則擧謀耶羅爾一、拍上賜、吾常世等、壽畢乃赴節、歌曰、伊儺武斯廬、哿簸泝比野儺擬、寐逗愈凱麼、儺弭企於己陀智、曾能泥播字世儒、小楯謂之曰、可怜、願復聞之、天皇遂作二殊儛一、殊儛、古謂之立出儛、立出此云二陀豆豆儛一、狀者乍起乍居而儛之、誥之曰、倭者彼、彼茅原淺茅原弟日僕是也、小楯山是深奇異焉、更使唱之、天皇誥之曰、石上振之神榲、榲此云二須擬一、伐本截、伐本截末、此云二謨登岐利須衛於玆婆羅比一、

の法度に適ひ自ら其方向に赴くを云

○注、尊猶云々、此九字集解私記攙入として削る趣は趣の俗字なり

○君子、論語に聖人吾不得而見之矣得見君子者斯可矣とあり才德の衆に優れたる人を云ウマヒトは神功紀の歌に見ゆ

○室壽、新室を言壽ぎ祝ふ詞なり皇宮には之を大殿祭賀比と云延喜式に見ゆる大殿祭詞は年毎に大殿を壽ぎ祝ふ詞なり又古事紀に見ゆる出雲國多藝志の小濱にて天御饗の獻りし時の賀詞は酒ほがひを主としたれど之に依て上古より室壽の詞もありしこと推して知るべし按るに古より新室を造り了れば盛に酒宴を催し其時に招かれし人々は新室壽の詞を上るが例なりし故に下座の人にも室壽を強ひて獻らしめたるにて其機會に二皇子の素性を世に爲給ひしなり

○拳立稚室葛根、稚室は新に造りし室を云葛根は結び固めたる繩なり古は多く葛藤の類を用ひて物を結びしが家を造るには

於市邊宮治天下天萬國萬押磐尊御裔僕是也、小楯大驚離席、悵然再拜、承事供給、率屬　欽　伏、於是悉發郡民造宮、不日權奉安置、乃詣京都求迎二王、白髮天皇聞意吝歎曰、朕無子也、可以爲嗣、與大臣大連定策禁中、仍使播磨國司來日部小楯、持節將左右舍人、至赤石奉迎、白髮天皇三年春正月、天皇隨億計王到攝津國、使臣連持節、以王青蓋車迎入宮中、夏四月、立億計王爲皇太子、立天皇爲皇子、五年春正月、白髮天皇崩、是月、皇太子億計王與天皇讓位、久而不處、由是天皇姉飯豐青皇女於忍海角刺宮臨朝秉政、自稱忍海飯豐青尊、當世詞人歌曰、野麻登陛儛、瀰我保指母能婆、於戸農瀰能、莒能拖哿紀儺屢、都奴娑之能瀰野、冬十一月、飯豐青尊崩、葬葛城埴口丘陵、十二月、百官大會、皇太子億計取天皇之璽、置之天皇之坐、再拜從諸臣之位曰、此天皇之位、有功者可以處之、著貴蒙　迎、皆弟之謀也、以天下讓天皇、天皇顧讓以弟、莫敢卽位、又奉白髮天皇先欲傳兄立皇太子、前後

固辭曰、日月出矣、而燭火不息、其於光也不亦難乎、時雨降矣而猶浚灌、不亦勞乎、所貴爲人弟者、奉兄謀遁脫難、照德解紛而無處也、卽有處者非弟恭之義、弘計不忍處也、兄友弟恭、不易之典、聞諸古老、安自獨輕、皇太子億計曰、白髮天皇以吾兄之故、擧天下之事、而先屬我、我其羞之、惟大王首建利遁、聞之者歎息、彰顯帝孫、見之者隕涕、憫々搢紳、忻荷戴天之慶、哀々黔首、悅逢履地之恩、是以克固四維、永隆萬葉、功隣造物、清猷映世、超哉邈矣、粤無得而稱、雖是曰兄、豈先處乎、非功而據、咎悔必至、吾聞、天皇不可以久曠、天命不可以謙拒、大王以社稷爲計、百姓爲心、發言慷慨、至于流涕、天皇於是知終不處、不逆兄意、乃聽而不卽御坐、世嘉其能以實讓、曰、宜哉、兄弟怡怡、天下歸德、篤於親族、則民興仁、

縄葛を以て結固めたればかくいひてことほぎしなり此は稚室葛根にて其家をいへり此句は先づ大體に就て是は新らしきよき家ぞと譽めて云るなり　○御心之鎭也、築立つる柱の動なきを家主の心の鎭なりと賀するなり　○棟梁、抄居處部に棟爾雅云謂之桴(无禰)梁唐韻云梁(宇都波利)棟梁也とありムネウツハリは通證に蓋岑木也全(ウツ)張也と云り　○御心之林也、ハヤシは令榮にて家の榮ゆるを云　○椽橑、抄居處部に榱釋名云榱(太流岐楊氏云波閇岐)在檐(棟に同じ)旁下垂也兼名苑云一名橑一名椽とあり　○御心之齊也、垂木の長短廣狹なく等しく齊へるを家主の心の整へるに比して稱讃して云るなり　○蘆葺、抄居處部に棧楊氏漢語抄云棧(瓦乃衣都利)日本紀私記云蘆葺(和名同)上今案唐韻蘆胡官反葦也然則以蘆葦爲棧非也)箋注に源君以爲非者不深攷古時之質樸也とあり通證に枝釣之義と云屋根を葺くに萱を結びつくる下地の棧なり　○御心之平也、枝釣の整々平行せるをさりて家主の心の平和なるを云なり　○(注)葺音之潤反、此五字集解私記攙入とし削る　○御壽之堅也、取結べる縄の長く強きが如く家主の壽命は堅固に長久なりとなり　○御富之餘也、取葺ける草葉の多く豐富なるが如く家主の富は有餘りて豐なりと場後に家主の壽命の長久にして財政の豐富なることを稱讃したるなり　○出雲者新墾、出雲は地名新墾は新に開墾せる土地を云新墾の出雲に豐熟せる十握穗の美しき稻穗其穗を以て淺甕に釀したる酒を美味らに開食せとなり　○於淺甕、抄器皿部に淺甕日本紀私記云淺甕(佐良介)箋注に按佐良介者阿佐良介之省淺筍之義良助語とあり　○美飲喫哉、ウマラニは美味にてラは

助辭ヲヤラフルは重言に飲(ヲシ)遣之意とありカネは哉(カナ)と同じ　○吾子等、ヒコヒトは通言に蓋吾人也猶言諸君子也と云るが如し　○(注)子者云々、此八字集解私記攙入として削る　○脚日本、山の枕詞　○牡鹿之角擧而吾傷者、譯紀に乘方案之喩子吾傷之喪也とあり　○飾香市、河内國古市郡譯紀に私記曰師説高麗人來住飾香市、隋旨書(詞)人競貪高價買飲故云とあり　○不貪直買、價を以て買ふこと能はぬ美酒なりと賞めて云なり　○手掌擂亮、文選琴賦注に懺宗聲清徹貌とあり仁德紀三十八年に參亮をサヤカと訓り此も其意にて掌を打合する聲の柔かにさやかに聞ゆるを云　○捐上馬、舞人の歌ひ舞ふに連れて手を捐上げて靡すを云　○吾常世等、其座席にある人を常世に長らふべき長壽の人なりと斯室のみならず列座の人々なも褒めて云るなり　○赴高歌、節は字書に音調緩急之度曰節如言節奏とあり赴は文選文賦に舞者赴節貝投袖歌者應絃而遣聲とあり琴の調べに合せて歌ふを云原本赴を起に作る北本に據て改む　○伊鑑武賢盧云々、イナムシロは川の枕詞、寢席の皮といふを川に轉じて枕詞とす川傍に樹てる柳の水かさまさる時は我を水に漬して暫し靡伏すと雖も水減ずれば又舊の如く起立て其根は流れ失せずと云ひて我身も難に遭ひて零落し人に身を寄すれども柳の樹強くも亡びざるが如く時を得て立榮ゆることもあるべしとなり　○可怜、オモシロシは面白なり　○殊儀　特殊なる舞の意なるべし舞の狀は分注に明なり　○(注)殊舞云々、以下廿七字集解に私記攙入として削る　○倭者彼々茅原、倭は大和國彼々茅原は崇神紀六年に見えたる神淺茅原に同じく城上郡の地名なるべし舊紀に曾々宮縫とも見えたり又ソヽは草葉の風に靡く聲にて茅原の序とも見ゆ　○淺茅の生ひたる原なるが茅原淺茅原と同じ語を重ねて文なしたるなり　○弟日僕是也、弟日僕は倭國の彼々茅原淺茅原に生れたりとて高貴い腹に生れたる由をほのめかす給ひしかと思はる　○石上振之神榁、石上も振も大和國山邊郡の地名にて振の神杉は石上坐布留御魂神社の杉にて次句い序なり　○伐本截末、木の本末を伐捨て樹幹を持參來て皇宮を作り給へるを云　○天萬國萬、美稱の限なり　○押磐尊、市邊押磐命を申す　○卿爲、擂磐風土記に御足末に作る子孫を足末(アナスエ)と云は猶足跡(アト)と云が如く祖先を頭として云なり景行紀四年に見ゆ　○小楯大鷲云々、記に卿小楯連聞鶴而自床墮轉而追出其宰人等其二柱王子坐左右膝上泣悲而集人民作假宮坐置其假宮而貢上驛使とあり　○席、名義抄に席の俗字とす　○奈勢、奈は字書に呼新聲と有　○宦策禁中、字書に定策は謂立天子之功也策竹簡書立帝之事於竹簡以告宗廟故云禁中は漢制天子所居曰禁中言門戶有禁非侍御之臣不得入也とあり　(清寧天皇五年正月)天皇姉、記には其姉飯豐王とあり　○角刺宮、清寧紀三年に見ゆ　○臨朝秉政、此皇女は今御一代に算せられ給はず然れども紀中尊屬陵の文字を用ひしに見れば御代々の天皇の例に同じそを別に御一代に立てざるは記傳に御治世の時期短かりし爲か又は女王にて治天下の例無ければかと云り水鏡紹運錄扶桑略紀等には御一代に立てたり而して水鏡扶桑略紀共に日本紀に御一代に入れたる由を述べたれば始上奏の時は或は御一代とせしか　○詞人、字書に能文詞之人也とあり此は歌詠みの意に用ひたり　○野麻宮、野麻宮は共に地名なり　(十一月)葬葛城埴口丘陵、諸陵式に埴口墓飯豐皇女在大和國葛下郡志に同郡北花内村天和中桑山氏毀墓述八幡神祠陵墓要覽に北葛城郡執庄村大字北花内とあり　(十二月)日月出矣、以下亦不勞乎まで廿九字莊子逍遙篇に出づ原文に據るに浸灌の下其於澤也の四字を脫す字書に爝次は火炬也とあり浸灌は水を以て田を潤す意なり　○照德、集解照を昭に改む字書に照或省作昭とあれば照昭通用せしならむ　○首建利通、以下無得而稱まては書武帝紀の文を本として書す易遯象に肥遯無不利とあり遯るゝに利あるを云位を謙り遁れて之に卽かざるは利ありとの意なり故に首として利通を建つと云り　○憫々搢紳、字書に憫は憂也搢紳は謂插笏帶聞而古之仕者垂紳大帶也搢笏故稱官族曰搢紳とあり　○忻、字書に與欣音義並同とあり　○四維、淮南子天文訓に帝張四維運之日斗とあり四方の意なり　○萬葉、萬世なり原本葉を業に作る北本及鳶紀に據て改む　○功隣造物者、造物は造物者清蔵は清らかなる謀なり此二句御德の殊に優れたるが嘗讃したる語なり次の二句亦同じ　○雖是日兄、原本日を日に作る熱本及鳶紀に據て改む　○吾聞天皇云々、以下爲心まで廿七字は後漢書光武紀の文に據れり弘計天皇は德高くましますを以て謙遜し給はずして遠に皇位に卽かせ給へと只管に勸め給ふなり　○兄弟怡々　論語子路に出づ怡々は字書に和怡貌とあり　○鳶於親屬、此二句論語泰伯に君子篤於親則民興於仁とあるを採れり

【元年】(正月)明茂、字書に茂は盛也とあり明に盛なるを云
○郊廟主、郊廟は郊社宗廟、天子は郊社宗廟の祭祀に奉ずるが故に郊廟主と云此は國家の意
○祖宗無窮之烈、原本宗の字なし考本に據て補ふ又烈は原本列に作る北本に據て改む
○厭、字書に滿也足也とあり
○金銀蕃國、神代紀に韓國之島是有金銀とあり神功紀に新羅を金銀之國と云り
○福祚孔章、漢書の注に孔甚也章明也とあり原本孔を禮に作る北本に據て改む
○在孺而勤、在は北本熱本中本に據て補ふ
○制曰可、字書に天子之言曰制とあり
○近飛鳥八釣宮、編年記に近飛鳥八釣宮大和國高市郡龍田郡(誤字あるべし)宮西地是也志に上八釣村と云
○(注)一宮於少郊、播磨風土記に自此以後更還下造宮於此土而坐故有高野宮少野宮川村宮池野

(乙丑)元年春正月己巳朔、大臣大連等奏言、皇太子億計、聖德明茂、奉讓天下、陛下正統當奉鴻緒、爲郊廟主、承續祖宗無窮之烈、上當天心、下厭民望、而不肯踐祚、遂令金銀蕃國群僚遠近莫不失望、天命有屬、皇太子推讓、聖德彌盛、福祚孔章、在孺而勤、謙恭慈順、宜奉兄命、承統大業、制曰可、乃召公卿百僚於近飛鳥八釣宮、卽天皇位、百官陪位者皆忻忻焉、或本云、弘計天皇之宮有二所焉、一宮於少郊、二宮於池野、又或本云、宮於甕栗、是月、立皇后難波小野王、赦天下、難波小野王雄朝津間稚子宿禰天皇曾孫、磐城王孫、丘稚子王之女也、二月戊戌朔壬寅、詔曰、先王遭離多難、殞命荒郊、朕在幼年、亡逃自匿、猥遇求迎、升纂大業、廣求御骨、莫能知者、詔畢、與皇太子億計、泣哭憤惋、不能自勝、是月、召聚耆宿、天皇親歷問、有一老嫗進曰、置目知御骨埋處、請以奉示、置目老嫗名也、近江國狹狹城山君祖、倭帶宿禰妹、名曰置目、見下文、於是天皇與皇太子億計、將老嫗婦幸于近江國來田綿蚊屋野中、掘出而見、果如婦語、臨穴哀號、言深更慟、自古以來、莫如斯酷、仲子之尸、交横御骨、莫能別者、爰有磐坂皇子之乳母、奏曰、仲子者上齒墮落、以斯

宮」とあり少郊は少野宮池野は池野宮なるべし
○(注)燒栗、靖寧紀元年(二九〇頁)に出つ
○敕天下、敕は字書に釋也宥也とあり天下の罪人をゆるすなり
○(注)磐城王孫、記には天皇妻石木王之女難波王とあり
(二月)遭難多難、文選三國名臣序贊の注に遭難猶逢遇也とあり
○置目、記に召其老嫗雲其不失見置知其地以賜名號置目老嫗とあり
○(注)置目云々、以下二十七字集解に私記攙入として削る
○(注)近江狹々城山君祖、雄略紀即位前紀(二六〇頁)に見ゆ
○掘出、原本掘を堀に作る脇本北本及續史に據て改む
○仲子、押磐皇子舍人佐伯部賣輪の亦の名雄略紀即位前紀に見ゆ
○磐攻皇子、市邊押羽皇子なり
○髑髏、抄形體部に玉篇云髑髏俗云比度加之良)頭骨也とあり

可別、於是雖由乳母相別、闕髏、而竟難別四支諸骨、由是仍於蚊屋野中造起雙陵、相似如一、葬儀無異、詔老嫗置目、居于宮傍近處、優崇賜卹、使無乏少、是月詔曰、老嫗伶俜羸弱、不便行步、宜張繩引絙、扶而出入、繩端懸鐸、無勞謁者、入則鳴之、朕知汝到、於是老嫗奉詔、鳴鐸而進、天皇遙聞鐸聲、歌曰、阿佐賦簸囉、鳴贈禰鳴須擬、謨謀逗拖甫、奴底喻羅俱慕與、於岐每俱羅之慕、三月上巳、幸後苑曲水宴、夏四月丁酉朔丁未、詔曰、凡人主之所以勸民者、惟授官也、國之所以興者、惟賞功也、夫前播磨國司來目部小楯、更名磐楯、求迎舉朕、厥功茂焉、所志願勿難言、小楯謝曰、山官宿所願、乃拜山官、改賜姓山部連氏、以吉備臣爲副、以山守部爲民、褒善顯功、酬恩答厚、寵愛殊絶、富莫能儔、五月、狹狹城山君韓帋宿禰、事連謀殺皇子押磐、臨誅叩頭、言詞極哀、天皇不忍加戮、充陵戶、兼守山、削除籍帳、隸山部連、惟倭帋宿禰、因妹置目之功、仍賜本姓狹狹城山君氏、六月、幸避暑殿、奏樂、會羣臣設

以酒食、是年太歲乙丑、

○伶俜、サスラヘは祟神紀六年に流離を訓り字書に伶俜は行不正貌とあり　○羸羽、アッシレは神代紀に見ゆ　○不便行歩、景行紀四年に不便なモヤ〳〵モアラズと訓み欽明紀三十二年に寢疾不豫なミヤマヒシテモヤモヤモアラズと訓り　○鐸、字書に大鈴也とあり名義抄にヌリテと訓り　○謁者、通證に今俗請謁必呼云物申訓意是也とあり　○阿佐賦籤嚥云々、此御歌は鈴の音にて置目の參來ることを知るしめし今正しく鐸の音の瑲々と聞ゆるは置目が淺茅原小曾根を過ぎて來れるならむと詠ませ給ひしなり淺茅原小曾根は並に城上郡の地名百傳は鐸を驛路の鈴に擬へ遠き道を傳來る狀に戲れに詠み給ひしなり　（三月）三月上巳、長曆を推すに上巳は二日なり五雜俎天部に三月三日爲上巳此皆魏晉以後相沿漢猶用巳不以三日也とあり古くは上の巳を用ひ必しも三日に行はざりしなり　○曲水宴、荊楚歲時記に三月三日士民並出江渚池沼間爲流杯曲水之飲とあり其起源に就ては晉書束晳傳に武帝嘗問摯虞三日曲水之義虞對曰漢章帝時平原徐肇以三月初一生三女至三日俱亡村人以爲怪乃招携之水濱洗祓遂因水以汎觴其義起此帝曰必如所談便非好事晳進曰虞小生不足以知臣請言之昔周公城洛邑因流水以汎酒故逸詩云羽觴隨波又秦昭王以三日置酒河曲見金人奉水心之劍曰令君制有西夏乃霸諸侯因此立爲曲水と見えたり此行事の我國にて行はるゝに至りしは歸化人が漸く勢を得て朝廷に用ひらるゝに至り其人々の進言に因れるなるべし　（四月）蒔焉、モシの訓は神代紀に扶疏をシキモシと訓るに據れり原本焉を烏に作る北本に據て改む　○山官、總て山林の事を掌る官なり吉備臣を副とせられしにて重き職なりしこと知るべし　○以山守部爲民、山守部は隱神天皇五年に之を置けり爲民は山部連の部民とするを云　（五月）削除籍帳、籍帳は戶籍帳なり其籍帳を除くとは賤民とするなり　○倭帝宿禰、韓帝宿禰の同族なるべし　○謀殺皇子押磐、原本謀を謨に作る寮本に據て改む　○太歲、原本太を大に作る例に據て改む

【二年】（三月）喜集、類史喜を嘉に作る集解に盛に改めたり

（八月）父之讎云々、以下不同國まで二十二字禮記曲禮の文なり不反兵は疏に謂帶兵自隨也とあり

○居父母之讎、以下便鬬まで二十五字禮記檀弓の文に據れり不仕の二字は原本になし北本寮本中本に據て補ふ

○華夷、文選注に謂華夏四夷也とあり

○迍邅、字書に難行不便鬬、況吾立爲天子、二年于今矣、願壞其陵、摧骨投散、今以此報不亦孝

（丙寅）二年春三月上巳、幸後苑曲水宴、是時喜集公卿大夫、臣連、國造、伴造、爲宴、羣臣頻稱萬歲、秋八月己未朔、天皇謂皇太子億計曰、吾父先王無罪、而大泊瀨天皇射殺棄骨郊野、至今未獲、憤歎盈懷、臥泣行號、志雪讎恥、吾聞、父之讎不與共戴天、兄弟之讎不反兵、交遊之讎不同國、夫匹夫之子居父母之讎、寢苫枕干不仕、不與共國、遇諸市朝、不反兵而

乎、皇太子億計歔欷不能答、乃諫曰、不可、大泊瀬天皇正統萬機臨照天下、華夷欣仰天皇之身也、吾父先王雖是天皇之子、遭遇迍邅、不登天位、以此觀之、尊卑惟別、而忍壞陵墓、誰人主以奉天之靈、其不可毀一也、又天皇與億計、曾不蒙遇白髮天皇厚寵殊恩、豈臨寶位、大泊瀬天皇白髮天皇之父也、億計聞諸老賢、老賢曰、言無不酬、德無不報、有恩不報、敗俗之深者也、陛下饗國、德行廣聞於天下、而毀陵醜見於華裔、億計恐其不可以莅國子民也、其不可毀二也、天皇曰、善哉、令罷役、九月、置日老困乞還曰、氣力衰邁、老髦虛羸、要假扶繩、不能進步、願歸桑梓、以送厥終、天皇聞、惋痛賜物千段、逆傷岐路、重感難期、乃賜歌曰、於岐每慕與、阿甫彌能於岐每、阿須用利簸、彌野磨我俱利底、彌曳孺哿謨阿羅牟、冬十月戊午朔癸亥、宴羣臣、是時天下安平、民無偪役、歲比登稔、百姓殷富、稻斛銀錢一文、牛馬被野、

遭貌とあり薄命なりしを云　○壞陵墓、原本壞を壞に作る楓本中本に據て改む　○言無不酬云々、毛詩大雅抑之篇に無言不讐無德不報とあり晉書劉曜載記に之を引いて讐を酬に作る　○敗俗、尚書君陳に敗常亂俗とあり風俗を頹敗するを云　○饗國、饗は字書に與享通享受也とあり　○華裔、華は中制裔は邊裔にて鄙を云　○莅國子民、字書に莅は臨也子は人君愛養百姓曰子とあり　○九月、喪邁、原本喪を襄に作る楓本北本中本に據て改む邁は字書に老也如年老曰老邁とあり　○老髦、通證に髦宜作耄曲禮八十九十曰耄注耄惛忘也とありホレは靈異記に慌を訓り　○要假、通證に當訓多豆比とあれどいかゞ　○桑梓、毛詩小雅に維桑與梓必恭敬止字書に桑父母之所植而加恭敬也後人因以爲鄉里之稱とあり　○千段、段は字書に分段也布帛依一定之尺寸分截之謂之段とあり　○於岐每慕與云々、置目の隱退を歎かせ給ひし御歌にて置目よ汝は暇賜はり明日よりは深山に隱れ見えずなるらむとなり隱れを隱りと云は古言の活用カ

モはカナにて歎辭なり　(十月)是時天下安平、以下牛馬被野まで後漢書明帝紀の文に據れり　○斛、抄調度部稱量具に斛漢書律曆志云龠合升斗斛所以量多少也野王案說文云十斗爲石箋注云此恐有誤按十斗爲一石見說苑辨物篇一石猶斛也とありて訓なしサカは本朝度量權衡攷に斛を石とも云ふによりて石字の音をもてサカと云ひしにて古訓にあらず此頃未西土の制を用ひざりし時なれば史を修りし人共御代の豐榮を云はむとて漢文をもて潤色せしなりと云り　○銀錢、此に始めて見ゆ記傳に銀錢の見えたるは疑はし假令當昔銀錢を用ひし事ありとも其は韓國より渡れる銀なるべし天武天皇三年に鑄銀錢の事始めて見えたり　○牛馬、牛は北本中本に據て補ふ

【三年】丁巳、原本丁の字なし諸本に據て補ふ　○阿閉臣、大彥命の後孝元紀七年に見ゆ　○銜命、字書に奉君命而行曰銜とあり原本銜を御に作る案本熟本に據て改む　○月神著人、此月神託宣の事何處にてありしか下文に事代由是還京具奏とあり壹伎縣主先祖押見宿禰侍祠とあるに據れば壹岐國にての事にて式に壹岐郡月讀神社(名神大)とある此神社に鎭まり坐せる神の神託なるべし然るに奉るに歌荒樔田を以てす樔とある其地は山城國なれば山城にての事ならむとも思はるれど按るに神託を受けしは壹岐國にての事なるを其神託に因りて山城國に齋祀り歌荒樔田の地を奉り押見宿禰を壹岐より上らしめて奉仕せしめ給ひしなるべし

(丁卯)三年春二月丁巳朔、阿閉臣事代銜命、出使于任那、於是月神著人謂之曰、我祖高皇產靈、有預鎔造天地之功、宜以民地奉我月神、若依請獻、我當福慶、事代由是還京具奏、奉以歌荒樔田、背國葛野郡壹伎縣主先祖押見宿禰侍祠、三月上巳、幸後苑曲水宴、夏四月丙辰朔庚申、日神著人、謂阿閉臣事代曰、以磐余田獻我祖高皇產靈、事代便奏、依神乞獻田十四町、對馬下縣直侍祠、戊辰、置福草部、庚辰、天皇崩于八釣宮、是歲、紀生磐宿禰跨據任那、交通高麗、將西王三韓、整脩宮府、自稱神聖、用任那左魯那奇、他甲背等計、殺百濟適莫爾解於爾林、爾林高麗地也、築帶山城、距守東道、斷運粮津、令軍飢困、百濟王大怒、遣領軍古爾解、內頭莫古解等、率衆趣于帶山攻、於是生磐宿禰進軍逆擊、膽氣益壯、所向皆破、以一當百、俄而兵盡力竭、知事不濟、自任那歸、由是百濟國殺佐

○歌荒槻田、本注に在山背國葛野郡とあり式に山城國葛野郡葛野坐月讀神社、名神大月次新嘗）ましますに據れば葛野郡なること明なり　○（注）歌荒槻田云々、此十一字集解に私記攙入として削る原本墨の字を修書とす北本中本楓本に據て補ふ　○壹伎縣主先祖、三代實錄卷七貞觀五年に壹岐島石田郡人宮主從五位下卜部是嶋神祇權少史正七位下卜部孝雪賜姓壹伎宿禰其先出自雷大臣命とあり　○雷余田、大和國十市郡　○對馬下縣直、延喜津來定雜姓に津島直天兒孝尋命十一世孫雷大臣命之後とあり　○住吉、式に大和國十市郡目原坐高鄭魂神社二座、並大月次新嘗）とある社なるべし對馬島下縣郡にも高鄭魂神社（名神大）あり　○福草部、諱在京神別に三枝部連同田部湯主同祖、天津彦根命子朝立天御影命之後也、顯宗天皇御世喚集諸氏人等賜醫醫、于時三草之草生於宮庭、採以奉獻仍負姓三枝部造、又大和神別に三枝部連天津彦根命十四世孫建許呂命之後也云々とあり福草は抄草本部に文字集略云易、佐岐久佐日本紀云福草、草枝枝相値豐草相當也とあり　○天皇崩、紀に三十八歲とす大日本史に本書草年缺古事記水鏡並同三十八、一代要記歷代皇紀神皇正統記皇年代略記並四十八、未知孰是　○紀年繁宿禰、姓略紀九年に出づ　○跨據、跨は字類抄にアフトコフ名義抄にアツトコフと訓り義未詳　○百濟遙羅爾解、未詳　○爾林、今羅南道蟾津江の西岸なり注に高麗の地とあるは誤れり（應神紀十六年參照）　○（注）爾林云々、此六字集解に私記攙入として削る　○帶山城、シトロモノサシ又シトロムラサシ又シトロモチ（チはノ誤ならむ）サシとも訓めり文獻備考に據るに百濟にては大戸山郡に屬し今の全羅北道全州附近なる泰仁なり

魯那奇、他甲背等三百餘人、

【即位前紀】諱大脚、顯宗紀に大石尊に作る記傳に大脚も鳥郎も共に石の更名なるか諱名と云るは漢樣に書せるなりと云　○（注）自餘諸天皇云々、以下二十二字集解に私記攙入として削る　○字、アザナの義未詳綱（アザ）名にてまことの名と交へて用ふる意かと云通證に蓋是小字とあり　○幼而聰穎、而の字北本

億計天皇　仁賢天皇

億計天皇、諱大脚、更名大爲、自餘諸天皇不言諱字、而至此天皇獨自書者據舊本耳、字嶋郎、弘計天皇同母兄也、幼而聰穎、才敏多識、壯而仁惠、謙恕溫慈、及穴穗天皇崩、避難於丹波國余社郡、白髮天皇二年冬十一月、播磨國司山部連小楯、詣京求迎、白髮天皇尋遣小楯、持節將左右舍人、至赤石奉迎、三年夏四月、遂立億計天皇爲皇太子、事具弘計天皇紀　五年、白髮天皇崩、天皇以天下讓弘計天

皇爲皇太子如故、事具弘計天皇紀也　三年夏四月、弘計天皇崩、

元年（戊辰）春正月辛巳朔乙酉、皇太子於石上廣高宮卽天皇位、或本云、億計天皇之宮有二所焉、一宮於川村、二宮於縮見高野、其殿柱至今未朽、二月辛亥朔壬子、立前妃春日大娘皇女爲皇后、春日大娘皇女、大泊瀨天皇娶和珥臣深目之女童女君所生也、遂產一男六女、其一曰高橋大娘皇女、其二曰朝嬬皇女、其三曰手白香皇女、其四曰樟氷皇女、其五曰橘皇女、其六曰小泊瀨稚鷦鷯（武烈）天皇、及有天下、都泊瀨列城、其七曰眞稚皇女、一本以樟氷皇女列于第三、以手白香皇女列于第四、爲異焉、次和珥臣日爪女糠君娘、生一女、是爲春日山田皇女、一本云、和珥臣日觸女大糠娘生一女、是爲山田大娘皇女、更名赤見皇女、文雖稍異、其實一也、冬十月丁未朔己酉、葬弘計天皇于傍丘磐杯丘陵、是歲也太歲戊辰、

中本に據て補ふ　○壯而、原本壯を然に作る寮本北本に據て改む　○二年、原本元年に作る清寧紀顯宗紀に從て改む　下の三年も二年とありしを同じく改む　○（注）事具弘計天皇紀、此五字集解に私記攙入として削る下同じ

【元年】石上廣高宮、編年記に山邊郡石上左大臣（石上麻呂）家北邊田原志に同郡嘉幡村とあり　○（注）或本云云々、播磨國風土記美囊郡志深里の條に造宮於此土而坐之故有高野宮少野宮川村宮池野宮とあり此の注と合へり　○（注）春日大郎女云々、此二十五字集解に私記攙入として削る　○高橋大娘皇女、集解に按雄略天皇紀元年春日大娘皇女更名高橋皇女是襲母名者とあり記に高木郎女とす　○手白香皇女、繼體天皇の皇后　○橘皇女、宣化天皇の皇后　○泊瀨列城、城上郡泊瀨（今磯城郡朝倉村大字出雲）　○眞稚皇女、古事記に王に作る　○和珥臣日爪、原本珥を脫す諸本に據て補ふ又日を曰に作る　○樟氷皇女、記に樟若子郎女とす　○春日山田皇女、安閑天皇の皇后　○傍丘磐杯陵、諸陵式に傍丘磐杯丘南陵近飛鳥八釣宮御宇顯宗天皇在大和國葛下郡志に昔在葛下郡今市村寶永年間陵崩爲民居とあり陵墓要覽に北葛城郡下田村大字北今市とあり原本丘を岳に作る寮本楓本中本に據て改む　○太歲、原本太を大に作る例に據て改む

【二年】難波小野皇后、顯宗天皇々后

二年（己巳）秋九月、難波小野皇后、恐宿不敬自死、弘計天皇時、皇太子億計侍宴、取瓜將喫、無刀子、弘計天皇親執刀子、命

○(注)刀子、抄調度部細工具に楊氏漢語抄云刀子賀太奈又内匠式に割瓜刀子長五寸と見ゆ
○(注)盤、抄器皿部に盤唐韻云盤(佐良)器名也とあり
【三年】石上部、集解に按天皇宮卽在石上故負此名也とあり
【四年】的臣、仁德紀十二年に出づ
○穉瓮君、詳ならず通證に疑是姓也脫名とあり原本瓮を允に作る頌史に據て改む
○獄、抄調度部刑罰具に四聲字苑云獄(比度夜)牢罪人所也とあり
○下獄死、寮本北本此の下に二人と注す
【五年】散亡、佐伯部は天皇の御父押磐皇子に忠ありし故に雄略天皇の誅を懼れて散亡せしなり
○仲子、雄略紀卽位前紀に出づ
○(注)佐伯部云々、此十二字集解に私記攙入として削る
【六年】日鷹吉士、雄略紀七年に見ゆ
○巧手者、手技ある人を云下文に工匠雄略紀七年に才伎を訓り
○被遣使、使の字は應本中本に據て補ふ
○難波御津、攝津志に西成郡三津神祠在島内三津寺町今稱八幡天平勝寶五年九月攝津國御津村潮水暴滚壞損廬舍百餘卽此とあり又東成郡天王寺一名三津寺とあり今大坂市内島之内に三津寺町の名存す
○於母亦兄於吾亦兄、飽

其夫人小野傳進、夫人就前、立置刀子於瓜盤、是日更酌酒、立喚皇太子、緣斯不敬、恐誅自死、

(庚午)三年春二月己巳朔、置石上部舍人、

四年夏五月、的臣蚊嶋、穉瓮君(瓮此云倍)有罪、皆下獄死、

(壬申)五年春二月丁亥朔辛卯、普求國郡散亡佐伯部、以佐伯部仲子之後、爲佐伯造、(佐伯部仲子事、見弘計天皇紀)

(癸酉)六年秋九月己酉朔壬子、遣日鷹吉士、使高麗、召巧手者、是秋、日鷹吉士被遣使後、有女人居于難波御津、哭之曰、於母亦兄、於吾亦兄、弱草吾夫何怜矣、(言於母亦兄於吾亦兄、此云於慕尼慕是阿例尼慕是、言吾夫何怜矣、此云阿我圖摩播耶、言弱草、謂古者以弱草喩夫嬬、故以弱草爲夫、)哭聲甚哀、令人斷腸、菱城邑人鹿父(鹿父人名也、俗呼父爲柯賀)聞而向前曰、何哭之哀甚若此乎、女人答曰、秋葱之轉雙也、納可思惟矣、鹿父曰、諾、卽知所言矣、有同伴者、不悟其意、問曰、何以知乎、答曰、難波玉作部鯽魚女(言鯽魚女、此云浮儺、讀)嫁於

田女の母は哭女にして哭女の母は鯽魚女なり鯽魚女始め曄と婚して哭女を生めり然るに後更に山寸と婚して麁寸を生めり麁寸飽田女と婚す故に夫麁寸は母方より云はゞ飽田女の母哭女と兄妹にして父方より云はゞ麁寸も飽田女も山寸の子にして異母兄妹なり故に母にも兄我にも兄なりと云るなり ○弱草吾夫柯怜矣、弱草は夫(ツマ)の枕詞吾夫は麁寸なりハヤは歎辞夫の高麗に行けるを悲めるなり柯の字字鏡集にチモシロシアハレフと訓り ○(注)言於母亦兄、集解言の字を衍とす ○(注)言吾夫柯怜、集解此言の字も衍とす ○菱城、和泉志に大鳥郡菱木(木舊作城)あり ○(注)鹿父云々、此十一字集解私記攙入として削る

韓白水郎曄、言韓白水郎曄、此云柯羅摩能波陀該、曄耕麥田之也、生哭女、哭女言哭女、此云儺倶譬、嫁於住道人山寸生飽田女、韓白水郎曄與其女哭女曾既俱死、住道人山寸上紆玉作部鯽魚女生麤寸、麤寸娶飽田女、於是麤寸從日鷹吉士發向高麗、由是其妻飽田女徘徊顧戀、失緒傷心、哭聲尤切、令人腸斷、

玉作部鯽魚女、與韓白水郎曄、爲夫婦、生哭女、住道人山寸聚哭女、生飽田女、山寸妻父韓白水郎曄、與其子哭女、曾既俱死、住道人山寸上紆妻母玉作部鯽魚女生麁寸、麁寸娶飽田女、或本云、玉作部鯽魚女、共前夫韓白水郎曄生哭女、更共後夫住道人山寸生麁寸、則哭女與麁寸異父兄弟之故、哭女之女飽田女、呼麁寸曰於母亦兄也、哭女嫁於山寸生飽田女、山寸又淫鯽魚女生麁寸、則飽田女與麁寸異母兄弟之故、飽田女呼夫麁寸曰於吾亦兄也、古者不言兄弟長幼女以男稱兄、男以女稱妹、故云於母亦兄、於吾亦兄耳、

○秋葱之轉雙納、抄菜蔬部に葱本草云葱(岐)箋注に今俗呼禰伎又禰不加とあり釋紀に私記曰師說秋時之葱不太古毛利爾生故取喩身とあり葱に一莖の中に二莖一つに包まれたるもの往々あるを取りて飽田女と麁寸と異母兄弟にして夫婦となれる二重の親に喩へしなり ○(注)言鯽魚女、集解言の字を衍とす ○韓白水郎、錄攝津未定雜姓に韓海部首武内宿禰男平群木菟宿禰之後者とあり ○(注)言韓白水郎云々、言及び曄耕麥田之也の七字集解に私記攙入として削る ○波陀該、原本該を詠に作る寮本北本に據て改む ○(注)言哭女、集解言の字を衍とす ○住道、釋紀に私記曰師說河内多比郡邑名也とあり又倭名抄に攝津國住吉郡住道鄉あり集解に按丹北郡住吉郡兩國接界故後分爲二とあり ○上紆、舊訓いづれも上の字をサキニと訓り然れどもこれは上紆にて目上の者と通ずる意なり ○顧戀、シラヒはシタヒの誤か ○尤切、ケヤシウは通證に今云介夜介志是也とあり ○(注)玉作部鯽魚女云々、以下於吾亦兄耳に至る二百七字は集解に私記攙入として削る ○大倭國、大の字は北本寮本に據て補ふ ○額田邑、志に山

邊郡額田邑高橋村西十町許有皮工邑隣平群郡額田部村とあり　○孰皮、抄調度部に韋（乎之賀波）柔皮也とあればカハヲシは皮を柔になめす意なるべし孰は熟の本字にて字書に成也とあり孰皮は加工皮の意ニヒリは義未詳

【七年】

【八年】百姓言、下文是時云々へは續かず此下脱漏あるべし

○登衍、後漢書明帝紀注に登成也衍饒也とあり原本にオヒエタカと訓るはオヒユタカの誤りなり察本に據て改む

【十一年】崩于正寢、大日本史に本書年紀水鏡神皇正統記歴代皇紀墨管抄皇年代略記並曰年五十一代要略帝王編年記並五十一未知孰是とあり

○埴生坂本陵、諸陵式に在河内丹比郡河内志に丹南郡黒山村管内とあり陵墓要覽に南河内郡藤井寺村大字野中とあり

是歲、日鷹吉士還自高麗、獻工匠須流枳、奴流枳等、今大倭國山邊郡額田邑熟皮高麗、是其後也、

七年春正月丁未朔己酉、立小泊瀨稚鷦鷯尊爲皇太子、

八年冬十月、百姓言、是時國中無事、吏稱其官、海内歸仁、民安其業、是歲五穀登衍、蠶麥善收、遠近清平、戸口滋殖焉、

十一年秋八月庚戌朔丁巳、天皇崩于正寢、冬十月己酉朔癸丑、葬埴生坂本陵、

日本書紀卷第十五

昭和十五年三月十五日印刷
昭和十五年三月廿二日發行

豫約頒價 金二圓

增補 日本書紀卷上
六國史
壹卷

編纂者 東京市淀橋區西大久保一丁目三七三番地 佐伯有義
發行者 東京市麹町區有樂町二丁目三番地朝日新聞社 櫻木俊晃
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 小坂孟
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社

發行所 東京 大阪 朝日新聞社

不許複製

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03027 8568